中央公論

7-1914

臨時增刊

新脚本號

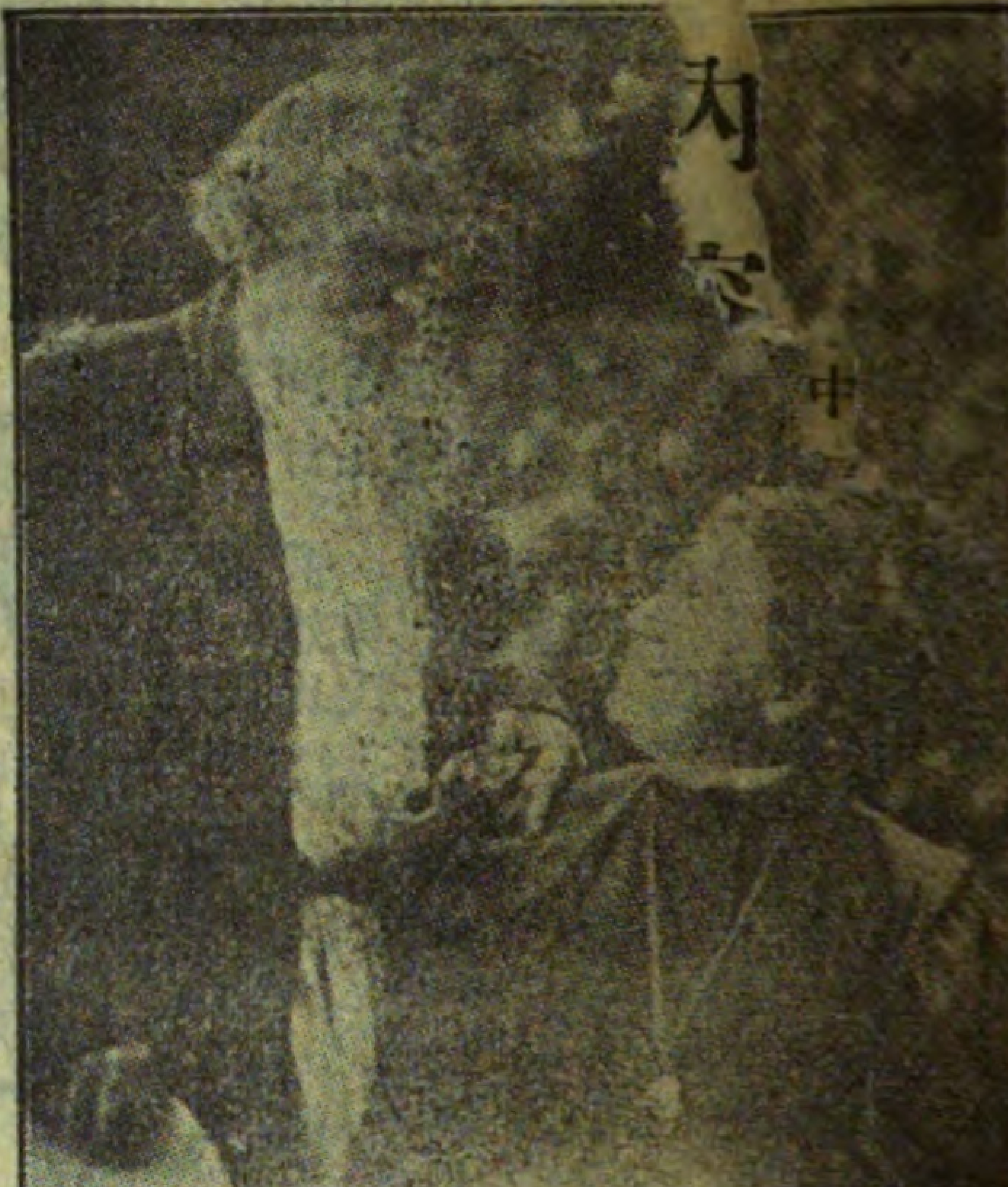
307 8 29

第廿九年第八號 第三百七號

子の見たる

父トルストイ

イリア・トルストイ著


ト翁と其の愛孫

文藝思想界の王者として世界の偉人たるトルストイは、その家庭にあつてどんな朝夕を過ごしたか、どんな態度で妻や子に接したか、著作をする時はどんな風てあつたか、凡そト翁の日常生活の狀態を掩はず飾らず赤裸々に叙したのは此の一巻て、翁の第三子イリア・トルストイ氏が最近の露國新聞紙上に『父翁回想記』として掲げたものてある、人としてのトルストイを知るに於いて是れ以上のもの丶有り得る筈がなく、未だ知らざる多くの珍らしき事實は應接に遑あらざる程頻々として讀者の目前に現はれてくる。例へばト翁が其晩年に當つて家出した眞相――の如き、此の偉人の大秘密さへ憚るところなく明快に叙してある程だから、他は推して知るべきてあらう。その一たび露國新聞に出づるや、世評籍甚、交際社會の話題は、これによつて賑はつたと云ふのも、偶然にあらざるを覺える。

德富蘆花氏序
昇曙夢氏序
播磨楢吉氏譯

▼總洋布最上製美本
▼珍貴なる挿畫豐富
■定價八拾五錢 ―郵送料八錢―

東京市牛込區矢來町中の丸 **新潮社** 電話番町二二二三番 振替東京一七四二二番

此廣告に依り御申込の節は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

世界唯一の新計劃各

我が劇壇文壇の諸大家を講師に囑托し新古東西演劇に關する其專門の研究になれる講義記述を網羅し系統的智識を與ふ。劇界無比の指針たり明鑑にして内容の優秀完全なる既に定評あり。演劇關係者は勿論好劇家にして本講義を愛讀せざる者は共に今日の劇を語るの資格なきものとなるべし。

第一期 第三號 七月十日發行

演劇講義録

學務顧問

都新聞記者 伊原青々園氏
文學士 高安月郊氏
文學博士 上田敏氏
公衆劇團 舞臺監督 松居松葉氏
文學博士 醫學博士 森鷗外氏

講師

都新聞記者 伊原青々園氏
俳優 井上正夫氏
文學士 灰野庄平氏
無名會俳優 東儀鐵笛氏
同 土肥春曙氏
劇作家 岡本綺堂氏

劇評家 岡鬼太郎氏
文學士 茅野蕭々氏
俳優 河合武雄氏
劇作家 吉井勇氏
文學士 高安月郊氏
田村成義氏
文學士 成瀨無極氏
文學博士 上田敏氏
楠山正雄氏
松居松葉氏
俳優 松本幸四郎氏
文學博士 藤代禎輔氏
藤間勘右衞門氏
文學士 小宮豐隆氏
劇作家 [illegible]氏

目下入會金全免の特典あり

■五月より新學期を開始す 此際最も入學に便なり……
■修業年限僅かに一ヶ年 修業後は種々の特典あり……
■月謝一ヶ月金五十錢 入會金五十錢…(目下全免)…
■講師は劇壇文壇專門大家 數十名……
■講義は全部振りがな付平易簡明にして何人にも解し得…
■科目は演劇初歩より懇切

東京市京橋區銀座一ノ一三(玉木商會内)

東京市數寄屋 (規則書及入會申込取扱)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

家庭無比の好伴侶

……
文學士 島 文次郎氏
文學士 島村 民藏氏
文學博士 森 鷗外氏
文學士 北野 京二氏
（其他數氏）
主幹 中尾 鷺夢

其他種々の大特典あり……

規則書往復葉書にて御申越次第送呈す

■その内容と編輯方針

每號口繪和洋參考圖畫添付●寫眞版挿畫數拾個入

正科 「俳優入門」▲「舞臺監督とは何ぞや」▲「東西演劇の比較」▲「新扮裝法」▲「顏面の表情」▲圖解「舞踊研究」▲「劇場秘事」▲「淨瑠璃劇」▲「日本の作劇法」▲「西洋の作劇法」▲「舞臺上の音樂」▲「列傳體日本演劇史」▲「西洋最近演劇史」▲「近代劇解剖」▲「イブセン研究」▲「新派劇の側面」▲「舞臺配置と裝飾研究」◉以上既載◉「演劇概論」▲「劇場群集心理」▲「脚本朗讀法」▲「科白術」▲「東西身振動作法」▲「擬闘術」▲「東西化裝術」▲「オペラ研究」▲「喜劇要訣」▲「劇場美術論」▲「背景と色彩」▲「日本戲曲解題」▲「西洋演劇組織と慣習」▲「術語通解」等

外科 東西著名劇の型（既載松本幸四郎の「勸進帳」▲カインツの「ハムレット」▲デュゼの「ノラ」▲雁治郎の「紙治」）▲「勸進帳研究」▲「芝居の波と瀑と雨」▲「鬘の話」▲「權威ある拍子木の音」▲「露西亞演劇研究」▲「俳優と眼の表情」▲「隈取大全」▲「女優論」▲「東西名作者列傳」▲「東西樂屋内部解剖」◉以上既載◉「囃子の研究」▲「長唄俗謠註解」▲「院本研究」▲「女形の研究」▲「劇場建築」▲「淨瑠璃研究」▲「大小道具の話」▲「歌舞伎役々の衣裳鬘調べ」▲「藝術家秘訣集」▲「演劇に關する成功苦心談失敗奇談」▲「東西俳優學校内容紹介」等

雜錄 「無名會演劇に就いて」▲「上場脚本梗概」▲「歐米劇場視察談」▲「歌舞伎劇の考證實跡」▲「海外劇壇消息」▲「劇界彙報」▲「會員質疑應答」▲「會員消息」◉既載◉文壇諸名士現代名優藝術諸大家の研究談主張論批評論觀察談得るに從ひ掲載す

居ながらにして演劇を研究し。座しながら模範劇を見。其説明を聞いて新智識を提供され皷吹せらる。社交界の指導者たり趣味の向上者たり。紳士淑女各位。一日後るれば一日の損あり。他日噬臍の悔無きやう、一刻も早く入會して本講義録を几上座右朝夕の師友とせざるべからず。

演劇研究會事務所 編輯及會務取扱 電話京橋二二四二

日本橋本町九番地 **鈴木書店** 振替口座東京二一二七番

銷夏の好伴侶として

文學博士 坪内逍遙譯

新刊 沙翁傑作集 六

ヱニスの商人

劇を口にする者にして沙翁を說かざるはなく沙翁を說く者にして人肉抵當裁判法廷の場を知らざるはあらず猶太人シヤイロック女裁判官ポオシヤの名は全世界の人口に膾炙し小學生徒も之を知らざるを恥辱とす而も其原作の完譯は未あらず少くとも其嚴肅なる悲劇的底調なる其輕妙滑稽趣味なる其幽婉ポエトリーを共に剩さず之を捉へて雅馴明快殆ど今日創作物を讀むと一般の現代語譯は本譯を以て始とす巧に虛實の皮膜間を縫ふ沙翁の靈腕は此譯によりて最も善のく窺ふに足る骨は幾百年前の荒唐なるローマンスなれども作中個々の人物は躍々たる肉塊と現じて今尚鮮かに生命を有す沙翁喜劇の特質を最も善く代表せる傑作

洋裝題美本
寫眞版木版
密畫數個入
全壹冊
金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

第一 十版 ハムレット
第二 四版 ロミオとジユリエット
第三 三版 オセロー
第四 再版 リヤ王
第五 再版 ジユリヤス、シーザー

大好評 重版出來

各壹圓卅五錢 郵稅各八錢

イブセン傑作集第二 島村抱月譯

海の夫人

此劇は「人形の家」の姉妹篇のやうなものである。ノラが殘した婦人の自覺問題を此劇の女主人公エリーダが自由の意志と自己責任とで解決して目出度幸福の新生活に入るといふ重大

總布製美裝
舞臺寫眞數葉入
正價金九十錢
郵稅八錢

現代の名譯を見よ

イプセン傑作集第一
島村抱月譯

人形の家

好評再版

な喜劇であると共に、海の神秘と自由とを象徴した象徴劇であり、繼母と繼娘との關係を寫した人情劇である。藝術座で公演せられたるは此書を臺本としたもので其舞臺寫眞數葉をも挿入してある。譯筆は益々圓熟して創作と全く擇ぶ所がない。

總布製全壹冊
舞臺寫眞數葉入
正價金九十錢
郵税金八錢

世界の近代劇中の最も有名の作也――婦人問題は今や世界の最大社會問題の一にして此劇は近世婦人問題の焦點を代表せる藝術也――文藝協會公演に於てノラとマクダとは我新劇壇に空前の感動を與へたり此書其脚本也――「新しき女」の問題はノラ及マクダの演劇より始まる――卷首に此作の藝術論及來歷五十頁の長文を加ふ

ショー傑作集第二
坪内逍遙
市川又彦 共譯

武器と人

●七月初旬有樂座に於て無名會の公演せられたる臺本！

洋裝全一冊
口畫數葉入
正價六十錢
郵税金四錢

世界文壇の善罵王、現代社會の辛辣なる批評家、眞面目の嘲嘘家、一種無類の喜劇作家ショー氏が傑作中の傑作――西歐文明の浸漸によつて俄に面目を變せんとする新文明國民の裏面の消息――エセ愛國エセ尚武、エセ義侠、エセ高等戀愛、エセ文明、エセ禮儀、エセ體裁等――を解剖的に描寫し來つて骨を抉り髓を剔る――譯文の流麗明暢創作に讓らず

ショー傑作集第一
坪内逍遙譯

ワーレン夫人の職業

ショー傑作集第三
河竹繁俊譯

カンディダ

各金六十錢
郵税各四錢

發兌 東京牛込早稻田 振替一一二三番 早稻田大學出版部

（賣捌） 神田 富山房　日本橋 至誠堂　京橋 東海堂　神田 東京堂　京橋 北隆館　大阪 盛文館

ダンヌンチオ著　鷲尾浩氏譯

フランチエスカ

《四六判洋裝總布特製美本箱入紙數約五百頁價一圓五十錢送料十二錢》

南歐の詩聖ダンヌンチオが、名女優デユーゼに之を獻じ、而てひと度彼女一座に依て實演せらるゝや、彼のユーゴーが『エルナニ』以來比儔なきの大狂歡を喚起せるは、實に絢爛燃ゆる如く妖艶蠱はさずんば止ざる此劇詩なり『死の勝利』の中に紛糾として交流背馳せる諸相、卽ち欣求と偸安、靈感と淫蕩、狂熱と冷笑、官能の暗示と現實描寫の精緻、心理解剖の深刻と煉熟せる情調とは『フランチエスカ』に至つて渾然と一の不可思議なる情熱の熔爐に噴騰せられ、赫燿たる靈氣となつて、無窮の蒼穹裡なる美の殿堂に冲せるなり。來れ、美を通して絕對を把握せんとする人は。

ブランデス著　矢口達氏譯

歡迎如湧

十九世紀文學主潮　移民文學

菊判洋裝總布
特製美本箱入
紙數約五百頁
正價金二圓
送料十六錢

（時事新報評）……該博智識に於ては獨の批評家を凌ぎ、流暢なる文辭に於ては佛の批評家を凌ぎ、大膽なる觀察に於ては瑞典諾威の批評家を凌ぎ、周到なる社會的興味に於ては英の批評家を凌ぐ此書の原著者ブランデスは實に十九世紀の生める世界的の天才にして其著書頗る多き中にも本書を含む彼が『十九世紀文學主潮』の古今に冠絕する名著なることは、今更吾人の贅言を竢たざる所なり。翻譯は飽くまでも忠實を旨とし、其一字一句をもゆるがせにせざる所に譯者の苦心を認むべく、明晰徹底明鏡に對するが如き言辭は、譯者の才筆に據つて遺憾なく描出せられたり……

トルストイ著　矢口達氏譯

コサック

四六版洋裝美本
箱入正價金一圓
小包料內地八錢

若きトルストイを知らんとする人、トルストイの最も藝術的な作品を味はんとする人、華かなれど悲しく、美しきが上に崇高きトルストイのロマンスを聽かんとする人……來つてコサックを讀まれよ。

ダンヌンチオ著　矢口達氏譯

巖の處女

四六版洋裝總布
特製美本箱入
價一圓十錢
送料八錢

空しく幽く荒れ果てたる庭園には、しづかな泉がとこしへの諧調をかなでて居た。美しくもはかない三人の處女は、こゝに咲いてこゝに散つたのである。同じ鬱憂と悲哀とを呼吸しつゝ、いたましい靈の織物を相共に織りなした三人の處女を、運命はいかに愛し、いかに弄んだであらうか。

トルストイ遺作　土岐衰果氏譯

隱遁

四六版洋裝美本
箱入價七十五錢
小包料內地八錢

懷疑と矛盾と不安と苦悶との八十年の過去から遁れて、半夜竊に僧院に隱れんとし、途上圖らずも荒寥たる一寒邑に斃れるまで、巨人トルストイの苦衷は果してどんなであつたか。其晩年の偉大な胸中の秘密を死後に發見せられた偉人自身のペンの跡によつて知ることは、實に何たる悲痛であらう。吾人は肅然として此の遺作を心讀せなければならぬ。

ピエール、ルイ著　矢口達氏譯

不朽の戀

四六版洋裝總布
極美裝箱入
價八十五錢
送料內地八錢

開卷一頁讀者諸君の前には不可思議なる世界が展開されるであらう、熱烈にして而も畸形な、淫靡にして而も神聖な、夢の如く又現の如き戀愛の場景を蒼褪めた月光のやうな紗を透して打ち眺むるが如き心地がするであらう……至純な神秘な藝術に觸れんとする諸君の愛讀を竢つ。

最近發行　圖書目錄　無代進呈　至急申込あれ

發行所　東京市小石川高田豊川町　新陽堂　振替口座東京一五五七〇番



中央公論臨時增刊新脚本號目次

▲本欄▼

秘密（一幕三場）……正宗白鳥……一
無頼漢（四幕）……吉井勇……四五
奴隷（一幕）……田村俊子……一〇一
天草四郎と山田右衛門作（二巻六場）……木下杢太郎……一二四
無籍者（一幕）……上司小劍……一五〇
林檎の實の熟す頃（三幕）……秋田雨雀……一六四
剃刀（一幕）……中村吉藏……二〇〇
或る日の事（一幕）……武者小路實篤……二二七
凶（一幕）……久保田萬太郎……二四九
伊左衛門（一幕）……小山内薫……二六七
放火（三幕）……長田秀雄……二七六
赤と黄の夕暮（一幕）……島村抱月……三二七
立退き（三幕）……德田秋聲……三三八



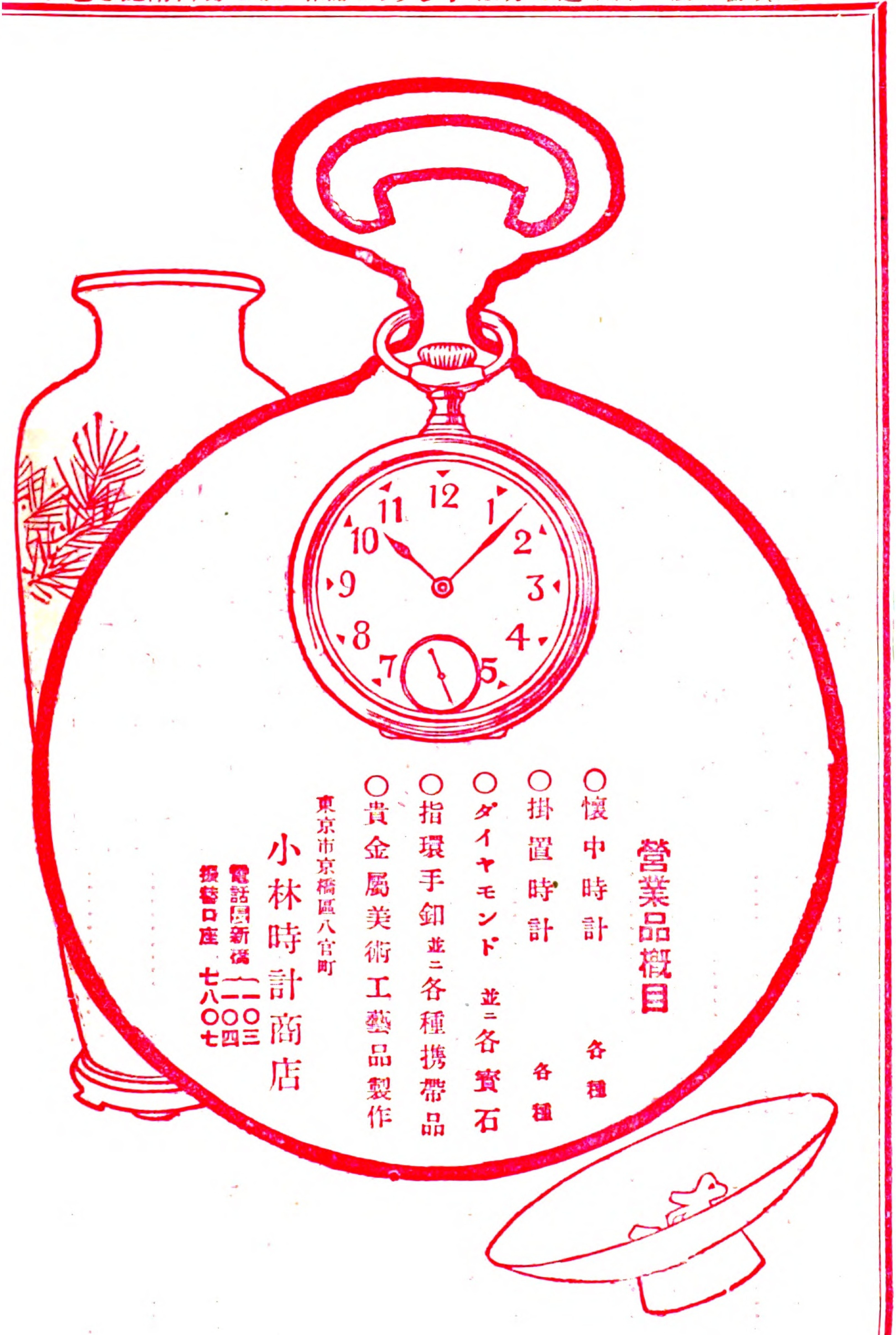
▲公論▼

國民生活の一様式としての演劇……楠山正雄……一
歌舞伎劇に對する私の態度……小宮豐隆……一六
新劇團合同論……中村吉藏……三〇
島村抱月氏に呈する書……相馬御風……三八

▲説苑▼

新演劇に於ける逍遙系と鷗外系……匿名氏……一
俳優待遇論……野間五造……一四
予が女優觀……福澤桃介……二九
女優の觀たる女形
◎新舊の女形に就て……林千歳……三三
◎柔みのある男優……河村菊枝……四一
◎女らしい女形……松井須磨子……四五
◎味のない女優と色氣のある女形……村田嘉久子……四六
◎女優から見た女形……秋元千代子……四八
◎男優の女と女優の男……森律子……四九

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

秘密

正宗白鳥

人物

大谷修吉（三十三歳）
おえい（修吉の妻、二十七歳）
大谷禮造（修吉の兄、三十七歳）
栗栖仁太郎（二十八歳）
下女まつ

場所

東京山の手の場末。修吉の家庭。書齋たり客間たり寢室をも兼ねる一室。室内には僅かな書物を收めた質素な本箱と机と火のない火鉢と寢心地のよさそうな寢椅子が程よき所に置かれてゐる。緣先の沓脫には女下駄があつて、庭は下手を竹垣にて仕切らる。片隅に躑躅の花咲く。五月初旬。

第一場

えい。(机に向つて手紙を認めてゐたが、筆を擱いて振向いて聲高く)まつ、手紙を入れて來てお呉れ。

まつ。(奥から出て來て)栗栖さんが入つしやいました。

えい。さうかい。(一寸困ったらしい顔付して)ぢや、此方へお通し申すことにして、お前は御苦勞だけど、この手紙を郵便局まで持つて行つて速達便で出して來てお呉れな。大急ぎでね。(手紙を渡して、獨言のやうに)今三時だから、大丈夫晩までには着くだらう。

(下女去る。おえい机の側を離れて物思はしげにうつとりする。瀟洒たる脊廣を着けた栗栖快活な顔して奥から出て來る)

えい。(微笑して迎へて)何時お歸りなすつたの。大變御緩りでしたのね。

栗栖。えゝ。昨夕歸つたんです(座つて。手輕に挨拶して、室の内外を見廻しながら)大谷君は何處へ行きました?

えい。お國の兄さんのお迎へに新橋へ參りました。三時過ぎに着くんでせうよ。

栗栖。へえ。僕も學生時代に一度大谷君の兄さんに會つたことがありましたよ。剛(きつ)い人らしいですね。大谷君とは丸で性分が異つてる。何か用事があつて出て來たんですか、只の見物ですか。

えい。どうですか(冷淡に云ふ。相手になつてゐるのが堪へがたい態)

栗栖。お客様が來ちや一寸話かし憎いな。僕は大谷君に頼みたいことがあるんですけど。……困つたな。今夜僕の家へ來て貰ふ譯にや行かないでせうね。

えい。さうね、どんな御用?

栗栖。眞面目な問題なんですよ。そのために旅行を早く切上げて歸つたんですからね。……實は次手に山陰道へ廻つて出雲の大社あたりまで行つて來ようと思つたんですけど、急に氣が變つて急いで歸ることにしました(足を崩して煙草に火を點けたが、落着かぬ有様)この邊も新緑でよくなりましたね。旅に出てゐても今は實にいゝですよ。大谷君はこの春は是非旅行すると云つてゝまだ出來ませんでしたね。……僕が近江

から繪葉書を送つたてせう。あれに書いてた通り、僕はあなた方を憐むやうな氣になりましたよ。若葉に包まれた三井寺から湖水を見下した時にや、涙が出るほど悦しかつたのてす。東京て齷齪してる友人は皆んな不仕合せて、自分一人が幸福なやうに感ぜられたのてすがね。……疏水の櫻は大抵散つちやつてところ〳〵に萎びた花片が殘つてるばかりてしたよ。僕は疏水て京都へ下つて、友人の家に泊つて夢を見てるやうな氣て、毎日ぶら〳〵してゐたんてすが、ある日四條の橋に立つて東山の方を見渡してる間に何がなしにふつと胸騷ぎがして、東京へ歸りたくて矢も盾も溜らなくなつたんてす。……そこへ東京から手紙が來たし、もう一日もお寺詣りや名所見物をしちやゐられなくなつたんてす。

えい。何故てす?。私、あなたが方々から送つて下すつた繪葉書を見ちや、何時も羨ましがつてゐたんてすよ。お一人て名所々々へ旅をなすつて、こんな結構なことはないぢやありませんか。私なんか東京のお花見さへ碌々しないんてすもの。

栗栖。(相手の言葉にはよく耳を留めないで) 僕はどふ云ふものだか、今度旅へ出てから、自分の年齢が二十八だと云ふことをしみ〳〵感じました。東京にゐる間は年齢のことなんか念頭に浮んだことはなかつたんてすがね。自然にばかり接して、長い間人間の熱い息をかゝないてゐると、自分の年齢に氣がつきました。僕は今年二十八だ。後二年て三十になるんてす。

えい。それがどうしたんてすの。男の方の二十八や三十はまだ若い盛りぢやありませんか。私なんか御覧なさい。浮かりしてる間に老婆さんになつちやつたぢやありませんか。

栗栖。(ふと相手の顔を見詰めて、初めて感じたやうに) だけど、奥さんは若い。初めてお目に掛つた時と些とも違ひませんね。

えい。栗栖さんも大和お世辭が上手になつたわね。私それどころぢやないのよ。

栗栖。何がてす?。……僕は昨夕一晩碌に眠らないて

考へましたよ。そして、去年のこの頃あなたの仰有つたことを思出したんです。あの時分素直にあなたの忠告に從つとけばよかつたんですがね。僕はまだ考へが幼稚だつたんです。しかし、今は眞面目に自分の一身のことを考へてゐますよ。

えい。眞面目だ〳〵つて何かと思つたら(冷かに笑つて)あなたお玉さんのことを云つて入つしやるの。此間久米さんの家で會ひましたよ。會ふたんびに女振りがよくなるやうですわ。……だけどもう駄目なの。

栗栖。外に話が極りかけてるつてことでせう。僕だつてちやんと知つてますさ。しかしそれぐらゐのことは僕は恐ろしくはないんですよ。いづれ大谷君やあなたによくお話しするつもりですけど。……

えい。あなたも隨分勝手な人ね。今になつて出拔けにそんなことを云出したつて無理ですわ。

栗栖。少しぐらゐ無理を通したつていゝでせう。僕はまだ二十代ですかね。成べくなら大谷君やあなたの力で圓滿に纏めることは纏めて貰ひたいと思ふんだけど。あまり面倒になりや無理にでも押通すつもりですよ。

えい。それが眞面目な問題なんですかね。何時までも氣樂だわね、戯談ばかり云つて。……お玉さんはもう約束濟みぢやありませんか。いくらあなたが熱心でももう手遅れですよ。それに私達はあなたのお力になれるやうな資格はなくなつたんですもの。あなたがお留守の間に私達の間にもいろんな煩い厭なことがあつたんですわ。だけど今日はちやんと結末がついちやつたの。かうしてお話してると、この家も以前と些とも樣子が異つてゐないでせう。

栗栖。(周圍を見廻して)此家は靜かでいゝですよ。僕もこの邊に住みたいな。(暫く躊躇して)立入つてお話したら奥さんも驚くでせうが、當人が得心したら文句はないぢやありませんか。

えい。ぢや、あなたの方で言出しなすつたら、お玉さんの方で首を振る氣遣ひはないと思つてらつしやるだわね。それだけ强い自信を持つてらつしやれば蛇

度成效するでせうよ。ぢや、御自分で直かに話して御覧なさいな。

栗栖。奥さんはよく男の心なんか分つてる女だけど、まだ私達の氣持は分らないんですね。

えい。さうですとも、私には男の心なんか分りませんさ。(昂奮した口調にて)男つてものは意氣地がなくつて思切りが惡くて、その癖惡智慧の勝つた者とばかり私思つてるんですもの。

栗栖。さう一概に斷定は下せませんよ(間の惡い樣子をして)僕はお玉さんに對して卑劣な行爲をしたこともないし、策略を巡らしたこともないんです。大谷君には一切話すつもりだけど。

えい。何をお話しなすつたつて、今の大谷が何て手答へのある相談相手になるものですか。今に御覧なさい、氣六ケ敷青い顏して歸つて來ますよ。お玉さんのお話など大谷になさらない方がよ御座んすよ。

栗栖。えゝ。(拍子拔けして座を立つて、話らなさゝうに椽先へ出て蹲んで庭を眺める)

えい。(栗栖の方へ振返つて)あなたもこの家へよく入らしやつたわね。あなたに頂いたカンナも今に花が咲きますよ。

栗栖。もう蛙が鳴いてますね。旅行前に來た時にやまだ櫻が蕾を持つてもゐなかつたんですがね。何時の間にか春が過ぎちやつた。

えい。早いものですわね。私、此家へ三年の餘も住まつてたんですよ。うか〳〵して(心惹かれるやうに椽側へ出て來る)その間にあなたが一番よく遊びに來て下すつた。今日あなたが入らつしやるとは思ひませんでしたよ。矢張緣が深いんですわね。

栗栖。僕もまさかの時にや、誰れよりもあなた方を手賴りにしてるんですよ。

えい。本當にあなたにはいゝ奥さんをお世話したかつたんですにね。私の方でお勸めする時にや、あなたの方で氣乘りがしなかつたらしいですもの。

栗栖。だつて、あの時や僕もいろんな空想を描いちや迷つてたんですもの。……奥さんにも谷村君にもよ

く打明けなかつたけど、僕にも秘密はあつたんてすよ。今ゝあるかも知れないけど。僕があけすけに何もかゝ喋舌つてゝも、秘密は秘密てちやんと持つてるんてすからね。

えい。そりや誰れだつてね。....

栗栖。秘密のないやうな人間は淺薄て駄目てすよ。

えい。ぢや私に秘密があると思つて?（媚びるやうに相手を見る）

栗栖。さあ。...奥さんにもあるてせうけど、恐ろしい秘密はありませんね。（笑ひ〳〵見詰める）

えい。さう見えて?。...だけど、あなたの眼力も當てになりませんわ。かうしてゐながら、この家の秘密が讀めないだから。

栗栖。どうしたんてす（訝かしげに左右を見廻はす）

えい。私、今日に今日此家を出て行きますの。そして當分一人て暮さうと思つてゐるんてす。（愉快さうに云ふ）

栗栖。へえー。....

えい。これは秘密ても何てもないの。大谷も得心してるんてす。私、お國の兄さんにお目に掛つて、はつきりお話して綺麗に出て行くことにしてゐますの。あなたにも當分お目に掛れませんわね。

栗栖。だつて、あなたが別居するなんて、そんな馬鹿なことがあるもんてすか。（取合はぬやうに晒つて）奥さんも時々脅かすからな。去年も一度あんなことがあつたぢやありませんか。大谷君に聞いて驚いて、二三軒心當りを搜した揚句に、落膽して家へ歸ると、あなたは平氣て僕の部屋に座つて待てるんてすもの。

えい。あの時と今とは違ひますさ。あの時は氣がむら〳〵して自棄て飛出したのだけど、今度は些とも慌てちやゐませんの。よく〳〵考へて量見を極めてるんてすわ。

栗栖。何も事情がないのに得心づくて別れられるんてすかね。去年大谷君が後から僕の家へ來て、あなたを連れて歸つた時にや、僕は狐に抓まれたやうな氣がしましたよ。あくる日大谷君に會ふと、何だか僕

が初めから譯を知つてゐたやうに思つてるんですからね。詰らないさ。僕こそあなた方二人に愚弄されてゐたやうだつたのですもの。（無邪氣さうに云ふ）

えい。でも面白かつたでせう。（馴付つこい調子で）私、あの時は大谷にさう思はせるやうに云つたのよ。栗栖さんの家へ一度遊びに行く約束をしてゐたから行つてゐたんだつて。……此間の晩もあなたが東京に入らつしやれば、私あなたのお家へ逃げて行つてたかも知れませんわ。

栗栖。喧嘩でもしたんですか。（呑氣らしく云ふ）夫婦つて何故下らないことを云合つて、面白くもないのに啀合つた眞似をするんでせう。

えい。さうねえ。だからあなたも結婚なさらない方がいゝのよ。あなたなぞ方々でちやほやされて、いくらでも面白いことがあるんでせうから。

栗栖。（眞面目に）所が、さうしてぼんやり安心しちやゐられなくなりましたよ。大谷君に見せるつもりで此處へ手紙を持つて來てるんですがね。（ポッケットへ手をやつて）奥さんが見たら驚くかも知れないけど。

えい。見たいわね、どんな手紙？。

栗栖。（眞面目に）だから僕は無理にでも結婚しなきやならんです。

えい。お玉さんと。まあ（呆れた顔して、急に熱心な調子で）：：おや、あなたはあの後お玉さんと手紙のやり取りなんぞして懇意にして入らつしやつたの。些とも知らなかつた。私達を出拔いて、酷いんですね、あなたも。

栗栖。別に酷いことだと僕は思ひませんよ。當前で自然にさうなつたんですもの。

えい。で、今そのことで困つてゐらつしやるの。詳しく話して御覧なさい。お玉さんだつて白ばくれて。そんな女とは思はなかつた。

栗栖。だけど、あの時のことぢやないんです。僕はまだ迷つてゝ結婚する氣がなかつたから斷つたんでせう。それが暫く立つて偶然ある所であの女に出會つたんです。つい口を利くやうになつたんですが、あ

なたにお知らせしようく＼と思ひながら機會がなかつたんです。

えい。言譯しなくつてもよ御座んすよ。二人して私達を笑つてゐたんでせうね。……道理で去年の夏でしたか、黑田さんが云つてましたよ。あなたが女の方と上野から汽車にお乘んなすつたのを見たつて。

栗栖。なに、あの女は人が違ひますよ。あの女とは去年の暮れに日歸りで鎌倉へ行つたゞけですよ。

えい。鎌倉へ？。（忌々しさうに）あの時も繪端書を下すつたが、さうでしたか。お玉さんと御一緒だつたのですか。私些とも氣付かなかつた。馬鹿ですわね。

栗栖。僕は奥さんには隱すつもりぢやないんです。この手紙も見て下すつてもよう御座んす（ポツケットから取出して渡さうとすれど、おえいは振拂つて手に取らない）。

えい。見せて頂くには及びませんよ。大事に仕舞つて入らつしやい。

栗栖。さうですか。（手紙をポツケットへ收めて、不愉快さうにして、沓脱ぎにある女下駄を穿いて庭へ下りて、彼方此方と歩く）

えい。（相手の背にのみ目をつけながら、やがて）そして、今のお話はどうなさるおつもり？。私、もうあなたにお目に掛れないかも知れないから、聞きつ放しにしといては氣になりますよ。

栗栖。……（顏を背けてゐる）

えい。あなた怒つてらつしやるの。

栗栖。なあに。（强いて笑つて緣側へ戾つて）しかし、あの話は止しませう。自分の事は自分で考へますさ。

えい。そりやさうですけど、前後をよく考へてなさらないと、取返しの付かないことになりますよ。よ御座んすか。お玉さんの親御の方ぢや、今度の緣談には餘程氣乘りがしてるらしいんですから。

栗栖。あなたはよく事情を御存じなんですか。どんな風なんです。

えい。此間彼家のお母さんと懇意な人からいろんな事を聞きましたの。詳しくお話したらあなたも吃驚なさるかも知れないわ。お玉さんの身の上についてもあなたの御存じないことがこの頃あるらしいの。あ

なたはお歸りになつてからお玉さんにお會ひになつて?（相手の顏に注意する）

栗栖。會ふもんですか。

えい。どうだか。……あのお母つさんは大相結婚を急いてるんですつてね。厭な事が私の耳にも入つてるんですよ。私お玉さんはあんな女とは思はなかつたけど。分らないものね。矢張母親一人だといけないんですわね。

栗栖。どんな厭な事をあなたが聞いたんでせう。

えい。まあ止しませう。折角あなたが熱心になつてらつしやるのに、私が水を差したやうに思はれて恨まれちや厭ですもの。

栗栖。だつて僕の方であなたを親身のやうに思つて言憎いことまで打明けてるんだから、あなたの方でも私に隠立てしないのが義務ですよ。（少し興奮して）第一僕は自分のためよりも先方のためを思つて話を極める氣になつてるんですぜ。あなたに願つて先方へ何もかも話して快く圓滿に纏めたいと考へてるぐらゐですもの。

えい。ぢやお玉さんのためになら犧牲にでもなる氣で入らつしやるんだわね。好いた女のためにならそれくらゐの實がなくちやいけませんわね。……あなたがそんな奇麗な考を持つて入らつしやれば、私尚更何も云へませんわ。……私がこんな餘計な口を利いてゐたつて、あなたが屹度お玉さんにお話しなさるでせう。さうすれば私があの女に恨まれるばかりですもの。

栗栖。……

えい。（聞耳立てゝ）あの俥は此方ぢやないか知らん。もう歸つて來る時分ですよ。

まつ。（奥から出て來て）奥様、郵便を出してまゐりました。

えい。御苦勞だつたわね。……あ、それから、お客様が入つしやるんだから、お夕飯はそのつもりにしといてお呉れな。田舍のお客様だから御飯はどつさり炊かなきやなるまいよ。（下女が襖を閉めて行くと、栗栖を見

坐つて）栗栖さんは緩くり遊んでらつしやるんでせう。

栗栖。いや、僕は直ぐお暇します。

えい。もう大谷も歸つて來ますから、緩くりして入つしやい。私もまだあなたにお話したいことがあるんですわ。（用事ありげに座を立ちかける）

栗栖。えゝ。

（と、ふと。手荒く襖が開いて、修吉が不安な態度で入つて來る。訝しげに二人の顔を見ながら座る）

栗栖。君一人かい。

えい。兄さんは。

修吉。一汽車遅れたのだらう。この汽車にや乘つてゐなかつたよ。

えい。へえ。呑氣だわね。（座を立つて）栗栖さんよく今のお話をなさいましな（と、柔しく云つて奥へ入る）

栗栖。どうかしたのかい、君。……僕は昨夕歸つたのだよ。

修吉。旅行は面白かつたらうね。

栗栖。豫期したほどぢやなかつた。

修吉。（暫くして）妻は君に何か話したらうね、僕等夫婦のことを。

栗栖。いや、よく聞かないよ。別居するなんて妻君は云つてたが、嘘だらう。

修吉。そりや事によつたら別居するかも知れないさ。僕は強いて執着はしないつもりだ。僕だつてまだ老人ぢやないからね。（落着かぬ態度で奥へ氣を取られる）

栗栖。しかし何か事件があつたんだらう。田舍から兄さんが出て來たのもそのためぢやないのか。

修吉。さうでもない。……女つて淺墓なものだよ。

えい。（苺と砂糖とを持つて出て）私、兄さんが入らつしやるまでに一寸久米さんのお宅へ行つて來ますわ。いゝでせう。直ぐ歸つて來るのよ。

修吉。あんな家へ行く必要はないぢやないか。栗栖君も來てるんだし。……

えい。だからお二人でお話してたらいゝでせう。私先つき栗栖さんのお惚氣を伺つてたのよ。あなたも聞

かせてお貰ひなさい。私達を出抜いでお玉さんと栗栖さんはちやんと約束が出來てるんですつて。

修吉。(冷かに)それはいゝぢやないか。……ぢや、お前が纒めるやうに周旋したらいゝぢやないか。度々さう云つてたんだから。

えい。私、もう人樣のお世話なんぞ厭になつたの。あなたこそ口を利いて上げなさるといゝわ。(調子を變へて)私一つ走り久米さんへ行つて來ますよ。

修吉。(押止めて)今日に限つて無理に彼處へ行く必要はないぢやないか。

えい。今日こそ行かなくちやならんのです。あなたには必要がなくつても、私には大事な用事があるんですから。

修吉。お喋舌をするか惡智慧をつけられに行くんだらう。

えい。何ぞ云ふと私があの女なぞに入智慧されてるやうに思つてるのね。馬鹿らしい、誰れが久米さんなぞに。(忌々しげに云つて)此間から私が云つてることは皆んな自分一人の量見ですよ。他人から針ほども差圖されやしないの。あなたのやうに考へがぐら〳〵してるんぢやありません。……栗栖さん、まあ聞いて下さい。私の姉がこの頃身體の加減が惡くつて、一人ぢやとても家の中を切廻して行けないんですよ。家があんなお客相手の氣骨の折れる稼業なんでせう。それに子供はあるし、自然行屆かないから、折角よく行きかけた商賣もこの頃思はしくないんですの。姉も殘念がつて會ふたんびに零してゐるんです。そのために無理をしちや身體を惡くしてるんだから私も氣の毒でしてね。いつそ私が當分あの家へ行つて姉を助けてやらうかと思つてゐますの。大谷も今は遊んでるんですから、當分一人で下宿住ひした方が氣樂でいゝでせうしね。自分もよくさう云ひ〳〵してたんですもの。今度だつて最初私の云ふ事に同意して、姉さんの家の基礎が固まるまで、お前に出來ることなら何でもして助けて上げたらいゝつて、立派にさう云つたんですよ。だから私ちやんとその

つもりにして、姉にも知らせて喜ばせてゐますの。姉さんが喜んで手頼りにし切つてるのに、後で此方の考へが異つたから、あの話はお止めにするなんて、どうしてそんなことが云つてやれるものですか。さうでせう栗栖さん。私一度極めたことはどうしても遣通さなけりや氣が濟みませんわ。

栗栖。さうですね。あなたの氣象ならさうでせうね。(氣乘りのしない調子)

えい。(元氣づいて)それ御覧なさい。栗栖さんだつてさう思ひなさるでせう。……私が行けば乾度姉の家を繁盛させて見せますよ。これまでも時々行つて見て、様子は大抵分つてるんだから、さう間の抜けたことはしませんさ。

修吉。そりや、手傳ひに行くくらゐはいゝだらうが、最初とは話の様子が違つてるからおれが反對するんさ。

えい。違つてると云つてどう違つてゐるんです?。あなた一人で勝手に氣を廻しては私の所爲にして責めるんぢやありませんか。私こそ溜らないわ。

修吉。(强いて笑ひを浮べて靜かに)まあいゝさ。栗栖君のゐる前で、今こんな事を云ふ必要はない。

えい。栗栖さんは内輪の人ですもの、何も遠慮するには及びませんさ。却つて栗栖さんにはよく聞いて頂きたいんですよ。……兎に角今夜はどうしても姉さんの家へ顔出しゝなきやなりませんよ。先方では當てにして待つてるんだから。

修吉。今夜は此方に客があるからと斷つたらいゝぢやないか。

えい。言譯を拵へちや延ばし〳〵しちやゐられないわ。その代り今夜は直ぐ歸つて來ますさ。……私、これから久米さんの家へ行つて、あなたが越してらつしやる宿のことを訊いて來なきやなりません。あなただつて宿が極らなきや困るでせう。

修吉。おれはあの女の知つてる家に置いて貰はなくつたつていゝよ。

えい。だつて御自分では宿を捜さないんですもの。大

層靜かないゝ座敷があるんてすつて。此度あなたの氣に入つてよ。……この家にはもう飽々したつて、あなたは云つてゐたんてすから、丁度いゝてせう。……引越したら栗栖さんもよく遊びに入らつしやるてせうね。

栗栖。（退屈さうに）えゝ。……だけど、此家も靜かて空氣はいゝし、移る必要はないてせう。

えゝ。いゝえ、此處は日當りが惡いせいか、氣が滅入つていけないの。久米さんのお話だと、此家は方角が惡いんてすつて。御覧なさい、大谷もこの頃大變窶れたてせう。こんな所にゐるからいゝ仕事の口も見つからないんてすわ。

修吉。馬鹿云つてらあ。お前はあの久米の後家さんにいゝやうにされてるんだ。

えい。（冷笑して）馬鹿だから人中へ出て修業して來た方がいゝてせう。私なんか馬鹿な筈てすさ。栗栖さんのやうに旅行するぢやなし、毎日ぼんやりして暮してるんてすもの。

まつ。（奥から出て來て）久米さんのお使が鷄を頂きに參りました。

えい。さうかい。ぢやお渡し申しな

まつ。二羽とも上げるんてすか

えい。あゝ。（下女去る）卵一つも生まないんだもの。

修吉。自分が好きて遠方からわざ〳〵買つて來たものを、あんな家へやらなくつたつていゝぢやないか。

えい。飼つて見ると鷄も詰らないものね。

修吉。ぢや、殺して食べたらいゝのに。

えい。（顔を顰めて）そんな酷いこと私嫌ひさ。自分の育てたものが殺せるものてすか。

修吉。お前にそんな慈善心があるんかい。

栗栖。僕は田舎にゐた時、よく鷄の料理をしたことがあるよ。締殺すのも一寸小氣味のいゝものだよ。

えい。まあ厭な。あなたにもそんな酷い眞似が出來るんてすかね。

修吉。僕も兄と雉なんか打ちに行つたことがあつたが生物を殺すのは面白いものだよ。

栗栖。さう云へば去年の夏は立川へ鮎狩に行つたつけな。今年も出掛けようぢやないか。

修吉。それよりもこの夏は一緒に何處かへ避暑に行かうぢやないか。伊香保へでも。僕も少し金が出來る當てがあるんだから今年こそ行けるよ。（おえいが縁側へ出る、修吉はその方へ目をつける）君もあの娘と結婚するんなら早くさうしたまへ。そして僕達の行く所へ避暑に出ることにするさ。

栗栖。うん。しかし、僕は避暑など考へる餘裕はないよ。……僕は今、君の智慧を借りたいことがあるんだがね。僕はもう歸るから君は其處等まで一緒に散歩しないかね。歩きながら話をするから。

修吉。まあもつと此家で遊んでゝ呉れたまへ。

えい。本當にさうなさい。（座を立つて）私一寸行つて來ますから（ふと急がしさうに奥へ入る）

修吉。僕が歸る前に妻は君に何も話さなかつたかい。

栗栖。あゝ。記憶に殘るやうなことは何も云はなかつたよ。君は先つきから馬鹿に氣にしてるね。妻君が親類へ手助けに行くといふんなら行かしとけばいゝぢやないか。妻君の云ふことは別に不合理とは思へないがね。それとも、何か込入つた譯があるのかい。

修吉。何もないね。何もないから僕には見當がつかない。今僕には職がないけれど、兄の補助を受けて月々の生活には可成り困らないやうにしてやつてるし久米の後家さんなんかとよく往來して好いたことをして遊んでるし、あれが僕に向つて不服らしい態度を見せられた義理ぢやないんだ。

栗栖。別に不服らしい態度があるとは思へないがね。妻君は何時もの通り快活で若々しいぢやないか。君は幸福だよ。

修吉。幸福でもないさ（淋しく笑つて）全體あの後家さんと往來するのがいけないんだ。趣味の低い女だから妻の方でも馬鹿にしてるんだけど、始終會つてる間にはつい感化されることもあるんだね。それに僕が排斥してることを後家さんは氣付いてやがるから、僕に對して惡意を持つてるんだ。

栗栖。まさか。僕の見たところぢや、そんな性質の惡い女とは信じられないよ。一人で子供を教育してあれだけにやり通して行くのは僕はえらいと思ふがな。

修吉。そりやえらいかも知れないが、裏面にはいろんな秘密があるだらうね。君に話したら驚くだらう。

栗栖。男でもあると云ふのかい(事もなげに云ふ)そんな風はなさゝうだがな。若しも男があるんなら君の妻君が氣付かない譯はないよ。

修吉。だから妻はあの女に感化されてるんぢやないかと僕は恐れてる。下手に出て甘い口を利かれるもんだから先方の秘密に氣がつかないんさ。姉の家へ行くやうな氣になつたのもあの女に煽てられたからなんだよ。

栗栖。しかしさうしたつて些ともあの女の利益にやならないおやないか。

修吉。人間は利益にならんことでもやらないとは限らない。

栗栖。しかし、あの女が君達二人の間を引離したつて面白くも何ともないだらうしね。……まさかあの後家さんが君をどうかしやうと思つてるんぢやあるまいしさ。

修吉。そりやどうだか分らないね。

栗栖。いやに思はせ振りの口を利くね。君に惚れてるんかい。本當にそんなことがあるんかい。あの女は一寸意氣で色つぽい目をしてる。惚れられたのなら結構ぢやないか。君が屈托する譯は分らないね。

修吉。馬鹿云つちやいけない。僕は氣味が惡くて仕方がない。

栗栖。(調子に乘つて)何故だい。あの女は屹度口説も巧いし情が深いよ。君は妻君の外に女を知らないから恐れを抱いてるのだらうが、ピク／＼することはないやね。……僕は一つ妻君に話して脅かしてやらうかな。

修吉。戯談は御免だよ。眞面目な問題だからね。僕は妻には爪垢ほども洩らしてやしないんだから。

栗栖。だけど、君が妻君を姉さんの家へやりたくないんなら却つて洩らした方がいゝだらう。…………兎に角君は艶福家だ。美ましいね。久米の後家さんは目元から口元から色つぽいよ(思出してゐるやうに空を見詰めて)あれて年齢は幾つか知らん。

修吉。三十五だとさ、もう婆さんだね。

栗栖。一寸見ると三十ぐらゐとしか思はれないがね。若いな。いやに眞面目臭つた謹み深い女とばかり思つてたが、これぢや僕の眼力も駄目かな。…………そしてどんな風にして君を口説いたらう?。

修吉。君が勝手に想像するさ。

栗栖。そして、君はあの女に侮辱を與へたのかい。

修吉。侮辱は與へないさ。しかし、侮辱したと同樣なのに、あんな女は圖々しいものだね。ます〳〵僕の家へやつて來るよ。白ばつくれて妻とべちや〳〵話すのを聞いてると、却つて僕達の方で侮辱されてるやうな氣がする。

栗栖。(相手の顔を見詰めて)…………どうも腑に落ちないね。

修吉。何が?。あの女の氣持がかい。

栗栖。いや、君の心がさ。…………僕はこれて男や女の目付には注意する癖がついてるが、君の目色を見てると、何か心配がありさうに思はれるがね。旅行前に會つた時とは全て君の樣子が違つてるよ。久米の後家さんに思はれたゝめとは受取れんね。

修吉。だからそのためとは僕の方で云やしないぢやないか。君が獨りて極めてるんだよ。…………こんな話は止さう。

栗栖。ぢや僕の話を聞いて呉れたまへ。(ポケットから手紙を取出して渡す)これを讀んだら分るだらうが、僕も今困つてる。一日も早く結婚しなきや事が面倒になりさうだよ。故郷へも訪らない噂が傳はつて僕の信用を害しても困るよ。

修吉。(手紙を讀みかけるところへ、兄禮造入つて來る)。私は今お迎へに停車場まで行つたんてすが。

禮造。(高聲て)わしもさう思つて停車場を搜したのぢやが、どうして見付からなんだらう。やう〳〵電車に

乘ることは乘つたが、方角を間違へてえらい目に會ふた。何處を通つて來たか見當がつかんわい。（栗栖に挨拶して無造作に胡座を搔く）

修吉。夜汽車ぢや疲れたでせう。風呂へ入つて來て一休みなさるとい丶。（何手紙に目をつけてゐる）

禮造。（周囲に氣をつけて）おえいは居らんのかい。

修吉。今に歸つて來ますよ。近所へ行つたのですから。

禮造。わしはあれに會ふまでにお前にだけ少し訊いたり話したりしときたいことがあるんぢやがな。

修吉。さう急がなくつてもい丶でせう。明日でも明後日でも緩くり話せるんですから。兎に角一緒に風呂へ行きますか。

栗栖。僕はまた出直して來よう（と立上る）

修吉。もつと遊んで晩餐を食べて行きたまへ。遠慮しなくもい丶よ。君の話もまだし殘してるんだから。

栗栖。（躊躇して）ぢや、一時間ばかり其處等をぶらついて來よう。

修吉。ぢや、さうして呉れたまへ。待つてるよ。（栗栖が出て行くのを襖を開けて見送つてから元の座に戻る）今度は長逗留が出來ますか。成べく永く遊んで丶下さい。さうだと私達のためにも大相都合がい丶んですが、

禮造。わしも長逗留しとられるやうぢやと結構ぢやがさうは行くまいて。お前に會ひさへしたら直ぐ夜汽車てゝも歸りたいぐらゐだ。わしも懷手で遊んでやせんぞ。

修吉。さうでせうとも。田舍は却つて煩いんでせうね。

禮造。……お前は今幾つぢや。

修吉。えッ……それがどうしました。

禮造。お前は確か三十三だ。わしは三十七だ。たつた四つ違ひぢやな。

修吉。……

禮造。子供の時分にやわしよりやお前の方が力が強いぐらゐだつたが、今はどうぢや。病氣でもしたのか。見違へるほど窶れとるぢやないか。（骨太い手を出して）わしはこんな汚い手をしとるが、親爺が殘して呉れた古い屋臺骨は持耐へて來たし、町の世話もして來

た。お前にだつて、學資の心配もさゝないし、お前の方て入用だと云つて來た金は何時も文句なして默つて送つてやつてる。いくら稼ぐつもりても運が惡けりや仕方はない。わしの方て行詰まるまては助けてやらうと思ふとるんぢやが、お前のこの頃の樣子がどうもわしの腑に落ちん。時と場合て職に離れるのも止むを得んし、おえいといふ女を籍に入れるのもいゝだらうが、わしにやお前のこの頃の量見が氣に喰はない。田舍物だつてわしの目は盲目ぢやないからな。かねて手紙を見ちや變だ〳〵と思ふとつたが、此間の手紙を見た時にいよ〳〵打遣つて置けない氣がしたから、わしの方てちやんとお前達の事を詳しく取調べさせた。調べ書も持つて來とる。一體あの女は何だ。

修吉。調べたつてどうしたんてす。

禮造。秘密探偵に賴んて特別に責任を持つて調べて貰らつたんぢやから確かだ。××町の村上さんぢや東京から來た大林區署の役人の娘を息子の嫁に貰うについて、調べさせたと聞いたから、わしも其所へ賴んだのぢや。

修吉。（落着いて）しかし當てになりませんよ。

禮造。おえいに前に亭主同樣な男があつたといふのは噓なのか。

修吉。そりやずつと昔の話てすから。

禮造。昔はどうだつてもいゝか知らんが、わし達田舍物には素性は大事だからな。……お前は二年も三年も一緒に居るんだから、おえいの身の上や不斷の心掛けはよく知つとるんだらうな。今度の秘密探偵の調べ書ばかりを當てにするんぢやない。お前の手紙を見たつて思ひ當ることがあるんぢや。お前も男なら女に指圖されんやうにせねや無駄だせ。わしもお前は血を分けた弟だからお前が目的を達するためには物惜しも腕惜みもせん。しかし、おえいといふ女は籍に入れん限りはわしには赤の他人ぢや。弟の成効を妨げたり甲斐性なしにしたりするのなら、その女はわしの仇敵見たいなものぢや。

修吉。何もさう仇敵呼ばりしなくつてもいゝでせう。（苦笑して）私だつて馬鹿ぢやありませんよ。自分の女房にしやうといふ女の精神が分らんことはありません。何なら今來てゐた栗栖といふ男にでもよく聞いて御覧なさい。あれは私の學生時代からの親友でおえいとも懇意なんですから。

禮造。兎に角わしも二三日逗留すりや、おえいの様子もよく見て意見もよく聞いて見るし、先方の親兄姉にも會つて確かりした話をつけることにするが、お前のためにならんやうだと、わしがゐる間に手を切つてしまへ。女房にする女は幾らだつてあらあ。

修吉。だけど何故兄さんは一概にけなしてしまうんです。私にしても頭からあれの惡口を云はれちやいゝ氣持はしませんよ。私とおえいとの間はこの頃になつて、あなたにお知らせした譯ぢやなし、今まで大目に見てゐられたものが、今日になつて毒づかれるのは酷いと思ひます。……この二三日心配事があつて私も頭が痛んでるのに、唯つた一人手頼りにしてる兄さんにそんな事を云はれちや立つ瀬がありませんよ。……私もあなたに會つたら相談相手になつて貰つて將來の方針を極めやうと思つたのに。

禮造。わしも來る早々厭なことは云ひたかあないが、……お前も三十三にもなつて確かりせんと自分の顔へ泥を塗られつちまうぜ。（聲を潜めたが力强く）前に男があつたばかりぢやない。もつと酷い事がわしには知れてる。

修吉。どんな事です?。その秘密探偵からですか。

禮造。うん。……その外にも知らせて呉れた者がある。……いづれ緩くり話すが、おえいには性質の惡い噂があるぜ。お前は氣がついて居らんのか。

修吉。（暫く默して考込んだ後）他人はいろ〳〵の事を云ふものですよ。兄さんは私をもつと信用する譯に行かないんですか。

禮造。お前は子供の時からわしよりや正直だつたが、正直なばかりが男の取柄ぢやないぞ。（旅鞄を引寄せて手紙やらの物を出して）まあこれを讀んで見い。

修吉。（氣味惡げに手にも取らないで）私はそんな物は讀みたかありません。あなたが構つて下さらなけりや、私一人の量見てやつて見ますよ。

禮造。わしも一應云ふことだけ云つとけば、後はお前の存念に任かせとくさ。（調子を柔らげて）……先月手紙て一寸知らせといたが、わしも親爺の石碑は立派なのを建てゝ××先生に碑文を書いて貰つたし、法事も恥かしかないほどにして濟ましたし、親爺の計劃しとつた書籍館も小さいながら一通り仕上げて町へ寄附しといたから、親爺に對する義務は充分に盡したつもりなんぢや。これからはわしとお前とて好きな事を思ふ存分にやりさへすりやいゝんだぜ。わしは陶器の工場は是非やり通すつもりだが。お前はどう思ふ。

修吉。私にや工業の事なんか分りませんが、あなたは失敗に恐れないからいゝてせう。親爺のやうな氣象だから。

禮造。（相手の顔をよく見て）しかし、お前の方が親爺似だぜ。親爺は時に寄つちや世間態ゝ關はん人だつた。わし達も子供の時分隨分厭な思ひをさゝれたぢやないか。わしはこの頃あの老婆に會ふと胸糞が惡くてならんて。

修吉。その話は止しませう……これから湯に入つて來て酒でも飲み〳〵ゆつくり田舍の話ても聞かせて下さい。（座を立つ）

禮造。さうだな。（庭の方を見て）東京もこの邊は閑靜ていゝな。（重々しさうに座を立つ）

第二場

おえいは修吉の机の上に置かれてゐる栗栖の手紙を讀んで、元の通り封筒へ收めやうとしてゐたところへ、栗栖が入つて來る。

えい。何處へ行つてらつしたの。

栗栖。お客様の話の邪魔だと思つて、其處等を散歩して來ました。久米さんの家の前ゝ通つて覗きましたよ。あなたの笑聲が聞えてた。（縁側近く座る）大谷君

はどうしました？
えい。兄さんとお湯へ行つたんですつて。私今歸つたばかりでまだお客様には會はないんですよ。（手紙を栗栖の前に置いて）此處にあつたから今拜見しましたよ。
栗栖。（不愉快げに手紙をポッケットに收めて）大谷君も内所で見せた者を出しつ放しにしてちや困るな。
えい。そして大谷はどう云ひました？
栗栖。お客様が來たから何も聞く暇はなかつたんです。
えい。ぢや、お玉さんは結婚を強いられて困つてるですわね（笑ひ〳〵）お安くないのね。……でも、あの女によくかうつけ〳〵と思ふことが書けたと思ふと不思議ですよ。餘程の思ひなんでせう。……あんな厭な顏して。……私がそのお手紙を見たのが惡くつて。先つき私に見せようつて御自身に云つてらつしつた癖に。
栗栖。そりや構ひませんさ。それは何でもない手紙ぢやありませんか。
えい。ぢや、外のお手紙にはもつと面白いことが書いてあるんですわね。
栗栖。冷かしちやいけませんよ。眞面目にあなた方に御相談しやうと思つてるのに。
えい。私だつて今日は戯談なんぞ云つてる暇はないんだわ。（面白さうに云つて）私どうしても今日は此處を出て行かなければならんのですもの。（長椅子に腰掛けて）久米さんにもさう云つてお別れして來ました。あなたともお別れね。私、これから姉の手助けして、あの家を繁盛させてやりますさ。……あなたは早くお玉さんと結婚なさるとよ御座んすよ。大谷だつて奇麗な若い人とちやもとした結婚をするといゝんですわ。
栗栖。少し會はない間にあなたは冷淡になりましたね大谷君は非常に滅入つちやつたし。
えい。私、もう男なんか嫌ひさ、久米さんのやうにして暮してた方が結句氣がせい〳〵していゝと思ひま

すよ。

栗栖。どうだか。（嘲けるやうに云つて）あの後家さんが何て佛様のやうな氣でゐるものですか。

えい。いゝえ。大谷が何と云つても、私あの人を信用してゐます。毎日のやうに會つてるんですもの、あの人に暗い所があるかないか、私の目に分らないことがありませんよ。

栗栖。さうですかね。あの後家さんは觸つたら崩れさうに水々してるけど。……あんな女は戀に陷ちたら激烈で執念が强いんですよ。だけど面白いんでせうね。僕なんかゞ引掛つたらぎゆう／＼云はされる目に會ふだらうな。僕等には經驗のないことだけど。……

えい。どうですか。私達には氣振りも見せないでお玉さんと堅い約束を内所でしてらつしつた癖に。

栗栖。それは何でもないことぢやありませんか。

えい。あなたにはさうですかね。あんな風な手紙の遣り取りなんぞ始終してらつしやるの。

栗栖。僕よりや大谷君の方が面白い經驗に富んでるかも知れませんさ。

えい。戯談仰有いよ。大谷がさうだつたらもつと生々するでせうにね。あのくすんでること御覧なさい。あなたにもつと感化されると自分のためにも幸福なのでせうがね。

栗栖。あなたが後家さんに感化されたやうにですか。……しかし奥さん、僕は今日此家へ伺つてる間に、少し頭の調子が變りかけましたね。僕の方が大谷君に感化されたのかも知れない。……此家へは幾度遊びに來たか知れないけど。今日ほど妙に心を動かされたことはありませんよ。……先つき向うの麥畝の畦を歩きながら考へてゐたのですが、旅中にふつと年齢に氣がついて脅かされたのが可笑くなりました。あれはほんの一時の迷ひですね。二十八ぐらゐの年齢に劫えるのは意氣地がなさ過ぎますからね。……

えい。大谷が何かあなたにお話して？

栗栖。話も話だが……

えい。結婚なんか詰らないから止せと、自分の身に引比べて忠告したのてせう。

栗栖。僕がそんな忠告で動かされるものてすか。それに今の大谷君には結婚を否定するやうな氣分は些ともありませんからね。あなたに離れることを苦にしてるぢやありませんか。

えい。でも、毎日氣拙い思ひをして睨み合つてるよりや別れてしまう方が、結句お互ひに仕合せなんてすよ。

栗栖。大谷君は仕合せと思はないから駄目てすよ。無理もないてせうが……

えい。私にだつて無理はありませんわ。まあ考へて御覧なさい。私が久米さんや黒田さんのお家へ行つても一緒に外へ遊びに行つても、後を付狙つてるんてすもの。そして、私のお友達に難癖ばかりつけて厭になつちまう。私、此處へ來てから只の一度だつて後目たい事をしたことはありません。……あなたはよく御存じてせう。

栗栖。えゝ。……ぢや、あなたは姉さんの手助けに入らつしやるのが別れる原因ぢやないんてすね。

えゝ。私、もう理窟詰めにはあき／＼したの。大谷はよくさう云つて責めますわ。

栗栖。僕等のやうな第三者には、あなた方の内面の複雜な事情は分らないから、差出口は利けないが……

えい。お玉さんと一緒にお暮しなすつたら分るてせうあなたは大谷とは違ひますけれど。

栗栖。（笑ひ／＼）僕はこの手紙を破りたくなつたんてすよ。（ポツケツトに手を入れる）

えい。（生々した目付をして）嘘ばかり云つてらつしやる。お玉さんが聞いたら泣きますよ。私が見たつて怒つてらつしやつた癖に。

栗栖。これを破つちやつたら、氣がせい／＼して僕にも元氣が出るかも知れない。（手紙を出して調子づいて引裂かうとする）

えい。馬鹿な眞似をなさるものぢやありません。

栗栖。（引裂く）

えい。(引たくるやうにして留めて)お止しなさい。罰が當りますよ。思ひの籠つた手紙を粗末にして。薄情な方ね。(破れた手紙を拾ひかける)

(其處へ修吉は兄と共に入つて來る。二人の樣子を見て不快な顏付をする。おえいは生眞面目に長椅子を離れて、兄に初對面の挨拶する。兄も手輕く答へる)

修吉。酒の仕度は出來たのかい。

えい。いえ、まだですけれど、急いで拵えますよ。

禮造。まあ緩くりていゝ。わしは湯に入つたら急に草臥が出たやうだから一休みすることにしやう。

えい。ぢやお休みなさいまし、彼室へお床を延べますから(奧へ入る。禮造も隨いて行く)

修吉。(破れた手紙に目をつけ)先つき君が僕に見せた手紙ぢやないか。どうしたのだ。

栗栖。(冷然として)まあ破つとくことにした。

修吉。ぢや、この事については僕に用事はないんだね。

栗栖。あゝ。……僕も馬鹿な血迷ひをして下さらない秘密を君に知らせたのを後悔するよ。

修吉。君も隨分氣紛れだね。眞面目な問がさう早く解決したのかい。

栗栖。解決したのぢやない、却つて迷ひ出したのかも知れないが。……

修吉。……兄貴が僕達を誤解してゝ困つてるんだが、今幸ひ君が來てるんだから、よく說明して疑ひを晴らして呉れないかね。兄貴は僕の妻について些とも信用を置いてゐないんだもの。あれぢや妻があまりに可愛相だ。僕が有望な仕事に有つかないて愚圖々々してるのを丸て妻の所爲にしてるんだ。

栗栖。そりや酷いね。

修吉。この二三年間の妻の行動は、君が一番よく知つてる譯だ。君に冷靜な判斷を下して貰ひたいね。

栗栖。しかし君自身が一番よく知つてる筈ぢやないか。

修吉。いや、僕にや女の心が分らないよ。久米の後家さんの事件からます〱分らなくなつた。……君はお玉さんとの秘密だつて僕等には打明けたほどだか

ら、僕には何でも隠立てはしないだらう。……僕は君には兄弟同様の情愛を持つて交際してるんだよ。

栗栖。だから何も隠立てはしてゐないよ。

修吉。君は兄貴とは違つて、妻を信用してゐるのだらうね。誰れの前でても妻のために辯護はして呉れるだらうね。……君がさうして呉れると僕は非常に心丈夫だ。

栗栖。だが、妻君は僕などに辯護されることは好むまいよ。（憫いやうに云つて）僕のやうな他人が入るよりや、身内だけてよく將來の話を極めたらいゝぢやないか。

えい。（茶盆を持つて入つて來る。二人が急に口を噤んだのに氣も留めないで）今姉の家からこんな電報を寄越しました。（電報紙を修吉に見せて） 御飯が濟んだら大急ぎで行つて來ようと思ひますよ。

修吉。（電報を見て） 姉さんも、此方の都合を構はないで呼立てるつて方はないがね。……ぢや、おれも一緒に行くことにしよう。おれから姉さんに話したいこともあるから。

えい。だつてお客様がゐらつしやるぢやありませんか。それにあなたと一緒に行つちや、姉さんが變に思ふわ。

修吉。何故？。變に思はれたつていゝぢやないか。

えい。あなたが姉さんにお話しやうと思へば何時だつて出來るわ。

修吉。いや、おれも今夜といふ今夜姉さんに話したいことがあるんだ。

えい。何をです？。

修吉。お前があの家へ手傳ひに行くのをおれが斷はるんだ。

えい。さう？（冷笑して）さうしてまた姉に氣拙い思ひをさせて、私と私のたゞつた一人の姉との間を裂かうとするのね。あなたのお極まりだ。……私の親類てもお友達ても皆んなあなたのために私から遠退くやうになつたぢやありませんか。

修吉。止むを得ないさ。

えい。何が止むを得ないんです。私、子供の時から懇意だつた人ともあなたのために仲違ひして、この先誰れを手頼りにするんでせう。歳を取つて一人ぼつちぢや不安心ですからね。

修吉。おれの所爲ばかりぢやないさ。お前の伯母が赤痢で入院してた時にも、非常に困つてると聞いて、氣の毒だから、おれの方で工面して二十圓拵らえてお前に持つて行かさうとしたら、お前は一日延しに愚圖々々して、それで自分の着物をつくつたぢやないか。

えい。あれは後で姉から入院費ぐらゐは伯母の内所の貯金で用が足りると聞いたから止したのですよ。それにあのお金で私の着物ばかり拵えるものですか。

修吉。ぢや、どうしたのだ。

えい。私そんなこと一々覺えてやしないわ。忘れちやつた。

修吉。今井の家へだつて、お前が何か言合ひして行かなくなつたんぢやないか。

えい。皆んな私の所爲にするのね。ぢや、その時にさう仰有ればいゝのに。

修吉。そんな事を些とも咎立てするんぢやない、お前の方でおれの所爲にするから云つたまでだ。……どうせ親類に氣拙い思ひをさせたつて仕方がない。家の中でお互ひに氣拙い思ひをしなきやそれでいゝぢやないか。栗栖君にでもよく聞いて御覽。

えい。姉さんの家へ手助けに行くのがそんなに道に背いたことなんですかね。私、兄さんにきつぱり譯を云つて行くつもりですよ。

修吉。（慌てゝ賺留めるやうに）兄には荒立つたことは何も云はないで置いて吳れ。兄は少し誤解してるんだから、せめて兄のゐる間だけでも、機嫌を害ねないやうに穩かに日を暮らすやうにして吳れ。

えい。いゝえ。私兄さんには洗ひ曝らし何でも云つちまひます。誤解なんかされてちや尚更云はなくちや詰らないわ。

修吉。わざ／＼やつて來た兄に厭な思ひをさせちや濟まないぢやないか。おれ達の利益にもならないよ。おれ達が素直に睦じく暮らしてるのを見たら、兄はあんな氣象だから幾らても力になつて呉れるんだ。

えい。兄さんによく思はれやうと惡く思はれやうと、私はこんな人間なんだから仕方がありません。……(笑つて)姉さんの家へても行つていろんな人に揉まれて來たら些とは氣の利いた人間になれるてせうさ。……ねえ栗栖さん、さうてせう。こんな寂しい所で一人ぽつちで愚圖々々してるから馬鹿になるんてすわねえ。

栗栖。(膝を抱いて間が惡さうに庭の方を見てゐたが)これまで通りにしてるのが一番いゝんぢやないてせうか。

えい。お座なりを云つてらつしやるわね。……こんな話を聞いてらつしつてもお退屈てせうから、早くお酒ても持つて來ませうよ(座を立つ)

栗栖。僕はもうお暇しませう。(座を立ちかけたが、二人に引留められて、迷惑さうに笑顔をつくつて)僕がゐない方がいゝてせう。明日の朝また來ますよ。

修吉。まあもつとゐて呉れたまへ。

えい。あなたが側にゐて下さると、大谷は心丈夫ていゝてすよ。

栗栖。いや駄目だ。こんな時にはどんな風にして、あなた方の仲を調停していゝか解りませんもの。

えい。さうてせうとも。取組合ひても初めると仲裁の仕甲斐があるんてせうけれどね。……どりやこんな馬鹿な事を云つてる暇に御馳走拵えてもしませうよ。(奥へ入る)

(修吉も後に隨いて默して奥へ入る。栗栖はまご／＼した後で長椅子に身體を投掛けて手足を伸して、輕く唄を唄つてゐる。暫くしてふと外へ振返つたが、何か見付けたやうに目を据ゑ、やがて椅子を離れて緣先に出る。ついに女下駄を穿いて竹垣の側へ寄り、ふら／＼裏木戸から外へ出る。おえい銚子を載せた膳を持つて來る。座敷の中や庭の方を見廻はす。修吉も後に隨いて入つて來る。)

えい。(外を覗いて獨言のやうに)何處へ行つたのか知らん。

(と云つて振向いて、突立つた修吉を見ると、驚いたやうに)どうしたんてす。……彼方へ行つたり此方へ行つたりし

ないで、其處へじつと落着いてゐらつしやい。見つともないぢやありませんか。

修吉。お前こそ浮々しないで心を落着けるといゝ。(カ強く云つて、長椅子に腰を掛けて)お前も此處へ腰を掛けろ。

えい。(呆氣に取られながら、引寄せられるやうに修吉の指差すところへ腰を掛ける)あなた何故そんな氣味の惡いやうな顏付をなさるの。

修吉。おれが先つきから何を考へてゐたか知つてるか。

えい。……(相手の顏を見詰める)

修吉。お前は去年の春おれに毒づいた後で無斷で栗栖の家へ逃げて行つたことがあつたつけな。

えい。それがどうして?。

修吉。あの時も栗栖は知らん顏しておれの家へやつて來た。……今年の正月にもおれが社から少し早目に歸つて來ると、お前と栗栖とが一緒に目白坂を下りて來た。

えい。さうしたかね。……ぢや、お國の誰れかに送る反物を私が見立てゝ上げた時かも知れないわ。

修吉。お玉さんと栗栖との見合ひをさすんだと云つて面白さうに家で御馳走したり大久保へ躑躅を見に行つたり、おれまで引張り廻して置きながら、あの緣談は碌に話を進めないで煙のやうに消えてしまつた。あの女も可愛相にまるで玩具にされたやうなものだ。

えい。あの女よりも私達の方が玩具にされたんですよ。秘密で勝手な眞似をして?。

修吉。どうだか分るものか。栗栖といふ男は何を云つてるのか、おれにはてんで信用されない。第一媒妁が仲に立つて正當に結婚出來るものが、故ら不道德な關係を結ぶ必要はないぢやないか。そんな馬鹿なことがあるか。

えい。そりや栗栖さんはあなたなんかとは量見方が全然違つてるんだわ。當前に結婚するんぢや詰らないんでせう。

修吉。お前はそれを是認してるんか。栗栖の心持を不

思議にも思はないんだね。尤もあれほど深く交つてる久米の後家の心持さへお前にはよく見透せないんだから。

えい。（冷かに）何を云つてるんです？。

修吉。……おれは今日といふ今日、何もかも見透せたやうな氣がする。昨日までは雲を摑むやうでお前の心根が確かり摑まへられなかつたが、今はおれの目が冴えて來て、はつきり狙ひがついたから大丈夫だ。かうなればおれも覺悟がついて、もうきよと／＼して迷つてるには及ばないんだ。……お前は姉の家へでも何處へでも、今に今行きたきや行け。

えい。（稍々恐れを感じたやうに）狙ひがついたの覺悟がついたのと云つて何のことです？。獨りで力んでゝ私にや些とも分らないわ。

修吉。（氣味の惡い微笑を洩らして）……おれは此間からお前に荒い口を利いたり泣言も云つたね。だけど、もう何も云ふまい。お前は此間から自分の大事な道具はこそ／＼一纏めにして荷造りしてゐたやうだから、それを持つて早く出て行つたらいゝぢやないか。おれはもうお前の袖に縋つて此處にゐて平和な暮しをするやうにと歎願はしないよ。

えい。……私今夜は一寸顏出して來るばかりなの。電報が來てるのに打放つとく譯には行かないから（絕えず相手の顏に氣を留めながら）歸つて來て兄さんにもよく譯を話して改めて出掛けようと思つてるんですよ。大人しくだとか平和にだか云つて、私よりもあなたが一人で騷いでるんですもの。

修吉。お前が兄に譯を話すには及ばないし、今夜歸つて來る必要もないんだ。お前はお前で勝手にするがいゝ。おれはおれで考へを極めるつもりだ。

えい。あなたは何か勘違ひしてるんだわ、屹度。……

修吉。今までのやうにお前の前でおど／＼して委けてゐなくなつたから、勘違ひしてるやうに見えるのかい。おれは只靜かに日を送りたいばつかりに、長年お前の氣に觸らないやうにと心を使つて來た。だからお前の目にはおれは意氣地のない奴隸見たいな者

に見えたらうが、もうお前に操(あやつ)られてる人間ぢやないぞ。今に男の持つてる力を見せてやらう。

えい。どうかしてらつしやるわね。(わざと平氣らしく云つて椅子を離れて)私、早く御馳走拵えをしませうよ。

修吉。待て。……まだ云つとくことがあるんだ。……

えい。私は怖い。何故そんな怖い目をして見てらつしやるの。

修吉。今日初めておれの怖い目に氣がついたのか。……

(何か云はんとして云ひ得ぬ態)

(おえいは逃げるやうに奥へ入る。修吉は考込んでふら〳〵縁先へ出て庭へ下りやうとしたが、下駄のないのに氣づいて、引返して奥へ入る)

栗栖。(裏口から歸つて來て縁側に腰を掛ける。やがて振向いて)大谷君

えい。(奥から出て來て)何處へ行つてらしたの。

栗栖。見馴(なれ)えのある顏が通つたから出て見たら違つてた。

えい。大谷も今默つて出てつたやうでしたよ。樣子が變なんですよ。

栗栖。だつて先つき話してた時にや何ともなかつたぢやありませんか。

えい。それが不意に狂人染みたことを言出すんですもの。いやに威張つたりなんぞして。……おれの力を見せてやるだの、狙ひがついたから覺悟しろだのと、

栗栖。へえ。……(微笑して)あなたが柔順にしてゐないからですよ。

えい。笑ひ事ぢやないの。あなたよく氣をつけて御覽なさい。

栗栖。えゝ。……全體あなたが露骨に大谷君に當るからいけないんさ。夫(をつと)にこれほど重んぜられてれば、表面だけでも夫(をつと)に安心を與へるやうにしなければいけませんよ。

えい。(得意らしく)私には表面も裏面もありませんよ、面倒臭いから。厭なら厭で剝出しにどし〳〵云つてやりますさ。

栗栖。ぢや、あなたは誰れに對しても公然口に出した

り行爲に現はしたりしてるだけなのですね。今の世にもあなたのやうな單純の人があるんですかね。久米の後家さんにしてもその外の女にしても、僕の知つてる女は皆んなそれ相應な秘密を持つてるらしい。私自身にしてもさうだが、たとへ裏面で何もしなくつても、心の中で他人に云はれないていろんな面白い事を考へてるのも樂みですがね。さう云ふ樂みがなけりや詰らなくつて日が送れませんよ。ある平凡な事を口では話してゐながら、心では外の事を考へてるのは愉快なものだ。

えい。ぢや、今も外の事を内所で考へてらつしやるんだわね。

栗栖。さうかも知れませんね。

えい。云つて御覽なさい。内所にして口外はしませんから。

栗栖。秘密のない人に秘密は明かされませんよ。（ふと調子を變へて）僕はあの長椅子に寢て、このすが／＼した初夏の風に吹かれてうたゝ寢をしたいな。先づさあなた方が引込んでから、一人で長椅子に寄掛つて息を吐いて、例の秘密な樂みに耽りかけると、外をある人影が通つたんです。……出て見て失望しちやつたけど、楢や楓の若葉が目の先にゆら／＼して、僕の空想を煽てるんですよ。

えい。氣樂な人ね。眞面目の問題があるつてせか／＼やつて來た癖に。

栗栖。なあに、ありや魔が差したのさ。……魔が差したから僕も血迷つて浮かり大事な秘密をあなた方に洩らして取返しのつかんことをしちやつた。（悄げた風をしながら）しかし、その代りにあなたの心の奥が讀めたやうな氣がする。

えい。讀むも讀まんも私の心の奥も底もあるもんてすか。私はこれからせつせと働くんですよ。手足の丈夫な間に働かなきや損ぢやありませんか。

栗栖。僕の知つた女にも、若くつて活氣があるのに暇過ぎて、身體を持餘してゐる者がありますね。奥さんは快活で氣儘にしてるからいゝけど、性質の惡い

奴はヒステリーになつたり腐貞つたりして、亭主困らせなんですよ。松本の妻君を御覽なさい。その一例だ。しかしあなたも姉さんのやつてる料理屋で十日も働いたらまた厭になつて、この長椅子が戀ひしくなるんですよ。さうかうしてゐる間に無事に歳を取つて老婆さんになるんだから、大谷君も默つてあなたのしたいまゝにさせとけばいゝに（戯談らしく）：：だが僕にや夫としての心持は分らない。矢張僕も女房を持つたら松本君や大谷君のやうにヤキモキするかも知れない。

えい。私。何だか厭な氣持がしますよ。あなたのお話を承つてると。……（ふと思出したやうに）さう云へば大谷は何處へ行つたのでせう。

栗栖。大谷君が女を拵えて家を出て、あなたが置去りにされたのなら陽氣で面白いんですがね。

えい。まぜつ返しはお止しなさい。

栗栖。心配するには及びませんよ。大谷君が歸つて來たら柔しくしてお上げなさい。あなたの一言で直ぐに元氣を回復しますさ。さうして皆んな揃つて目出度盃を擧げやうぢやありませんか。僕は折角來合はせたのだから、無事な結着を見て歸りたいものですね。

えい。（出抜けに笑つて）眞顏であんなチヤラツポコを云つて。……私にこのまゝ此處に釘付けになつてゐれと仰有るの。あなた御自身は何時も誰れに遠慮もしないで好きな事をしてゐらつしやる癖に。

栗栖。だつて僕の事はあなた方の今の問題の範圍には入つてゐないぢやありませんか。

えい。入つてゐますとも。……あなたが今日入つしやつた事は私や大谷には何でもない事ぢやないんですよ。田舍から兄さんが來たらと、大谷は力にして待つてゐたでしやうし、私も心待ちにしてゐたのですけど、兄さんよりも偶然入らしつたあなたの方が私達には大事なお客樣だつたのです。

栗栖。そんな筈はないさ。僕は何時もの通りに遊びに來て何時もの通りに歸るだけですもの。

えい。よく平氣で歸れますわね。……今日あなたが仰有つた事も家を出ると、直ぐに忘れておしまひなさるのね。

栗栖。僕が何を云ひました?。

えい。不斷あなたが仰有る事を大谷はよく覺えてゐますよ。(修吉はふと襖を開けて欠伸したやうな樣子で入つて來る)……御馳走の仕度は出來てるんですよ。兄さんを起しませうか。

修吉。もつと寢かして置け。そしてお前は彼方へ行け。(命令的に云ふ)

えい。さう?。(不平らしい態度をして奧へ入る)

栗栖。(相手の顔に訝しげに目を留めて、氣を兼ねたやうに努めて輕い調子で)君の家へ來ると、つい尻が落着いて長座をしていけない。僕は旅行から歸つてまだ何處へも行かないんだよ。一杯呼ばれたらお暇して二三軒寄つて行くことにしやう。

修吉。さう逃げるやうにして歸らなくてもいゝぢやないか。……僕は今君の事ばかり考へながらこの部屋へ入つて來たんだが、君は矢張此處にゐたんだね。

栗栖。一心に僕の事を考へてるのは不思議だね。君には今もつと重要な事があるだらうのに。(落着かぬ樣子)

修吉。僕があれを出しちやつて一人になつても、君は今まで通りに此處へ遊びに來るだらうね。

栗栖。何故そんなことを訊くんだい。

修吉。僕は君を唯一人の親友だと思つてるから、誰れに離れても君とは離れたくないんだ。これまでも君は僕に對する友情からあんなに親しく此處へ來て呉れたのだらう。

栗栖。(不快げに)いやに理屈詰めにするんだね。僕はさう物事を面倒臭く考へるのは厭だよ。……

修吉。僕だつて厭だ。(力を籠めて)長い間の面倒臭い思ひに疲れた。……破裂するんなら一思ひに破裂した方が結句氣樂だよ。(兄の鞄の中からかの手紙など擾出して)これを見て呉れたまへ。君の批判に任かせる。

栗栖。何だいこれは。(手に執つて氣輕に默讀する。修吉は座に堪へぬらしく、相手から顔を背けて緣側を彼方此方歩いてゐたが、暫

くして瞥見すると、栗栖は不興な顔して手紙を巻收めてゐる)。

栗栖。(笑ひを浮べて快活に)君はこんな下らん事てヤキモキしてるんかい。

修吉。(座に就いて手紙を袍へ收めて)君はこれを見てもさう事もなげに笑つてゐられるのか。……僕は冷笑されるために君に見せたのぢやないよ。

栗栖。だけど、笑はざるを得ないぢやないか。あんまり馬鹿々々しいから。君はこんな原因て滅入つてるのかい。

修吉。(稍々極りが惡さうに)さうてもないが。……

栗栖。秘密探偵の調査や、他人のお折介な手紙て輕々しく動かされるやうぢや、君も一家の主人としてあまりに腑甲斐ないね。僕は今までは君に同情してゐたけれど、かうなると、むしろ妻君の味方をしたくなるよ。それとも君に何か思當ることがあるのかい。

修吉。(顔を和らげて)……先つき話した通り兄が妻を非常に誤解してるんだ。こんな酷い事をしてまで妻に侮辱を與へて僕から離さうとしてるんだ。

栗栖。兄さんも随分分らず屋だね。……これは外の話だが僕は不斷かう思つてるよ。自分の愛してる女が表面好意を持つて自分を愛して呉れてゐれば、それて澤山だ。疑ひを挿んで餘計な穿鑿をする必要は些しもないと思ふよ。根掘り葉掘りしてゐちや際限がないし、そのために折角の樂みにも傷がつく譯だからね。……此方て疑つて掛れば、先方だつて氣拙い思ひをするだらうしさ。

修吉。僕はさう疑ぐり深い人間ぢやないつもりだが。……尤も僕はまだその手紙は碌に讀んでゐないんだよ。氣持が惡いから。

栗栖。讀みもしないて邪推するのは酷いね。……ぢや、これは僕が引裂いて燒いてしまはうよ。いゝだらう。

(手早くずたくに裂く)

修吉。(驚いて留めやうとして留めかねて)僕も輕卒だつた。そんな者を君に見せて。

栗栖。こんな者には思ひを殘さないやうにしたまへ。

(火鉢に入れてマッチを點けて燒く)誰れかゞ中傷するつもり

て書いたのだよ。

修吉。だけど、僕達は中傷されるほど誰れからも恨みを受けてやしないがね。君は知つてゐないかい。

栗栖。僕が知つてゐやう筈はないさ。……もうこの話は止さう。不愉快だから。

修吉。僕の方の友人にはそんな悪戯をする者はないしどうも腑に落ちないよ。

栗栖。（燒屑を灰の中へ突込んで）もう煙になつたんだからいゝさ。

修吉。……しかし、君は書いてあつた文句をよく記憶してるだらう。……君の頭の中には僕達の夫婦關係が今までとは丸て異つて見えるだらうね。……僕は今日ふとした機勢で妻に知らさないことさへ君にはさらけ出して見せたよ。

栗栖。さうだね。しかし僕も慌てゝやつて來て、君や妻君に下らない秘密を打明けて腹を見られちやつた。自信がなくなつて心が餓えて來ると、人間はこんな腑甲斐ない眞似をしたがるんだね。（自から嘲けるやうに云つて）……君も後悔してるらしいが、しかし君達が口に出して云つた事以外に、僕を感動させたことがあるよ。そのために僕の心に力がついたよ。助けを借りに來たのだが、違つた意味で力をつけて貰つた譯になるね。……（獨言のやうに）不斷目に見えないものがふとした機勢で見えることがあるんだ。……（座を立つてまご〱して）さあ僕はもうお暇しやう（奥へ入る）

（修吉は言葉も掛けず茫然として相手の歸るのを見てゐたが、やがて、長椅子に身を寄せて空を見詰めてゐる）。

えい。（不滿足らしい顔して出て來て、用心深い目付でぢつと修吉の樣子を見て）栗栖さんはいくら留めても聞かないて歸つて行きましたよ。あなたが變な事を仰有るからてすよ。

修吉。おれよりもあの男こそ變な奴だ。親切らしい口振りておれの氣になるやうなことばかり云つてやがる。默つてゐやうと思つても、彼奴の顔を見ると、心を見られるのが厭な癖に、自分の思つてゐる事を

自然に口に出したくなつて仕様がない。

えい。栗栖さんはどんなことを仰有つたの。先つき私に云つたやうなことを云つたんでせう。だからあの人は呆れて歸つたんですよ。

修吉。いや。おれはお前や栗栖のやうな手强い人間ぢやないさ。おれが男らしくお前に逆らうとお前はおれが氣でも狂つたやうに思つてるぢやないか。栗栖にだつておれは憐れみを乞ふやうなことしか云へない。

えい。あなたは今日はどうかしてるんですよ。……兄さんがお目醒めになるまであなたも其處て一寢入りなさるといゝわ。枕と毛布を持つて來て上げませう。

修吉。おれは兄貴が起きたら厭な話を聞かされると思ふと恐ろしいよ。

えい。(次の間から毛布と枕とを持つて來て)さあお休みなさい。此間から眠が足らないから腦が疲れて變なことが考へられるんですよ。(修吉を寢させて柔しく毛布を掛ける)

修吉。お前も其處にゐて呉れ。さうしたら眠付かれるかも知れないから。……誰れが何と云はうと、おれはお前を信じてる。兄でも栗栖でも久米の後家さんでも、誰れが二人の間を中傷して離さうとしたつて、おれの心は決して動かされやしないんだ。姉さんの家へ行くにしても、せめて今夜は此處にゐて、一晩だけでも充分に寢かして呉れ。(譫言のやうに云ふ)

えい。お酒を一杯召上がるといゝわ。よく眠れて。(座敷の眞中に置いてある銚子を取つて、修吉に猪口を持たせて注ぐ)折角いゝお酒を取つて來たのに栗栖さんは飮みもしないで。……冷くなつてるでせうけど、ぐつとお呑みなさるといゝわ。さうしたらよく眠れますよ。

修吉。(顏を顰めて、矢繼早に二三杯呑干して)あゝいゝ氣持だ。お前の云ふ通り一寢入りしたらおれの頭工合もよくなるかも知れない。眠が足らないと變な事を云つたり思つたりするものだ。……よく寢て目が醒めてから、心をよく落着けてお前と將來の生活方を相談しよう。

えい。さう?

修吉。此間からおれも下らないことを云つてたけど、寢て起きたら取消すよ。（女の顏を見上げてから目を瞑つて眠りに落つ）

第三場

座敷の眞中にランプが置かれ、禮造は端近く出て胡座を搔いて、手酌で酒を飲んでゐる。修吉は前のやうに長椅子の上に眠つてゐたが、ふと目を開けて周圍を見廻しながら椅子を下りる。

禮造。よく眠つとつたな。わしも風呂に入つたせいか、一度に疲れが出てぐつすり眠つた。東京へ來とるのも忘れてしまつて目が醒めてから一寸變ぢやつた。

修吉。（目をこすり〳〵差向ひに座つて）もう何時頃でせう。

禮造。左様。わしが起きた時もう暗かつた。あれから二時間も立つたゞらう。お前を起さうかと思つたけど、先日から眠不足で弱つとるさうだから、そつとしといたのぢや。（猪口を差して）まあ一杯やれ。少し寒くなつたが、あまり月がいゝから開けつ放してチビ〳〵やつてゐたのぢや。

修吉。（猪口を受けて）先つきから變な夢ばかり見てゐました。そして起きやう〳〵と思ひながら、どうしても手足の自由が利かなかつたのです。……あなたは相變らずよく飲んでゐられるんでせうね。

禮造。うん。……今夜は格別いゝ氣持に醉つて來たよ。先つきから隨分飲んだ。（銚子を振つて）だが、もうこれで止さう。あんまり醉潰れては肝心な話が出來んからな。

修吉。話は明日に延して、今夜は飲めるだけ飲んで、義太夫でも聽かせて下さい。さうでなければ、田舍の話でも聽かせて呉れませんか。

禮造。うん。……

まつ。（奧から顏を出して）久米さんが入らつしやいました。

修吉。奧さんにさう言つたらいゝぢやないか。

まつ。奧さんはまだお歸りになりませんですから。

修吉。歸らないつて、何處へ行つたんだ。

まつ。よく存じませんですが、俥に乘つてお出掛けになりました。‥‥お客様は此方へお通し申しませうですか。

修吉。今お客樣があるからと云つて斷はつて呉れ。

(昂奮して云ふ。下女が引込むと、ふと荒々しく扉を掛けて、下女を追うて行かうとする)

禮造。何々慌てとるんだい。猪口を轉がしたりして。‥‥まあ其處へ座れい。(目付で側へ引据ゑて)わしはおゑいの話をよく聞いてやつて、今夜姉の家とかへ行かしてやつた。

修吉。あれはあなたにどんな事を云ひました?。あなたの方から何も仰有つたんぢやないでせうね。

禮造。わしは默つて聞いとつたが、あれの云ふことは、わしのやうな田舎者にはどうも呑込めん。しかし、東京の若い女はわしにやどれも／＼淫婦のやうに思はれて氣味が惡いな。

修吉。まさか。‥‥

禮造。お前の頭の加減が惡いから、田舍へ連れて行つて暫く保養させたらいゝと云つてた。時々お前が妙な事を口走るから怖くて仕方がないと云つた。わしが來るまでお前の守をして大事に痛はつてゐたんぢやが、わしが來たから受取つて呉れと云つとつた。親戚にも大事な用事があつて行かなければならんのが、此家が些とも手放されんため行けなんだのぢやから、今夜兄さんの來てゐるのを幸ひに出掛けることにすると云つどつた。‥‥わしは何とも訊返さないで、よし／＼と得心した風をしといたが、わしはあれが云つたことを信用はして居らん。お前には知らせずにゐて呉れ、頭を痛めて氣になるかも知れんと、何かべちや／＼よく喋舌つとつたが、しかし、わしはお前をそんな意氣地なしとは思つて居らんぞ。

修吉。私も時々言過ぎたことがありますから、あれが變に思つて心配したのかも知れませんよ。

禮造。ところがおゑいは心配さうな顏はして居らなんだぞ。悅しさうな顏付をしていそ／＼と出て行つた。

丁度いゝ見切り時ぢや。お前はわしと一緒に一先づ田舎へ歸れ。

修吉。そりや歸らないこともないですが、私にはまだ爲殘したことがありますから、それを爲遂げてから故郷へでも何處へでも歸ります。

禮造。その決心がつきや結構ぢや。爲殘したことはちやんと片付けて立つ方がいゝ。若しも跡片付に金が入るのなら、わしが幾らでも出してやるから遠慮なく云つて御覽。

修吉。家を疊むとすりや、金なんか一文も入りませんよ。只今夜行つて來たい所がありますから、どうぞ行かせて下さい。あなた一人を置いてけ堀にしちや濟みませんけど。お酒はいくらでも持つて來させます。

禮造。急に用事が出來たのかい。成べく明日にしたらいゝぢやないか。

修吉。さうしてゐられないんです。先つき來てゐた栗栖といふ男に是非今夜の中に會つとかなければならんのです。約束しといたんですから。（座を立つ）

（禮造は訝しげに修吉の出て行くのを見てゐる。そして、銚子にあるだけの酒を呑干して、何か微吟しつゝ庭へ下りる。下女が銚子の代りを持つて來る）。

禮造。酒はもう充分だ。……冷つこい風に吹かれてるといゝ氣持だぜ。わしは月見をしながら其處等を一廻りしてから寢ることにするから、彼方の室へ床を敷いといてお呉れ。

（微吟を續けながら片隅の木戸を出て行く。下女は座敷の中を取片付けて奥へ入らうとすると、擦違ひ樣に修吉が入つて來る）。

修吉。お客樣は？

まつ。庭からお出掛けになりました。

修吉。おや、奥樣に直ぐ此處へ入らつしやいと云つて呉れ。（訝しがる下女の顏を見て）奥樣は茶の間にゐるんだから。

まつ。はい

（奥へ入る。修吉は長椅子に腰を卸す。間もなくおえい、前よりも稍々昂奮した風で入つて來る）。

修吉。（口を噤んで相手の顏をぢつと見詰めた後）……ぢや、栗栖に聞いたのだらう。さうでなきやお前に知れる筈はないもの。

えい。いゝえ、栗栖さんにばかり聞いたのぢやありません。兄さんの口裏でゞも分つてゐるし、さうでなくつても私此間からいろんなことを察してゐたのです。私が口に出さないから何にも知らないだらうと思つてゐらつしやるんでせうけど、私だつてそんな頓間な人間ぢやないわ。

修吉。今急に思出したのかい。おれが寢てゐる間に俄かにそんな事を思出したんだね。……そして姉さんの家はどうだつたのだ。

えい。姉さんの家はどうであらうと、あなたには關係がないでせう。私が彼處へ行かなかつたとても思つてるの。

修吉。おれの方から行けつて云つた譯ぢやないし、お前の行先を穿鑿するんぢやない。だけど、お前の樣子が先つきとはまるで違つとるから變に思はれるんさ。顏付から言葉の調子から別の人間のやうに思はれる。

えい。そりやあなたが疑ぐり深いからだわ。一寸の間外へ出てゐたかつて、私の心持は些とも變りやしませんさ。變らう筈がないわ。

修吉。去年の春時分までは、お前はよくそんな顏付をしてゐた。言葉の調子もそんな風だつた。（懷かしさうに云ふ）昔のお前を見るやうだ。……おれは誰れにつゝかれやうとも決して お前を疑がつてるんぢやない。だからおれの方からは何も言出さなかつたのぢやないか。

えい。それほどなら、私に明かせないことを何故栗栖さんなぞに明かしたりします。……私今歸り途にあの人に會つたの。さんざ冷かされちやつたわ。あなたはよく私に隱してゐたのね。あの女が遊びに來ても二人とも白ばくれた顏して。

修吉。（眞面目に）あの女つて久米のことかい。……馬鹿を云つちやいけないよ。おれは彼奴は元から大嫌ひ

なんだ。それくらゐの事はお前にだつてよく分つてゐさうなものだが。栗栖はその話をしとつたゞけかい。

えい。(不思議さうに)ぢや、あなたが栗栖さんにまだ外のお話もしてるんだわね。

修吉。(安心したやうに微笑して)なに、おれは何も變つた話をすりやしないが、栗栖の奴面白半分に出鱈目を喋舌りやがるからね。お前もこれから栗栖の云ふことを浮かり信じちやいけないよ。その代りおれは決して隱立をしないから。久米の婆さんのことだつて、おれがよくお前に話すよ。實に愚にもつかんことだ。

(禮造が庭へ歸つて來る。二人は氣がつかないで話をつゞける)

えい。そんな厭らしい話なんぞ聞かせて貰はなくてもよ御座んすよ。あなた御自分で好きなやうになさるといゝわ。私は私で考へがありますさ。

修吉。だけど、荒立てないやうにして呉れ。夫婦の間のことを世間に知らせるのはいゝこつちやない。おれはいゝ事でも惡い事でも自分に關はつたことを當分聞きたくないし見たくないよ。だから、お前もおれの心を惱ますやうなことは何も云はないやうにして呉れ。

えい。あなたの仰有ることが分らないわ。先つきは何もかも見透せたなんて、いやに威張つて私を脅してた癖に。あの時は私吃驚しちやつたわ。

修吉。あの時はおれも妙な事を考へたからだ。だがもう雲のやうに消えてしまつたから安心だ。今も厭な夢に魘されて目が醒めて、兄貴を打放つといて外へ出たのだが、直ぐ其處でお前に會つたからよかつた。おれは助かつたやうな氣がする。

えい。でも、よく眠れたんでせう。目が元氣づいて來てよ。

修吉。兄貴や栗栖は今日おれを虐めに來たやうなものだ。おれは兄貴の言葉に動かされないが、お前も兄に何を云はれやうと氣に留めないで聞流してお呉れよ。栗栖の云ふことだつてさうだが。

えい。あなたにこそそれが必要だわ。(媚びるやうに云つて)

…栗栖さんはね。またぐら〳〵考へが變つてるんですよ。お玉さんを思切るなんて男らしく云つてゐた癖に、矢張未練を殘してるの。傍から勸めさへすりやお玉さんと結婚して、ちやんとした家を持つて身を堅めたいらしいのよ。あなたどう思つて？あのお母さんはまさか今のいゝ縁談を斷はつて、栗栖さんに娘をやりやしないでせう。いくら私達が仲に立つて口を利いたからつてね。

修吉。しかし栗栖が云つてゐたやうに當人同士にどんな深い關係が出來てゐるのかも知れないから、此方の出様一つて、母親も一概に首を振る譯にや行くまい。栗栖とお玉さんとの結婚はおれ達も望んでゐたんだから、無理にもさう極まるといゝがね。だけど、栗栖が今日云つてゐたことはどれも皆眞面目に受取れりやしないさ。彼奴退屈すると、よく勝手に空想を描いて、自分で樂むばかりぢやない、さも本當らしく人に話したりするんだから。

えい。さうばかりでもないわ。あの人も今日は本氣なのですよ。此處へ入つて來た時の樣子からして不斷とはまるで違つてゐたのですもの。今も私の家を出て自分の下宿へ歸つたばかりで、また外へ出掛けやうとしてるんですからね。屹度またあの女を呼出しに行くんだわ。…あなたに拵らへた御馳走がそのまゝ無になつてるんだからお歸りにお寄りなさいと云つたら、お邪魔でなけりや寄りますなんて云つてたけど。

修吉。またやつて來て遲くまで居られちや困るよ。おれは先日中は彼奴にでも會つたらと思つてゐたが、今夜は彼奴が來たら、またおれの心を擾亂すやうなことを云ひさうな氣がしていけない。それに……

（不快な顏して、まだ何か云掛けたところへ、不意に禮造が足音立てゝ椽側に腰を卸したので、驚いて椅子を離れる）

禮造。（何氣ない樣子で）あゝいゝ氣持だつた。（修吉を見上げて）大變早いぢやないか。

修吉。其處まで出掛けて急に思返して歸つて來ました。おえいもあなたがゐらつしやるのに長く家を空けと

くのが氣になつて、早く歸つて來たのだらうです。

禮造。わしは飮んで寢さへすりやいゝんだから、別に構つて呉れんでもいゝ。（おえいを見上げて）水を一杯呼んで呉れんか。

えい。はい。（忌々しさうに禮造を見て奥へ入る）

禮造。馬鹿な奴だ。（酒の息を大きく吐いて）お前達は毎日こんな遊び事見たいな樣をして暮しとるんか。わしにや齒痒ゆうてならんぞ。確かりせい。

修吉。あなたの力を借りて家庭の基礎を堅めて、今度こそ確實に自分の仕事に着手しやうと思つてゐたんですが……

禮造。確實な仕事をする氣なら、わしに隨いて田舍へ歸つて、炎天に汗を流して麥刈をする勇氣があるかい。お前が草鞋穿きで山道の五六里も歩けるだらうかな。（おえいが水を持つて入つて來るのを見て高い聲で）おい。わしはお前の望み通り修吉を連て行くぜ。いゝかい。

えい。えゝ、よう御座いますとも。

修吉。大分寒くなつたから、戸を締めて今夜はお互ひに打解けて話をしやうぢやないか。下らない思違ひは笑つて忘れてしまひたいものだね。

禮造。それもよからう、腹藏なく云つて御覽。先づおえいの方から聞きたいものだ。

えい。私はまだ考へて見なければならんことがありますから、只今直ぐにはお話出來ませんわ（つけ／＼云つてぷいと立つ）……ぢや、雨戸を締めますよ。

修吉。（聞耳立てゝ舌打して）誰れか來たやうだな。斷はるやうにおまつに言付けとけばよかつたのに。

えい。人が來たつていゝぢやありませんか。

修吉。今日は誰れもいゝ話を持つて來ちや呉れないんだから。（襖の方を顧みる）



無頼漢（四幕）

吉井勇

人物

山崎新太郎、　元は大學生。
おぎん、　その情婦。
勝兵造、　本名は樫村虎彦、狂言作者。
小しん、　盲目の落語家
焉馬、　落語家。
おくめ、　焉馬の女房。
おはつ、　煙草屋の娘。
清兵衛、　老いたる刺青師。
典凌、　講釋師。
蝶丸、　盲目の新內語り。
おせん、　蝶丸の女房。
おかく、　下座の女。
辰造、　松林軒の亭主。

作さん、　松林軒の客。
鐵さん、　同
其他小しんの車夫、松林軒の客と女中、往來の人々等出づ。

場所

東京。(第一幕、第二幕、第四幕は淺草、第三幕は深川。)

時代

現今。(「俳諧亭句樂の死」より一年の後。)

第一幕

淺草の公園に近き横町にある、或る小料理屋の中。多くの居酒屋の如く陰欝なる家。殆んど全部土間なれども、上手に六疊程の疊を敷きたる所あり。

土間の上手は板壁にて仕切る。座敷の上手は汚れたる襖にて仕切る。正面は下手寄りに一間程の出入口あり。直ちに往來に通ず。松林軒と書きたる紺の暖簾を懸く。上手寄りに板場。皿小鉢を並べたる棚、鍋を懸けたる七輪などあり。その上に桁に白き字にて料理の品書を記したる置き板を並べて懸く。上手板壁の前に薦被りの酒樽を置く。その上のところに時計あり。土間には長方形の臺を二個並べて置き、その臺を差し狹んで四個の長き腰懸を置く。座敷には汚なき座布團を敷く。

下手はすべて板壁。酒などの廣告のビラ類を懸く。

電燈の光やや暗く、暖簾の外を往來する人の影折々見ゆ。温かきために屋根上より雪の解けて落つる音時々聽ゆ。三月の始め。大雪の降りたる日の翌夜。丁度十二時を打ちたるところ。

(焉馬と典凌とは上手の座敷にて酒を飲みゐる。焉馬は三十六七歳位の落語家。典凌は四十歳位の講釋師。作さんと鐵さんとは土間の臺の所にて酒を飲みゐる。作さんは五十歳位。鐵さんは三十二三歳位。二人とも職人體の男。その外に三人連れの遊人風の客ありしが、直ぐに出てゆく。辰造は七輪の下を煽ぎゐる。松林軒の亭主。三十五六歳位。一人の女中眠さうに酒樽に凭り懸りて鐵さんと話しゐる。)

鐵さん。いけねえぜ、毎晩あんな所で立ち話なんぞしてゐちやあ——

女中。笑談云つてゐるよ。私はそんなことしやしないよ。

鐵さん。白ばくれちやいけねえぜ。粂の兵内様だつて知つてゐらあ。

亭主。(口を出す。)なにね、こいつは近頃色氣付きやが

つて仕方がねえんてさあ。(女中に。)何をぼんやりしてゐやがるんだ。お燗が付き過ぎるぜ。

(女中は驚きたるやうに徳利を取り出して座敷の方へ持ちゆく。作さんと鐵さんは何か低聲に語り合ひつつ酒を飲む。)

女中。(焉馬に。)焉馬さん、如何もお待ち遠さま。

焉馬。(少し醉ひたる調子。)いよお、如何したい。相變らずお愛想が好いんだね。みんなお前に惚れて來るんだぜ。

女中。又た焉馬さんの十八番が始まつたよ。誰が本氣にするものかね。

(女中は亭主に呼ばれて去る。女中は誂へ物を持ちて作さんの方へゆく。焉馬と典凌とは次第に高聲に語り始む。)

典凌。さうよ。おれもあんまり好い氣持はしねえよ。句樂とは喧嘩をしたつきり到頭死ぬまで會はなかつたんだからなあ。

焉馬。なにさ、さう氣にするこたあねえやね。その喧嘩つて云つても、元はと云へば句樂の嫉妬から起つたことなんぢやねえか。あいつが紫君に惚れてゐるもんだから、お前にあんなことを云つたのよ。

典凌。そのことはおれにもよく分つてゐるよ。しかし氣が狂つてからも、典凌はおれの敵だなんて云つてゐたさうだが、それを聽くとおれもあんまり好い氣持もしねえからなあ。しかしなあ、焉馬さん。早えもんぢやねえか、もう句樂が死んでから一年になるぜ。

焉馬。うん。何だかついこの間のやうな氣がするが——さうよなあ、丁度一年だ。忘れもしねえ、小しんの家であいつが死んだつて話を聽いたんだ。それから——たしか柳橋と二人だつたつけ——直ぐ病院へ往つて見ると、あいつは木乃伊見てえになつて死んでゐやがるのよ。(醉ひながらも悲しげに。)痩せつ削けたあいつの死顔を見た時には、ああああひでえ姿になりやがつたと思つて、さすがにおれも涙がこぼれたぜ。(恨むやうに。)典凌さん。お前も喧嘩して分れたぎりだから來にくかつたかも知れねえが、何故あの時來て呉れなかつたんだ。おれはこれだけは句樂に代つてお前さんに云ひたいね。

典凌。だつてお前そりやあ無理ぢやねえか。

焉馬。なあにちつとも無理なこたあねえや。句樂だつて氣が狂つてからも敵だなんて云つてゐたものの死ぬまで敵てゐたかあなかつたらう。何しろ高が色事ぢやねえか。藝人にも似合はねえ、もつとあつさりやつて貰ひたかつたね。

典凌。(笑つて。)さう云はれりやあ一言もなしさ。句樂が生きてゐりやあ仲直りに一杯飲むと云ふことも出來るが、死んぢまつたものは如何することも出來ねえぢやねえか。

焉馬。(不機嫌に。)何を云つてゐやがるんてえ。おれはそんなことを云つたんぢやねえや。(典凌に杯を差す。)まあ、一杯飲みねえ。私からもお前さんには恨みがあるね。

典凌。へえ、どんなことなんだね。私はお前さんから何も云はれることはないと思ふがね。

焉馬。どんなことつてお前もあんまりぢやねえか。お前のずぼらはよく知つてゐるが――

典凌。おつと待ちねえ。ずぼらはお前の方が本家だらうぜ。

焉馬。(ちよつと困りて。)おれのずぼらは分つてゐらあな。まあ默つて聽くが好いや。

(この時山崎新太郎正面の出入口より入り來る。荒みたる顏色の二十二三歳位の男。殆んど渾名の如く「若旦那」と呼ばる。直ぐ座敷の方へ來る。)

新太郎。(突然。)誰がお前の話なんぞを默つて聽いてゐるやつがあるものかい。

焉馬。おや、こん畜生、聽いてゐやがつたな。(言葉の調子を變へて。)若旦那、脅かしちやあいけませんぜ。さあ、こつちへお上んなさい。

新太郎。(座敷へ上る。)如何もいけねえよ。近頃はすつかりこの家を覺えつちまつて、毎晩のやうにやつて來るんだぜ(作さんに。)やあ、今晩は――

作さん。今晩は。若旦那、お前さんは昨夜はずゐぶん醉つ拂つてゐたねえ。

新太郎。さうてしたかね。自分ぢやあまるつきり知らねえのさ。家へ歸つて見ると手も足も傷だらけぢや

ねえか。

作さん。さうてせうまるて正體がねえんだもの――

新太郎。もう酒は眞つ平御免だ――と云ふのは嘘よ。(焉馬に。)それにね、焉公。

焉馬。焉公はお止しよ。

新太郎。さうか。それぢやあ焉馬さん、如何もおれは近頃句樂のことばかり思ひ出していけねえよ。

焉馬。(不満らしく。)へえ、をかしなことを云ふね。句樂のことを思ひ出すのが、如何していけねえんです。

新太郎。それがさ。唯句樂のことを思ひ出すのなら好いが、おれのはさうぢやあねえんだよ。おれのはな――さうさ、何つて云つたら好いかな。

焉馬。(よく分らずに。)ええ。

新太郎。さうだ。句樂のことを思ひ出す度毎に、おれも句樂のしたやうなことを、しなくつちやならねえやうに思はれて仕方がねえのだ。つまり句樂の二代目になるつてことよ。(不意に立ちて亭主の傍にゆき、何か吩咐けて元の所へ來る。)ねえ、焉馬さん。おれがかうやつて家を出てのらくらしてゐるのも、みんな句樂のおかげなんだ。おれもあいつに唆のかされて、到頭家を出る氣になつたのだから、當り前なら句樂つてやつは、おれに取つちやあ好くねえやつさ。

焉馬。好くねえやつですとも――あんな無賴漢はありませんぜ。(急に眞面目になりて。)それてあなたが二代目句樂にならなくちやならねえと云ふのは、一體如何云ふ譯なんてすね。

新太郎。それと云ふのはね――(云ひ懸けて典凌を見て焉馬に囁く。)誰だい。

焉馬。さうだ。若旦那はご存知ねえてせう。おい、典凌さん、この方がさつき話した無賴漢の若旦那さ。

典凌。ああ、さうてすか。私は典凌て――

焉馬。やつぱり句樂と一所に暴れた連中なんてさあ。

新太郎。話はよく聽いてゐたよ。だが典凌さん、句樂は死ぬまてお前のことを云つてゐたぜ。

焉馬。だから私もさつきから云つてゐるんてさあ。句

樂と喧嘩したつて云ふのも、元の起りはと云へば高が色事なんだから、もつと藝人らしくあつさりやつて貰ひてえと云ふんてす。

典凌。しかし相手は狂人ぢやねえか。

焉馬。(怒って。) 狂人だつて好いぢやねえか。一體おれはさつきからお前の云ひ草が氣に食はねえんだ。何かと云へばあいつは狂人だつて云やがる。その狂人にやあ誰がしたんだ。

典凌。自分て勝手になつたのよ。

焉馬。笑談云ふねえ。お前が紫君に水を差して、句樂のことをいろいろ云つたんぢやねえか。ほんとにあの時分の句樂の悄氣やうつたらなかつたぜ。すつかり塞れてしまつて、まるて淸玄見てえな姿をして席へも往かずに寢てばつかりゐやがつたけ。

新太郎。二度目に氣が狂つた時にも、ずゐぶん典凌つてことは云つてゐたね。自分が小猿七之助て、妹のおとしが鳥追お松よ。その二人を典凌が仇討に來るつて云つちやあ騷いだものよ。

典凌。つまらねえことを云やがるぢやねえか。なあ、焉馬さん、私だつて——

焉馬。何を云つてやがるんてえ。第一お前は句樂と喧嘩をしてからつてものは、おれ達の所へもまるつきりやつて來なかつたぢやねえか。

典凌。そりやあお前おれはあれから旅に往つちまつたからよ。

焉馬。噓を吐きやがれ。そりやあれから餘つ程經つてからぢやねえか。

新太郎。二三日前小しんに會つたら、あいつもさう云つてたぜ。典凌位見そくなつたやつはねえつて——

典凌。(投ぐるやうに。) 何を云つてゐやがるんてえ。

焉馬。(荒々しく。) 何だと——もう一度云つて見ろ。

典凌。あんまり人を馬鹿にするなつてことよ。句樂が何てえ。高が狂人の落語家ぢやねえか。句樂々々つてご大相なもののやうに云つてゐやがらあ。何處の若旦那だか知らねえがあんなやつの二代目になりてえなんて、物好きな人もあつたものさ。

焉馬。何を吐かしやがるんてえ。(立ち上りて典凌の腕を掴む。)さあ、表へ出ろ。

(皆立ち上る。亭主と新太郎とは二人の中に留めに入る。)

新太郎。おい、止せよ。つまらねえぢやねえか。

焉馬。なあに、若旦那、留めずに置いて下さい(典凌に)さあ、出ろつて云つたら出ねえか。

典凌。畜生——

(典凌は焉馬に飛び懸り一横頬を打つ。二人は取り組合ひを始む。正面の出入口に往來の人々現はる。「喧嘩だ」「喧嘩だ」などと云ふ聲聽ゆ。凌典と焉馬は取り組合いたるまま土間へ轉げ落つ。そのうち新太郎も留める振をして典凌を毆る。)

亭主。(往來の人々に。)おい、みんなそこに立つちやいけねえ。(二人に。)そこで喧嘩をしちや困るぢやありませんか。

作さん。巡査でも來ると面倒臭えぜ。第一ここの家て迷惑すらあな。

新太郎。もう止せよ。

焉馬。(立ち上りて。)なあに、こん畜生。生意氣なことを云やがらあ。さあ、おれと一所に表へ出ろ。

典凌。(立ち上りて。)往かなくつてよ。

焉馬。さあ、來い。

(焉馬は典凌の袖を掴みて正面の出入口より出でゆく。新太郎も二人に續きて出でゆく。入口の見物人も見えずなる。作さんと鐵さんとは漸く腰を下ろす。)

作さん。一體如何したつて云ふんだい。

鐵さん。何でも句樂のことからぢやねえのかい(亭主に)ねえ、さうだらう。

亭主。ええ、さうらしござんすね。(思ひ出したるやうに。)句樂さんも家へよくやつて來ましたが——

作さん。句樂つて誰のことだね。

鐵さん。お前知らねえのか。俳諧亭句樂つて落語家がゐたぢやねえか。

男よ。去年だつたか氣が狂つて死んだが、好い落語家だつたぜ。

作さん。うん、あいつか。先に文枝つて云つてた男だな。

鐵さん。さうか。そんなことはおれは知らねえや。何だか今の喧嘩ですつかり酒が醒めちやつた。(亭主に。)おい、辰さん、もう一本熱くしてくんねえ。

作さん。如何しやがつたらう、あいつ等は——。

亭主。何しろ焉馬さんは喧嘩が好きですからね。

鐵さん。あの典淩つて講釋師はここへちよくちよくやつて來るのかい。

亭主。いゝえ、二三年前は句樂さんと一所によくやつて來ましたが、近頃はまるつきり來やしねえんです。今夜久しぶりで焉馬さんが連れて來たんですよ。

鐵さん。さうかい。あん斎生この間小柳で「小金井小次郎」を讀んでゐやがつたが、下手ハ奨て聽かれなかつたぜ。

作さん。さうだらうな。あの若旦那つて云ふのは一體何なんだね。

鐵さん。何だかな。焉馬なんかと友達のやうにしてゐるやうだね。よくここに來てゐるぜ。

(女中德利を持ち來る。)

作さん。(女中に。)お前知つてゐるだらう。あの若旦那つて云ふのは一體何だい。

女中。何でも橋場あたりの好い所の息子さんなんだつてさ。

鐵さん。それが勘當でもされたつて譯なんだね。

女中。さうなんでせう。女と一所にゐるんだつて云ふから——

作さん。へつ、洒落れてゐやがるな。その女つて云ふのはどんな女だい。

女中。そんなことを知るもんかね。

(この時一人の女暖簾の間より中を覗き、直ぐに見えずなる。鐵さんは一人これに心付き、立ち上りて急ぎ足に外へ出てゆく。)

作さん。おい、如何したんだい。(女中に。)誰か來たのかい。

女中。氣が付かなかつたよ。如何したんだらう。

作さん。慌てて飛び出して往きやがつたぢやねえか。

(鐵さんは笑ひながら入り來る。)

鐵さん。(一人で笑つて。)はははは、大笑れへだ。

作さん。如何したのよ。

鐵さん。おはつの阿魔だと思つて飛び出して往つたら違つてゐやがるのよ。

作さん(面白さうに笑つて。) はははは、ざまあ見やがれつて云ひたくなるね。間拔だなあ、お前も――

鐵さん。それてもそこの暖簾の間から覗いつて往つた顔が、如何してもおはつとしか思はれなかつたんだぜ。

作さん。そりやあ手前がおはつに惚れてゐやがるからよ。止せよ見つともねえ、煙草屋の娘の後を追つ懸けるなんて――まあ、一杯飲みねえ。ご苦勞様なこつた。

鐵さん。(笑ひながら前と同じやうに。) はははは、全く大笑れへだ。

(焉馬と新太郎入り來る。焉馬の着物の袖は半分ちぎれ、膝のあたりは泥だらけになりゐる。)

焉馬。(亭主に。) 辰さん、如何も濟みません。なにねあん畜生あんまり癪にさわることを云やがるから、引つ撃いてやつたのさ。

亭主。何處も怪我はしませんてしたかね。

焉馬。あんなやつと喧嘩して怪我なんぞして堪るものかな。

作さん。(冷かすやうに。) 師匠。大相威勢が好いぢやねえか。

焉馬。いや、如何も作さんも鐵さんも濟みません。飛んでもねえ野暮なことをやつちまつて――

作さん。面白かつたよ、芝居を見てゐるやうて――お前さんはまるて中野信近見てえだつたぜ。ねえ、鐵さん。

鐵さん。成程。中野か――こいつは好いや。

焉馬。おや、おや、開盛座はひどいね。(座敷へ上らうとして。) こいつはいけねえ。ちよつと雜巾を借してくんねえ。

新太郎。雜巾ぢやあ駄目だぜ。何しろ雪解の泥濘なんだもの――(座敷へ上る。)

亭主。(女中に。) そこの手桶に水があるだらう。

女中。ええ。

（女中は手桶を持ち來る。焉馬は足を洗ひて座敷へ上る。）

焉馬。さあ、飲み直しだ。ここを片附けて何か見つくろつて持つて來てくんねえな。

（女中は片附けて去る。）

鐵さん。焉馬さん。あれから如何したんだい。

焉馬。あれからかい。典褒のやつを滅茶々々に打ん殴つてしまつたのよ。到頭あん畜生逃げつちめへやがつたぢやねえか。（新太郎に。）ねえ、若旦那。好い氣味てしたね。

新太郎。あん畜生驚きやがつたらうな。留めてゐたやつまでぽかぽか殴り始めたんだから――

焉馬。だけど若旦那も喧嘩は上手になりましたね。

新太郎。つまらねえことばかり褒めちやあいけねえ。この間はお前博奕がうまくなつたつて褒めたぢやねえか。

焉馬。ああ、さう云やああの時の借がありましたね。

新太郎。まあ好いやな。

（女中膳を持ちて座敷に來る。）

鐵さん。（作さんに。）おい、もう往かうぢやねえか。

作さん。うん。面白れえ芝居は見ちまつたし――もう往かうか（立ち上りて二人に。）お先きに。

鐵さん。さやうなら。

焉馬／新太郎（同時に。）さやうなら

（作さんと鐵さんとは板場の所にて勘定をして出でゆく。）

鐵さんの聲。（出ると直ぐ。）ああ、雪がまだこんなに殘つてゐらあ。

（焉馬と新太郎とは二座酒を飲み始む。）

焉馬。如何です、若旦那。今夜はうんと飲まうぢやありませんか。何しろ今夜は句樂の弔ひ合戰をしてやつたやうなもんですからね。

新太郎。全くさ。しかしこんなこたああいつの軍書にも書いちやなかつたらうなあ。

焉馬。軍書か――あいつもをかしな男さね。何しろ本箱の蓋に軍書だなんて書かなくつても好ささうなもの

だが——さう云やあ、若旦那近頃句樂のことを思ひ出していけねえつて云つてゐましたね。

新太郎。ああ。

焉馬。一體そりやあどんなことを思ひ出すんてすね。

新太郎。あいつの云つてゐた言葉なんだよ。それが何と云ふことなしに、不意と胸に浮んて來やがるのさ。しかしまだそんな時分は好かつたが、昨夜(ゆうべ)なんかをかしいぢやねえか。まるて句樂がおれの耳の傍て話し懸けるやうな氣がしたのよ。おれは思はずぞつとしたね。

焉馬。へえ、どんなことを云つたんてすい。句樂のことだからろくなことは云はねえだらうな。酒を飲みてえとても云ひましたかい。

新太郎。うゝん、そんなこつちやねえや(しばらく考へる)まあね、句樂の云つた言葉のうちて、近頃よく思ひ出すやつを云つて見やうか。

焉馬。ええ、どんなことてすね。

新太郎。おれが思ひ出すのは、句樂が狂人になつてから云つた言葉ばかりだが、そのうちても一番よく思ひ出すやつが五つ六つあるねえ。

焉馬。狂人になつてからのことぢやあ、さつぱり分らねえ言葉なんてせうなあ。

新太郎。なあにさうてもねえさ。ひとつはかう云ふ言葉なんだ。それはまだ馬道の家に寐てゐる時分に尋ねた時に云つたんだが——「人間の生命(いのち)つてものは飴見てえなもんてすぜ。舐(しやぶ)つてゐるうちになくなつてしまひまさあ」つて、かう云やがつたのよ。

焉馬。へえ、をかしなことを云ひましたね。それから——

新太郎。これもやつぱりそれと同じ時さ。句樂のやついつも枕元に蠟燭を立ててゐやがつたらう。蝮の吉兵衛さんの話かなんか長々としてゐたが、不意とあの蠟燭の火を吹き消してかう云やがつたのさ。「ご覽なせえな。これが私の生きてゐるつて證據てすぜ」つてね。

焉馬。そいつは一體如何言ふお呪禁(まじない)なんてすね。

新太郎。お呪禁ぢやねえやな。しかしおれにも句樂が何故蠟燭を吹き消してそんなことを云つたか分らねえよ。

焉馬。何だな。あいつきつと蒟蒻問答から思ひ付きやがつたんだな。

新太郎。まさかさうぢやねえだらう。兎に角あいつもまだこれからいろんなことがしたかつたんだね、軍書を讀んだり兇を作つたりしてゐたところて見るとあいつのいつも云つてゐた金持と貧乏人の戰つてやつをほんとにやるつもりだつたのに違えねえんだ。

焉馬。さうですかね。(大分醉つて。) もうその話は止めませう。もつと面白れえ話をしやうぢやあありませんか。

新太郎。まあ、もう少し聽けよ。それからお前と一所だつたかな――句樂を病院に尋ねて往つたことがあつたらう。ほら、雪の降つた晩よ。歸りに小しんの家へ廻つて、夜晩くまで飲んだことがあつたぢやねえか。

焉馬。ええ、あの時は句樂がひどく惡い時てしたぜ。口から出まかせの新內を唸つてゐたぢやありませんか。あなたその文句を帖面に書き付けてゐましたぜ。覺えてゐねえかね。

新太郎。覺えてゐる筈だよ。(考へ出さうとして。) まあ、待てよ。今に思ひ出すから――それよりぬその時句樂の云つてゐた言葉て面白い文句があるんだよ(間。) あいつはあの時新內を止めて、急におれの方に向いたかと思ふと、ねえ、若旦那、あなたは昔一德齋つて手品師があつたのを知つてゐますかつて云ふぢやねえか。おれが知らねえつて云ふと、句樂のやつこいつは話せねえなつて云ふやうな顔付をしたが、暫くしてまたかう云ふのよ。「私は手品位面白れえものはねえと思ふ。あいつを見てゐりやあ世の中のことは何でも分る。生れるのも手品だ。惚れるのぬ手品だ。さうして死ぬのもやつぱり手品だ。」――とかう云つてあいつは悲しさうな顔をしてゐるのよ。

焉馬。(分らずに。) そいつは一體如何云ふ譯なんてす

ね。

新太郎。つまり世の中のことは、みんな嘘ばかりだつて云ふんだらうね。(間。)それから暫く默つてゐたかと思ふと、あいつは急に勢付いてから云ふのよ。今にご覽なさい。私が手品の種明しをしてやるからつて——さうしてあいつは例の鼻へ懸つた皺嗄聲で悲しさうに笑つたつけ。(しんみりとして。)ああ、何だかあの時の句樂の顔が今でも目に見えるやうだなあ。

焉馬。いけねえや。句樂の話をすると如何も氣が滅入つていけねえ。さあ、どんどんお乾しなせえな。

新太郎。よし來た。うんと飲まうぜ。(時計を見て。)しかしあんまり晩くなると、この家が迷惑だからな。

焉馬。なあにこんな家闘やしません。

(この時遠くの方にて新内の流しの三味線の音聴ゆ。次第に近付き來る。二人はそれを聴きて悲しげに默り込む。しきりに酒を飲む。)

新太郎。(直覺したるやうに。)何だか蝶丸らしいぢやねえか。

焉馬。だけど今頃こんな所を流してゐるのはをかしいね。

新太郎。なあに何處かお座敷か何かあつてこれから吉原へ往くんだらうよ。

(亭主外へ出て直ぐ入り來る。)

亭主。やつぱり蝶丸てすぜ。

新太郎。それぢやあちよつと呼んでくんねえ。蝶丸にもずゐぶん久しく會はねえなあ。

(新内の流しの三味線の音丁度この家の前に來る。亭主入口の所まで出てゆく。)

亭主。(呼ぶ。)おい、蝶丸さん、蝶丸さん。

(蝶丸と女房のおせん入り來る。蝶丸は盲目の新内語り。三十五六歳位。おせんは二十六七歳位。おせんは三味線をかかへゐる。)

蝶丸。へえ、今晩は——

焉馬。いよお、久しく會はねえな。

蝶丸。(誰とも分らずに。)え、どなたてすえ。(間。ちよつと考へて氣が付く。)ああ、師匠か。あなたお一人てすかい。

焉馬。若旦那と一所よ。一名遠山の金ちやんつて無頼

漢さ。あいつも近頃腕を上げたぜ。酒を飮む、女は誑す、博奕は打つ——好い無頼漢になつちめえやがつたよ。

新太郎。また始めやがつたぜ。ねえ、蝶丸さん。こいつも酒を飮まねえと好い男なんだが、酒を飮んだら仕様がねえんだからなあ。(蝶丸に。)腰ても懸けたら好いぢやねえか。

蝶丸。へえ、難有う。

(蝶丸は座敷の端に、おせんは土間の腰懸に腰を下ろす。)

蝶丸。酒ぢやあ死んだ句樂さんなんかずば抜けてゐましたね。(間。)句樂さんと云やあもう亡くなつてから一年になりますね。早えもんだな。私はついこの間のやうに思つてゐたんだが——

新太郎。さうさ。あの晩はお前の新内を聽きながら、小しんとおれとて泣いたつけなあ。

蝶丸。何をやりましたかね、あの晩は——さう、さう、玉屋新兵衛だつたかな。

新太郎。さうだよ。あの「比翼の初旅」の上に、紫君句樂と並べて書いてあるやうだつたら、あいつもどんなに嬉しかつたらうなんて、小しんと二人で話したつけが——

蝶丸。さうでしたな。何だかあの晩は私が貰ひ泣をしてしまひましたよ。

焉馬。おい、蝶丸さん。變なことを聽くやうだが、お前も目が見えねえて不自由だらうな。

蝶丸。なあに馴れつちまやあ何でもありませんや。今夜は小しんさんの所へ呼ばれてね——

新太郎。おや、今夜は小しんの家に往つてゐたのか。

蝶丸。あの人も變つてゐますね。一晩盲目同士で話をしたいつて云ふんでさあ。

新太郎。それてどんな話をしたのよ。

蝶丸。どんな話つて別段とりとめたことはねえんでさあ。

新太郎。何かやつたのかい。

蝶丸。ええ、「三勝半七」をやりましたよ。

焉馬。(つまらなさうに。)話なんぞしてゐちやあ面白くね

ゑや。なあ、蝶丸さん。さうだらう。(思ひ出したるやうに。)さうさう、ねえ、若旦那。あなた覺えてゐるつて云つてゐたね。句樂が病院にゐる時にやつてゐた新内の文句さ。

新太郎。ああ、大抵は覺えてゐるよ。しかし一寸お待ちよ。もう少し思ひ出す所があるから――

焉馬。蝶丸さん、お前知つてゐるかい。珍妙不思議な文句だぜ。

蝶丸。へえ、知りませんね。何てすかい。句樂さんが狂人になつてからのことなんてすね。

焉馬。さうよ。あいつも呑氣な男さ。病院ていろんなものを覺えやがつたんだぜ。清元、長唄、常盤津、新内、一中、河東――みんなやつちまひやがつたのよ。あいつのは世話がねえやね。新内をやらうと思へば直ぐ目の前にお前ならお前が現はれるのさ。さうしてそいつに敎はつてゐやがるんだから不思議ぢやあねえか。傍から見てゐると餘つ程不思議だぜ。一人で敎はつたり敎へたりしてゐやがるのさ。

蝶丸。(寂しげに笑ふ。)はははは、そいつはをかしうがしたらうな。(新太郎に)若旦那、その句樂さんのやつてゐた新内つて云ふのは、一體どんな文句なんてすね。

焉馬。そりやあかう云ふんてえ。おれが歌つて聽かせてやるから待ちねえ。(歌ふ。)

「傾城に誠なしとはわけ知らぬ、野暮の口から意氣過ぎの。粹の粹ほどはまりも強く、たゞ懷かしういとしさの、愚痴になるほど戀しいもの、たとへこの身は淡雪と――

新太郎。何てえ、そりやあ「明烏」ぢやねえか。

焉馬。如何てす。うまうがせう。(續けて歌ふ)

「ともに消ゆるも厭はぬが、この世の名殘に今一度逢ひたい見たいとしやくり上げ、狂氣のごとく心も亂れ、涙の雨に雪解けて、前後正體なかりけり。

新太郎。これてこの男は聲が好いだけが不思議だよ。

蝶丸。若旦那。まだすつかり思ひ出しませんかい。

新太郎。うん、好いかい。かう云ふんだ。(思ひ出しつつ文句を云ふ。)

へ道樂を人のほむるや四つ手駕籠、片棒かつぐ肩車、乘せて禿の獺のたね、胸のつかへに惱むより、いつそ闇夜の裏田圃、かへるかへるの三ひよこひよこ逢ふが別れと思ふてゐれど、せかれて無理な茶椀酒、踏むやら蹴るやらたたくやら、一所に死ぬる惡縁と、思へはおなじ歎きの淵、蝮と呼ばれし吉兵衛も、おろおろ涙に暮れゐたる。

から云ふんだよ。しかし少しは違つてゐるかも知れねえぜ。

蝶丸。（笑ふ。）はははは、こいつは好いや。「蝮と呼ばれし吉兵衛も」か。成程、句樂さんの作りさうな新内さね。（おせんに。）おい、ちよつと彈いて見な。

おせん。（三味線を彈きて。）これで好いかい。

蝶丸。うん。（新太郎に。）何とか云ひましたね、一番始めは――

新太郎。「道樂を人のほむるや四つ手駕籠」だよ。

蝶丸。ああ、さうか。

（蝶丸はその文句を半分程歌ふ。焉馬も一所になりて歌ふ。新太郎は時々蝶丸に文句を敎へ。悲しげなる顏付にて聽きゐる。女中は居眠りを始む。）

蝶丸。（歌を止めて。）こりやあ新内としたつて面白うがすぜ。だけど少し辻褄が合はねえな。

新太郎。そりやあ仕方がねえやな。狂人の作つた文句なんだもの――

（この時雪の解けて屋根より落つる音烈しく聽ゆ。）

蝶丸。おや、あの音は何てすね。

亭主。屋根から雪が落ちるんですよ。

蝶丸。ああ、少し溫かくなつて來たからね。しかし昨夜の雪はひどうがしたなあ。

新太郎。お前はあんな晩でも吉原へ往くのかい。

蝶丸。いいえ。あんな晩は家で一杯飮んで寢ちまふんてさあ。

焉馬。昨日は小しんのやつ雪見に往つたさうですぜ。

蝶丸。ええ、そんな話てしたよ。

新太郎。盲目の雪見は面白れえな。

蝶丸。車に乘つて方々歩き廻つたんださうてすがね――

新太郎。（念にほろりとして。）可哀想になあ。車の上ていろんなことを思ひ出してゐたらうぜ。こんな雪の降つた日にあんなことをしたこともあつたつけと――

蝶丸。（身につまされて）さうさねえ。私の盲目になつたのは子供の時分だから、さして思ひ出すこともないけれども、小しんさんのはついこの間だから、いろいろ思ひ出すこともありませうよ。

（時計は一時を打つ。）

新太郎。おや、もう一時だぜ。（焉馬に。）おい、もう往かうぢやねえか。

焉馬。まだ早えやな。もう少し飲んで往かうよ。

蝶丸。それぢや若旦那も焉馬さんも、私はお先きにご免蒙りますよ。（笑ひながら。）引け過ぎが私どもの稼ぎ時なんですからね。

おせん。（立ち上る。）さやうなら。（焉馬に。）焉馬さん。また吉原て會ふことになるんぢやないんですか。

焉馬。笑談云つちやいけねえ。

蝶丸。（立ち上りて。）それぢやご免下さい。

新太郎。
焉馬。（同時に。）さやうなら。

（蝶丸とおせんは入口より出でゆく。亭主は女を揺り起す。）

亭主。（女中に。）おい、起きてもう戸を閉めなくちやいけねえぜ。

（女中は澁々目を覺ます。）

焉馬。もう戸を閉めるのか。まだ早えぢやねえか。（徳利を振つて見て。）おい、酒がねえぜ。もう一本熱燗にしてくんねえ。

新太郎。もう止して往かうぢやねえか。

焉馬。なあにまだ早えつてことさ。今夜私は馬鹿に氣持が好いんだから、もう少し飲ましておくんなさいな。（女中に。）おい、もう一本熱いやつを持つて來てくんねえ。

（亭主は人が好ささうに笑ひて、女中に目くばせす。）

新太郎。仕方がねえな。お前も好いけれど醉つ拂ふと直ぐこれだから厭になるよ。

焉馬。（大分醉ひゐる。）何云つてゐやがるんでえ。さあ、

お前さんもお飲みよ。（杯を差す。）私は今夜一晩飲み明かすんだから——いけねえや、あの蝶丸のやつ、折角好い氣持になつてゐるところを、すつかり陰氣にしてしまひやがつた。（新太郎を見て。）何てえ。濟ましてゐるねえ。もつと飲めやい。さうしてもつと酔へやい。（德利を取りて注がむとす。）

新太郎。酒はねえよ。空だよ。

焉馬。（德利を覗きて。）空ぢやあ仕方がねえ。（女中に。）おい、早く酒を持つて來ねえな。

（女中德利を持ち來る。焉馬は直ちに新太郎の杯に注ぐ。）

新太郎。（笑つて。）はははは、やつぱり酒の顔を見ちやあ、飲まずにゐられねえなあ。

焉馬。當り前さ。酒を飲まねえやつなんて、みんな馬鹿てさあ。さあ、かう滅入つちや酔はなくつていけねえ。ねえ、私が歌はあ。ようござんすかい。（口三味線に歌ふ。）

へ同じことと二度書かせたわいのほととぎす、ああ辛氣、烏がそつに鳴く、とやに鼠鳴きしてうけてたへ。

ね、如何てす。（調子づきて。）おい、默つてゐずに何かやれやい。

新太郎。おりやあ駄目だつてことよ。

焉馬。だからお前は嫌ひさ。いつても歌はねえんだもの——そいぢやあ私がもうひとつやらあ。如何だい、「辻君」は——（歌ふ。）

へ辻君のたへぬ流れの思ひ川、戀にはほそる柳かげ、しばしとめたき三日月の、櫛のむねさへ小夜風に、さらりと解けし洗ひ髪、むすんて清き水の音。

何だか一人て歌つてゐるんぢやあ張り合ひがねえや。

新太郎。おい、もう往かうぜ。何處かで飲み直さうよ。

焉馬。飲み直し——好いね、こいつあ。さあ、出懸けやう。（立ち上らむとして倒れそのまま寢てしまいさうにす。）

新太郎。おい、寐ちやつちやいけねえぜ。

焉馬。（寢たるまま。）寢やあしねえよ。おれはまだこれからうんと飲むんだ。何しろ今夜は句樂の敵討そし

てやつたんぢやねえか。畜生——典凌のやつ——さまあ見やがれ——

（この時入口よりおぎん入り來る。新太郎の情婦十八九歳位の小柄の女。）

新太郎。（驚きておぎんに。）如何したんでえ、今時分——

おぎん。如何したもかうしたもないわ。兵造さんが酔つ拂つて來て大變なの。（焉馬の方を覗き込む。）だあれ——焉馬さん——

新太郎。うん。

焉馬。（猶寐たるまま呟く。）へつ、馬鹿にしてゐやがらあおれを誰だと思つてゐやがるんでえ——日本一の落語家だぞ——ははは——しかし句樂の方がおれよりはうまかつたな——だけどあん畜生はもうゐねえ——あ[illegible]生はもうゐねえ——

（呟きながら焉馬は寐入る。）

おぎん。ほんとに今夜はどの位捜したか知れやしないわ。

新太郎。（冷かすやうに。）そりやあ如何もご苦勞樣。

おぎん。ほんとに笑談ぢやないわ。さつき兵造さんが酔つ拂つてやつて來て、如何してもあなたを呼んで來いつて云ふんですよ。

新太郎。さうか。そんなにひどく酔つてゐたかい。

おぎん。えゝ、まるで正體がないんですもの——そをつと寢かして置いて、あなたを捜しに出て來たんだけれど、如何しても見付からないて、ずゐぶん困つたわ。

新太郎。しかしよくここが分つたな。

おぎん。おしんさんの家で聽いたらここを敎へて呉れたの。それから直ぐここへ來てさつき一度覗いて見たんですけれど、見えなかつたわ。

新太郎。さうか。おれはさつきからゐたんだぜ。

おぎん。焉馬さんは寢ちやつたやうね。

新太郎。うん、困つたな。置いて往く譯にはいかないし——

亭主。なあに好うがすよ。如何にかしますから——

新太郎。さうかい。それぢやお辰さんに賴むかな（間。）

おい、勘定をしてくんねえな。

亭主。へえ、また一所に頂きませう。

新太郎。それぢやあさうして貰はうか。(焉馬を揺り起して見る。)おい、起きろよ、起きろよ。(舌打して。)こいつはなかなか起きさうもねえや。(立ち上りて)それぢやあ焉馬はよろしく頼むぜ。

(新太郎とおきんは入口より出でゆく。亭主は暖簾をはづしに外へ出づ。女中も七輪の下の火を消しに往來へ出づ。二三度續けて屋根より雪の落つる音聽ゆ。焉馬は急に目を覺して起き上る。)

焉馬(叫ぶ。)さあ、酒だ、酒だ。今夜は一晩飲み明かしだ。何しろ句樂のために弔ひ合戰をやつてやつたんだからな。ああ――何だか今夜は嬉しいやうな悲しいやうな――譯の分らねえ氣持がして仕方がねえ――

(泣くが如くに笑ふ。寂寞の中に焉馬は唯一人崩るるが如く座りる。――幕。)

第二幕

淺草馬道の煙草屋の二階。六疊と四疊半の二間。上手は六疊の間とは襖にて隔つ。正面に窓あり。障子を閉め切る。下手の四疊半の間とは襖にて隔つ。下手に窓あり。同じく障子を閉め切る。階子段は下手にあり。すべて階子段より出入す。壁に褞袍と鳥打帽子を懸く。その下に古ぼけたる茶棚、七輪、土鍋などあり。正面の窓の傍に粗末なる机、その上には古雜誌四五冊載せあるのみ。中央にちやぶ臺その上には杯皿などを取り散らす。長火鉢に德利を突き込みたる藥鑵を懸く。

第一幕の翌日の午後一時頃。曇りたる日なれども、折々障子に薄日の當ることとあり。

(ちやぶ臺の上手に新太郎座りゐる。新太郎に向ひ合ひて勝兵造座りゐる。本名は樫村虔彦。元は新太郎と同じ大學生。今は狂言作者。二十六七歳位の男。二人は酒を飲みゐる。)

新太郎。(何處か悲しげなれども面白さうに笑ひて。)無頼漢かー成程ね――そりやあ無論無頼漢さ。一體誰がそんなことを云つてゐたんだい。

兵造。誰つて――大抵のやつはさう云つてらあな。

新太郎。さうかね。(藥鉢の調子。)何とても勝手に云やがれだ。へん、おれが如何云ふことを考へてゐるか知らねえんだらう。(間。)今に見ろ――おれの云ひ

てえことはこれつきりだ。

兵造。(笑って。)はははは、今に見ろか、一體何をするんだい。

新太郎。何をするかそんなこたあ分らねえやな。しかし何かするよ。(間。)それよりゃ君は如何して作者部屋へ入るやうな氣になつたんだい。大阪から手紙を貰つた時には、何だかおれは悲しいやうな氣がして堪らなかつたぜ。

兵造。さうだよ。如何してと聽かれると困るが――まあ、かい摘んで話せばかう云ふ譯さ。(間。)あれからおれは直ぐ國へ歸つてしまつたぎり、ずうと東京へ出て來なかつたのだが、その間におれはどんなことをしたと思ふ。そりやあずゐぶんいろんなことをしたぜ。國へ歸つてから一月も經たないうちに、また家を飛び出して大阪へ往つたのさ。さうして堂島へ往つて相場をやり始めたのを手始めに、いろんなことて自分の運試しをやつて見たのさ。

新太郎。(笑って。)はははは、運試しか――句樂がこんなことを云つてゐたぜ。運なんて石礫見てえなものだつて――何故だつて聽いたら、往來に澤山ころがつてゐるさあつて云ふのよ。

兵造。まるで謎々だな。(間。)まあ、話さない前からてゝも分つてゐるだらうが、運試し運試してやつたことがみんな駄目さ。それてしまひにもうすつかり御沈落のところにちよつと知つてゐる人があつたものだから、とどのつまりが狂言作者よ。まだろくすつぽ木も打てやしねえや。

新太郎。しかしその方が洒落れてゐるぢやねえか。何とか云つたな――勝兵造か。樫村虎彦よりは餘つ程好いぜ。

兵造。さうだな。一生作者部屋て暮らすかな。

新太郎。さうしろよ。好いぜ。洒落れてるぜ。何だか鑄懸松の白のやうだが、どんなことをして暮らしてもみんな一生よ。おれは焉馬だの何かのしてゐることを見てゐると、つくづくあいつ等が羨ましくなるね。おれもあいつ等のやうな無頼漢て一生を送りて

えと思ふが――

兵造。もう立派な無頼漢ぢやねえか。

新太郎。（頭をかく。）こいつは一言もねえが――しかしまあおれの云ふことを聴いてくれ。おれは無頼漢になるのも好いが、きつと生きてゐられないやうな時が來ると思ふと、それが怖ろしくつて仕方がないのだ。

兵造。ふん、そんな時が來るかい。

新太郎。おれには如何もさう思はれて仕方がねえんだがね。

兵造。そんなこたあねえだらう。

新太郎。さうかな。（思ひ出したるやうに。）如何しやがつたらう、おぎんのやつは――ずゐぶん長えお詣りだなあ。（徳利を取り出して。）あ、こいつはいけねえ、お燗が馬鹿につき過ぎちまつたぜ（兵造の杯につぐ。）

兵造。（酒を飲んで。）しかしおぎんも變つたな。すつかり世帶染みつちまつたぢやねえか。

新太郎。うん、あいつにも苦勞をさせたからなあ。考へて見りやあ可哀さうな女よ。

兵造。（しみじみと。）おれもこの一年ばかりの間にいろんなことを知つたが、全く人間つてものは、誰でも可哀さうでねえものは、一人もゐねえやうな氣がするなあ。

（下にて娘が彈く義太夫の三味線の音聽え始む。やがて「蘇樹染物語」の土橋の段を語り始む。）

へ跡にはひとり歌形姫、怖さひやいさわなわなと、心も空に降る雨は、晴れぬ思ひの稲村に、始終聞くほどせきのぼす、心の角を押しかくし、知らず顔して走り寄り――

兵造。誰だい。

新太郎。この娘だよ。君は知つてゐるだらう。始めてここに引つ越して來た晩――ほら、君の家の近所に火事のあつた晩さ――あの時君は會つた筈だぜ。

兵造。ああ、あの娘か。あの娘はあの時分淸元を習つてゐたね。ほら、紫君に似てゐるお師匠さんの所へ往つてゐたぢやないか。

新太郎。さうさう、延美津の所へ往つてゐたつけな。

しかし近頃は義太夫ばつかり稽古させてゐるよ。いづれ寄席にでも出す氣なんだらう。

兵造。「累」だなんて變なものをやつてゐるんだな。

（二人は默りて下の義太夫を聽く。）

へえぇ腹の立つ腹の立つと、引き廻し引き廻し、引き廻されて歌形姫、多くの人にかしづかれ、敬まはれゐるおん身にも、鄙の旅路をただひとり、さまよひ給ふ憂きなかに、思はぬ難をあはれとも、云ふべき人も遠近の、袂よりほか泣くばかり――

新太郎。おれはこの「累」つてやつが何だか好きだぜこの間何をやらうと云ふから「累」をやれつて云つたのさ。

兵造。何だ。君の入智恵か。しかしおれはこの「累」を聽いてゐると、妙に氣が滅入つていけねえよ。（間。）なにね、そいつには少し譯のあることなんだよ。君にはまだ話さなかつたけれど、おりやあ今娘義太夫と一所になつてゐるのだよ。

新太郎。さうか。

兵造。おれはその女が厭て仕様がねえんだけれど、如何も義理の柵みで仕方なしに一所にゐるのよ。おれが大阪に往つて堂島ですつかりしくじつてしまつてから、ぶらぶらしてゐるのもつまらねえから、或る師匠の所へ義太夫を習ひに往つたんだ。さうするとそこに内弟子のやうにしてゐる娘がゐたと思ひたまへ。

新太郎。おや、おや、馴れ初め話か。

兵造。さうぢやあねえよ。さうするとね、或る日師匠の留守へ往くと、その娘がたつた一人でゐるのよ。顏はあんまり好かあねえし、別段に何の氣もなかつたんだが、いろいろ話して見るとやつぱり東京のものでしかも家が瓦町にあつたつて云ふんだらう。いろいろ代地や何かの變つた話をして聽かせると、何だか悲しくなつたと見えて、目に涙をためて聽いてゐるのよ。何だかいぢらしいやうな氣がして、慰めてやつたりなんかしてゐるうちに――

新太郎。かう佐和利澤山ぢやあやり切れねえな。

兵造。まあ到頭一所になるやうになつてしまつたんだがね。その時その娘が「累」を習つてゐやがつたのさ。それだからおれは「累」を聽くと、女の一念つて云ふやうなことを考へて、あんまり好い氣持はしねえのさ。別れやうと思つても別れられず、女にはまるで男の心が分らねえんだから情ねえよ。おれはあの與右衞門の心持がやつと近頃分つたね。

（下の義太夫はなほ續く。）

へとは云ふものの思ひ廻せば二人が因果、わが手に懸けし高尾どのの執着ゆゑ、面體ばかりかそれ足までも、生れもつかぬ不具となり、たとへどのやうに見苦しい顏形になりやつたとて、三婦どの志と云ひ、故鄕を離れはるばると、この下總の草の中、仕つけもせぬ百姓業、不自由な世帶も苦にせず、誠盡してたもる心底、心の器量は昔の百倍、これ何の愛想を盡かさうぞいの、とつくり氣を沈めて聽いてたも、誠絹川が女房の累、本心五體にあるならば、この道理を聽き分けて、姫君の御難義と云ふ、この與右衞門が一しよう懸命の場所、恨を晴らしてともどもに、心便になつてくれと身に迫つたる切なさを、たもちかねたる男泣――

（二人は思ひ思ひのことを考へつつ義太夫を聽きゐる。長き間。おぎん階子段を上り來る。）

おぎん。ずゐぶん長かつたでせう。あなた――（新太郎を呼ぶ。）

（新太郎はおぎんと四疊半の方に話す。直ぐ元のところへ來て座る。おぎんも火鉢の傍に座る。）

新太郎。（獨語のやうに。）駄目か――駄目ぢやあ仕方がねえ。（間。）焉馬の家へ寄つて見たかい。

おぎん。ええ、往つて見るとまだ戶が閉まつたまんまなの。何ぼなんでもお午過ぎだのに如何したのかと思つて、戶の隙間から覗いて見ると、焉馬さんが座敷の眞ん中に大の字形に寢てゐるぢやありませんか。

新太郎。如何しやがつたんだらう。

おぎん。私もびつくりしてしまつて、如何したら好い

かと思つてゐるところへ、丁度おかみさんがやつて來て、如何も大變な所をお目に懸けて濟みませんつて云ふの。それからいろいろ話を聽いて見ると、昨夜あれから大變たつたんてすつてさ。

新太郎。おれも多分さうだらうと思つたよ。

おぎん。歸るといきなり手鍵を出せつて云ふんてすつて――何か間違ひてもあつたのかと思つたのてすけれど仕方なしに出してやると、それを持つたまま外へ飛び出して往つたのださうてすよ。さうするとしばらくすると、今度は大變な勢て飛び込んて來て、みんな敲き殺せつて騷ぎなんてすつて――不動樣が何だとか云つたもんてすから、みんな句樂が乘り移つたと思つて、氣味惡くつて仕方がなかつたさうてすよ。

新太郎。さう云やあの手鍵は句樂のかたみなんだぜ。

おぎん。ああ、さうてすつてね。まだねうひとつ句樂さんのかたみの短刀があるんてすつて――(間。)手鍵は何處かに預けちまつたが、短刀の方はちよつと預ける所がないから、若旦那の所へ預かつて置いてくれつて、おかみが私に渡しましたよ。

(おぎん立ち上りて風呂敷に包みたる短刀を持ち來る。)

新太郎。さうか。戸棚の中にしまつて置くが好いや。

おぎん。何だか氣味が惡いわね。

(おぎんは短刀を戸棚にしまひ、また元のところに座る。)

兵造。馬鹿はまだ寢てゐるのてすかい。

おぎん。いいえ。直ぐ目を覺まして極まりが惡さうな顏をしてゐるんてす。自分ぢやまるて知らなかつたんてすつて――さうしておかみさんに、濟まねえ濟まねえつてあやまつてゐるの。私にもね、どうぞ若旦那によろしく云つておくんなさいつて云つてひどく悄氣てゐましたよ。

兵造。(笑つて。)ははは、馬鹿のやつ相變らずだなあ。

(下の義太夫の三味線止む。
おぎんは散らかりたるものを方付く。
新太郎は急に机の方へ摺り寄つて、抽斗(ひきだし)の中より一冊の汚れたる帳面を取り出す。)

兵造。何だい、それは――

新太郎。うん、これは句樂の日記だよ、

兵造。あいつは日記なんぞつけてゐたのかな。狂人になつてからのもあるのかい

新太郎。うん。狂人になつてからのはなかなか面白いぜ。

兵造。ちよつと見せないか。

新太郎。これは誰にも見せて呉れるなつて云つてゐたんだが――まあ、待てよ。關はない所だけ讀んで聽かせらあ。始めの分はそれてもまだ分るが、しまひの方になると分らねえことばかりだぜ。しかしその方が句樂らしくつて面白いよ。（日記を開きて。）ええと、こいつは何時かな――一昨年の夏だ。八月の四日――（日記の文句を讀む。）「焉公がやつて來る。寄席の賣り物が東京に四十八軒ある由。買ひたい寄席は一軒もなし。焉公おれをほめて氣の利いたやつだと云ふ。何故だと聞けば席へ出ぬからと云ふ。うれしくなりて酒を買ふ。」なあ、おい、こんな所を讀むと何だかあいつに會つてゐるやうな氣がするぢやあねえか。

兵造。さうだな。それから――

新太郎。（二三枚開けて。）これは八月の二十一日のやつだ。（讀む。）「ちきり伊勢屋に借した金のあるのを思ひ出す。請人は白井左近だつた。今日は一日その金のことばかり考へる。二三日前傳法院横町で買つて來た三世相の本をしらべて見たが、如何しても證文のありかが分らない。蝮の吉兵衛さんが知つてゐるかも知れない。」またここにも蝮の吉兵衛が出てゐるぜ。ええと――九月一日の所を讀んで見よう。何だか細かい字で一杯書いてあるぜ。（また二三枚開けて讀む。）「不意に夜中におれを起すものがある。びつくりして目を覺ますと紫君がゐる。おい お前は死んだつて云ふぢやねえかつて云ふと、返事もしずに泣いてゐる。何だか悲しくなつて泣く。しばらくするとおれは紫君と一所に眞つ暗な道を歩いてゐる。雨が降つてゐて二人ともびしよ濡れ。向ふから傘をさした人が來

るが誰だか分らない。見るとその傘には村井長庵雨夜傘と勘亭流で書いてある。何時までたつても夜が明けない。ふられてかへる裏田圃。あばよだ。」（笑ふ。）こいつは面白れえや。

兵造。何だか夢見てえだな。そこいら邊はもうそろそろ怪しくなつて來た時分なんだね。狂人になつてからはどんなことを書いてゐるんだい。

新太郎。さうだな。（二三十枚飛ばして開く。）ここは十二月の七日だが——（默つて讀む。）これは病院にゐる時のらしいや。（字が分らずに考へながら讀む。）「今日は深川の不動樣の境内にて無頼漢の寄り合ある由焉馬より葉書來る。拙者も出席すると、小しんも、焉馬も、典凌も、潮枝も、手品の桂一も、獨樂の蝶齋も、みんなゐる。おれを議長にすると云つて、みんなで石燈籠の上に乘つける。ふいと傍を見ると石に吉原と彫つてある。紫君のことを思ひ出して何だかうれしい。これからみんなで運座を始める。道行や句樂紫君の春の雨と云ふ句を桂一がよむ。拙者大に頂戴する。典凌が怒り出したのでみんなで毆つてしまふ。馬鹿なやつ紫君に惚れる櫻かなつて句をおれがよむ。これは自分のことにあらず、典凌のことなり。敵討が始まつて、おれは一時に五十本の槍をつかふ。好い氣持だ。」何だか譯が分らねえや。もう止さう。讀みくたびれつちまつたから——

（おぎんはこの間にちやぶ臺を片付け、杯などを洗ひ置く。おはつ階子段を上り來る。煙草屋の娘。十六七歳位。）

おはつ。おぎんさん、ちよつと——

おぎん。え、誰か來たの。

おはつ。いいえ。

（おぎんは階子段の所へ行く。おはつはおぎんに何ごとか囁く。）

新太郎。（心配さうに。）何だい。

おぎん。いいえ、何でもないの。（おはつに。）ええ、それてはようござんす。如何もお氣の毒さま。

（おはつは階子段を下りてゆく。）

新太郎。如何したんだい。

おぎん。（兵造を憚るやうに。）あのね。酒屋で寄越して奥

れないんですつて――

新太郎。仕様がねえな。（徳利を振つて見て。）もうありやしねえ。

おぎん。（戸棚より貧乏徳利を出す。）まだここに少しは殘つてゐるわ。今日はこれで我慢なさいよ。

（おぎんは酒の燗をつけつつ、火鉢に寄りて何ごとか考へゐる。窓の下にて「若旦那、新太郎少將、遠山の金ちやん、如何したい、家ですかい」と續けさまに叫ぶ聲聽ゆ。

新太郎は障子を開けて下を見る。向ふ側の屋根の上に物干など見ゆ。）

新太郎。やあ、珍らしいぢやねえか。上らねえか。

兵造。誰だい。（立ち上つて下を見る。）やあ、小しんか。

小しんの聲。（下より。）今日はちよつとしかお邪魔が出來ねえんです。實は急に考へ付いたことがあつてね。

新太郎。まあ、話は上つてからにしろよ。

（やや長き間。小しんは車夫に背負はれて階子段を上り來る。落語家。盲目にして聾。三十一二歳。火鉢の傍に座る。車夫は直ぐ下りてゆく。）

新太郎。何だい、その急に考へ付いたことつて云ふのは――

小しん。なにね、今日はひつと句樂忌つてやつをやらうと思つて、方々無頼漢を狩り集めて歩いてゐるんでさあ。それに私の家ぢやあ面白くねえから、焉馬の家でやらうつて趣向なんですがね。

新太郎。焉馬の家は大變だぜ。

小しん。そんなことはとうに承知さ。如何です。若旦那は來て呉れますかい。

新太郎。往くとも。それにもう一人無頼漢を連れて往かあ。（兵造に。）ね、好いだらう。

兵造。（小しんに。）小しんさん。しばらくだね。

小しん。（よく分らず。）どなたでしたかな。

兵造。樫村だよ。

新太郎。今は樫村つて云ふんぢやねえんだぜ。勝兵造つて狂言作者さ。

小しん。久しくお目に懸りませんな。へえ、狂言作者に――變れば變るものですなあ。（間。）どうぞ來て下さいな。あなたもまんざら句樂と知らねえ仲ぢや

あねさんだから――(新太郎に。)それにね、若旦那。ここの家のおはつさんに來て貰ひてえんですが如何でせう。

新太郎。如何しようつてえんだい。いやに色つぽい句樂忌だなあ。

小しん。實は私は義太夫を語らうつてえんでさあ。「紫天神水差問答」の八つ目句樂狂亂の段と云ふやつなんです。小しん新作だから凄うがせう。

新太郎。(笑ふ。)はははは、こいつは面白れえや。(おぎんに。)おい、おはつさんにな、ちよつと來て下さいつて――

(おぎんは階子段を下りてゆく。直ぐおはつと一所に上り來る。)

おはつ。なあに。何か用――

新太郎。あなたに是非頼みてえことがあるんだが聽いて呉れますか。

おはつ。なに、笑談ぢやないの。

小しん。如何して笑談なんぞぢやありやしません。今夜ちよつとあなたの三味線を拜借したいんだが如何でせう。

おはつ。ええ、好いわ。何するの。

小しん。さう、安承合ぢやあ心配だな。まあ、好うがす。それぢやあお願ひ申しますぜ。

新太郎。(おはつに。)まあ、こんな所に立つてゐずにこつちへお出でなさいよ。

おはつ。(ちやぶ臺の傍に座る。)一體何なの。今夜は――

新太郎。何でもないんだよ。私と一所に來て呉れりやあ好いのさ。

おはつ。いやあよ。惡戲(いたづら)をしちやあ――

新太郎。大丈夫だよ。

おはつ。ねえ、おぎんさん。この間なんかずゐぶんひどいわね。焉馬さんと二人て方々引つ張り廻した揚句、龜井戸の太皷橋の傍でまいてしまつたりなんかして――

新太郎。ありやあ焉馬が惡いんだよ。

おはつ。嘘よ。あなたが先に見えなくなつちまつたんだわ。

新太郎。おや、いやに焉馬の肩を持つね。焉馬もおは

つさんのことをほめてゐたぜ。あんな可哀らしい娘はないつて――おはつさんもまんざらぢやあねえんだらう。

おはつ。厭だわ。あんな醉つ拂ひ――

小しん。おや、おや――（新太郎に。）それぢやあ私は失禮しますよ。これから焉馬の所へ往かなくちやあならねんだから――（おぎんに。）おぎんさん、濟みませんがちよつと車夫を呼んで下さいな。

新太郎。好いよ。おれが負つて往つてやらあ。（立つて小しんの傍に來る。）さあ、好いよ。（小しんを背負つて。）しつかりつかまつてゐなくつちやいけねえぜ。

小しん。如何も濟みませんな。（皆に。）それぢやあ皆さん――さやうなら。

（皆「左様なら」と云ふ。新太郎は小しんを背負ひて階子段を下りてゆく。おはつとおぎんは續きて階子段を下りてゆく。

やや長き間。

下にてまた「左様なら」と云ふ聲聞ゆ。兵造も窓より首を出して「左様なら」と云ふ。

新太郎とおぎんは階子段を上り來る。）

兵造。おれは兎に角ちよつと家へ往つて來らあ。

新太郎。家つて何處だい。

兵造。まあもう少し聽かずに置いてくれないか。

新太郎。うまくやつてゐやがるな。今夜は焉馬の所へ往くかい。

兵造。うん、往つても好い。しかしおれは少し晩くなるぜ。

新太郎。晩くつても好いから往つて見ろよ。家はやつぱり前の所だよ。

兵造。さうか。（帽子を取りて立ち上る。）それぢやあさやうなら。

新太郎。さやうなら。

（兵造は階子段を下りてゆく。おぎんは見送りに立つ。）

新太郎は雜誌を枕にして横になる。悲しげに目を閉づ。

おぎんは階子段を上り來て、新太郎の姿を見、胸ふさがる心持。

往來より樂隊の音に續いて、化粧水の廣告云ひの聲聽え來る。次第々々に遠ざかりゆく。）

新太郎。（かすかに目を開きて。）おぎん――

おぎん。ええ。

新太郎。（ものうげに。）おりやもう何をするのも厭になつてしまつたぜ。何だか死にてえや。

（おぎんは返事に困りて默りゐる。）

新太郎。（悲しげに。）なあ、おぎん――

おぎん。（心細さうに。）なに。

新太郎。お前にも苦勞させたなあ。ここに來てからと云ふものは、おちおち寢させたこともねえ位だつたな。あれからもう一年になるが、おれは如何も一生うだつが上りさうもねえよ。こんな汚ねえ二階に何時まで燻つてゐなくちやあならねえこつたか――

おぎん。二人てゐりやあどんな所ても好いつて云ふので、この二階を借りたのぢやありませんか。（情（なさけ）なさうに首を振つて。）もうそんなことは云はないで下さい。ね、もうこれからはお酒もあんまり飲まないて、えらくなるやうに勉强して下さいよ。

新太郎。（絶望の調子にて。）もう駄・だよ。もういくら藻掻いたつて如何したつて追つ着きやあしねえ。一生かうやつて無頼漢て押し通すか、それでなけりやあ死んぢまふか、このふたつのなかのどつちか一つだ。樫村のやうに狂言作者にもなれず、小しんや焉馬のやうに落語家にもなれず、かうやつてぶらぶらしてゐるだけに、生きてゐるのが苦しいよ。

おぎん。（涙ぐみて。）もうほんとにそんなことは云はないて下さいな。何だか私があなたをこんなにしてしまつたやうで――（歔欷をしながら。）私だつてどんなに辛（つら）いか知れやしないけれど、みんなあなたの爲めだと思つて辛抱してゐるのだわ。あなたも私のことを思つて呉れるのなら、どうぞもう少し――（泣く。）

新太郎。（目を閉ぢて向ふを向く。）もうこうなつちやあ仕方がねえやな。

（下にてはおはつはまた三味線を彈く。「傾城戀飛脚」の新口村の段を語る。）

へ落人（おちうど）のためにや今は冬枯れて、薄尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や先、人目を包む頬かぶり、隱せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衞が、いた

わる身さへ雪風に、凝る手先懐に、温められつ温めつ、石原道を足曳の大和はここぞ故郷の、新口村に着きにける。

(おぎんは疊の上に俯伏したるまゝ泣きゐる。新太郎も横になりたるまま身を顫はせて泣きゐる。義太夫はなほ續く。)

おぎん。(顔を上げて。)ねえ、あなた——

(新太郎は默りゐる。)

おぎん。(悲しげに。)かうやつてゐて二人は今に如何なるんでせうねえ。

新太郎。(向ふを向きたるまま。)如何なるか分るもんか。いづれしまひには死んぢまふのよ。(獨語のやうに。)この二階は句樂が世話をして呉れたのだが——あいつもあれから直き死んぢまひやがつたな。あいつが生きてゐて呉れりやおれ達だつて、こんなに情ねえことなんぞ考へやしなかつたんだらうがなあ。

おぎん。(しみじみと。)ほんとにあの時分はさうも思はなかつたけれど、今になつて見るとあの人でも生きてゐたらと思ふわねえ。

新太郎。(おぎんの方を向きて棄鉢に。)仕方がねえや。くよくよしてゐたつて如何なるものか。

おぎん。でも——(また泣く。)

新太郎。何てえ。泣くねえ。泣くねえ。泣いたつて仕方がねえ。いよいよいけなくなつたら二人で心中するばかりよ。

おぎん。(眞面目になりて。)ほんとに心中して呉れて——今直ぐでも——

新太郎。今か——(考へて。)いけねえ、いけねえ。まだ心中するのには早過ぎらあ。

(二人は顏を見合せて寂しげに笑ふ。義太夫の三味線の音ものうげに響く。幕。)

第三幕

深川の八幡宮の傍の焉馬の家。

湯屋の裏の路次の奥。上手に寄りて焉馬の家あり。八疊の一間。上手に床の間と壁。床の間に句樂の寫眞を飾り、その前に線香を立つ。壁には役者の似顔繪芝居の番附などを貼り付く。三味線一挺懸りゐる。正面に窓あり。窓の向ふは湯屋の裏手の煉瓦塀とな

る。正面下手寄りに障子。その奥は臺所に通ず。簞笥、枕屏風。長火鉢などあり。下手正面に向つて格子戸。鈴を附けあり。下手の路次の中程、焉馬の家に近く軒燈あり。「金烏亭焉馬」とまづき勘亭流にてしるしあり。下手は近所の長屋の板壁。路次の蔭にはなほ殘りたる雪あり。座敷にはちやぶ臺を置き、そのあたりにいろいろのものを取り散らしあり。

第二幕と同じ日の夜の七時頃。

（焉馬、小しん、新太郎、おはつ、おくめ、おかくの六人、ちやぶ臺を圍みて座りゐる。おくめは焉馬の女房。三十一二歳位。おかくは下座の女。三十歳位。）

おかく。（焉馬に。）馬鹿にしてゐやがるね。誰がお前さんなんぞに惚れるものかね。

焉馬。嘘吐くない。こん畜生。この間の晩さう云つたぢやねえか。（おくめに。）なあ、おくめ。

おくめ。何を云つてるんだい。女房にそんなことを聽くやつがあるものかね。お前さん、その杯を若旦那にお返しな。

焉馬。おつとすつかり忘れて如何も濟みません。へい、若旦那。（杯を差す。）ねえ、折角無頼漢がこれだけ集つたんだから、何かして遊ばうぢやあねえか。

小しん。（考へて。）さうさな。句樂忌つて云ふんだから、何か面白れえ趣向をしてえな。

新太郎。如何だい。小しんさん。まださつきの話のやつは早いのかね。

小しん。（笑つて。）まだいけないね。あれにやあまくらを振らなくちやあ面白くねえんですよ。

焉馬。兎に角もう少し杯を動かさうぢやねえか。（おはつに。）ねえ、おはつさん。あなたも少し飲んだら好いてせう。（杯を差して。）何しろ私はね、あなたにぞつこん惚れ込んでゐるんですぜ。この間も私は小しんに云つたんだ。あんな可哀らしい娘さんはないつて――（三味線を彈く手眞似をして。）如何です、ぺんぺんの方は。今何をやつてゐるんですね。

おはつ。變なものなんですよ。「累」の土橋をやつてゐるの。

焉馬。ああ、「累」を――（節をつけて云ふ。）「誠絹川の女房の累、本心五體にあるならば」つてね。ちよつと

好うがすね。

新太郎。焉馬さん。何てもよく知つてゐるね。

焉馬。そりやあ知つてゐまさあね。これだつて藝人てさあ。この近所の娘つ子はみんな振り返つて見ますぜ。(女の聲色にて。)あら、あすこに往くのは焉馬さんよなんて云つてね。

小しん。厭なやつだな、こいつは——止せやい。氣味の惡い聲を出しやがつて——女子供はおびえらあな。

焉馬。さうお前見てえに邪見に云はなくつても好いぢやねえか。

(短き間。皆思ひ出したるやうに酒を飲む。)

おくめ。何だか今夜はずゐぶん靜かな晩だね。

おかく。騷々しいのはここばかりさ。

焉馬。好いぢやねえか。騷々しくつたつて——(突然新太郎に。)ねえ、さうてせう。時にあの人は來るんてすかい。元の名前は樫村さん、今は何とか云つたな。

小しん。勝兵造よ。

焉馬。ああ、さうさう、勝兵造——あんまり好い名ぢやあなささうだな　やつぱり河竹默阿彌の方がえらいんてせう。

新太郎。極つててらあな、しかし名前なんて何だつて好いぢやねえか。藝さへ好けりや好いやね。句樂なんて名はあんまり好い名ぢやあねえんだらう。

焉馬。ああ、句樂つて云やあ、あなたの所へあいつのかたみの短刀をお預けしたんてすつてね。

新太郎。あゝ。

小しん。あいつは夜店て二分の品なんてすぜ。それを青井下阪だなんて云つて、大事にしまつて置きやがつたんてさあ。

新太郎。手鍵は何處へ預けたんだい。昨夜お前が振り廻したつてやつさ。

焉馬。いや、もう昨夜のことは云つこなしさ。私はあすこから如何して家へ歸つたか分らねえんてすぜ。いや、もう大しくじり。今朝おぎんさんに會つた時なんぞは、全く穴へても入りたかつたね。

小しん。この男は醉つてゐねえ時いつもこれだから可哀いいのさ。

焉馬。(少してれて。)もうそんな話は好いや。かうやつてゐてもつまらねえぢやねえか。都々逸でも歌はうか。(おかくに。)ねえ、おかくさん。お前三味線を彈いてお呉れよ。

おかく。ああ、三味線彈くのは商賣だから仕方がないや。しかし都々逸ぢやあ役不足だね。

焉馬。何てえ、こん畜生。いつも下座で彈いてゐやがる癖に、ご大相なことを吐かしやがらあ。(調子を變へて新太郎に。)だけどね。下座を彈かせて置くのには惜しい器量でせう。

おかく。何だい。人を馬鹿にしてゐるよ。

(おかくは立ちて壁に懸けたる三味線を下す。小しんは何ごとか考へゐる。)

新太郎。ねえ、小しんさん。

小しん。(顏を上げて。)ええ。

新太郎。君の目は如何しても駄目かねえ。

小しん。(あきらめたるやうに。)ええ、如何も駄目のやうですねえ。まあ仕方がありませんや。何ごとも因緣づくや別れ霜てね。

新太郎。おい、それは誰の句だい。

小しん。(笑つて。)あなたがさう聽くだらうと思つて待つてゐたのさ。これは私の句さ。しかも今ちよいと作つたのさ。名句でせう。

新太郎。何だ。發句を考へてゐたのか。

小しん。もうひとつあるんですよ。水差がものを云ふ位の寒さかな——こいつは句樂の句でなくちや面白くねえな。

新太郎。ああ、何か——枕元の水差と話をしたつてやつだな。あの話ももう昔話になつちまつたなあ。

(焉馬は急にはしやぎ出す。)

焉馬。好いかい。おかくさん。發句なんて面白くもねえ。景氣よく都々逸でもやらうぢやねえ。

(焉馬歌ふ。おかく三味線を彈く。)

〽玉だれのうちぞゆかしきあの御所車、戀にへだて

があるものか。
小しん。よお、よお。もうひとつ何かやつてくんねえ。
焉馬。如何てえ、こんなのは――（歌ふ。）
へ江戸の夜鷹は難波の惣嫁、添はぬながらも一夜妻。
小しん。いやな都々逸だな。
焉馬。（きよとんとして。）さうかな。
おはつ。焉馬さんは好い聲だわねえ。
小しん。おや、うまくやつてゐやがるな。
焉馬。難有てえ。私はおはつさんにさへ聽いて貰へば
それて好いのさ。あいつ等に何が分るものてすか。
小しん。何を云つてゐやがるんてえ。まあ、待ちな。
今にどえれえものを聽かせてやるから――
焉馬。ああ、何だかもうひとつ歌ひたくなつて來たね。
おかくさん、頼むぜ。
新太郎。おや、おや、何だか都々逸に醉つ拂ひさうだ
ぜ。
焉馬。ねえ、おはつさん、あなた聽いて下さいよ。みんな嫉妬(やきもち)を燒いてゐるんてすから――
おはつ。（笑つて。）ええ、聽くわ。
焉馬。（勢づいて。）さあ、ひとつ――（歌ふ。）
へ人の戀路を邪魔するやつは。鰒にあたつて死ねば
好い。
如何てす。みんなあいつ等はその組てせう。
おくめ。何だい。お前さん一人てはしやいてゐるんだ
ね。もうお止しよ。
焉馬。おや、おや、勤め甲斐のねえお座敷だなあ。
（皆また盛んに酒を飲む。
兵造路次の奥より出で、格子戸を開けて中に入る。）
兵造。今晩は――
焉馬。何とか云つたな――ああ、兵造さんてすかい。
どうぞお上んなさい。
兵造。それぢやあご免なさい。
（兵造は座敷に來る。おくめ、おかくなどと挨拶す。ちやぶ臺の傍
に座る。）
焉馬。（直ぐ杯を兵造に差す。）如何てす。一杯――
兵造。焉馬さんの所も相變らすだなあ。ここの路次を

出るよ、もう酒の匂ひがぷんぷんするぜ。

焉馬。まさか――しかしみんな酒が生命なんだから ね。みんな酒を飲んて生きてゐる體なんだから堪ら ねえよ。お前さんだつてやつぱりその仲間ぢやあね えか。

小しん。だけど兵造さん――もうこれからは兵造さん て云ひますぜ――あなたは好い所へ入りましたね。 芝居の中とは考へたよ。いくら土百姓や足輕が威張 つてゐる世の中だつて、あすこの中だけはまた別て さあね。

新太郎。そりやさうだな。あすこは無頼漢達のお寺見 てえなものだからなあ。云はば靈魂の捨て所よ。

兵造。差しあたりおれは坊主の役か。（笑ふ。）

小しん。（呟くやうに。）世の中が――全く考へて見りや あこんな馬鹿々々しい所はねえやね。（新太郎に。）し かし、若旦那。私はかなり運の好い男さ。つくづく 世の中に愛想が盡きた時、丁度好い鹽梅に盲目にな つたんてすからね。ゝれて盲目になつてゐなかつた ら、きつと句樂見てえに狂人になつて死ぬ位が落か も知れねえ。

新太郎。全く句樂か狂人になつたのも、無理はねえと 思ふね。まあ考へて見ねえ。早えところが今の世の 中に死ぬほど女に惚れるやつがあるかい。まあねえ と云つても好いだらうぜ。

小しん。さうですかね。そんなこたあねえでせう。

新太郎。そりやあしかし千人に一人あるかなしだぜ。 しかし死ぬほど女に惚れることの出來るやつは仕合 せさ。おれなんかには如何してもそれが出來ねえん だから情ねえよ。

小しん。若旦那なんざあさうでもありますまい。何し ろ家におつとしてゐりやあ立派に若旦那てゐられる ものを、ああやつて煙草屋の二階に二人て燻ぶつて ゐるなんざあ、惚れなくつちや出來ねえ仕事てすぜ。

新太郎。さう云はれりやあ一言もねえが、おれは女と 一所にゐるのが嬉しくつて、家を飛び出したんぢや あねえぜ

小しん。へえ、それぢやあ如何云ふ譯てなんですね。

新太郎。（悲しげなれども強く。）無頼漢になりたくつてさ。

（女房は驚きて新太郎の顔を見る。短き間。）

焉馬。（杯を新太郎に差す。）それてこそあなただ。まあ、一杯差し上げませう。

小しん。（考へて。）無頼漢に――成程――

新太郎。（感傷的になつて。）ねえ、小しんさん。お前さんにだけはおれの心持が分るだらう。つまり世の中から見離されてえのさ。見離されて自分一人になりてえのさ。（うるみたる聲にて。）さうして寂しく一生を送りてえのさ。おれはならうことならまるて世の中のことなんか見たくねえのさ。そこにゆくとお前さんは羨ましいよ。おれは狂人になつた句樂ぁ羨ましければ、盲目になつたお前さんも羨ましいよ。そりやあ句樂のことを考へれば可哀さうだとも思ふし、またお前さんのことを考へれば氣の毒だとも思ふ。しかしよくよく考へて見ると。一番可哀さうて氣の毒なのは自分だね。

小しん。（ほろりとして。）誰しも悲しい世の中なんですかねえ。

新太郎。（慰めるやうに。）それだからね、小しんさん。お前さんがいくら盲目だつて云つても氣を落さないて、厭な世の中のことを見ねえて好いと思つてゐるが好いよ。

小しん。ええ、私はもう疾うからさう思つてゐるんですがね――しかしこれて時々昔のやうに目が見えたらと思ふことがありますよ。

兵造。そりやあさうだらうね。

小しん。世の中のことはあきらめやう一つだが――さてこのあきらめつてやつが哀れなものてね。

焉馬。（呑氣さうに。）時よ時節とあきらめしやんせか。

新太郎。おい、まぜつ返しちやいけねえぜ。

間。小しんは急に何かたくらむ如き微笑を洩らす。

小しん。（新太郎に。）ねえ、若旦那。私は句樂が死んてから何だか急に寂しくなつたやうな氣がして仕方が

ねえんですよ。今夜は句樂忌って云ふんだから、すこし句樂のことをお話しますがね。これは誰も知らねえことなんですぜ。人情話だからよく聽いて下さい。（兵造に。）如何です。この話なんか芝居でやつてもちよつと泣かせますぜ。

兵造。一體如何云ふ筋なんだい。

小しん。（しんみりと話し出す。）さうさ。あれは句樂が狂人になる少し前のことでしたよ。私はもうそろそろ目が惡くなつてゐて、みんなから醫者に懸れつて云はれるのを厭だ厭だて押つ通してゐる時分のことなんです。まだ夏の眞つ盛りでいやに蒸し暑い晩のことでした。私はその二三日前から加減が惡くつて、席を休んでぶらぶらしてゐたんですが、句樂はもうその三日も前から、まるつきり席へ出ずに遊んでゐるんです。さうしてその云ひ草が好いぢやありませんか。篦棒め、働いたつて死ぬやつは死ぬんだ。遊んでゐたつて生きてゐるやつは生きてゐるんだ――とかうてさ。（間。）さうでしたね。晩の十一時頃でしたかな。私がもう寢てしまつたところへ、句樂がしよんぼり入つて來たから、おい、如何したんだいつて、床の中から聲を懸けると、うんと云つたぎり長火鉢の前に座り込んで、默つて何か考へてゐる樣子なんです。何だかいつもの句樂とは違つてゐるやうだから起きて往つて見ると、あいつは私の顔を見るといきなり、おい濟まねえが酒を一杯くんねえ、冷の方が好いやつて云ふんです。何でも餘つ程苦しいことか何かあるんだが酒をあほらうにも錢がねえて譯らしいのです。暫らくの間默つて酒を飲んでゐましたが、そのうちまあ聽いてくんねえと云つて話し出したのが、かう云ふ話なんです、

焉馬。おい、手つ取り早くやつてくんねえな。醉が覺めつちまはあ。

小しん。句樂は紫君にも惚れてゐたんですけれど、外にもう一人惚れてゐた女があるんです。それは横濱の淫賣婦（ぢごく）のお蔦つて女で、落語家には誰でも惚れるつてやつなんてさあ。若旦那、知つてゐるでせう。

新太郎。ああ、お蔦なら知つてゐるよ。句樂の家で二三度會つたから――

小しん。あの女は句樂が引つ懸るまでには、何人落語家にかかり合つてゐるか知れやしません。喬枝さんや金蔵さんなんてところまであの女に引つ懸つたんだからをかしいやね。そいつが如何したものだか、句樂の方からも惚れれば、お蔦の方でもまん更でもねえつてことになつたんです。それでお蔦もしまひには句樂の家へ來て面倒を見たりなんかしてゐましたが、さう云ふ工合で紫君の方へは自然足が遠くなつてゐたものだと見えるんですね。さうまで惚れ合つてゐるものなら、お蔦もちやんと句樂の世話をしてやれば好いのに。それが何時の間にかどろんを極めてしまつたものと見えますね。それもまた無理はねえんでさあ。二月も三月も席を休んでゐるんですから、米を買ふ錢だつてねえんでせう。もともと淫賣婦のことだからさうは辛抱が出來ねえやね。（間。）さあ、お蔦がゐなくなると、句樂はまた紫君のことを思ひ出して、矢も楯もたまらなく會ひに往つたのが、私の家へやつて來た前の晩のことなんです。

（この話の間に焉馬はおはつにからかふ。）

焉馬。ねえ、おはつさん。あんな話はつまらねえでせう。さあ、もつとこつちへお寄んなさいよ。

おはつ。厭だわ。默つて聽いていらつしやいよ。

焉馬。おや、おや、さう邪見にするもんぢやありませんよ。（おはつの膝を突く。）

おはつ。おお、痛い。何をするの、焉馬さん。

小しん。うるせえな。靜かにしねえな。

（この時丁度小しんの「前の晩のことなんです」と同時になる。）

新太郎。（笑つて。）焉馬のやつはたしかにおはつさんに惚れてゐるぜ。

小しん。まあ、聽いて下せえな。これからが話してえところなんだから――（間。）さうして句樂はその前の晩にふらりと紫君に會ひに出懸けたんださうです。この前から病氣だつて話は聽いてゐたんださうですが、もう好くなつたつて話をその二三日前に典

凌が來て話したんださうです。そこでお蔦には逃げられるし、しみじみ紫君が戀しくなつて、酷工面て金をこしらへて、さて往つて見ると、如何です——紫君は昨夜死んぢまつたつて云ふぢやありませんか。それを聽いた時に句樂のやつ、ぽろぽろ涙をこぼして泣いたさうですよ。さうでせう。あいつは紫君にはずゐぶん惚れてゐましたからね。紫君のところへ往かなくなつたのも、厭て往かなくなつたんぢやあねえんですからね。あいつはあれて氣の弱い男て、きつと世話をしてくれるお蔦に義理を立てて、それて往かなかつたのに違えねえんてさあ。それからまあその晩はそこで遊んで、みんなといろいろ紫君の話をして、酒もろくに飮まねえて夜を明かしたんださうてす。さうなると人情て何につけても紫君を思ひ出しまさあ。何だかその家へ出るのが厭て、その翌る日も一日ぶん流して、さうしてその歸りに私の家へやつて來たんてす。

新太郎。それからまた大分愁歎があつたんだね。

小しん。ええ、いろんな話をしてゐましたよ。お前と一所に往つた時にこんなことがあつたとか何とか云つてね——酒を飮んぢやあ泣いてゐるのさ。さうしてさんざ泣いた揚句、それぢやあまた來らあつて云つて、しよんぼり歸つて往きましたが、それから四五日經つと氣が狂つたつ騒ぎさ。(急に調子を變へて。)ところてこてちよつと聽かせてえものがあるのだが——(おはつに。)おはつさん、ちよつと彈いて下さいな。

焉馬。(驚きて。)おや、おや、何か始まるのかい。

兵造。大變長えまくらだな。

小しん。(笑ふ。)しかし今の話はほんとてすぜ。何しろこれだけ話して置かねえと、後の義太夫が榮えねえのさ。

(おはつ三味線の調子を合はす。)

新太郎。何とか云つたな。「紫天神水差問答」か。

小しん。(聲を張り上げて。)語りまする太夫は竹本小しん、三味線鶴澤おはつ、先はこのところ句樂狂亂の

段――ああ、いけねえ。おくめさん、水を一杯くんねえ。

おくめ。お酒の方が好いてせう。

小しん。(笑って。) はははは、違えねえ。

(小しんは茶碗にて酒を飲む。おはつは三味線を彈く。直ぐに小しんは語り始む。)

へ蚊ばしらの立つ浮名より黄昏るゝ、日本堤や馬道の、路次の奥なる破れ廂、ひと村雨のあとやさき、いとかすかにも聽ゆるは、道哲堂の鉦の音、悲しや今日も便なく、はや黄昏と涙ぐみ、句樂がかこつひとり言。いや、いや、紫君が死んだとは、そりや噓ぢや、このわし一人を殘し置き、何て紫君が死なうぞいのう、思ひ廻せば廻すほど、戀しなつかし忘られぬ、面影なりと立つか弓、日文矢文の濡文に、返事のないのは何ゆゑぞ、恨むわいのと口說き泣く、折しもあれや幻に、紫君の姿や見えにけん、句樂はすつくと立ち上り、追はむとすれど泡沫の、命なき身を何とせん、風にもまるる蜘蛛の、糸より薄き二人の緣、會ひたい見たい今一度、顏が見たいと立ちつゐつ、四邊うろうろ心も亂れ、紫君はいづこ待乳山、影が沈めば日が暮るる、やれこの土手の四つ手駕籠、急げ急げは客の癖、先棒後棒やつとまかせ、泣きつ笑ひつうたひつつ走れど正氣あら悲しや、廓を差して急ぎゆく。

焉馬。(まぜつ返す。) 脇阪樣の鎗の鞘、てんてんてんの皮――ぢやねえか。

新太郞。おい、まぜつ返しちやいけねえ(小しんに。) 面白れえよ。それだけかい。

小しん。ええ、これでおしまひさ。あんまり長くつちやあ面白くねえやね。(おはつに。) おはつさん、如何もご苦勞さま。

おはつ。いいえ、小しんさんはうまいわね。

小しん。さうみんなにお世辭を云つちやいけませんよみんなほんとにしますぜ。(兵造に。) 如何です、兵造さん、この文句は――

兵造。面白いよ。
小しん。この間から考へてゐたんですぜ。
焉馬。さあ、もう少し飲まうぢやねえか。
兵造。(時計を見て。) 私はもうお暇しますよ。(立ち上る。)
焉馬。まあ、好いぢやありませんか。あなた一番後から來たんだぜ。
小しん。今の義太夫に當てられたんぢやないんてんかい。
兵造。そんなわけぢやないが、ちよつと用があるから――
焉馬。さうですか。それぢやあ無理に留めませんよ。
兵造。さやうなら。
(皆「左様なら」と云ふ。女等は兵造を送り出す。兵造は外へ出て急ぎ足に路次の奥へ入る。)
焉馬。あの人もすつかり變つちまひましたね。(拍子木を打つ手附をして。) まだかちかちやつてゐるんでせう。
新太郎。ああ、無論さ。だけどあいつが芝居者にならうとは思はなかつたよ。娘義太夫と一所にゐるんださうだが、何處にゐるんだか家も敎へねえんだぜ。
おくめ。若旦那、お仲間が一人殖えましたね。
新太郎。(笑ふ。) はははは、ああ云ふやつが出來て來ると、おれも少しは心丈夫だよ。
おはつ。私もう歸るわ。小しんさん、もう歸つても好いでせう。
焉馬。おはつさん、もう少し好いぢやありませんか。
小しん。見ろ。手前があんまりいろんなことを云ふからだぜ。夜のことだしあんまり無理に引き留めても惡いや。おかくさん、濟まねえが、家まで送つて往つてくんねえか。
おはつ。いいえ、好うござんすよ。
おかく。私もお宅の近所に用があるんですから――
(おはつは三味線を片つけて風呂敷に包む。挨拶をして立ち上る。)
新太郎。(おはつに。) おぎんにもう寢てしまつて好いつて云つて下さいな。
おはつ。(呟くやうに。) 早く歸つて來ておあげなさいよ。(皆に。) さやうなら。

(皆「左樣なら」と云ふ。おはつとおかくは格子戸を開けて外へ出る
二人は何ごとか話しながら路次の奥に入る。殆んど同時に淸兵衞
出づ。刺靑師。六十七八歳位。湯の歸りと見えて手拭を肩に懸く。
默つて焉馬の家の格子戸を開く。)

おくめ。(鈴の音を聽いて。) だあれ――

(淸兵衞はやはり默つて座敷に入り來る。)

焉馬。爺さん。如何したんだい。

淸兵衞。なに、今湯の中で聽いてゐると、誰か義太夫を語つてゐるやうだからやつて來たのよ。

小しん。(頭をかく。) こいつは驚いたな。(淸兵衞に。) 爺さん。今晩は――

淸兵衞。(座る。) やあ、小しんさんか。久しく會はねえの。

小しん。如何てす。お變りもありませんかね。

淸兵衞。ああ、相變らずさ。(新太郎に。) やあ、若旦那お珍らしうがすね。句樂が生きてゐる時分には、ちよくちよく運座てお目に懸つたつけが――

新太郎。ああ、さうさう、あの時分はみんな發句に凝つてゐましたね。

小しん。爺さんの句て有名な句がありますぜ。鯖を食ふ命知らずが喧嘩かな――つてやつさ。

淸兵衞。(笑つて。) ははは、つまらねえ句を覺えてゐたもんだな。如何したんだい、今夜は――みんなお揃ぢやねえか。

小しん。今夜は句樂忌つてやつをやつたのさ。

淸兵衞。(床の間を見て。) ああ、さうか。道理て床の間に句樂の寫眞があると思つたよ。

小しん。しかしそこへこの老無頼漢がやつて來たのは嬉しいね。

焉馬。(淸兵衞に杯を差す。) 爺さん、一杯如何です。

淸兵衞。へえ、難有う。(酒を飲みて。) もう句樂が死んてからどの位になるかな。

新太郎。丁度一年位てせう。

小しん。ああ、爺さんは蝮の吉兵衞さんを知つてゐるんてすね。

淸兵衞。ああ、知つてゐるよ。あの位不思議な男はあ

りやしねえ。不意とゐなくなつちまつたつきり、何處へ徃つたか生きてゐるんだか死んぢまつたんだかまるつきり分らねえんだからな。
新太郎。だけど句樂が死に際に、私の所へ寄越した手紙は、如何も吉兵衞さんが持つて來たらしいんですぜ。
淸兵衞。そいつは違ふだらう。（間。）吉兵衞さんと云やあ、あの人の脊中の刺靑(ほりもの)は、ありやあおれが若い時に彫つたものさ。あの刺靑はみんなに見せたかつたよ。おれは今までにずゐぶん澤山刺靑も彫つたがあんな氣持の好いやつは彫つたことがなかつたね。
焉馬。一體何を彫つたんですね。
淸兵衞。何つてお前、歌舞伎十八番の嫐(うわなり)さ。國周さんの下繪でね。そりやあ立派な刺靑だつたぜ。
新太郎。はてな、嫐つて云やあ句樂が根付を持つてゐたつけが――
小しん。さうさう、あいつが自慢の根付だつたぜ。
新太郎。それ、例の仇討の元になつてゐるやつさ。典凌が質へ入れて柴君の所へ云つたつて云ふんて大騷ぎになつたやつさ。
焉馬。典凌つて云やあね、爺さん。あいつ旅から歸つて來やがつたんですぜ。あんまり忌々しいから昨夜ひてえ目に會はせてやりましたぜ。
淸兵衞。止しなよ、あんなものを相手にするのは――あいつは今ぢやあ張扇を一本持つて、上州路を廻つてゐる講釋破落戸(ごろつき)ぢやねえか。
焉馬。だけどあんまり人を馬鹿にしてゐやがるからさ。
おくめ。さうしてその飛ばつちりが大變なんですよ。昨夜の騷ぎをお爺(とつ)さんに見せたかつたね。手鍵を振り廻すやら何かして――まるで魚屋宗五郎見たいだつたんですよ。
焉馬。餘計なことを云やがるねえ。
小しん。（淸兵衞に。）吉兵衞さんが今生きてゐるとすると、何歳(いくつ)位ですかね。
淸兵衞。さうさな。私よりも二つ三つ下だつたと思ふ

からもうかれこれ六十四五だらうな。

小しん。まだそんなものですかね

清兵衛。(思ひ出したやうに。) ああ、ほんとにあの人は好い聲だつたな、男は痘食つ面の不男だつたけれども、聲だけ聽いてゐるとどんなに好い男かと思はれる位だつた。句樂はよくあの人の話をしてゐたらう。

小しん。ええ。

清兵衛。私はあの人が如何して不意にゐなくなつちまつたんだか、今だに不思議でならないんだよ。ひよつとすると氣が狂つたんぢやないかと思ふが――

新太郎。氣が狂ふのはそんなに不意になるものですかね。

清兵衛。ああ、大抵不意になるらしいね。狂人になる人はみんな生れた時からその下地があるんだとさ。人間の心なんて風船玉見てえなものだから、何かの拍子てはち切れたらもうおしまひさ。

新太郎。さうですかねえ。(獨語のやうに。) 吉兵衛さんも氣が狂ふし、句樂も氣が狂ふし――

清兵衛。どりや家へ歸らうかな。(立ち上りながら。) 一體誰が義太夫をやつてゐたんだい。

小しん。私さ。爺さんに聽かせたかつたね。

清兵衛。こいつは聽かねえ方が無事かも知れねえ。(皆に。) それぢやあご免よ。

(淸兵衛は格子戸の方へ歩む。この時おはつ路次の奥より出づ。あわただしく格子戸を開く。)

おはつ。大變ですよ。若旦那。おぎんさんが誰かに連れられて往つてしまひましたよ。

清兵衛。(立ち留つて。) 何だ。おぎんが――

新太郎。(驚きて立ち上る。) ほんとかい。

おはつ。ええ。たつた今年寄の女の人が來て連れて往つてしまつたんですつて――

新太郎。それぢやあおりやあ歸るよ。(皆に。) さやうなら。

(急ぎ格子戸より出て、おはつとともに路次の奥へ入る。清兵衛は驚きたる如く立ちゐる。)

清兵衛。(笑ふ。) はははは、何だ。おぎんつて云ふから

おれはうちの娘のことかと思つた。

爲馬。爺さんにそんな娘があるのかい。

清兵衞。うん、お前は知らねえんだらう。二十年ぶ前に家出しやがつたやつなんだもの――さあ、家へ歸つて一杯飲んで寢るかな。それぢやあご免よ。

（清兵衞は格子戸を開けて外へ出ると、立ち留まりて何ごとか考へゐる。悲しげなる後つきをして路次の奥に入る。）

爲馬。爺さんも年を取つたな。

おくめ。ほんとにめつきり年寄になつてしまつたね。

（小しんは前よりうなだれたまま默つて何か考へゐる。長き間。）

小しん。（突然ものに魘はれたる如く。）なに、句樂に會ひたきやあ會ひにお出てなせえな。句樂はたつた一人で寂しがつてゐるところだから、あなたが往つたら喜びますぜ。（間。）道は私がよく知つてゐる。眞つ闇な田圃道だ。向ふに廓の灯が見えて、蛙の鳴く聲が寂しく聽える――（間。）駕籠でお出てなせえ――駕籠て――ほんとに句樂は喜びますぜ。（涙をこぼす。）

（爲馬とおくめは驚きて小しんの顏を見る。長き間。幕。）

第四幕

煙草屋の二階。舞臺面は第二幕と同じ。唯座敷の中には机と火鉢の外何もなし。机の上に洋燈あり。四疊半の間の隅に、雨漏を受くる盥を置きあり。部屋の中は薄暗く、洋燈の灯も時々風のために吹き消されさうになる。

第三幕より十日程過ぎし夜の九時頃。外は暴風雨烈しく吹き荒びゐる。電線の唸る響の絶間には。看板などの吹き落さるる音など聽ゆ。

（新太郎は唯一人机に向ひて何か書きゐる。おはつ階子段を上り來る。その足音を聽きて新太郎はあはてて書き懸けの紙を隱す。）

おはつ。ずゐぶんひどい暴風雨だわね。

新太郎。それでもさつきよりは餘つ程靜かになつたやうだね。

おはつ。さうでもないわ。（新太郎の傍に座る。）今日は一日何をしてゐたの。

新太郎。寢てゐたのさ。あの雨ぢやあ何處へ往くことと

も出來ねえやね。おはつさんだづてお師匠さんの所へは往かねえんだらう。
おはつ。いいえ、往つたわ。
新太郎。そいつは感心だな。やつぱり「累」かい。
おはつ。ああ――今度は何にしやうかな。お師匠さんは「帶屋」か「沼津」つて云ふんだけれど、私は何だか兩方とも厭なのさ。私はそれよりも紙治か何かやりたいわ。
新太郎。「炬燵」かい。大分色つぽいものがお望みなんだな。
おはつ。(思ひ出したるやうに。) おぎんさんは如何したてせう。
新太郎。(思ひ遣りの眼差をして。) 如何したらうな。あれつきり便りがないところて見ると、あの女もあの婆あのために食ひ物にされてしまつたんだらうよ。
おはつ。可哀さうだわね。あなたもおぎんさんがゐなくなつてから、すつかり鬱ぎ込んでしまつたわねい。(火鉢を見て。) まあ、情ない火だこと。をこして上げるわね。
新太郎。好いよ。もう寝るんだから――
おはつ。それでもこんな晩には、火でもないと賴ないわ。(火鉢に炭をつぎながら。) この間の晩小しんが語つた義太夫は、あれは小しんさんが自分て作つたの。
新太郎。ああ、さうだよ。
おはつ。あの晩だつたわね。おぎんさんがゐなくなつたのは――(新太郎の悲しげなる顏付を見て。) もうおぎんさんの話は止しませうね。(机の上を見て。) 何か雜誌はなくつて――
新太郎。何にもねえや。
おはつ。(句樂の日記を見付けて。) それはなあに――
新太郎。これかい これは句樂の日記さ。
おはつ。(仰山に。) まあ、あの人が日記なんぞつけてゐたの。ずゐぶん變なことが書いてあるでせうねえ。(日記を取り上げて。) 讀んでも好いてせう。
新太郎。(おはつの手より日記を奪ひて。) いけねえんだよ。讀んぢやあいけねえところがあるんだから――竈はな

い所だけおれが讀んて聽かせてやらあ。
おはつ。（素直に。）ええ。
（長き間。吹き荒ぶ風の音のみ聽ゆ。新太郎は句樂の日記をところところ開きては讀む。）
新太郎。好いかい。（低き聲にて。）「蝮の吉兵衛さんはほんとに好い聲だつた。おれはあのひとの歌つた小唄がまだ忘れられない。
おれはそのためにこんなに苦勞してゐるのだ。こんなに錢のねえのも、こんなに痩せつこけたのも、みんなあの小唄の祟りなんだ。怖ろしいものだと思ふ、こんなになるなら聽かなければよかつたと思ふ。近頃はなほ餘計に吉兵衛さんの聲を思ひ出す。何處へ往つてもあの聲が聽えて來る。酒を飲まうとすると、杯の中からもあの聲が聽える。高座へあがると、鐵瓶の中からもあの聲が聽える。」（間。）あんまり面白かあないだらう。
おはつ。いいえ、面白いわ。
新太郎。それぢやあもう少し讀まうか。（讀む。）

一馬公と淺草を歩く。馬公おれに猿の言葉が分るかと云ひ聽く。おれも分らぬと云ふのも剛腹ゆゑ分ると云ひしに、それてはと云ひて二人は花屋敷に入る。猿の檻の前に二時間あまり立ちたれども、如何しても分らねば外へ出る。茶畑の中を歩きつつ馬公しきりに馬鹿々々しいをくり返へす。をかしな男なり。」（笑ふ。）はははは、どつちがをかしいか分りやあしねえ。
おはつ。ほんとだわねえ。
新太郎。（猶續けて讀む。）「つくづく世の中が厭になる。何故かう馬鹿なやつばかりが多いのだらう。いろいろ考へて見ると、無頼漢程ゑらいやつはないと思ふ。こんな世の中にゐて、無頼漢になれねえやうなやつは餘つ程間拔だ。もう少し文明開化になると、世の中はきつと無頼漢の天下になる。ざまあ見やがれ。」
おはつ。まあ——
新太郎。ざまあ見やがれか。（間。）おや、ここかな。この間から捜してゐたのは——

おはつ。なあに――

新太郎。ああ、ここだ。ここだ。ねえ、おはつさん。この文句が分るかい。（讀む。）「風が吹く。冷たい風が吹く。雨もよひの眞暗な晩だ。おれは田圃道を駕籠に乘つてゆく。向ふに廓の灯がぼんやり見えて蛙の鳴く聲が寂しく聽える。駕籠舁は二人とも默つてゐる。いくら話し懸けても默つてゐる。何時までたつても眞つ暗な晩だ。何處まで往つても田圃道だ。おれは一體こんな駕籠に乘つて何處へ往くんだらう。」

おはつ。一體それは何のことなの。

新太郎。分らねえだらう。（悲しげに。）おれも始め讀んだ時には分らなかつたが、近頃になつてやつと分るやうになつたのだ。おれも近いうちにこの駕籠に乘らなくつちやならねえのかも知れねえよ。

（この時下の戸を烈しく敲く音聽ゆ。おはつは驚きて立ち上る。）

おはつ。誰か戸を敲いてゐるわねえ。誰だらう、こんな晩に――

（おはつは階子段を下りてゆく。戸を敲く音止む。やや長き間。おはつ階子段の所より顏を出す。）

おはつ。小しんさんが來ましたよ。車夫(くるまや)さんが足が泥だらけだつて云ふから、あなた負(おぶ)つてお上げなさいな。（顏を引込む。）

新太郎。（驚きて。）小しんが――如何したんだらう。

（新太郎は急ぎ階子段を下りてゆく。舞臺空虛。やや長き間。新太郎は小しんを負ひて階子段を上り來る。火鉢の傍に小しんを下ろす。）

小しん。いや、如何も怖れ入りました。如何もひどい暴風雨(あらし)ですな。

新太郎。如何したんだい。

小しん。實は心配で堪らなかつたからやつて來たんですよ。私はこの間句樂忌(くらくき)をやつた晩からと云ふものは、如何してだかあなたのことが氣になつて堪らねえんです。いろいろ前からのことを考へて見たり何かしてね。あなたがまだ橋場にいらしつた時分のことなぞが、思ひ出されて仕方がなかつたんです。

新太郎。（厭な顏をして。）止せよ、橋場の家の話なんか――

小しん。まあ、厭だらうが聽いて下せえな。今夜はそれてやつて來たんてすから――（間。）ほんとにあの時分は、あなたもおとなしい若旦那てしたな。私も橋場のお宅には、句樂と一所に二三度伺つたことがありましたつけ。あなたが今からうやつて煙草屋の二階なんぞに、燻ぶつていらつしやるところを見ると、私は何だかお氣の毒てならねえ。句樂のやうに世の中を茶にして暮らすのを、あの時分はたから見てゐたら、面白いとお思ひなすつたてせうが、かうやつて自分てやつて見るとずゐぶんつらいものだと云ふことが、あなたにもお分りなすつたてせう。私達のは根からの無賴漢て、十二三の時分から杯を持つ手付をほめられたりしたんだが、あたのはさうぢやあねえんだから、ここにまた私達には分らねえ苦しいところがありまさあね。

新太郎。さう云やあそんなもんだが、しかしおれはもうすつかりあきらめてゐるよ。全くのところ一時はずゐぶん悲しい思もしたが、今ぢやあもう何とも思つてはゐねえのさ。

小しん。さうてすかい。ほんとうにさうなら好いが、私には如何もさうは思はれねえ。盲目になつたお蔭には、私には今のあなたの心持がちやんと分つてゐるんだ。句樂が氣が狂ふ四五日前に、しよんぼり私の家へやつて來て、紫君が死んだつて云つて泣いた時の心持と、たいして變りはねえだらうと思ふね。

新太郎。（思ひ當るやうに。）さうさなあ。まあ、そんなものかも知れねえよ。

小しん。さうてせう。それだから私は心配て堪らねえんだ。

（おはつは茶道具を持ちて階子段を上り來る。足音を聽きて小しんは話を止む。）

小しん。（おはつに。）おはつさんてすか。如何も先日は難有う。

おはつ。お禮なんぞ云はれちや困るわ。

小しん。あの義太夫ぢや驚いたてせう。

おはつ。いいえ、大變結構だつたわ。

（おはつは直ぐ階子段を下りてゆく。）

新太郎。心配て堪らないと云ふのは、如何云ふ譯なんだい。

小しん。如何云ふ譯つてあなたにも大抵分つてゐるてせう。あなたが句樂のやうになりやあしねえかと思つて、それが心配て堪らねえのさ。あなたが句樂のやうになつてしまつたら私は如何したら好いんてす（悲しげに。）私は今あなたとかうやつて話をするのが樂しみて生きてゐるんてすぜ。盲目になつてからと云ふものは外に何にもすることがねえから、誰かに會つて話をするのを樂しみに日を送つてゐるのてす。その中ても如何云ふものだかあなたと會つて話をしてゐるのが、私は一番うれしい。そりやあ盲目のことてすから、たつた一人てぼんやり考へ込んてゐる時もありまさあ。その時にいつも思ひ出してゐるのは、句樂が云つたりしたりしたことばかりなんてすよ。つまり私は今、句樂とあなたとかう二人がゐなくなつては、生きてゐられねえやうな氣がするのてすよ。その二人のうちて、句樂が氣が狂つて死んてしまふと、一年經つか經たないうちに——若旦那、氣にしちやあいけませんぜ。これは私が自分の心に思つただけのことなんだから——あなたがまた同じやうに氣が狂つてしまふやうなことがあつたら、私は一人て如何じたら好いんてす。

新太郎。（悲しげに笑つて。）おれが氣が狂ふ……そんな馬鹿なことがあるものか。

小しん。全くこんなことを云ふのは馬鹿に違えねえがしかし盲目になつてからと云ふものは、大抵自分の思つたことが、その通りになつてゆくから不思議てすよ。それにこの間清兵衛さんも云つてゐましたらう。人間は不意と氣が狂ふんだつて——前から分らねえんだから怖ろしいやね。私も盲目になつてから、苦勞つて云ふのはこればかりさ。いろんなことが頭に浮んて來ると、それがみんなほんとになつてゆく——私は自分ながら盲目つてものは不思議だと思ひました

ね。

新太郎。さうすりやあおれは狂人になるのかなあ（間。）なあに狂人になつても好いさ。かへつてからやつてるよりや。いつそ狂人にでもなつた方が好いかも知れねえや。

小しん。（寂しげに笑つて。）はははは、そんな棄鉢なことを云つちやいけませんよ。（間。）しかし私の考へるところぢやあ、世の中の人はみんな狂人ですね。狂人でねえやつは一人もありやしねえ。唯それがひどいかひどくねえかのことなんでさあ、若旦那、變なことを聽くやうだが、あなたは狂人のもとを知つてゐますかい。知らねえでせう。こいつを知つてゐる人はありやあしねえや。しかし私は知つてゐるね。そりやあ脳味噌の上に生てゐる青い苔なんてすぜ。私も盲目にならねえ前は分らなかつたが、近頃ではみんなの頭の中が、はつきり見えるやうになつて來たんでさあ。

新太郎。（怖ろしさうに。）ほんとかい。

小しん。ほんとですとも――誰が嘘なんぞ云ふものですか。それだから私は心配て堪らねえのさ。かうやつてゐてもあなたの頭の中が、私にははつきり見えるんだからね。そのうちあなたの頭の中が、その青い苔で一杯になる。さうすりやあもう駄目さ。

新太郎。氣が狂ふと云ふのかい。

小しん。ええ。

（長き間。二人は默りたるまま思ひ思ひのことを考へゐる。風烈しく戸を動かす。）

新太郎。（急に悲しげに高く笑ふ。）はははは、おれもやつぱり句樂のやうに狂人になつてしまふのかなあ。最初が無頼漢で、その次が狂人か――さうしてその次は死んぢまふんだらう。

小しん。無頼漢か――世の中に無頼漢程寂しくつて悲しいものはありませんねえ。

新太郎。さうだねえ。おれは近頃やつと無頼漢の心持が分つたやうな氣がするよ。さうしてもう直き狂人の心持も分るやうになるだらうよ。

小しん。(無意味に笑ふ。)はははは——(間。)それからね若旦那。私は人の生命(いのち)もはつきり見えるんですぜ。

新太郎。おい、如何したんだい、今夜は——脅(おど)かしちやいけねえぜ。

小しん。まあ、ほんとの話だからお聽きなさい。かうやつて目は見えねえけれども、あなたの方に向つてゐる時は、丁度あなたのゐるあたりから、眞つ闇な中にぼんやり光が差して來るんですよ。それが生命(いのち)の光なんてさあ。中にはその光があるかないか分らないやうな人があるんです。如何もさう云ふ人は死に目が近いやうですね。

新太郎。おい、おりやあ如何だい。

小しん。(紛らす如く笑ふ。)はははは、あなたは大丈夫さ、(悲しげに。)しかし人間つてものは果敢ないものですねえ。すこし悲しいことがあれば直ぐ、氣が狂つたり死んだりしてしまふんですからねえ。

(新太郎は立ち上り戸棚より句樂が片身の短刀を出して來る。默りてその短刀を凝視す。やがてさつき認したる書き懸けの紙にすこし書き足して抽斗に收む。突然下の戸を烈しく敲く音聞ゆ。新太郎は驚きて短刀を隱す。)

新太郎。おや、誰か戸を敲いてゐるやうだな。

小しん。家から迎へに來やがつたかな。

新太郎。ああ、さうかも知れねえ。ここにゐるつてことは知つてゐるんだらう。

小しん。ええ、こんな暴風雨(あらし)の晩に往かなくつても好いつて言やがつたのを、無理にやつて來たんですよ。(間。)おや、さうぢやありませんぜ。何だか怒鳴つてゐるぢやありませんか。

(おはつ階子段の所より顏を出す。)

おはつ。あのね、兵造さんが來ましたよ。ぐでんぐでんに醉つ拂つて——

小しん。何だ。兵造さんか。

新太郎。あいつもよく飲みやがるなあ。

(兵造階子段を上り來る。泥醉。着物は雨に濡れゐる。おはつも續きて階子段を上り來る。)

兵造。何を云つてやがるんてえ。(新太郎に。)おい、如

何したい、あの女は——あのおぎんつてやつさ——まだ歸つて來ねえんだらう。さうだらう。おれは昨日あの女に會つたんだぜ。

新太郎。(驚きて。)え、何處で——

兵造。土手でよ。五十軒のこつちでよ。(小しんを見て。)なあんだ。お前もゐたのか。

小しん。お前もゐたのかぢやねえぜ。この暴風雨に何處をほつつき歩いてゐたのさ。

兵造。何處だつて好いぢやねえか。かう、着物も何も濡鼠よ。しかし世の中は面白れえな。(笑ふ。)はははは——酒に醉つて——さうして寢りやあ——その日その日が送れるんだ——

(兵造は座ると直ぐ横になる。やがて鼾をかきて眠る。)

おはつ。ずゐぶん醉つてゐるわね。

小しん。もう高鼾か。少し焉馬の形ですな。

おはつ。さうねえ。焉馬さんも兵造さんも、あんまり苦勞はなささうね。

小しん。さうでもねえんでせうがね。(思ひ出したるやうに。)おはつさん、もう何時でせう。

おはつ。さうね。十時ちよつと過ぎ位のもんでせう。

小しん。ああ、さうですか、大分晩くなつちまつたな。もうあなた寢るんでせう。お邪魔ですね。

おはつ。いいえ。關はないわ。この暴風雨ぢやあとても寢られやしないもの。ゆつくりしていらつしやいよ。

(おはつは階子段を下りて行く。長き間。新太郎のすすり泣く聲聽ゆ。)

小しん。若旦那——若旦那——如何かしたんですかい。

(新太郎答へずして歔欷す。)

小しん。え、若旦那——私の云つたことなんぞ氣に懸けちやあいけませんぜ。おぎんさんだつてもう直き歸つて來ますよ。(やや長き間。)え、何ですつて——

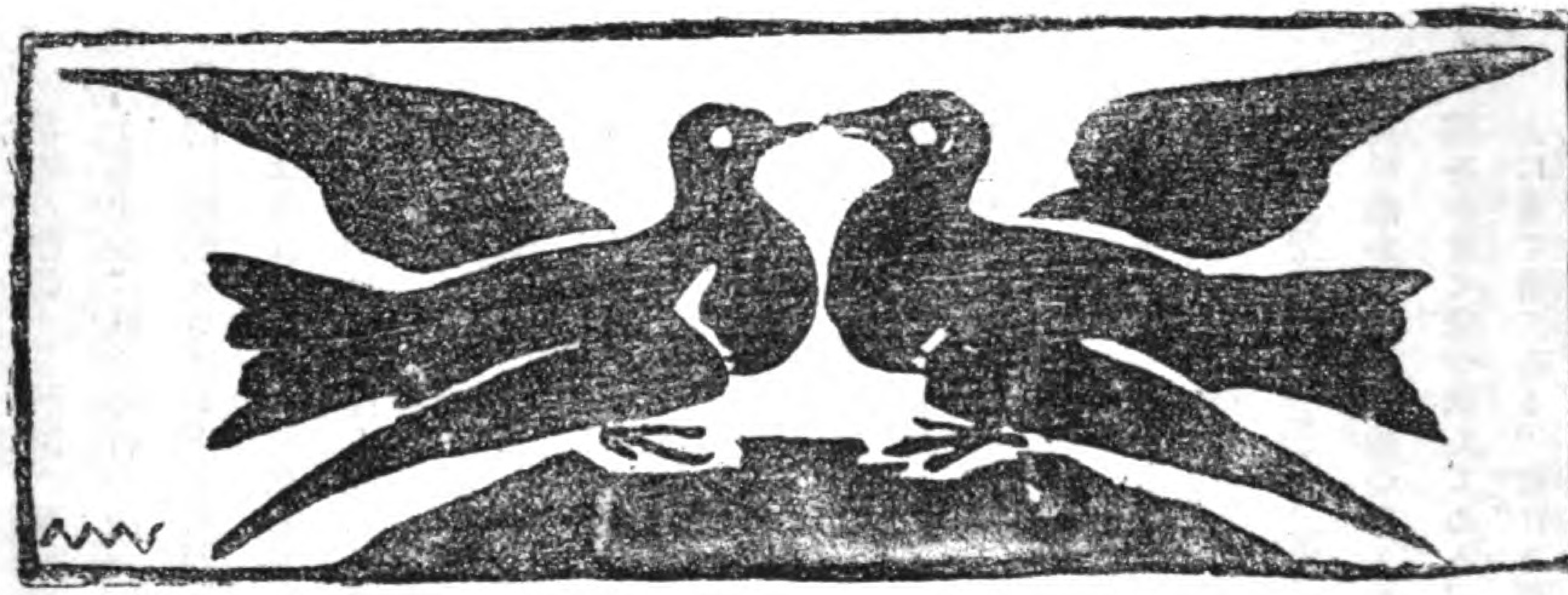
(小しんはものに壓はれたる如き顏付をす。新太郎の方に摺り寄る。)

小しん。(狂ほしく叫ぶ。)句樂に會ひてえつて云ふんです

か。會ひたきやあ會ひにお出てなせえな。句樂はたった一人で寂しがつてゐるところだから、あなたが往つたら喜びますぜ。(間。) 道は私がよく知つてゐる眞闇な田圃道だ。向ふに廓の灯(あかり)が見えて、蛙の鳴く聲が寂しく聽える。(間。) 駕籠でお出てなせえ——駕籠で——ほんとに句樂は喜びますぜ。

(小しんは急に涙をこぼして泣く。新太郎は歔欷を止めて、驚きたる如く小しんの顏を見、やがて句樂の日記を手に取り上ぐ。兵造は何も知らずに眠る。
外は荒れ狂ふ暴風雨なほ止まず、戸の隙間より吹き込む風のために。洋燈の灯も危く消えさうになる。幕。)

此脚本の姉妹篇にあたる
「俳諧亭句樂の死」
は本誌の四月號(春期大附錄號)に掲げられたり



奴隷　一幕

田村俊子

人物

星崎新之助　落魄してゐる文士

船井藤子　同棲してゐる女、同じく職業的に筆を執つてゐる女

奥田露子　星崎の家に寄食してゐる娘

おとみ　下女

時代　當今

時　六月初旬のある夜

場所　東京附近の郊外

星崎の住居。二階家。舞臺正面下手寄りに潜り門を附け、門の右から上手に極く奥行の淺い庭内の空地を取つた見付で竹垣を圍む門に軒燈をつける。（潜り門の左、下手は郊外の淋しき道）垣根の上より僅に階下の家根を見せ垣根と家根の間に青楓、檜葉など二たつ三つ植木の頭が見える。その上いつぱいに二階を置く。事件はすべて二階にて起ることとなれば、少し裝置が不自然でも二階を低く、場面をひろやかに設けること。二階の正面には欄干、その廊下を下手に曲つて階子段のついてる心。室は三疊と八疊の二た間つゞき。一方の三疊の室は硝子の入つた障子二枚閉てきつてあり、電燈の光りが障子に映つてゐる。八疊の室は、障子が開けはなしてある。障子の横から机が見える。机の上にインキ壺、硯箱、原稿紙、書籍、亂雜に散らかつてゐる。油繪の額、柱にミケルアンゼロ模作の死の女神の石膏の額などが高くかゝつてゐる。硝子のこわれた本箱も見える。上にシーザーのブロンズの胸像、佛像などが乘つかつてゐる。室の中央に十燭のタングステンの電燈が下がつて、割合に煌々としてゐる。

（星崎新之助、三十七八才、神經質な顏面、頬骨の出た、痩せた男机の前から少し居膝つたところに、兩膝を立て、その膝の上に兩腕をのせて突つ伏してゐる、ぼろになつた汚れた袷一枚を襯衣の上に素で着てゐる。破けた裾から、細い脛と素足が見える。と、潜りが開いて奥田露子が靜に出てゆく。ハイカラ。白粉が濃くついた一寸人目に立つ可愛らしい顏。十九か二十才。派出な餘所行きの扮裝。門を出ると家の垣根について上手に入る。その潜りの開いた音で新之助は顏を上げる。眼鏡をかけてゐる。階子段を上がつて藤子出る。一寸廊下に立つて露子の行つた方面を眺める。三十前後。お粧りをしてゐるが恐しく不健康な顏色をしてゐる。年よりは若く見えるが容貌の美いと云ふ方でなし、表情によつて、馬鹿に奇麗に見える時もあるが。筋肉のよく動く顏面で、大柄な質平生着にしては上等な荒い縞のセルを着てゐる。手にも指環など箝めてゐる。）

藤子。（障子際に立つて寄つかゝりながら、猶往來を見たまゝで）奥田さんも中々勝手をやるのね。私に一と言も斷らずに出て行つたんです。

新之助。行つたのか。

藤子。えゝ。山上とか云ふ人のところへ逢ひに行つたんです。直接當人に逢ふのでせう。奥田さんもあんな風に不眞實では、ほんとに嫌になりますね。まるて蜘蛛が巣を引つかけるやうに、方々へ結婚の網を張つて釣つてるんですもの。私たちの方の、堀田さんの話は何うするつもりでゐるんでせう。

（新之助無言で、又兩腕の上に頭を突つ伏す。）

藤子。堀田さんのところへは、あの人が自分からお嫁に行くと云ひ出して、こゝまで進んで來た話ぢやありませんか。其れを拋つておいて、私に一言の斷りもなしに、又山上とか云ふ人の結婚の口に乘つてゆくなんて、可なり人を踏みつけてますね。

新之助。然し仕方がないさ。山上の方の口が奧田に氣に入つたんなら、それまでの事さ。そうして山上の方の話が進行するなり、發展するなりしたならば、堀田の方は取消しにするまでさ。僕一人の責任に歸しておけばいゝだらう。

藤子。（ヤヽ皮肉に）いやに今夜は、あなたは澄まし返つてゐるんですね。あなたは今朝私に何と云ひました。堀田さんに對してあなたが面目を失しるやうな事があると困るから、話が定まるまでは、奧田の行動に就いてはある程度まで干涉する必要があると云つたぢやありませんか。然うして、山上に逢ひに行くやうな樣子があつたら、一應差しとめなくちや可けないと云つたでせう。

新之助。然しね。人の行動の自由はさまたげる譯には行かない。——これはその時君の云つた言葉だ。全く然うさ。それに違ひないんだ。何をしやうと其の人の意志にあることだ。其れを束縛する權利はない。奧田が山上がよくなつて、堀田の約束を破りたければ破るがいゝさ。（ある事を思ひ出して）人の行動は自由さ。人の意志は尊重すべきものだ。男女の間でも。兄弟の間でも。例へば君が何を爲やうと、僕にはそれを干涉する權利はない。君がどんなに爲たいことを爲ても。——

藤子。あなたは、又其れを云ひ出すんですか。

新之助。いや。止そう。

（二人暫らく沈默。藤子依然と立つたまゝで往來をぼんやりと見てゐる。）

新之助。僕も、もうこの袷を着てゐる譯にも行かないと思ふんだが。隨分ひどくなつたね。ぼろになつて方々が破れて來た。

藤子。然うですか。

新之助。緋の單衣物はまだ出來ないんだらうか。

藤子。あれゝ奥出さんに頼んであるんですけれど、中々縫はないんです。結婚のことで夢中になつてるんですから。家にゐたつて十間一とつ掃いたこともなし、着物を縫つて貰はうとすれば、半月も一と月も抛つておくんです。口ばかりでお世話になるとか何とか云つてゐて、爲ることはほんとうに自分勝手なんですからね。

新之助。何時出來るんだい。

藤子。聞いて見なけりや分りません。

新之助。見つともなくつて仕様がないからな。これぢや、もう湯にも行かれない。この近所で袷なんぞを着てるものは一人もないんだからな。誰だつて、もう單衣物を着てゐるんだ。

藤子。ぢや、私が縫ひませう。今夜中に縫つて上げればいゝでせう。

（藤子は腹立しそうな聲で下女を呼ぶ。おとみ出る。廿一二、優し氣な女）

藤子。この間買つて來た緋の反物を持て來ておくれ。針箱もいつしよにね。

（下女入る。藤子も座敷の内に入る。）

藤子。朝から晩まで、一日机に向つてゐるんですもの着物を縫つてる暇なんぞはありやしません。六月になつたと云ふのに、あなたが襤褸の袷を着てゐるのを私だつて氣が付かない事はないのです。けれども手が廻らなければ仕方がないでせう。家には女が三人もゐながら、針の持てない女や、仕事がてきても縫ひ物をするのが億劫な女ばかり揃つてるのですからね。

（下女、裁板の上に品々を揃へて持つてくる。藤子二尺ざしを取つて反物を裁ち初める。捨鉢にてきぱきとした擧動で鋏を使ふ。新之助は見てゐる。藤子が袖を縫い初めるまで二人とも無言。やゝ沈黙がつゞく。）

藤子。今夜寢ないだつて縫つて上げます。明日の朝から着られますよ。

新之助。然し君は明日の朝の仕事があるんだからな。

疲れるゝ氣の毒だ。

藤子。そんな事は構ふものですか。あなたに襤褸を着せておく譯には行きませんから。――何から何まで私が一人で負擔して働けばいゝんです。家中が干乾しにならないやうに、朝から晩まで仕事は仕つゞける。その間には主人に襤褸を着せないやうに針仕事もする。臺所の煮物の世話も燒くんです。あなたは御主人ですからね。

新之助。そんなに苦しいのかい。一人で働くのがそんなに苦しいのかい。苦しいなら止したらいゝだらう。

藤子。何ですつて。止したらいゝだらうと云ふんですか。

新之助。然うさ。何にも爲ないでゐたらいゝだらう。

藤子。干乾しになつてもいゝんですか。

新之助。いゝとも。結構だ。そんなに苦しい思ひをして働いて貰ふ必要はない。一人で働く、一人で働くと君は云ふが、其れがどれほどの事なんだ。意氣地のないことを云ふない。

藤子。（冷笑して）何にも爲ずにぶら〱して、女に食べさせて貰つてる人なんぞには、恐らく分らないでせうよ。私がどんなに苦しい切ない思ひをしてゐるか。恐らくあなたなんぞには分らないでせうよ。私がどれほどの働きをしてゐるかとあなたは云ふんですね。（反語的に）そりやあなたの樣な精力家の眼から見たら、私の働きなんてものは、物の滓にも價しないでせうよ。けれども私にしては大變な努力なんですからね。もう一年も私はこんな生活をつゞけてゐるんです。ほんとうに私は喘ぎ〱働いてるんです私は自分ながら、よくこれだけの精力が私の身體にあることだと思ふ程、私は力いつぱいに毎日々々働きつゞけてゐるんです。えゝ。私は苦しいんです。もうどんなに苦しいか知れないのです。その苦しいのを我慢して働いてるんです。（藤子、いつか涙聲になつてゐる。）苦しがつて働くなら止せと云ふんですね。それは何う云ふ言葉なんです。どう云ふ意味の言葉なんです。苦しがつて働いて貰つても有難くないと云

ふんてすか。然う云ふ意味なんてすか。

新之助。まあ然うだ。

藤子。ぢやお止しになつたらいゝてせう。あなたがお止しになつたらいゝてせう。私なんぞに養つて貰ふことをお止しになつたらいゝてせう。苦しみ〳〵働いてるものに同情の言葉てもかけるなら知らんと、苦しがつて働いて貰つても有難くないとおつしやるんなら、そんな意氣地のない女に養つて貰はないことてす。御自分てお働きになるがいゝ。

新之助。よし。僕は自分て働く。決して君の世話にはならない。やるとも。僕はいつても働かうと思へば働けるんだ。何だい。苦しがつて働くとか、喘ぎ喘ぎ働くとか云つてるが、その苦しい中て、若い男を戀したり、一所に遊び廻つたりしてゐるだけの餘裕があれば結構ぢやないか。氣を付けて物を云へ。

藤子。あなたは其れを云ふんてすか。

新之助。云つて惡るいと云ふことがあるか。

藤子。然うてすか。云ひたきやお云ひなさい。

（藤子。縫物の手をやめて、しばらく新之助の顔を見詰めてゐる）

藤子。（冗談を帯びた口吻て）然しね。人に養つて貰ふやうな身分てゐながら、若い女に情慾を感じたりするよりは、私の方が立派ぢやありませんか。

新之助。誰れの事を云つてるんだ。

藤子。あなたの事を云つてるんてす。あなたは奥田さんから始終パッションを感じると云つてるぢやありませんか。

新之助。（低い聲て）然し僕は單に感じるばかりなんだ。僕はそれを抑制する道徳を知つてゐる。だから僕は情慾を感じたつて奥田の傍に接したこともない。君は然うてはないぢやないか。君は男と手まて曳いて歩いたぢやないか。（次第に怒りを帯びて）君はその男と接吻までしたぢやないか。

藤子。餘計なことは云はないて下さい。――情慾を感じればもう女を犯したもおんなじぢやありませんか。抑制なんてことは詮らない表面的な道徳てす。感じたら行つてしまつた方が徹底してるぢやありません

か。却つて男らしいぢやありませんか。

新之助。然うか。其れぢや君は例の場合には、君の意思を徹底させたと云ふんだね。

藤子。然しあなたとは愛欲の階級が違ひます。

新之助。それは何う云ふことだ。

藤子。私はあなたのやうに、本能的なパッションは感じなかつたんですからね。どんな場合にも私は唯戀のシーンを樂しんだだけです。私の爲たことは精神的です。あなたのやうに、女を見るといきなりパッションを感じるのとは違ひます。私はどんな場合にも、男を美しい人形だと思つて見てゐたんですからね。肉を想像したなんてことは唯の一度もなかつたんですからね。私はいつも詩を作つてゐたんです。古るい云ひ草ですが戀を戀してゐたんです。

新之助。どつちだつて同じことだ。戀を戀してゐるのは精神的だと云ふのか。精神的な行爲だと云ふのか。君の云つてることは僞だ。

藤子。何が僞です。

新之助。おい。情慾を感じない戀と云ふものが何所にある。

藤子。外にあるか無いか知りません。私は自分のことを云つてるのです。――僞ですつて？それが僞だと云ふのですか。男を愛してゐながら情慾を感じないと云ふのが僞だと云ふのですか。

新之助。あたりまへだ。それは僞だ。君は僞を云つてるんだ。

藤子。（冷靜になつて）然うでせうね。女を見ると、いきなりパッションを感じるやうなあなたには、そんな戀愛の心持はおわかりにならないでせう。然う云ふ高尙な感情は理解することができないでせうよ。あなたと私の、平生の生活から云つてもわかることです。あなたは徹頭徹尾肉に生きてるぢやありませんか。あなたは、生活力を失つてくると反比例に、ますます慾がさかんになつて行つてるぢやありませんか。私のことを考へてごちんなさい。私はあなたと反對な狀態になつてゐるんです。

新之助。君はインポシブルだと云ふのか。ふん、そんな事が當てになるかい。僕の前だけてインポシブルだと云つた方がいゝだらう。——愛欲の階級だと云やあがる。

藤子。もう一度云つてごらんなさい。（二尺ざしで力任せに裁板を叩いたので物さしが縦に二たつに割れる）そんな野卑な言葉を使つていゝんですか。

新之助。野卑な行爲をした女に對して、どんな立派な言葉を使へばいゝんだ。

藤子。何てすつて？野卑な行爲てすつて？おやあなたは何てす。あなたは野卑てないと云ふんですか。え？あなたは野卑てないと云ふんですか。

（新之助返事をしないでゐる）

藤子。（しばらく唇を噛んで）あなたがね、それほど私を野卑な女だと思ふならてすね、そんな野卑な女から養つて貰はないがいゝぢやありませんか。野卑な女から養つて貰つてるあなたは何てす。あなたこそ惡漢てす。自分のことを考へてごらんなさい。——あなたよりは、もうちつと私の生活は高尚てすよ。

新之助。一人や二人の人間を養ふのが高尚な生活だと云ふのか。

藤子。何も人間を養つてるから高尚な生活をしてゐると云やあしません。あなたの様に大事な月日を怠けてゐないだけても、私の生活は意義を持つてゐます私は毎日勉强をしてゐるんですから。

新之助。結構なことだ。勉强をして、ますます偉い女になるのかね。

藤子。偉くなるとか、偉くならないとかの問題ぢやありません。くだらない人間で終りたくないと云ふだけの心がけてす。一生かゝつて、努力して、自分の精神生活を押し進めるだけ進めやうと云ふだけの考へてす。

新之助。精神々々と云ふ言葉を振りまはすが、君の精神は腐つてゐるんぢやないのか。おい。

藤子。私の精神は腐つてゐません。あなたのやうに腐つてはゐません。

新之助。馬鹿を云へ。他に男がありながら、若い男と飲食をして遊んで歩く女の精神が腐つてゐないと云ふのか。

（藤子。相手にしないと云ふ態度で無言でゐる。）

新之助。君は僕を惡漢だとか、怠けてるとか、女に養つて貰つてるとか云つてるがね、斯うなつたのは誰の爲だと思つてるんだい。君には解つてるのか。僕は君の爲に僕の生活を阻害されたんだぞ。

藤子。それは何う云ふことてす。妙なことを云ふんてすね。

新之助。僕は君の爲に世間へ出られなくなつたんだ。考へて見ろ。

藤子。私にも解りません。

新之助。君は偉い女だ。君は僕等の生活を縦横に書いて、それで人氣を取つたんだ。それは君にはたしかに才筆だ。又天分も持つてゐたらう。然し、僕はさん〴〵君の筆の先にかけられたお蔭で、肩身の狹い人間になつてしまつたんだ。僕は君の爲にだん〳〵因循な人間になつてゆくんだ。だん〳〵世間に出られなくなつてゆくんだ。

藤子。馬鹿なことをお云ひなさい。私の爲にどうしてあなたが世間に出られないんですか。あなたはあなたで、世間へお出になつたらいゝぢやありませんか。私はいゝ迷惑ですね。（冷笑して）もつとも、天才の前には多くの犧牲者を出すさうだから、私が天才で、あなたは犧牲者の一人なんでせう。

新之助。いや、事實においても、僕は君の犧牲にされたやうなもんだ。然し、いつまでも犧牲にされてはゐないぞ。僕は君と鬪つて見せる。

藤子。私と鬪ふんですか。鬪つてごらんなさい。現在でさへ、二人は鬪つてるんぢやないんですか。（藤子また愚弄的に冗談の口吻を帶びてくる）この上、どう云ふ準備をしてあなたは私と鬪ふんです。あなたが一生私を敵にして鬪つても、私はあなたなんかを相手にしてゐやしませんよ。私はもつと大きな世間と鬪つてるんですから。

新之助。（憤りを含んで）僕は世間に出る。さうして君の名聲を滅茶々々に叩き落してやる。僕が君と鬪ふと云ふのはそれだ。偉い女顏をしてゐるのが癪にさわるんだ。君がどんなに偉い女だと云ふんだ。今に見るがいゝ。君をすつかり文壇から葬つてやる。

藤子。有難いことですね。私にそんな名聲があるんですか。私はちつとも知りませんてしたね。然し、私は、偉い女ではありませんよ。又、私は嘗て偉い女顏をしたこともありませんよ。それから今日まで、私は一度てもあなたに對して、私の働き振りを鼻にかけたこともありません。よく考へてごらんなさい。私は一度だつて、あなたに對して威張つて態度を見せたことがありますか。そんな態度を見せたことがありますか。それは、自分の名は大事です。けれどもね、私は嘗て自分の名を誇つたことはありませんよ。又誇るほどの名聲でもないてせうからね。

新之助。然し君は、僕よりも幸福ぢやないか。僕の存存なんぞはまるて失はれてゐるが、君は堂々とした文壇の生活をしてゐるぢやないか。

藤子。それが癪にさわるんですか。あなたも卑吝な人間ですね。それが癪にさわるから、私を葬つてやらうと云ふんですか。

新之助。いや、そればかりぢやない。

藤子。そんな小供見たいなことは云はない方が宜ござんすよ。見つともないから。あなたはこれ迄も、もう私に決して養つて貰はないとか、自分だけて働くとか云つて、二度も三度も家を出たぢやありませんか。さうしては、何うすることも出來なくつて歸つて來たぢやありませんか。冬の眞つ最中に、夜つぴて其邊中をうろつき廻つて歸つて來たりしたぢやありませんか。さうして、小供のやうにおい〳〵泣いたりしたぢやありませんか。それは世間へ出てお働きなさるのもいゝし、私を葬るもいゝし、何でもおやんなさるが宜いが、何うすることも出來なくなつて、又私のところへ引つ返してくるのが落てはありませんか。

新之助。馬鹿を云へ。僕は決心してるんだ。いつたん家を出てた僕が直ぐに此家へ歸つて來たと云ふのはそれは以前のことだ。君にあゝ云ふ事のなかつた前のことだ。今度は僕にも覺悟がある。僕には生涯忘れることのできない恥辱を受けさせられたんだからな。僕はその復讐をするんだ。其れだけなんだ。君は僕に對して、威張つた態度を見せたことがないと云つた。然うか。威張つた態度は見せないが、僕に恥辱を與へることはできるんだ。君は偉い女だと自認してはゐないと云つた。然う云ふ謙遜な君が、何うしてあんな大膽なことが出來るんだ。何うしてあんな人を食つたことができるんだ。――君は決して僕に愛があるのぢやない。恐らくそれは君も自覺してゐるだらう。君はたゞ、僕を食はしておけばいゝと思つてゐるんだ。犬や猫を飼つて、それに食物を與へるやうに、君は僕に食を與へておきさへすればいゝと思つてゐるんだ。

藤子。然うぢやありません。

新之助。然うでないことがあるか。僕を犬畜生と同樣に扱つてゐるのさ。

藤子。然う思ふなら。犬のやうな生活に甘んじてゐないがいゝでせう。私に犬扱ひにされるのが口惜しければ、犬から人間になつたらいゝでせう。

新之助。無論のことだ。

藤子。それなら犬扱ひにされながら私の傍にくつついてることは無いぢやありませんか。何の爲にこの家から離れずにゐるのです。何の爲に私にくついてゐるんです。あなたよりは犬の方がましだ。犬はあなたより、もつと絶對屈從な動物です。主人に逆らふと云ふことを知りませんからね。食を與へられるものに對しては恩を感じてくれます。一生恩を感じてくれます。女に養つて貰ひながら、主人顏して、いつぱし權利のあるやうな理窟は云ひません。これから犬でも可愛がることにしませうよ。おんなじ食物を與へるならね。犬は食を與へられた主人に對して、牙をむくやうな恐しいことはしませんからね。

新之助。犬より若い男でも可愛がつたら猶いゝだらう

藤子。侮辱するんですか。あなたは。

（藤子立上つて物さしで新之助を突く。新之助は抵抗しないでゐる。）

藤子。あなたは、二度とあの事は云はないと誓つたんぢやありませんか。何故それを破るのです。何うしても其れが云ひたいのですか。

新之助。（嫉妬に激して）云ふ。幾度でも云ふ。僕は生涯それを云ひつゞける。僕には到底忘れることのできない事件だぞ。僕にはあの事件を忘れることは出來ない。僕はあの事件の爲にどんな苦痛を受けたと思ふんだ。（顔色青ざめてぶるぶると總身をふるはしてゐる。）僕の一生は君の爲に滅茶々々にされたんだ。君の爲に、僕は世間へ顔出しのできない大きな侮辱を受けたんだ。

藤子。あなたは決して二度とあの事は口にしないと誓つたぢやありませんか。其れを幾度でも云ふとおつしやるんですね。男らしくないことをするんですね。そんな卑怯な奴がありますか。

新之助。君は苦痛なんだな。其れを云ひ出されるのが苦痛なんだな。

藤子。いゝえ。決して。あなたが何度それを云はうと私はなんとも感じません。然し、あなたの方から、あの事件は口にしないと云つておきながら、絶えず口にしてゐるぢやありませんか。私はそれを責めてゐるんです。あなたが何うしてもその誓を守らずに勝輪（ある男の名）の事を云ひ續けるとおつしやるなら、ごいつしよにゐる事をお斷りします。出て行つて下さい。直ぐ出て行つて下さい。私が何を爲たつて私の勝手ぢやありませんか。あなたと云ふ人といつしよにゐる爲に、あなたから始終意志の自由を侵されるんです。ほんとうに煩い。煩い。煩い。煩い。直ぐ出て行つて下さい。私といつしよに居ないで下さい。もう一分間でも私の傍にゐないで下さい。——どつちに權利があると思つてゐるんです。あなたは私に養はれてる男ぢやありませんか。誰れが此家の主人だと思つてるんです。直ぐ出て行つて下さい。

出て行け。（藤子物さしで新之助の肩を打つ。）

藤子。出て行け。

新之助。よし、出て行く。

藤子。然うして復讐でもなんでもやるがいゝ。どんな目にでも逢はして見るがいゝ、お前さんなんぞに叩き落されるとか、叩きつぶされるとか云ふほどの名聲でもなんでもないんだ。又、そんな名聲なんとか云ふものを當てにして生きてる人間ぢやないんだ

新之助。（立つて、汚ない服を着直したり、本などを二三册取り揃へたりする、いかにも見窄らし氣な風をしてゐる。）もう二度と汝には逢はないからな。どんな復讐をされるか覺えてゐろ。

藤子。そんな捨ぜりふ見たいなことは云はない方が立派だ。默つて出て行け。お前さんは惡漢ぢやないか惡漢なんぞは相手には出來ないんだ。お前さんは、犬のやうに食を與へられると云つたがね、自分は犬畜生より劣つた人間ぢやないか。考へて見るがいゝや。私から離れゝば差し詰め食べるに困るあなたぢやないか。其れが辛くつて私にくつついてゐた迄ぢやないか。そんな人間にどうして愛の問題の詮索なんぞが出來ると思ふんだ。あなたには、愛なんと云ふ立派な言葉を口にする資格はない。少しても、私から好遇を受けられたら、それで滿足しておとなしくしてゐれば充分な人間なんだ。すべてに力と云ふものを失つてる人間の癖に、私にだけは抵抗のできる力を持つてゐる——（俄に憤激して）私はまだ他人から馬鹿にされたことはないが、あなたには始終侮辱を受ける。なんて事だらう。私はお前さんのやうな人間といつしよにゐる爲に、お前さんのやうな無氣力な人間に馬鹿にされなくちやならないのだ。（ある限りの力で新之助を突きながら）出て行け。出て行け。

（新之助二階を下りて行く。藤子物さしを持つた儘で、少時の間立つてゐたが、あわてゝ下りて行く。二階はしばらく空虚）

新之助潜り門を出る。帽子をかぶつてゐる。

藤子。お待ちなさい。

（藤子の顔が潜り門から見える。）

藤子。念を押しておきますがね、今度こそ此家へは歸つてこないでせうね。
新之助。あたりまへだ。
藤子。きつと歸つてこないでせうね。
新之助。決して歸らない。何だつてそんなことを聞くんだ。
藤子。それだけ聞いておけばいゝんです。其れから復讐をすると云ひましたね。それも口先だけぢやないんでせうね。
新之助。きつと復讐をする。どんな方法でやられるか待つてゐたらいゝだらう。
藤子。復讐を待たうと待つまいと大きにお世話です。私はあなたに念を押したんです。復讐をすると云ふ覺悟が消えないやうに、念を押して上げたんです。
（新之助俯向きながらずん／＼と歩いてゆく。下手に退場、藤子門をしめる。）
藤子二階に現はれる。廊下に立つて外を見てゐる。丁度二十日頃の月が出る。道路の四邊がいくらか薄明るく。田圃の蛙の鳴く聲が聞こえる。初夏の夜氣の染み通つてくるやうな空寂な氣分が舞臺に漂ふ。若い男の通行人一人あり。上流の人のやうな裝ひをしてゐる。上手から下手に入る。藤子はそれを見送つてから座敷に入る。縫ひかけの單衣物などを弄つてるうちに、藤子は縫ひ上げた片袖を額にあてゝやゝ長い間、舞臺に背を向けて泣いてゐる。しだいに、幽かな嗚咽の聲が漏れる。下女おとみ出る。

とみ。（廊下の外に坐つて）奥さま。
藤子。（向ふを向いた儘で）何だい。
とみ。旦那樣は、又何所かへいらしつたんで御座いますか。
藤子。あゝ。然うだよ。
とみ。もう歸つてこないとか云つてつらつしやいましたが、全く然うなんで御座いますか。
藤子。あゝ。
（とみ默つて考へてゐる。）

藤子。（とみの方を向き、今度は袂から半巾を出して涙を拭きながら）あんな汚ない風をしてね。私はそれを考へたら悲しくなつたんだよ。

とみ。旦那様は短氣て御座いますからね。

この間に、奥田露子上手より出て、星崎の門を入る。

藤子。誰れか來たやうだね。

とみ。（階子の下り口へ行つて下の様子をうかゞつてから、又廊下へ戻つて坐りながら）奥田さんて御座います。

藤子。歸つて來たんだね。

とみ。へえ。

藤子。何處へ行つたらうね。今夜は少しもお金を持つてゐなかつたんだよ。

とみ。旦那様て御座いますか。（少し笑つて）お金がなくつてはお困りて御座いませうがね。

藤子。友達があつてもお金なんぞは借りることの嫌いな人だからね。今夜もまた、上野の山へても行つて一と晩夜明しをやるんだらうよ。それとも——あゝ、本を二三冊持つて行つた。あれを賣るんだらう。

とみ。然うて御座いますか。そのお金て、また横濱のお姉さまのところへても入らつしやるのては御座いませんか。

藤子。然うかも知れないね。——然うしたらせめてこの單衣物だけても送つてやりたいね。

とみ。然うて御座いますね。あの装ては旦那様もお困りて御座いませうから。

藤子。まるて乞食見たいだもの。

（藤子、又涙が出て半巾て拭く。下女も眞實から悲しさうな風をしてゐる。）

とみ。旦那様が短氣だからいけないので御座いますねあゝして家を出てゐらしつても又直ぐ歸つていらつしやるんて御座いますから少しの事なら御辛抱なさればよろしいんて御座いますがね。

藤子。何、あの人は此家にゐない方が仕合せなんだよ此家にゐると、あの人はだん／＼何も出來なくなるんだよ。だから家を出た方が却つてあの人の爲になるのさ。

とみ。然うて御座いますかね。けれども、矢つ張り此家にいらしつた方がお仕合せだと存じますがね。

藤子。いつしよになれば、兩方が不仕合せさ。

とみ。皆さんが宜いかたなんて御座いますけれどもね。

藤子。もし横濱へ行つたと分つたら、お小使も少しは送つてやらう。それから着物と。

とみ。それが宜う御座います。横濱へ電報でもお打ちになつたら如何て御座います。

藤子。然うしてもいゝね。(藤子又泣く。)

とみ。奥様がいらつしつても宜う御座いますね。お近いところなんて御座いますから。

藤子。(きつぱりと)私が直接に行くことはてきないよ。

とみ。奥様がいらしつては惡るいのて御座いますか。そんな事は御座いませんてせう。却つてお喜びなさいますてせう。旦那様のお姉様も御安心なさいますし——

藤子。いゝえ。私が行くことはてきないの。私から行つてはいけないの。

とみ。然うて御座いますか。

藤子。それはお前には解らないことなの。

(奥田露子出る。おとみの後に坐らうとしたが、狹いので、向ふへ廻る。)

露子。たゞ今歸りました。

藤子。お歸んなさい。

露子。私ね、先生。お斷りして參らうかと思ひましたけれども、時間が無かつたもんて御座いますから急いて出てしまいまして。

藤子。何てすの?

露子。(恥羞を帶びて、手を突きながら)山上と云ふ人のところて御座いますね。あの人の許へ今晩逢いに參りましたの。

藤子。然うてすか。

露子。然ういたしましたらね。山上と云ふ人が云ひますには、私を是非もらいたいと云ふのて御座いますの。

藤子。然うですか。
露子。私が婦人記者などを致したつて云ふことがわかりまして、あの方のお母様やお父様にお氣に入らなかつたんで御座いますけれども、山上と云ふかたは是非私と結婚したいから、御兩親を說伏するまで待つてもらいたいと、おつしやつたんで御座いますの。
藤子。然うですか。
露子。けれども。――私は先生にお願ひして、堀田さんと云ふかたのところへ、お嫁に行くことに定まりかけてをりますから、――何うしやうかと存じまして。――
藤子。どつちでも、あなたが幸福だと思ふ方にお決めなすつたらいゝでせう。――堀田さんの方も確實に極まつた譯でもありませんからね。今の內なら、いくらでも取消すことが出來ますからね。
露子。そんな事ができませうか。
藤子。できなくつても、あなたが山上と云ふ人が氣に入つて、その人と結婚したいとお思ひなすつたら、その人と結婚をなすつたらいゝでせう。
露子。でも――私には分らないんで御座います。
藤子。分らないとは？　山上がいゝか堀田がいゝか分らないと云ふんですか。
露子。えゝ。
藤子。けれども、山上と云ふ人には、もうこの前にも一度お逢いなすつたことがあるんでせう。その時のお話では、あなたは大變山上と云ふ人を賞めてゐましたね。
露子。えゝ。
藤子。堀田と云ふ人にはあなたはまだお逢いにならないんだし、手紙だけで定めてることなんですからね。何方かと云へば、山上と云ふ人に對する方が、逢つてゐるだけでも確實な譯ですわね。
露子。えゝ。――もしお斷りできるなら、堀田と云ふかたの方をお斷りしたいと思います。
藤子。（むつとして）然うなすつた方がいゝでせう。どつちても、好さそうな方を取るのがあなたの爲には幸

厭なんですから。――

露子。けれども、堀田と云ふかたは、旦那様のお親友ていらつしやるし、お断りしたら旦那様が御立腹になりはしないてせうか。

藤子。そんなことは構いません。それに、堀田と云ふ人は、これから働いて財産を作らうと云ふ人だし、山上と云ふ人は二三十萬の財産のある人だと云ふんてすからね。地位から云つても、堀田と云ふ人の方は不安なものてすよ。（氣が付いて）星崎は、もう家にはゐないのてす。

露子。え？　旦那様が？。

藤子。又、家を出て行つたのてす。

露子。まあ。然う。（急に冷嘲を帶びて）今度はいくら旦那様ても、もうお歸りにはならないてせうね。

藤子。（ぢつと露子と見て無言てゐる）。

とみ。また歸つていらつしやいますよ。

露子。どんな風にしてお出でになつたんて御座いますの。先生。

藤子。もう歸らないと云つて出てゆきましたよ。そうして私に復讐をするんだそうです。

露子。何の爲にて御座います。

藤子。私の文壇の地位をめちや／＼に叩き落すんだそうてす。いろ／＼な復讐なんてす。勝輪のことも含んてゐるんてす。まあ、その爲なのてせうね。

露子。ずいぶん馬鹿なことをおつしやるんてすわね。旦那様はどうかしてゐらつしやるわ。旦那様は何がんてゐらつしやるんてすわね。そんな事て、先生の地位が失くなつたらたいへんだわ。どんな事を成さるかわかりませんてすね。

藤子。何もてきやしないてせう。又、爲れたつて平氣てすよ。

露子。其れは然うて御座いますわね。（とみを顧みて）旦那様の力なんかて叩き落されるやうな先生の地位てはないわ。ほんとにあの旦那様は卑しいんてすのね。私、嫌いなんてすの。旦那様は――

藤子。なにも、其れほどの私の地位ても名てもありや

じません。（思はず涙聲になつたが氣を取り直す。）唯ね、亂暴でもされると困りますからね。

露子。ほんとに、あの旦那様はなさり兼ねませんね。先生は御用心なさらなくちや、險呑で御座いますわね。

（藤子だまつてゐる。）

とみ。旦那様はそんな事はなさいませんよ。短氣なかたですけれども、根はお優しいかたなんで御座いますから――

露子。それが却つていけないのよ。然う云ふ性質の人が亂暴なことをするのよ。いつかだつて、先生を打つたりしたでせう。お酒でも飲むと、あゝ云ふ人が亂暴をするのよ。

とみ。そんな事は御座いませんよ。

露子。どうしておとみさんはそんな事を云ふの。

とみ。どうしてつて事もないけれども、（人の好い笑ひを含んで）旦那様は奥様をお好きでいらつしやるんですから、そんな亂暴はなさいませんよ。きつと歸つていらつしやいますよ。

露子。だつて、いくら旦那様だつて、もうこれで三度かでせう。男ですもの、極りが惡るくてお歸られになりやしないわ。家を出ちや、歸つて來、家を出ちや、歸つて來しちや、見つともないわ。女ぢやあるまいし――よくありますね。先生。やきもちを燒いては、家を飛び出して、そうして死ぬんだの井戸へ飛び込むんだのと云つて、人を困らせるのよ。ねえ先生。よく世間に御座いますね。女見たいだわ。

藤子。（ぼんやりと笑つてゐる。立つて廊下へ出て來て外を見てゐる。しばらく三人沈默。）

藤子。寒くなつて來たね。

とみ。へえ。夜が更けましたから。

露子。（廊下へ立つて、藤子と並びながら）ねえ先生。男と女つてものは、ついした事で別れるものなんですわね。

藤子。然うですね。

露子。わからないもんですことね。私がさつき家を出てゆくまで、旦那様は機嫌のいゝ顔をしてゐらしつ

たんですけれど、そうして先生もね。何かお二階でお話して笑つてゐらつしやいましたわ。

藤子。然うでしたか。

露子。それが、一寸の間に。――一時間もかゝりませんでせう。私がそこの停車場から次ぎの停車場まで行つて、そこで山上さんにお目にかゝつて、お話を聞いてゐた間が、たつた二十分ぐらゐでしたもの。ほんとに、一寸した機なんですわね。男と女が別れてしまふのは――

藤子。私たちは夫婦並みな夫婦ぢやなかつたんですから。けれども、ある事でくつついてゐた異性同士には違ひありませんね。

露子。先生はお一人の方がよろしいんですから、却つて旦那様のゐらつしやらないのがお仕合せですわね。

藤子。つくづく、男女の關係なんてことはいやになりましたね。私はこれから宗教にでもはいつて、嚴しい禁欲生活でも送つて見やうかしら。

露子。そんな事をなさいますの。藝術をお捨てになるんで御座いますの。

藤子。なんだか少し世の中がいやになつて來ましたね。（笑ふ）おとみ。

とみ。はい。

藤子。床を敷いて頂戴な。

とみ。はい。

（とみ座敷に入つて、縫物などを片付ける。）

露子。そんな心細いことをおつしやつて。先生のやうに名の賣れたかたは、お一人になれば猶おもしろい生活がおできになるぢや御座いませんの。（憧憬を持つて）私も先生のやうだつたら、結婚なんかしませんわ。一人でゐて、おもしろい生活をいたしますわ。

藤子。然うですか。――恐らく人間におもしろい生活つてものはないでせうね。

露子。そんなことはないでせう。これから先生がお一人になれば、いくらでも面白い生活をお送りになることができると思ひますわ。

藤子。どうして然うお思ひになるの?。

露子。だつてね、先生。旦那様がいらしつたから、おもしろい生活もおできにならなかつたんですけれど、旦那様がいらつしやらなければ、ほんとに自由ですもの。何を為すつても先生の御勝手ですもの。

藤子。だからおもしろい生活が送れるんですか。

露子。然うでは御座いませんの?。

藤子。然うでせうかね。

露子。でも、先生は、旦那様がいらつしやらない方がいゝんぢやないので御座いますか。

藤子。えゝ、然うですよ。星崎が出て行つてくれて、私はせい〳〵してゐるんです。

露子。其れぢや矢つ張り、先生はお一人になる方が幸福でゐらつしやるんでせう。

藤子。(しばらく沈黙して、)さあ寝ませうか。奥田さんもお寝みなさい。

露子。えゝ。では先生。あんまり御心配なさらない方が宜う御座いますわ。

藤子。有がたう。あなたの結婚問題も、あんまりあせらずによくお考へなさい。

露子。えゝ。よく考へて見ます。

(とみ床を延べて、枕など据ゑてゐる。藤子其れを見る。)

露子。今夜はお一人でお淋しいて御座いませう。

藤子。(おなじく寝床を見て)いゝえ。

露子。おやすみなさいまし。

(露子はいる。藤子座敷にはいつて寝衣に代へ、床にはいる。)

とみ。奥さま。おやすみなさいまし。

藤子。戸を閉めて行つておくれ。

とみ。はい。

(とみ雨戸を繰る。舞台ひつそりとする。それより三四時間の経過を見物に思はせる為に、一寸舞台を暗黒にする必要あり。しばらくして舞台が、以前の舞台面より少し暗い程度で、明るくなる。月が見えなくなつて、星崎の軒燈の灯も消えてゐる。新之助車にて下手より出る。星崎の家の前にて、下車し、車夫に賃金を拂つて帰す。新之助は門を軽く叩いたが、返事がないので、二三度叩く。考へては叩くこと二三度あり。やゝ長い間があつて、)

とみ。(家より)どなたで御座います。

新之助。おれだ。

とみ。旦那様で御座いますか。

新之助。然うだ。あけてくれ。

（とみ門の潜り戸をあける。）

とみ。お歸りなさいまし。

新之助。藤子は寢てゐるのか。

とみ。お寢みで御座いませう。

新之助。藤子に一寸門のところまで出て下さいと云つて頼んで來てくれ。

とみ。旦那様はお入りにならないので御座いますか。

新之助。うむ。

（とみ不思議さうにして潜り戸を開いたまゝで入る。直きに藤子寢衣のまゝで出る。いつたん外を覗いてから、づか〳〵と外に出てくる。）

藤子。何か用なんですか。

新之助。僕は君にお願ひがあるんだが聞いてくれないか。

藤子。なんです。

新之助。僕は、再び此處へは歸つて來ないと云つて誓つたから、君の許しを受けるまでは、家へもはいるまいと思つて、それで君をわざ〳〵呼んだのだ。君は許してくれるだらうか。

藤子。何をです。

新之助。僕はあれから、本を賣つて、それから吉原へ行つた。吉原中歩いた。だが、僕はやつぱり家がなくつては、一時間も安らかに外にゐることが出來ない。――それで木賃宿へでも行つて宿らうかと思つたが、僕は木賃宿へも行かれなかつた。――僕はこれから甘んじて君の奴隷になる。僕は再び君と一所といふ名のもとに一とつ家根の下に棲まうとは思はない。僕は君の下婢になる。だから許してもらひたいんだ。――僕は此家をはなれては行きどころがない。――僕はこれから君の下婢になる。だから、僕をもう一二ヶ月置いてくれ。その間に僕は僕で、きつと一身の方向を定める。

藤子。此處をはなれると、あなたはそんなに行きどころがないんですか。

新之助。僕は明日の朝から食べることが出來ないんだだからどうか君の傍においてくれ。僕は決して、これから後、君には逆らはない。君と一所の昔に立復らうとは云はない。唯、僕を玄關へでも置いてくればいゝのだ。

藤子。ぢや、やつぱり私の犬になるより仕方がないんですね。

新之助。（一寸だまつて）然うだ。僕は君の奴隷になる。

藤子。それほど、人を食べさせると云ふことは權威のあることなんでせうか。人を養ふと云ふことは、それほど力のあることなんでせうか。あなたは奴隷になつても人に食べさせて貰ひたいんですね。

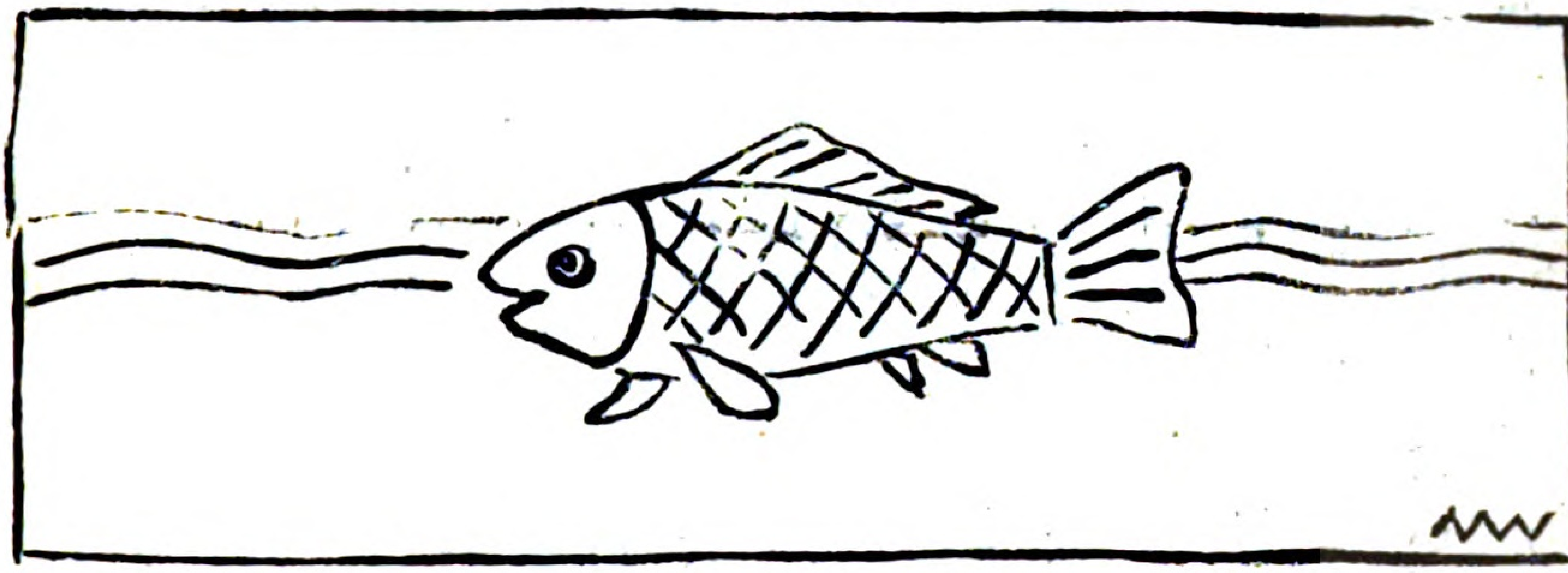
新之助。どうも仕方がない。（絶望をもつて）僕は君の傍をはなれることができない。

（藤子無言で考へながら家の前をあちこちしてから、その儘門のなかに引つ返そうとする。）

新之助。許して貰へないだらうか。

藤子。おはいりになつたらいゝでせう。

（藤子入る。新之助つゞいて入らうとする時に、幕。）



天草四郎と山田右衛門作（習作）

木下杢太郎

重要なる人物

天草四郎
山田右衛門作
森宗意軒
赤星宗範
大矢野甚兵衛

上の巻

第一場

寛永十四年八月のこと。

天草大江村。海を見晴らす丘、背後にやや大なる家屋の壁あり。森宗意軒笠にて夕日を防ぎ、壁際に立つて人を待ち合はせて居るさま。

赤星宗範下手より來る。

森宗意軒。赤星殿首尾はどうて御座つたか。

赤星宗範。折好く親子とも在宅てあつた。やがて二人共此處へ來る筈ぢや。

森宗意軒。どんな人物かな。

赤星宗範。中々賢い若者ぢや。人品も善うて綺麗な男ぢやから、まづまづあれて結構ぢや。百姓どもは餘程感服して居る。

森宗意軒。ディユス敎のことはどう思つて居るか知らんて。

赤星宗範。その點はわしには分らんて。まだ全然歸依してゐるといふのてはあるまいて。兎に角長崎も見てゐるし、その若者の親類に異國へ漂流して近ごろ歸つて來たものがあつたりするし、餘程異國のことは不思議に思つてゐるらしい。魔術も二つ三つ知つてゐるやうぢや。

森宗意軒。さうか、それは至極結構ぢや。歳は十六と云つたな。さうか、丁度好い歳ぢや。まだ世間を知らぬ生無垢の奴の方が役に立つ。あまり世間の葛藤を知つてゐる奴は招牌にはならぬ。だが少しそいつにディユス敎の信仰を詰め込んて置きたいものだな。一體百姓などと云ふものは大阪方が負戰に成らうが、徳川勢が天下を取らうが、そんな事は一切お構なしぢや。年貢が少くて、豐作て暮しが安穩ならばそれて可いのぢや。その上のことは冠婚葬祭の營みぢや。それから宗旨爭ひぢや。ディユス新敎の宗旨は不思議に百姓共に染み込んてゐるて。そこてそいつを一つ使はなくてはならぬ。大矢野四郎がそんな若者なら申分がない。そいつをば迷はせないで、生無垢に育て上げたいものぢや。

赤星宗範。宗旨のことは萬事山田右衞門作に頼まう。

森宗意軒。その男も不思議な男だ。異國の暦學も行ければ、和蘭陀の密陀繪もかく。南蠻の事情にはわし達より善く通じてゐる。ディユス敎のことにも中々深いやうぢや。

赤星宗範。わしはあの男のかいた騎馬像を見たが不思議な繪ぢや。生きてゐる通りとはああ云ふのをいふ

のだらう。

森宗意軒。唯あの男にいけないのは、餘り物を考へる質て決斷がないことぢや。考へに考へぬいた後で迷ふ。ああ云ふのは身方にして置くと、萬一の時に困るかも知れないが、近ごろの樣子では我々の事業には持つて來いの男だ。あれに當分大矢野四郎の敎導役を賴んで、少し氣狂染みた信仰を吹き込ませるが可いのぢや。それに今都合の好いのはこの島の領主の兵庫頭の黠愚なことぢや。百姓達は大分恨んでゐるやうぢや。わし達は吉利支丹を旗印にしても、どうも色々な分別に煩はされて一本氣に成れないから な。然しあの若者には、自分が本當の救世主ぢやと云ふ信仰を抱かせるやうにしなくては可けないぞ。

――むむ。それらしいものが向ふから來居る。二人連れぢや。いや三人ぢや。松の木かげから出て來居る。

赤星宗範。何か來るやうだが、わしの眼には確と見えぬ。それなら山田氏が一緒だらう。

森宗意軒。さうかも知れん。まだ善く分らぬ。

赤星宗範。近頃四郎は山田と大變仲よくしてゐる。年齡は親子ほど違ふが、餘程合ふ所があると見える。二人とも眞面目に敎儀の秘密に就て話し合つてゐるから可笑しい。

森宗意軒。さう云ふな。敎儀のことは貴殿などには分らぬ。我々とても矢張デイユスは天にお出でになると考へてゐる。若い時は目のあたり神さまにお會ひ申したと思つたとが再三ならずあつたものぢや。若し我々が天下を取つたら、京都、比叡の寺々は毀つて天主の敎會堂を建てようと思つてゐる。ああ德川幕府が吉利支丹を禁じても、この敎が段々と擴まつて盡きることのないのは何故だと貴殿は考へられる。

赤星宗範。(微笑して)。わしは貴殿と今更そんな宗論をしようと思つては居ぬがな。

森宗意軒。まあ聽くが可い。實際世間の人達は古から傳はつた、黴の生えた佛道の敎儀には飽き厭つて居るのぢや。坊主たちの專橫に眉を顰めて居るのぢや。

奴等の論ずることと、する事とは全く表裏ぢや。わしは少壯の時分山口で耶蘇の師父に會つたが、それは感心なものぢやつた。その當座、わしはこの教の外には教がない。この人達が見てゐる外には世界が無いとまで思つた位ぢや。そして眞面目に考へたのぢや。是は一つおれ達の骨折で天下を取つて見せる。そしてこの國をこの尊いデイユスの教の國にして見せると。

赤星宗範。我々はみんな先きの世の夢を見てゐるが。貴殿の夢は隨分念入りぢや。よしんば我々がこの九州の島だけを取つたとしても、さうなるとまた戰ひが起るて。耶蘇方と坊主方と。

森宗意軒。それは無論さうぢや。もう山口、長崎、平戸の方では、昔からこの爭が絶えぬのぢや。おお、さうぢや、赤星氏、是は少し別の話ぢやが、我々の今回の擧に都合の好いものが近頃手に入つた。

赤星宗範。それは何ぢや。

森宗意軒。今度の戰の未來記のやうなものぢや。貴殿も疾うに存じて居られるかも知れぬ。

赤星宗範。いや存じては居らぬ。聞きたいものぢや。

森宗意軒。かう云ふことぢやがな。（懷より紙を出して讀む。）天草のうち上津村と申す所に住居仕り候伴天連、この二十六年以前公儀より御拂被成候時、彼の伴天連書面を以て申置候は、當年より廿六年目に當り當國に善人一人可出生其者幼くして諸學を窮め、天に著く顯はるべし。枯木にまれ花咲き、山野に旗を立て、諸人の首にクルスを立つべし。東西雲の燒くること近々あるべし。デイユスを尊ぶとき到るべきなり。

赤星宗範。妙な文句ぢや。

森宗意軒。妙な文句ぢやが、この妙な文句が役に立つ。

赤星宗範。その文句は貴殿が拵へられたのか、それとも百姓どもが言ふのか。

森宗意軒。かう云ふものはわし一人考へて拵へたとて役に立つものではない。物には勢がある。誰傳へる

とないから云ふ話を、百姓どもがひそひそと話し合つてゐるのを聞いたから寫して置いたのぢや。それに都合の好いことには、去年の暮に枯れた名主の家の大きな米櫻に時ならぬに歸り花が咲いて、百姓どもが不思議がつてゐたのが、今になつてまた噂になつたことぢや。それに毎晩まつかに夕燒の燒けるのも持つて來いぢや。

赤星宗範。可からう。その善人も出來た。もう大ぶ世間の人達も氣取つて居るから、もうそろそろ始めなくてはなるまいて。――おや、見られい。向ふて人が挨拶してゐる。あれが大矢野甚兵衛ぢや。（會釋す）。

森宗意軒。（また遠くの方に會釋す）。ふむ、その傍のが四郎といふ子ぢやな。成程利發さうな、綺麗な子ぢや。女にしても見まほしい子ぢや。幾歳だと言うたな。さうさう、十六歳ぢや。

赤星宗範。どうも然し我々の十六歳とは違ふやうぢや。

森宗意軒。さうさ。我々の十六歳の時は、戰ばかりがあつて、武藝ばかりを鍛つたものぢやから、宗旨、教儀などのことは考へなかつたものぢや。夜遲く家を忍び出して、朝早く歸つて來るぐらゐが慰だつた。

赤星宗範。四郎は違つた若者ぢや。

森宗意軒。それは畢竟南蠻の考へを傳へてゐるからぢや。わしは若い時分長崎で磔の刑に會つた夫婦の侍を見たが、二人は夫婦といふよりも友達のやうであつた。夫なる男は自分の妻を姉のやうに尊敬してゐた。

赤星宗範。南蠻の風俗には禽獸に似た所があると云ふてはないか。

森宗意軒。わしはさうは思はぬ。それは本當に南蠻の風俗、精神を知らぬからだ。昔の山口の人達は一番よくこの精神を解して居た。女をサンタ・マリヤとして祭るこの宗旨の教儀中にも、この人間世界に清新な力を與へる精神が籠つてゐることもわしには分る。

赤星宗範。さうか知らんて。

森宗意軒。それてなければ、あんな大勢の人達が火の中や沸湯の中ては死にはせぬのぢや。

赤星宗範。さうさ、わしも隨分あの慘憺たる樣は見てゐるが、宗旨の力も恐ろしいものぢや。

森宗意軒。そこだて。我々はそれを方便に使ふのぢや。平天下の手段に。わし達の目的はそれは宗旨や敎儀のも一段上を行くのぢや。（狂はしく）。方便ぢや。方便ぢや、方便ぢや。

赤星宗範。可からう。わしもお祈をする。十字を切る。

天草四郎、大矢野甚兵衛、山田右衛門作登場。

山田右衛門作。赤星殿先刻は態々御足勞相掛けました。は、森殿、お久しぶりて御座りまする。

森宗意軒。久しく御旅行の由て御座つたが、いつ御歸りになられました。

山田右衛門作。やつと一昨日歸りました。

赤星宗範。（森宗意軒に）是が大矢野甚兵衛殿て御座る。またこれなるが子息の四郎殿て御座る。

森宗意軒。（極めて嚴肅に一揖し、忽ち跪いて四郎の足を吸ふ。）

人々我知らず嘆聲を發する。

赤星宗範。（森宗意軒に倣ふ。）

天草四郎。（山田右衛門作を顧る、諸人の禮を辭せむとする。）

山田右衛門作。（極めて緊張したる顏容、やがて四郎の跪かむとするを制して、自らも四郎の前に額く）。主ぢや。我等が主ぢや。我等を救ふ善人ぢや。

天草四郎。（其足を山田右衛門作の吸はむとするを制しながら、强き感動より涙す。右衛門作の肩に手を掛けて。）叔父御よ。

山田右衛門作。貴方はこの國第一の吉利支丹ぢや。我等の救主ぢや、我等に新しい世界を敎へてくれる聖人ぢや。

下手の壁のかげより四五の人私かに此樣子を覗ひ見て感嘆す。或は跪きて合掌するものあり。人々の影漸く增す。

森宗意軒。（言葉を改め）。大矢野氏と申しませうか、我等が主と申しませうか。今宵のこの家の堂内にて、この島の善良なる百姓たちが集つて、嚮より貴方の御出をお待ち申して居りまする。この島の人々は二十

六年の昔上津村に住居致して居りましたる異國の聖人の貴き識言を信じて、貴方のお出てになるのを待つて居りました。どうぞあちらへお出て下され。

百姓の長來る。

百姓の長。一同家の内にて皆様の御出てを待つて居りまする。

森宗意軒。さあ、あちらにお出下され。

天草四郎。（色青ざめて、右衛門作に）。叔父御、少時この儘に私を打ち捨てて置いて下され。そして叔父御もここに居て下され。私はもつと考へなくてはならぬことが澤山ありする。

奥の方にて人々の話し合ふ聲漸く聲高になる。下手の壁のかげに現はるる人影また漸く増す。

森宗意軒。みんなあの樣にして待つて居りまする。

山田右衛門作。（森宗意軒に）。森殿、然らば貴殿は赤星殿、大矢野殿と一足先にお出て下されい。四郎殿はもう少時此處て憩はれた後に、拙者が御案内申しませう。

森宗意軒。それならば御免下さいまし。

人々去る。

夕陽海に沈む。

天草四郎。叔父御。私には何も考へることが出來なくなりました。私はもう一刻も此處にかうしては居られないやうな氣になりました。

山田右衛門作。何故貴方はさう言はれるか、貴方は自分が世を救ふ使だといふことをお忘れになられたのか。

天草四郎。私は本當に何も知りませぬ。何も持つて居ませぬ。どうして私が人を救へ、世を救ふことが出來ませうか。

山田右衛門作。貴方が何も持つて居ない、また何も知つて居ないと云ふことが、貴い所て御座りまするのぢや。

天草四郎。それは何故て御座りまする。

山田右衛門作。貴方には唯「望む」といふことがある許りぢや。世間の人々は色々の世間のことを知つて

は居るが、もう皆「望む」といふことを忘れて居りまする。「望む」といふことを忘れて、卑しい世間の掟から縛られてゐるので御座りまする。その人達に貴方が「我は望む」と御教へになりまする、そして世間の人の萎えた心に新しい歡喜を傳へることが出來まする。おお、御覽なされまし。今日が海に沈みまする。ああいふ光榮の國を望むことも貴方の若い心には出來るので御座りまする。あの日の方は貴い羅馬の國で御座りまする。榮光の國を「望み」ませう。榮光の國を禮拜しませう。

黄昏近く。

天草四郎。貴方の言ふことは段々と分つて來るやうで御座りまする。然し私にはまだ、私が何を望んでゐるかと云ふことがはつきりと分りませぬ。

山田右衛門作。まあ貴方はもうお忘れになりましたか。サンタ・マリア様の御慈愛のことをお忘れになりましたか。

天草四郎。おお、おお、私は段々と思ひ出して來ます

る。私にはさういふ慈愛の國に住み、また世間をさう云ふ慈愛の國にすることが出來ませうか。

山田右衛門作。それは貴方にばかり出來ることで御座りまする。さあ、サンタ・マリア様にお祈をしませう。この家の内に禮拜堂が御座りまする。

山田右衛門作後方の家の戸を明ける。二人その入口より入る。

黒衣せる男。（ひそかに家の壁に近き、閉されたる扉の隙より私かに家の内を覗ふ。獨語。誇張せられたる手振をする。恰も今内部に入りたる人々に對し、一分の信と一分の疑を抱けるものの如し。）わしは唯見る。見た上で爲る。かうありたいと云ふやうには爲ない。是非かうならなければならぬやうにする。

（舞臺急に變ず。）

第二場

暗き禮拜堂の狹き聖壇の間。
右方に置かれたる壁、龕、聖像、
左方に大なる扉ありて、廣き堂と隔たる。

天草四郎。（長時の祈念より立ち上りて。）叔父御。

山田右衛門作。（同じく）四郎殿。

天草四郎　私どもは今夢を見て居るのではないでせうか。

山田右衛門作。何故さう言はれまする。

天草四郎。私は今何とも言はれない心持になつて居ます。私には今かうやつて居るのが、本當に世の中に生きて居るのだと思ふわけには行きませぬ。私の心は何とも知れない歡喜に滿されて居ながら、それでまた何となく物足りなく思はれるので御座ります。今まで好んだ人、憎くんだ人、また馬、牛、艸木までも、みんな堅く抱き締めて、私のこの心持を分けてやり、、分けて貰はなければならないやうに思はれます。

山田右衛門作。おお、おお、それは貴方がもう天國の近くに居る證據で御座りまする。貴方の前に跪かして下され。貴方の足を私に吸はせて下さい。

天草四郎。私の心の臟は、何とも知らず、怪しく打鳴つて居ります。

山田右衛門作。おお、ジエズス・マリヤ。貴方はマリヤ様にお近きになつたのぢや。

天草四郎。さう私の心が歡喜に充ちて居ながら、また私は劒と血とで、何か知れない、惡魔のやうなものを攻めてやりたい心持がしてなりませぬ。どうかしてこの手で、この足で、この眼で、この劒で、私は、この心を外に出してやりたくてならないので御座ります。

山田右衛門作。奥には天國がもう壁まで近いてゐるので御座ります。そして後ろには悲しい世間が擴がつてゐるので御座ります。

天草四郎　私どもはどつちか一方へ行つて住むことは出來ませぬか。

山田右衛門作。貴方にはそれが出來るかも知れませぬ。然しもし貴方が獨りで天國へ行つておしまひになされたら、貴方にお縋り申して天國に行かうとしてゐる扉の後ろの人々はどうなりまするか。御聽きなされ。皆々あのやうにお祈をして居ります。

左方の扉の後ろにて、禮拜祈禱の聲遠潮の如く聞える。

天草四郎。おお、おお、聲が聞える、聲が。私は夢から覺めたのか。扉を開けて見ませう。

山田右衛門作　まだ開けてはなりませぬ。今開けるとデイユスの國が遠離ります。貴方はまう少時靜かにこの十字架の前に跪いて、懺悔禮拜をしなくてはなりませぬ。今はもう世間のことを考へてはなりませぬ。父母の情をさへ考へてはなりませぬ。このてしいるひないるて貴方の體をお打ちなされ。貴方の懺悔禮拜て、この扉のうしろの凡ての人々が救はれまする。

天草四郎。（再び聖像の前に跪いて禮拜す。）

山田右衛門作。（一種の刑具を以て四郎の背を打つ。）

左方の扉の後ろにて喜び狂ふが如き祈禱の合唱。

其刹那忽然として別世界現出す。そは和蘭陀浮繪に見るが如き遠近法を有する華麗なる市街の遠見にして、正面に大なる禮拜堂あり。道の兩側に諸聖人の禮拜する間を、世に最も美しき聖母マリヤ靜かに歩を進め來る。

天草四郎。（聖母に近き、その足を吸はむとする。）

忽ち一黑影聖母の影をかくす。

山田右衛門作。あ、陰が邪惡の影が。（刑具を以て再び四郎の背を打つ。）

後方世界の陰消えて、再び聖母の姿現はる。

天草四郎。（再び聖母に近かむとする。）

黑陰再び現はる。

山田右衛門作。おお、又陰か、世間知と邪淫との陰か。

（三たび四郎を打つ。四郎の背より鮮血流れ落つ。）

後方世界の陰消え、晴やかに笑まひたる聖母手を擧げて四郎に近く。

扉の後方にて壯んなる合唱。

天草四郎。（甚だしく傷きながら聖母に近く。既に息絕えなむとする。）

聖母の姿四郎を抱き、其額を吸ふ。

龕の後方にて莊嚴なる大音樂。

山田右衛門作。（合掌禮拜す。）ハレルヤ・ハレルヤ。

扉の後ろにて人々の聲之に和す。

（舞臺變る。）

第三場

やゝ廣き堂。四邊暗きが中に幽かに三四の燈。

後方は聖壇を隔つる扉。

人々大勢聲を靜めて祈禱してゐる。

森宗意軒。あんちほな。れはえちゆす。ぶたるむす。

百十二。らうだつて。ぶえりたうみぬん、らうだつて、のめんだらみに。

人々。（低聲に繰り返す。）

森宗意軒。しつのめんたうみに、べねちきさん、えきすおくぬんくえつうすくはけいんせしつ。

人々伺歌經を誦す。

森宗意軒。あめん

人々。あめん。

祈禱終る。

人々少時休憩し、漸く喧噪す。

宗徒一。不思議なことがあればあるものたが、お主は庄屋の本尊の御像のことを聞いたか。

宗徒二。さう前後も無く言うては分らぬ。

宗徒一。さうさな。實は庄屋治兵衛殿に、それ、じえずす、まりや樣の懸物があつたらうがな。

宗徒二。あつた。あつた。

宗徒一。それが奈何ぢや。一夜のうちに見違へるほど立派な表具になつて居たのぢや。

宗徒二。有り難いことぢや。あれは南蠻の船乘から私に貰ひ受けた繪像ぢや。

宗徒三。あれならひどく破れておつた。

宗徒一。それが誰も直ほさないのに、獨りで綺麗になつて居たと云ふことぢや。

宗徒三。それは不思議ぢや。

宗徒一。その上その裏には六つかしい文句が浮き出て來たのぢや。

宗徒二。むつかしい文句ぢやてな。

宗徒一。夕日雲輝、夏日波紅、天帝宗盛、藤花開時とあつたのぢや。

宗徒四。所がお主不思議ぢやないか。近頃は毎日毎日海の水も紅に見えて庄屋の庭に凌霄花が咲いた。

宗徒三。あの花はもとはこの島に無かつた花ぢや。

宗徒四。それに皆が言うてゐたが、當年より廿六年目に當り當國に善人一人可出生、其者幼くして諸國を窮め、天に著く顯はるべしといふ文句ぢや。
宗徒一。それはわしも聞いたが、枯木にまれ花咲き、山野に旗を立て、諸人の首にクルスを掛くべしと云ふのぢや。
宗徒四。東西雲の焼くること近々あるべし。デイユスを尊ぶ時至るべきなり。その文句通りに毎晩、毎晩の夕やけ雲ぢや。
宗徒五。その善人は今ここに居られるのぢや。
宗徒四。何を言ふ。
宗徒五。その善人は今ここに居られるのぢや俺は纔遠くから拜み申した。
宗徒四。本眞か。本眞か。
宗徒五。本眞ぢや。いまお祈をして居られる。
宗徒四。どのやうな人ぢや。どのやうな立派な人ぢや。
宗徒五。まだ若い人ぢや。十五六歳の若者ぢや。
宗徒四。ほう。
宗徒六。美しい若者ぢや。わしも拜んだ。貴い顔付をして御座る。
宗徒二。靜かにせい。またお祈が始まる。
宗徒六。いよいよ、我等が事を起す時が來たぞよ。もうお上の侍たちも薄々は感付いたらしいて。早く始めぬと負けになるぞよ。

間。

宗徒二。靜かに、靜かに。森宗意軒殿のお話がある。
森宗意軒。（低けれども强き聲にて。）此處にお集りの衆は孰れも我等が同宗のものと見申しておるのぢやが——（四邊を見廻はす。）
人々。いかにも左樣で御座ります。異宗のものとては一人も御座りませぬ。
森宗意軒。それならば今夜ここで大事を語るのぢやが、皆も存じてゐる通り、我等大帝宗のものは、世間からは恰て犬猫同然に見られて、ゐる有樣ぢや。
人々。如何にもその通りで御座ります。
森宗意軒。皆々はそれで我慢が出來るのか。何故に我

々がさう世間の人々から誹られ、蔑まれ、辱められるかを考へなさらぬのか。

人々。(默す。)

森宗意軒。我々は惡行を致したか。否、否、我々は善行こそ致せ、つゆ惡行は致さぬ。比叡の山の法師たち、は、口にはむつかしき經文を唱へこそすれ、自らは戒律を守らぬ、また諸大名、庶民の破倫を戒めぬ。

人々。その通りて御座ります。

森宗意軒。然るに我が天主の聖教に於ては、その昔フランソア・クサビエ師の始めて當國に聖教を布かれてより、この教を信ずるものはあらゆる欲念を心から追ふたのぢや。自ら我身を責めて、天上の聖母、サンタ・マリヤ様にお縋り申し、この世に善行をなし、同胞を愛し、禽獸すらもいたはつたのぢや。

人々。じえずす、まりや、じえずす、まりや。

森宗意軒。然るに、却つて、破戒無慙なる佛僧、または大名等は、恣に我等善行の徒を縛め、或は溫泉岳の熱湯に抛り、或は磔、火焙りの刑に處する。

人々。おお、おお。

森宗意軒 それは何故なりやと問へば、偏に大名法師等が自らの惡行を顧みて恐れるからぢや。我等蒼民の心を黯くして正義、自由、學問、智惠を我等から奪つて、我等を彼等の貪慾の奴僕となさむ欲念からぢや。

人々。おお、おお。

森宗意軒。その例は之を遠きに求むるまでもないことぢや。天草島の領主兵庫頭どのの政道を見ても分ることぢや。苛政收斂を專らにして百姓をも蟲けらのやうに考へ、偏へに自らの榮華を願つて居るのぢや。

人々。おお、おお。

森宗意軒。さりながら天道は邪を許さぬ。皆々も御存知のことであらうが、近頃は殊の外に不思議が現はれる。東方に雲燒け、時ならぬに珍草に花が咲くのぢや、

人々。おお、おお。

森宗意軒。是れ實に我等同宗徒の奮ひ起つべき時ぢや。

人々。（漸次激昂して。）おお、おお。

森宗意軒。領主方の衆も、近々我等が密會し、私かに兵糧軍器を匿ふことを知つたのぢや。先ずれば人を制し、後るれば人に制せらるるとは今の時ぢや。

人々。おお、おお。

森宗意軒。然るにここに不思議なるは、今を去る二十六年前にこの島から追はれた異國の聖人が言ひ殘したことがあるのぢや。

人々。おお、おお。

森宗意軒。その文句には今より二十六年の後に當つて、當國に善人一人出生致し、其者幼くして諸學を窮め。天に著く顯はるべしといふのぢや。枯木にまれ花咲き、山野に旗を立て諸人の首にクルスを懸くべし。東西雲燒くること近々あるべし。デイユスを尊ぶ時至るべきなり。とあるのぢや。

人々。おお、おお。

森宗意軒。（聲を激まし）。然るに其善人は今ここに現はれたのぢや。もうこのみ龕の後ろまで天國は近いてゐるぢや。方々は如何に思はるるぞ。

人々。おお、おお。（喧噪高まる。）

森宗意軒。時は二度來ぬのぢや。

人々。今ぢや、今ぢや。今宵のことぢや。

森宗意軒。ま、待たれい。靜かにせられよ。今善人をお引き合はせ申さう。方々は心を靜めてさんた・まりやのらたにあすを讀まれよ。

人々。（合唱す。）

森宗意軒きりええきれいそん。きりしてえれいそん。

人々。（繰返す。）

森宗意軒。きりええれいそん。きりしてあびなうす。

人々。（繰返す）。

一同。きりして、えざびなうす。ぱあてる、ぜせりす。みぜれ、ならひす。

後面の扉開かる。

厳肅なる聖壇のうしろに、夢の如き光明世界あり。全身に傷を受けたる天草四郎聖母に抱かれて眠る。その前に山田右衛門作跪坐してゐる。

音樂。

人々。（深き嘆聲を發す。）

天草四郎。（眠より醒める。）

後方世界漸く薄らぐ。

天草四郎。おお、おお。わしは夢から覺めたさうな。

山田右衛門作。そして實(まこと)の世間が貴方を待つて居りまする。實行と戰(たたかひ)との世間が。

天草四郎。（後方に消え失せたる光明世界を追ひながら）。い、じえずす・い、い、きりすと。い、い、さんた・い、い、まりや。

人々。（同じ音樂を繰り返し、禮拜する。）

森宗意軒。我等の救世の主ぢや。こたびの軍(いくさ)の總大將ぢや。

人々。（堂の後方にてやゝ騷がし。）

四郎の母と姪と登場。

四郎の母。（四郎に近きその足を吸ふ。）

無言なる緊張の間(ま)。

後方の聖壇閉され室内再び暗くなる。

忽ち堂内にて人の罵る聲。

聲の一。何ぢや、何ぢや。

聲の二。誰ぞ私(ひそか)に立ち上つたものがある。

聲の三。今私(わし)の足を踏んだ。

聲の四。あや、堂の扉(と)が一人で明(あ)いた。

聲の五。誰(だれ)か裏切者(うらぎりもの)があると見える。

聲の四。怪しい男ぢや。さきの怪しい男ぢや。

森宗意軒の聲。燈(あかし)を點(つ)けい。燈(あかし)を點けい。

人々燈を點ず。

宗徒一。裏切者が訴人に出たに相違ない。

宗徒二。それなら今宵のうちに事を擧げねばならぬわい。

森宗意軒。（少時の沈默の後に。莊重に）。いよいよ今宵ぢや。皆々ここを引いて仕度を致されい。今宵が第一の機會ぢや。

人々。今宵が軍神の祭ぢや。

人々。い、い、さんと・やこぶ。い、い、さんと・やこぶ。

人々立ち上り喚聲を發す。

【幕】

第四場

人々白き裝束し、額に十字の月代を剃り、各武器を携ふ。

森宗意軒。總大將の命令ぢや。今宵の敵は富岡城ぢや。軍の手始めに富岡城を屠れ。

天草四郎。（美裝してゐる）さんと・やこぶ。さんと・やこぶ。さんと・やこぶ。

人々。さんと・やこぶ。さんと・やこぶ。

【幕】

下の卷

第一場

寛永十五年正月十一日夕。
島原城内。小高き丘。
武裝せる人々。

兵卒一。寄手は釣井樓など建てたが、どうするものぞい。

兵卒二。今度は中々寄せてくる樣子もない。攻めて來られるのなら、ひるみはせぬが、かう對陣が長びいては氣も心も滅入るばかりぢや。

兵卒一。朝飯が粥になるやうになつては心細いことぢや。

兵卒二。また今夜あたりは海草でも拾ひに行かねばなるまい。

兵卒三。かう對陣が長びくと色々のことが考へられてならぬ。一體おれ達は何の爲めに戰をするだらうかと云ふやうなことさへ考へる。

兵卒一。天主の爲ぢや。

兵卒三。それは俺も知つてゐる。唯あまり考へると分らなくなる。

兵卒四。近頃は御大將殿も朝夕の祈禱を怠られるやうぢや。

兵卒三。それに俺は近頃毎晩怪しな夢ばかり見て困る。何だか知らぬが俺は惡いことをしてゐるやうな

氣持になつて、寢てさへもうなされるのぢや。俺の親達や、親達の親達が出て來て、そなたは吉利支丹ぢや、吉利支丹ぢやといふ。晝間は何とも思はぬが、夜寢ての夢の中ではこの吉利支丹といふ言葉がいかにもつらいのぢや。

兵卒四。俺の夢も善く似てゐる。おれの叔父は京都の坊主ぢやが、毎晩夢枕に立つて、おれのことを邪宗ぢや、邪宗ぢやといふ。

兵卒三。どうも俺達から近頃デイユスの神さまが遠く離れて行つてしまはれたやうな氣がしてならぬ。それに御大將殿も舊のやうに神さまを見せて下さらぬからな。

兵卒一。おお、おお、賴にならない人達ぢや。おれの眼にはまだ貴いマリヤ様の御姿が殘つて居る。御大將殿が始めてこの土地に來られて、でしいるひないるでわが身を傷け懺悔禮拜なされたとき、あのやさしい御手で介抱なされた御姿が。

兵卒三。あの時分には御大將殿は、いつも晴々した顏で尊い教への話をされたものぢやが……

兵卒四。近頃はいつも山田右衛門作殿と御一緒で、物案じげな顏で話をして居られる。それにあまりお勤めもなさらぬ樣子ぢや。

兵卒一。御大將殿は山田殿がきつい、御氣に入りぢやが、どうも山田殿には腑に落ちないことがある。

兵卒五。兵糧が盡きたというて心配してゐるではあるまいか。

兵卒四。彈藥はどうぢやな。

兵卒五。寄手はえらく靜かに構へることぢやな。松平伊豆守は智惠者といふが、どういふものぢやな。

兵卒一。默れ、默れ。御大將殿が物案じをして居なさるは、母御ぜが人質になつたからぢや。

兵卒六。むむ、むむ。本眞か。それは御かはいさうな事ぢや。

兵卒二。昨夜忍びが歸つていろいろの事を聞いたが、南蠻の船から昨日寄手へ使者があつたさうぢや。

兵卒四。南蠻が助太刀に出るのか。

兵卒二。それは知らぬが、松平伊豆守にはちんたの酒を献上致し、その他の諸將には茴香酒を献上されたさうぢや。

兵卒六。おれ達も酒にあり付きたいものぢや。

兵卒一。山田殿の父樣も一緒に召取られたといふ評判ぢや。それて人一倍孝心の强い山田殿があのやうに鬱いて居られるのぢや。

空に音す。

兵卒四。何ぢや。矢ぢや。

兵卒五。矢ぢや、矢ぢや。

兵卒六。休戰の間に矢響もあるまいに。

兵卒三。矢ぢや。矢文ぢや、あの松の枝に懸つた。

兵卒五。おお行つて見よう　取つて見よう。

兵卒矢の方に走る。

兵卒三。誰からぢや、何とある。

兵卒五。山田右衛門作殿へとある。

兵卒一。山田殿へ持つてまゐれ。

兵卒三。何處から來たのぢや。

兵卒四。私とあけて見たいものぢや。

兵卒五。松平伊豆守殿の陣中からぢや。小笠原右近將監とある。

兵卒四。(矢文の一部を見る)。山田殿は返り忠をしたと見えるぞ。

兵卒二。靜かにせい、靜かにせい。そんな事を人に知らせてはいけない。森殿に差出すが可い。

兵卒四。森殿が見える。

兵卒二。御大將殿も山田殿も一緒ぢや。都合が惡いわ。

兵卒四。見い、見い、山田殿の物案じの顏は痛ましいほどぢや。是れてその譯も分つたのぢや。

兵卒等去る。

森宗意軒登場。

森宗意軒。はて、今のは慥かに寄手からの矢文ぢやと思うたのに、警備のものどもが、ひそひそと匿つてしまつたのは怪しい事ぢや。萬一、寄手が利慾を以て味方の士卒どもを誘ふやうなことがあつては大變

なことぢや。（去る）。

天草四郎と山田右衛門作と。

天草四郎。山田氏貴殿は近頃深い物案じの體に見え申すが。何ぞ心配のことでも御座るか。縁深い法類ぢや。一つ聞かしてはくれまいか。

山田右衛門作。（青ざめたる顔にて四郎を諦視し、やがて眸を落す。おゝ、おゝ。私の惱は貴方様には告げられない惱で御座ります。

天草四郎。御許の父上は敵方の手に入つたといふ噂ぢやが、それが心配になるのであらう。

山田右衛門作。私はデイユスの教へが我と我命を絶つことを許してくれる教ならば、この命を絶ちたいと思ひまする。

天草四郎。私には分らぬ。私には分らぬ。叔父御。わしも近頃は疑が繁くなつてならぬ。わしにはもうマリヤ様の御姿が見えぬやうになつた。

山田右衛門作。おゝ、おゝ、貴方様は神の子ぢや、貴方様は神の子ぢや。私共と同じやうな疑を持つことは出來ませぬ。私は人間の子で御座ります。私にはデイユスの神に盡くす忠義が眞か、この國の君父に盡くすべきが眞か分らなくなりました。

天草四郎。おゝ、おゝ。

山田右衛門作。デイユスに歸依の心は唯妄想で、幼い子供が物語を珍らしむと同じ迷ではないかと思はれるやうになりました。私はこの分別盛の年齢をしながら年甲斐もない迷執に囚はれたことを恥ずる心に責められます。（喪神したるものの如く四郎の肩に倒れかかる）

天草四郎。（痛ましい顔して右衛門作を見、また手を離し遠く凝視す。おゝ、おゝ、私は山田氏の懺悔を聞きながら、外に出た自分の内心を見詰めてゐるやうな氣になる。わしにもマアテル・ドロロオザの姿はもう夢のやうに淡くなつた。さう云ふ夢のやうな姿より、もつと手近かな人間の爲めに、同胞の爲めに力を盡くしたくなつた。私には毎日毎日ああ多くの人々を殺すのが殘酷に思はれてならないやうになつた。

山田右衛門作。（狂ほしげに）。いや、いや、貴方様は神の子ぢや、貴方様は神の子ぢや。

天草四郎。（疑惑の顔をする）。

遠くにて禮拜の合唱。

遥の下方に人々の集まるさま見ゆ。

山田右衛門作。貴方様は救主ぢや。

天草四郎。おゝ、おゝ、あのやうな禮拜の合唱を聞くと。わしの心は故しらず動揺する。ああいふ可哀い人達に、もつと善い世界を見せてやることは出來まいかと思ふ。

山田右衛門作。私は人の子ぢや。敵手に囚はれた父様がいとしうてなりませぬ。

天草四郎。（疑問の樣をする）。おや、森殿がわしを手招きして居る。（去る）。

山田右衛門作。天堂から地獄へと、わしの考へは一日のうちに幾度か動揺する。わしは味方を賣つたといふ誹謗を恐れはしない。唯わしは、どれが眞か分らないのを恐れるのぢや。（去る）。

天草四郎、森宗意軒と語り來る。

森宗意軒。兎に角大事ない事になつたが、その矢文が私共の手に入つたのが何よりの幸で御座ります。

天草四郎。森殿。このわしさへ軍の總大將、聖教の法主たるわしさへ、自分で自分を疑ひ、神さまをも疑つて居るのではないか。それでゐて無智の人々に説教に、またその貴い鮮血を流させるのは僞ではないか。わしにはどうしても山田右衛門作を罰することが出來ないのぢや。

森宗意軒。軍令は軍の場には何よりも重いので御座ります。貴方様はかう云ふ大勢の兵を動かして、美しい新しい世界を建設するといふ實世間の事業を迷執だとお考へになりますか。貴方様は、身を打つて懺悔禮拜する時に目の前にお現はれになるマアテル・ドロロオザの御姿のみが眞だとお思ひになりますか。貴方様は今御自分のなさつてゐる大きな仕事のことを深くお考へになれば、區々なる親子君僕の恩愛などは顧みるに足らぬものだといふことを御氣付きにな

りませう。
天草四郎。（段々激昂してくる）。おお、おお、さう考へられぬこともない。
森宗意軒。それ故この際私の情は捨てて、山田右衛門作が處刑のことを御許願ひたう御座ります。
天草四郎。よろしい。山田右衛門作を牢に繋ぐが可い。
森宗意軒。畏まりました。（合圖する）。
郎黨集る。
森宗意軒。御大將の命令ぢや。裏切り者山田右衛門作を縛れ。
郎黨等。はつ。
天草四郎。（涙す）。いゝいゝいゝじえずすまりや。〔幕〕

第二場

寛永十五年二月中。
陣營。
後方、見えざる所に牢獄あり。そこより山田右衛門作の呻吟し、また叫喚する聲聞ゆ。

山田右衛門作の聲。いゝいゝデイユスの神に盡す忠義が眞か、この國の君父に盡す忠義が眞か。
間。
森宗意軒。ええい。また吠えて居るわい。あの聲は味方に取つて、千の敵よりも禍になるのぢや。
聲。わしは人間の子ぢや。わしは人間の子ぢや。
森宗意軒。奴は生中情深い性質であつた丈に手下の者共がよく靡いてゐたから、あの聲を聞くと各自か疑ひ出してくるのぢや。（下方を下瞰しながら）。あの通りぢや。みんな心配さうな顔をして聲の方を見守つてゐる。
聲。いゝいゝデイユスに歸依の心は唯の妄想てはないかと云ふ考がわしの骨身を削るのぢや。
後方陣營のうちにて人々の怪しく叫ぶ聲聞ゆ。
森宗意軒。あの通ぢや。ええい、裏切者奴が。者共。誰ぞ居ぬかやい。者共。
郎黨。はつ。
森宗意軒。むむ。あの後の牢屋の中て呻いて居るらの

を刑場に連れ出せやい。

郎黨。はつ。（去らむとする）。

天草四郎。待てい。

郎黨。（立ち止る）。

天草四郎。（上手に呼ばふ）。護衛の衆は居ぬか。人々、その郎黨を縛れ。

兵卒大勢。（登場）。はつ。（郎黨を囲む）。

森宗意軒。（險しき顔をして立ち去らむとする）。

天草四郎。森氏待たれよ。

森宗意軒。（獨白）。あのまま打捨てて置けば身方に禍をするまでぢや。人々の心を亂さねば置かぬのぢや。

（或る決心の表情をして立ち去らむとす）。

天草四郎。森氏、待たれよ。弱輩ながらこの四郎は此度の軍の總大將ぢや。四郎の言ひ付けを聞かぬ程ならば、鉾を逆にして此首を打つてからのことぢや。者共あの郎黨を連れ出して首を打て。

兵卒大勢。はつ。（郎黨を連れて去る）。

聲。天堂から地獄へと、わしの考は一日のうちに幾度か動搖する。わしは身方を賣つたといふ誹謗は、恐れはしない。唯わしはどれが眞か分らないのを恐れるのぢや。

森宗意軒。ええい、まだ吠えて居るわい。

聲。デイユスの神に盡くす忠義が眞か。この國の君父に盡す忠義が眞か。

陣營にて再び士卒の罵る聲。

森宗意軒。わが君。

聲。誰でも私を笑ふが可い。私に判然と此わけを教へて呉れることの出來る人なら、誰でも私を誹るが可い。

森宗意軒。ええい。……わが君。

天草四郎。（愕然と遠く眺む）。

森宗意軒。わが君。まあ丘の下の陣營を御覧になりませ。士卒ども、百姓どもが寄り集つて、ひそひそと話をして居る様子が善く見えまする。あの牢屋の中から出る不祥な聲を。一言も聽き漏らすまいと、耳を側ててゐる様子も善く見えまする。ええい、人々

が二組に分れて言ひ合つて居る樣も見えまする。

聲。おお、おお、わしは考へに考へ拔いた末て身方を裏切つたのぢや。身方を賣つたといふ誹謗は恐れはしない。僞と眞の辨別が付かないのを恐れるのぢや。

森宗意軒。もうどうしても堪らないと云ふやうな風て人々が此方へとやつて來まする。この不祥な聲を出すものを殺すか、我々が自分の首を刎ねるか、二つに一つを選ばなければならない機が來ました。

天草四郎。(默想の後)。森氏。

森宗意軒。はつ。

天草四郎。物は考へたのちてなけば爲てはならぬのだらうか。

森宗意軒。その通りて御座りまする。なれども考へ過ぎた後ては何事も出來ませぬ。

天草四郎。よろしい。あの罪人を此處へ引き出さしてくれい。

森宗意軒。はつ。(去る)。

山田右衛門作縛められたるまゝに引き出さる。長き考察と煩悶との爲に其顏は憔悴し、其眼は血走りてあり。

士卒の聲。(後方にて)、山田殿が御大將殿の前に引き出された。裁判があるのぢや。

士卒の聲の二。(同じく)。森殿が後からついて行かれる。

士卒の聲の三。(同じく)。御大將殿の顏には、今といふ今は、もう決心の色を現はれたやうぢや。

士卒農民等漸く集まり來りて、遠くより中央の諸人物を圍繞す。

天草四郎。(莊重に)。山田氏。

山田右衛門作。(首を擧げて四郎の眼を諦視し流涕する)。

天草四郎。山田氏。其方は軍令を知らぬか。

山田右衛門作。(少時の默想の後に)。知つて居りまする。また尊んで居りまする。

天草四郎。其方は今軍令を破つて居るものだとは思はないか。

山田右衛門作。(悲痛なる聲を發して)。軍令の尊重すべきを知つて居りまする。なれどもそれよりもかつと重

い掟を知つて居ります。それは眞で御座りまする。

天草四郎。デイユスの教は眞では無いと云ふのぢやな。

山田右衛門作。(更に悲痛なる聲を以て)。おお、おお、私は眞を言ひまする。私は唯この島の領主に對する反抗の心と、不思議な新世界を珍しむ輕卒なる心とでデイユスに歸依したので御座ります。それはデイユスの教は我々を、今迄知らなかつた嚴粛の心持と、またもつと深い愛の歡喜とへ導いてくれました。なれどもデイユスの教は我等が父母を愛し、生國を愛し、國君を愛する心と背馳するのをも悟つたので御座りまする。また我々にこの身體髮膚を愛し、その歡喜を喜ぶことをも許しません。デイユスの教は永久なる自責と永久なる反抗とを命ずるもので御座ります。我々はさうして、苦惱して唯夢のやうなマアテル・ドロロオサを祈念することは出來ませぬ。我々にはもつと手近いところに愛すべきものがありまする。父母がありまする。妻子兄弟がありまする。おお、おお、私は彼等を愛しまする。彼等を育ませるこの國の國土を愛しまする。この國土を知ろしめす國君を尊びまする。

四圍の士卒動搖する。

森宗意軒。ふむ、不祥な考だ。デイユス聖教を賊する言葉だ。わしはこの陣營の中に、まさかこんな不善な言葉を聞かうとは思つて居なんだのぢや。――わが君何とお聞きになりまする。

天草四郎。(或る決心の表情をして)。森殿。

士卒の長。(下手より膝行して出づ)。御大將閣下。

森宗意軒。何ぢや。

士卒の長。直訴の段は切腹を以て御詫致しまする。私は士卒一同に變つて申上げまする。何卒山田殿は御助け下さいまし。

森宗意軒。默れ。其方達の物言ふべき時ではない。

上手に群れたる人々動搖する。

上手の人々の聲。掟を破るものを屠れ。サント・ヤコ

ブ。サント・ヤコブ。ディユスの御名の下に背介の者を屠れ。

下手上手の兩群交互に罵り喧喋する。

天草四郎。森殿。その者を處罰せられよ。

森宗意軒。者共、その者を引連れい。

下手士卒の一群彼の士卒の長を圍む。下手の人々喧喋する。時に上手に當りて、また他の事件起れりと見え、人々後方を向き喧喋する。

上手の人の一。何ぢや、何ぢや。

上手の人の二。道を開けろ、道を開けろ。注進ぢや、注進ぢや。

傷き流血せる男來る。

森宗意軒。其方は何ぢや。

注進の男。只今敵陣より歸つたもので御座ります。

森宗意軒。何か異變が起つたのか。

注進の男。寄手は今、此度江戸表より罷りたる北條安房守殿の、進言に依り今夕總攻めと決して、最早出陣の用意をして居ります。

森宗意軒。ふむ、それだけか。

注進の男。その後の樣子は後から注進がまゐります。御大將殿の母御樣は今日松平伊豆守の御調を受けました。

森宗意軒。ふむ。そして安否はどうぢやな。

注進の男。松平伊豆守は母御樣に、御大將殿にあてて降伏の勸めの狀を書けと申されましたのに母御樣はそれをお斷りになつて、却つて御はげまされの狀をお書きなされたといふことで御座ります。それで伊豆守さまが大へん怒られてその狀をお破りになつたといふことで御座ります。

森宗意軒。それからどうしたのぢや。

注進の男。それてまた牢の中へ入れられたといふことは聞きましたが、急ぎましたから、その他のことは聞き漏らしました。

天草四郎。母上樣は死なれたか。

人々再び動搖する、第二の注進來る。

第二の注進。御注進て御座ります。

森宗意軒。何ぢや。

第二の注進。只今敵陣より忍びの男が參り、この手紙を持參いたしました。忍びの男は御城へ着くと直ぐ安心致したために落命いたしました。

天草四郎。（手紙を取る）。おお母上樣からの手紙ぢや。（手紙をよむ）。……「寄手大勢引受けらるると聞きぬれば、伯父右衛門作殿とよくよく申し合せ、尋常の覺悟致され候べし自らも今は生きながらへぬれど、何(いつ)れは同じ道に赴き冥途黄泉にて再び對面すべきなり。親子は一世と雖も何とて左樣の儀あるべきや只々デイユスを祈り候べきなり。身方少くとも大將と立てらるる事親の身に取りては一しほ悅ばしく偏に潔よき最後の程を祈り候必ず必ず後れ給ふべからずあなかしこ。（目を閉ぢる）

人々の群再び動搖す。

天草四郎。おお、マリヤ、ジエズス・マリヤ。もう私(わたくし)は貴方(あなた)樣(さま)の御姿を見ることは出來ませぬか。――森宗意殿、森宗意殿、罪人はまだ牢屋に繫いで下されい。もう今宵は我軍の運を定める戰ぢや。もうこの四郎は何も分らぬ。軍(いくさ)ぢや軍(いくさ)ぢや。戰の令を出して下されい。

【幕】



無籍者

上司小劍

人物

江戸宗太郎（十二歳）
其の父（四十六歳）
其の母（三十四歳）
其の姉（十六歳）
寺の和尙（五十歳ぐらゐ）

場所

東京の南郊。小ひさな瀧のある或る神社の境內。

時

現代。六月頃の朝。

舞臺の作り方

正面の奥に五六階の石段がある。石と石との間に隙き間が出來て右に左に少しづゝ傾きかゝつてゐる。其の石段の上の兩側には石燈籠、木立などあり、其の間を通つて神社に參詣し得る心。上手には稍高い石垣が二枚折りの屏風を立てた風に出來て、其の前面からと側面からと二筋の細い瀧が落ちてゐる。前面の瀧は稍低くて女瀧、側面の瀧は高くて男瀧。瀧壺は平地より少しく低く、石疊みになり、緩い石段で瀧にうたれに行かれるやうになつてゐる。正面の石段の上から右へ廻はると、土手續きて、石垣の上の瀧の落ち口へ容易に登れる。四邊に樹が繁つて、白晝なほ暗いといふ狀。

(江戸宗太郎の母靜かに登場。寢衣姿のまゝ、口に齒磨き楊枝を銜へ、年に比べて大き過ぎる丸髷は寢亂れた風。)

母。家のバケツだよ。またこんなところへ置きッぱなしにしといて、仕樣がないね。(瀧壺へ下りて、水の滴る古バケツを提げて來る。)

(隣地の寺の和尙、ニコ〳〵として登場。鼠色の單衣に白い帶を締め、齒の厚い日和下駄を穿き、頭の毛は一分刈ぐらゐに伸びてゐる。齒磨き楊枝と手拭とを持つてゐる。)

和尙。やア お早う。御主人はまだお息みかな。(土手を登つて、瀧の落ち口で口を漱ぎ顏を洗ふ。)

母。(バケツを其處へ置いて。)この頃は遊んでるもんでございますから、お正午ごろまで息んどりますよ。……毎日朝飯を頂いたことがありませんの。

和尙。二食か、それも結構ぢや。眞言宗の二食は、午後喰はんのぢやが、江戸さんの二食は午前喰はんのぢやな。……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛…………時にまアこの瀧が近所にあるので、どれくらゐ助かるか知れませんのう。第一顏を洗ふにも金盥は要らんしな。

母。八幡の瀧〳〵とよく噂さに聞いとりましたが、此方へ引越してまゐりまして、初めてこの瀧を見ました時は、吃驚いたしましたよ。あんまり小ひさいんで……鄕里に居りました時、風呂の栓を拔きますと、これくらゐの瀧が出來ました。ほゝゝ。

和尙。(手拭で顏をふき、危つ氣な足つきで土手を下り。)さうぢや、醉醒めの咽喉の乾いた時なら、一口に呑み干せさうな瀧ぢや。(と瀧の方を見返へつて。)しかし小ひさいからかうやつて役にも立つのぢや、顏も洗へるし、

含嗽も出來るし、これから暑くなると、頭や肩を打たしてい丶氣持ちにもなれるといふもんぢや。幾ら大は小を兼ねると言つても、華嚴の瀧や那智の瀧てはこんな工合に含嗽も出來ないだらう。アハヽヽヽ

母。このお瀧は和尚さん、もとあなたの方のお持ちてあつたと、この間聞きましたが、さうてございますか。（俄に思ひ出したやうに齒を磨き始める。）

和尚。昔は兩部と言つてのう、神佛混淆が多かつたのぢや、この八幡さんも其の兩部てのう、わしの方て總べて支配してたのぢやが、御維新以來兩部はいけない、神樣なら神樣、佛樣なら佛樣と、生一本の混り氣なし、といふことになつたから、あの際から此方が宮、向ふが寺と分れたので、寺と瀧は緣がなくなつて、毎朝わしが顏を洗はして貰ふだけぢや。

母。これから暑くなりますと、またこのお瀧も繁昌することてござんせう。

和尚。暑くならなくつても、この頃は近所に借家が出來たので、朝の中は顏を洗ひに來る人て、隨分繁昌するぢやないか。今に米を磨ぎに來る人や洗濯しをに來る人もあるだらう。……二三年前までは、この瀧も獨りて落ちて獨りて流れてるだけて、夏になると、近まはりの村の息子衆や娘たちが打たれに來て、其の瀧壺は丸裸體の若い男女てうよ〳〵してたので、わしも一所に打たれながら見物に來たぢや。ハヽヽヽ。……　……それに近年はこの瀧のことが新聞に出たりして、東京からも人が來るやうになつたから、例の警察といふヤツが喧ましくてな、瀧に打たれるにも犢鼻褌をしてゐなくちやいかんとか、男の打たれる瀧と女の打たれる瀧を別にしなけれやいかんとか、それは〳〵面倒くさくなつてな。これから人が大勢打たれに來るやうになると、其の男瀧と女瀧の間へ丈夫な板垣を拵へて、兩方から見えないやうにするのぢや。……　……さうなつては、もう面白くも何んともない。全體面白いものをば、何んても面白くないやうにするのが、警察ちうもんの役ぢやらうかな。

母。（其の邊の棄石に腰をかけて。）和尚さん、わたしの家も其の警察が怖くて、お巡査さんが來ると、大騒ぎして子供を隱すんでございますよ。

和尚。（不思議さうな顏をして。）お前さんとこは子達が多さうぢやが、警察が來ると何か背後めたいことでもありなさるのかね。

母。背後めたいと申しましても、別に泥棒や人殺しをしたんぢやないんでございますが、（と稍躊躇してから、小ひさな聲で。）わたし殆め子供の籍が入つて居りませんので、……わたしはまアこれでも、郷里の愛知縣の方にはチャンと原籍がございますから、內緣といふことでいゝのださうですが、男の子は三人とも生れた時に屆けをしなかつたものでございますから全くの無籍者で、何處の役場の帳面にも名が載つてゐないんでございます。

和尚。あゝさうですかい。（と些か驚いた顏をして。）それで巡査が來ると周章てゝ子供を隱すんぢやな。……戶籍に名前が載らんでも、人間は人間ぢやて、飯さへ喰つてゐれや死にやせんが、しかし困るね、今時は學校といふヤツがあるて、戶籍にない人間は學校へ入れまいのう。……其の代り徵兵檢査にも呼び出されないから、差し引き勘定濟みか。アハヽヽヽ。

母。一番總領は女でございますが、あれだけは田舍に居ります時、村長さんと懇意にしとりましたので、十一になりました時、庶子とか申すことにいたしまして、漸と籍を入れたのでございますが、學校も十一て一年生になりまして、十五て四年生なんてございますから、キマリがわるいと申して、昨年退學つて了ひました。

和尚。さうぢやらう、そろ〳〵色氣の出る年頃になつて、尋常科てもあるまいからのう。……よく此處へ水を汲みに來る、……あゝさうぢや、其處にある（と傍のバケツを指さして。）其のバケツを提げて水を汲みに來る、下膨れの色白の娘子が、お前さんとこの總領ぢやな。いゝ娘だ。わしも十歲若いと默つてはゐ

ないんぢや。何んとか工夫して物にしてな、お半長右衛門のやうに、「をぢさん」（と巧みにお半の聲色を使ひ、袖を振つて身振りをする。）……とか何んとか言はして見せるんぢやが。アハヽヽヽ。

母。ほゝゝゝ。（和尚を少し輕蔑した態。）

和尚。あの娘子がまだ戸籍を入れてないと、引ッ淺つて逃げても、役場の帳面にない人間は、警察へ訴へても仕様があるまいから、引ッ淺へ得になるかも知れなかつたんだな。殘念なことをした。

（姉娘登場。派手な紺がすりの單衣に、赤い帶を締め、頭は束髮にしてゐる。）

姉。阿母さん、また伊三ちやんや房うちやんが來て、家の宗ちやんをいぢめてゝよ。………「宿無し」だことの、「無籍者」だの、「十二にもなつて學校へ行かない」だのッて、……厭やなヤツ、打ちのめしてやろかと思つたわ。（肩で息をするやうにして、忙しく言ふ。）

母。何んだね、げす〳〵と、この娘は、……女の癖に、「打ちのめしてやろか、」とは何んてす。（と一寸娘を睨んで。）和尚さんも居なさるぢやないか。

（姉娘は初めて和尚のゐるのに氣がついた風で、和尚の方に向ひ一禮して、キマリわるさうにする。）

和尚。（つく〴〵と娘の方を見ながら、輕く會釋して。）何かい、其の、近所の子がいぢめますかい。

母。無籍者だなんて、誰れにも知れないやうにしとりますのですが、何ういたしましたのか、近所の子供が知りまして、宅の子供を見ると「宿無し」だの、「無籍者」だのと申すんでございますよ。……尤も子供等も無籍者とは何ういふことか知らないで、大變わるいことのやうに思つて、泥棒でもしたか何んぞのやうに申すのでございます。……ツイこの間もお巡査さんが戸口調べに來てゐらッしやる時、近所の子供が宅の前を「無籍者〳〵」ッて、大きな聲で言つて通るんでございますから、わたくしハラ〳〵いたしましたが、お巡査さん、何のことだかちッとも分らないと見えて、默つて行つちまひましてござい

ますよ。

和尚。お巡査さんに知れたところが、罰金て濟む仕事ぢや。何んしろそんなぢや子供が可哀相ぢやから罰金を納めて籍を入れてやつたらいゝぢやらうにな。

姉。阿母さん、宗ちやんが近所の子に「わたい無籍者ちうんだよ」なんてお父さんから聴いてることを話したんだよ。「無籍者でもかうやつて大威張りに歩けるし、お錢さへ出せや何んでも喰へるわ」ッて懷中から鹽煎餅を出して、バリ〳〵喰べながら威張つてたのよ、去年あたり。それを學校で先生が聞いて、「そんな學校へお入れない畜生のやうな子と遊んではいけません。そんな子は日本人でないし、外國人でもない。今は犬だつて戸籍があるのに、戸籍のない人間は野良犬だ」ッて、先生がさう言つたんだわ。それから皆んなが宗ちやんをいぢめるのよ。それや信ちやんや數ちやんもいぢめるけど、宗ちやんを一番いぢめるの。

母。お父さんは……。

姉。知らん顔をして寢てるわ。

母。お父さんにさう言つて近所の子を叱つて貰つたらいゝぢやないか。……宗太郎もまた朝から外へ出てゐないで、家へ入つてたらいゝぢやないかね。

姉。家の前まで來ていぢめるのよ。家へ入るとお父さんが喧ましいッて怒るから、宗ちやん困つてゝよ。

和尚。無籍者が三人も居るんぢやから、皆んなして近所の子を追つ拂つたらよさゝうなものぢやな。少々くらゐ向ふに怪我さしても無籍者のしたことだから……といふ譯にも行かんかのう。

母。弟二人はまだ學校へ上らない年でございますから、何んにも存じませんが、兄は此娘の直ぐ次ぎで十二でございますから、無籍者といふことで始終身が卑下まして、可哀さうでございますの……それてもね男の子でございますから、八歲の時から宅で小學校だけのことを敎へて居りますので、四年生ぐらゐの子には負けないんでございますよ。

姉。宗ちやんは四年の本をよく讀むわ、綴り方だつて

算術だつてよく出來るわ。
和尚。そんな悧好な子なら、尚更以つて早く籍を入れてやりたいものぢやな。無籍者では、これから先き何をさせるにも不便で仕方がない。
母。知つてゐらッしやる方は、皆さんさう仰しやるんでございますが、宅で聽きませんので、わたしも口を酸くして申したんでございますが、もうこの頃は諦らめとります。
和尚。頑固なのか、ヅロウなのか。……そなたは何か別に譯でもあるのかな。（考へ込む風をする。）
母。譯と申しても別にございません。たゞわたくしと一所になるといふことが、宅の鄕里元の方で不承知でございまして、まア恥を申さねば分りませんが、……（と言ひかけて、縁側の前に立つてゐた姉娘を顧み。）……お前は家へお歸り。
（姉娘、長い袂を弄りつゝ、靜かに下手の方へ行き、中途から小走りに退場。母と和尚とはヂッとそれを見送る。）
母。（急に氣がついた風で。）あゝこのバケツを持つて歸つとくれ。
和尚。聞えんわい。……早い足ぢや。若い者の元氣には敵はない。わしんところの檀家の植木家の一人息子とあの娘を夫婦にしたら、良い緣ぢやな。あの娘は十六ぢやつたな、「二八誰家娘」といふところぢや、一番よいところぢやな。「花は蕾の……」（と聲色めいた變な聲を出す。）か。ハヽヽヽヽ。何んしろまア植木屋の息子は十七で、昔の吉祥寺のお小姓みたいな美男ぢやて、あの娘とは三國一の似合ひの夫婦ぢや。（姉娘の歸つて行つた方角を一心に見詰める。）
母。（呆れた顏をして。）和尚さんのやうにノンキにしてゐらしつやると、人間も百まで生きられるでせう。
和尚。まアさうぢやな。……わしは外を歩いても在家の立派な家なんぞを見ると、こんな構へをしてゐても、この見事な門の内には、心配や嫉妬やゴタゴタがドッサリ閉め込んであるんだなと思ふと、氣の毒になるよ。其處へ行くとわしの寺なんぞはなア、檀家が尠くて貧乏な荒れ寺ぢやが、あの通り表門は

二六時中開けッ放して、心配も何も一切通り拔けて、ヤキモキする種がないのぢや……それやなア心配の種も穿り出せや、何處にだつてあるだらうし、無理に忙がしがらうと思へや、仕事もあるだらうが、打ちやらかしとけや、それッ切りさ。蒔かぬ種は生へぬ、種さへ蒔かなけや、人間は何時までもノンキて氣樂ぢや。……時に何うぢやな、お前さんとこの娘子を植木屋へ一つ世話しやうかなわしも面倒の種を蒔いて少し忙がしがつて見やうか。

母。和尚さん戯談ばかり、まだ修業盛りのあんな子供がお嫁になんぞ行かれますか。先きさんも十七やそこらの子供では、……馬鹿らしい、飯事ぢやあるまいし。宅でも早婚は大反對だと申して、何んでも男は三十以上、女は二十三四からでなくちやいけないと言つとりますよ。

和尚。江戸さんも、息子を三人無籍者にして、打ちやらかしてるところを見ると、えらさうぢやが、早婚に反對ては餘りえらくないな。わし等これてもう白分に若返へる譯には行かんし、若い女を何うするといふことも出來ないから、迫めて若い息子と娘を夫婦にして、内裏雛のやうに綺麗なところを見て樂みたいな。男が十七女が十六、よい夫婦ぢやないか。吉三にお七、十次郎に初菊、力彌に小波。……芝居で見ても麗綺ぢやないか。……早婚はいかんなんて、薹の立つのを待つてるのは詰まらんぢやないか。

母。和尚さん戯談は廢して、先刻の續きを聽いて下さいましな……恥を申さないと分りませんが、わたしどもは名古屋で一所になりましたんて、名古屋はわたしの郷里でございます。其の頃宅は名古屋の新聞に勤めとりまして、……いづれまアちやんと媒妁人を立てゝ婚禮したのではございませんが、其の邊はまアよろしく御推諒を願ひます。ほゝゝ……わたしもあんな人の家内になつとりませんでしたら今頃は押しも押されもせぬ一本立ちの藝人で行かれたかも知れませんの。同じ郷里から出た人でも呂昇

さんなんぞは別て、腕よりは運の方が勝つた人てすか、……ほゝゝゝ、これてわたしの正體が現はれて了ひましたね。ほゝゝゝゝ。

和尚。いや其處までお前さんの方で言つたから、わしも言ふがな、お前さんの咽喉のよく吹き切れてることは、其の聲の出工合て分つてるし、かう言や失禮だが、まアそれ者の果と、大抵想像は付いてたんぢや。だから無遠慮の戯談口も利き易くて。わしはさういふ人が好きぢや。……お前さんの義太夫はわしもこれて聽いたことがあるよ。（蹲踞んで、つくぐと相手の顏を見る。）

母。和尚さんも名古屋においてなすつたことがあるんてすか。

和尚。いや名古屋て聽いたのぢやない。わしはこれても江戸ッ兒だ。尤も大阪には久しく居ましたがのう。其の頃は若くて隨分義太夫も聽いた。

母。それぢやあの、大阪の日本橋の北詰を西へ入つた北側の寄席てお聽きやしたんてせう。あそこへは一年ほど出とりました。……隨分古いことですね。二十年ほどになる。（指折り數へて首を傾ける。）

和尚。そんな昔のことぢやない。そんな古いことをよしんば聽いてたッて、覺えてゐるもんぢやない。……お前さんの義太夫ッイこの間聽いたよ。十日ほど前かな、雨は降るし、寢るには早いし、耐屈だから、この出ぎらひの男が江戸さんに馬鹿話てもしやうと思つて、傘差して初めてお前さんの家へ押しかけやうとすると、お前さんとこで義太夫が始まつてるんぢや。何んだか入るのに工合がわるかつたから、斜雨に濡れながら、暗いとこに立つて、到頭一段聽いちまつたよ。

母。あゝあの「大文字屋」を……。

和尚。さうぢや「大文字屋」ぢやつた。出し物は。……アハゝゝ。

母。丁ど宅ぢや留守てしたし。子供も姉の方は居りませんし、他のは寢とりましたので、ふつと思ひ出して、半分破れた三味線を戸棚の奥から引き摺り出し

て本は「大文字屋」が半分引きちぎつて子供が鼻紙にしました後が殘つてゐましたから、思ひ出し〴〵「春雨」から奧を語りましたんです。……何んだか語りながら涙が溢れてまゐりましたよ。……枕元て大きな聲を出しても子供は三人ともよく寢とりますしね。(昔を思ひ出してホロリとする。)

和尙。あゝさうか、わしはあのそれ「ア可愛いはこのお松、惡性な男を引ッかゝへ、舅への心づかひ、大阪中の嫁といふ嫁に煎じても呑ましたい……」(一寸節をつけて語る眞似をする。)から聽いたんぢやつたが、なか〴〵巧い。あの醍醐節へ來た時は、「待つてました」と聲をかけたかつたよ。雨は隨分ヒドく降つて來たが、わしは構はずに聽いてたよ。

母。和尙さんもダイブいけさうてすね。「大文字屋」なんて、あんまり人の語らないのを知つてらッしやるやうぢや。

和尙。これても昔はさわりの一つくらゐやつたもんさ。……「妙法蓮華經、申すも愚かや、祖師日蓮大菩薩、龍の口にては、太刀の下に直り給ひ、又或る時は、佐渡が嶋に流され給ひ、難行苦行なされしも、彼の、一物をせしめん爲めの、御誓願なり、なむ妙——」(一生懸命になつて唸り出す。)

母。(聽きとれた風をして。)ほん物てすね。誰れかに稽古して貰つたんてせう。……坊さんらしいとこを知つてるわね。(昔に返つたやうな若々しい聲を出す。)

和尙。アハゝゝ。「りんはなけれどさへわたる法華の題號相圖と見え、內よりくゞりそつとあけ、傳九郎來たか、權八首尾はまぶぢや〳〵世話なしに娘は戻つた。……」(調子に乘つてやりつゞけ。)アハゝゝ巧いぢやらう。けれどもわしは此處よりやね「……もそれからは獨りぼうし。犬に追はれて一と夜さは。稻荷の森て寐たわいのよ。ヲヽ悲しかろ〳〵。」の方が好きぢやて。

母。お寺さんて淨瑠璃が上手だとは妙てございますね。さう〳〵この間伺ひました時、お机の上に野崎の五行本が載つて居りましたね。

和尚。これも中年坊主のおカゲぢや。初めは代言人にならうと思つたんぢやが、喰ひ詰めて坊主になつて見ると、矢張り世棄て人と言はれてる通り、慾張らずに喰ふだけで滿足してれや、氣樂な商賣ぢや。役場の戶籍に名が載つてゐても、これがほんとの無籍者ぢやらう。……中年坊主だから戶籍にはまだ「利八」と昔の名が書いてある。坊主名は「法磬」て、淨瑠璃を習つた時は「松鯉」と命けて貰つた。名が幾つもあるんぢや。

母。竹本松鯉太夫、はいゝね。

(江戶宗太郎登場。瘦せ形の弱々しい子供で、何となく影が薄い。棒縞の單衣に黑金巾の帶を後で結び、冷飯草履を穿いてゐる。)

宗太郎。阿母さん、もう顏洗つたの。わたい今其處で、自働車見たよ、大きいの。……自働車がおナラしてたよ。「ブー」ッて。(人懷っこい眼をして母の側に步み寄る。)

和尚。いよう、お早う。……無籍者。

宗太郎。(萎れた風で和尚を見て、小ひさい聲で。) 無籍者だつていゝやい。愚僧、拙僧。

母。これッ。(と宗太郎を睨む。)

宗太郎。(泣き聲で。) だつて「無籍者」なんて言ふんだもの。

和尚。いや惡かつた。それこそほんとに愚僧がわるかつた。……拙僧もわるかつた。愚僧だの拙僧だのッて、何處で覺えて來た。お芝居で覺えたのかな。………それより自働車のおナラがよかつたね。あのおナラは隨分臭いな。……無籍者は巧いことを言ふぢや。

宗太郎。また言ふよ、「無籍者」ッて。愚僧やアい。

(宗太郎の父登場。銅色の顏に黑い頰髯、胡麻鹽頭に冬の中折帽を被り、古風の短いフロックコートを着てゐる。)

母。(驚いた風で夫を見て。) おやお出掛けですの。

和尚。やアお早う。江戶さんにしては馬鹿に早いのう。これや天氣が變るぞ。(と立つて空を仰ぎ。) あゝ曇て來た。

父。(帽子に手をかけて、輕く點頭き。) お早う。(と和尚に言ひ。)

今日は九時までに行くところがあつたのを、スッカリ忘れてた。(と妻に言ふ。)

母。さうですか、九時ならまだゆッくりでいゝぢやありませんか。

父。(和尚に向つて。)何か面白いことゝんありませんかな。

和尚。(にこ〳〵して。)君とはもう半年も御交際してるがこんな早朝に君とお話しするのは今日が初めだから、何んだか勝手が違ふな。……面白い話は君の方にあるぢやないか。無籍者が三人も居るといふことで驚いてるところです。

父。(一寸妻を睨んで。)またベラ〳〵と喋舌りやがつたな。……一家の秘密を暴露しちやアいかんぞ。

(と強く言つて、頬では笑つてゐる。)

母。ねえあなた、子供が可愛さうぢやありませんか。早く籍を入れてやつて下さい。……序にわたしのもね。

父。俺は形式的のことが嫌ひてね。

母。またお株が始まつた。それぢや世間が通らないぢやありませんか。……今も和尚さんにお話しゝて、あなたに忠告して頂かうと思つて、わたしの身の上から打ち開けたら、義太夫て胡麻化されちまつたの。

父。貴様の身の上まで打ち明けたのか。馬鹿ッ、軍機漏洩だぞ。(矢張り笑ひ顔をしてゐる。)

母。幾らあなたにさう言つても「形式的のことは嫌ひだ」て受付けないから、和尚さんにお願ひ申したんぢやありませんか。「人を助けるは出家の役」と言ひますからね。

父。馬鹿。ふざけるな。……そんな秘密をこんなとこで話たら、世間へ廣告して歩くやうなものぢやないか。

母。内證話はかういふところで話すのがいゝんです。「壁に耳あり」と言ひますが、こんなことだと其の壁もないから安心です。それに瀧の音があの通りしてゐるから、少し離れてると、何を話してるのか分りやしません。

和尚。昔の鹿ヶ谷といふところは、こんなところかも知れないね。……しかし君、無籍者が三人も居る

のはいけないね。早く何うかしたらいゝでせう。

父。昔は無宿の常五郎だとか何んだとか言つて、随分人別帳に載らない人間が居たんだからね。それでも世の中は治まつて行くんです。今だつて外國ぢや日本のやうに戸籍が難かしくないよ。幾ら難かしくしたつて、高が帳面だもの、間違ひは出來る。遠國て行き倒れになつて假埋葬になつたヤツなんか、戸籍が消えないから、帳面では百までも二百までも生きてる、千年も萬年も生きてるだらう。死んだ人間が生きてる帳面だもの、生きてる人間が二人や三人附け落ちになつてたつて仕方がない。……附けがけよりや附け落ちの方がいゝよ。酒屋の帳面にしたところが。アハヽヽヽ。

母。毎でもあの手て胡麻化して了んですよ。

父。日本人は全體書付けばかり大事にしたがる癖があるんだ。起證だとか三くだり半だとか言つて、女や男よりも書付を大事にするんだ。

母。だつて書付にしとかなけや、證據が殘らないぢやありませんか。

父。（先刻のバケツの側に行き。） このバケツは家のバケツだらう。家の帳面にも役場の帳面にも、このバケツは附けてないが、家のものは家のもので、別に差し支へがないぢやないか。（コツ〳〵と靴の先きでバケツを蹴る。）

母。宗ちやんお聴きよ。お前とね、このバケツと同じだツて。（濡縁の側で遊んでゐる宗太郎の方を見る。）

宗太郎。（父母の方を振り向いて。）厭やだい。そんな汚ないバケツ。……お父さんの洋服の方がいゝやい。

母。宗は家中てお父さんのこの洋服が一番いゝものだと思つてるんだよ。

父。さうだ、この洋服が家では一番いゝ物だ。他に何もないからね。このフロツクは憲法發布の年からお父さんが着てるんだからね。……死んだら宗太郎に與る。家重代の寶物だ。

君尚。恐ろしい古い物ぢやね。（感心した風で其の洋服に見入る。）

母。寶物だか何んだか知りませんが、あなた今時分そ

んなもの着て、暑いてせう。

父。暑くても仕様がない。他に着るものがないぢやないか。浪人にはこんなのが丁ど似合ひだ。

和尚。憲法發布といふと、明治二十二年かなア。ザッと二十五年經つてる。

母。厭やだ、わたしが九歳の年から着てるんだよ。……へえーまア。（と今更に夫の洋服をつくづく見て。）よく持つたもんだね。

父。憲法發布の年に、モッシュウ光妙寺に貰つたんだからね。光妙寺さんは其の二三年前にパリで拵へて、それを着て何處かへ行つた「私の女人モッシユウ、クレマンソーと何處かへ行つた」なんて言つてたから、このルダンゴートは、出來てから一寸三十年になるだらうね。

和尚。あゝ光妙寺三郎さんに貰つたんてすかね。それしかし物は上等だよ。

や大切な記念物ぢや。……わしも若い時あの人が好きて、まア崇拜してたが、よく大きな兜を破つて歩いてるのを、途中て見たことがありましたぢや。

（姉娘再び登場。）

姉。阿母さん大變よ。役場の人がお巡査さんと一所に來て、「一寸御主人に御目にかゝりたい」って……。

母。えゝ。（驚いた顏をする。）

宗太郎。阿母さん、わたいが縛られるの。（と慄へる。）

父。（妻に向つて。）俺は兎に角、もう行かなけれやならないからね。貴樣會つて何んの用だか聞いとけ。……厭やな面をするないッ。……何しに來たんだか分りやせんぢやないか。

母。大概分つてるぢやありませんか。……あなたが縛られるんですよ。ねえ和尚さん。

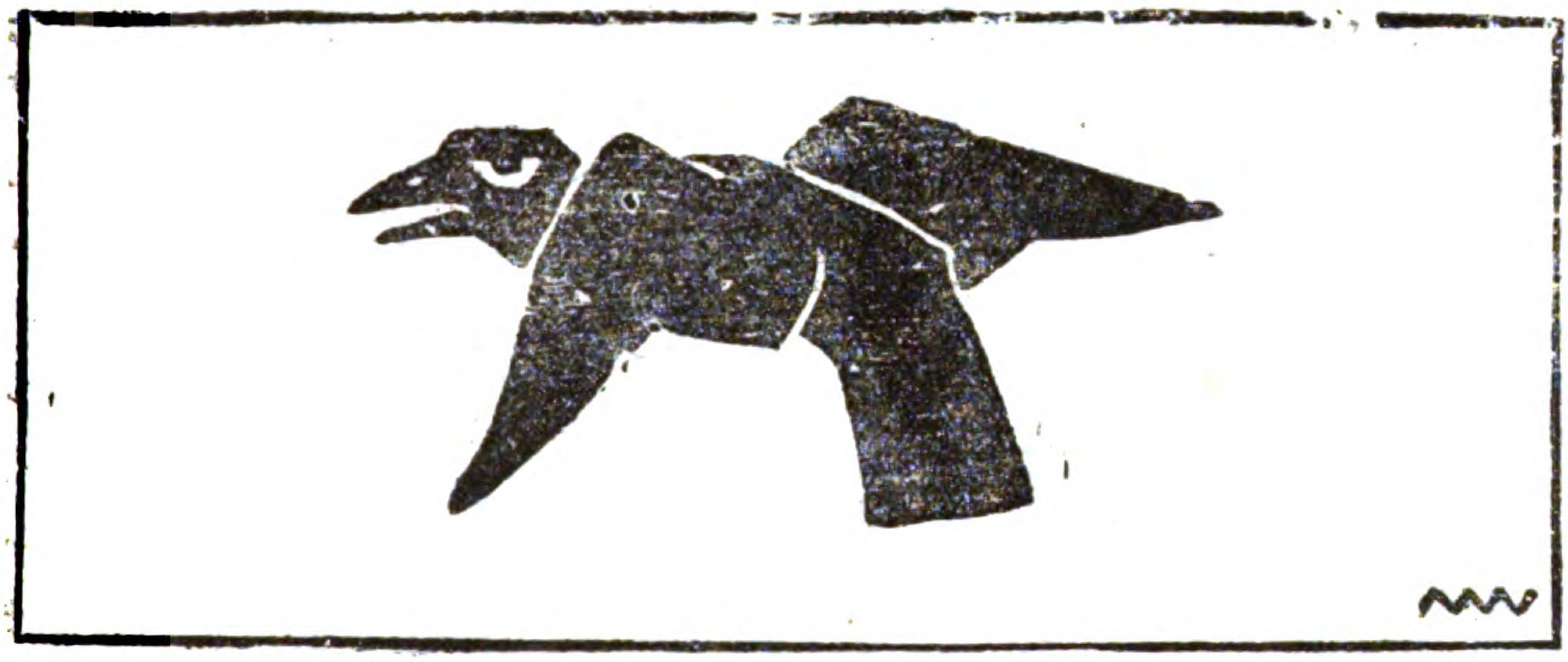
和尚。ナニ大丈夫だ。光妙寺三郎さんが附いてる。

姉。阿母さん、急ぐんだつて、待つてゝよ。……それや怖い顏のお巡査さん。……信ちやんと數ちやんは、例もの通り押し入れの中へ隱れてるわ。

父。まアいゝやうにしといて呉れ。俺は行く。（と下手へ歩いて行く。）

（皆々あツけらかんとしてゐる。）

（幕）



林檎の實の熟す頃

秋田雨雀

人

大井津根雄　青年、地主の子

小松美代子　其許嫁　｝小松家の孤兒

小松久子　姉　｝小松家の孤兒

お常　青年の母

其他數名の男女

所

大井家農園の出來事

時

現代

序幕

舞臺は大井家林檎園の縣道に接した部分。この縣道はある都市と都市とを連絡する道で、この町の一端から一端まで一直線に走つてゐる。

舞臺は、正面から右手に八疊間ほどの離室がある。この建物は舞臺の殆んど半ばを占めてゐる。正面はガラス戸を通して外の林檎の木が見へる。赤い實を結んだ枝が重さうに垂れてガラス戸に觸れやうとしてゐる。右手は短い廊下で母屋に接する。廊下のところから離室の二階に通ずる階段が見へる。室の中にはガラス戸に近く大きな鏡臺がある。

また室の前面には一閑張りの机があつて、その上に二三冊の本とインキ壺ペンなどがある。

舞臺の他の半面はやゝ廣い空地で、正面に林檎園へ出入する太い丸柱の門がある。その邊から縣道を越へて遠い山が見へる。

朝。朝霧がまだ全く晴れてゐない。

室の中には誰れもゐない。青い蚊帳が臥床の上に垂れて、一方の吊手ばかりがかゝつてゐる。枕元に半分水の入つたコップが置いてある。

美代子。（十七八歳の女。少し肥つてゐるが醜い感じを與へない。少し唇の突出たやうな感じを與へる女。白い湯形を着て、頰冠りをしてゐる。手には大きな手籠を提げてゐる。母屋の方から正面のガラス戸のところへ出て、室の中をのぞく。ガラス戸を開けやうとして開かないので、左手の方から緣を廻はつて前方の緣側の方へ出て來る。不安な感じに襲はれてゐるやうに始終そわ〱して室の中を見廻はしてゐる。）

美代子。（呼吸のつまつたやうな調子で呼ぶ）津根雄さん！津根雄さん！

（返事がないので、ます〱不安さうに室の中を見廻し、二三度口の中で獨言をいふ。）

津根雄さん！何うしたのだらう。まだ寢てるのかしら？

（草履をぬいで、緣側へあがる。氣を高めるやうな舉動をしながら、蚊帳の吊手を外して臥床の上からそれを拂ひのける。

ゐない！何うしたのだらう？津根雄さん！津根雄さん！

（歩いて廊下の方へ行かうとする圖端に階段の音がする。女は非常な驚きを以つて立ちどまる。廊下の方を見つめてゐる。）

美代子。（男の姿を正しく見られる時まで、何もいはずにゐる。）津根雄さん！

津根雄。（不安の中に一種の決心をもつてゐる。女に言葉をかけられると同時に立ちどまつて女の顔を見る。感覺を途中で鈍らうと努めても、それが出來なかつたことを示すやうな強迫された厳格さをもつていつまでも女を見てゐる。）

美代子。（いくらか氣を柔げて早言にいふ。）津根雄さん、何處へ行つていらしつて？

津根雄。（輕く。）少し歩いて來たんだ。お前大變早く起きたぢやないか！

美代子。えゝ何處を歩いていらしつたんです？

津根雄。四方を歩いて來たんだ。昨夜はあんまり寢苦しかつたもんだから、今朝早く起きてしまつた。

美代子。（疑はしい目附きで津根雄の顔を見つめながら）でも、津根雄さんは今二階から下りていらしつたのぢやなくて？

津根雄。（目を輝かして、）あゝ、二階から來たよ。それが何うしたといふのだへ？

美代子。何うもしやしないけれども……でも、でも二階にはご用がない筈でせう？

津根雄。（冷笑する。）二階に用があるかないか、お前のかまつたことぢやないぢやないか。

美代子。それはもう然うですけれども……

津根雄。然うですけれども何うしたといふのだへ？

（男は女の顔をにらむやうにして、立つてゐる。女は唇をふるはしてゐる。男は思ひ返へしたやうに顔を柔げていふ。）

けれどもいゝよ。それはお前の考へてはないんだらう？お母さんが何とかいつたんだらう？僕がお前の姉さんの寢てゐる室へ入るといふことは何んでもないことぢやないか。もし僕のお母さんが考へてゐるやうに、僕がお前と結婚するやうになれば、お前の姉さんは僕の姉さんだよ。弟が姉さんの室へ入つて悪いといふ法がないぢやないか？

美代子。だけれど、私は何もそれがいけないとはいひやしませんよ。

津根雄。（室の中へ歩いて來て）ふむっ　いはなくたつて、そんな氣持は僕にはすぐ解るぢやないか。

美代子。（男の顔を見ずに）ても、私何とも思つてゐやしな

いのですもの。あなたはあんまり氣を廻はしすぎるわ。

津根雄。氣を廻はしすぎるのは僕でなくて、お前達ぢやないか。姉さんが家へ歸つて來てからといふものはお前達は僕と姉さんのことをまるで探偵でもするやうな目付きで見てゐるぢやないか。姉さんは八年振りで家へ歸つて來たんだよ。少しはみんなして慰めてやつてもよささうなものだ。

美代子。（女らしい容子で）まあ！誰がそんなことをしたでせう？そんなことはみんな、あなたの邪推だわ。私だつて姉さんはたつた一人の眞身の姉ですもの！小松の家で生きてゐる人はあの姉さんたつた一人ですそんなことしていゝものですか？

津根雄。そんなら、なぜ探偵のやうな目付きで僕等のすることを見てゐるのだらう？世間といふものはもつと融通のきくものだよ。人間はもつと自由にして生きて行かなければならないものだよ。こんな小さな家の中でお互に探偵しあつてゐるに及ばないぢやないか。

美代子。（努めて笑ひながら）探偵、探偵つて、だから、誰もそんなことをしやしないつていつたぢやありませんか？（急にセンチメンタルな語調で）私はたゞ姉さんや、あなたにお氣の毒でならないのですよ。私はたゞそればつかり考へてゐるのです。

津根雄。（緣側に立つて女の方を振りかへりながら、）姉さんや僕に氣の毒だ？何うして？

美代子。何うしてゝつて、あなたには、よく解つてゐる癖に！（はにかみながら）あなたはやつぱり今でも姉さんを思つてゐらつしやるんでせう？

津根雄。姉さんを思つてゐる？僕にはお前のいふ言葉の意味が解らない。けれども兎に角お母さんの考へてゐるやうな意味では姉さんを思つてゐない。お母さんなぞはまるで僕等のことを火あそびでもしてゐる子供のやうにしか思つてゐない。最も然う思はれるのは僕にも惡いところがあるさ。けれどもその時分と今とは僕の境遇も思想もまるつきり變つてゐ

ゐるんだ。あの頃は僕はほんの子供であつたんだ。新しく身體の中に目醒めて來た自然力といふやうなものに押し出されて行つたやうなものだ。だから、そんなことでお前の姉さんが半生を代なしにしてしまつたと思ふと、僕は氣の毒でたまらないんだ。僕はかうしてお前の姉さんと顔は合はされない筈なんだそれをお母さんなぞは……

美代子。（男の言葉を遮るやうにして）でも、それはあなたばかりが惡いのぢやないと思ふわ。姉さんだつて充分責任があると思ふわ。

津根雄。責任があるといへばあるやうなものだけれどその點では姉さんの方がよつぽど徹底してゐたんだよ。（女の方へ近寄つて子供に物をいふやうな調子で）僕はね今では姉さんと世間でいふやうな戀愛關係がないんだよ。僕のいふことを信じて呉れなくちやいけないよ僕はお前にだけは嘘をいふ氣にはなれないんだ。（女の肩に手をかけて）お前は僕を信じて呉れるだらう？

美代子。（男の自分の肩にかけた手を上から押へるやうにして）え、信じてよ。私はあなたのいふことなら、何んでも信ずるわ。

津根雄。（眞面目な、けれども柔かな表情で）僕はこの二三日は、お前までも疑ふやうな氣持になつてゐたんだ。お前まで家の人達と同じ考へになつて僕と姉さんを探偵してゐたやうに思つて、いやな氣持がしたのだ。けれどもお前だけはやつぱり純粹な心持でゐて呉れた。お前は何うかいつまでもそんな純粹な心持でゐて呉れ。純粹な心持といふものは人間の持つてゐる一番尊いものだ。

美代子。（娘らしい感動で）あなたさへ純粹な氣持でゐてくだされば私はいつまでもいつまでも、この氣持でゐるわ。でも私何んだかそんなことを考へると心細くなつて來るわ！

津根雄。心細くなる？何うして？心細くなるわけがないぢやないか？

美代子。だつていつまでも、そんなに純粹な氣持てばかりゐられないやうな氣がするんですもの。私一人

だけを除者にして世間はどん〳〵何處かへ行つてしまふやうな氣がしてならないんですよ。たつた一人の姉さんだつて私のことなんか少しも考へてくれないんですもの。手紙だつて年に一遍位しか送つてくれないでせう。一緒に東京にゐたお友達だつてみんな然うだわ。

津根雄。（緣側の柱に倚りながら）そんなことがあるものか。人間はみんないそがしいんだよ。姉さんだつて世間に出て何れだけ苦勞してゐるか知れない。お前の友達だつてみんなそれ相應に苦しんでゐるんだ。僕は思ふんだが、何方かといへばお前なんかは仕合はせな生活をしてゐると思ふよ。

美代子。それや然うかも知れませんわ。かうして子供の時からお世話になつて勉強までさせていたゞいたんだから。

津根雄。そんなことは何うでもいゝが、お前なぞは世間の不幸な女とちがつて眞直ぐな發達をして來てゐるのが僕には嬉しいんだ。お母さんなぞにいはせると、小松の家は名高い名家だとか、家の位牌を絶やすのが惜しいとか、大騷ぎをするけれども、そんなことは下らないことぢやないか？今時家の系圖や名前が何になるもんか。これからの人間はみんな新しい鍬で新しい土地を起して行かなくちやならないんだ。お母さんなんかほんとに小松の家を愛するなら、家の名前やなにかでなく人間を愛さなければならない筈ぢやないか？名前よりも個人としての人間の方が大事ぢやないか？

美代子。でもお母さんはほんとに私達を可愛がつてくださるわ。私はお母さんのご恩は決して忘れないつもりです。

津根雄。（冷笑するやうな語調で）然うかね。そんなに親切かね。けれどもそれややつぱり自分のためぢやないかね。ほんとにお前達を愛してゐるためだらうか？僕には然うは思へないね。

美代子。いえ、ほんとうに私達のことを心配してゐてくださるわ。

津根雄。然うか。お前が然う思ふなら然う思つてゐた方がいゝ。(少し考へて) けれども、そんなにお前達を愛してゐるのならば、なぜ姉さんや僕なぞにあんないやな態度をとるのだらう。

美代子。(男の方へ接近して) いやな態度ですつて?

津根雄。いやな態度ぢやないか。僕と姉さんと話してゐると用もないのに何遍も何遍も傍を往來して見たり、一緒に町を歩かないで呉れつていつて見たり。そんなことをされてお前の姉さんはいゝ氣持だらうか? 姉さんはもう直き歸るさうだ。あんな眞似されちや、誰だつてゐやしないよ。

美代子。もう姉さん歸るんでせうか? そんなことをいつてゐましたか?

津根雄。(センチメンタルに) あゝ然ういつてたよ。面白くないからさ。

美代子。私には何ともいゝませんてしたよ。

津根雄。お前達はほんとうの姉妹でありながら、姉妹らしい情合を持つてゐないんだ。それはつまり僕のお母さんなぞの考へ方が違つてゐるからさ。

美代子。いえ、それはお母さんの惡いのぢやありません。まつたく私達の惡いためです。私は姉さんと仲好くしやう、しやうと思ひながら、一日一日とそれが出來なくなるんですの。姉さんといふ人がだんだんと遠うのいて行つてしまふやうに思はれるの。私それを考へるとほんとに泣きたくなるわ。何うしたら私達はほんとうの姉妹らしい情合を持てるやうになるでせうね?

津根雄。(やつぱり子供に對するやうに) それが僕にはよく解つてゐるんだ。僕はいつかお前にそのことをいはうと思つてゐたんだ。(女の顏を見て) お前、今いそがしいのか?

美代子。いえ、いそがしいこともありませんけれども、畑へ行つて玉菜をとつて來やうと思つて。

津根雄。お母さん畑にゐるの?

美代子。え。角豆をとつてゐますの。

津根雄。然うか。(暫く考へて) 今日はお前の心持が解つ

て僕はほんとに愉快だ。姉さんが家へ歸つてからといふものは、お母さんもお前も碌に口もきいて呉れなかつたんだ。僕は今日久振てお前に逢つたやうな氣持がする。（椽側へ布團を持つて來て座る。）ゆつくり話さうぢやないか？

美代子。（嬉しさうに）ほんとに私も嬉しいわ。姉さんはまだ寢んでゐるのでせうか？

津根雄。僕が天戸をあけた時はまた寢てゐたよ。

美代子。あなたの室へ入つて行つたのが氣がつかなかつたのでせうか？

津根雄。あゝ、初めは氣がつかなかつたやうだつたが後て一寸目を覺まして僕を見てゐたが淋しさうな笑ひ方をしてまた眠つてしまつた。

美代子。然うですか、淋しさうに笑つて。

（何かいはうとして思ひ直したやうに）あそこは天戸をあけるといゝ氣持ですわ。

津根雄。あそこから大川が目の下に見へる。僕は家中であの室が一番好きさ。

美代子。ほんとに一番氣持のいゝ室ね。林檎をつめるころになると、こゝの室は使へなくなるわ。（急に氣附いたやうに、津根雄の臥床を見て）あゝ、ぼんやりしてたわ。臥床をあげてしまひませう。

津根雄。あゝあげて呉れ。

美代子。（娘らしい容子で、臥床を疊んで、左手の戸棚に入れる。）私、津根雄さんのお留守の間はこの室にばかり寢てたわこゝは冬の間はほんとうに淋しい室よ、お母さんは母屋の方へお寢みなさるから、私たつた一人この室へ寢るんでせう。私ほんとに悲しかつたわ！

津根雄。（煙草盆と煙草をひきよせて）然うか？なにしろ此方の冬はいやだね。お前も去年の冬は寒かつたらう？

美代子。（媚びるやうな表情で）いゝえ、そんなでもありませんでしたよ。寒さは却つて東京の方が烈しいやうに思ひましたよ。（男の顔を覗くやうにして）室をお掃除しませうか？

津根雄。いや、いゝ。後にしやう。それよりこゝへ座つて話さないか？

美代子。え。でも朝の仕度をしなくちやならないんですもの。（緣側に腰をかけながら）もう何時頃でせうね？

津根雄。まだ七時前だらう。

美代子。姉さんよく眠れるでせうかね？（暫く考へた後で）津根雄さん、あなた怒つちやいやですよ。あなたはね、今朝なぜ二階へいらしつたんです？

津根雄。（笑ひながら）だから、天戸をあけに行つたつて、いつたぢやないか？

美代子。（やはり少し笑ひながら）でも、あなたが二階の天戸をあけなくたつて、いくらも人があるぢやありませんか？

津根雄。いくらも人がゐるたつて、誰れも姉さんのことをかまつて呉れる人がないぢやないか。毎日姉さんが、一人で天戸をあけて、一人で室を掃除してるぢやないか。お母さんなんか、姉さんがゐるかゐないか知らうともしないんだ。そしてたまに顏でも見やうものなら、まるで嚙みつきさうな風をする。それが僕には見兼ねるんだ。

美代子。でも、それはあなたが眞違つてゐるわ。第一あなたが、そんなことをなさるから、だん／＼お母さんの方でもいやな氣持になるんですよ。（いひにくさうにして）でも津根雄さん、あなたは、まだほんとうに姉さんのことを思ひきれないのでせう？それなら然うとお仰有つてください。私は何とも思ひませんから。私はもしほんとうに津根雄さんが姉さんのことを思つてゐらつしやるのなら、私なんか何うなつてもいゝと思ふは！私は姉さんと入交りに旅に出てもいゝと思ふわ！

津根雄。（煙草を吸つてゐる。混亂した感情を整理しやうとつとめながら）お前はまだ僕を信じてゐないね！

美代子。（決心を以つて）信んじたいんです。私ほんとうに信んじたいんです。ですけれども信ずることが出來ないのだから仕方がありません！

津根雄。だから、その氣持はお前自身の氣持ぢやないつていつたらう？

美代子。いゝえ。私の氣持です。

津根雄。いや、お前自身の氣持ぢやない。お母さんなその氣持に捲きこまれてしまつてゐるのだ。

美代子。いえ。私も初めの内はやつぱりそんな氣持でゐたのです。ですけれども今ではそんな氣持の中から、私のほんとうの氣持だけ抜け出して來てゐるのです。

津根雄。それはつまらない嫉妬の氣持だ。

美代子。え、嫉妬の氣持も入つてゐるかも知れません。でも、私はその氣持を隱してゐられなくなつてしまひました。

津根雄。それなら、僕が眞面目に辯解することを信じてその氣持を打消して吳れてもよささうなものぢやないか?

美代子。(涙ぐみながら)私はあなたのお仰有ることを信じて、この氣持をなくしたいのは山々ですけれども何うしてもそれが私に出來ないのです。

津根雄。(厳格な表情で)なぜだらう?それぢや僕は、お母さんなぞの考へてゐるやうに、姉さんとまた關係でも出來てゞもゐるやうに思ふのか?きつと然うにちがひがない。それなら僕さつきいつたぢやないか。僕と姉さんとの間には決して世間で考へるやうな戀愛關係がないつて。

美代子。え。それは私にもよく解つてゐますの。でも、世間で考へるやうな關係でない、ほかの何かあなた方の間にあるやうな氣持がするんです。その方が私には一層つらいのです。だから、お母さんの考へてゐることと私の考へてゐることゝは、まるつきりちがつてゐるのよ。

津根雄。然うか。もし然うだとすると何うするつもりなんだへ?

美代子。何うといふことも、私には考へられないけれども。でも私は津根雄さんだけに、ほんとうの打明けたことをいつてもらひたいのです。これから私達三人の間に何んなことがあらふとも、お互にいやな氣まずい思ひをしたくないんです。あなたは然うは思ひませんか?

津根雄。それは無論僕だつて然うさ。然し全く僕と姉さんとの間には何もないんだよ。だから安心しておいて。

美代子。いゝえ、それは嘘です。

津根雄。嘘ぢやないつたら！

美代子。いゝえ、嘘です。あなたは自分を偽つておいてゞす。

津根雄。自分を偽る。(獨語のやうにいつて)僕は決して自分を偽つてはゐない。(暫く考へて)然し自分に解らないやうな氣持のあるのは事實だ。姉さんに對して。だがそれは姉さんに對する僕の氣持といふよりは、家のものがみんなして僕につくつて呉れた氣持といつた方がいゝんだ。

美代子。(非常に緊張した表情で)あゝ、それです、それです。あなたはそのために苦しんでゐらしつたんでせう！

津根雄。あゝ。それは然うだ。僕はこの一週間ばかりの間そのために苦しんでゐた。僕はこの心持を誰れにも打明けることが出來なかつた。苦しんだ上句にとうと僕は決心した。

美代子。(注意深く)決心つて、何んなことを？

津根雄。復讐しやうと思つた！

美代子。(驚いて)復讐？ 復讐つて誰れに？

津根雄。(叫出すやうに)僕の家に！お母さんやなんかに！

美代子。まあ！

津根雄。考へて見ると馬鹿げてゐるけれども、僕はお母さんなぞの考へてゐることを實際にして見せやうといふ氣になつたんだ。

美代子。(考へてゐる。何かいはうとしていひ得ないでゐる)

津根雄。つまり僕は姉さんに自分の氣持を打明けて、もし出來るならば昔のやうな關係を復活させやうといふ氣になつたのだ。

美代子。そして、それを姉さんにお話しなすつたの？

津根雄。いや、まだ話してゐない。僕は昨夜一晩そのことを考へてゐたんだ。そして今朝早く姉さんのところへ行つて僕の考へを打明けやうとしたのだ。そ

して二階へ上つて姉さんの寢顏を見てゐると、馬鹿げて恥しくつて起さうといふ氣持にもなれなくなつた。

美代子。まあ！あなたはそんなことを。

津根雄。姉さんは苦勞をしつくしたやうな疲れた顏をぐつたり枕によせて、何も知らずに寢てゐるんだよそれを見ると僕の今まで姉さんに對して持つてゐたやうな感んじが何處かへ行つてしまつて、まるつきりちがつた感じが起つて來たんだ。何んといつたらいゝだらう？宗教的な氣持とでもいひたいやうな氣持だ。

美代子。それて、あなたは何うなさいましたの？

津根雄。（やさしい情緒で）それから僕はそつと音をさせないやうにして天戶をあけたのだ。室の中へ光りがさした時姉さんが何かいつたやうであつたが、天戶の音で何をいつたのか聞へなかつた。ふりむい見ると姉さんは僕の顏を見て少し笑つて、それから寢返へりしてまた寢てしまつた。その時僕は何んだか惡いことをしかけてゐて、しなかつた時のやうな樂な氣持になつた。

美代子。（男を慰めるやうな表情で）それから、あなたが下りていらしつたの？

津根雄。いや、ちやうど下りやうと思つたら、お前の聲がしたんだ。すると僕は急に不純な濁つたやうな氣持になつてそこにぼんやり立つてゐた。

美代子。なぜでせう？

津根雄。お前に探偵でもされてゐるやうな氣持がしたからさ。今日ばかりぢやない、いつでも家の人達がいろ／＼な邪推深いやうなことをすると、僕は反抗的に冒險なことをしかねないやうな氣持になるんだ僕には罪を犯す人の氣持が解るやうな氣がした。

美代子。（懇願するやうな調子で）何うか津根雄さん、そんなことをしないでください。何んでも私に打明けてください。私は姉さんとあなたに對しては決して嫉妬がましいことはしませんからね！

津根雄。（自分を嘲けるやうな調子で）實に馬鹿馬鹿しい話

さ。けれどもこれが僕の性格だから仕方がない。僕はこれからでもお母さんなどの態度一つで何んなことでもしやうといふ氣持がするよ。

美代子。津根雄さん、ほんとに後生だから短氣なことはなさらないでちやうだい。（左手の方へ目を投げて）あゝお母さんのやうです。

津根雄。（無言のまゝ立あがつて緣側を靜かに步く）

（津根雄の母が左手林檎園の方から入る。小柄ではあるが丈夫さうな體格をしてゐる。大きな手籠をさげてゐる。アツシのやうなもぢりを着、頰冠りしてゐる。二人を見て無頓着なやうすでいそいで前方を行きすぎるやうにしながら、女に言葉をかける。）

母。美代子何うしたの？さつきから私待つてたんだよ玉菜は私とつて來たからいゝよ。お前角豆を少しもいて來ておくれ。

美代子。お母さん玉菜をとつて來ましたか。いゝのがあつて？

母。（籠の中から一つを取り出して見せる。）こら！こんないゝのがあつたよ。蟲もなんにもついてゐないよ。

美代子。（笑ひながら）まあ！そんないゝの！私一昨日見た時は玉になつてゐるのが一つもありませんでしたよ。

母。然うかへ？（津根雄の方を見て）それからこんないゝ林檎が落ちてたよ。勿體ないから私拾つて來た。こらこんなの！

（大きな赤い林檎を四つばかり籠の中から取り出して津根雄に渡さうとする。津根雄は取らうとしないので、美代子は兩手を伸べて受取る。）

母。（津根雄の身體を足の方から見あげて行つて）津根雄は大變今日は早いぢやないか？

美代子。津根雄さんは昨夜は眠れなかつたんですつて。

母。（無頓着に）然うかへ？あんまり熱いからね。（行きすぎやうとして急に立ちどまつて）久子はまだ起きないの？

美代子。え。もう直き起きるでせう。

母。いつまで寢てるんだらうね！

（投げだすやうにいひながら、いそいで右手母屋の方へ去る。）

津根雄。（母の去つた後すぐに）いつてもあれだ！姉さんの

ことつては、まるで敵のやうにしてゐるんだ。
美代子。でも、あれはお母さんの癖なんですもの。根になんにも持つてゐないんだわ。
津根雄。お前畑へ行くんぢやないか？
美代子。あゝ、然う〳〵。
（早言にいひながら、再び姉冠りをし、籠をさげて小走りに左手の方へ去る。）
（津根雄は室の中へ入つて机の上を整理する。それから本を取り出して頁を繰り、落ちつかないやうな氣分でところ〳〵讀み耽つてゐる。暫くして階段の音がする。津根雄は耳敏くきゝつけて其方を見る。）
津根雄。久さん？（返事がなくて、やはり靜かな階段の音がする）姉さん？
久子。（廊下のところへ出る。半身だけが見へる。憔悴したやうな顔の半面と柱へかけた細い手が見へる。室の中へ入らずに立つてゐる。）お早やう。
津根雄。お早やう。
久子。（やはり同じところに立ちながら）今日も暑くなりさうてすね。
津根雄。え。暑くなりさうてすね。姉さんよく眠れましたか？
久子。あゝ、私よく眠れましたよ。それにあなたは早く天戸をあけて呉れたから、涼しい風が入つていゝ氣持だつたこと。
津根雄。（子供のやうに目をかゞやかして）僕の天戸をあけたのを知つてますか？
久子。知つてますとも。あなたは私の顔を見てゐたてせう？
津根雄。あなたは僕に何とかいつたてせう？
久子。お天氣のことを聞いたんですよ。あなたはその時私の方をびつくりしたやうな顔て見てゐたてせう？
津根雄。あゝ、然う〳〵。
久子。あなたはいつても家にゐるとあんなに早く起きるの？
津根雄。いえ。そんなことがない。大抵今頃起きるんですよ。

久子。（輕い笑聲をたてゝ）やつぱり昔の通り？あの頃は隨分寢呆てしたね。

津根雄。あゝ、寢呆てしたね。（笑ひながら）東京にゐるともつと寢呆をするんてすよ。

久子。津根雄さんのやうな仕事をする人はみんな寢呆てすつてね。

津根雄。まあ、然うてすね。然し僕なんか隨分極端な方てせうね。

久子。極端な方つて何時頃に起きるんてす？

津根雄。十時半か十一時頃まで寢てるんてすよ。時によると一時頃まで寢てる時もある。

久子。まあ、一時頃まで！だけれども夜は遲いんてせう？

津根雄。あゝ夜は遲い。大抵早くて一時半か二時頃だから。

久子。それは然うと、今何時頃てせうね？

津根雄。もう八時頃てせう。

久子。もうそんなになりますかね？（暫く間を置いて）さつき美代子が來てゐたてせう？

津根雄。あ。何うして？

久子。何うもあれの聲のやうな氣がしたから。そして美代子は何かあなたにいつたてせう？

津根雄。いゝえ。別に。

久子。然う？

津根雄。なぜ姉さんそんなことを聞くの？（立あがつて、女を招くやうな擧動て）さあ、此方へ入つたらいゝてせう。此方の方が風が通つて涼しいから。

久子。え、ありがたう。（半ば戯談のやうに）ても伯母さんに見つかると怖いから。

津根雄。（眞面目に）そんなこと。お母さんなんか何んだつて。さあお入んなさい。（女は室の中へ入る。座らずに立つてゐる。）

姉さん、まだずつと此方にゐるのてせう？

久子。さあ、私も何うしやうかしらと思つてゐますの。お友達もみんな町にゐないし、それに私家にゐるのが、みんなにいやなやうなやうすだから。

津根雄。そんなこともないてせう。
久子。いえ、然うなの。それも、まんざら無理ぢやないと思ひますよ。殊に伯母さんなぞの身になつて見るとね。
津根雄。お母さんは善良なエゴイストてす。自分の利益を犯されない範圍ては可なりいゝ人てすよ。
久子。大抵の人はみんなそんなものよ。美代子は伯母さんの氣に入つてゐるんてすか？
津根雄。え、まあ氣に入つてるんてせう。あれはお母さんから見ると、利益圏の中にゐるのだから。
久子。私あの子の大きくなつたのに吃驚しましたよ。私の彼方へ行つた頃は十歳位てしたらう。
津根雄。然うてせう。もつと小さかつたかも知れませんよ。今年十八てすから。
久子。十八てすか。ほんとに早いものね。私今てもあんな妹があるとは何うしても思へませんよ。あれが同じ身内の人間のやうな氣がしないんてすよ。
津根雄。然うてせう。一緒にゐないからてせう。
久子。あの子はもう學校を卒業したんてすか？
津根雄。え、女學校だけは卒業しました。自分だけは東京にゐたいつていふんてすけれども、お母さんは不安心になつて家へ呼んだんてす。
久子。それぢや、やつぱりあなたと一緒にするつもりなの？
津根雄。無論然うてせう。
久子。（氣のない表情て）然う。
津根雄。つまりそのためてすよ、お母さんなぞが、あなたにつらく當るのは。あなたいやな氣持てせう？
久子。（柔かな表情て）いえ、そんなこともありませんよ。てもそれは私の方が惡いんてすよ。こんなところへ歸つて來るのが第一間違つてゐるんてすよ。ても私家の模様は些とも知らなかつたんてすから、まるて子供のやうな氣持て歸つて來たんてすよ。
津根雄。然うてすか。ても僕の家にゐるといふことは知つてたんてせう？
久子。いえ。あなたはまだ東京にゐらつしやるとばか

り思つてゐましたの。(怨むやうに)あなたは一遍も手紙を下さらないんですものね。
津根雄。惡いと思つたからですよ。
久子。(笑ひながら)何うして？
津根雄。何んな生活をしてゐるか解らないから。
久子。何んな生活をしてゐたつてかまはないぢやありませんか？
津根雄。(暫く間を措いて)あなたは近藤さんと往復しておいでですか？
久子。(考へて)近藤？ いゝえ、あの人とはその後一遍も逢ひませんよ。なんでも人の話では函館へ一遍來たことがあるさうです。
津根雄。函館へ？ 何にしに函館へ行つたんでせう？
久子。さあ、何のためですか？ 私に大變逢ひたがつてゐたさうです。『久子が罪を悔いてゐるなら、ゆるしてやつても』といふやうなことをいつてたさうです。
津根雄。然うですか。ぢや、やつぱり久さんと一緒になりたいと思つてゐるんでせう。
久子。然うかも知れないわ。
津根雄。ほんとにあの人も氣の毒な人ですね。あんな眞面目な勉強家が。あの人はまだ一人でゐるんでせうか？
久子。え。どうも一人らしいのよ。その人の話では、私のために生涯獨身で暮すんだといつてるさうですよ。可哀相に。
津根雄。僕があんな馬鹿な眞似をしなかつたら、姉さんも近藤さんも幸福な生活をしてゐたんでせうね。僕はいつでもそれを考へるとたまらなくなりますよ。
久子。(無頓着さうに)そんなことはありません。第一そんなことは解るもんぢやありません。もしあんな生活は長くつゞいたつてさう幸福ぢやありませんわ。
津根雄。然うでせうか？ それでも久さんにとつては平和な生活ぢやなかつたかしら。
久子。(輕い嘆きを以て)平和な生活？ そんなことはないのよ。毎日いやな不安な氣持ばかりして暮してゐたんで

す。祈禱だとか說教だとかをきいてゐると、私はいつてもそは〳〵した落ちつかない氣持になるの。

津根雄。（沮喪の情を以つて）祈禱といへば、久さんと僕とあの聖壇の前に立たせられた時の氣持はいやでしたね。「神よこの憐れなる二人の姉弟を憐れみ賜へ！」とか、「神よ惡魔の道連れとなりつゝあるこの二人の姉弟を正しき御國へ導き賜へ！」とかいつてあの白い鬚を生やした中田さんが僕達の頭へ手をかけましたね。あの時のことを考へると僕はぞく〳〵します。

久子。あの時近藤はほんとうに泣いてゐましたよ。ほんとうにいやですね、あんなことを考へると。

津根雄。妙なもので、あゝして聖壇の前に立たせられると、ほんとうに自分が惡いことをしたやうな氣がしましたよ、思想の上では何でもないと思ひながら。

久子。あれはやつぱり今頃でしたらうね。會堂のバルコニイのところへ螢が飛んで來たりなんかして。

津根雄。あなたは、それから一週間ばかりしてこの町にゐなくなつてしまつた。僕は何んなに淋しかつたでせう。僕は毎日停車場の方まで歩いて行つたものですよ。郵便の來るたびに、あなたの手紙ぢやないかしらと思つて胸をどきつかせてゐたもんです。

久子。まあ、そんなに私のことを思つてゐてくだすつたの？

津根雄。え。あのころは私の思想はたゞ久さんといふもののために生きてゐたやうなものです。だから久さんがゐなくなると私はまるで元氣もなにもなくなつてしまつて、三月ばかりの間といふものはぐつたりして、まるで病人のやうになつてしまつたんです。その内に私はいやな遊びを覺えたりしたので小松の伯父さんなぞにも大變心配かけました。あなたは伯父さんの亡くなつたときも家へ歸つて來ませんでしたね。

久子。え、私は些とも知らなかつたの。家へ手紙を出さなかつたもんですから。それに、もし知つてゝも私は家へは歸へらなかつたと思ひますよ。

津根雄。お父さんに逢ひたいとは思はなかつたんです

か？

久子。思はないこともないのですけれども、家へ一遍でも歸つて來たら、もう二度と出られなくなりますすから。

津根雄。(暫く考へて) その後あなたは僕のことを考へたことがありますか？

久子。(少し目をあげて)ゑ。時々。それにあなたの書いたものを讀んだこともありますよ。

津根雄。(やゝ感情的に) 僕の書いたものを？そんなときは何んな氣持がしました？

久子。何んなつて、妙な氣持がしましたよ。なんだか、なつかしいやうな氣持のするときもあれば、惡らしいやうな氣持になるときもありましたの。かう妙に嫉妬のやうな氣持になるときもありました。何か惡い噂でもたてられゝばいゝといふやうな……

津根雄。何うしてそんな氣持になるんでせう？

久子。(笑ひながら) 何うしてだか自分でも譯が解らなかつたけれども……

津根雄。あなたのことを書いたのを讀んだことがありますか？

久子。ゑ。そんなときは、隨分ちがつてゐると思ひましたよ。でもすぐに逢つて話して見たいやうな氣がしたこともありました。それが出來ないと思ふと、また妙に冷かな氣持になりましてね……

津根雄。然うですか、私はそれと反對にあなたが幸福でゐて吳れゝばいゝとばかり思つてゐました。立派な相手でもあつて樂しい家庭をつくつてゐて吳れゝばいゝと思つてゐました。

久子。然う。そして見ると男といふものは女よりはよつぽど善良なものですわね！

津根雄。然うでもないでせう。私はあなたが幸福で暮して吳ればいゝと思ふのは、やつぱり私のためなんです。

久子。何うして？

津根雄。なんだか自分に對する不安心な可能性がなくなるやうな氣がするからです。

久子。不安心な可能性つて何んなことですの？

津根雄。（センチメンタルな表情で）つまり、あなたを思ひきられるから！

久子。（やさしく）そんなに私のことを思つてゐてくださつたの？

津根雄。（女の顔を正視して）私は今でもやつぱりあなたのことを思つてゐます。

久子。今でも？

津根雄。今でも！

久子。（冷かに）津根雄さん、それはいけませんよ。つまらないことですもの。

津根雄。（次第にセンチメンタルになりながら）いえ。やつぱり思つてゐるんです。それが事實だから仕方がありません。そして僕には決してつまらなくない感情です。だからもしあなたが幸福な家庭でもつくつておいてになれば僕に對する誘惑が少くなるわけですから……だから、

久子。（冷かに）ぢや、やつぱり伯母さんのいつたやうに、私はあなたを迷はせるに來たやうなものですわね！

津根雄。僕のお母さんが、そんなことをいひましたか？

久子。え。でも私はそんなことを何んとも思つてゐるんぢやありませんよ。またお母さんの今の身にして見れば當前のことですものね。

津根雄。（怒氣を含んで）そんなことはない。お母さんなどは、自分の考へで、人の思想を忖度するんだ。だから僕は時々お母さんなどの考へてゐることをわざに實行して見せやうといふやうな氣持になるんです

久子。まあ！何うしてそんな氣持になるんでせう？

津根雄。姉さんが家へ歸つてからといふものは、家の人達がみんな、僕等二人の行動を監視してゐるでせう。だから僕はみんなの見てゐる前でそれを實行して見たいといふ氣になつたんです。

久子。（驚いて男の顔を見ながら）まあ、飛んでもないこと！

津根雄。（激して）久さん、あなたは僕に對してもう一度昔のやうな久さんになつて呉れませんか？

久子。（努めて感情を抑へながら）私の氣持はやつぱり昔の通りです。私はやつぱり津根雄さんをなつかしい人だと思つてゐます。

津根雄。いゝえ、そんなことでなく、最後に別れたときと同じ關係に！

久子。それは駄目ですよ。第一時がちがひますよ。それに思想もちがひます。津根雄さんが私を思つてくださるのはほんとうにありがたいけれども、それは出來ることぢやありませんよ。（女は立上る）こんな話はよしませう……お母さんにでも知れるとみんないやな思ひをするばかりですから。

（立上つて行かうとする。男は激動して立上る。）

津根雄。もう少しゐてください。僕はみんな話してしまふから！

久子。いゝえ、あなたの氣持はよく解つてゐます。

津根雄。解つてゐない。ほんとうに解つてゐない！

（男は女の手を抑へて座に就かせやうとする。女は少し痙攣したやうな顔をして男の手を拂ひのけやうとする。）

津根雄。姉さん！（半ば狂的に女の頸に顔をつけて強く抱きしめる。）

久子。いけない！離して！（男を強く押し退ける。）

（二人が激動して眞剣な顔をしてゐる。其瞬間に美代子は左手から入る。三人は無言のまゝ同じ位置に立つ。）

——幕——

第二幕

同じ日の夕方。六時頃。

舞臺は序幕と同じ。日が少しかげりかけて、最後の光を舞臺に射てゐる。正面のガラス戸は西日を受けてかゞやいてゐる。ガラス戸を透して見へる林檎の木や其他の庭木なども赤く光つてゐる。序幕と異つた倦んだ、そして不安な氣分が舞臺に充ちてゐる。幕の上つた時は久子はガラス戸に近い方で大きな鞄を整理してゐる。時々小聲に殆んど聞へぬやうに、讚美歌のやうな單調な歌をうたつてゐる。さびしい顔にも白粉をつけて髮もきちんと結つてゐる。

數分間舞臺はそのまゝですぎる。

やがて一人の老僕は大きな鋭利な鎌を以つて入つて來る。久子は

人の足音に顔をその方へむける。するとその男は無言のまゝ頭をさげて、同じ足取りで舞臺の前面を右手にすぎる。

それから間もなく津根雄の母が廊下の方から入る。

母。(久子のゐる前の方へ行く。)久子はもう歸るんだつて?

久子。(努めて笑顔をつくりながら)え。伯母さんいろ／＼お世話になりました。また直きに來ますから。

母。お前まだゆつくり遊んで行つてもいゝぢやないか何も他人の家にゐるのぢやなしさ。遠慮もなにもゐらないわね。

久子。え〻。私遠慮なんかしやしませんよ。一週間もゆつくり遊ばせていたゞいたもんですから私ほんとに樂々しました。

母。だからせめてお盆までゞも遊んで行けるといゝんだがね。

久子。え、私も然うしてゐられるといゝんですけれどね。いろ／＼都合もあるもんですから。

母。(空虚な表情で)都合つて、仕事の初まるのは何うせ秋分になるだらう。

久子。え、それはまあ、さうですけれども。

母。それならなにも、いそいで歸らなくともいゝぢやないか。林檎の仕事が終へたら私も一週間ばかり湯治に行つて來やうと思つてゐるから、みんなで一緒に行かうぢやないか。何しろ今はいそがしくていそがしくて仕様がないんだよ。お前はまたほんとうに惡い時來て呉れたよ。今十日もすると樂になるんだがね。

久子。ほんとに伯母さんも大抵ぢやありませんね。

母。あゝ。津根雄でもちやんとして家の仕事をして呉れるといゝけれども、あれはあの通り廢人同然だから、何から何にまで私一人でやらないぢやならないんだよ。それに美代子はまだほんの子供だからね。

久子。ほんとにね!

母。美代子といへば、あの子は大きくなつたらう?

久子。(鞄に二三册の本をつめながら)え、私ほんとにびつく

りしましたよ。
母。（急に笑顔を洩しながら）さうだらう？それにいゝ子になつたぢやないか。お前達のお婆さんはいゝ器量てね。あの子はそのお婆さんに似てゐるんだよ。妙なもんだね、誰にも似ないでお婆さんに似てるなんて……
久子。（無言のまゝ鞄を整理してゐる）
母。それに、お前喜んでお呉れ、津根雄もあの子が大變に氣に入つてね、あの子を家へ呼んでやつたら、家へ歸つて勉强する氣になつたんだよ。最もこれはお前達の家のお父さんの遺言だから、お前にも多分不服はあるまいとは思ふがね？
久子。（感興のない顔をして）えゝ、私はもう。さうなつて呉れると、私も安心ですわ。
母。然う〳〵。でもお前あの子には私はほんとうに金を費つたよ。私は毎月十八圓といふものあの子につづけたんだよ。それも一年や二年ぢやない、まる五年といふものきちん〳〵と送つてやつたんだよ。一體その金は何處から出ると思ふね？（急に思ひ當つたやうに）最も小松の家を賣つたお金はね、私は一文も手をつけずに銀行へ預けて置いた。だからつまりは私の懐から出るのさ。まあ、お前考へてもご覽、それだけのお金といふものは中々出來るもんぢやないよ。
久子。それはね！伯母さん！
母。それもみんな小松の家が大事だからだよ。私は小松の家の跡だけは絶やしたくないとそればつかり思つてゐるんだよ。小松の屋敷を他人に渡すよりはと思つて私はそつくり預つてある。
久子。ほんとに伯母さんお骨折りでしたらうね。
母。だからお前もみつしり働いて、小松の家をたてゝ行くやうにしないぢやいけないよ。さうなつたら、私も小松の家から預つたものは利をつけてお前に渡

すつもりだ。なにしろ今のところでは私はお前達に安心して手渡しが出來ないんだよ。私は自分の出た家の先祖にすまないからね。

久子。伯母さん、そんなことは何うでもようござんすよ。私なぞはたつた一人ですから何處へ行つたつて食べるだけは出來ますから。

母。でもお前人間といふものはいつまでも一人ではゐられるもんぢやなしさ、ちつとは自分の行末といふものも考へて見るもんだよ。

久子。それはまあ然うでせうけれども、伯母さん、私のやうになつてしまふと、もう駄目よ。その日その日の暮しになりますから。でも私は人の世話もしない代りには人にも他賴らずに暮らして行つてるのですからね。

母。(不思議さうに女を見て) でもそんな暮しは自慢になるものぢやないよ。人間はお互に世話したり世話されたりして暮して行くのが當前だものね。

久子。それはもう伯母さんなぞの考へてゐることは本當よ。それが當前の人の暮ですからね。(仕事をつゞけながら) ですけれども世の中にはその當前の暮の出來ないでゐる人もあるんですよ。

母。それはその人間の心懸一つといふものぢやないか? 私ならさう思ふよ。

久子。それは心懸けの惡いためにさうなる人もありませう。でもやつぱりその人にとつて見ると、仕方のないことですものね! ですからそんな人はそんな人なりに暮して行かなくちやならないのです。私にして見たところが、やつぱり然うですわ。家におとなしくしてゐさいすれば、みんなと仲よくして氣樂に暮して行けるのでせう。私にはそれが出來ないのだから仕方がないのです。

母。(不服らしく) お前は出來ない〳〵つていふけれども、それは出來ないのぢやないよ。やつぱりお前の我儘から來てゐることですよ。

久子。(笑ひながら) 然うね。やつぱり我儘のためでせうね!

母。そしてお前、いつ立つつもりなの？
久子。今晩。
母。今晩？
久子。え。途中寄つて行くところもありますから。
母。(頭を振つて)それはいけないよ。お前、その事を津根雄にぁ話しましたか？
久子。いゝえ。津根雄さんにはまだ何んともいつてゐませんの。私津根雄さんには逢はないて行くつもりてすの。
母。なぜ？
久子。なぜといふこともありませんけれども。
母。それては私困つてしまふよ。それてなくとも、お前が來てからといふものは、私に妙な素振りばかりするんだよ。お母さんは姉さんを追ひ出すつもりだなんて、そんな馬鹿なことをいふんだよ。だから、あれに一應話してから、歸つてお吳れ。それてないと私ほんとに困つてしまふから。
久子。然うてすか？ても私逢ふのがいやてすから。
母。兎に角、それぢやね、あれの歸るまて待つてお吳れ。もう直き歸つて來るからね。
久子。ても、もう馬車屋へ行つてもらひましたから。
母。誰が馬車屋へ行きました？
久子。美代子が行つて吳れました。
母。何番の馬車に來て吳れつて？
久子。何番てすか？何んても七時にこゝを出るのださうてすよ。
母。それぢや三番の汽車だよ。
久子。(鞄の整理を了へて、母の方へ向きながら)津根雄さん何處へ行つたんてせう？
母。何か會があるつて晝頃出たつきりまだ歸つて來ないんだよ。もし何んなら誰かを迎へにやつてもいゝよ。ても、もう歸るだらうよ。ほんとうに、あれに逢つてから立つやうにしてお吳れ。それてないと、美代子も可哀相だから。
久子。(沈んだ調子で)え、それぢや一寸逢つて行くことにしませう。(輕く頭を下げて)ほんとうに伯母さんにも

美代子にもすまないことをしましたね。折角みんな睦しく暮してゐるところへ、私のやうな邪魔者が入つて來たものですから、みんなにいやな思ひをさせてしまひました。伯母さん何うか惡く思はないてください！

母。私やね、何とも思つてゐやしないんだよ。たゞ津根雄があんな世間知らずの子て、美代子やなぞにつらく當るもんだから私は一人て氣を揉んてゐたんだよ。

久子。ほんとうに、私も何うしやうかしらと思ひましたよ。私一人のためにみんなに苦しみをかけるのだと思ふと、私はもうゐても立つてゐられなかつたんてすよ。

母。然うかへ？お前も折角久振りて來たのだからもう少し遊んてゐてもらひたいのだけれども、なにしろさういふ風だからね……ほんとに惡く思はないてお呉れ。

久子。なに私が惡く思ふもんてすか。私こそ伯母さんにすまないと思つてゐます。

母。（荷物を見て）久子、お前それて荷物がいゝのかへ？

久子。え。二階に小さな手荷物が一つあるきりてす。

母。然うかへそれ二つだけてみんなかへ？

久子。え。みんなてす。

母。（思ひついたやうに懐の中から中板の寫眞を出して）これは小松のお父さんの寫眞だがね、家に置いたつて仕方がないからお前にあげやう。その鞄へても入れておいて。

久子。（寫眞を見ずに）お父さんのお寫眞なら此方へおいてくださいな。私そんなもの貰つて行つたつて粗末になるばかりて却つて勿體ないから。

母。（寫眞をかざすやうにして）なにお父さんの寫眞なら家に澤山あるから持つておいて。この寫眞は一番新しいんだよ。よく寫つてるぢやないか、これご覽。

久子。（無意識に手にとつて、寫眞に目を投げる。激動して輕く目をしばたゝいてゐる。けれどもすぐその激動に打勝つて静平な表情に歸る）まあ、ほんとによく寫つてゐますこと―

母。お前はほんとうにお父さん似だ。氣性までそつくりだよ。亡くなるときだつてお前にいくら逢ひたがつてゐたか知れないよ。

久子。(反抗的な靜平を保ちながら)私もお父さんは誰よりも一番すきでした。でも私は旅ではお父さんのことを忘れやう忘れやうとしてゐました。でもお父さんのことを考へると苦しくてならないんですもの。

(寫眞を輕く押して)

この寫眞もいたゞいて行きたいのですけれども、お父さんのことを考へるのがいやですから、家へ置いて行きますわ！私は誰のことも考へないで、身輕になつて暮して行きたいんです。

母。(少し不快な表情で)然うかへ。それなら私がしまつて置かうよ。

(久子は無頓着にお茶盆を以つて立たうとする。)

母。いゝよ、私が今持つて來るから。

久子。いゝえ、伯母さんいゝんですよ。まあ、ゆつくりしてお茶でも飲んでお話しませうよ。もう當分お目にかゝれないでせうから。

母。そんなこともないだらうけれども、まあそのお茶盆を私にお貸し、お花を呼ぶから。

(立つて廊下の方から女を呼ぶ。十二三歳の女の子が入る)

母。これを丁寧に洗つておいて。こわさないやうにしてね。それからお湯をいれて。

(女中去る。)

美代子は何うしたのだらうね？

久子。汽車の時間を調べて來るつて行きましたから、それで長くなつてるのでせう。

母。お前これから何處へ行くつもりなの？やつぱり松前へ行くつもりかへ？

久子。え。やつぱり函館へ。まだ來年一杯位はあそこにゐるつもりですよ。

母。汽車から下りて、また船に乗るのかへ？

久子。え。八時間ばかり船に乗つてゐるんです。

母。まあ、大變だね！

久子。でも、馴れるとさうでもありませんよ。

（美代子お茶を持つて來る。）
美代子。だゝ今。
母。馬車屋へ行つて來たの？來て呉れるつて？
美代子。えゝ、七時十五分に立つんですつて。だから
七時頃には來るてせう。
久子。（美代子に）連絡船の時間が解つて？
美代子。姉さん、よく解らないの。だからこれ貰つて
來てよ。これには汽車の時間もみんな書いてあるわ。
久子。（時間表を受取つて）これがあると大丈夫。ありがた
う。美代ちやんお母さんにお茶をついてあげ。
美代子。（お茶をつぎながら）姉さんほんとにもうすこしゐ
られるといゝんだけれどもね！
久子。私ももうすこしゐたいと思ふけれども……なに
また直きに來ますよ。
美代子。お母さん、津根雄さん何うしたんてせうね！
母。ほんとうに、何うしたんだらうね？お前もしなん
なら迎へに行つて來たら何うだらう？
久子。（時計を見ながら）まだ時間は大丈夫。立つ前には歸
つて來るてせう。
母。でも、もしまた會が了へて他所へ廻るといけない
から。ちよつと行つておいて。
美代子。（立上る）ぢや、一寸行つて來るわ。會は學校で
したね？
母。あゝ。
（美代子去る。）
久子、林檎はまだいゝのは出來ないけれども、少し
ばかり美代子にもがせておいたから持つて行つてお
呉れ。
久子。えゝ、ありがたうございます。もう大分日がか
げつて來ましたね。今夜は穩かだから船はきつと樂
ですわ。
母。然うかね。海が荒れたら、さぞ困るもんだらう
ね？
久子。でも私はいゝ鹽梅に、一遍も海荒に逢つたこと
はありません。
母。今夜船に乗るといつ函館へ着くんだへ？

久子。明日の朝早く。
母。然うか、そんなに早く着くものかね？
久子。えゝ。ぢきですわ。ちよつと一寢入りして目を醒ますころは、もう函館の港へ着いてるんです。
母。函館といふところは大變に景色のいゝところだつてね。
久子。え、まあ景色のいゝところですね。町はみんな高臺にあつて、そこから海が一目に見へるもんですから、夜はほんとに奇麗ですわ。
(この會話の間に四五人の男女の勞働者は列をなして左手から出て、砂利を敷いた道を踏んで門の方へ行く。
股引を穿いた女が二つ位ひになる女の兒に乳を飲ませながら、他の女と笑ひながら出て行く。
男はみんな腰に南蠻や鉈なぞをさげてゐる。
その内の一人が室の中の二人を見つけて何か囁くと、みんな一樣にその方へ目をむけて話し合つてゐる。
二人も、物音にその方を見ると、みんな一樣に頭をさげて行く。)
美代子。(勞働者の出て行く後をずつと見送りながら)伯母さん、みんな私の知つてる人ばかりよ。お小夜もゐましたね。あの女は今誰と一緒になつてゐるんでせうね？
母。(無頓着に)あれかへ？あれは大工の彌作と一緒になつてゐるよ。心持のいゝ女でね。
美代子。然うでせう。あれは私と學校朋輩でしたよ。昨日私は畑を歩いてゐると、あの女が林檎の木の下で赤坊に乳をやつてゐましたから、そばへ行つて話ししやうと思ふと、赤い顏をしてふいと彼方を向いてしまふんですよ。
母。きまりが惡いんだよ。お前に顏を合はせるのが。
久子。なぜでせうね。きまりの惡いのは却つて私の方ぢやありませんか？ほんとに私こそ赤い顏をしなくちやならないぢやありませんか？私はあゝして毎日きちんきちんと自分の身體を元手にして仕事をしてゐる人達を見てゐると、羨しくつて羨しくつてたまらないんです。さつきもあの耳の遠い作男に逢つたんですけれども、私達の子供のころと同じやうな顏をしてやつぱりあの大きな鎌を持つてせつせつと働いてゐますね。私一日でもいゝからあんな人の氣持

になつて働いて見たいと思ひますよ。
母。それだつて、お前のやうな身體て、あんなもののするやうな仕事をしてご覧、一日て參つてしまふよ。何んだつて、はたて見るやうには樂なもんぢやないよ。
久子。それはさうかも知れないわね。
母。(思ひ出したやうに)それは然うと、久子私はお前にお願ひがあるんだがね、きいて呉れるかへ?
久子。私にお願ひだなんて何んなことてす、伯母さん?
母。私はいつてもいはう〳〵と思ひながらいひかねてゐるんだよ。
久子。何んてす、伯母さん?
母。ほんとに、私はいひにくいんだがね、お前津根雄のことをきつぱり思ひきつて呉れないかへ?
久子。(驚き呆きれたやうな表情て)まあ、伯母さん飛んでもないこと!私はもう津根雄さんのことなんか何とも思つてゐやしませんよ。
母。でも、私にだけはほんとうのことをいつてお呉れ。
久子。私はなんて伯母さんに嘘をいふもんてすか。私は伯母さんにそんなことをいはれると、ほんとに情けなくなりますよ。
母。それならいゝけれども、もしお前にそんな氣持てゐてもらふと、私も美代子も慘めな目に逢ふんだよおまけに、この大井の家が亡んてしまふんだよ。だから何うか私達を救ふと思つて津根雄のことは思ひきつてお呉れ。
久子。(口惜しさうに)だから、伯母さん、私にはそんな氣が少しもないつて、いつてるぢやありませんか?
母。私もそれは然うだらうとは思ふんだけれども、美代子の素振りやなにかを見ると　何うもね私は氣になるんだよ。
久子。美代子はあなたに何とかいつたんてすか?
母。いえ、あの子はそんなことをいふ子ぢやないんだよ。ないだけに私はあれが可哀相になるんだよ。
久子。それなら私のいふこともほんとうにしてくだす

つてもいゝぢやありませんか？

母。それはもう、お前の方では苦勞もしてゐるからそんなこともあるまいとは思ふが、津根雄はまだほんの子供だからね。

久子。(唇をふるはして)伯母さんそれでは、私はまるで津根雄さんをだましてゞもゐるやうにきこえるぢやありませんか。私何うしたらいゝでせう？

母。然うとつて呉れちや私も困るんだがね。

久子。いゝえ、つまりは然うぢやありませんか、津根雄さんが餘念もなくてゐるのを、私が思ひ出させるやうにしてでもゐるやうにとられるぢやありませんか？

母。然うでもないけれども、人の心持といふものは妙なもので、離れてゐればゐるやうに、あきらめもつくものだけれども、そこがやつぱり人間だからね。

久子。(怒氣を含んで)え、伯母さん解りました。つまり私が家へ歸つて來たのがいけなかつたんでせう？それはもう伯母さんにいつていたゞかなくとも私の方ではもう……

母。すぐ然うとつてしまふからいけないんだよ。お前の歸つて來たのをかれこれいふのぢやないよ。こゝはお前の家も同然だもの……たゞ津根雄や美代子の心持がちやんときまつてしまふまでは側のものは、よつぽど氣をつけてやらないぢやならないのだよ。

久子。それぢや、それまでは私にもあまり家へ來て呉れるなといふのでせう？

母。まあ側で靜かにして見てやるのが本當だと私は思ふんだよ。

久子。それは然うでせうね。私も家へはあんまり歸りたくなかつたんですけれど、そんなことは少しも知らなかつたもんですから、つゐうつかり歸つて來てほんとにお氣毒なことをしました！

母。(無感覺のやうな表情で)まあ、そんなこともないけれども、兎に角津根雄に思ひきらせるやうにしてもらひたんだよ。また何年か經つてお前が暮しに困るとでもいふ時になつたら、いつでも歸つて來るがいゝ

やね。

久子。（苦笑に紛らせながら）伯母さん、私それまでは生きてゐないわ！

母。馬鹿なことをいふもんぢやない！

久子。私は人にご飯を食べさせてもらう位なら死んだ方がよつぽど益しだと思ふわ。（强いて笑ひながら）それだけは今からおことはりしておきますよ。

母。よしんばそんなことはなくともさ、今にいゝ婿さんでももらつて、此家へ來て何か仕事でもしたいといふときには、お互に世話をしたり世話になつたりしなくちやならないぢやないか？それが身内の人のすることだものね。

久子。（決心していふ）伯母さん、私は死んでもお家へは歸つて來ません！

（久子は感情を抑制しやうとつとめるけれどもとうと耐へきれなくなつて、立上る。廊下へ出る。階段の下あたりは少し小暗くなつてゐる。久子は一寸の間その小暗いところに立つてゐたが、とうと吸ひあげられるやうに階段をのぼつて行く。

母は久子が無言のまゝ立つて行くので、そのことに對して年長者の持つ不快と侮蔑の念に襲はれたやうな暗い表情を以つて久子の後を見送つてゐる。

この時津根雄は門の方からいそいで歸つて來る。紺の背廣服に前のめりになつたパナマ帽を冠つてゐる。ステツキを縁に投げ出すやうに置いて室の中へ入る。

二階へ行かうとして、室の中に母のゐるのに氣付く。）

津根雄。（昂奮した顔をして）お母さん、姉さんほんとうに歸るんですか？

母。（少し怖れながら）あゝ歸るんだつてよ。私がいくらとめてもきかないんだよ。

津根雄。（苦笑しながら）お母さんとめたんですか？

母。あゝとめたともさ。私がとめないと思ふの？

津根雄。お母さんがとめるもんですか。お母さんにそれだけの親切があつたら、姉さんがそんなことをする筈がないんだ。

母。何をいつてるんだらう、この子は。人のいふことをきいてから物をいふもんですよ。

津根雄。僕はお母さんのいふことをきいてゐられない。お母さんといふ人は僕は信用しない！

母。信用しなければ信用しないでもいゝよ。何うとも勝手におし!

津根雄。一體お母さんは姉さんを何うするつもりです?

母。私は久子を何うするもんか。そんなことはお前に信用の出來る久子にきいて見るがいゝやね。

津根雄。(母を正視して) お母さんはその手で姉さんを追ひ出したんですね!うまいもんだ!

母。何んだと、私は久子を追ひ出した? 誰がそんなことをいつたへ?

津根雄。誰もいはなくたつて解るぢやありませんか? 第一お母さんが自分で自分の胸にきいて見れば解ることです。

母。津根雄!お前は何うしてそんな馬鹿なことをいふの?

津根雄。兎に角、お母さんは姉さんをいぢめて追出してやるつもりです!僕にはその心地がよく解つてゐる。

母。私が久子をいぢめた? 飛んでもないこと!

津根雄。お母さんは姉さんに僕々迷はせに來た人だといつたでせう? それがいぢめるんでなくて何んです?

母。あゝそれはいつたよ。當前さ。人の子供を迷はせて散々な目に合はせておいて……

津根雄。お母さん、およしなさい!見つともない!

母。おや見つともないのは私ぢやないよ。お前達ぢやないか? それでも足りないで妹の邪魔までする氣なんだよ!

津根雄。(後頭部を掻きむしるやうにして) 馬鹿げた話だ。それはみんなお母さんの邪推です。姉さんはそんなことをするもんですか。姉さんはこの四五年といふものは家の模様も何も知らないんです。まるで子供のやうな氣持で家へ歸つて來たんだといつてるぢやありませんか?

母。お前は何んぞといへば久子の肩ばかり持ちたがるそんなに子供のやうな氣持で家へ歸つて來たものなら、人のゐないところでいやな眞似をしたりするわけがないぢやないか?

津根雄。(驚いて) お母さん何をいつてるんです? 僕にはお母さんのいつてることは、ちつとも解らない。

母。（意地惡い表情で）それこそ、自分で自分の胸にきいて見るがいゝやね！

（この時美代子は津根雄の入つて來た門からいそいで來る。二人の激昂して對ひ合つてゐるのを見て、おど〳〵してゐる。）

母。美代子、津根雄は私が久子を追ひ出してやるんだといつてるよ。

美代子。（母の傍へ行つて）まあ〳〵、お母さん、靜かにしてください。もうぢき姉さんが立つんですから。

母。だから私も落ちついて話しをしやうと思つてゐると、津根雄がいろ〳〵なことをいひ出すんだよ。

美代子。まあ〳〵。そして姉さんは何處へ行きました？

母。（唇をふるはせて）さつき二階へ行つたやうだつたよ。

美代子。（津根雄の方へ氣を配りながら）もうぢき時間ですから、みんなでお茶でも飮んで馬車の來るのを待つてゐませう。私姉さんを呼んで來ますから。

母。（小聲で何事かいひながら）かうしてみんなに、いぢめられてばかりゐる位なら、私いつそ死んだ方がいゝ！

（母は目を拭きながら母屋の方へ行く。二人は別にとめやうとはしなかつた。津根雄は机に頭をあてゝゐる。）

美代子。（廊下のところへ行つて呼ぶ）姉さん！姉さん！

（久子は二階を下りて來る。いくらか晴々しい顏になつてゐる。然し目は赤く腫れてゐる。旅着に着代へて、手に信玄袋をさげてゐる。二階を下りて室へ入つた時、久子は無意識的に目を津根雄の方へ投げる。周圍のために反對に發はれて來た、一種の感情を抑制しやうとしても抑制し得ないやうな表情がその顏の上に表はれてゐる。）

美代子。もうぢきだわ、姉さん。

久子。然うね。

美代子。ほんとうに名殘惜しいわ！

久子。あゝ私も。

美代子。でも姉さん、またぢき來てくださるでせう？

久子。私も來たいんだけれども、來られるか何うだか？

美代子。そんなこといはないで、また來てくださいな。私達はほんとに淋しいんですから。

久子。淋しいことはないぢやないか？かうしてみんなで一緒に暮してゐるんだもの。

美代子。でも淋しいわ。みんな別々な生活をしてゐる

んですもの。私ゝ姉さんと一緒に行きたいわ！

久子。私と一緒に行きたい？馬鹿なことをいふもんぢないよ。私はまたあの百姓達と一緒に畑の仕事でもして見たいと思つてゐる位だよ。私はあんな人達が美しくてたまらない。

美代子。私は旅をしたいと思ふわ。姉さんのやうに、行きたいところへ行つて、歸りたいと思ふ時はいつても歸つて來られるやうな身上が羨しいと思ふわ。

久子。（笑ひながら）そんな呑氣な旅があるもんかね？行きたいと思ふところへも行かれない、歸りたいと思ふ時には歸へられないのが旅ぢやないか？私はお前と一緒にゐたいと思つても時が來ればかうして行つてしまはなくちや……

（突然發作的に泣く。殆んど病的な泣方をする。）

美代子。姉さん！姉さん！

（妹は姉の傍へ行つて抱きかゝへるやうにする。
津根雄は立つてガラス戸の方へ行く。）

久子。私何うしたんだらう？ほんとに馬鹿げてゐること！

美代子。姉さん、何も考へないでゐてください。旅をするとき悲しい思ひをするのが一番いやだわ。（津根雄に）あなた、姉さんとお話してやつてくださいな。姉さんに氣まずい思ひをされて別れると、私ほんとにすまないと思ふわ。

久子。（津根雄の方へ向いて）津根雄さん、私が來たばかりに、いろ／＼いやな思ひばかりさせて、すみませんでしたね。

津根雄。（ガラス戸を背にし立ちながら）いえ、僕が惡いからです。全く僕が惡いからです。

久子。いえ、そんなことはありません。誰れも惡いんぢやありません、私が來たのがいけなかつたのです。何うか津根雄さん、お母さんのことを惡く思つちやいけませんよ。お母さんでなく他の人でも、やつぱりあれ位のことはいひますよ。それが人情ですもの。私がその人情の中へ飛び込んで來たのがいけなかつたのです。だから私は出て行くだけです。それが私

には當前(あたりまへ)のことですものね。

津根雄。（やゝ長い沈默の後に）でも姉さん、また來てくださるでせう？

久子。え、私が來たいと思ふときはいつでも來ますよ。あなたと美代子はいつまでも仲よくしてゐてくださいよ。

（驛馬車の喇叭の音がする。）

美代子。姉さんもう馬車が來たやうですよ。仕度がもういゝんですか？

久子。えゝ。もういゝんですよ。

美代子。津根雄さん、私停車場まで行つて來るわ。あなたは行かない？

津根雄。（後頭部を押へながら）いや僕は行かない、頭が少し痛むからこゝで失禮する。

美代子。然う。それはいけないわね。

久子。津根雄さん、そのまゝにしてゐてください。それぢやこゝでご挨拶するわ。ほんとに身體を大事にしてください よ。何うもいろ〳〵お世話さまになりました。

津根雄。（陰鬱な表情で座る）ほんとに姉さんにすまないことをした……また來(き)てください。

（馬車の音が次第に近づいて來る。母屋の方で人々の話す聲が聞える。）

美代子。さあ！姉さん行きませう。

久子。（津根雄の方を向いて）津根雄さん、さやうなら！

津根雄。（失神したやうに室の中へ立ちながら、殆んど聞えぬやうに）さやうなら！

（この頃はもう室の中は暗くなつてゐる。正面の夕日もいつとなく消へてしまつて外は眞暗になる。

驛馬車の赤いラムプが木の間からちらついて見へる。

『さやうなら』の聲が二三度響くと車が辷り出して行く。

津根雄は暫くガラス戸から外を見てゐたが、車の動き出すと同時に力なくそこを去つて室の中央へ來る。）

津根雄。（殆んど聞へない位の聲で叫ぶ）姉(ねえ)さん！姉さん！

（何かを抱きかゝへやうとする時のやうに兩腕をひろげて暗い室の中に轉げる。）

――幕――

（一九一四、六、二四）

剃刀（一幕物）

中村吉藏

○登場人物

理髮師	木村爲吉
内緣の妻	お鹿
小學校々長	佐藤敬一
村役場書記	野口早太
代議士、參事官	岡田秀作
富豪伊勢屋の子息	勘七

○場所

東京附近の小村驛

○時

現代

舞臺は片田舍の理髮師の内部、上手三分は疊を敷いて茶の間兼帶に、來客の待合處になつてゐる。古びた長火鉢を据え、粗末な茶器などがそこらに轉がつてゐる、突當りは劃の障子が二枚、その左手に紗擬ひの簾が裏坐敷への出入口に懸けてある、右手の壁には、暦入の彩色のけばけばしい廣告繪や

石版刷の戰爭畫などがベタ〳〵貼附けてある、理髮床の正面上手寄りには、出入口の玻璃戶が二枚、それから下手へ寄つて、緣の剝げた、姿見鏡が二つ、棚の上には、ブラッシ香水瓶、剃刀掛シャボン函、檜扇の花の赤いのが小鏡に映つてゐる、花瓶などゴタゴタと列び、下手の壁際には洗面臺が立つてゐる、椅子も三臺小汚いのが配置されて何んだか、荒んだやうな、塵埃臭い空氣がそこらに漂うてゐる。

○

白い仕事着を被つた爲吉は、神經質らしい眼を光らせながら、一人の男子の顏を剃つてゐる、火鉢際には二十七八の、蝶々髷の鬢が亂れて青白い顏をした、眼元に嬌のあるお鹿が長煙管で煙草を吹かしてゐる、二十四五の毬栗頭の、ニッケル緣の眼鏡を掛け、小倉の袴を着けた村役場の書記野口早太は、上り框に腰を卸して新聞を覗き〳〵話してゐる。

野口「今日は午後から常福寺で政談演說があつて、それから夜にかけて懇親會があるんだ、何しろ代議士で今度の內閣で參事官に任命されたんだし新聞にもこんなに書立てゝある位だから、此の邊の評判は大したものなんだ、幸、日曜日でもあるしするから、近村からも隨分有志者が集つて來るだらう、岡田さんのやうな人物が出たのは此村の名譽だね」

お鹿「まだ若い方なんでせう、夫と同年輩位なもんでせうねえ」

野口「何んでも三十臺だらう、四十臺になつたら縣知事か局長、五十になつたら大臣だらうね」

お鹿「ヘエ、そんなに豪い人ですかねえ、何んな顏をしてる方でせう、一寸見たいわ」

野口（笑つて）「別に俳優のやうな顏をした色男でもない、だが眉の太い、口の引締つた、一寸と見ても貫目のある人だね、殊に眼の光の鋭い、一目で他人のお肚の中まで見破ろうといふやうな處があるよ」

爲吉（冷やかに笑つて）「千里眼つていふ奴の親類見たいだな」

野口「イヤ、戲談ぢやアない、昨日、村役場へ訪えて村稅の事なんかいろ〳〵聽いて行かれたが、後で村長も收入役も「あの眼が恐い、一物あつて」云ひ合つてゐたんだ、それに第一、氣輕に村役場へテク〳〵歩いて來るなんて、平民主義の人だつて、皆も感心

してゐたんだよ」

爲吉「平民主義か……勝手な時には然うなんだろう」

お鹿「宅ぢやァ昨日、ワザ〳〵御機嫌伺ひに行つたのに、來客があるつて、而も出さないのは不都合だつて、プリ〳〵怒つてるんですよ、けれども身分が違やァ仕方がないぢやァありませんかねえ」

野口「そりやァ然うサ、己だつて、顏は見たが、まだ口を利いた事はないんだからな」

爲吉（ブラッシをかけながら）「村のお役人樣と、政府のお役人樣とは、そりやァ格が違はァな、けれども己と秀作さんとは、そんな筈はねえんだ」

お鹿「村の小學校で、同じ級だつたし、卒業する時も宅のが一番で、あの方が二番だつたからつて、今でも矢張昔の友達のやうな事を云つてるんですが、世間は然う行きやァしませんわ、あんまりそんな事を人樣に云つちやァ笑はれるつて、私が氣を揉んでるんですよ」

爲吉「フン、何方が笑はれるんか!?」

野口「昔は昔、今は今サ、村役場の書記と政府の參事官と格が違つてりやァ、田舍のざんぱつ屋さんと、高等官一等とは猶更緣もゆかりも無さそうだ、爲吉君の變人もチと桁が外れ過してるやうだよ、氣候の加減かも知れないな」（と新聞を取上げる）

お鹿「眞實ですよ、この頃は妙に氣六つかしくなつて、昨日なんか記事の出てゐる新聞をベリ〳〵引裂いたりなんかするんですもの、宛で氣狂ひだつて、笑つたんです」

爲吉「貴樣こそ、餘計なお喋舌をするな」（叱り付けて、チツと睨みそれから客を洗面臺の處へ連れて行く）

野口「今日の新聞は二段埋めてあるな、「錦を故鄉に歸れる岡田參事官」つて、二號標題だから豪いよ、……何しろ、善かれ、惡かれ人間も新聞に出されるやうにならないと駄目だな、生きてるか、死んでるか分らないやうな事をして、愚圖々々、その日暮らしをやつてるんぢやァ全く生甲斐がない」

お鹿（苦笑して）「私だつて、これて新聞に載つた事もある

んてすがねえ」

野口「然う、然う、例の無理心中の一件かね……お鹿さんも兎に角あの頃は若かつたよ……」

お鹿「今はもうこんなお婆さんになつて了つたわねえ」

野口「イヤ、然ういふ譯ぢやアないよ……今でも矢ッ張美しいには美いがね（少し周章てながら）あの相手は監獄へ入つたんだつたね、でもまア、お鹿さんが負傷しなかつたのが何より幸福だつたよ」

お鹿「お庇で生き延びて、今ぢやアざんぱつ屋のお女房さんかね、斯うなつちやアもう新聞へも出ないわねえ」

野口「イヤ、我々が新聞へ出るのは碌な事ぢやアないよ、まア、出ない方が増しとして置くんだな」

（爲吉は客の散髪を了へて、上り框へ腰を卸ろし、煙草を一服する客は大島の單衣に、鼠色の縮緬の帶をしめ直し、巻烟草を吹かし始める）

お鹿「若旦那、まアお掛けなさいませな」

客「難有う……」（腰を卸ろす）

野口「伊勢屋さん、まア遊んでお在なさい、今に這般の將棋の仇打ちをやりますよ、ちよつと一つ、頭髪を濟まして貰つてからね」（早く椅子へ倚る）

客（お鹿の顔と爲吉の顔とを等分に見ながら）「お忙しいでせう!?」

お鹿「イエ、別に貴方……まアお上んなさいましな、お茶を一つ入れませう、番茶ですけれども」

客「お構ひなさらんで下さいよ」

お鹿「何んにも貴方……まア此方へお上んなすつたら善いぢやアありませんか」

客（爲吉の方を氣にしながら）「御邪魔ぢやアありませんか?」（云ひ乍ら片足づゝ膝行り上る）

お鹿「此頃は、奥さんの御病氣はおよろしい方ですか?」

客「否え、病氣保養に里へ遣つてありますす、あんなものはもう歸つて來ないが善いんです、病人を抱へ込んぢやア一生のお荷物ですからねえ」

お鹿「でもお可哀さうぢやアありませんか?」

客「仕方がありませんよ」

野口(笑って)「勘七さんが自分の病氣を傳染して置いて、それを打捨るなんて隨分薄情ぢやアないか？こういふ人の細君になつたものは隨分悲慘だよ」

お鹿「眞實ね、一體、男子つていふものが得手勝手なんだわ、若旦那に限つた事ぢやアない」

野口「此處の親方なんか、女房孝行で評判だが、ても矢つ張お鹿さんの方に、怨があるんだね」

お鹿「ありますとも．．．．」

(爲吉は默つて、勘七の方をヂロリ／＼尻眼にかけてゐる)

野口「時に親方、煙草が濟んだら、チヨッと遣つて貰はうぢやアないか？午後からお寺の方へ行つて、會場の整理を見屆けて來なけりやアならんから、これでナカ／＼忙しいんだ」

爲吉「ても將棋の仇打だなんて、呑氣さうな事を云つてたんぢやアないかね？まアもう二三服遣つてからだ、己だつて元來人の頭髮を刈る爲めに產れて來た人間ぢやアないんだからな」

野口「だつて商買となりやア、そんな變痴奇論は止す事だよ、ざんぱつ屋で飯を食つてる以上、お客樣の云ふ事を聽くのが當然だ」

爲吉「八錢のお客樣のお庇で、飯を食はせて貰つてるんだな、難有い事だ」

お鹿「汝さん、そんな馬鹿な事を云はないで、早くして上げたら善いぢやアないかね、野口さんだからそんな無遠慮な口を利いても判つてなさろうが、商買に障るよ」

爲吉「己やアもうつく／＼忌になつた、寧そ廢業したい位だ」

野口「親方、串談云つちやア困るぜ、此村には此處一軒ぢやアないか？廢業されちやア隣村迄行かなけりやアならない、皆が困るよ」

お鹿「この頃は急にあんな事許り云出して來て、私も一人で困らせられてゐるんですよ．．．．若旦那も些と云つて聽かせてやつて下さいな」

吉「兎に角稼がなけりやア仕方がないてせう」(茶を呑み／＼云ふ)

爲吉「己等は稼がなけやァ仕方がなくて、若旦那は遊ばなけやァ仕方がないんだろう、善く出來てゐますぜ」

お鹿「こんな事をヅケ〳〵云ふもんぢやァないよ……若旦那の家は澤山と金がおありなさるんだから、稼ぐ方・店の者が大勢で引受けてしてゐるんだし、若旦那は唯遊んで居なされば それで濟んで行くんですわねえ、此方等とは運命が違つてゐるんだからね」

爲吉「フン、汝もその運命が惡かつたんだね、お氣の毒さま」

お鹿「惡緣つていふんだろうね」（笑ふ）

お鹿「あの時、汝も若旦那に請出されてゐたら、今ぢや伊勢屋の若奥様て、ざんばつ屋さんなんかとは口も利かない身分になれたんだろうが、馬鹿だつたね、尤も越前屋の酌婦にや、今の身分が分相應だと思つて諦らめるんだ」

お鹿（勃とした顏色）「若旦那を前へ置いて、下らん事をお云ひてないよ、馬鹿々々しいッ」

爲吉（鼻であしらつて）「若旦那も昔忘れずに、よくチヨクチヨク來て下さるんだから、御禮を云つたが善いんだ」

客「……もう失禮します……ぢやァ、これを……」（上銀貨を出す）

お鹿「難有う……二十錢でございますか？お剰錢を！」

（起上る）

客「イヤ、お剰錢はよろしいんです」（と下へ降りる）

爲吉「お剰錢を持つてお出て……拾貳錢！」

客「イヤ……それはもう要りませんから……」

爲吉「要らん事はありません……餘計に貰ふ道理がないから」

（お鹿が渡すのを爲吉は受取つて、客の鼻先へ突出し）

爲吉「難有う……」

（客は匆々に立出で戸口の玻璃戸をガタリと軋らせて出て行く）

野口「親方も隨分ぶつきら棒だな」

爲吉「畜生めッ」（怒つた顏色で、後を睨めながら）「まだ何んとか思つてやがるんだから仕末に了えねえ」

お鹿「あゝ一刻ちやア段々客が寄り附かなくなる一方だよ、大切な旦那様ぢやアないかねえ」

爲吉「ヘン、貴様の爲めにや然うかも知れないが、己の爲めには油斷のならない韮鳶だ、ざんばつ屋をだるま屋と間違えてやがるんだろう、生つ白い面をしやがつて、女の尻を追駆け廻る外に能がないんだから箸にも棒にも懸つたもんぢやアない、あんな穀潰しても、富豪の子息だといふので、村の奴はへいへいしてやがる笑はかせらアな」

野口（眞面目になつて）「そりやア全く親方の云ふ通りだ、あんなのが不良少年つていふんだな……（四邊を見廻して）大きい聲では云へないが……」

お鹿（口元で笑つて）「だつて野口さんも折々、若旦那のお取巻きで料理屋へ上つて行きなさるつて評判がありますよ」

野口（周章てたやうに）「それは一度や二度お交際に行つた事もあるが、幇間のやうな眞似はしないよ、これでも大望のある身分だから」

お鹿「東京へ行つて勉強するつて云ふ、貴方のお話も隨分長いやうですが、愈々何時頃御出發なさるんですか？」

野口「講義錄の方はもう卒業したから、これで一二年勉强したら、辯護士か、高等文官の試驗は受けられますよ、一生、村役場の書記ぢやア情ないからね、何時ても上役に頭を抑へ付けられ通して、威張れる時と云つたらまア滯納税の處分に行つた時位のものだね」

お鹿「ホヽヽ、然うでしたね、この春、此處へ滯納税の取立に入らしつて、茶碗や膳まで差押へるつて切口上で云ひなさつた時は、チョッと怖うございましたけッ、平常の野口さんとは人間が變つてゐたやうでした」

野口（眞面目になつて）「財務の執行となつたら、そりやア止むを得ないんです、あゝいふ時は自分が自分でない國家の法律の力が、自分の身體に宿つて來るんだね、それで、氣の毒だとか、慘酷だといふ感は、何

處か腹の隅の方へ押し込められて了ふんです、そして他人の柔脈を押へたやうな氣がして、苦しむのを見てゐるのが、一寸と愉快ですよ……後からは氣の毒になつて、閾を跨ぐのが極が悪いけれども」（と頭を搔いてわざとらしく笑ふ）

爲吉（冷やかに笑つて）「脈を抑へるつて云やア私は毎日それをやつてるんだね、脈つて云ふより私のは急所だ、私は毎日、剃刀を握つて、人の喉首を剃つてるんだからね、刄先を一つグイと突いたら人間の息の音を止めて了へるんだ、それを思ふと、お客つて皆馬鹿正直なもんだ、此方が何んな恐ろしい事を考へてるかも知らないで、平氣で、首を此方の手へ任せて、磨ぎ澄ました刄物で自由自在に生身へ觸らせてるんだからね、何んな豪さうな顔をしてゐる人でも、何んな善い身分だと云つて、威張つてる奴でも、此方の腕へ首を抱かせたら最期、もう活さうが殺さうが指先一本の働きにあるんだからね、それで私は無事に剃つてやつた後では人間一人助けてやつたと思つて、腹の中では笑つてるんだ」

お鹿「まア汝さん、そんな氣狂めいた事を云つたり、考へたりしちやアいけないぢやアないか？……汝さんは何うも變だよ、お醫者に診て貰つたらいゝわ」

野口「親方は剃刀を使ふ時、そんな事を考へてるんかね薄氣味が悪くなつて來るよ」

爲吉「イヤ、それも始めの中は、お客の顔へかすり傷一つ附けないやうにと思つて、後生大事に、ビク／＼やつてゐたもんだが、段々、馴れて來ると、段々倦怠が來て、終には繰り返し／＼一つ事を毎日やつてるのが癪に障つて、寧そ客の喉首でもぐいとやつたら、この商賣を廢業られるかと云ふ氣になつて、それからは始終、そんな考が頭の中に巣を喰つたやうに附いて廻るんだ、現に、今の、伊勢屋の若僧を剃つてやる時も、グイと喉笛へ突込まうかと思つたんだ」

お鹿「オヤ、マア……眞實に此人は何うかしてるんだよ、野口さん、困りましたねえ」

野口「これぢやア、ツッカリ髯も剃つて貰へないな、さんぱつ屋て死んぢやア私も浮ばれない、これてまだナカ／＼大望も持つてゐるんだから」（向ふの椅子へ逃げる）

爲吉（嘲るやうに笑つて）「マサカ、村のお役人の喉笛を抉るやうな氣まぐれもやりませんよ、何しろ考へて見ると自分の生命と掛替えだからね、あの伊勢屋の若僧位なものと取替るのもつまらなくなつて來ますア、そりやア、若し彼奴が、家の嫁を何うかしたといふ事件てもあつた日にや、今日だつて、生かしてこゝの戸口を出しやアしなかつたかも知れないけれども……」

野口（吐息をして）「ぢやア怨がなければ、そんな眞似も出來ないといふんだね」

爲吉「イヤ、怨があれば、それ位な事は當り然だアね、誰の喉へ剃刀を當てゝる時ても、シュッ／＼と刄先が髯を擦つて皮膚の上を滑つてゆくのを見つめてゐると、何んだか不思議な氣持がして、も少しの事てこの皮膚が切れて、凸くなつてある骨が切れて、血が吹き出すんだが、何うして剃刀は何時も上ばかり滑つてやがるんだろう、ハ、ア、己の手は器械になつたんだ、剃刀へ附着いて了つたんだ、さうすると己れの體全體は人の髯を剃つたり、髮を刈つたりする器械に化つて了ひやがた、忌々しい、己は生きてゐるぞ、生きてる證據に、一つ剃刀を外らかしてグイとやれといふ氣持になるんだね、だがさう思ふとふと氣が附いたやうに、生命と懸掛だぞッと自分が自分の耳て獨語を云つてるんだね」

お鹿「野口さん、まア何うしてあんな事を云出したんてせう」

野口「少し逆上に附てるやうだね、親方チト休んだら善いぢやアないか？」

爲吉「イヤ、自分の生命が惜しいッと思ふ位だからまだ大丈夫だ、そりやアこれても相手に依つちやア、取替へたつて構やアしないサ、何うせ己れもこんな下らない商賣をして、腰の曲るまで生きてゐたつて始

まらないからな、だが、是迄まだ不足のない相手には出逢さない、村長や、郡長や、三等郵便局長なんかの喉笛を挟つたつてつまらないからな、尤も一月前に、この村へ演習の下見聞に來た何とか少佐の奴は、田舍の剃刀は切れないなんかとぬかしやがつてあんまり威張くさつた口を利くから、髯が切れなくても、骨は切れるのを見せてやろうかゝ思つて、已にグイとやる處だつたがつい馬鹿々々しくなつて止して了つたんだ」……

野口「其奴ァ危險だつたな、てもまあ無事に濟んで村役場て騷がんてゝ善かつたのは大助りだ」

お鹿（溜息をして）「眞實に家はこの頃、何うかしてるんだよ、野口さん、何卒こんな事を世間へ仰らないて下さいよ、商賣が上りますから」

爲吉「商賣が上りやア結句幸福だ、此れて己にも又別の考があるからな、何アに、こんな田舍に許り日が照つてるんぢやァあるまいし、世間は廣いんだ」

お鹿（窘めるやうに）「世間が廣くたつて、私等の生活の立つ道はもう極り切つてゐるんてすよ、今更何う足搔いて見たつて、仕様がありやアしないんだからね」

野口「然う云へばまアそんなものかも知れないな」（考へ込む）

（表口の戸を明けて、半白の髮と髯とに包まれた五十前後の老人、時勢遲れの、短いフロツクコートに、銀鎖をジヤケツトの扣鈕に絡ませながら入つて來る、彼は小學校々長佐藤敬一である）

佐藤校長「今日は……やア野口さんか、此れからてすな？」

野口（丁寧に會釋）「イヤ私はその後からでもよろしいんてす……何卒先生から……」

（爲吉は默禮する）

お鹿「先生樣、ようこそ、何卒まア此方へ」

佐藤校長（口早な調子で）「難有う……難有う……野口さん、まア先口から……何卒、御遠慮は要らない事てす」

野口「イヤ、私はその……何卒、先生から……」

爲吉「まアお掛けなさいませ」

佐藤校長「難有う……何々だね、相不變忙しいかな」

爲吉「ヘエ……」(と口重たげな調子)

佐藤校長「野口さんは歡迎會や何彼ていろ〳〵御用事がありませうな」

野口「ハイ……否え……午後、一寸とお寺まで行つて下檢分をしたら別に用事はありません……掛の方が大分居られますから」

佐藤校長「然うですかな……何しろ今日は愉快な事だねこの村の名譽でもあるし、又、我が小學校の名譽だからね」

野口「然うですね、昨年は先生の廿五年勤續の祝賀會がありますし、今年は又、先生の御弟子の中からア、して出世なされた方があるし、重ね〳〵御目出度い事ですね」

佐藤校長「大きに然うだね、お互様に喜ばしい事だ……岡田君は相不變平民主義て、昨夜はワザ〳〵私の陋屋へ訪ねて來てくれてね、昔談も出たんだよ、今日は一つ髯でも剃つてから、御挨拶に出かけやうと思ふ處だ、もう明晩は東京へ歸るのださうだから、ナカ〳〵忙しい事だて」

野口「何しろ中央政府の高官ですから、一日でも半日でも時間が大切なんでせう」

佐藤校長「大きに然うだろう、行く〳〵は大臣だろうね、矢ッ張、豪物は小學校時代から何處か違つた處があるよ、一番か、二番か始終外づした事はなかつたからな」

野口「矢ッ張、小學校時代の薫陶の如何に依りますね、佐藤先生のお効があるのに相違ありません」

佐藤校長「難有う……難有う……何しろ自分の敎へた生徒の中から、天下の人材が出て來てくれると、自分の肩身も廣くなつて來るやうに思はれるね、其處が天職の難有さだ」

爲吉「野口さん、此方へお掛けなさい、やりませう」

野口「イヤ、先生から先へ、……私は何時でも善い」

佐藤校長「イヤ、まア野口さんから……先口は先口だ」

野口「私は後てよろしいんですから……何卒先生から」

佐藤校長「イヤ、そりやアいけない、私は後から來たんだから」

爲吉「何方でも、早く片附けませう」

野口「サア、先生、何卒」

佐藤校長「イヤ、てれ禮儀は禮儀だから」

爲吉（剃刀を研ぎながら）「ぢやア野口さんから先へ息の根を留めて上げやうか？」

野口「串談云つちやアいけねえ、私は今日でなくても善いよ、さう髪が延びてる譯でもないんだから」

爲吉「ぢやア先生から先へ片附けませう」

（佐藤校長、中央の椅子へかける）

佐藤校長「でも爲吉君も近頃は大さう精が出るね、何しろ結構だ」

爲吉「イヤ、結構でもありませんよ、ざんぱつ屋なんて隨分ドらないもんです」

佐藤校長「イヤ、職業に高下はないんだから、忠實に勉强すればそれで善いんだ」

野口「然うですとも、爲吉君も此迄辛棒して來たんですから、もう一息ズッと遣り通すんですね」

爲吉（刄先を眺めながら）「何を遣り通すんでせう」（高笑する）

佐藤校長「それ〳〵人間には天職があるんだから、それを一生懸命に遣り通すんだね」

爲吉「二十年以前に先生がそんな事を仰つて下さつたんだね、それからズッと遣り通したんですが、つくづく下らないといふ事が分つて來ました」

佐藤校長「フム、君が小學校を卒業後、東京へ苦學に行くつていふ話だつたのを、君の親爺が心配して、父の稼業を繼ぐやうに說諭してくれといふ事だつたので、私はそれに賛成したんだが、まア〳〵斯うしてやつて行けりやア結構ぢアないかな？」

爲吉「でも秀作さんには、親の家業の農業をやれつて、說諭はなさらなかつたんですね？」

佐藤校長「岡田には學資金があるんだから、遊學させるといふのに、賛成したよ、それが今日、秀作君の出世の基になつた譯ぢやアないか？」

爲吉「ぢやアその學資金がありやア、私も、こんな、ざ

いゝんばつ屋なんかやつてゐるんぢやァなかつたんだね、つまり金が豪いんだ」（ハヽヽ、と笑ふ）

野口「結局そんなもんだろう」

佐藤校長「そりやァ爲吉君も小學校は善く出來たんだから惜しい物だとは思つたが、何しろ無茶苦茶に東京へ踏み出して、迷ひ途に入つちやァいけないと思つてな」

爲吉「でもその後、二三度、東京へ逃げ出しちやァ、力づくて親爺に連れ戻されたりなんかしてたんですからね、それから道樂もやりました、女房も二三度更へました諦めやうと思つたつて、諦められるものぢァありませんよ」（云ひ〳〵髭剃に取かゝる）

（野口は、坐敷の上り框へ戻つて）

野口（小聲に）「お鹿さん、氣を附けないといけないよ」

お鹿「眞實ですわ」（上り框へ乘り出して來て、仕事の樣子を見守つてゐる）

（爲吉は折々、溜息をしては、ゴリ〳〵と剃刀を使つてゐる）

佐藤校長「少し暑くるしいから、頬髯は薄く剃つて貰はふか?!」

爲吉「善ございます……」

佐藤校長「段々白髪が多くなるやうだな」

爲吉「お年齢には適ひませんね……併し先生、あんまり口をお利きになると、剃刀が滑つて、何處を切るか知れたもんぢやァありませんよ」

佐藤校長「然う〳〵、毎度、汝に叱られるな、刃物が汝の手にあるんだから、斯うなつちやァ、汝の命令通りにする外はないね」

爲吉「もうお默んなさらんと、剃刀が使へません」

佐藤校長「ハイ〳〵……」

（爲吉は今、喉の邊りへ剃刀を動かしてゐる）

野口（相不變、小聲に）「何んだか冷汗が出るやうだよ、あれて指先へグイと力を入れたら、それ限りだから、人間つて脆いもんだな」

お鹿（振返つて）「聞えますよ、家のが變な氣持ても起しちやァ大變ですからね」

野口（コロリと疊へ寢轉んで）「併し考へると忌になるね、立身

だの、出世だの、やれ名譽だの、財產だのつて、血眼になつて騷ぎ立てゝ見た處て、あの指先一つてグイとやつたら、後はもう何んにも無くなるんだからね、人間つて奴の總勘定が附いて了ふんだからね、三十近くになつて、これから東京なんか出て苦勞するのも馬鹿かな、アヽア、」

お鹿「忌に心細い事を云ひ出して來たのね、野口さんは？」

野口（興奮的口調で）「併し矢張り、金だ、世の中は金がなけやア駄目だ」

お鹿「つまりは其處へ落込んで行くんだね！」

野口「金があつて見給へ、あの人だつて、參事官位になれてたかも知れないよ、そりやア實際分らないよ」

お鹿「さうすると私が參事官の夫人だね、惜しい運を取逃したのね」

野口「女は何んな出世でも出來るさ、女の資本は容貌とそれから肉體だね」

お鹿「然う云やア男だつて腕一つぢやアないかね？」

野口「腕があつても金が無けやア當節は駄目だ、時勢が然うなつて來てるんだから何うも致方がない……オヤ、もう濟みさうだな、エヽと、私は一寸と出て來やう」

お鹿「頭髮は何うなさるの？」

野口「後にせう……一寸と用事があるから……先生御免蒙ります……」（スタ〳〵と出て行く）

佐藤校長（洗面臺から歸つて）「ハヽア、大分若くなつたやうだな」

お鹿「先生は何時も御元氣か善くてゐらつしやいますよ」

佐　校長「まだナカ〳〵此世にする仕事が殘つてゐるからな、もつとも元氣が善くないと何うもならんのだよ……序に香水を一つ願はふかな」

（僞吉、香水を吹き掛け了つて、坐敷へ上る、お鹿はお茶を入れる）

佐藤校長「野口さんは何うして歸つたのかな、私が先へ濟まして何うも氣の毒だつたな」

お鹿「イヤ、又お歸りになるのでございませうよ」

佐藤校長「然うかな(頬を撫で廻して)イヤ、スッカリ善い氣持になつた、髯が延び過ぎるとモシャ〳〵して、他人の顏だか、自分の顏だか分らなくなるが、お庇でサッパリした」

お鹿「まアお茶を一つ召上りませ」

佐藤校長「難有う……難有う……ぢやアこゝに御禮を置きますよ……左樣なら」

お鹿「先生お剩錢を……」

佐藤校長「否……要りません……左樣なら」

お鹿「難有うございます(送り出して)……爲さん、「難有う」位云つたら善いぢやアないかね、あんまり無愛相だよ」

爲吉(烟草を吹かしながら)「難有くもねえよ……何んだい老耄めが……秀作さんが小學校時代から違つてりやア己れだつて違つてたアな、己れの方が卒業する時は一番だつたぞ、天職だなんて、廿五年も一つ處の小學校々長に嚙り付いてりやア譯は無いやね、善く倦もしないでやつて來られたもんだ、馬鹿根氣丈は感心するよ」

お鹿「でも廿五ヶ年も辛棒が出來たから、知事さんから御褒美が出たんぢやないかね!」

爲吉「ぢやア己れも今に廿五ヶ年勤續のざんばつ屋さんだつて、郡長から御褒美の出るのでも目的に働かうかな……糞でも喰へだッ」

お鹿「今更焦々したつて仕方がないぢやアないかね」

爲吉「己はもうこんな生活に倦怠み切つたから、焦々するのも當然だ、第一、あの緣の剝げたのは、親父の代からあの通りだ、そして鏡の中を見ると椅子へ掛けた人間の顏は毎日、幾度でも變つて行くが、傍へ立つて白い被服を着てる奴の面は一向變つて行かない、何時も同じ男子だ三百六十五日、同じ男子が、同じ手つきをして、同じ狹い場所を往つたり來たりして、耻かしげもなく同じ事を繰返してやつてゐやがる、あの鏡は玻璃張の檻だよ、その檻の中から一生出られない男子が一匹ゐるんだ、氣の毒にもなつて來るし、可愛さうにも

なつて來る、而もそれが己なんだ、己なんだ、さう思ふと堪らないッ」(頭髪を掻る)

お鹿「それがサ、今の運命だよ、もう斯うなつちやア三度のお飯が戴いて行けりやアそれ　結構だとしとかなけやならないんサ、何うしやうだつて、何うしやうもありやアしないぢやアないかね、氣分を取直してお稼ぎよ」

爲吉「フン、稼いだつて何うなるんだい、己れが斯うして一生稼いて、汝を養つてやりやアそれて善いんかい？それが己の一生の目的なんだろうか、馬鹿々々しいッ……貴様アそれて善くつても己は忌だッ」

お鹿「ぢやア他に何うする途があるつて云ふの？私だつて何にも、汝さんに養うて貰へばそれて善いと云ふんぢやアないよ、一生此處て燻ぶつてゐて、それて他に思ひ殘す事はないと云ふんぢやアないサ」

爲吉(冷笑)「然うだろう、汝が店番をしてるのを見る、、御意屈様つて折々云つてやり度いやうな氣がするよ」

お鹿「お察が善いね、眞實に私だつて御意屈様に相違ないんだよ、汝さんの處へは、取替へ、引替へ、御客様か見えるんだが、私のお客さんつて、今は汝さん一人限りなんだからね」

爲吉(怪訝さうな眼色で)「己は貴様のお客さんかい？」

お鹿(笑顔)「今ぢやア御亭主と定つた人が、私のお客さんぢやアないか、昔は然うぢやアなかつたよ」

爲吉(吐出すやうな調子で)「フン、だるま屋ぢやア毎晩、御亭主が變つてゐたんだからな、この頃はお客さんの顏が定り切つて了つたから、それて御意屈だと仰るんだな」

お鹿「汝さんが、今、あんな事をお云ひだつたから……鏡の中に、何時も同じ面をした男子がゐるのが、怖ろしいつて云つたもんだから、私も何んだか自分の胸に思當つて來たんサ」

爲吉「何んな事を思ひ當つたんだい？」

お鹿「怒つちやいけないよ、何も浮氣で云ふんぢやアないが私も汝のやうな事を折々考へてゐないぢやアな

いんだよ」
爲吉「何をサ？」
お鹿（半ば笑つて）「夜中なんかに、偶に目が醒めると、何時も同じ顔の男子が、私の傍に眠つてるんだもの、何んだか不思儀なやうな、怖ろしいやうな氣持のする事もあつたんだよ」
（爲吉はヂッとお鹿の顔を見据えてゐる）
お鹿「ホヽヽ何もそんな怖い顔をして見なくても善いぢやアないか？汝さんが忌になつたつて譯ぢやア更々ないんだよ」
爲吉（頽然となつて）「アヽ、人間つて奴は些とも依賴にやアならねえんだ」
お鹿「そんなに解つておくれでないよ、汝さんが鏡の話をするんだから、私だつて同じ事だ、誰にだつて皆辛棒氣がなけりやア駄目だつて云ふんサ」
爲吉（少し悸えた口調で）「貴樣がそんなに浮氣つぽい奴だから、伊勢屋の野良息子なんかと、ちよい〳〵瓜を出しに出入してやがるんだ、イヤ、あの野口だつて油斷はなりやアしない、何の客も、何の客も油斷がなりやアしない、それ丈でもざんぱつ屋は忌だ忌だ、あの鏡を叩き壞してやろう」（駈下りる、お鹿は追駈けて駈へ取付く）
お鹿「短氣な事をおしてないよ、商賣道具を叩き壞したら明日の日を何うするんだね、早速困るのは眼に見えてゐるぢやアないか？」
爲吉「放しやがれッ……幾何困つたつて死んだらそれでお了ひだい、放しやがれッ」
お鹿（堅く抱き緊めて）「私はまだ死ぬのは忌だよ……今死ぬ程なら、もつと前に死んでゐるわね」
爲吉「誰と死んでゐるんだ？」（振返つて顔を見詰める）
お鹿「誰とても、相手は構やアしないサ」
爲吉「賣女めッ」（と頬桁を叩いて、グタリとそこの椅子へ腰を落し）「惚れたの、腫れたのつて、貴樣は皆己を欺してやがつたんだな？」
お鹿（嘲るやうに）「勝手に疑るが善いよ」
爲吉（無念さうに、切齒をして）「こんな奴にまで馬鹿にされて

たんか？己はこんな下らない男子だつたのか……」

お鹿「何うせ汝も私も下らないサ、似たもの夫婦だよ、今更怒つたつて、泣いたつて、仕方があるもんか!?」

（爲吉は額を押へて呻吟いてゐる）

（突然、戸口から絹帽子に、フロックコート、胸間に金時計の鎖を光らせた、代議士參事官、岡田秀作入つて來る、手にはシガーの紫烟ゆるく立上つてゐる）

岡田「御免……今日は！」（笑顏で會釋する）

お鹿（周章てゝ丁寧な叩頭をしながら）「入らつしやいまし」

爲吉（立上つて、呆然と見てゐる）

岡田（笑を浮べて）「私だ、岡田だ……何うも久し振だつたね、昨夜は折角訪ねて貰つたさうだが、來客が立込んでゐて何うもとんだ失禮を……」

爲吉（顏色を和げて）「ア、岡田樣てしたか！善うこそまア……」（會釋する）

お鹿（アタフタと、坐敷の方へ行つて、そこらを取片附け、極り惡さうに汚れた坐蒲團を出しながら）「旦那樣、まア何卒此方へ……汚くろしうございますが、まア何卒……」

爲吉「何卒まア……」

岡田（應揚に歩み寄つて腰を卸し）「お介意なく……一寸と御挨拶に出かけました」

爲吉（被服を脱ぎながら坐敷へ上つて、小く正坐つて）「こんな汚くろしい處へ善うこそ入らしつて下さいました、今度は何うも御目出度うございます」（丁寧な叩頭をする）

岡田「イヤ、難有う……爲吉さんとは大分暫らく逢はないな、御健康で、稼業に御精が出て何よりだ」

爲吉「一向、詰りません……御目に掛るのもお恥かしい次第てございますよ」

岡田「イヤ、國民が各自々々、その職業を忠實に勉強して貰へば、それて結構だ、役人になるのが、別に大した名譽てもないからね」（云ひ〳〵、シガーを燻らしてゐる）

爲吉（苦笑して）「何しろ貴方は結構な身分におなりなさいましたが、私はこんな事て、うだつが上りません、もうつく〳〵忌になつたから、廢業せうかつて、思つてる矢先なんてす」

岡田「それは戲談だろう、今更商賣替をして見たつて、別に面白い事がある譯のものてもないんだからね、

まア〳〵辛棒が第一だね」
お鹿「全く旦那様の仰る通りでございますよ」
岡田「ア、まだしみ〴〵御挨拶もしなかつたが、爲吉君の御家内ですな」
お鹿「ハイ……(耳の根を赤くして挨拶しながら)爲吉から御噂も聞いて居るのでございます、昔をお忘れなさらないで善うこそお出で下さいました」
岡田「爲吉君とは小學校時代の惡戯仲間だつたんで……矢ッ張折々は思出すんだね」
お鹿「それにしても、善うこそ、ワザ〳〵御越し下さいまして恐れ入りますでございます」
岡田「イヤ、別にワザ〳〵と云ふ譯でもないんだがね、この先の有志者の家へ廻つて、この前へ來かゝるとつい顏を一つ剃つて貰はふかと思つてな」
(爲吉は眼をヂロリと光らせる)
お鹿「オヤ、左樣で入らつしやいましたか、ぢやア一つお顏を……爲吉さん……」
岡田「別に急がんでも善い、午後までは用事がないんだから……今小學校の門の前を通つて見ると、黑かつた校舍は、ペンキ塗に更つてゐるが椎樹なんか昔のまゝに茂つてるな」
爲吉(冷淡に)「然うですな、昔のまゝの者もゐりやア、變つた者も居りますさア」
お鹿(愛嬌笑「ホヽヽ、旦那樣なんか、一番善くお變りなさつたんですね」
岡田(得意げに微笑)「まだ〳〵變り樣が足りないんだ、これから又、二度も三度も繭を破らないと、目的地へ飛んで行けないんだ」
お鹿(媚びた調子で)「何れ大臣におなりなさるんでございませうね」
岡田(聲高に笑ひ)「ハッハッハッハッ、ナカ〳〵御世辭が善いね、……併し大臣なんか何んでもない者だよ、蜜柑の皮を投げ付けて當つた人を大臣にしろつて云つてる者もある位だからね」
お鹿「ヘエ……」(相返答に困つてゐる)
爲吉(冷笑的口調で)「蜜柑の皮ぢやアない、金だアね、金さ

へありやア代議士にても、何んてもなれる、金の無い奴がざんばつ屋になるんだ」

岡田(眞面目に)「爲吉君は大さうこの稼業が厭になつたやうな口吻だな」

爲吉「厭も絲瓜もありませんよ、成ろう事なら私も富豪の家へ產れて、もう一度小學校から遣り直し度い……でも小學校に居る時分にや、富豪も貧乏人もありやアしない、强い奴が大將になる、弱い奴が草履持になる、出來る者が一番て、怠ける者がビリと、極つてたんだから苦情も不平も無かつたんだね、……椎の樹と云やア、秀作さんを踏臺にして、私がその背中へ乘つて、椎の實を取つた事もあつたけな月の出てる晚方に……」

岡田(追懷的に)「然う〳〵一度、樹の洞穴から蝙蝠が澤山飛んで出て、爲吉君が吃驚して、飛び下りたので、私ぁ膽潰して逃げ出さうとすると、樹根に轉んで大さう鼻血を出した事をよく記憶えてゐるよ、今日もその事が頭に浮んで來たのだ、何しろ無邪氣だつたね」

お鹿「オヤ、まア、そんな事があつたのでございますか?」

岡田「子供の時の事を思出すと、隨分面白いな」

爲吉(溜息して)「私は苦しくなつて來る、岡田さんにはこれから前途があるが、私の眼先は眞闇だ、方角が立たない、もう手も足も縛られてるんだ」

岡田「何うしてそんな自棄を云出すんだね、斯うして稼いでりやア、それて澤山ぢやアないか!」

お鹿「人にはそれ〴〵分相應つて云ふ事がありますからね」

岡田「大きに然うだ、女房子が養つて行けりやア、それて人間は一人前だ、何處へ行つても恥かしい事はない」

爲吉(自ら嘲るやうに笑つて)「一人前の人間つて奴にはもう倦々した、間拔けて豪くなるか、間拔けた馬鹿になるか、世の中の相場を狂はすやうな事をやらなけや生き甲斐はねえ、毎日、毎日、活版て捺したやうな

事を繰返してやつてるのが耻かしくないやうな奴は生きてるんぢやアない、器械になつてるんだ、己れだつて、バリカンを使つてるのか、バリカンに使はれてるのか分らなくなつて來る時がある、何しろ情ない話だ」

（野口、戸口から聲をかけて）「頭髪丈やつて貰はふか、髯は自分で剃つて來た」（岡田を見ると、周章て丶禮をする）

爲吉「頭髪丈だな」

野口「イヤ、…然う急がんでも」

爲吉「でも、貴方が先口だから、先へ片附けやう……」

（仕事着を着けて下り立ち）「ぢやー一寸と失禮します」

岡田「サア、何卒……」

野口「イヤ、岡田閣下から何卒……私なんか何時でも善い…意外な處て御目に蒐ります」（ペコペコする）

岡田「何卒お先へ…私は別に急がないから」

爲吉「野口さんは朝から來て待つてゐたんだから先へやろう…髯を自分 剃つたゝア可笑しいな（冷笑して）誰れが汝さんの……」（唾を吐出すやうな口調）

お鹿「岡田の旦那様から先へしてお上げなさいよ」

岡田「イヤ、私は何うでも善いんだ、まア家内さんと世間話してもしてゐませう」

お鹿「何んならお邸へ伺はせませうか？」

岡田「イヤ、イヤ、そんな事には及ばない、私も洋行中の習慣が附いて、毎朝、自分で剃つてゐたんだが、家妻を貰つてからは、家妻に剃らせてゐた、その剃刀が丸つ刃になつたので、磨がせにやつたまゝ、此方へ來たんだ、もう二日剃刀を當てないのでザラザラして氣持が善くないんだね！」

（この間に、野口は隅の椅子へ小くなつて倚りかゝる、爲吉は剃刀を使ひ出す）

お鹿「オヤ、奥さまに（莞爾して）左様てございますか？」

岡田（ヂロヂロお鹿の顔を見て）「貴方は何處かで見たやうな氣がするよ、東京に居た事があるんぢやアないかね」

お鹿「ハイ、十年許り前には居た事もございますが、旦

那様に御目に蒐つた事はないやうでございますよ」

岡田「東京の何處に居たんだね？」

お鹿「ハイ……あの……片隅の方に……一寸との間でございますから、よく覺えても居りません」

岡田「然うかなア、ぢやア私の思違ひかも知れんな……空肖つていふんだらうねハヽヽ」(と快活に笑ふ)

お鹿「でも東京は善うございますよ、十年の間に大さう變つたさうでございますね」

岡田「そりやアもう日々變つて行くね、何を云つても日本ぢやア東京だ、自分の產れ故郷の惡口を云ふぢやアないが、こんな田舍へ歸つて來ると、何んだか鼻を突くやうな氣持がしてな」

お鹿「そりやア然うでございませうとも、私等も同じ苦勞するなら矢ッ張東京邊へ出て一苦勞したうございますね、此處ぢやア怠屈して了ひます」

岡田(打解けた調子で)「東京へ出なさい、それが善い、私なんか一周間此處に靜としてゐると、怠屈で堪らないね、親の家があるし、選擧區でもあるしするから、そんな事を云つてられない場合もあるがね」

お鹿「左樣でございませうとも……(笑顏を見せて)何んなら御邸へ、御奉公にでも上げて戴きませうか知ら?!」

岡田「ハヽヽヽヽそれは結構だ、貴方が獨身者だと明日連れて歸るんだが、然うも行かないしサ」

(爲吉は又しても、二人の談話の方に耳を傾けてゐる)

野口「耳を切つちや困るよ、親方しつかり頼む」

爲吉「ちよつと剪刀の尖が當つたんだ、何んでもねえや……」

(その方には眼も遣らないで、岡田は興が乘つたやうに、片膝を深く、疊の上へ滑らし込む)

お鹿 否え私なんか何うなつたつて構はない體でございますから、眞實に御奉公口があれば、東京へ出て見度いと思ひます、御戯談になさらないで、旦那樣に一つお世話を願ひませうか？」

岡田「否、眞實に、家妻が兎角病身だから、仲働を一人入れ度いと思つてる處だがね、心當りがあつたら御周旋をお願ひせうか、これは戯談にしないで、氣に

かけてゐて貰ひ度いね」

お鹿「オヤ、眞實でございますか？……奥樣が御病身で入らつやるんでございますか？」

岡田「婦人病でもう一年許りぶら／＼してゐて、病院へ出たり、入つたりなんだから、弱つて了ふんだ、矢張婦人は體格が善くないといけないよ、貴方は健康さうだな」（と肉附を見てゐる）

お鹿「ハイ、貧乏するお庇で、病ひもしませんが、心は弱いのでございますよ」

岡田「でもよく肥つてゐられるやうぢやないか？」

お鹿（微笑）「脂肪質肥つて云ふのださうにございます：・色艶が惡うございましてね」

岡田「下地が白いんだろう、……イヤ、美人に色の黒いのはあまりないやうだねハヽヽヽ」

お鹿（嬌を作つて）「旦那樣もお人が惡うございますよ、そんな事を仰つて、お戯ひなさるものぢやアありません、若い娘ならウッカリ善氣になつて、旦那樣の後から追驅けて行くやうになりますよ：眞實に、私仲働に使つて戴けませうか？」

岡田（髭を弄つて）「でも夫婦連れの御奉公はチと當方に困るよ、心當があつたら賴みます」

お鹿「心當りがありますよ（媚びるやうに見て）オヤ、旦那樣御襟に煙草の灰が」（云ひ／＼膝行り寄つて胸を輕くたゝく）

岡田「難有う（仕事場を顧みながら）「まだ時間が取れさうだね、午後は大分忙しくなるから、何んなら貴方に一つ剃つて貰へまいか？」

お鹿「お顔を……私まだ慣れませんのですけれども……爲吉さんの顔しか剃つた事はないんですけれども……」

岡田「傷を付ける心配もないでせう、一つ、願はふかな」

お鹿「よろしうございます……何うせ奥樣のやうには參りますまいけれども」

岡田（笑つて）「處が一年許り、その奥樣が顔も剃つてくれないんだからね……此方の椅子へ掛けやうか？」

（とそこへ立つて行く）

（爲吉はしきりに尻目にかけながら、自棄に剃刀を鳴らしてゐる）

（お鹿は庭へ下り立つて、白い巾を岡田の首へ卷いてやりながら）「お急ぎなさる樣子だから、私が剃つて上げますよ、旦那樣の御注文でもあるしね」（云ひ〳〵剃刀を研いでゐる）

爲吉（突慳貪に）「もう直濟むんだ」

岡田「御家內に御苦勞をかける事にした、昔の友人に髯を剃つて貰ふのも氣が刺すからな」

（爲吉は忌な顏をして彼方へ向く）

お鹿「旦那樣は明日、東京へお立ちになるのでございますか？」

岡田「明日の午後から立つ積だ、これでナカ〳〵用事の多い體だからな」

お鹿「左樣でございませうとも、お越になつても、お歸りになつても眞實にお大抵ぢやアございませんね、今日は此から演說會に、歡迎會とかがあるんでございませう、嘸お疲れなさいませう」

岡田「何しろ、皆衆の厚意だから疲れるも何も云つちや居られないんだね」

お鹿「新聞へ每日、旦那樣の事が出て居るのでございますね、宅と二人で引張り合て、讀んで居ります」

岡田「ハヽヽいろ〳〵お負を書き足すので困るよ、東京の新聞には、官費で黨勢擴張に出かけたなんて惡口が叩いてあつた、下らん事を問題にするんだ」

お鹿「お歸りになつたら、東京でも歡迎會とかゞあるんでございませうね？」

岡田「マサカ……ハヽヽヽ、今度は歡迎會でなくて、停車場で新聞記者連の囚になるんだ、それは實にうるさいよ、又、尾に鰭を附けて、いろんな事を書立てるのだらう、殊に反對黨の新聞と來たら、思ひ切つた猛烈な捏造記事を出すんだからホト〳〵閉口するね」

お鹿（剃刀を當て始めて）「とても奧樣のやうには參りませんよ、新參者でございますから……」

岡田「結構々々……」

（お鹿は微笑して、岡田の頬へしきりと指先を觸て、それから又鏡をのぞいて見ては莞爾する）

（爲吉は小酷く、野口の頭髮をブラッシで引掻き廻しながら、一方を尻眼でチラ〳〵睨んでゐる）

お鹿「旦那様のお髯は隨分濃くてゐらつしやいますね・・・・」

（爲吉は野口を洗面臺の處へ引張つて行く）

お鹿「お髮も艶々して、眞實にお美しいやうでございますわ」

岡田「・・・・・・・・・・・」

（爲吉は焦々して野口の頭髮へ香水を吹きかける）

お鹿「お襟足の長くてゐらつしやる事、女に欲うございますよ」

岡田「・・・・・・・・・・・」

野口（出敗の上り口へ戻り際に、鏡の中の岡田に默禮する）

爲吉（急に剃刀を研ぎ始める、眼色が變つてゐる）「お鹿、退くんだ私が剃る」

お鹿（吃驚した眼色で見返つて）「善いんだよ、もう直だから、（小聲に）加之に氣持善さゝうに、ウト〳〵してゐらつしやる樣だからね」

野口「お鹿さん、剃つてお了ひよ、何うも親方は亂暴だからいけないよ、私は耳へ傷をした」

お鹿「眞實にいけないね、何うかしてるんだから」

野口「剪刀だつて、危險だよ、私は冷々した」

お鹿（輕く笑つて）「野口さんは一體氣が小さいんだからね」

爲吉（研ぎ濟ました剃刀の刄先を見つめて、凄い笑を洩らし）「己は剃刀が使ふんだぞ、剃刀に使はれる人間ぢやァないんだ」

お鹿「善いよ、私が剃つて了ふんだから、もう喉だけだよ」

爲吉「退けッ」（と睨む）

お鹿「善いつてばねえ・・・・（小聲で）ウト〳〵してゐらつしやるんだから」

爲吉「退けッ」（肱を掴んで、向へ突き退ける）

お鹿「酷い人・・・・眼をお醒しなさるんだよ」

爲吉（代つて、岡田の喉を擦する）

岡田「アヽ、爲吉君か、……善い氣持て、ウト〳〵夢を見かけた處だ」
爲吉（冷やかに）「定めて御立身なすつた夢ても見てゐらつしやつたんてせう」
岡田「何んても急に電報がかゝつて東京へ歸ると何處か大きな廣間へ召し出された處だつた、壁が金色て、緋天鵞絨の帷幕なんか掛つてゐて、足の下には辨慶縞のやうに、黒と白との大理石が敷き詰めてあつてな……何處か外國て見た宮殿のやうだつた」
爲吉「ヘエー、私なんかそんな夢も見られやアしませんや……」
岡田（獨語するやうに）「そして向ふの三重になつた蛇紋の大理石の一番上の臺には、コブラン織の絨氈を敷いて、玉座が出來てゐる……その玉座に、金の線縫をした紫色の長い絹の裾を曳いた女王がゐられる……その女王が可笑いんだ」
爲吉「ヘエ…何んなに可笑いんてすかな」（と冷嘲する口調）
岡田（笑つて）「それが可笑しいんだ……それが君の御家内の顏そつくりだつた……アヽ、こんな面白い夢は近頃見た事がない、惜しい處て目を醒まされたよ」
（お庭は、莞爾して、鏡の中の岡田の顏を見る）
爲吉「ヘエー……その女王があの嬶の面に見えたんてすか？コリヤア笑はせ物だ」（云ひ〳〵剃刀を當て始める）
お庭「汝さん、氣を附けてお剃りよ、大切な方だからね」
爲吉（振向いて）「何が大切なんだい、素面めツ」
お庭「旦那樣は大切なお體だと云ふんだよ、野口さんのやうに、粗末な眞似をおしてないと云ふんだよ」
爲吉「やかましいツ…喋舌るなツ」（云ひ〳〵ふと鏡の中を見て）「やつてやがる、相不變、あの男が檻の中て動いてやがる、白い衣服を着た囚徒だな、彼奴は……」
（と見入つてゐる）
岡田「君何を云つてるんだね？」
爲吉「イヤ、鏡に映つてる自分の影法師を見ると、つく〳〵情なくなつて來やがると云ふ事サ」
岡田「何うしたと云ふんだね？」
爲吉「秀作さんは夢を見てられるんだ、人の嬶に紫の衣

服とやらを着せて、贅澤な眞似をすを夢を見てられるんだ、その傍に己は立つて一生ア丶して人の髯を剃つたり、頭髮の臭氣を嗅いだりして暮さなけやならない、堪らない、堪らないッ」

岡田「少し逆上せてゐるやうだね！」

爲吉「今こそ、二人の影法師がア丶して鏡へ映つてるが秀作さんが立つて了つたら、後には己一人になる、己一人が何時迄もこの檻の中で過さなけやならない、忌だいッ」

お鹿(歩み寄つて)「汝、又何を云出したんだね、仕事を早くサツ／＼と片附けたら善いぢやないかね、旦那樣もお忙しいんだから」

爲吉「賣女めッ、その旦那樣に蹤いて行き度いつて、云つてやがつたな」

お鹿(苦笑)戯談を眞に受けるものがあるかね、お坊ちやんねえ、汝も……」

岡田「餘の程逆上せてゐる、早く片附けてくれちやア何うだ？」

爲吉(興奮した口調)「片附けるとも……己は斯うして剃刀を片手に握つてゐる、此方の手では首を押へてゐるんだ、斯うしてる時や、此の世界に誰も恐ろしい者はない、大臣さんでも、大將さんでも、斯うしてる時は己には敵はない、己より豪いものはないんだ、それだのに、己は今日迄、剃刀に使はれてゐた、そして、鏡の檻の中の、囚徒になつて、怖れたり悶いたり許して來た、……馬鹿め、己はまだ生きてるんだぞ、今日こそ剃刀を使つてやるんだぞッ……」

(剃刀が急に閃く、岡田は一叫して椅子と共に倒れる)

お鹿「アッ……汝さんまア何うしたんだね」(と叫ぶ)

野口「とう／＼遣附けたんだ(慄えた口調で) 演說會も、觀迎會もこれて滅茶々々だ」

爲吉(眼を据えて)「オヤ、オヤ、己の眼前に己の死體が倒れてやがらア……(狂的な笑) ざまア見やがれ」

(青白く慄えて立つ)

(カーテン)



或る日の事

武者小路實篤

初夏の午後

格子戸の入口をもつた貸家風の家、主人の室に主人机に向つて何か書きかけてゐたが、やめて奥の室にゐる妻に聲かける

主人。今何時だい。

妻。二時です。何處かへ御出かけ？

主人。今日はもう何處へも出かけないのだ。今日はいやな日だからね。こんな日に出かけたつて碌なことはないからね。朝起きると電氣に頭をぶつけるし、机に向つて何かしやうと思ふとインキをこぼすし、神田へ行かうと思つて電車にのると蟇口を忘れたのに氣がついて飛びおりをしてひつくり返へるし、それから出なほして九段で珍らしく新聞をかうと、俺の脚本の惡口が出てゐるし、歸りには何處かの窓の下を通るとツバをひつかけられるし、本當に今日は碌な日ぢやないよ。さうして家にひつこんでゐると隣りの婆さんが子供と疳癪聲の出

しつこをするし、おわい屋がくるし、本當に今日は
よくないよ。
妻。買つた新聞はどうなさつたの？
主人。腹が立つたから破いて溝にたゝきこんでやつた。
妻。何て書いてありましたの。
主人。もう忘れたよ。なんでも無意味なものだとかいてあつたよ。かいてゐる奴こそ無意味な奴なのだけれど、矢張りいゝ氣はしなかつたよ。今日はうちあはせたやうに誰からも手紙が來ないね。さうして誰もやつて來ないね。何んだか調子が狂つてゐるやうな氣がするよ。
妻。すぐなほりますわ。
主人。なほるにはきまつてゐるが、何んだかかう云ふ時は心細いよ。不意に皆に見はなされた氣がするからね。さうして運命にまで見はなされた氣がするよ。
妻。今日は貴君のいやな日なのですよ。七赤の人は今日は何しても面白くない日だと書いてありますよ。
主人。お前はそれを信用してゐるのかい。

妻。信用もしてゐませんけど。
主人。だが今日は俺のよくない日だと云ふことは確かだよ。しかしそれは今にいゝ日がくる前兆のこともよくあるよ。俺は月に一ぺん位いこんな日にぶつかるよ。急に風がやんで、之からどつちに風が吹かうかと迷つてゐるやうな氣がするよ。俺はかう云ふ日はたゞ靜かにしてゐるのだ。心がけをよくして、よりいゝ運命が生れてくれるやうに祈るのだ。かう云ふ時には何をしても面白くはゆかないよ。家にゐてもおちつかなければ、外へ出ても碌なことはないのだ。さうかと云つて迷よいだすとなほいけないのだ。
妻。それならばどうすればいゝの。
主人。どうもしないのがいゝのだ。
妻。それなら自家(うち)にゐるのがいゝの。
主人。家にゐてもいけないのだ。たゞ時が過ぎてくれるのを待つより仕方がないのだ。昨日寢不足なのもいけないのだ。
妻。それなら、おねになるといゝわ。

主人。かう云ふ時は寢ても碌な夢は見ないよ。
妻。そんな意氣地のないことをおつしやるからいけないのですわ。
主人。調子が狂つてゐる時は自分の心のなかをなほしてかゝらなければならないのだよ。だからかう云ふ時は、無鐵砲なことはしてはいけないのだ。調子が狂ふ許りだからね。
妻。どなたか御いでになるといゝのですね。
主人。かう云ふ時は誰も來ないね。向ふでも俺がくるのを待つてゐるのだ。そのくせ俺が出かける時分になると、向ふも出かけてしまうのだ。
妻。いらつしてもしこつちにいらつしたならばおまたせしておけばよろしいわ。
主人。それが矢張りかう云ふ時は駄目なのだよ。考へてしたことは皆だめになるのだ。さうしてかう云ふ時には考へないではなに一つ出來ないのだ。調子のいゝ時には恐ろしくなる程、皆が思ふ通りにゆくものだが、一寸けつまづき出すと皆が狂ひ出すのだ。かう云ふ時にはぢつとして、向ふから狂ひがなほつてくれるのを待つより仕方がないのだ。

（この時、上手にある窓の下に姿は見へないが自働車がとまり、ブーブーやる）

主人。また自働車か。（癇癪をおこして立ち上り歩く）
妻。隨分自働車はうるさいものですね。
主人。神經質になつてゐる時にあの音を聞いたらたまらないよ。まるで俺をいぢめに立ちどまつてゐるやうなものだ。

（やがて自働車去る）

主人。やつと行つた。今度は何がくるのだ。手紙は來てゐないか見て來てくれ。
妻。はい。

（妻格子戸から出て郵便函を見、主人の室に歸り）

妻。何にも來ておりませんわ。
主人。この俺をいぢめやうと思つて相談して手紙をよこさないのだ。
妻。そんなことはありませんわ。
主人。それだつて一日手紙の一つも來ない時があるか

い。それに俺の方で出した返事もよこさないのだ。皆何處かに集つまつてゐるのだ。

妻。今に、きつと皆さんていらつしやるかも知れませんわ。

主人。もうさう思つたら來はしないよ。

妻。來ないと思つたら反つてくるかも知れませんわ。

主人。そんなことはないよ。

妻。何處かへお出かけになるといゝわ。

主人。出かけるとその不在に誰かくるのだ。さもなければ、雨が不意に降つて來たり、蟇口を落したりするのだ。

妻。そんなことを云つてゐたら切りがありませんわ。

主人。もう默つてゝおくれ、俺は之から勉强するから。

妻。はい。

（主人机に向い本をよむ、妻、ちらかつてゐるものをかたづける）

主人。靜かにしろよ。

妻。はい。（主人の讀んでゐるものを遠くからぬすみ見しながら）何を買つてゐらつしたの？

主人。浪六の豊太閤だ。

妻。それが御勉强なの？

主人。あたりまいさ。

妻。妾、あんまりムキて讀んでゐらつしやるから何を讀んでゐらつしやるのかと思ひましたわ。

主人。之だつて勉强だよ。

妻。面白い勉强ね。

主人。默らないか。俺は考へながら讀んでゐるのだよ。わきから口を出す奴があるかい。文士にとつては自分の室が仕事場だよ。仕事場にゐる間は頭を尊敬してくれなければいけないよ。頭をとゝのへて一方に向けてゐる時にわきから口を出された日にはたまらないからね。

妻。それだつて浪六の豊太閤をよんでゐらつしやるのですもの。

主人。讀んでゐたつていゝぢやないか。俺の讀んでゐるものはどんな講談だつて、お前が「アンナ・カレニナ」や、「虐げられし人々」を讀んでゐる時よりは眞

面目に讀んでゐるからね。
妻。まあ。
主人。お前のおかげで切角靜まりかけた氣分が駄目になつてしまつた。一寸出かけるよ。
妻。何處へ。
主人。何處だつていゝぢやないか。
（主人外出しやうとする、妻それを送る）
主人。お前は俺の頭を尊敬することを知らないからいけないのだよ。
（妻默つてゐる）
主人。何故默つてゐるのだい。
妻。わかつてゐますわ。ですが貴夫が怒りたい氣分になつてゐる時それをおさまたげしてはいけないと思ひましたので。
主人。馬鹿、それなら行つてくるよ。
（主人格子戸から出て、空を見てゐたが、）
主人。矢張りやめるよ。
妻。、なぜ？
主人。今に夕立が來さうだから。
妻。こんないゝ御天氣に。
主人。それでも、いやな雲があるよ。雷がなるかも知れない。
妻。こんなお天氣に。
主人。それでもこゝへ出て見ろよ。雷雲があるから。さうしてこつちにやつて來さうだよ。
妻。それなら、おやめになるといゝわ。
主人。やめるとも。
（主人家に上る、二人室に戻る）
主人。（机に向い）勉强だから、默つてゐろよ。
妻。はい。いゝ御勉强ね。
（主人。机に向つて少し讀む内に居眠りをする）
妻。そんな處でおねになると風邪をひきますよ。
主人。蒲團を敷いてくれ。
妻。はい。
（妻、蒲團を敷く。主人蟻を見つけ、それを庭に捨てにゆく）
妻。なに。
主人。蟻だよ。
妻。又にがしておやりになるの。蟻はさぞ喜ぶでしや

うね。

主人。俺はかうやつて蟻をすてる時、迷兒になりはしないかとよく考へるよ。（縁側にゐて庭の蟻を見てゐる）

妻。本當に貴夫は蟻には御親切ね。

主人。蠅や蚊や蚤は殺さなければ氣がすまないが、蟻は殺す程のことはないよ。

妻。貴夫が戰國時代に生れてゐたらどうしてしやう。

主人。その時はまたその時だよ。その時になればどうにかなるよ。だが隨分平氣で人を殺したり、殺されたりしてゐるね。男も女も子供も老人も見さかいなしに殺されるのだからたまらないね。殺される氣持は夢の中ではよく見るけど、起きてゐたらどんな氣持だらう。この豊太閤を讀んでゐると、戰國時代に生きてゐたら生きてゐるのが不思議な氣がするだらうと思ふよ。殺される方があたりまい位いなのだからね。その時分の人の氣持はまるて見當がつかないよ。

妻。貴夫のやうに臆病な方も少なくつてね。

主人。（まだ蟻を見ながら）之でもいざとなると度胸がすわるよ。何時だつたか、田舍馬車にのつた時、田舍娘らしい肉づきのいゝ圓ぽちやのお白粉を濃くまだらにぬつた女が乘つて來たのだ。すると御者がすつかり興奮してね、馬を走らせるの、走らせるの、それは處かまわず走らせるのだ。道がわるいので、馬車がゆれて倒れさうになるので俺は何度も度膽をぬかれたよ。さうしてこの御者の馬鹿氣た興奮や、見えの犧牲になつてはたまらないと思つたよ。だけど俺のことだから默つてゐた。するとある處で、もう少して可なり大きい溝におちさうになつてね。馬はやつとよけたのだけれど、馬車が勢ひて、かしいでもう少して溝の中に倒れさうになつたのだ。その時、あはてなかつたのは俺だけだつた。俺だけ立ち上らなかつた。さうして俺が立ち上つたら、馬車は倒れたにちがひないやうな氣がしたよ。皆中心をとることを忘れてゐるのだからね。

妻。貴夫はその女に見惚れてゐらつしたのでしよ。貴

夫の見えが御者の見えより高尚だつただけなのてしよ？

主人。見えだつてうんと高尚になつてしまへばいゝのだよ。

妻。だつて貴夫が女に見惚れてゐる風はみつともなくつてよ。

主人。もうねるから默つてゐろ。さもないと怒るよ。

妻。はい、はい。

（主人ねる）

（舞臺暗くなる。やゝあかるくなりし時、二人の人影見ゆ）

主人の聲。其處にゐるのは誰だ。

見知らぬ人の聲。私だ。

主人の聲。誰だ。

見知らぬ人の聲。私を知らないのか、私はお前だ。

主人の聲。私は私だ。

見知らぬ人の聲。さうだ。だが同時に俺だ。嘘だと思ふならばこの着物を着て見ろ。

（主人、與へられた着物を着る、姿も齢もかはり、立派な三十六七の城主になる、城主になり切つた時、舞臺に月さす。城内の森の場。見知らぬ男は消える）

城主。俺は何しにこゝにゐるのだ。こゝに來たのだ。さうだ、あの女の來るのを待つてゐるのだ。もう來さうなものだ。

（腰元來る）

城主。お前か？

腰元。はい。

城主。よく來た。

腰元。何の御用て御坐います。

城主。今時分に、こゝに呼ぶのだ。何の用かはお前にもわかつてゐるはづだ。

腰元。いゝえ。妾にはわかりません。

城主。こゝにおいて、お前の手をお見せ。

（手をとる）

腰元。何をなさるのです。

城主。顔をお見せ。（右手で女の腭をもち心持ち上向けて顔を見る。）

腰元。何をなさるのです。

城主。お前の身體はふるへてゐる。お前はこの俺が怖しいのか。

腰元。殿様の目が。

城主。俺の目が怖いのか。お前は俺の顔を正面(まとも)に見たことがあるか。俺がお前の顔を見つめる等、お前は俺の顔を見るのを恐れてゐる。なぜだ。俺の顔がそんなに怖いのか。それとも俺の目がお前の秘密までも見貫すやうに鋭いのが恐ろしいのか。安心するがいゝ。俺はお前の秘密を知つてゐても、見て見ぬふりをしてやるから。(膀にあてた手をとる)

腰元。妾に何にも秘密は御坐いません。

城主。秘密がなければなほ安心するがいゝ。

腰元。殿様の御用とおつしやるのは何んで御坐います。

城主。あることをお前に聞きたいからだ。俺は讒言かとも思ふ。だがお前のとに就てあるとを聞いてゐる。

腰元。殿様のおつしやることはよくわかりません。

城主。お前が不義してゐると云ふことを聞いたのだ。

腰元。妾がそんなことを。

城主。相手は唯だか知つてゐるか。

腰元。存じません。

城主。相手は近侍の一人だ。心當はないか。

腰元。御坐いません。

城主。不義したものがどうされるかはお前も知つてゐるであらう。

腰元。よく存じております。

城主。しかもその相手が、敵の間者だつたらどうする。お前は孫四郎が何處の生れの人間か知つてゐるか。あいつはこの國の人間ではない。お前はあいつと文通してゐると云ふぢやないか。

腰元。それは何かのまちがいで御坐いましやう。

城主。俺の方でも敵に間者が入れてある。裏をかゝれる時には、その裏をかいてゐる。驚かなくともいゝ。お前さへあの男を思ひ切ればなんのことはないのだ。お前はあの男を何とも思つてゐないのだらう。

腰元。はい。

城主。それならばいゝ。安心するがいゝ。ふるへることはない。

（腰元默つてゐる。）

城主。俺は今こゝに孫四郎をひきづり出して殺さうと思つてゐる。お前はそれに不服はないか。

腰元。は、はい。

城主。お前を呼んだ用は他ではない。孫四郎の首のおちる處をお前に見せたかつたからだ。さうしてその時のお前の顏を見たかつたからだ。

腰元。殿樣は何にもかも御存知なのですか。

城主。知らなくつてどうする。お前が孫四郎の許嫁だと云ふことも、敵の遠藤勝興の娘の乳姉妹だと云ふことも知つてゐる。

（女、懷中から短刀を出し、切つてかゝる、それをよけ、しつかと兩手の手首を握り）

城主。あぶない眞似はよせ。

腰元。さあ、どうぞ殺して下さい。

城主。殺したい時には殺す。待つがいゝ。誰か？

武士。はつ。（登場）

城主。孫四郎はどうしてゐる。

武士。何事も知らずに寢ております。その女をゆわきましやうか。

城主。いゝ、この女は鷹につかまれた小鳥のやうにもがいてゐる。それがこの上なく氣持がいゝ。孫四郎をつれてこい。

武士。はつ。（退場）

城主。孫四郎を生かしてやらうか。生かしてほしくはないか。俺の考へ一つでどうにでもなるのだぞ。お前はもう觀念したか。

（女默つてゐる。女の手を後ろにねぢ上げ）

城主。お前達二人が降參をして、俺の云ふ通りのことを遠藤へ書いてやるならば、俺はお前達の生命（いのち）は許してやるぞ、さうして二人を夫婦にしてやるぞ。この世に生れた以上はこゝて今死ぬのは馬鹿氣てゐるとは思はないか。お前達は何の爲に生れて來たのだ。今死ぬのは殘念てはないか。

（女默つてゐる）

城主。憐な奴だ。俺も殺したくはない。生かせるもの

なら生かしてやりたい。

（近侍の孫四郎武士と一緒にくる）

近侍。殿様、何の御用で御坐いますか。

城主。孫四郎。お前はこの女を知つてゐるか。

近侍。（何氣なく）存じております。

城主。知つてゐるのは當然だ。この女の素性は知つてゐるか。

近侍。存じません。

城主。本當に知らないのか。

近侍。御言葉に背いて恐れ入りますが。知るわけが御坐りません。

城主。さうだらう。それならばこの女の首を切れ。

近侍。何かこの女に咎が御坐いますのですか。

城主。さうだこの女はある男と不義をしたのだ。俺はそれを今この目で見たのだ。

腰元。殿様それは……

（城主、あわてゝ女の口を手でふたする。女は身をもがいて逃げやうとする）

城主。逃げれば一打だぞ。孫四郎安心するがいゝ、今のは冗談だ。だがこの女が不義をしてゐるのを見たと云ふ證人がゐるのだ。

近侍。さうしてこの女の人はそれを白狀したので御坐いますか。

城主。誰が白狀するものか、型通り讒言だと云ふのだ。

（武士に）この女を縛れ。

武士。はつ。

近侍。讒言でないと云ふ證據は御坐いましたのですか。

城主。お前はこの女を生かしたいか。

近侍。それでも人一人の命は何ものにもかへ難いものかと存じます。

城主。ましてそれがこんな美しい女だとか。

近侍。殿様は人の命を御冗談に遊ばしてゐらしやるのですか。

城主。お前、よく言つてくれた。孫四郎。右の手を出せ。

近侍。はつ。

（何氣なく右の手を出す。殿様その手をとるより、逆手にとる）

近侍。（驚いて）何をなさるのです。

城主。孫四郎よく聞け。この女はわが敵遠藤勝興の娘の乳姉妹。藤山勝次郎の許嫁の女であるぞ。誰か、この藤山勝次郎を捕へよ！

武士二。はつ。（登場）

（孫四郎逆手にとられながら左の手にて刀をぬこうとしたが、城主につきとばされ、倒れる所をつかまへられ縛られる）

城主。二人をその木にゆわいつけよ。

武士二人。はつ。

（腰元と、孫四郎木にゆわいつけられる）

近侍。さあ。早く二人の首を切れ。

城主。お前達は死にたいか。

近侍。どうせかうなるのは覺悟の前だ。どうか勝手に殺してほしい。

城主。さすがは、主人の名前を汚さないことを知つてゐるな。武士の面目を心得てゐるな。お前達は立派に死にたいのだな。

近侍。今になつて他に望があるか。自分達はいさぎよく死ぬより他に望みはない。武士として生れた自分は、又武士として立派に死ぬ。

城主。心殘りはないか。

近侍。今となつて心殘りがあると思ふのか。

城主。（腰元に）お前は生きたくはないか。

腰元。妾も藤山勝次郎の妻で御坐います。遠藤勝興様のお姫様の乳姉妹で御坐います。物笑はれなことはいたしません。

城主。だが俺はお前達を殺すのを不愍に思ふぞ。俺の内にはお前達を殺さなければならないやうに思つてゐるものがゐる。だが一方ではお前達を生かしてやりたく思つてゐる。生かすことに何の不都合があるかと思つてゐる。我々は何の爲に生れたのだ、殺しあふために生れたのか。俺は殺されるのがいやだ。物笑はれになるのがいやだ。遠藤勝興に負けるのがいやだ。それにもまして彼奴を生かしておくことは恐ろしい。どつちかゞ死なゝければならない運命をもつて生れてゐるやうな氣さへする。自分が死ぬのはいやだ。その上に自分の内にはすべてを犧牲にし

ても天下の將軍にならうと思ふ望がある。さもなければなんの生き甲斐があるかと云ふ氣がする。だが、俺一人の考へてお前達の生命は燃えもし、消えもするのだ。さう考へると恐ろしい。俺よりも強い力があつて、俺のすることゝを一々命じてくれたならば、俺は迷よいはしないだらうが。

武士一。殿樣。恐れながら敵の間者の生命をお助けになると云ふことは御坐いませんと存じます。

城主。助けてはいけないと云ふか。それは誰がきめた律法だ。

武士一。お家の律法で御坐ります。

城主。家の律法をつくつたのは誰だ。この俺ではないか。俺は自分のつくつたものを今の場合信用することは出來ない。

武士一。お言葉に背きますけど、律法となりました以上はお破りになるのはお家の爲におよろしくないと存じます。

城主。さうか。俺も今迄さう思つてゐた。だから人を磔刑にもさせ、燒き殺させもした。俺はその場にゐなかつたが。だがこの二人の美しい生命には心殘りがあるのだ。敵ながら二人は得難い美しい人間だ。生きる處まで生かして見たい人間だ。

武士一。ですが敵の間者で御坐ります。

城主。俺は迷よいだした。こんなことはないはづだ。さうだ。俺は迷よつてはいけない。俺は自分の生んだ勢ひにかられなければならないのだ。（武士一に何か囁き）二人をつれてゆけ。

武士二人。はつ。

（二人つれ去られる）

城主。俺は俺の主ではない。俺は知らずに皆の運命に支配されてゐる。

（武士二、登場）

城主。殺したか。

武士一。はい。

（この時敵兵がせめて來たやうに、遠くにわー、わーと云ふ大勢の喊聲聞へる）

城主。（聲のする方を睨み）なんだ。

（侍一人あわてゝ登場）

侍。敵がせめて參りました。

城主。さうか。皆のものにあはてないやうにそのことを知らせろ。

侍。はつ。

（その内に何處からわいたか敵と味方の武士顯はれ、互に切りむすぶ）

敵の兵士達。敵の大將を逃がすな。敵の大將を逃がすな。敵の大將をうちとつて高名せよ。

城主。（皆にかこまれる）生命知らずめ。（切りむすぶ數人を切り殺すが、敵は益々新手がふへるので、遂に捕へらる。この時、敵の大將勝興顯はれる。城の武士達の姿は消える。）

敵將。出かした。出かした。そいつをあの切り株に縛りつけよ。

敵の武士。はつ。

（城主殆んど眞中にある切り株に立つたまゝくさりで縛りつけられる。篝火がつけられる）

敵將。死骸を片づけろ。味方の死骸はおろそかにするな、さうしてもれなく名をしるしてをけ。さうして負傷者は早速手當をしろ。敵の負傷兵を生きかへらぬやうに皆殺してしまへ。

侍達。はつ。

敵將。（城主に向ひ）お前はさぞ無念であらう。

（城主默つてゐる）

敵將。この男の樣を見ろ。之がお前達が鬼神のやうに恐れた男だぞ。この俎の上の鯉のやうに默つてゐる男が、俺達に安眠を與へなかつた男だぞ。かうなつて見ればお前達が唾をひつかけやうが、拳固で打たうが心任せだ。この男の首はやがておちるのだ。だがその前にこの男はまだいろ／＼のことを見たり聞いたりしなければならないのだ。（城主に）お前はもう觀念したか。

城主。俺はまだ觀念はしない。俺はまだ自分が死なゝいかも知れないと思つてゐる。俺はそんなにもろく死ぬ人間ではない。

敵將。あは、ゝゝ。お前はこの俺がまだお前の生命を助けると思つてゐるのか。そんなことが考へられるか。お前を俺が殺さなければお前は俺を殺すだらう。

城主。殺したどらう。しかし今となつて俺は、お前が俺を許せば俺はお前を殺さないだらう。俺は人の生命がどのくらい大事なものかと云ふことを、今知り

かけて來た。

敵將。今となつて生命が惜しくなつたのだな。俺を殺さないと云ふことが、確かならば許してやらないこともない。だがそれがあてになるか。

城主。俺はそれを誓つてもいゝ。

敵將。俺がその誓いを信じると思つてゐるのか。お前に力がわくに從つて誓つたことは忘れるわ。

城主。お前は本當に人の生命と云ふものを知らないからさう思ふのだ。

敵將。お前も今に生命の價値を忘れるだらう。生命の助かつた難有味を忘れる時分には。

城主。お前は俺をどうしても殺さうと云ふのだな。

敵將。お前は俺がお前を生かすと思つてゐるのか。蟲のいゝのにも程がある。お前は俺にとつて殺してもなほあきたらないやうな奴だとは思はないか。俺が勝たなければ、お前は俺を殺すだらう。俺の妻子を殺すだらう。さうして俺の臣下をのこらず殺すだらう。さうして勝利の祝盃の酒の肴にするであらう。

城主。俺はもう朝日を見ることは出來ないのか。妻にも、子供にも逢へないのか。

敵將。逢ひたければ皆逢はしてやらう。

城主。まだ皆は生きてゐるのか。

敵將。生きてゐる。

城主。生かしてくれるのか。

敵將。それは俺の心一つだ。

城主。さうだ。お前の心一つか。

敵將。さうだ。

城主。お願ひだ生かしてくれ。俺はどんな目にあつてもいゝ。生かしてやつてくれないか。

敵將。あはゝゝ。お前は生かしたいか。お前がもし俺だつたら、生かすか。それとも殺すか。俺の心はお前にはわかるだらう。

城主。あまりに恐ろしい。子供には罪がない。

敵將。子供は何時までも子供ではないわ。さうして親の敵をねらうわ。淸盛が頼朝や義經を助けた許りに、自分の家を亡ぼしたのだ。

城主。俺が遺言する。決して敵(かたき)を討たないやうに僧侶になれと遺言する。

敵將。鬼神とも云はれたお前が、そんなことを云ふのを耻とは思はないか。さうしてそれがあてになると思つてゐるのか。子供だまし見たやうなことゝて俺はだまされはせぬわ。名を惜しむのこそ武士の傲りてはないか。

城主。お前は人の生命を知らない。生命を知らない。俺だつて今迄生命を知らなかつた。知らない内こそ名を惜んだ。俺は死なゝければならないのか。俺はなぜ闘つてゐる内に切り殺されなかつたのだ。生れた日が呪はしい氣さへする。俺は臆病なのか、さうてはない。俺の生命が强情なのだ。俺の生命はまだ〳〵生きたがつてゐる。がそれは仕方がないとしても、俺の子供は助けたい。どうしても助けたい。

敵將。助けられるなら助けて見ろ。

城主。どうしても駄目なのか。

敵將。どうしても俺は殺す。死ねば何事も忘れるわ。

城主。お前の云ふことは本當すぎるやうだ。俺は本當すぎることにぶつかつた。俺はどうすることも出來ないのだ。たが俺はまだ望みは失なはぬ。生きてゐる間は失はぬぞ。何處からか味方がわいてこないとは限らない。今にも天變地異が起らないとも限らない。

敵將。それならばもつと本當のことを見せてやらうか。とり返しのつかない本當のことを見せてやらうか。それとも許してやらうか。

城主。もつと本當のこと。

敵將。さうだ。お前の妻子だ。俺はお前の妻子をどのやうにしても殺せるのだ。燒かうが煮やうが俺の勝手だ。磔刑にすることも出來る。

城主。恐ろしい。恐ろしい。

敵將。お前は人を磔刑にしたことはないか。人を燒き殺したことはないか。

城主。俺は女子供を磔刑にしたことはない。

敵將。それならばお前だけは磔刑にされても不服はないな。

城主。妻や子供に見へないやうにしてくれ。

敵將。磔刑は許してやる。たゞ一刀で切つてやるから安心するがいゝ。

城主。恐ろしいことだ。俺は恐ろしいことをした。今となつて俺が平氣て人を殺したのが恐ろしい。俺の一言て人を生かすことも殺すことも出來た時、俺は殺さないのを恥にした程だ。俺は恐ろしい人間だ。今天罰が來たのだ。今思ひあたる時が來たのだ。自業自得だ。俺に殺された人々よ許してくれ。今思ひあたる、許してくれ、本當に許してくれ。俺はとり返しのつかないことをした。どうしていゝかわからない。許してくれよ。俺は實際磔刑になつてもいゝ人間だ。燒き殺されても不服の云へない人間なのだ。俺は恐ろしいことをした。俺のしたことは皆恐ろしい。俺は何の爲に生れて來たのだ。俺は恐ろしい罪を犯す爲に生れて來たのだ。俺は皆に不幸を與へに來たのだ。俺の生れた日が呪はしい。俺の一生が恐ろしい。俺の一生は呪はれてゐる。人々よ。今思ひ知つた。許してくれ。俺はやがてお前達のあとをついてゆく。お前達が殺された時の氣持が今わかる。さうしてその時、笑ひながら冗談を云つて、人を殺すのは平氣だと云ふ顔をしてゐたのが呪はしい。

敵將。お前は俺を呪咀してゐるな。だが俺はお前を助けやうとは思はないぞ。俺は生かすべきものは生かし、殺すべきものは殺す。さうして俺は安らかに寢るわ。

城主。俺はもう心のこりがない。俺はもう觀念した。俺を安らかに殺してくれ。俺はお前を恨まない。

敵將。妻子には逢ひたくはないか。

城主。妻子? あゝ妻と子。俺はなぜ妻をもつたのだ。なぜ子を持つたのだ。不愍な奴等だ。許してくれよ、不愍なわが妻や子よ。許してくれ。俺はどうしたらいゝのか。見す見すお前達を殺さなければならないのか。俺はそれをどうすることも出來ないのか。(繩を切らうと身もだへする)この俺はお前達を見殺しにしなければならないのか。それが本當のことか。あまりに恐ろしい。(目をつむる)

敵將。この男の妻をつれて來い。

侍の一人。はつ。（退場）

（まもなく城主の妻（三十三四）下手より後ろ手にくゝられてつれられてくる。城主と顔を逢はせ、顔をそむける。妻は決心をしてゐる）

敵將。話すことはないか。話したいことがあれば話すがいゝ。

城主。話したいことがあれば許しがなくとも話す。

敵將。生意氣を云ふな。お前の生命も、お前の自由も、この俺の手にある。お前の妻をこゝで殺さうと思へば殺すことも出來る。話したいことはないか。それならこの女を（上手を指さし）彼處につれてゆけ。

（妻。無言で會釋し行きすぎやうとする）

城主。わが妻よ。もう一度、顔を見せてくれ。微笑んだ顔を見せてくれ。さうしてこの俺を許すと云つてくれ。お前よ。俺の妻になつたことを恨んでくれるなよ。

妻。勿體ないことをおつしやいますな。妾は貴夫の妻として立派に死にまする。御安心下さいまし。それならばお先に行つて待つております。

（妻、淋しい笑顔を夫に見せて上手につれられて退場）

城主。之が最後のわかれか。さうしてお互に何にも云ひおくことはないのだ。あとのことをたのむ必要もないのだ。明日の日の光を見ない内に二人はこの世を去るのであらう。

敵將。さうだ。さうしてお前の子供も明日の日は拜まずにすむだらう。長男をつれてこい。

侍の一人。はつ。（退場）

城主。恐ろしいことはつづいて起る。俺の内の火は一つ一つ消えて行く。何とも云へない淋しさは十重廿重に俺の心をとりかこむ。力を無理にふるい起さうと思ふが、起きる前にしなびてゆく。この心持を俺は澤山の人に味はゝした。今それがすべて俺に歸つて來た。かの人々はさぞあの世で喜んでゐるであらう。

（長男十三四下手より後手にくゝられてつれられてくる。出來るだけ氣をおちつけてくる。父を見ると一段に自らに勇氣をつける。顔見合せて無言）

敵將。それならこの子をつれてゆけ。

侍の一人。はつ。

長男。お父さま。

城主。我が子よ。俺を耻かしめないやうに、俺がお前のやうな子を持つたことを傲れるやうに、何事があつても驚かないでゐてくれ。

長男。お父さま。御安心下さい。

（目で會釋して上手につれられてゆく）

敵將。長女をつれてこい。

侍の一人。はつ。（退場）

（沈默。長女十四五、下手より後手にくゝられて登場）

長女。お父さま。（走りよらうとして氣がつきやめる）

城主。お前は怖ろしいか。

長女。御心配には及びません。妾は自害しやうとする處をつかまへられたのです。妾のことは御安心下さいまし。お母さまは。さうして弟は、さうして妹は？

妹のことが氣になります。

敵將。つれてゆけ。

長女。それならばお父さま。又いづれ。（一寸微笑み）妾のことは御安心下さい。

城主。娘よ。俺の子よ。勇ましく死んでくれ。俺は限りなくお前を愛してゐるぞ

（連れられて、見かへり見かへり上手に退場）

敵將。次女をつれて來い。

侍の一人。はつ。（退場）

（次女。九つ位同じく下手からつれられてくる）

次女。お父さま。妾は恐（こは）いの、妾は恐いの。

城主。辛棒おし、辛棒おし、もう少しの辛棒だよ。

次女。お父さま、お父さま。お母さまは？　お母さまは？

妾はこわい。妾はこわい。

城主。安心しておいて、安心しておいて。

敵將。早くつれてゆけ。

次女。お父さま。（父の傍に行かうとして泣く）

敵將。ひつかゝへてつれてゆけ。

次女。お父さん、助けて、助けて――。

城主。安心しろ。安心しろ。

（次女。上手に抱かれたまゝ退場）

城主。罪だ。罪だ。恐ろしい罪だ。

敵將。もう之でおしまいか。

側にゐる侍。まだ赤坊がゐるさうて御座います。

敵將。男か。女か。

同じ侍。女ださうて御座います。

敵將。女か。だが矢張り殺さう。つれて來い。

侍の一人。はつ。（退場）

城主。赤坊も殺すのか。皆殺すのか。俺の呪ひはお前の一家の上に燃え上るぞ。

敵將。燃え上れるものなら燃え上つて見せてくれ。

（この時遠くの方に雷の音らしきもの聞へる）

城主。雷だ。俺の怒は天に通じたぞ。

敵將。雷？嘘だ。

（赤坊抱かれて火のつくやうに泣きながらくる）

敵將。（一目見て）よし、つれてゆけ。さうして殘らず、殺してしまへ。

侍の一人。はつ。

（赤坊をだいて上手に退場。）

城主。お前はとり返しのつかないことをしたことを知つてゐるか。今に思ひ當る時がくるぞ。俺の心の一滴でもお前の心にしみこむならばお前の一生は呪はれた一生だぞ。さあ、俺を殺せ。俺を殺せ。俺はもう何にも恐れないぞ。

（侍達登場）

侍の一人。五人とも殺しまして御座います。

敵將。さうか。御苦勞であつた。

城主。よくも、殺したな。俺はお前の安眠を一生さまたげるぞ。さうしてお前の一生をこの上なく淋しくするぞ。お前が一人でゐる時、俺はお前の心の内にくひ込むぞ。お前が一家の人と一緒にたのしくしてゐる時は、俺の一家のものはその内にまぢり込むぞ。お前は見てはならないものを見た。してはならないことをした。お前は人の生命の滅びるのを慰みにした。お前は人の死ぬのを笑つて見るのをほこりにしてゐる。

（急にあれ模様になる。月はかくれ、あたりは暗くなる）

城主。風よ吹け。嵐よ狂へ。雨よふれ、雷よなれ。天地よくだけよ。さうして俺の心の内をたゞ怒りもつて波打せよ。わが妻よ。わが子よ。お前達は死んだのか。俺も死ぬぞ。俺も死ぬぞ。

（大つぶの雨ふり。電光ひらめき、雷なり始める）

城主。俺の心は天に通じたぞ。

敵將。やがて雷はすぎるわ。さうしてお前達はあと方もなく消えてゆく。俺の武功をかざる時より他にお前達はこの世に生きかへりはしない。

城主。あゝ、生きてゐるものが死ぬのは恐ろしい。今迄生きてゐたものが、死ぬのは恐ろしい。わが妻よ、わが子よ。さぞ恐ろしかつたらう。許してくれ。

（雷雨ます〳〵はげし）

敵將。早くこの男を切れ。

城主。切れ。早く切れ。

（侍の内の一人切らうとして刀をぬく時近くに落雷し感電して死ぬ）

城主。天は俺を殺さないか。俺を殺す勇氣あるものは俺を殺せ。

（雷はます〳〵はげしくなる）

側にゐる武士。こゝはおさけになる方がよろしいかと存じます。

敵將。それならば向ふへ行かう。誰か、この男を殺す奴はないか。

（誰も出ない）

敵將。それならば向ふへ行つて勝利の祝盃でもあげやう。この男はあすの朝、殺すとしやう。

（皆立ち上る）

城主。卑怯もの。生命が惜しいか。

敵將。勝つたものは生命が惜しいわ。

（皆つれて退場、城主くさりを切らうと身もだへするが切れない。雷は次第に遠のく）

城主。神樣、どうでも勝手にして下さい。私は死にたい。私は生きたい。恨をはらしたい。わが妻よ、わが子よ。さぞ恐ろしかつたらう。さぞ無念だつたらう。さぞ心細かつたらう。生きてゐるものが死ぬのはどう考へても情けない。俺は、思へば俺はとり返しのつかないことを何度もした。俺はどうしたらいゝのだ。雷よ。俺を殺せ。俺を殺せ。俺は生きてゐるのが心苦しい人間だ。俺には死が相當してゐる。だが俺の妻や子はなぜ死なゝければならなかつたのだ。恐ろしい。恐ろしい。許してくれよ。これが、これが、本當の事なのか。恐ろしい。

（この時以前の見知らぬ人現はれる。）

主人の聲。其處にゐるのは誰だ。

見知らぬ人の聲。私だ。

主人の聲。（氣がついたらしく）あゝお前か。

見知らぬ人の聲。さうだ。お前の着物をかへしに來た。
お前の用はすんだ。

主人の聲。あゝ俺は夢を見てゐたのか。

（以前の室に歸る。以前と同じ。たゞ蚊帳が釣てある。それを妻がはづしてゐる。庭の樣子が夕立のあとを示し、雷が遠くでなつてゐる。妻は蚊帳の釣手を二つはづして、それを後ろにはねのける、主人は以前のまゝ寢てゐる。妻は椽側に出て庭の樣子を見てゐる。主人目をさます）

主人。俺は生きてゐる。俺は生きてゐる。

妻。（椽側で）何を云つていらつしやるの？

主人。お前も生きてゐたか。

妻。今の雷を御存知なの？

主人。お前も知つてゐるのか。

妻。知つてゐるのはあたりまいですわ。妾は少しもね
やしないのですもの。

主人。ねないでも雷はなつてゐたのかい。

妻。雷の夢を御らんになつたのね。

主人。お前は蚊帳を釣たのかい。馬鹿だね。

妻。それでも隨分ひどい雷でしたわ。餘程起こして上
げやうと思つたのですよ。

主人。さうか。さう云へば遠くで雷がなつてゐるやうだ。

妻。あれをまるで御存知ないの。

主人。夢かと思つてゐた。（起きながら）お前郵便を見て
來てくれ。

妻。はい。

主人。きつと來てゐるよ。

（妻、格子戸を出て見る）

妻。澤山來てゐますわ。

主人。さうだらう。俺の頭の調子はなほつたからな。

（妻。手紙とハガキをもつてくる）

主人。何處から來た。

妻。平石さんと、岩田さんと、十勝さんと、それから
知らない人からと。

主人。本當か。

妻。嬉しいてしやう。

(渡す。主人見る)

妻。調子がなほりましたか。

主人。(立ち上り室を歩きながら)なほりすぎた。俺は恐ろしいよ。俺は生きてゐることさへ勿體ないのだ。それなのに皆に厚意をもたれてゐるからね。俺は皆に感謝したいよ。さうして俺の一生を感謝に捧げたいよ。

妻。貴夫は本當に簡單な方ね。

主人。俺はもうお前には怒らないよ。お前は身體を大事にしないといけないよ。

妻。そんなことをおつしやるときみがわるくなりますわ。

主人。本當に俺は恐ろしい。俺は神に感謝したい。人間に感謝したい。俺は安樂に生きてゐることが恐ろしく、勿體ないのだ。俺はどうかしなければならないのだ。俺は俺の一生を捧げられるものを求めてゐる。俺の力はまだそれを許してくれない。お前は俺の妻になつたことを仕幸に思つてくれるか。俺の生きてゐることを喜んでくれるか。俺は皆に自分の生きてゐる事を許してもらいたい。喜んでもらいたい。感謝してもらいたい。俺はどうしたらいゝのだ。

妻。感謝したいとおつしやつてゐらつしやるのかと思つたら感謝してもらいたいのですか。

主人。さうだ兩方だ。俺はこの世に生れたのだ。さうして生きてゐるのだ。さうして俺は自由なのだ。

妻。さうして皆に愛されていらつしやるのでしよ。

主人。さうだ。さうして皆を遠くから愛してゐるのだ。俺は神樣の前に跪いて「御役に立つならお役におたて下さい」と云ひたいよ。今何時だい?

妻。今四時です。

主人。さうかそれなら之から林の處へ行つてくる。

妻。もう遲いぢやありませんか、晩にしたらいゝぢやありませんか。

主人。いや林がきつと待つてゐるよ。晩になつたら待ち切れずに何處かへ出るだらう。

妻。それがおわかりになるの。

主人。調子がなほつて來たからわかるよ。もう勢ひが内に生じて來た。もうかうなれば自分のことは自分のものだ。行きたい處へゆければいゝのだよ。(幕)

凶

久保田萬太郎

登場人物

銀次郎。　銀床の主人。
清　吉。　同　職人。
新　三。　同
音　吉。　初音鮨の主人。
茂　介。　同　職人。
宗兵衛。　舊中田屋の主人。
半三郎。　棒屋の主人。
長太郎。　硎　屋。
濱　吉。　人形屋の職人。
吉次郎。　指物屋の職人。
庄　吉。　糶呉服。
おふぢ。　三崎屋の娘。

ほかに客二人。通りがゝりの者二三人。近所の者二三人。支那蕎麥屋。義太夫の流し。銀床の子僧。三崎屋の見世の者。その他。

登場しない主要な人物。天定、（近所の天ぷら屋）同姪。きん生、（落語家）、平孝（幇間）その他。

八月の末。宵。――宵と云つても九時すぎ。――空はまつたく暗く悩ましく曇つてゐる。

蠣燭屋の土藏の裏。――「銀床」の見世の前。

「銀床」の見世のなかには、瓦斯の灯火が水のやうにあかるく漲つてゐる。――三四人の職人が、みんなめい〳〵鏡のまへで仕事をしてゐる。見世のまへには緣臺が二つ。一つの緣臺には客が四五人見世のなかの灯火を浴びて將棋をさしてゐる。通りがゝりのものが二三人。周圍に立つてその勝負を覗いてゐる。――一つの緣臺には庄吉が一人、往來にそむいて腰をかけて、夕刊の新聞を讀んでゐる。義太夫の流しが立つて、野崎の段切を彈ひてゐる。――その三味線の音。

幕があいたとき、舞臺の上は、灯火のいろの或るうき〳〵した明かるい心もちに染められてゐる。――しかしそこに、舞臺のかげに、「隅田川」のながれが暗いかなしい夢を横たへてゐることを考へなければならない。

將棋の群のなかで、流しの三味線と一しよに濱吉が中音でそれを唄つてゐる。――それが聞える。

流しはやがて其處を離れる。彈きながら這入る。間。

見世のなかゝら、白い仕事着を着た淸吉が出てくる。

淸吉。（濱吉に聲をかける。）濱さん、お待ち遠さま。

濱吉。（口三味線をやめて。）俺かい。

淸吉。えゝ、どうぞ。

濱吉。一寸待つて呉んな、いまもうすぐだから。――（相手の茂介に）ところでお手は。

淸吉。將棋のそばへ寄る。

茂介。金二枚の桂馬。

濱吉。金二枚の桂馬と、――面倒だ、やつつけてしまへ。

茂介。ぢやあ此方は王手。

濱吉。置きやあがれ、畜生。――そんならからだ。

茂介。いゝ了見だ。――それてこの飛車がから動けた

つてね。

濱吉。あ、畜生。——さうか。

ふとしばらく無言。

見世のなかゝら、半三郎(五十八九)出てくる。

半三郎。(空を見上げて) 仕様がねえなあ、すつかり曇つてしまやあがつた。

清吉。(おなじやうに空を見上げて) 此奴は危なうござんすぜ。

半三郎。危なさうだなあ、——しかし降られたらご難だからなあ。

吉次郎。(將棋の群のなかゝら) 何處かへおでかけですか。

半三郎。なあによ。明日大山へ立つんでね。

吉次郎。あゝさうですか。其奴は何んですね。——(空をながめて) さうだなあ、この鹽梅ぢやあ、——とにかく久しく降りませんでしたからねえ。

庄吉。(往來の方を向いて) 天氣豫報には、南の風曇雨模様ありとしてあります。(新聞を手から離す)

吉次郎。心細いことを云ふぜ。

清吉。(半三郎に) だけど何んですか、大山へ行くのには、一たい何處まで汽車に乘つて行くんです。

半三郎。何處までつて、平塚まで乘つて行くのさ。

清吉。平塚つていふと、一たい何處いら邊の見當になるんです。——よつぽど遠いんでせうねえ。

半三郎。なあに、茅が崎のさきだから譯はない。——お前茅が崎は知つてるだらう。

清吉。いゝえ、知りません。

庄吉。以前、團十郎の別莊のあつたところぢやあないか。

清吉。あゝ、さうですか。——知つてます、知つてます。

半三郎。あの茅が崎から、丁度一と丁場さきさ。

清吉。へえゝ、さうなんですか。私はまたもつと酷く遠いのかと思つてゐました。——ですけど私はね、何處は何處の見當にあるんだか、さう云つたやうな事はなんにも知りませんでね、——生れてから汽車へ乘つたつていふのは、子供のときに、はじめて田

舍から此方へ出てきたときと、下谷の床屋にゐた時分、盆の休みに鎌倉へ行つたときと、これまでにまだ二度しきあ乘つたことがないんです。

吉次郎。情けねえ男だなあ。

清吉。だつて眞實(ほんと)だから仕樣がない。

庄吉。(半三郎に)それて平塚て下りてから、山まではまだよつぽどあるんですか。

半三郎。あゝ、其奴は一寸ある。――まあ三里かな、――しかしこの頃は開けたから、馬車もあれば俥もある。自働車もあつてね。

庄吉。子安とかつていふところは、どんなところなんです。

半三郎。子安つていふのは山のもう下のところでね、宿(しゆく)――つていふほどのこともないが、まあ宿だね、「諸願定宿子安まで、おりて五六の蚊帳のうち」つて、山歸りの文句にあるところさ。

吉次郎。「四六のあまに劣つたる、どぶつに二朱もん有難い」つてね。

濱吉。(側で唄ひだす。)「四谷てはじめて逢うたとき、――好いたらしいと思うたが――」(勝負はまだ結着がつかない。)

半三郎。(間。――清吉に)もう何時だらうな。

清吉。さうですね、――(見世のなかを覗いて)十時十五分前です。

半三郎。もうさうなるのか。――まだこれから歸つて仕度をしなけりやあならないんだ。(立ちかける)

清吉。其奴はたいへんですね。

半三郎。なあに、仕度つて云つたつて譯はねえんだ。(空を見上げる。)――だけど此奴は仕樣がねえなあ。

(清吉も庄吉もそれに誘はれて空を見る。)

清吉。どうもねえ。――

吉次郎。さあ、俺も歸るかな。――(半三郎に)親方、其處まで一しよに行きませう。

半三郎。天定の前までかい。

吉次郎。冗談云つちやあいけません。(縁臺から離れかける。)

長太郎。（將棋の群のなかゝら。）へえ。もうそれが親方のはうまで聞こえてゐるんですか。――吉公、すこししつかりしなくつちやあ不可ねえぜ。

吉次郎。何云つてゐやがるんでえ。

濱吉。（また唄ふ。）「――好いたらしいと思うたが、――因果な縁の糸ぐるま――」と。

吉次郎。莫迦だな、此奴等は、

半三郎。さあ行くかな。（一寸見世のなかを覗く。――清吉に）おい、あとで初音の何に、俺がよろしく云つたつて、さう云つて呉れ。

清吉。えゝ、ようござんす。

半三郎。ぢやあ、おやすみ。（誰れに云ふのでなく。）

「おやすみ」「おやすみ」と、清吉、庄吉、濱吉、長太郎、みんなめいめい口々に云ふ。――四邊がふと或るしめやかな心もちになる。――半三郎と吉次郎行きかける。

清吉。あゝ、吉つあん、吉つあん。（呼びとめる。）

吉次郎。（振り返る）何んだい。

清吉。――よろしくね。

吉次郎。なぐるぜ、眞實に――（這入る。――その前後に、將棋をみてゐた通りがゝりのものが一人づゝ、あんまり氣がつかないやうに去る。）

長太郎。（間）吉公彼奴、すつかり面喰つてゐやあがつた。

清吉。一たい何ういふ筋なんです。

長太郎。なんだ、お前知らねえのか。

清吉。なんにも知りやあしないけれど、多分何んだらうと思つて――

長太郎。冗談ぢやあないぜ。――なあに、天定にこのごろ、出もどりの女が一人來てゐるだらう。

清吉。あゝあの一寸色の白い、――親爺の姪だとか云ふ――

長太郎。さう／＼あれさ。

清吉。あゝあれですか。――だけど何んだつていふぢやありませんか、あの女あれて、三つとかになる子供をかゝへてゐるんだつて云ふぢやあありませんか。

長太郎。さうだらうさ。とにかく三年――（ふと考へて）いゝや四年だ、――丁度四年あとに嫁に行つたんだから。――兩方がもう、焦がれに焦がれて一しよになつた夫婦でね、それこそ死ぬの生きるのつていふやうな騷ぎをして、――間に這入つて邪魔をする奴もあつたのさ。――とにかく隨分苦勞をして一しよになつた奴よ。
清吉。へえゝ――だけどそれがまた、何うして別れて歸つてくるやうなことになつたんでせう。
長太郎。なあに、別れたんぢやあない、亭主がこの春死んだんだ。――それて仕方がなく歸つてきたんだ。
清吉。死んだんですか。
長太郎。腕のいゝ鼈甲職人でね、――音なしい好い男だつたが――
清吉。それて、男の方の身寄つていふやうなものは、べつに何んにもないんですかね。
長太郎。それがその男が、一たい子供の時分に兩親をなくした男でね、――親方のところへ引取られて、親方のところで育つたやうな譯なんだから、身寄と云つてはなんにもないんだ。
清吉。（しみ〴〵と）――さうなんですか、――だけどなんですね、子供の時分からそんなに苦勞をして、女房を持つにもまあいろ〳〵苦勞をして、――しかし今になつてみると、そんな色々な苦勞がみんな夢みたやうなものだつたんですねえ。
長太郎。さうだよ、――考へてみりやあ、まつたく夢みたやうなものだよ。
庄吉。それて、その内儀さんは一たい幾つになるんです。
長太郎。さう、――あの時分が十七か八だつたんですから、いまは二十一か二、――たしか二てせうよ。
庄吉。今年はどうも、二十一、二といふところは、女はよくないやうですね。――この間阿母に死なれた表の三崎屋の娘、あれがやつぱり今年二十二てすからね。
清吉。あゝさうですか。――だけど三崎屋のお藤さん

なんかは、家が家なんだから、何があつたつてそれほど何ぢやありません。――それより二十一や二て、子供をかゝへてゐたら、一寸何うにもならないてせうねえ。

長太郎。しかし天定の親爺は歸つてきたんて結句喜んてゐるだらう。――なあに子供なんかは二兩か三兩の里扶持て里にてもやつてしまへば幾らても始末はつく。――吉公ぢや仕樣がないが、吉公より金のある奴て、吉公のやうな親切な淫亂が世間には澤山あるからね。

清吉。天定の親爺つて、そんな奴なんてすか。

長太郎。あの親爺と來たら、そりやあ喰へたもんぢややありあやしねえ。――今はまあ、とにかく一軒見世を持つてるから、さう以前のやうに下らない眞似もしなくなつたが、以前はもう町内の厄介もので、下らねえ因縁はつけてあるくし、强請みたやうなことはするし、始終こそ〳〵善くねえ事をしちやあ、(一寸後ろを振返つて)いま頭髮を刈りに來てゐる初音の親方なんかに取つちめられてゐたもんだ。――いまのあの天ぷら屋の見世だつて、あれは何なんだ。もとをたゞせば初音の親方に持たして貰つたやうなものなんだ。――(ふと聲を低くして)それを初音の親方が今のやうな身體になつたつて、このごろぢやあ足蹈もしねえ奴なんだからね。――そりやあ理屈のわからねえ不人情な奴よ。

清吉。さうなんてすかねえ。――一寸見ると、なんだか拔けてるやうな顔つきをしてゐますがねえ。――それぢやあ、その姪つて人はなほ可哀想だ。とても浮いた沙汰どころの話ぢやない。――しかし、何うして長さんはそんな色んなことを知つてゐるんてす。

長太郎。何うしてつてお前、俺は以前、横町の油屋の裏て、しばらく天定の親爺と壁一重となりに住んてたからさ。

清吉。(さも思ひがけないやうなことを聞いたやうに。)へえゝ、――さうてすか。

長太郎。(同) その時分から見ると、隨分こゝいら近所も變つたよ。

庄吉。さうでせうねえ、——私がこの近所へ越して來たのは、つひ一昨々年なんですが、それでももうなんですからね、越して來た當時のことを考へると、眞實に怖いほど變つてしまひましたからね。

長太郎。ぢやあお前さんが越してお出でなすつた時分には、まだ中田屋が見世をあけてゐたでせうね。

庄吉。えゝ/\、まだまん/\と立派に商賣をやつてました。——私がはじめてこの近所へ來て借りた家は、河岸通りの、中田屋の家作だつたんです。

長太郎。河岸通りと云ふと、彼處の——いま三崎屋の所有になつてゐる——

庄吉。えゝさうです、彼處です。——ところがさうすると、ぢきにだん/\妙な噂がきこえて來ました。——しかしとにかく、あれだけの大家ですからねえ、まさかと思つてゐると、——すると一年立つか立たないうちに、がら/\つと來てしまつたもんです。——驚くよりも何よりも、なんだか周圍からみてゐると、いよ/\あの見世を締められたときには、嘘のやうな氣がして仕樣がありませんでした。

長太郎。まつたくね、あればかりは、考へりやあ考へるほど、嘘のやうな氣がするばかりですよ。そりやあ、大分親指が撒き散らすつていふことは前から聞いてたけれど、大抵撒いたんぢやあ撒き切れないと思つてましたからね。——ところが、見世をしめたとなると、わづか半月かそこいらの間にそれが賣物になる、——一しよに今戸の別莊まで賣物に出たときいたときにはまつたく驚いたよ。

淸吉。しかし眞實に使ひ潰してしまつたんですかねえ。

長太郎。それがさ、——噂によると、すこし身上にめりが見えてきたとき、慌てゝそれを取返すつもりかなんかで、株へ手をだしたといふんだがね、——それでまあ却つて、終りを早くしたと云ふんだが、——なるほど此奴はさうありさうな事だよ。

庄吉。すこし屋體の大きな家が工合が惡くなると、おき急にばた／＼と行つてしまふのは、みんなそれて失敗するんださうですね。

清吉。だけど、夢中てどん／＼使つてゐるうちに、だん／＼身上が減つて來るばかりつていふことがわかつたら、一たいどんな氣がするてせうねえ。

長太郎。さうなつたら、半分もう自棄て、何んにも解つたもんぢやあないと思ふがね。

庄吉。これは吉原の幇間が話してゐたさうですがね、一たい中田屋の大將は男の藝人が好きて、役者は勿論のこと、落語家や講釋師を贔負にして、始終何處へ行くんても二三人づゝはきつと引張つてあるいてゐたんださうですね。——この藝人を世話をして、いろ／＼面倒を見てやつたことだけても、つもつてみたら生易しいことぢやあないさうですが。——何んでも、中田屋の大將のおかげて、名題になつた役者や、眞打になつた落語家や講釋師が、勘定したら隨分あるだらうつて話てすがね。

長太郎。なるほどね、——さう聞いてみると、あの大將何處か當り前の道樂ものとは氣合がちがふところがありますね。——とにかくあんなに落ち目になつても生れた土地を離れないと云つて、いまに平氣て土地にゐるところなんか、一寸此奴は眞似のできない藝だからね。

清吉。私は知らないことは何んとも思はなかつたが、以前のことを聞いてからは、あの旦那と、（一寸聲を低くして）あの初音の親方の顏をみると、なんだか涙が零れるやうな氣がして仕樣がありませんよ。

庄吉。こんな事を云つてるうちに、大きにまた今度は三崎屋が何うにかなるやうな日が來ないとも限りませんからね。

長太郎。しかし三崎屋は、儲けるばかりで肝心の使ふ奴がゐないから、一寸此奴は當分は六かしいだらうよ。

濱吉。えゝ面倒臭い。（藪から棒に將棋の盤の上を掻きまはす。）

——長太郎も清吉も庄吉も話をやめてふ向く。）

長太郎。何んだい、藪から棒に、——氣ちがひみたや

うな奴だな。

濱吉。（緣臺から下りかけて。）何が下らないつて、世の中に將棋つ位下らないものはありやしない。

茂介。（笑ひながら――駒を箱のなかへ蒐めながら）幾らやつても敵はなければ、世の中にこれほど下らないものはないよ。

濱吉。きいた風なことを云ひなさんな。――將棋ぢやお色は出來ねえよ。

長太郎。お前の清元ぢやあ、なほのこと出來ねえや。

濱吉。（緣臺から離れて）なんとでも云ふがいゝのさ。――淸さんお待ち遠――

淸吉。淸さんお待ち遠もないもんだ。――恐圖々々してゐたら、もうすぐ十一時ですぜ。

濱吉。まことに申譯がございません。――いゝから、ちよい〳〵つと、手つとり早く剃つて置いて呉れりやいゝや。

濱吉をさきに、淸吉見世のなかへ這入る。

間。入れちがひに、「おやすみ」「おやすみ」といふ聲と一しよに、見世のなかゝら客が一人出てくる。――無言。そのまゝすぐに、空模樣をみるやうなことをしながら歸つて行く。

四邊がふとまたしめやかな、――果敢ないやうにしめやかな心もちになる。

茂介は長太郎とまた將棋をさしはじめる。――しかしそこには、もう周圍に誰れもゐない。

庄吉は接穗がないやうにぼんやり立つて、見世のなかの時計をのぞく。

庄吉。もう十時半まはつた。――（氣をかへて――長太郎に。）ぢやあおやすみ、――おさきいごめん。

長太郎。おやすみ。

庄吉かへつて行く。

間。

見世のなかゝら、仕事着をきた銀次郎が一寸出て、茂介に聲をかける。

銀次郎。茂スさん、親方を――

茂介。（ふり返つて）あい、承知。

茂介すぐ勝負をやめて緣臺から下りる。銀次郎と一しよに見世のなかへ這入る。

間。長太郎は盤の上を一人でながめて考へてゐる。――ぢきに見

世のなかゝら、音吉（六十七八）が大きな重い身體を茂介の肩に支へられて出てくる。老病で身體の自由がまつたく利かない。呼吸づかいがいかにも苦しさうに見える。——あとから一しよに銀次郎が出てくる。

茂介。親方、すこしこゝで休んで行きませうか。

音吉。——（默つてうなづく）

茂介、銀次郎と一しよに、しづかに音吉を床臺の上へ腰をかけさせる。

銀次郎。今夜は家のなかにゐると蒸し／＼するやうだけれど、そとへ出るとゝ莫迦に冷やつくね。

茂介。もう二三日すりやあ九月だからねえ。（音吉のそばへ腰を下ろす）

長太郎。（音吉に）親方、今ばんは。

茂介。親方、五番地の長さんですよ。（そばから氣をつける。）

音吉。（鈍い眼つきで長太郎の顔をみる。）——あゝ長さんか、——暫らくだつたね。（舌のもつれるやうなところのある工合。）

長太郎。つひどうも、じぶんにかまけて、——いつもごぶさたばかりして申譯がございません。——その後親方は身體の方の工合は——

音吉。あゝ有難う。——相變らずさ。——どつちにしてもね俺の身體はもう駄目だよ。——早く死にてえと思ふんだけれど、どうもまだ業が滅しねえと見えて、死ぬことが出來ねえ。

銀次郎。（横から）冗談云つちやあいけません、親方なんかは、今まで他人の爲めなんかにさん／＼苦勞をして來たんだから、これからは、當分今度は樂をして安氣に暮らすやうな順になつてゐるんですよ。

茂介、この間に庄吉が置いて行つた床臺の上の新聞をとり上げて讀みはじめる。

音吉。何んだか知らないがね、このごろは毎日、晝間寢てばかりゐるよ。——朝飯を食ふと、すぐもうなんだか眠くなつてきて寢る。——晝飯だと云つて起こされる。——それから晝飯を食つて、お駒に新聞でも讀んで貰つて、それを聽いてゐると、だん／＼またうと／＼と眠くなつてくる。——また寢る。——

―それて起きると、もう日が暮れてゐる。――今日も五時すぎに眼がさめて、それから茂スに湯に連れて行つて貰つてね、――さつぱりしたら、なんだか序てに頭髪が刈りたくなつたから、それからすぐにまた此處へ連れて來て貰つた。――だけどね、そんなに寢たら、夜寢られさうもなさゝうなもんだが、その割りに夜は夜でまたよく寢られる。――どうしてかう寢られたもんだらうと思ふよ。

長太郎。(ふと返事に困つて。)そりやあ何んですよ。――なまじつか眼がさめてゐて、下らない事を見たり聞いたりするより、始終寢てゐて、何んにも知らないでゐる方が、結句身體の惡いときは氣が休まつて好ござんすよ。

音吉。でもな、あんまり寢られると、――そのまんまぽつくり行つてしまふんぢやあないかと思ふよ。――こゝろ細い氣がするよ。

長太郎。そんな事があるもんぢやありません。

音吉。(すこし疲れてきた様子――茂介に)おい茂ス、湯でも水でも一杯飲みてえ。

銀次郎。(すぐに見世のなかへ聲をかける)おい、親方にお茶を一杯持つて來て上げな。――(音吉に)いま持つて來ます。

茂介。(そばで)濟みません。

間。――見世のなかゝら、仕事着を着た小僧が盆の上へ湯呑を乘せて持つてくる。茂介がうけ取つて、音吉にそれを飲ませる。

宗兵衛(四十八九)が悲しく醉ひ疲れて出てくる。――浴衣で、帽子もかぶつてゐない。――しかし一筋張りつめたやうな心もちを持つてゐる。

無言のまゝ長太郎の腰をかけてゐる後ろまでくる。――誰れも氣がつかない。

宗兵衛。(銀次郎に)親方、一寸こゝを借りるぜ。(床几に腰を下ろす。)

銀次郎。おや、旦那。――(長太郎も茂介も氣がつく。)

茂介。(音吉に)親方、中田屋の旦那――。

音吉。中田屋の旦那――。(宗兵衛の顏をみて)旦那。(呼びかける)

宗兵衛。(ふり返つてみて)なんだ、初音の親方ぢやあない

か。

音吉。何處へおいてなすつた――。

宗兵衞。今日はね、晝間久しぶりで吉原の平孝の奴が遊びに來てね、――久しぶりだから早速まあ一杯初めてゐると、そこへひよつくり、きん生の奴がやつて來たもんぢやないか。

銀次郎。集りましたね。

宗兵衞。集つてね、――とにかくお客が二人、――それも選りに選つて好きな奴ばかり二人一しよになつたんだ。――話が彈んでね、――これから何處かに出かけようつていふ事になつた。――すると平孝の奴がね、何處へ行つたつて、格別面白いところはありやあしない。それより私の家へ行きませうつて云ひだした。――私が今度越してから、旦那はまだ一度も來て吳れないから是非つて云ふのさ。――するときん生の奴が、其奴は是非お前のとこへ行かうと贊成して、とう／＼それから平孝のところへ押しかけたものさ。――四時ごろから六時ごろまで平孝のところでまた飲んで、日のくれぐれにきん生と二人で引き上げた。――表へでて田町のところまで來ると、きん生の奴が旦那、何處かへ行つてもうすこし飲みませうと言ひだした。――だつてお前は寄席があるぢやあないかと云ふと、なあに寄席なんか拔いつたつて構はない、あんなものは拔く方が當り前だつていふやうな權幕でね、――それからとう／＼またきん生の馴染の、何んとかつていふ飲み屋へ行つたもんさ。――なか／＼そこが乙な家でね、――酒が莫迦にいゝんです。――ところが其處へ來ると、きん生の奴がまた飲むわ／＼。――以前はからもう飲めない男だつたが、人間つてものは變れば變るものだと思つたよ。

間。

銀次郎。それからすぐ歸つたんですか。

宗兵衞。――それからなんだ、――とにかくまあ其處はそれで勘定して表へ出ると、きん生の奴、なんても家まで送るつて云ふ。――わざ／＼そんな事をし

なくつてもいゝから、すぐにお前は俥へでも乗つて家へかへれと云ふと、ぢやあお別れにもう一杯何處かで飲みませうと云ふ。――それから俺は怒つたね、――いゝ加減にしろ、ものには大概方圖つてものがある。ねえ折角人がお前の身體(からだ)を思つて、俥へ乗つて歸れと云つてやるのに、もつと飲まうとは何んといふ言ひ草だ。全體氣に食はねえ、俺はお前をそんな風に仕付けやしなかつた筈だ――とね、するときん生の奴、じぶんが惡るかつたから勘忍して呉れとあやまるんだ、――見ると、眼に一杯涙を溜めてるぢやあないか、――眼に涙をね、それからすぐ俥へ乗せて歸してやつた。――だけど嬉しい奴ぢやあないか、親方。えゝ。――藝人が薄情だなんて云ふのは嘘の事だぜ。藝人つてものは――藝人らしい藝人つてものは、決してそんな薄情なものぢやあない。――俺は知つてるよ。俺はよく知つてるよ。――薄情な奴つてものは、かへつて素(す)つ堅氣(かたぎ)の奴に多いもんだ。――ねえ親方、さうだらう。親方にはそれが解るだらう。

音吉。（間。――涙ぐましいやうな氣になつて默つてうなづく）

長太郎も銀次郎も茂介も、うたれたやうに默つて、宗兵衛と音吉とを見てゐる。

宗兵衛。――ねえ、話はすこしちがふが、三崎屋の家(うち)がさうだ。わづか二萬か三萬の錢に欲しいからつて、あの夫婦養子の成り上りが、たつた一人の眞實(ほんと)の血筋の娘を邪魔にすること。――以前のことを考へたら、あのお藤の娘に向つてあんな薄情なやうな眞似の出來る義理ぢやないんだ。――もつと證據を云へつて云ふなら、證據は手ぢかに澤山ある。――あらあねえ、親方。――全體素つ堅氣の奴等は氣に食はねえ。（ふと頽れるやうに横になる。）

間。――誰れも無言。

茂介。（氣がついたやうに）親方、あんまり遅くなるといけないから、もう歸りませう。

音吉。あゝ歸らう。（長太郎と銀次郎が手を貸して、茂介と三人がゝりで、緣臺から音吉を立たせる。）

長太郎。其處まで一しよに行かう。——（宗兵衛を見て）
あ、、旦那がこゝへ寢てしまつたぜ。
晋吉。風邪をひくといけねえ、起こして上げな。
銀次郎。よござんすよ、いま後とて私が起こすから。
茂介。左様なら、おやすみ。
銀次郎。おやすみ。
長太郎。おやすみ。
銀次郎。おやすみ。

晋吉、茂介と長太郎に兩方から支へられて歸つて行く。
間。
客が一人、見世のなかゝら出て來て歸つて行く。あとから濱吉が誰れのとも解らないやうな聲色を怒鳴りながら出てくる。

濱吉。「峯の松風ざわ〳〵と、耳やかましく俺の名を、問はれて何んの難波潟——。
銀次郎。（ふり返つて）濱さんは眞實にいゝ氣なもんだぜ。」
濱吉。（笑ひながら）「——因果な緣の絲ぐるま。」ってね。

濱吉が見世を出るとすぐ、清吉や新三やそのほか小僧がいろ〳〵に手を分けて、見世を片付けはじめる。——ちきに見世のなかの灯火が一つ〳〵消えて、入口には雨戸が入れられる。
舞臺がまつたく暗黒になる。——軒の電燈が、仄かにその四邊を照らしだすばかりになる。

銀次郎。（緣臺のそばへ寄つて、宗兵衛を搖り起す。）旦那 旦那、——（返事がない。）旦那、旦那、こんなところに寢てゐて風邪をひくといけませんよ。え、、
濱　。どうしたんだい。
銀次郎。なあに、中田屋の大將が醉つてきてこゝへ倒れてしまつたんだ。——（起す）旦那、旦那。
宗兵衛。（ぼんやり眼をさます。——暗いなかに身體を起こして、四邊を見まはす。——銀次郎に）有難う、有難う。
銀次郎。いゝえ、こんなとこに寢てゐて、風邪でもひくといけませんから。
宗兵衛。（まだ大分醉つてゐる。——下駄を穿き直して緣臺から離れる。）もう何時だろう。
銀次郎。もう十一時すぎました。
宗兵衛。とんだ邪魔をしてしまつて、——明日でもい

づれあやまりに來ます。

銀次郎。どういたして。

宗兵衞。ぢやあまあ、おやすみ。

銀次郎。おやすみ。

宗兵衞悲しい足どりで夜露に濡れながら一人かへつて行く。――銀次郎と濱吉、ふと默つてそのあとを見送る。

戸のくゞりをあけて、仕事着をぬいだ淸吉と新三もう一人小僧が、湯に行く手拭を持つて出てくる。――くゞりの中には灯火が暗くついてゐる。

淸吉。（空をながめて）棒屋の親方には氣の毒だけれど、此奴はどうしても明日（あした）はくどいな。

銀次郎。危ねえもんだとも。

淸吉。一寸湯に行つて來ます。

銀次郎。今夜は遲いんだから、歸りに遊んで來ちやあいけねえぜ。

淸吉。えゝ、すぐ歸つて來ます。

新三。行つて來ます。

小僧。行つてまゐります。

濱吉。待ちねえ、待ちねえ。一しよに行くから。

四人這入る。――濱吉の何かうたふ唄の聲がきこえる。――しかしぢきにそれは遠くなる。

銀次郎しばらくして、くゞりのなかへはいる。

間。

遠くから支那蕎麥屋のチヤルメラの音がきこえはじめる。――斷へてはつゞき、斷へてはつゞいて、その音がだん〳〵ちかくなつてくる。悲しいやゝに赤い行燈をつげた屋臺がぢきに舞臺へ出てくる。

「銀床」の家の横のところに屋臺がとまる。

通りがゝりのものが一人、その屋臺の前へ立つ。

やゝ長き間。――（この間に、舞臺の上の心もちが、まつたく今までと變つたものになつてしまはなければならない。）

客が這入ると一しよに、ぢきに屋臺も這入る。――またしばらくチヤルメラの音が悲しくつゞく。

やゝ長き間。

お藤（二十二）出てくる。――しほ〳〵とした、さうして疲れた樣子で、そのまゝ河岸通りの方へ行く。

やゝ長き間。

チヤルメラの音またつく聞えなくなる。――調子のはづれた聲で柳の佐和利のところをうたふのがだん〳〵近づいてきて、淸吉や新三が湯から歸つてくる。

新三。（唄つてゐる）よおい〳〵、よおいとな——。

三人縁臺の上に腰を下ろす。

新三。（しきりに唄ふ。）「——母は今を限りにて、——もとの柳に歸るぞや——必ず草木成佛と——」

清吉。「おいとこさうだよ——紺の暖簾に、伊勢屋と書いたよ——」（縁臺の上に引つくり返つて、新三の唄ふそばからそれを混ぜつ返す。——眞つ暗ななかで、やがて三人が一しよに繰り返し〳〵この「おいとこさうだ」の唄を怒鳴り立てる。）

三崎屋の見世のものが二人出てくる。四邊へ眼を配りながら、そこへ通りかゝる。

三崎屋の見世の者。一寸新さん、妙なことを訊くやうだけれど家のお藤さんを見かけないかしら。

新三。お藤さんを——いゝえ、知らないよ。

清吉。（起き上つて）お藤さんが何うかしたのかい。

三崎屋の見世の者。お藤さんが先刻一寸表へ出たつきりまだ歸つて來ないんでね。

清吉。こんなに遲くまで、——一たい何處へ行つたんだい。

三崎屋の見世の者。何處へ行つたんだか解らないんだ。

新三。何うしたんだらう。

清吉。だつてこの頃すこし、お藤さんは身體が惡るかつたやうな樣子ぢやあないか。

三崎屋の見世の者。なんだかこの頃は工合が惡るくつて、四五日前まで寢てゐたんだ。

清吉。それで、今夜はお藤さんが表へ出るのに誰れも附いて出なかつたのかい。

三崎屋の見世の者。一寸表へ凉みに出てゐるうち居なくなつてしまつたんだ。——だから誰れも知らないんだ。

新三。ほんとに何うしたんだらう。

清吉。お藤さんはよく、横町の六繁さんのところへ行つてるぢやないか。——彼處へ行つてるんぢやあないか。

三崎屋の見世の者。お師匠さんのところへは先刻行つてみたんだけれど、今日は晝間一寸來たきり、今夜は來なかつたと云ふんだ。——ほんとに此處いらで

も通るのを見かりなかつたかい。

清吉。俺たちはいま見世をしまつて、一寸湯に行つて歸つてきたばかりなんだかね、——どうも見かけなかつたなあ。——たいがい此處いらを通れば解るんだ。

三崎屋の見世の者。有難う。——ぢやあ一寸通りの方へ行つて見て來よう。（急いで行く）

新三。何うしたんだらう。

清吉。——どうも此奴は様子がすこし變だぜ。

舞臺の裏が急になんだか騒々しくなつてくる。——それは明らかに聞えない。たゞ何んとなくざわ〳〵した心もちが傳はつてくる。

新三。（ふと注意する）彼方の方になんかあるやうだぜ。

清吉。なんだまた喧嘩ぢやあねえか。（立ちあがる。）

子僧。見て來よう。（駈けだして行く。）

間。——ざわ〳〵したやうな心もちがだん〳〵濃くなつてくるやうに思はれる。近所の者が一人急いで河岸の方から來かゝる。

清吉。初つあん、何んだい。

近所の者。身投げだよ。

清吉。え、身投げ——。

近所の者。三崎屋の娘だよ。

清吉。三崎屋の——あ、お藤さん。

新三。（見世のくゞりをあけて家のなかへ聲をかける。）親方、親方、——たいへんですよ。

銀次郎。（浴衣をきて出てくる。）何うしたんだ。——何があるんだ。

清吉。三崎屋のお藤さんが身を投げたんです。

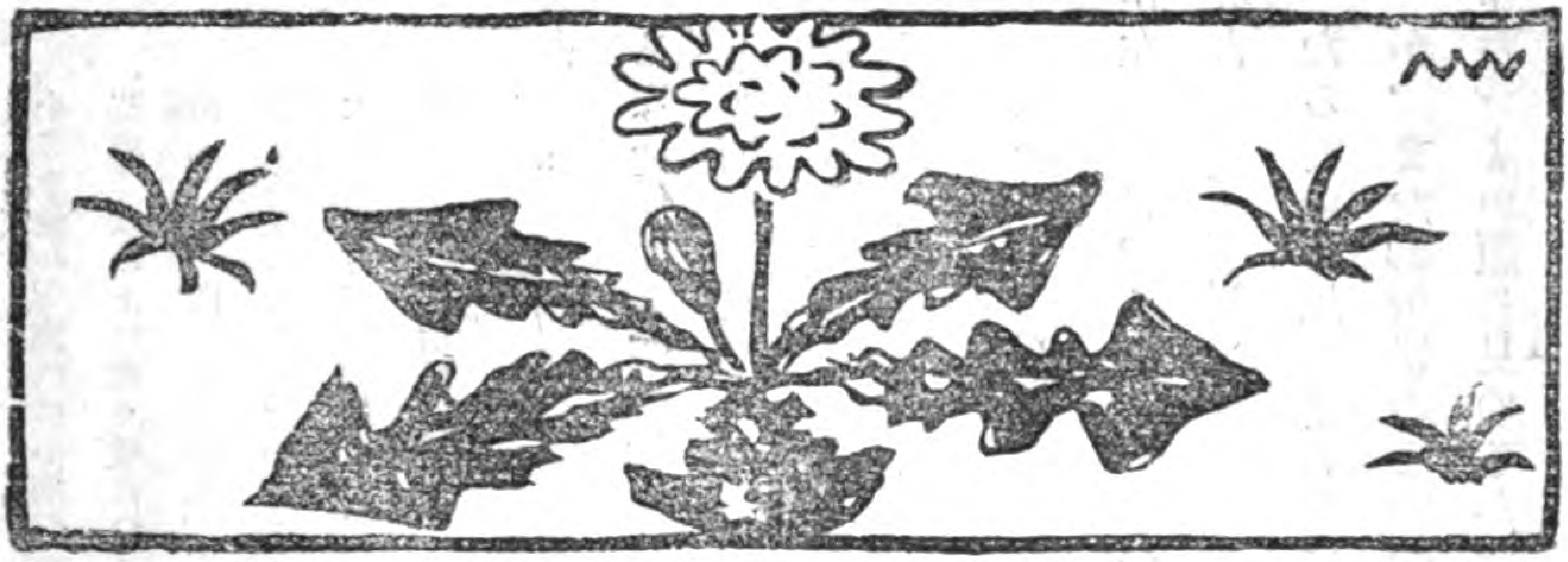
銀次郎。なんだ、お藤さんが身を投げた——。

何處からともなく近所の者や通りかゝりの者が一人二人寄つてきて、いつの間にか舞臺に清吉や新三や銀次郎と一しよに四五人の群が出來る。——「何うしたんだらう」「何うした譯なんだらう」といふやうな言葉がその中に低くとり交はされる。——舞臺の裏に動いてゐた「喧騒」がいつか舞臺の上にも動いてゐる。

間。

幕。

（三年六月）



伊左衛門（一幕）

小山内薫

人物

久　古。　新町の幇間。
藤屋　伊左衛門
河　内。　元遊女。
おせき。　伊左衛門の娘。

場所

大阪。京橋の片側町。

小さき流れ。流れに小橋かかる。橋の前に自然木を柱としたる門。腰垣。垣の上に赤き壁に白き障子はめたる二階見ゆ。流れの下に流灌頂。門の前に床几。床几の上に毛氈。春の午後の日ざし。

暫く舞臺に人なし。小鼓の音、二階より好き音に響く。

太鼓持久古、坊主頭に大黒頭巾を冠り、紫の袱紗に包みし小鼓を抱へ、流れに沿ひて出づ。

久古。（ふと立ち留まり、二階の小鼓に耳を傾く。）おう、まぎれもない伊左衛門様ぢや。かたかは町とのみて、しかとお宿が知れなんだに、小鼓の音で知れた。こちも鼓て挨拶せう。（袱紗を解き、立ち身の儘、二階の鼓に合はして我が鼓を打つ。稍長き間）

（ふと、二階の鼓やむ。障子あく。伊左衛門、衰へし顔を出す）

伊左。やれ、久古か。なつかしい。

久古。（鼓をやめる）お久しや、藤屋様。もうお目には當たるまいと思ひましたに、下司の命が役に立たいてか、また御機嫌のよい顏を見ますする。

伊左。よい顔に見ゆるか。先づ、それへ行く。待ちや。（障子を閉ざす）

久古。（流灌頂に目をつける）流灌頂がある。さては夕霧様のお弔ひの爲のお下りぢやな。俺も回向せう。（流灌頂の前に跪き、手を合はす）

（伊左衛門、門の内より出で來る。皮の短き紐つけたる荒らき縞の羽織。素足に草履穿き）

伊左。（久古の背を打つ）何をする。

久古。夕霧様を拜みまする。

伊左。夕霧がどこにゐる。

久古。お立てなされた流灌頂に。

伊左。いや。俺は流灌頂は立てぬ。

久古。でも今年は七年忌ぢや。それでお下りなされたのであらう。性惡にも似合はず、あのお方ばかりは忘れられぬと見えまする。

伊左。いや、年忌は京でした。また淨國寺へも志した。

久古。それなら、なんでお下りなされた。

伊左。様子にも知れう。世間晴れての下りなら、長町か北濱へ行く。俺はまたさん／＼な身になつた。

久古。またお内をお出なされたか。

伊左。出たのではない。出されたのぢや。女房妾のある身が勘當されたのぢや。

久古。(笑って)二人ではまだ足りませいでか。

伊左。足らぬではない。とんと何もないと同じ事なのぢや。空なのぢや。

久古。お内儀と萩野様を、左右に抱いて、それが空とは禪宗の坊主が言ひさうな。その悟りがあれば、勘當にはお逢ひなさるまい。またいつもの嘘ぢや。

伊左。いや實ぢや。夕霧が死んで後、よう似たと言うて萩野に阿呆盡したを、女房が聞いて、ここへ下り、請け出して京へ歸つた。それから暫く廓へは足踏もせいで、一門の褒め者になつた。それで濟めば事もないに、島原の大坂屋に難波といふ女郎が出て、それがまた夕霧に瓜二つぢやと友達が言ふ。

久古。難波なら私もよう知つてをりまする。成程、微塵違ひませぬ。夕霧が見たくば難波ぢやと申します。

伊左。初めは取り合ひもせなんだが、ふと見たうなつて、密に行つて見たれば、夕霧にその儘ぢや。そこで女房も萩野もとんとほたらかして通う程に、また一門がやかましうなつて、ばら〳〵と勘當した。

久古。さても氣の多いお人ぢや。それでは夕霧様もお怨みなされませう。

伊左。何で怨まう。夕霧は俺を置いて死んで行つてしまうたのぢや。

久古。それ故、あの世でお怨みなされませう。

伊左。「あの世」があるなら、俺も生きてはゐぬ。今にも死んで夕霧に逢ひに行く。年忌に弔ひはしても、それは心遣りばかりの事ぢや。俺は「あの世」があるとは思はぬ。もう夕霧には佛でも逢へぬ。

久古。それなら、なぜ夕霧様に似た女郎をお買ひなさりまする。

伊左。そこぢや。俺は「あの世」はないと思うてゐるが、「前の世」はあると思うてゐる。その前の世で契つた女に夕霧が似てゐたのぢや。夕霧が初めてはな

い。まだ前に女がある。それが誠の女ぢや。

久古。分からぬ事を仰せられまする。そのやうな事がございませうか。

伊左。そなたには分かるまい。人は誰でも前の世で先づ女と契るものぢや。この世へ生れて來る時が、その女と暫くの別れぢや。さて、この世で大きう育つて、前の世で契つた女を探す。これを世間では「性惡」といふのぢや、「遊び」とぬかすのぢや。なんでこれが「遊び」であらう。これが「遊び」なら命も「遊び」ぢや。

久古。「遊び」がなうては、私等は冷飯も食へませぬ。それはお道理でございまする。

伊左。そなたにはまだ俺の言ふ事が分からぬ。分からいでも大事ない。先づ、聞いてみよ。それで前の世の女に似た女を探す。ちよ似たのがあれば直ぐと現をぬかす。したが、似た物は似た物、同じ物ではない。きつと折り合はぬ節が何處ぞに出來て來て、女が厭になる。そこで、またこれに似外の女を探すまた阿呆を盡す。また、丁度に行かぬ所が出て來る。そこで、また新しい女を探すのぢや。

久古。それはお前の移り氣でございまする。不心中でございまする。

伊左。いや、これが心中ぢや。前の世を戀しうも思はず、一門世間が呉れた「女房」といふ目隱しで目を隱し、よその女に見向きもせで暮らすこそ不心中ぢや。世間にはこの不心中が堅人よ聖人よと褒めらるる。世間の男の大方はこれぢや。

久古。さればその前の世の女とやらが、一定この世に生れてをりまするか。

伊左。生れてゐいでか。そこが前の世での契りぢや。前の世の契りはこの世の契りよりずんと堅いわ。

久古。女もその契りを忘れずにゐますか。

伊左。そこが難事ぢや。男は忘れずに生るるが、女は忘れて生るる。女の不心中は生れぬ先からの事ぢや。

久古。されば、どうして前の世の女とお見當てがつき

まする。

伊左。それて男は苦勞する。あれかこれかと迷ふ。目星をつけても、女の心の底を知るまでには大分の年月が掛かる。前の世の女の心は、起こされるまでは眠つてゐるのぢや。

久古。夕霧様は前の世とやらのお内儀ではなかつたのでござりまするか。

伊左。さればぢや。いまだに戀しうは思ふが、俺の探す女てはなささうぢや。眞實前の世の女なら俺に先立つ筈がない。

久古。でも、それは御病氣故。

伊左。その病氣がそてない證據ぢや。前の世の契りは、この世の命をも儘にする。

久古。されば、萩野様はどうてござりまする。

伊左。女房が粋の立て損ねぢや。あれは請け出す前に俺の目違ひが分かつてゐた。

久古。すれば、難波がそれぢやと仰せらるるか。

伊左。まだ分からぬ。大方さうてないとは思ふが、今てはあの女より外に見當てはない。それて勘當受けたが、白黑の分かるまでは通ひ續くる心ぢや。そちに頼む事がある。

久古。何なりとも承りませう。

伊左。俺が娘を知つてゐやるか。

久古。京のお内儀のでござりますか。

伊左。女房にはとんと子が出來ぬ。それ夕霧が死なう五年前に、子を生んだ。桑名に米商してゐる伯父に預けて置いた。それを今度連れて下つたのぢや。

久古。どうなされます。

伊左。廓へ賣つて金にしたい。それて、そちを頼む。

久古。たはけた事を。

伊左。たはけても是非がない。難波に逢うた揚錢の殘りが十五兩ある。それを濟まさねば尋ねるにも尋ねられぬ。早う濟まさうとは思へども、今の身ては一兩も絞れぬ。詮方盡きて桑名へ下り、娘おせきを連れて來たは、難波が一分も立て俺も前の世の契りを探りたい爲ぢや。娘を金にして呉れ。

久古。やくたいもない事仰せらるる。夕霧様が廓てお果てなされたさへ情なう思し召したに、その娘御を廓へ賣り、二代の傾城をさせうとあるは、草葉の蔭から夕霧様のなんぼう悲しう思し召さう。

伊左。夕霧が事は何とも思はねど、娘は俺とても憎うはない。勿論長う廓へ置くてはない。俺が友達に川口屋の淸左衛門といふがある。

久古。それは鼻の下に上髭のある、髮を高う結つたお人ぢや。わしも存じてゐまする。

伊左。あれは阿呆ぢや。

久古。阿呆てはござりますが、拔けてござります。

伊左。はて同じ事を言ふ。どうした緣か俺ときつう仲がよい。あのやうなれども、眞實のある者ぢや。あれに言うても十五兩は貸さう。なれども今來たばかりには面目なうて言はれぬ。長う廓に置くてはない。一時の逃れ道ぢや。

久古。それなれば畏りました。

伊左。一兩も慾には入らぬ。十五兩てよい。ひとへに賴む。

久古。畏りました。

伊左。それて話は出來た。（稍長き間）そちは今かた鼓を打つたな。

久古。御挨拶に打ちました。

伊左。うつけにも似ず、よう鳴るわ。

久古。お前のお蔭て、仕上げました。この頃は松囃子にもわしが出ぬと始まりませぬ。

伊左。何を打つ。

久古。やはり傾城事てござります。

伊左。むむ、何ぢやな。

久古。江口を打ちまする。

伊左。さらば曲舞から打つて見よ。

久古。お前大鼓を打つて下されませ。

伊左。心得た。

（伊左衛門、家の内へ入り、直ぐ大鼓を持ち出づ。久古、調べの緒を締める。やがて二人して鼓を打ち始む。元の遊女河内、町風して出づ。二十あまりの美女。川原に立てたる流灌頂に水を

手向く。伊左衛門、久古、直ぐそれに目を留めて、思はず同時
に鼓をやめる）
河內。（涙ながらに手を合せて）ああ誠に月日の立つは夢ぢや。今手向けまする水を、よう受け取つて下さんせ。
久古。（河內の側へ歩み寄る）はて、お愁傷や。さては姉御樣は血の上てがなお果てなされ、それ故流灌頂お立てなされましたか。
河內。いや左樣ではござりませぬ。
久古。そんなら斬られて死なしやれましたか。
伊左。はて粗相言ふな。
河內。いや、そのやうな事ではござりませぬ。お前方をわしは見知つてゐまする。
久古。（なほ床几にゐる伊左衛門に向ひ）こな惡性者め。後家、比丘尼、腰元、小娘まで、お前の手の掛からぬ者はない。近附でござりませう。
伊左。いや覺えぬ。
河內。もし藤屋の伊左衛門樣。
久古。そりやこそ。

河內。これ久古殿。久しい。
伊左。それ、おのれぢやは。
久古。いや覺えませぬ。（河內の顏をちつと見て）顏は見たやうなが、名を覺えぬ。名の頭字を聞きたい。
河內。カの字でござんす。
久古。むむ、覺太夫が娘か。
河內。いや、いや。
久古。そんならま一字言うて下され。
河內。はて、カハでござんす。
久古。むむ、おかはさんか。
河內。はて、やくたいもない。河內でござんす。
伊左。（驚きて、女の顏をちつと見詰め）おう、さては夕霧が妹女郎の河內か。
久古。ほんにさうぢや。町の風になつた故、とんと見違へた。先づこれへ。
（久古、床几の毛氈を川原へ敷く。三人これに座る。）
伊左。そなたは井筒屋の八兵衛に請け出されたが、見れば供も連れず。どうした事ぞ。

河內。されば井八樣に請け出され、暫く一所にゐましたが、井八樣は大酒が病で、咽喉からたんと血を吐きそれから煩ひになり、終に死なしやました。
久古。むむ、さてはその弔ひの爲の流灌頂か。
河內。いや井八樣の弔ひは寺へ賴みました。これは夕霧樣の七年忌。深う思を着ました故、志でござんす。
久古。はて殊勝な。
（娘おせき。十六七の紫帽子。門の內より茶を持ちて出づ）
娘。茶を參りませ。
河內。（娘の顏をぢつと見て）はて、こなさんは夕霧樣にその儘ぢや。
伊左。その筈よ。桑名にゐた俺と夕霧が中の子ぢや。
河內。さうでござんすか。（娘に）わしはお前のかかさんと懇ろの者ぢや。おお、いとほしや。（伊左衞門に）もし伊左衞門樣、このお子を一夜貸して下さんせ。夕霧樣に會はしたい。
久古。いや、不思議な事ばかり聞く日ぢや。
伊左。何をいふ、夕霧に逢はさうとは。
河內。されば夕霧樣が生き返りてござる。京では難波というた女郎ぢや。ここでは難波津といふが、その儘の夕霧樣ぢや。京の大盡がついて來て、ここの京屋で御全盛ぢや。
伊左。（大に驚く）それは京の大阪屋の女郎か。京では天神であつた難波が事か。
河內。如何にもさうでござんす。この所では太夫樣でござんす。
伊左。（肝の高ぶり來る樣子にて）やい久古、何を浮々聞いてゐる。最前話した女ぢや。
河內。お前見知つてか。
伊左。見知り所か。そいつめ故に千貫目の身代また捨てた。俺はあれが心中次第、死にもする、共に乞食でもする心ぢや。そこな娘を賣りに下つたも、揚錢濟ましてやりたさぢや。それに、俺がこの體となりたれば、桑名へ行きし留守を幸に、この所へ來る奴ぢや。（悲しげに）久古。難波にお前の世の契りはなかつた。
久古。されば、どうなされます。

伊左。また外の女を探すまでぢや。難波が事はふつつりと思ひ切る。

娘。ととさん、わしは円となるぞ。

伊左。(河内に)さりながら、人の物を負うてゐるは厭ぢや。娘を十五兩の金にして呉れ。

河内。それなれば久古殿と共に新町へ行き、埒の明くやうに致しませう。

伊左。おせき、行つて呉れるか。

娘。如何にも、ととさんの爲ならば傾城になりませう。

久古。(伊左衛門に)お前はどうなされます。

伊左。飛脚を頼んで、一時も早う金を揚屋へ渡したい。それから川口屋に後を頼む。その上の分別ぢや。

久古。京へお戻りなされますか。

伊左。京へ戻るか。この儘ここにゐるか。娘を連れて桑名へ行くか。また一人して行方も知らず旅立つか。とんと今ては分からぬ。兎にも角にも、俺はまた道を違へた。ま一度道らしい道へ戻るまでは、一足も踏み出しはならぬ。

河内。されば久古さん、行て參りませうか。

久古。心得た。

(河内、久古、おせきを連れて行きかける)

伊左。(後より娘に聲をかける)おせき。新町へ入り二町程行き、左手に扇の書いた暖簾のある格子が、母の夕霧が死んだ所ぢや。回向して通れ。

娘。あい。

伊左。あの方へ行きたりとも、難波津といふ傾城と物言ふな。一つ座敷にもゐたらば聞かぬぞ。

娘。あい。

伊左。久しう置きはせぬ。おつ附け取戻す程に辛抱しや

娘。あい。

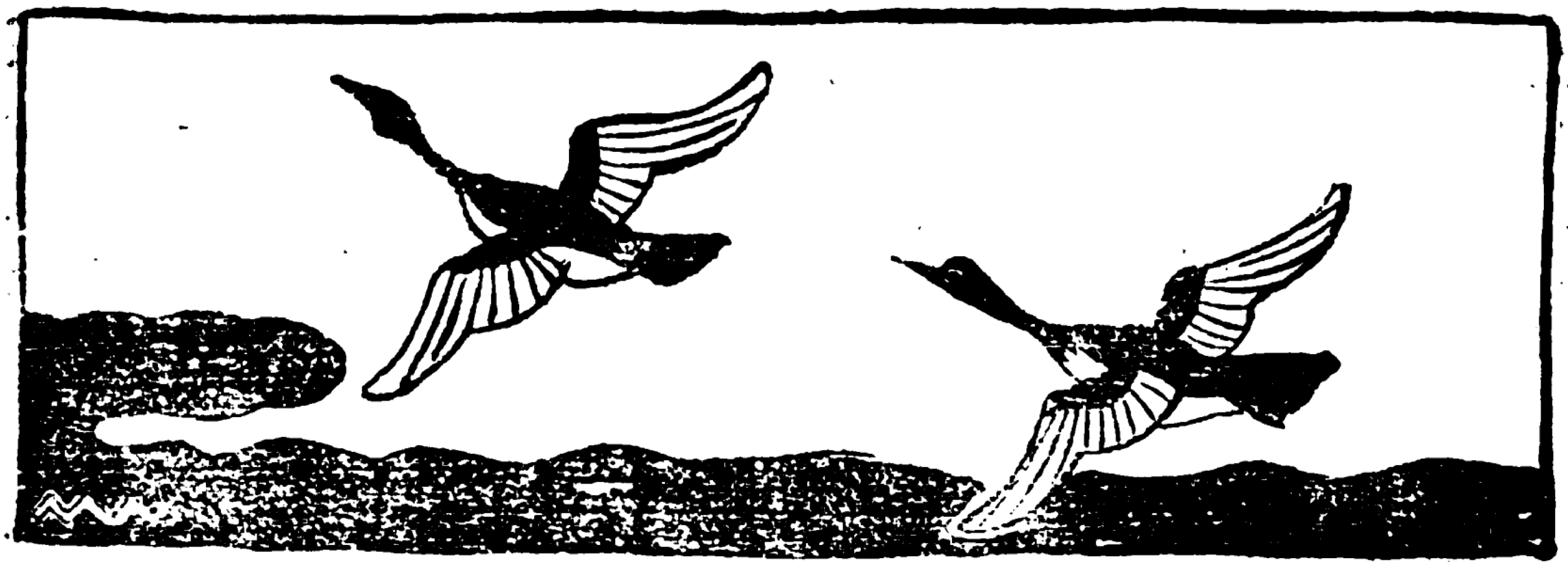
河内。さらば。

久古。さらば。

(三人去る。伊左衛門、一人殘り、毛氈の上にくづをれゐて、空を仰ぎ、吐息をつく。ふとまろびゐる大鼓に目をつけ、物狂ほしげにそを掻い抱きて、急調に打つ。日かげる)

——幕——

(近松作『夕霧七年忌』に據る)



戯曲

放火

——三幕——

長田秀雄

人物

平井信敬　老教育家。

同　あきみ　その妻。

同　敬三　その子。

同　ちよ子　その妻。

幸田静代　おきみの姪。

内藤正一郎　千代子の父。

同　おあい　その妻。

岸川静人　敬三の友人。

足立福三郎　教育時報記者。

その他下女小使など

時——現代

場所——東京の静かな街。

第壹幕

平井信敬の家。三月始めの晴れた午後である。

右手は八疊の茶の間。その右は臺所女中部屋に通ふやうになつてゐて、障子が閉め切つてある。右手寄りに長火鉢と茶簞笥とがある。茶の間の奥に、六疊の部屋がある。この二室の境は唐紙で劃るやうになつてゐる。奥の六疊の正面は緣がは。閉め切られたガラス障子から庭がみえる。やや遠く赤土の崖の上に一木立に取圍まれた新築の中學校が日に光つてゐる。

茶の間の右手は、床の間と、押入れになつてゐる。左手には玄關から、眞直の廊下の通ひがピチンと閉めてある。

茶の間の左手は十疊の奥深い客間。唐紙で茶の間と劃る。その正面は玄關からの廊下に出るやうになつてゐる。客間の左手は庭てある。

客間と奥の間とに挾まれて、茶の間に降りるやうになつた正面向きの二階の階子がある。丁度觀客席からは、その階子が舞臺を眞中から二つに劃つてゐるやうに見える。二階には老主人信敬の居間がある。右手六疊の奥の間には、主人の病妻おきみが、臥せつてゐる。おきみは心臟が惡いので、もう十年以上からうして寢てゐるのである。その枕元に靜代が坐つてゐる。新聞だの藥瓶だのが置いてある。少さな火鉢がある。

おきみ。（戸外の日影をみながら、しみじみと）もう春だわねえ。靜ちやん。こんなに暖かいから、御覽。（庭の方を指して）櫻がもう蕾を持つて來たよ。

靜代。でも何だか暖か過ぎますわ。どうしたんでせう。私頬つぺたがぽつぽと熱つて仕方がありませんの。

おきみ。急に陽氣が替つたんで逆血たんだよ。歯は痛まないかい。

靜代。えゝ、今年はまだ一度も痛まないわ。でも此れから先きがどうだかと思つて。（口をすぼめて呼吸をちらと吸ふ。）

おきみ。併し何と云つても、私は春の時候が一番好きだよ。かうやつて寢てゐても、氣が浮々するからねえ。

靜代。そりやさうね。ですけれど今年は特別だわ。伯父さんの學校は建つし、敬三さんはこつちへ歸つていらつしやるし、いい事だらけなんですもの。

おきみ。（つゝましやかに笑ふ。）ほんとにいゝ年だね。でも

私には今日敬三が歸つて來ると云ふ事が、何だか本當に思へないよ。

靜代。でも先刻電報が來たぢやありませんか。今日二時十分に新橋に着くつて。

おきみ。そりやさうだが（間）ねえ。靜ちやん。此間送つて來た寫眞てみると、敬三は大相勿體らしくなつたぢやないか。私はなんだかあの卑弱な子が、あんなになつたかと思ふと、變な心持がして仕樣がないよ。

靜代。だつて、敬三さんだつて、もう三十ぢやありませんか。それに學校の先生なんかしていらつしやると自然にさうなるわ。

おきみ。髯なんか生やして。あの寫眞ぢや、まるでお父さんの若い時だよ。

靜代。まつたくね。段々伯父さんに似ていらつしやるわ。

おきみ。（短い間を置いて）靜ちやん。御苦勞だけれど、鳥渡あの寫眞を出しておくれな。慥か用箪笥の抽斗にしまつて置いたから。

靜代。はい。（立つて、部屋の隅の用箪笥を開けて、寫眞と老眼鏡を持つてくる。）序に眼鏡も持つて來ましたよ。

おきみ。あゝ有難う。（嬉しさうに眼鏡をかけて寫眞を凝然と見つめる。）どうだろう。この肩のいかつい事は。靜ちやん。敬三は志願兵に行つて來てから、急に身體ががツシリして來たね。

靜代。（火鉢にあたりながら、伯母に頬を擦りつけるやうにして、寫眞を覗く。）さうね。

おきみ。何だか大さう險が出て來たやうだよ。

靜代。顏に威がついて來たんだわ。でも眼なんか矢張元の儘ぢやありませんか。

おきみ。（間を置いて）やつぱり前見たやうに、沈默してゐるだろうかねえ。なんぼ男だつて、も少しは愛嬌がなくつちやね。

靜代、でも男は默つてゐる方が品があつていいわ。あんまり如才のない人は何だか輕薄らしくつて厭ですよ。

おきみ。（間。しみじみと）かうやつて敬三が大きくなつたのを見ると、私は何だかし嬉いやうな遣瀬ないやうな、何とも云へない心持がしてならないよ。靜ちやんなんか、まだ若いから何とも思ふまいけれど、世の中と云ふ者は全く變なもんだよ。私はね、あの子を生みさえしなければ、こんな身體にはならなかつたんだよ。

靜代。まあ、どうして。

おきみ。こんな事を云ふと、あの子も氣にするだろうと思ふから、私はこれまで誰にも云はなかつたんだけれど……私はあの子を生んだ後で烈い產褥熱を罹らつてね、それから心臟が惡くなつたんだよ。

靜代。（默つて伯母を見つめてゐる。）——

おきみ。愚痴つぽいやうだがね、靜ちやん。私はあの子の事を考へると、時々何だかあの子が怕いやうな遣瀨ない心持になるよ。

沈　默。

靜代。でも、伯母さん。そりや敬三さんの罪ぢやありませんわ。

おきみ。（咳歎を吐いて）そりやあの子の知つた事ぢやないけれどもねえ……

臺所の障子を開けて若い下女が顔を出す。

下女。御孃さま。お花を買つて參りました。（白梅の枝を靜代に渡す。）

靜代。あゝ有難う。（花を受取る。下女去る。伯母に向つて）いい枝でせう。敬三さんがお着きになるまでにこれをお坐敷に生けときませう。あんまり殺風景ですから。

おきみ。ぢや此處で生けたらいいでせう。

靜代。でも散らかるわ。

おきみ。かまわないよ。後で掃除させるから。

靜代。さうね。伯母さんがお寂しいといけないから、ぢやさうしませう。（立つて坐敷の方へゆく）

おきみはしげしげと敬三の寫眞を見てゐる。靜代は重さうに銅の水盤を提げて六疊へ歸つてくる。

靜代。（臺所の方に向いて）島や、あの花鋏と水差しを持つてきておくれ。

下女。（障子の陰で）はい。

下女は花鋏と水差しを持つて出て來て、靜代に渡して去る。

靜代。(花を生けながら)此節は池の坊ばつかりかね。

おきみ。私たちの習つた時分には古流が一番流行つたがねえ。

靜代。古流も品がよくつて宜いわ。

沈　默。

おきみ。汝の祖父さんが遊藝がお好きだつたんでね、私や汝のお母さんは、まだ實家に居た時分、そりや八ヶ間敷く云はれたもんだよ。汝の祖父さんは生花もお上手だつたよ。

靜代。さうですか。やつぱり古流でしたの。

おきみ。あゝ。(間を置いて)汝への祖父さんは全く洒落た方だつたねえ。

靜代。(間)ねえ、伯母さん。敬三さんと千代子さんはもう新橋にお着きなすつたでせうか。

おきみ。(枕元の時計を見て)まだだよ。いま二時を打つたばかりだもの。ほんとに靜ちやんは性急たね。(笑ふ)

靜代。(同じく時計を見て)丁度二時ね。ぢやもう十分でお着きなさるわ。

遠くで柱時計が二時を打つ。

おきみ。汝そんなに會ひたいかい。

靜代。そりや會いたいわ。三年振りなんですもの。

おきみ。靜ちやん。敬三は此頃汝の處へ手紙をよこしたかい。

靜代。えゝ、一昨々日も頂いたわ。

おきみ。(間を置いて)さうかい。お千代との間の事は、なんとも書いてなかつたかい。

靜代。いゝえ、別に――

おきみ。(獨言のやうに)夫婦ともそろつて筆不精だもんだから、時たま手紙をよこしても、ほんのこれつばかり(手眞似をする)しか、書いて來ないんだもの。あつちで何んな工合に暮らしてるんだか、さつぱり分りやしない。

靜代。でも此頃は何だか、うまく行つてるやうよ。

おきみ。何うだか。(間)二人とも、あんな丈夫な身體をしてゐて、まだ子供が出來ない處を見ると、やつ

ぱり仲がよくないんだよ。

静代。（間を置いて）子供がお出來なさらないから、仲が惡いとは云へないと私思ふわ

おきみ。ねえ、靜ちやん。でも前からあの通りなんだからねえ。世の中つて云ふ物は、うまく行かないもんだねえ。

静代。そりや敬三さんと千代さんとは、まるつきり氣象が違ひますから、仲がいいとは云へないでせうがさう氣にし出したら、世間の夫婦は、大概仲がよくないと云ふ事になつてしまふわ。

おきみ。でも、私は二人　行末の事を考へると、苦勞になつてねえ。それに――

靜代。伯母さんは神經質だわねえ。

おきみ。まあ、御聽きよ。靜ちやん。それにね、敬三がどうしても厭だつて云つたのに、無理にお父つさんがお千代をお貰ひなすつたんだからねえ。あんな寡言な人間だから、敬三は何とも云やしないけれどやつぱりお腹の中ぢや面白くはないわね。

靜代。（しみじみとした顔付できいてゐる）・・・・

おきみ。私には敬三のお腹の中が、よく分つてゐるやうな氣がするよ。

靜代。千代子さんもお可愛さうだわねえ。

おきみ。（涙を浮べて）世の中と云ふものは、誰が善いんだか、誰が惡いんだか分らないで、そのくせいろんな紛糾が出來て來るもんだねえ。

靜代。まつたくね。

おきみ。やうやくあの學校が出來上つて、重荷を降ろしたと思つたら、何時の間にか、またこんな心配が湧いて出てるんだものね――生きてる内は、苦勞の斷えつこはないよ。

靜代。（間を置いて意味ありげに）誰にも苦勞はあるわ。

おきみ。（獨語のやうに）今から考へると、やつぱりあの時、靜ちやんを貰つて置けばよかつたと思ふよ。

靜代。あら、伯母さん。・・・・

おきみ。私はさうしやうと思つたんだけれど。何しろ伯父さんがねえ。あの通りの氣象だろう。あの時分

はもう學校を建てたいて、夢中だつたんだからねえ。
靜代。もう後生ですから、伯母さん。その話は廢して頂戴。（涙を拭く。）
おきみ。そりやお千代を貰はなけりや、内藤て金を出して呉れなかつたかも知れないけれど、もうあの前に半分以上寄附金も集まつていたんだしね、どうか工面すりや他の寄附金だけて出來ない事はなかつたんだからねえ。
靜代。ても伯父さんの身になりや、無理もないわ。一年懸つてやうやく出來たんですもの。なるたけ立派にしたい筈だわ。
おきみ。それと云ふのも私は、こんな病身だから心細いし、ねそれに丸て自分の子のやうにして育てた汝だから、私は何うしても手放したくないんだよ。
靜代。だから何處にも行かないわ、私。
おきみ。そんな馬鹿な事が出來るもんてすか。
靜代。あら、どうして。（涙をこぼして）私決してお嫁になんぞ行くまいと心に誓つたんてすもの。

おきみ。（しげしげと靜代を見ながら）困るねえ。そんな駄々をこねちや。（間を置いて）汝を立派な處へ片付けなくつちや、死なつた汝のお父さんやお母さんに對して義理が立たないからねえ。
靜代。（消え入るやうに）そんな事はないわ。
沈　默。
おきみ。（長い間玻璃戸の外に見える新築の中學校を眺めてゐたが）あの學校ぢやお父さんも何だが、私たちもいろんな苦勞をしたねえ。
靜代。（呆やり學校の方を眺めてゐたが、突然蓮葉な聲で）あら、お花を生けかけて、すつかり話に夢中になつてしまつて。（自から憫むやうに）馬鹿だわねえ、私は――（花を生けはじめる。）
おきみ。（時計を見て）おや、もう二時半だよ。
靜代。ぢやそろそろ家へお着きなさるわ。急いで生けてしまはなくつちや。
おきみ。そりやさうとお父さんは、何をしていらつしやるだろう。

靜代。お居間で何か一生懸命に書物をしていらしつてよ。

おきみ。さうかい。（靜代が花を生けてしまふのを默つて見てゐる。）

靜代。（漸く生けてしまつて、手を拭きながら、微笑する。）久しく梅を生けなかつたんで、思ふやうに行かないわ。

おきみ。（枝振を眺めながら）よく生かつてゐますよ。池の坊もいいねえ、かうやつて見ると。

靜代。もとはやつぱり古流から出たんですつてねえ。

（かう云つてしまつて、あたりに散かつてゐる物を取かたづける。）

おやおや、すつかり伯母さんの枕元を散かしてしまつていまこれをお坐敷へ持つていつてから掃きますからね。（水盤を持上げやうとする）

主人信敬が二階から降りてくる。

信敬。敬三はまだ來ないかい。

靜代。（生花の蔭から笑つて）えゝ。まだいらつしやいませんよ。（水盤を重さうに持つて坐敷に行く。）

信敬。（その後姿を見送りながら）どうしたのだらう。もう着きさうなものだが‥‥

おきみ。途中で何か間違ひでもあつたんぢやないでせうか。

信敬。そんな事もあるまい。

靜代は水盤を座敷の床の間に据えて、と見かうみしてゐる。突然何か聽きつけた樣子でパタパタ小走りに玄關の方へ出てゆく。やがて氣まりの惡さうな顏付で、一葉の名刺を持つて、歸つて來てその名刺を信敬に差出す。

靜代。伯父さんこの方がお眼にかゝりたいつていらつしやいましたよ。

信敬。誰だ。（名刺を見て）教育時報記者‥‥坐敷へ通して置きなさい。

靜代默つて玄關へ行く。やがて洋裝の若い男が座敷へ現はれる。靜代は座布團を進めて、茶の間から火を取つて行つて、火鉢へいれる。信敬は座敷へ行く。

靜代。（茶を入れながら、茶の間からおきみに話しかける）伯母さん。私いまほんとに氣まりが惡かつたわ。

おきみ。どうして。

靜代。あのね、いまお坐敷へ水盤を持つていつて、床の間に置くと、誰だか「御免」つて云ふ聲がするんでせう。そら敬三さんがお出なすつたと思つて、驅け出して玄關へ行つて見ると、今のお客が眞面目な顏をして立つてゐるんですもの。顏から火が出るやうだつたわ。

おきみ。汝は狼狽者だねえ。(笑ふ。)

靜代はお茶と菓子とを座敷へ運んで、今度は臺所から箒を持つて來る。

靜代。伯母さん。鳥渡御免なさいよ。(かう云つて、枕元を靜かに掃く。)

おきみ。お客はどんな人だい。

靜代。雜誌の記者よ。何か學校の事で來たらしいわ。

おきみ。へえ……

靜代。(掃いてしまつて)さうさう。お着きなさる前に夜具を出しとかなきや。

おきみ、あゝ、あの去年の冬綿を入れ替えたのでいいよ。

靜代。さうですか。(臺所へ向つて)島や。鳥渡手を借しておくれ。奥の長持を開けるのだから。

女中が出てくる。二人はおきみの寢てゐる室の左手の通りから去る。おきみはやがて枕元の新聞を擴げて見てゐる。

座敷では記者と信敬とが話してゐる。

記者。始めてお眼にかゝります。只今名刺を差上げときましたが、私は教育時報の編輯を致して居ります者で……

信敬。はあ、なるほど。私が平井です。

記者。お忙がしい處にお邪魔を致しまして濟みませんが……

信敬。いや、丁度今用事が濟んだ處ですから……

記者。あゝ左樣で御座いますか。(煙草に火を點ける。)

信敬。教育時報と云ふと……慥か山村君の雜誌でしたな。

記者。はあ、左樣で御座います。

信敬。山村君は相かはらずお元氣ですか。雜誌は毎號頂戴するが、久しくお眼にかゝらんから……

記者。はあ、相かはらず元氣て御座います。今日は實は主筆が伺ふ筈て御座いましたが、少し差支へが御座いまして伺へませんので、私が代理に參りましたのですが……

信敬。あゝさうてすか。ようこそ——

記者。尙主筆からもよろしく申上げてくれと申す事て御座いました。

信敬。はあ、（輕く頭を低げる。）

記者。今日の新聞て拜見しますと、いよ〳〵先生の明華中學の開校式もこの廿五日と、決定いたしたやうに出て居りますが、さぞ御多忙ていらつしやいませう。

信敬。や、どうも忙しいので閉口して居ります。それに授業を來月一日から始める事になつたので、何やかやら、皆仕事が一緒になつてしまつたやうな譯て……

記者。はゝあ——ごもつともて御座います。しますと今度入學をお許しなさる生徒は何人位の御豫定て御座いますか。

信敬。今度は一學年だけしか、募集しないのだから、四十名と決めました。何しろまだ創立卽下て、設備も整はんし、それに理想的の敎員が思ふやうにないので……

記者。なる程、はあ——

信敬。子息だけは、まあ今度姬路中學から、こつちへ呼寄せる事になりましたが……

記者。さうしますと御子息は何をお受持になりますのて——

信敬。あれは姬路ては修身と英語を持つてゐたのですが、こつちへ參りましたら、一つ舍監をやらせて、授業の方は英語だけさせるつもりです。御存じの通り、私の學校は生徒を全部寄宿させて、家庭や社會の惡影響を受けさせん主義てすから、どうしても確然した舍監が必要なのです。それに生徒と一緒に居て、日常生活を硏究したらば、後來當人の爲めにもなるだらうと思ふので……

記者。なる程。すると修身は何人がお受持になりますので御座います。

信敬、誰か他に適當な人でも見付かつたら、と思ふてゐましたが、さし當り適任者がないので……今の處では私が受持つ事になつて居ります。貴下方も知つて居らるゝ通り、今は思想界の混亂時代だから、まだ頭腦の固まらない内に餘程注意して導いてやらないと、邪道には入つてしまうから——

記者。……御子息さんはもう御出京になりましたので御座いますか。

信敬。いや——實は今日此方へ來る事になつて居ります。もうそろそろ着く筈ですが。

記者。あゝ、左樣で御座いますか。入學希望者は、只今の處、何名くらゐで御座いませう。もしお差支へが御座いませんなら、伺ひたいので御座いますが。

信敬。可成多いやうです。この七日に締切つてしまう積りですが、今の處でもう百四十名ばかりになつて居ります。

記者。はゝあ、さうしますと、入學試驗はどう云ふ方法でなさろうとお思ひで御座いますか。

信敬。一體は入學試驗なぞしたくないのですが、あまり希望者が多いので、已むを得ずやる事になつたのです。そこで學科の試驗よりも人格試驗を主にする方針にして見ました。

記者。人格試驗と申しますと——

信敬。まあ人によつて、いろいろ方法もありませうが私の學校では、五人ばかりの教員が手分けをして、一人宛教室に受驗者を呼び込んで、いろんな問題を設けて、答へさせて見るつもりです。

記者。はあ、なる程。

玄關に二三臺の俥が著いた氣色がして、急に賑やかになる。靜代の聲で「まあ、隨分遲かつたわねえ。」など云ふのがきこゑる。ゴダゴダ足音が奥の方へ行くと、おきみの寢てゐる六疊の左側の通りが開いて、靜代が顔を出す。

靜代。（快活な聲で）伯母さん。いらしつてよ。（につこり笑ふ。）

續いて敬三が洋裝で、千代子をつれては入つてくる。

敬三。お母さん。暫くでした。（寢口ながら嬉しさうに挨拶する。）

おきみ。（半分起き上るやうにして）まあ、暫く――よく歸つてきたねえ。（急に涙ぐむ）

千代子。（蒼ざめた顔付になつてゐる。）お母さま。まあ、ほんとに御無沙汰ばかり致しまして……

おきみ。まあ、お千代……いいえ、此方こそ。汝も壯健で――あんまり汝たちが遲いので、どんなに待つたか知れやしないよ。

敬三。お母さん。まあ臥ていらつしやい。そんなに動いて、もしさわると困るから……

静代。ほんとですよ。伯母さん、また動氣がしますよ。さあ、（かう云つておきみを助けて臥せる。）

おきみ。（云ふなりになつて臥る。）さうかい。ぢや臥て居りますよ……まあ、私はこの頃涙もろくなつてねえ。

敬三。はゝゝゝお母さんは昔から涙もろかつたぢやありませんか。（ふと）時にお父さんは。

静代。いま鳥渡お客さまが――もう直いらしつてよ。

座敷では敬三が着いたのを覺つて

記者。（歸り仕度をしながら）それから實は今日伺ひましたのは、お多忙中に恐れ入りますが、明華中學の設立に付いて、何か先生の御意見を雜誌に書いて頂きたいと存じまして……

信敬。なる程。

記者。それで突然上りましたので御座いますが……如何で御座いませう。願へませうか。

信敬。はあ（考へる。）私も今は實際いろんな用事があるので……極短い物でよろしければ書けませうが……何時頃までにお送りすればいいのですか。

記者。はあ、もう短い物で結構で御座います。この十日に原稿全部締切つてしまふつもりで御座いますから――

信敬。あゝ、さうですか。ぢや書いて見ませう。

記者。ではよろしくお願ひいたします。それから今日のお談の一部を雜誌に掲載したいと思ひますが、よろしう御座いませうか。

信敬。別に差支へはありません。

記者。あゝ、左様で御座いますか。では失禮いたしませう。お取込中に大變お邪魔いたしました。(立上る。)

信敬。いや、どうしまして。では山村君にお會てしたらよろしくおつしやつて下さい。

記者。はあ承知いたしました。(去る。)

信敬は之れを玄關に送つて出て、座敷から茶の間を通つておきみの寢てゐる部屋へ行く。

靜代。(目敏く信敬をみとめて)伯父さん。敬三さんがお着きなさいましたよ。

信敬。やあ、歸つて來たな。

敬三。あ、お父さん。暫くで御座いました。お變りも御座いませんで——

千代子。お父さま、(挨拶する。)

信敬。千代子か、併しよく早く歸つて來られた。俺も姫路の方の辭職が許可になるかどうかと思つて心配してゐたよ。

敬三。何しろ向ふも教員が少ないので、校長が餘程困つたやうでしたが、丁度いゝ鹽梅に、私の同期生が一人京都から來てくれる事になりましたもんですから、漸く許してくれました。

信敬。そりや都合がよかつた。こつちも何しろ俺一人だから、實に忙がしくて困つたよ。併しまあいゝ工合に教員も揃つたし大概準備も整つたから、四月一日からは授業が始められさうだよ。

敬三、そりや結構です。

靜代が茶を入れる。

おきみ。そりや此間内のお父さんのお忙がしさと云つたら、傍で見てゐてもお氣の毒なやうだつたよ。

敬三。さうでしたらう。(微笑して)これからは一つ私が代理になつて、うんと働きませう。

おきみ。ほんとにさうしておくれよ。あゝ久し振で家の内が賑やかになつたねえ。

靜代。千代子さん。あなた何だかお顏の色が、よくないやうよ。何うかなすつたんぢやなくつて。

衆が千代子の顏を見る。

おきみ。ほんにさう云へば、少しやつれてるやうだよ
心持ても惡くはないかい。

千代子。いゝえ、別になんともないんですが‥‥

（かう云つて險のある眼で敬三の顔を見る。）

信敬。汽車て長旅をしたから、その疲れだらう。

おきみ。それならいいがね、このお目出度い内に汝が罹ひでもすると、困るからねえ。

敬三。（滋平と千代子を見つめてゐたが、間を置いて）どうだい暫く失禮して休んだら――あんまり無理をして、あとて苦しんぢやつまらないから‥‥

千代子。（默つてゐたが、少時して）さつきこちらへ參りましたとき、何だかグラグラ致しましたが、もうすつかり快くなりましたから、宜しうご座います。

沈默。

敬三。それならいいが‥‥（おきみに向つて）實はあつちに居る内から、少し頭腦が惡くなつてゐたもんですから‥‥

おきみ。そりや困るねえ。

下女。（通ひから顔を出して）あのお客さまのお荷物は、すつかりあちらのお座敷へ運んて置きましたから‥‥

靜代。いやだ。お客さまだつて（笑ふ。）島や、これからは皆家の方におなりなさるんだよ。

下女。あら、左樣て御座いますか。（赤い顔をして去る。）

おきみ。荷物は皆持つてお出でかい。

敬三。いゝえ、ほんの手廻りの物だけ持つて來ましたあとは通運て來る事になつてゐます。

信敬。や、さうだ。忘れてゐた。敬三。汝はまだ學校を見ないんだな。（硝子障子越しに學校を指さして）あれだ。あすこに高い處に新築の校舍が見えるだらう。

敬三。（伸び上るやうにして）あれがさうですか。（間。）なかなか立派に出來ましたね。

信敬。まあお父さんとしては可成に出來たと思ふが、

おきみ。あれだけにするにはなかなか一通りのお金の入りかたてはなかつたよ。

敬三。さうてせうとも――それに隨分地所も廣いやうぢやありませんか。

信敬。どうせ汝が歸つて來ると思つたから、あんまり委しく手紙には書いてやらなかつたが、地面が丁度二萬坪ばかりある。

敬三。ははあ。

信敬。寄宿と校舍と併せて、建坪が九百五十坪からあるからなあ。

敬三。ははあ、寄宿舍は此處からは見えませんなあ、

信敬。寄宿は丁度校舍の後になつてゐるから、此處からは見へない。それ、あの中央の所に露臺が見えるだろう。

敬三。えゝ、下が玄關になつてゐますね。

信敬。あゝ、あれが講堂だ。

敬三。あゝ、さうですか。

信敬。まあ、何れ明日でも疲れが癒つたら、つれて行つて見せるが、あの位の講堂は鳥渡他にはないよ。

千代子は蒼い顔をして信敬の話を聞いてゐたが、とうとう耐え切れなくなつて、突伏してしまふ。

靜代。あら千代子さんどうなすつたの。（走けよつて肩に手をかける。）

衆は驚いてそれを見守もてゐる。

千代子。（突伏したまゝ、靜代の手をはらひのけようとする。）・・・・

敬三。おい、千代子。どうした。

靜代。まあ靜かにしていらつしやいよ。千代子さん。

千代子。（やゝ甲走つた聲で）どうかかまわないで置いて下さい。もうすぐよくなりますから。

敬三。（言譯をするやうに衆に向つて）汽車に乘つたり何んかして、急に腦を使つたために少し興奮し過ぎたのですよ。

おきみ。（半分起き上つて。）まあ、困つた事が出來たねえ村田さんに來て頂かうか。

靜代。さうね。ぢや鳥やをやりませうか。

千代子。いいえ、お醫者に來て頂く程の事ぢやないんですよ。たゞ鳥渡眩暈がしただけなのですから――

おきみ。でも大丈夫かい。何ならすぐ其處なんだから・・・・

敬三。大丈夫でせう。（おきみを見ながら）よく起るのです

から――それに却ッて逆らはないはうがいゝので
す。

（靜代が寳丹と水とを持つて來る。）

靜代。さあ、千代子さん。寳丹を上げませう。

千代子。（起き上つて寳丹を飲む。蒼い頬に涙が流れてゐる。）あ
ゝ――

信敬。（むづかしい顔付で千代子を眺めてゐたが）どうだ。お千
代。もういゝかい。

千代子。（靜代に）有難う。（信敬に）えゝもう癒くなりまし
た。（亂れた鬢を掻き上げる。）

敬三。やつぱり休んだ方がいゝだらう。御免かうむつ
て。

千代子。……

靜代。さうしませう。ね、千代子さん。また起るとい
けませんから。（千代子を伴れて立上る。）伯母さん。お二
階の六疊がいゝでせう。

おきみ。あゝ、あすこが靜かでいゝだらう。さあ、お
千代。遠慮しないでお休み。

千代子。有難う御座います。ぢや失禮しますから。お
父さんお母さん。御免下さいまし。（會釋して二階に上
つてゆく。）

沈　默。

おきみ。ねえ、敬三、何時頃から、あんなになつたん
だい。

敬三。一昨年の春からです。醫者に訊くとヒステリー
だつて云ふんですが……困つたもんです。

信敬。姫路では度々起つたのか。

敬三。春と秋には必ず起りましたよ。去年の春の時な
んか、刄物を持ち出して自殺するつて騷ぐんですも
の――私も一方ならず心配しましたよ。

おきみ。まああぶない……

信敬。何うして自殺しやうと云ふ氣になつたのだい。

敬三。いえ、一度あんまり癒りませんから、汝の病氣
は我儘から起るのだと云つて、私が非道く叱つたの
です。さうすると、其晩、床の内で頻りに泣いて居ま
したが、やがて何か一生懸命に書き出しましたから、

おや、今時分變な事をすると思つて、私は眠つた振をしてゐますと、その手紙を書いてしまつて、床（とこ）の下から西洋剃刀を出したのです。

おきみ。まあ……

敬三、私がすぐ取上げてしまいましたから、よかつたやうなものの、あんな驚いた事はありませんでしたよ。

おきみ。……

敬三。それが可笑しいのです。癒つてから訊いて見ると、自分でもどう云ふつもりで死ぬ氣になつたか分らないのですね。ところがその手紙を後で讀んで見ますと、何でも私が千代子を厭（きら）つて虐待するから、死なゝければならないと云ふやうな文句が書いてありましたよ。

おきみ。その手紙は誰に宛てゝあつたのだい。

敬三。手紙ですか。實家（さと）へ出すつもりだつたのです。

おきみ。(間を置いて) そんな危險（あぶな）い事をちよい〳〵やられるやうでは此れから先きも心配だねえ。

沈　默。

二階から靜代が微笑を含んで靜かに降りてくる。

——幕——

第二幕

第壹幕と同じ光景

明華中學校の開校式の濟んだ後のある夜の事である。各室には電燈が點（つ）いてゐる。

六疊にはやはりおきみが臥せつてゐる。その枕元に靜代が突伏して泣いてゐる。

十疊の客間には敬三と、その舊友岸川靜人とが坐つて話してゐる林檎が白い西洋皿に出してある。二人とも。今夕飯を食べたのでやゝ微醉を帶びてゐる。兩室の對話は同時に始まる。

おきみ。困るねえ、ほんとに。

靜代。でも、伯母さん。私は何も千代子さんに恨まれるやうな事をした覺はないんですもの……

おきみ。そりやあちやんと私に分つて居ますよ。何と云つても病人ぢやないか。子供ぢやなし、一々、汝（おまへ）

お千代の言ふ事を氣にしてゐたら、それこそきりがないよ。
靜代。えゝ、そりやさうですけれど……
おきみ。またお千代には、私から何時か氣嫌のいい時によくさう云つておくからね、
靜代。（涙をふきながら）えゝ……
おきみ。此處で汝が我慢して呉れないと、また家の内に波風が起つてくるからね。
靜代。（急にこみ上げてくる。）えゝ、そりや我慢するにはしますが……私生れてからまだ誰にもあんな事を云はれた事はないんですもの……（泣く。）自分の家もないくせに人の家に厄介になつてゐながら我儘をするなんて……
おきみ。だからさ、それがお千代の病氣ぢやないか。
靜代。でも、私は御病氣だと思ふから、毎日いろんな皮肉な事を仰しやるけれど、凝乎と耐へてゐるのに……あんまり非道いんですもの。
おきみ。（間を置いて）靜ちやん。お千代は何處に居るの

靜代。お二階の六疊で手紙を書いていらつしやるわ。
おきみ。（しんみりと）何を云つても病人だからねえ……靜ちやん。またお千代が降りて來たとき、汝が此處で泣いてるのが、見えたりなんかすると面倒だから唐紙をしめてお置き。
靜代。はい。（立つて唐紙をしめる。）

客間の方では

靜人。姫路と東京とぢや、隨分氣候が違ふだろうね。
敬三。あすこは熱い處だから、夏は閉口だよ。
靜人。併し景色はいいだらう。第一名所舊跡が澤山あるぢやないか。須磨だの、明石だの。
敬三。だから君たちのやうな歴史家にはいいだろうが、我々は矢張東京が一番居心地がいいね。
靜人。ぢや君の後釜には、足川が行つたんだね。
敬三。先生丁度京都でブラブラして居たから。……
靜人。あいつは人間としては、實に圓滿ないい男だがどう云ふものか、尻が落つかないね。始終流浪してゐるぢやないか。

敬三。氣の毒な男だよ。あんまり好人物なので生徒に馬鹿にされるんでね。
靜人。學校に居た時分は、よく我々もあいつを玩具にしたつけ。あれからもうやがて一昔になるよ。
敬三。處が可笑しな事には、あの時分我々が先生に「だぼ鯊」と云ふ仇名を付けてゐたろう。
靜人。さうさう。
敬三。それがね、何處の學校へ行つても、やつぱり生徒から「だぼ鯊」と云ふ仇名を頂戴するんださうだ。先生こぼし拔いてゐたよ。
靜人。はは……いや實際よく似てゐるからな。（敬三も笑ふ。）あいつは妻君は。
敬三。妻君どころか、子供が三人あるよ。
靜人。へえ、もう三人のお父さんか。（間。）お父さんと云へば君はまだかい。
敬三。あゝまた一人も出來ない。
靜人。さう云へば奥さんは先刻鳥渡見えたが、何だか顏色が冴えないやうぢやないか。
敬三。實は少し加減が惡いんでね。
靜人。それはいけない。何處が惡いのだい。
敬三。さう大した事でもないが、腦が少し惡いので困つてゐるよ。
靜人。もう餘程長く惡いのかい。
敬三。一昨年あたりからだ。（間。）全く人間は一人の方がいいね。家内なんか決して持つものぢやないよ。
靜人。そりや君、我々の事だよ。君なんか順境に居て別に不自由はないのだから、そんな事を云ふと罰が當るよ。
敬三。（間を置いて）ところがさうでない。人間の幸不幸は外から見て分るものではないよ。
靜人。併し君、何と云つたつて、世の中に生活難ほど辛いものはないからね。君なんか、それを知らないだけでも、幸だと思はなけりやならないよ。
敬三。生活難の苦しい事は僕にも分る。けれどもそれには改善の途がある。少くとも希望がある。ところ

が僕にはそれがないのだから困る。

靜人。そんな事があるものか。つまり君なんかの生活は改善の必要がない程幸福なのさ。

敬三。いや決してさうではない。僕の生活は改善する事の出來ない生活なのだよ。もし僕が改めやうとすれば、すぐ恐ろしい一家の破滅が來る。僕にはそれが分つてゐるから苦しいよ。

靜人。僕にはどうしても君の云ふ事は分らないが……

敬三。とに角、僕の家ではいろんな眼に見えない繩て縛られてゐる。僕は自由な一人の人間ではない。これが一番僕に取つては苦しい。そこで僕がその繩を切つてしまはうとすると、今云つたとほり、すぐ一家が破滅してしまふ。だから僕はやはり苦しみながら此儘にしてゐなければならない。

靜人。さうかなあ。君にはまた君の事情があるだらうが……僕にはどうしてもさうは思へないがなあ。君の生活に苦痛があらうなどとは——

敬三。境遇が違つてくると、書生の時のやうに、互に理解し合ふ事が出來なくなるね。

靜人。そりやさうさ。併し我々の事を考へて見玉へ。飯を食ふために精神も肉體も磨りへらしてゐるのだぜ、實際の話が。

敬三。そりや苦痛の性質が違ふから、比較は出來ないよ。併し、かう云ふ事は云へる。食物のない人は餓死するまで死なゝいが、かう云ふ苦痛を持つ人は往々にして自殺する事があると云ふ事は——

靜人。けれども餓死するまでの苦痛は、自殺する人の知らない處だらう。

敬三、まあ併しお互にもう廢さう。あんまり面白い議論でもないからね。

靜人。けれども考へて見ると書生時代は氣樂だつたねえ。こんな事を云ひ合つて、日を迭つてゐたのだから……

敬三。（間を置いて）君はまつたく變つてしまつたなあ。かうやつて話をして居ながら、僕にはどうしてもこれが昔の岸川君だ、とは思へない位だ。

靜人。(陰氣な笑方をして) これも生活難のお陰さ。中學校の歷史の教員をして、女房、子、のみならず兩親まで養はなけりやならないとなると、お恥かしい話だが、人間色氣も油氣もなくなつてしまふよ。

敬三。(間を置いて) 兎に角生きて行く爲めには我々はいろんな苦痛を課せられるものだね。

靜人。さうさ。併し僕は此頃時々、人生のほんたうの味は、この生活の苦痛の内にあるのぢやないかと思ふ事がある。

敬三。と云ふと……

靜人。一體我々の苦痛は、欲する處に達せられない不滿が無意識に或に意識的に我々を刺激するから起るのだと僕は思つてゐる。

敬三。それはさうに違ない。

靜人。ところが、その不滿があるが故に一面には張り合が出てくる。そこでもし少しも苦痛のない滿足の狀態に我々があるとしたらば、どうだらう。恐らく此位退屈な生活はあるまいぢやないか。

敬三。(間を置いて) 併し、もし君の云ふ欲する處即ち自分の滿足が、自分の最も親愛する人々の欲望と衝突するとしたらどうだらう。その人には永久に張合のない生活が殘るばかりぢやないか。

靜人。けれどもそれは空な理屈に過ぎない。人生は非常に複雜なものだから、さう單純に計算してしまふ事は出來ないよ。

敬三。勿論人生の複雜な事は僕も知つてゐる。併し今僕の云つた事は決して空な理屈ではない、人生を究極まで考へつめた場合だ。そこまで考へつめないと、どうも僕には安心して生活が出來ないから……

靜人。(ふと思付いて) 時にもう何時だらう。僕は八時に行かなければならない處がある。

敬三。(手を拍く) まだそんなに遲くはあるまい。

靜代が玄關の方の唐紙から現はれる。

靜代。何か御用。

敬三。鳥渡時計を見て來て下さい。

靜代。はい。(去る)

静人。大變お邪魔してしまつたね。
敬三。いや、開校式が濟んで學校の方が暇になつたから、いくら遊んで行つてもかまはないよ。

静代顔を出す。

静代。七時四十分で御座います。（去る。）
静人。ぢやもうそろそろ行かなくつちや。
敬三。何處へ行くんだい。
静人。いや、家内の叔父が出て來てゐるもんだから、鳥渡訪ねなけりやならないんだ。さつき電話で八時に訪ねる約束をしたから。では失禮しやう。
敬三。それぢや引止める譯には行かないね。打角久し振て會つたんだから、今夜はゆつくり話さうと思つたのに……
静人。いや、またその内に出かけて來るよ。それからさつきお願した事はよろしく頼むよ。
敬三。あゝ、多分いいだらうと思ふけれども、尙よく父親に話して御返事しやう。地理の方だと丁度一人缺員があるんだが……

静人。もし歴史の方が駄目なら、地理でもいいんだ。君の方が極まれば、すぐ辭表を出したいんだから。
敬三。たゞ俸給が君の望み通りにあげられるかどうかゞ分らないから、そこは考へてゐてくれ玉へ。
静人。あゝ、いゝよ。實際僕は今の學校に居るのは厭なのだから、宜しく頼むよ。ぢやさよなら、大變御馳走になつたね。
敬三。いや、何にもおかまひしないで……

静人は出て行く。敬三が送つて玄關に出る。静人の「やあ、さよなら。」と云ふ聲がきこえる。やがて敬三と静代とが客間には入つてくる。静代は水菓子の皿だの茶道具だのを片付ける。

敬三。（默つて静代の片付けるのを見てゐたが、やがて）静ちやん。
静代。なあに。（顔を上げて微笑する。）
敬三。また今日千代子と喧嘩したね。
静代。（怯えたやうに敬三を見ると、敬三が笑つてゐるので、急に赤くなつて）どうして私あんなに憤りぽいんでせう。自分でも惡い癖だと思ふんですけれど……
敬三。（間を置いて）病人だから仕方がないとは思ふが、

誰でもあゝ云ふ口のきゝ方をされると腹が立つよ。

靜代。（色氣を含んで）矢張私が惡いのよ。さつき伯母さんにもそれて叱られたわ。（俯向いてゐる。）

敬三。叱られた。何だつて――

靜代。（悲しいのを凝乎と耐えてゐる。）……

敬三。靜ちやん。何だつて叱られたんだい。

靜代。（默つてゐる。）……

敬三。（靜代の肩に手をかけて）え、靜ちやん。何を叱られたんだい云つて御覧。

靜代。（口惜しさうに急に泣き出す。）……

敬三。困るねえ。靜ちやんまでそんな風になつてしまつちや……（肩から手を放す。）

靜代。（泣きながら）でも、敬三さん。私は千代子さんに對して、何にも惡い事をした覺はないんですもの…

敬三。そりやチヤンと分つてゐるよ。だから何て叱られたんだつて聞くんぢやないか。

靜代。（嗚咽しながら）伯母さんは、私が千代子さんに何か云はれると、すぐ憤るからいけないつておつしやるんですけれど……私毎日隨分耐えてゐるんですよ。（また泣き出す。）

敬三。（默つてむづかしい顏をしてゐる。）……

靜代。でもやつぱり私が至らないから、こんな事になるんだわねえ。

沈默。

敬三。靜ちやん。千代子のために、厭な思をするのは決して靜ちやんばかりぢやないよ。僕を御覧。一生あいつと一緒に、暮らさなければならないんだからね。

靜代。……私はあなたが一番お氣の毒なやうに思つて――こんな事を云つて、もし惡かつたら、ゆるして頂戴よ。

敬三。靜ちやんにもさう見えるかい。

靜代。（小さな聲で）そりや分るわ。

敬三。此所の家では皆誰でもお父さんの犧牲にならなければならないんだから耐らない。よく考へてみると、僕なんかは決して自分の爲めに生きてゐるので

なくつて、お父さんの爲めに生きてゐるのだよ。僕がならうとも思はなかつた教育家にされて、お父つさんの都合のいゝ結婚をさせられて、そしてお父つさんの事業のためにこき使はれて、それで一生を終つてしまうんだから。

靜代。伯母さんも此間その話をしてゐらしつたわ。

敬三。お母さんが……何だつて。

靜代。あなたが結婚や何かについて面白くなく思つてゐらつしやるのがチャンと分つてるつて。

敬三。お母さんは靜ちやんと僕と結婚させるつもりでゐたんだよ。

靜代。(赤くなる)……

敬三。(少しどもつて) 靜ちやんにもそんな事は云やしなかつた……

靜代。(上氣したまゝ微笑して) 知らないわ、私。(かすれた聲で云ふ。)

敬三。え、云つたろう。

靜代。…………

敬三。(獨言のやうに) お母さんは前からさう思つてゐたのだよ。

靜代。(急に涙をこぼす) 敬三さん。もうそんな事云つちや厭(突伏してしまふ。)

敬三。(默つて靜代の肩の嗚咽につれてゆれるのを長い事見つめてゐる。その内に段々情が迫つてくる、靜かに靜代の肩に手を廻してさゝやくやうに) 靜ちやん。

靜代。(非常に驚いたように俄破と起き上つて、少し身を退きながら) あれ、敬三さん。

敬三。(靜代の動作に引寄せられたやうに自分の顔を靜代の顔に近よせる。)……

靜代。(男の力に抱すくめられて、苦しさうに悶きながら) あれ、いけませんよ……

敬三は接吻しやうとする。

靜代。(顔をそむけて) いやですよ。敬三さん。そんな恐い事……(浮言のやうな聲で) 千代子さんが……

二人は接吻する。接吻が終つたとき、靜代は力が抜けたやうにグツタリして男にもたれてゐながら、時々ビクリヒクリと慄えたや

うに身體を動かす。そして、浮言のやうな調子で「千代子さんが……」と云ふ。

長い沈默。

二階から手紙を持つて、千代子が降りてくる。千代子は何も氣付かずに客間の唐紙をあける。千代子は立すくんでしまふ。

靜代。(目が覺めたやうに飛起きて) あれ。………

靜代は玄關の方へ馳け出てしまふ。

千代子はフラフラ眩暈がしたやうな形をして、座敷の内へ座つてしまふ。

敬三も立つて、玄關の方へ出て行かうとする。

千代子。(堅い石のやうな表情をしてゐたが、突然甲走つた聲で) あなた。鳥渡お待ちなすつて下さいまし。(から云つて、敬三の後を追かけるやうに立かける。) あなた。

敬三。(不承不承に振かへつて、險しい聲で) 何だ。何か用か。

千代子。(冷淡なやうな顏付で) 鳥渡、そこにお坐りなすつて下さいまし。少しお話したい事が御座いますから——。

敬三。俺は用があるから……。

千代子。(冷笑を浮べて) あなた。お逃げなさるのは卑怯ですよ。

敬三。(勃然として) 何を云ふ。失敬な——も一度云つてみろ。承知しないぞ。

千代子。(ますます落付いたやうに) でも、逃げやうとなすつたては御座いませんか。

敬三。逃げたのではない——汝見たやうな發狂人と、話をする閑暇がないのだ。

千代子。發狂人てすつて……まあ、(初めて氣がゆるんで弱くなつてくる。) その發狂人には誰がしたのです。

敬三。そんな事は俺の知つた事ぢやない。

千代子。いいえ、あなたは御存じてす。さあ、おつしやつて下さい。その發狂人には誰がしたのです。

敬三。汝の我儘な心によく聽いてみるがいい。

千代子。どうせ私は我儘て御座いますよ。ですが、我儘には我儘ても、まだ下女替りに使つてある厄介者を欺したり何かは致しませんから……。

敬三。何だ。その言艸は。それが主人に向つて云ふ言葉か。

千代子。(涙をこぼして) まあ何ぼ何だつて、現在家内の

眼の前て、よくあんなだらしのない眞似が出來ますねえ。

敬三。（險しく）まだ云ふか。そんな事を……

千代子。えゝえゝ、云ひますとも。あなたが何とおつしやつても、私は云ふだけの事は申しますよ。

敬三。（間を置いて）勝手に云ふがいい。俺はそんな世迷言を聞いてゐる暇はないから……

かう云つて、敬三はまた立たうとする。

千代子。（甲走つた聲で）あなた、まだお話がありますから……

敬三。もう聽く必要はない。汝は俺を侮辱しやうと思つてゐるのだ。

千代子。（夢中になつて）侮辱ですつて……まあ、それはどつちて云ふ事でせう。ふみつけられたのは私です。あなたの妻として此上もない侮辱を受けたのは私てすよ。

敬三。……

千代子。（呼吸を呑んで）併し、私はもうそんな事は申しますまい。たゞ一つあなたにお願がございます。

敬三。（間を置いて）何だ。どうしやうと云ふのだ。

千代子。私を實家へ歸して下さいまし。

敬三。汝は、（間。）離縁がしたいのか。

千代子。私はこんな侮辱を受けてまて、あなたのお家へ置いて頂きたくは御座いません。ねえ、あなた。どうか私を實家へお歸しなすつて下さいまし。（間。）またあなたにしろ私のやうな病人より、靜代さんと御一緒におなりなすつた方が、厭な思をなさらなくつておよろしう御座いませうから……。

敬三。（默つてゐる）……

千代子。（迫るやうに）ねえ、あなた。どうか私を實家へお歸しなすつて下さいまし。

敬三。汝の勝手にするがいい。

千代子。（長い間を置いて）ぢや歸りましてもよろしう御座いますか。（凝乎と敬三を見つめる。）

敬三。五月蠅い。同じ事を何度きくのだ。

千代子。（泣聲になつて）よろしう御座います。あなたは

私を追出さうとなさるのです。

敬三。(間を置いて) 汝が自分で歸りたいと云つたんぢやないか。俺はたゞ素直に汝の云ふ事を訊いてやつただけだ。

千代子。いいえ、さうぢや御座いません。あなたは私を捨てやうとなさるのです。あなたのお心はよく分りました。(火のやうな眼をして敬三を凝視めてゐる。)

敬三。……

千代子。(敬三が何とも答へないので、落膽したやうに) あなた、それではお父さまやお母さまにはもうお眼にかゝりませんから、あなたからよく譯をおつしやつて下さいまし。

敬三。……

千代子。(絶望した人の自棄な心持で) あなた。私は自分の持つて參りましたものは、皆持つて歸りますから……(意味ありげに) あなたは後で後悔なさるでせうよ。

敬三。そんな事は汝の知つた事ぢやない。

千代子。(夢中になつて) よう御座います。どんな事になるか見ていらつしやい。

千代子はかう云ひ捨てゝ脱兎のやうに玄關に馳け出る。廊下に立聽をしてゐた靜代が泣聲を出して留める聲がきこえる。

靜代の聲。まあ千代子さん。鳥渡待つて下さい。私が——

千代子の聲。よして下さい。けがらはしい。

千代子は振切つて出て行つてしまふ。後に靜代の泣聲が長く殘つてゐる。敬三は石のやうに座敷に座つて沈思してゐる。長い沈默。やがて靜代の姿が唐紙の蔭から現はれる。凝乎つと敬三を見て。

靜代。(悲しさうな顔付で) 敬三さん。どうしませう。

敬三。(間を置いて) 仕樣がない。あゝ云ひ出したらもう手のつけやうがないから……

靜代。(懸念らしく) 大丈夫でせうか。何か無茶な事をなさりはしないでせうか。

敬三。何、大丈夫だよ。あんな事を云つて威かすのさ。

靜代。でも、私なんだか心配になるわ。(間) どこへ行らしつたんでせう。

敬三。やつぱり實家へ歸つたのさ。他へ何處へ行くも

んか。

静代。(嘆息を吐いて) ねえ、敬三さん。伯父さんや伯母さんには何て云ひませう。

敬三。静ちやんは默つてゐた方がいいよ。僕から話すから。(間。)併しお母さんには、暫らく話さない方がいいかも知れない。此頃あんまりいろんな事件が續いたんで、また脈の工合が面白くないさうだから……

静代。さうねえ。

敬三。要心しないと、心臓痲痺でも來ると大變だからね。

静代。でも千代子さんがいらつしやらないから、何とかお思ひになるでせう。

敬三。さうさ……どうするかなあ……

静代。(長い間を置いて)惡い事をしてしまつたわねえ。

敬三。……それは僕が惡かつたのだ。(苦しさうに云ふ。)

静代。いいえ、さうぢやないわ。(間。)でも私何だか此家に居るのが居辛くなつてきたわ。

敬三。静ちやん。ゆるしておくれよ。ねえ。僕があんな考のない事さえしなかつたら、決してこんな事になりはしなかつたんだが……

静代。(涙ぐんでゐる。)……

敬三。憤つてゐるのかい。(肩に手をかけて顔をのぞきこむ。)

静代。(かすかに首を振る。)……

二人はまた接吻をする。静代は素直に男の云ふなりになつてゐる。

沈默。

静代。(突然何事をか聞きつけて)誰かいらしつたわ。

こう云つて着崩した衣物の下前を直しながら玄關に出てゆく。

静代の聲。あら、小母さん。いらつしやいまし。

千代子の母のおあいと静代と二人座敷に現はれる。

おあい。(にこやかに) まあ敬三さん。先日は……

敬三。(鳥渡狼狽いて)いや、お母さん。——

おあい。今日は鳥渡そこまで買物に參つたものですから、お傍を通りながら寄らないのも惡いと思ひましてね。

敬三。あゝ、さうですか。ようこそ……

おあい。靜ちやん。先日は折角お出でなすつたのに失禮しましたね。

靜代。（赤くなつて）あら、小母さん。私こそ。

おあい。まあ、いやだ。私はこんな處へ坐りこんでしまつてまるでお客さまのやうですね。（笑ふ。）おきみさんは如何で御座います。

敬三。相かはらずです。先日から取込みが續いたもんですから、やはり氣を遣つたと見えて、少し脈が惡くなつてゐるさうです。

おあい。おやおや、それはいけませんね。やつぱりあゝ云ふ御病人は靜かにしてゐらつしやらないとねえ。ではお眼にかゝらない方がよう御座んすね。

敬三。いえ、別にそんな大した事はないんですから：

おあい。あゝ、さうですか。ぢや鳥渡あちらへ伺つて來ませう。御免下さい。（立ち上る。）

敬三。さあ、どうぞ。

おあいは茶の間を通つて六疊の唐紙をあける。

おあい。御免下さい。

おきみ。まあ、どなたかと思つたら……

おあい。鳥渡お邪魔に出ましたよ。

おきみ。さあ、どうぞおは入りなすつて……すつかり散かつて居りますが。

おあい。いえ、もう結構で御座いますよ。（おきみの枕元に座る。）

敬三もそこへ座る。靜代は座布團を出して、それから茶を入れる。

おあい。もう靜ちやん。お構ひなさいますな。すぐ歸りますから。

おきみ。今夜は寂しくて困つてゐた處ですから、ゆつくりお話なさいましな。

おあい。有難う御座います。まあこれで御宅もお靜かになりましたね。一時は何やかやで隨分お忙がしかつたで御座いませう。

靜代は茶の間に坐つて、縫物をはじめる。

おきみ。ほんとにやうやく落付きましたよ。此れたち夫婦が參りますしね、學校の開校式は御座いますしまあ、かうやつて臥て居りましても氣が氣ぢやない

んて御座いますよ。

おあい。さうでいらつしやいましたろうとも。

おきみ。おや、敬三。お千代はどうしました。

敬三。今鳥渡買物へ行きました。

おきみ。まあ、さうかい。折角おあいさんがいらしつたのに……

おあい。いえ、何、別に用も御座いませんから。それにね、あなた。かうお近くなりますと、何時でも會へますからねえ…… これが、あなた姫路だとさうは參りませんよ。

おきみ。そりやさうで御座いますねえ。

おあい。何年に一度しきや、會へないので御座いますからねえ。人間と云ふ者は可笑しな者で、さうなると無性に會いたくなりますが、かうやつて、お互に鼻の先に居りますと、別に會いたいとも思ひませんよ。(笑ふ。)

おきみ。私はまだ可笑しいので御座いますよ。昨日あなた。此處で話をして居りますときにね。

おあい。はあ。

おきみ。ふと、もう皆こつちに居つきりになる事を忘れてしまいましてね、お千代に、今度姫路に行くときには、あの伊萬里焼の茶道具を持つて行くがいゝよ。と申しましたので、皆に笑はれましたよ。年を取ると、ほんとにだらしがありませんねえ。

おあい。でも、そんな間違は若い人にだつてありますよ。いえ、ね、あなた。年を取ると云へば、私が眼が薄くなりましてね。

おきみ。まあ、いやだ。まだあなたなんか、そんなお年ぢやないぢやありませんか。

おあい。それでも、あなた。此頃は夜分になりますと、細い字は見えませんもの。

おきみ。そりやきつと眼がお惡いんですよ。あなた。何ぼ何だつて、まだ四十臺で、そんな事があつちや大變ですよ。

おあい。處が、あなた。宅が老眼なんて御座いますよその眼鏡を借りて見ますと、よく見えますもの。

おきみ。一通お醫者に見てお貰ひなさいましよ。
おあい。ぢや一つ見せて見ませう。
おきみ。さうなさいましよ。
おあい。（敬三に向つて）今日はお父さんはお見えにならないやうで御座いますね。
敬三。いゝえ、居りますよ。何でも二階で書物をしてゐるやうです。ねえ、靜ちやん。
靜代。いいえ、何ですか疲れたつて臥てゐらつしやいますよ。
おあい。此間内は隨分お忙がしう御座いましたからねえ。其處へ行くと若い者には叶ひませんよ。いくら氣はお若くても身體が云ふ事をききませんからね。
おきみ。でもまあ、宅は幸福と身體が丈夫だもんですから、どうにかかうにか、あゝ云ふ烈しい仕事も務まるんで御座いますよ。
おあい、何しろ格幅がありなさるから。
おきみ。あれで當節はやせましたが、宅が敬三ぐらひの時分には、そりや恐ろしいやうで御座いましたよ。
おあい。さうでいらつしやいませうとも、今でもあんなにおみ大きいんですものねえ。（急に思付いて）時にもう何時で御座いませう。
おきみ。（枕元の時計を見て）九時十分で御座いますよ。
おあい。まあ、もうそんなになりますか。（歸仕度をして）ほんの鳥渡お寄するつもりで、とうとう長話をしてしまつて‥‥
おきみ。まあ、およろしいぢや御座いませんか。靜ちやん。お千代は大變遲いねえ。
敬三。大通りまで行くつて云つて居ましたから。
おきみ。それなら島やでも伴れさせてやればよかつたのに‥‥（おあいに）當節は夜になりますと物騷でねえ。あなた。
おあい。あの電氣會社が出來ましてから惡い職工が増えましたからねえ。
おきみ。夜になりますと、若い女は一人歩きはさせられませんよ。
おあい。では御大事になさいまし。（挨拶して立ち上る）

おきみ。まあ、お歸りて御座いますか、お愛想も御座いませんて‥‥

おあい。いいえ、飛んだお邪魔をいたしました。

おきみ。何かお千代に御用は御座いませんか。

おあい。いゝえ、別に用事は御座いませんから‥‥ては失禮いたします。（去る。）

おきみ。ぢや私は此處て御免かうむります。

おあい。どうぞもう‥‥

敬三と靜代と送つてゆく。

おあいの聲。（玄關て）敬三さん。ちとお遊びにいらつしやい。さよなら

二人は玄關からおきみの臥(ね)てゐる處へ歸つてくるお。きみは顔を茶の間の方に向けてゐる。靜代は茶器だの、坐蒲團だのを片付ける。

靜代。内藤の小母さんは相かはらず御話がお好きね。

（かう云つてまた茶の間て仕事をはじめる。）

おきみ。何時までも氣の若い人だねえ。あの人のお腹(なか)にどうしてお千代見たやうな愛嬌のない娘が出來たかねえ。私は不思議だと思ふよ。

敬三。千代子はお父つさんによく似てゐますよ。

おきみ。さう云へばお千代はどうしたんだらう。まだ歸つて來ないね。

靜代はそつと敬三の方を見る。

敬三。（眼で靜代に答へながら）なあに、もう歸つてきますよ。

おきみ。（心配さうに）でももう大分時間が立つやうだよ。島やを大通りまて見にやらうか。

敬三。それには及ばないてせう。歸つてきますよ。その内に。

おきみ。（間を置いて）お千代にも困るねえ。いくら病氣だつて云つて、あんまり我慢がすぎるよ。（誰れも答へない。）どうだろう。敬三。もう家(うち)も大分暇(ひま)になつたから、思ひ切つて何處か田舍へ轉地てもさせちや‥あんな風(ふう)ぢやまつたく厄介だからねえ。

敬三。さうてすなあ。

火事の半鐘がきこえる。

静代。(耳をすまして) おや。火事だわ。
おきみ。(間を置いて) 何處だろう。
静代。すり半よ。厭あね。いま時分。
敬三。(立上って) 此處から見えるかしらん。(六疊の正面の玻璃戸にかけた布を右に曳く。學校の後が盛んに燃えてゐるのがみえる。) おや。學校ぢやないかしらん。
おきみ。え、ほんとかい。(起き上る。)
静代。(パタパタと驅け出して、敬三の傍に來て火事を見る。やがて) 何だか學校らしいわね。
おきみ。ぢや早くお父さんを起こして來なくつちや。

静代はその儘二階の階子の下に行つて、上りながら。

静代。伯父さん。伯父さん。大變ですよ。火事ですよ (静代は二階にかくれてしまつて、足だけが觀客席から見える。) 學校の方に火が見えますよ。

静代が先きに降りてゐる。後から信敬の姿が現はれる。表に蒸氣ポンプの鐘の音や、人のわめく駈足音などが、入亂れてきこゑる。

信敬。(默つて火事を見てゐる。)....
敬三。寄宿舍から出たのではないでせうか。
信敬。さあ、(間を置いて) 兎に角俺は行つて見てこやう 静代、外套を出してくれ。
静代。はい。(去る。)
おきみ。どうしやうねえ。もし學校が燒けたら....

静代が外套を持つてくる。

信敬は急いで出てゆく。

静代。(外を見ながら) 大變な火の子ねえ。

沈默。

敬三。(突然。) やつぱり學校だ。もう講堂の屋根に火がつきましたよ。
おきみ。(身をもんで) どうしたらいいだろう。折角....
静代。あら、左の方の棟にも火が見えますよ。

玄關から客間を通つて學校の小使が現はれる。

小使。(呼吸せはしく) 誰か居らつしやいませんか。學校から參りましたが....
静代。(驅けて茶の間にくる。) あら留吉。まあどうしたんだい。
小使。火事で御座います。校長先生はいらつしやいま

せんか。
おきみ。先生はいま學校へ見にいらしつたよ。留吉。
火事は何處から出たのだい。
小使。（疊へ膝をついて）寄宿舍の舍監室から出たので御座います。
敬三。何。舍監室から‥‥あすこは鍵（かぎ）がかゝつてゐた筈だが‥‥
小使。さうて御座います、つい今しがた若奧樣がいらつしやいまして
敬三。え、千代子がかい。
小使。へえ。今日先生が忘れ物をしていらしつたから取りに來たのだつておつしやいまして、マッチと蠟燭と鍵とを、小使部屋から持つていらつしやいましたが、それから暫くして、私が夜廻りをしやうと思つて、ひよいと外へ出て見ますと、舍監室の屋根がもう一面の火て御座いました。若奧樣は餘程お搜がし申しましたが、何處へいらつしやいましたか、かいくれお姿が見えませんので‥‥

おきみ。あゝ（かすかに呻く。）
敬三。‥‥‥‥‥‥
意味深い沈默。
小使。先生はいらつしやいますか。
敬三。（間を置いて）俺は後から行くから。
小使。ぢや私は一足お先きに參ります。さよなら。
（小使は急いで去る。）
おきみ。あゝ苦しい。（かすかな聲でかう云つてそのまゝグタりとなる。）
靜代。（驚いておきみを抱き上げる。敬三に）伯母さん。どうなすつて。（凝乎（じい）つとおきみを見る。）敬三さん。何だか伯母さんが變てすよ。
敬三。（おきみに立寄つて）お母さん。（手を取つて）お母さん確乎（しつかり）していらつしやい。（おきみはグタリとしたまゝ手を垂れてゐる。反應がないので敬三は狼狽して）おや、（手を取つて脈を見る。沈默數秒。敬三は嘆息（ためいき）のやうな調子で）もうだめだ。
靜代。え、どうして。
敬三。心臟痲痺だ。

静代。（熱心に敬三の顔を見てゐたが蒼白くなつてうめくやうに叫ぶ。）あゝ――

敬三。もう脈が切れてしまつた。

静代は伯母の屍骸の胸に顔をよせて、忍び音に泣く。火事は愈々盛んに燃えて、紅い光がこの惨ましい室内に明るく映る。

――幕――

第三幕

明華中學校の焼跡。午後四時頃の光景である。一面の焦土は黒く焼け爛れた火傷の痕のやうに、春先きの薄い日射に輝いてゐる。處々に大きな礎石や崩れた壁が、灰に埋もれて、不正確に焼亡した建物の經始の狀態を表示してゐる。並木らしい矛杉の立木數本右手の奥に、惨ましく焦げて、立ち殘つてゐる。

正面は崖。低く繁華な市街の屋根の高低が空をきざんでゐるのが見える。

中央よりやゝ右手寄りに、石疊みの井戸の跡がある。

左手に煉瓦塀と、危うく焼け殘つた門番の詰所と宏壯な扉を閉じた鐵門とがある。門番の詰所は、まだ眞新らしいペンキ塗りである。門の傍小門の扉が開いてゐる。信敬がやゝ右手寄りの奥の崩れた壁の處に立つて呆やりしてゐる。小門から内藤正一郎がは入つてくる。

正一郎。（門番の詰所を覗いてみるが、誰も居ないので、諸方を眼で捜してみる。）やあ、そこにお出ててしたか。（かう云つて信敬の方に近づく。）

信敬。（間を置いて）正一郎さんてしたか。

正一郎。今實はお宅へ伺つたのてしたが、此方へ來ていらつしやると云ふお話てしたから、鳥渡お寄りして見ました。

信敬。あゝ、さうてしたか。

正一郎。（諸方を見廻して）隨分よく焼けましたな。これは非道い。

信敬。まああすこへ行きませう。此處は汚ないから。（門番の詰所を指さす。）

正一郎。（歩きながら）あすこと門だけが殘つた譯てすな。

信敬。さうてす。さう風も吹いては居なかつたが、……

正一郎。何しろ此處は水が不便てすから。

二人は門番の詰所へは入つて、椅子に腰かける。

正一郎。水道でなくつちやだめですな。（井戸を指す。）あんな井戸の一つや二つあつたつて、あゝ云ふ大火事になると、何の益にも立ちませんからなあ‥‥

信敬。蒸汽ポンプが來たと思ふと、すぐ水がなくなつてしまつたのですから、何うする事も出來なかつたのです。

正一郎。（間を置いて）何しろ今度は御災難でしたなあ。

信敬。荒い目に會ひましたよ。

正一郎。（間を置く。）あゝやつて、此方から無理にお願ひして貰つて頂いた娘が、こんな思掛もない大事を起してくれましたので、私はもうあなたに會せる顔も御座いません。

信敬。正一郎さん。私も今度ばかりは當惑しましたよ。

正一郎。（間を置いて）御尤です。

信敬。あんまり思掛ない事件なので‥‥

正一郎。私共でも家内なんかはお宅へお氣の毒だと云ふので、すつかり取逆上せてしまつて、氣狂のやうになつて居ります。

信敬。まあ、どうかかうかあまり世間に廣まらないで濟みさうですが、私の家庭から火を放けた人間が出たと云ふ事が、新聞にでも、出たりなんかすると、それこそ大變だと思つて、一時は隨分心配しましたよ。あの翌日などは、家には死人を置いたまゝ警察やら新聞社やらを廻りましたが‥‥正一郎さん。私は六十年の生涯に始めてこんな辛い眼に會ひましたよ。

正一郎。重ね重ねの御不幸で‥‥まあ、何と申してよいやら、ただ私は恐縮するばかりです、私も新聞に出やしないかと思つて心配いたしましたが‥‥

信敬。幸なことには、何處の社でも、非常に同情してくれまして、何とも書かなかつたやうです。

正一郎。もう出る氣遣はありますまい。まあ、何よりでした。

信敬。私ももう書くまいとは思つてゐるが‥‥

沈默。

正一郎。實は今日鳥渡千代子に面會に行つて參りましたが……

信敬。どうです、病氣がよくないと云ふ話だが……

正一郎。今日は幸と大分正氣で御座いましたが、先日參りましたときなどは、我子ながら情ないやうてしたよ。（間を置いて）僅かの面會時間にいろんな話をしやうと思つて居りますのに、たわいなく笑つてばかり居りますので……全く子程苦勞になる者はありません。

信敬。ふうむ。そんな工合ては豫審にも出られない譯てすな。

正一郎。（信敬の氣を兼ねながら）けれども、ある辯護士に聽きますと、お千代は精神病の醫者の鑑定て、愈ヒステリーと決まれば、多分無罪になるだろうと云ふ事て御座います。

信敬。（顏色を變じて）そんな勝手な事は出來ないてせう。かりそめにも放火をした者が無罪になるなんて――それもほんとうの氣狂か、白痴なら兎も角、ヒステリーと云へば、大體な女には多少その氣味があると云はれてゐる位だから……もしヒステリーて無罪になるものなら、女の罪人は一人も出來ないと云つても差支へはなくなる譯だ。

正一郎。（むつとする。間。感情をおさえて）いや、併し相當に信用のある辯護士の云ふ事てすから、間違てはありますまい。

信敬。もしそれが本當だと云ふなら怪しからん譯てす。千代子のやうな女をその儘放つて置くのは社會に取つて、危險きはまる事てすから。

正一郎。けれども、千代子だつて、決してさう矢たらに此度のやうな事を仕出かす事はありませんからな。

信敬。それは健全な人間に向つて云ふ事てす。

正一郎。私はあれを十八年間育てたのてすから、あれの氣質はよく知つて居ります。元來あれは人一倍勝氣な女てすから、口惜しいと思ふと、夢中になつて

しまふ癖があります。今度の事なども矢張それてすよ。敬三さんが、あんな事さえなさらなければ、たとへいくらヒステリーが烈しくなつてゐても、あんな事はしなかつたんてせう。

信敬。敬三が……あなたは千代子が云つた事を信じてゐらつしやるのてすか。

正一郎。はい。決して嘘だとは思ひません。

信敬。ふうむ。敬三や何かて千代子を虐待したと云ふ事を……

正一郎。いや、さうてはありません。靜代さんの事てす。

信敬。靜代の事……と云ふと……

正一郎。（短い間を置いて）私は敬三さんと靜代さんとの關係に付いて千代子が云つた事を信じてゐると申すのてす。

信敬。正一郎さん。ヒステリーに罹つた女は、自分が嘘を吐いて、それを信じてしまふ場合が往々ありますよ。

正一郎。併しそれは……

信敬。（畳みかけて）敬三は勿論大して勝れた人間てはありませんが、さう云ふ方面だけは潔白だと云ふ事を私は保證しますよ。

正一郎。てはあなたは今度の事の起りは何だとおつしやるのてす。

信敬。千代子のヒステリーが烈しくなつて、嫉妬妄想が出て來たためだと思ひます。

正一郎。（間を置く。）妄想だとおつしやるのてすか。今日も未決て千代子が「多分お父さんは御存じあるまい。」と申して居りましたが矢張してみるとあれの申したとほりてす。

信敬。私が知らない――正一郎さん。私は私の家庭て起つた事は一つも知らない事はありませんよ。

正一郎。併し敬三さんは御自分てその事實を認めておいてなさるさうてすから。

信敬。正一郎さん。失禮な言分てすが、あなたは責任を持つておつしやるのてせうな。

正一郎。無論さうですとも。

信敬。敬三は何時その事實を認めたのですか。

正一郎。丁度あの事件のあつた翌日でした。家内がお悔みかた〲伺ひました時です。

信敬。ふうむ。あの時は私は新聞社へ行つて留守でしたが……何と申したのですか、敬三は。

正一郎。そのとき敬三さんは、おきみさんの御靈前で私の家内に何もかもすつかりお話なすつたさうです。

信敬。……………

正一郎。家内はもともと千代子との結婚に不滿を感じて居られた事から、最近の事實まで伺つて參つたのです。（間を置く。）千代子は自分がお人好で、現場を見るまで、少しも氣が付かなかつたのが口惜しいと申して、今日も私に訴へましたが、先生。これだけ申上げれば、敬三さんのなすつた事はあらましお分りで御座いませう。

信敬。（獨言のやうに）敬三が靜代と……ふうむ。いや、正一郎さん。よくおつしやつて下さいました。猶よく敬三に訊いてみて、愈事實なら捨置かれん事です。

正一郎。併し、先生。かう云ふ事は若い内には有うちの事で御座いますからなあ……

信敬。いや。斷じてゆるす事の出來ない罪惡です。（間を置いて）不埓な……

沈默。

正一郎。（外の景色をながめて）や、そろそろ夕方になつて來たやうです。先生。あなたはまだ此處にいらつしやいますか。

信敬。（突然）正一郎さん。敬三と靜代の事について、あなたはそれだけしか御存じないのですか。

正一郎。さうです。家内がお宅で伺つて來ましたのを又聽きに聽いただけで御座いますから。

信敬。（考へるやうに）何時から關係があつたのだらう。

正一郎。家内は私よりくはしくお知り申して居るかも知れませんが……

信敬。（間を置いて）實に不孝な奴です。

沈默。

正一郎。では私はお先きに失禮しますから‥‥

信敬。あゝ、さうですか。奥さんにどうぞ宜敷おつしやつて下さい。

正一郎。有難う御座います。あれも一度お眼にかゝつて、お詫をしなければならないと申暮らして居りますが、却つてお忙がしい處にお邪魔と思ひまして、ひかえさせて居ります、何れも少し萬事御整理がつきましたら必ず伺はせますから。

信敬。いや、もうそれに及びません。どうか御心配下さらんやうに。や、さよなら。

正一郎。それでは御免下さいまし。(去る。)

太陽が段々低くなつて斜めに市街とこの燒跡とを照らしてゐる。物の影が長く地に映つてゐる。

信敬は一人で机にもたれて考へこんでゐる。

敬三の友人岸川靜人が旅裝のまゝ小門からは入つてくる。

靜人。(信敬を見て)平井君はお出になりませんか。

信敬。(靜人を凝乎と見て)あなたはどなたです。

靜人。私は岸川と申すものですが、只今お宅へ伺ひましたら、多分此方だらうと云ふお話で參つたのですが‥‥

信敬。岸川さん。あゝ、さうですか。ぢや敬三をお尋ねなさるのですな。敬三は此方には來て居りませんが。

靜人。あなたは敬三君の御親父さんではいらつしいませんか。

信敬。さうです。私は敬三の父ですが‥‥

靜人。さうでいらつしやいましたか。つひ御顏を知りませんので失禮しました。先日中からいろいろ御厄介を願ひまして(間。)時に大變な御災難でしたなあ。

信敬。何とも云ひやうのない事になりました。

靜人。實は先日お宅へ伺ひましてから、鳥渡要事があつたものですから郷里の方へ歸つて居りましたのでこんな事があらうとは少しも存じませんでした。お見舞もいたしませんで‥‥

信敬。いや、どうしまして。

靜人。今日こちらへ出て參りまして、只今電車の上て夕刊を讀みまして、始めて知つたものてすから、その儘家へ歸らずに此方(こちら)へ伺つたのてすが……

信敬。(愕然として)新聞に出て居りましたか。

靜人。はあ、委(くは)しく出て居りますが……

信敬。何(ど)の新聞てす。

靜人。私の見ましたのは、東京夕刊新聞て御座います(ポツケツトを捜して)此處に御座います。

信敬。(顫ふ手先て新聞をうけ取つて讀まうとするが、老眼て細かい字が見えないのてつぶやくやうに)や、眼鏡(めがね)を忘れて來た。

靜人。何なら私が讀んてお聽かせしませうか。

信敬。ては恐れ入りますが、一つお願ひしませう。眼鏡なしには活字は到底よめないのてなあ……

靜人。いや、お安い事てす。隨分烈(ひど)い書方てすからそのおつもりて……亂脈なる教育家の家庭と……多年教育界に在りて、理想的中學校の設立に盡瘁し此程やうやくその落成を見たる明華中學校長平井信敬氏は今や教育界の元老として盛名一世を壓する人なるが、兎角世の中には裏と表とがあるものにて、他所より見れば、同氏の如き人格高潔なる紳士の家庭は定めし圓滿に治まれるものならんと思はるれど、事實は全くこれに反し、風波止むときなく此處に一大事を引起こしたり。

去月廿四日の午後十時二分突然の出火にて、やうやく開校式の濟みたる明華中學校が烏有に歸したる事實は當時一報したる所なるも、なほ本社の精探する所によれば、同校出火は放火にして、その犯人は信氏敬令息敬三氏の妻女千代子なること判明せり。

信敬。(顫え聲にて)岸川君。この新聞はよく賣れる新聞てすか。

靜人。さうてす。何ても此頃餘程賣れるやうてす。それから……そもそも事の起りは、敬三氏と千代子との仲此頃圓滿を缺き、ために千代子は重症のヒステリーに罹り居たる折柄、敬三氏は……(靜人は氣の毒さうに)どうてす。もう廢しませうか。

信敬。（興奮して聴いてゐたが、不機嫌な調子で）いや、かまいません。お讀み下さい。

靜人。え……と、敬三氏は同家に寄食せる從妹幸田靜代の美貌に懸想し、遂に靜代を口說き落して、蜜より甘き秘密の快樂を重ね居たり。

兩人の仲を嗅ぎ知りたる千代子は嫉妬の情押えがたく、かつ又教育家にあるまじき夫の所行を歎き、屢々夫を切諫せしかど、戀に心の狂ひたる敬三氏は何條聽き入るべき。果は五月蠅しとて、取合はざれば、瞋恚の炎に心狂ひたる千代子は、あさましくも信敬氏が半生を捧げて築設したる學校に放火するに至りしなり。千代子は同夜直ちに逮捕され檢事局に送られたり。因に云ふ。千代子は毛織物問屋內藤正一郎氏の長女にして、三年前に敬三氏と結婚せるよしなり。……これだけです。（讀み終つて信敬の顏を仰ぎ見る。）

信敬。（長い間を置く。）……いや、まことにお恥かしい次第です。

靜人。（慰める。）この新聞はなかなか惡辣な新聞ですからなあ……

信敬。併し事實は事實です。（間。）私は新聞にさえ出なければ信用だけは維持する事が出來る。さうすれば、また此からの努力次第で學校が再び設立されんとも限らんと思つて、此れまで心配したのだが……これですつかりぶちこはしてしまひましたよ。

靜人。（間を置く。）何と申上げていいか、あなたのお心をお察しただけで胸が一パイになるやうな氣がします。（間。）敬三君の人格は學校時代から知りぬいてゐますが、私はたゞ意外の感に打たれるばかりです。

信敬。心がゆるんだのですよ。（獨言のやうに）呆れはてた奴です。

沈默。

靜人。丁度此處の燒けた日でした。私は久し振てお宅へお邪魔しまして、いろいろ御馳走にもなり、また敬三君と昔話やら愚痴やら話し合ひましたので、その後てあんな恐ろしい事が起ろうとは夢にも思ひませんでした。分らんものですなあ……

信敬。ところが、まあお聴き下さい。岸川さん。甚だ迂濶な話てすが、私はほんの今まて、まさか敬三がそんなに墮落してゐやうとは思はなかつたので、あれの秘密を知らせてくれた人に對して却つて敬三の潔白を保證したのてす――お蔭て私は面皮を引めくられるやうな眼に會ひましたよ。

靜人。魔がさしたとても云ふのてせうなあ。(長い間を置いて)ぢや學校の方は何うなさいました。慥か來月一日から授業をお始めになるやうに伺つて居りましたが……

信敬。まだ何うしやうと云ふ成案もなかつたので、取敢へず入學を許可した生徒の家へは、來月十五日まで授業を延ばすやうに通知して置きました。その内に何處か學校を借りて授業を始めやうと思つたのですが……併し、もうその必要もなくなつてしまひました。今日の新聞を見れば皆退學してしまいませうから……

敬三が丼裝て門をは入つてくる。信敬と岸川とが言葉をかけないので、

敬三。(何の氣もつかず)やあ、岸川君。今家へ歸つたら、君が來たと云ふから、此方へ廻つてみた。

靜人。(重々しく)しばらく。

沈默。

敬三。(父と岸川との態度の異樣なのを怪しんて)どうしたのだい。いやに君は默つてゐるぢやないか。

靜人。いや、別に默つてゐる譯てもないが……平井君。大分君をお待ちしたよ。

敬三。さうか。それは失敬した。學校の用事て諸方歩き廻つてゐたものだから。

靜人。(父子の氣を兼ねて)さうかい。(短い間。)ときに僕はもうお暇しやう。(歸る仕度をする。)

敬三。何だい。變ぢやないか。折角僕か歸つて來たのに……

靜人。いや、また會はう。今日はお取込みのやうだから……それに僕は今田舍から歸りなんだから……

敬三。てもまあ少し話して行き玉へ。いろいろ話した

い事もあるから。

靜人。折角だがまあ失敬しやう。

敬三。どうしても歸るのかい。

靜人。あゝ、さうしやう。(信敬に)やあ、どうもお邪魔いたしました。では失禮します。

信敬。や、私こそ——あゝ岸川さん。先刻の新聞は頂戴出來ませうか。

靜人。はあ、私はもう入りません。——

信敬。では置いていつて頂きませう。(靜人の手から新聞をうけ取る。)

靜人。さよなら。平井君。失敬。(去る。)

敬三。お父さん。その新聞は何うしたのです。

信敬。(むづかしい顏付で)此處を讀んでみろ。

新聞を開いて一點を指さしながら敬三に渡す。
敬三は此れを讀みながら顏色を變える。

信敬。(憎さげに敬三を凝視めて)敬三。何と書いてある。

敬三。(父の顏を見る。)……

信敬。(間を置いて)此れに書いてある事は嘘と思ふか。

敬三。……

信敬。何うだ。敬三。返事は出來ないのか。(間。)さうだらう。汝がもし一枚でも、人間の皮をかぶつてゐるなら、俺に口のきける筈がない。(急に憤りと憎しみがこみ上げてくる。)何のために學問したのだ。俺は決してこんな墮落した眞似をするやうに敎育はしなかつたぞ。この新聞に出てゐる汝の所行を讀んでみて汝は自分が耻かしくはならないか。

敬三。(漸く口を開く。)お父つさん。私は今度の事件については、隨分いろんな云い度い事もありますが、此處少時沈默を守つて何事も云ふまいと思つてゐるのです。かう云ふ混亂の內でよく考へもしない事を云ひ出して此上誤解されてもつまりませんから……

信敬。誤解される……こら、敬三。人間らしい事を云ふな。自分で人道に外れた事を行つて置きながら。

敬三。(むつとして)私の行爲は私自身で審判します。人が何と云はうとも——

信敬。(嘲るやうに)ふうむ。誠によい處世法だ。それで

こそ、どんな惡事を目算て、世間の人から非難を受けても平氣で笑つて居られる譯だ。

敬三。(凝乎と耐えてゐる)……

信敬。(憎しみに燃えた眼で敬三を見つめて)どうだ。敬三。厚顔しい汝の心ぢや新聞でこの位の事を書かれても屁とも思はないだろう。

敬三。………

信敬。此頃の惡思想に感化された青年には汝が此上もないいい見せしめだ。傳統のある周圍と調和を取る事を忘れてしまつて、自分一人の快樂に耽らうとするのだから……併しよく考へてみろ。汝は教育家だぞ。人の子弟を感化誘導して行く責任の重い職務を持つてゐるのだぞ。それにこの有様は何だ。婦女子に溺れて、職務の尊さまで忘れてしまふとは……あんまり情けないので、俺は涙も出ない。

敬三。(冷たい頬付で)お父さん。私にはあなたのお心がよく分つてゐますよ。

信敬。(敬三の態度と頬付に刺激されて、むら〳〵として來るのを強いて抑えて)俺の心が分つてゐる――ふうむ。分つてゐるなら云つてみろ。

敬三。お父さんはたゞ今私を自我的だと云つて大變非難なさいましたが、私が考へると、お父さん。あなたの方がよほど自我的です。

信敬。俺が主我的だ。ふうむ。では汝の理由とする處を聞かう。面白い事を云はれるものだ。

敬三。あなたは今言葉をきはめて私を非難爲さいました……が併し、あなたの非難の後には、子たる私の行爲に對する御心配よりも、私の行爲に影響されて自然に起つてきたあなたの御損害に對するお怒りが餘程澤山含まれて居るのが、私にははつきり分りましたから。

信敬。(勃然として)敬三。汝は親を飜弄するつもりか。

敬三。いや、私は單に事實として私の心に感じた事を率直に申上げたばかりです。(間。)お父さん。親子の間の愛情などゝ云ふ者は決してさう長く續く者ではありませんよ。

信敬。汝は氣が狂つたのではないか。そんな事はいやしくも常識あり教育ある人間の口にすべからざる事だと云ふ事を忘れたか。

敬三。いや、私は決して氣も何もちがつて居ません。眞實として此頃痛切に感じたから、それを公言したまでです。人間の愛情なんか一時的の者です。愛情ばかりではありません。世の中の物は皆たゞ一時の力を恃て我々を欺いてゐるのです。親子の關係も夫婦兄弟の關係も皆たゞ外面の物に過ぎないのです。傳習に縛られてお互に化粧した顏を見せあつて居るだけです。

信敬。邪說だ。恐ろしい異端の說だ。心が墮落してくると、人間は得てさう云ふ事を考へてくる……

敬三。邪說か何か知りませんが、今の私に取つては一番之れが眞實として感ぜられます。お父さん。私には何んな場合でも、いろんな義理人情の裏から白い齒をむき出して、いがみ合つてゐる者か見えて、その時その時の義理人情に何うしても同感する事が出來なくなりました。

信敬。心がすつかり荒れてしまつたのだ。汝は人間の尊い處を失つてしまつて、段々獸にあと戻りをしてゐるのだ。親の云ふ事も家内の云ふ事も皆聞こえなくなつて、終には、たゞ眼の前の物ばかりしか見えなくなつてしまうのだ。自分で情ないと思はないか

敬三。併し、いくら泣いてもわめいても事實は動かせませんから……

信敬。それは決して事實ではない。汝が事實と信じてゐるだけだ。

日影が段々傾いて、欅の上には濃い陰影が多くなつてくる。焦げて枯れてしまつた杉の並木の半面と、遠く見える市街の屋根とが、太陽の光を斜めにうけて異常な輝を放つ。

敬三。お父さん。私はこの一二ヶ月の恐ろしい經驗から、から云ふ事實を信じなければならなくなつてしまつたのですよ。(短い間。)お互に、この世の中に生きて行かうとすれば、人間は必ずいつかしら、い嚙み合てゐるものです。子が成長してしまつて、保護

する必要がなくなつてくると、父子は二つの個性として、何方かを亡ぼさうと爪を磨いて白眼み合つてゐます。また夫婦は夫婦で、互に征服しやうとして始終弱點を探り合つてゐるのですから……

信敬。まるで氣狂だ。敬三。汝のやうな危險な考を持つてゐる人間が、世の中にゐるのは人道を破壞する因だ。生きてゐる必要はない。死ね。もう親とも子とも俺は決して思はないから潔よく自殺しろ。

敬三。（間を置いて）私に死ねとおつしやるのですか。（悽い顏で笑ふ。）お氣の毒ですが、私はまだ死ぬ事は出來ません。私は生きられるだけ生きてゐるつもりです。（間。）これから私は自分の爲めに生きなければなりませんから。

信敬。（險しく）死ね。生きてゐる必要はない、汝のやうな者は。

敬三。いゝえ。私は死ぬ事は出來ません。（長い間。）お父さん。私は自分のこれ迄の生活を思ふと、何とも云へない口惜しい心持がします。私は自分の大事な三十年の生命をお父さんの爲めに、またお父さんの事業の爲めに、むだに費はれてしまひました。何うして私はあゝ云ふ生活に甘んじてゐられたかと思ふと、自分の心に噛みつきたいやうです。

信敬。何だ、その言葉は。（間。）汝は自分の我儘から親を恨んでゐる。子たる者が親の事業に身を捧げるのは當然の事だ。それに大事な三十年の生命をむだに使はれてしまつたとは……言語道斷な言草だ。敬三汝はその我儘な心から父親の一生の事業を滅茶苦茶にしてしまつたのだぞ……そしてその上に汝を何よりも深く可愛がつてゐた母親を殺したのだぞ。

敬三。そんな事が……

信敬。（畳みかけて）いいや、確に殺したのだ（短い間。）刄物や毒で殺したのではないが、お母さんが死んだ直接の動機は汝にあるのだ。あの事件さえなければ、おきみは今でもまだあの六疊に臥つてゐた筈だ。

敬三。（苦しさうに間を置いて）併しお父さん。お母さんには前から病氣があつたぢやありませんか。

信敬。それは前からあつた。（間。）敬三。それでは汝はお母さんのあの長い病氣が何時起つたのだか知つてゐるか。
敬三。……知つてゐます……
信敬。お母さんのあの病氣は、汝を生んだ時から、起つたのだぞ。（短い間。）汝を生んだあとで、おきみは烈い産褥熱を罹らつて、それから心臟が惡くなつたのだ。
敬三。……
信敬。（敬三を見つめて）敬三。おきみはよく床の内で氣が鬱いてくると、「私がこんな病氣になつて一生何の面白い事もなく臥てくらさなけりやならないのは、皆敬三を生んだ爲めだ。併し母子の情は妙な物で、私をこんな眼に會せた敬三が、どう云ふものか、可愛ゆくて耐らない。」と云つては涙をこぼした事があつた。……
敬三。……
信敬。（執拗な憎しみに顫へながら）どうだ。敬三、おきみは汝のために殺されたと云ふ事が分つたか。
敬三。（長い間を措いて）お父さん。併しそれは私の知つて爲た事ではありません……
信敬。知つてしたも知らないでしたのも同じ事だ。汝の行爲に現はれた處は汝の考へとよく一致してゐる。（間。）汝のやうな人間が我子かと思ふと、俺は恐ろしくなつてくる……
敬三。（熱した眼で信敬を白眼んで）それは運命です。自然のなりゆきです。いくら人間がもがいても、こればつかりはどうする事も出來ないものです。

太陽がますます正面の市街の後に傾いて、鮮やかな夕燒雲が呼吸をするやうに重く顫へてゐる内に薄ぼんやりと巨きな形を現はしてゐる。空氣が冷たく薄ぐらくなつてくる。

信敬。そればつかりではない。汝は千代子にあんな思もよらない恐ろしい罪を犯させた。可愛さうに千代子は汝の家内になつたばつかりで、普通の人交はりも出來ない身になつてしまつたのだ。先刻内藤が來て話して知つたが、千代子は未決監の内で、たゞ正

氣もなく笑つてばかり居るさうだ。(間。急に暗い感情に迫られて) 敬三。

信敬。(聲に出さないで顏の表情で返事をする。)

敬三。汝は社會上に相當な地位のある紳士として責任を重じろ。(間を置いて) 死ね、自殺しろ。(迫るやうに險しく敬三を凝視する。)

敬三。(冷たく)厭です。(間。)私はこれから生きなければなりません。これまでの生命の損失を取かへす爲めに全然新らしい生活には入るつもりです。

信敬。(短い間を置いて。深い非難の調子で)汝はこれ程恐ろしい罪惡を犯して、まだ平氣で生きてゐる積りか。(間。)

敬三。汝は生きてゐるつもりでも、社會が汝を生かしては置かないぞ。(ガッカリしたやうな調子で)それが分らないか。

敬三。(机上の新聞を鳥渡見て) この新聞に書かれたからとおつしやるのですか。

信敬。さうだ。汝が何をしたかと云ふ事は、もう東京中に擴まつてゐる……諸處で汝の罪惡が話の種になつてゐるのだ。(間を置いて) そればかりではない。汝の父親が俺だと云ふ事も知れ渡つてしまつた。(怒りに身を顫はせて) 敬三。俺はどうしても汝を生かして置く事が出來ない。死ね。汝の生命をもつて、俺に與へた損害を償ふのだ。

敬三。そんな事は斷じて出來ません。(間。)私にはこの上あなたの犧牲になる事は出來ません。

信敬。俺が何時汝を犧牲にした。

敬三。お父さん。私は生れてから今まで、ずうつとあなたの犧牲だつたのですよ。私ばかりぢやありません。家に居るものは皆さうです。亡たつたお母さんも、靜代も千代子も一人としてあなたの事業の爲めに犧牲にされない者はなかつたのです。

信敬。馬鹿な事を云ふ。(間。)俺は汝たちを教育したり養つたりしてこそやつてゐるが、決して犧牲にした事はない。よしまた犧牲にされた處て、それは不都合な事でも何でもない。その位の事は、生んで貰つた親の恩に對する當然の責任だ。

敬三。（憤然として）そんな亂暴な事はいくら親てもゆるされませんよ。お父さん。私は決してあなたの家畜や奴隷てはありません。あなたと同じやうに生きる權利を授けられた人間てす。

信敬。（血相をかえて）何、もう一度云つて見ろ。

敬三。えゝ、云ひますとも、何度ても云ひます。（間。肩て呼吸を刻んて）そりや、御恩は御恩てす。併しお父さん。報酬を豫期して施こす恩惠は決して恩惠てはありません。取引てす。物と物とを交換するだけの事てす。お父さん、あなたは私の身體と靈魂とをこれまての養育の恩て自由になさろうとおつしやるのてすか。（悽い程冷たく）私はあなたの卑しいお考へを輕蔑します。

信敬。生意氣な‥‥口先ばかりの輕薄な智惠て親を愚弄する。（顫えてゐる。）

敬三。何とおつしやつてもだめてす。私は決してそんな養育の御恩には、自分を犧牲にしてまて酬ひる必要を認めませんから‥‥

信敬。敬三。何と云ふ汚らはしい事を云ふのだ。死ね自殺してしまへ。（重い物を引ずるやうな調子て云ふ。）

敬三。私はもうお父さんの御命令に服從する義務のない身體てす。

信敬。（思はず立上る。）汝は‥‥

敬三。何をなさろうと云ふのてす。

渦卷くやうな沈默。數秒。

信敬。敬三。死んてしまへ。

敬三。（立懸かつて、凝乎つと信敬の顏を見る）‥‥

信敬。（譫言のやうに）死ね。死んてしまへ。

敬三。（恐ろしい結果を直覺して、ハツと身を退きながら、叫ぶやうに、お父さん。あなたは私を殺さうとなさるのてすか。

敬三はかう云つて、門番の詰所から飛出して外に立つたまゝ、非常に激動した後のやうに呼吸を切つてゐる。）

信敬はこの言葉を聞くと一緒に、バネのやうに飛上る。そして恐ろしい顏付をして敬三の後を追つて外に出る。敬三は門の柱の處まて逃けて

敬三。（恐ろしさうに）あゝ、お父さん。落着いて下さい。何をなさるのてす。

信敬は夢中になつて敬三に掴みかゝる。恐ろしい親子の格闘が始まる。

敬三は門の柱に押付けられた儘苦しさうな聲を出して、

敬三。放して下さい。お父さん。放して下さい。

から云つて夢中になつて振放すとき機で二人共轉んでしまふ。太陽の最後の光が、この殘忍な光景を照してゐる。二人は一生懸命に揉合つたがとうとう信敬は疲れて敬三に押伏せられてしまふ。信敬は苦しさうに下で悶いてゐる。

敬三。（夢中で信敬の咽輪を押えたまゝ）どうです、お父さんまだこんな恐ろしい眞似をなさるつもりですか。

信敬は何とも云はないで、一生懸命に悶く。

敬三。（間を置いて）こんな馬鹿な眞似をして、危險ないぢやありませんか。いくらはね返さうとなすつてもだめです。あなたが落着いておしまいなさるまでは放しやしません。

から云つてゐる内に信敬が段々力が衰えて終にはダラリとなる。敬三は夢中で饒舌てゐたが、信敬が動かなくなつたのでふとそれを見る。）

敬三。（間を置いて）お父さん。お父さん。（間。）おや。（信敬から手を放して）お父さん。

（返事がないので敬三は信敬をゆさぶつてみる。）

敬三。お父さん。（凝乎と信敬を見つめる。）

信敬が死んでゐるので敬三は泳ぐやうな手附をして立上る。やがて脈をしらべたり、信敬の胸を開いて、心臓部へ耳を付けて聴いてみたりして居たが、見る見る内に喪心したやうになる。

敬三。（低い聲で）もうだめだ。（から云つて長い嘆息を吐く。）

敬三は諸方を注意深く見廻してゐたがつかつかと門の處へ行つて外に首を出して、少時外を眺めて、やがてまた落付かないやうに歸つてくる。

敬三。（信敬の死顔を凝視して）お父さん。

から云つたまゝ、考へこんでしまふ。沈默數秒。

敬三は恐ろしい顔付で立上つて、そのまゝ右手の井戸の處へ行つて少時井戸の内を熟視てゐる。

敬三。（嘆歎のやうに）眞暗だ……

突然敬三は稻妻のやうに身を踊らして井戸に飛込む。反響のやうに水の音がきこえる。

深い沈默。

夕燒雲が二すじ三すじ熱した黄金のやうに赤く市街の上の雲の層のなかに輝いてゐる。舞臺は段々暗くなつてゆく。市街にはキラキラと燈火が光つてゐる。

――幕――



赤と黄の夕暮

抱月生

大和の或る山寺の別庵、庵室は山の麓にあつて、その前は一面の菜畠、季節は春で、菜種の花が盛りである。遠見に山の中腹の鐘楼が見える。時刻は夕方

尼女（十五六歳、法衣は緋色）

若僧（十六七歳、法衣は黒色）

老僧（法衣は朽葉色）

若僧（菜畠の中から出て來る、後を振り向いて）さあ、早く〳〵。こゝなら大丈夫です。もうすこしして、また和尚さんに見つかる所だつたのね。

尼女 こはかつたわね、私、またあの、骨ばかりの和尚さまの手で障られることかと思つてちゞみ上つてゐたの。

若僧 こら、こんなに法衣に泥がついちやつた、はたいて上げませう。隠れるはづみに、

きつと菜畠をめちや〳〵にしちまひましたよ。

尼女　むりやり菜種の花の中にしやがんで動かないてゐると、しまひには蝶々までが馬鹿にして、私の顔や法衣にとまるのよ。

若僧　蝶々にだつて、その顔を障らしちやだめよ。しみがつくと大變だもの。どこへ止まつたの？唇に？

尼女　いゝえ。

若僧　ぢや、額に止まつたの？

尼女　いゝえ。

若僧　頰つぺたに止まつたの？

尼女　えゝ、頰つぺたに、こゝの所に。

（指で自分の頰を差す）

若僧　きつと吸つて行つたんだよ、拭いてあげませう。

（法衣の袖で、尼女の頰を柔に拭く）

あなたの顔はほんとに綺麗ね、白くて透き通るやうだ。こんな汚ない色をした法衣で拭くと、曇りがつきさうね。

尼女　ねえ、綺麗でせう？私、小供の時からさう言はれてよ、透き通るやうだつて。でも私は仕合せですわ、みんなさう言つて褒めて呉れるから。

若僧　私はあなたを見ると、なぜこんなに自分が見つともないんだらうと思つて、悲しくなります。

尼女　でも、あなたも綺麗よ。私が今まで見た男の中ぢや、一番綺麗よ。

若僧

あなた、ほんとうにさう思つて呉れて？

尼女　え丶、ほんとうに、だから私、あなたが好きてすわ。

若僧　ぢやあ、ねえ、私、お願ひがあるがかなへて呉れて？

尼女　なあに？

若僧　私ね、もしか何所かへ行くやうだつたら、あなたも一緒に行つて呉れない？

尼女　行くつて、何所へ？

若僧　何所へでもさ。私の行くところへ。

尼女　だつて、何所だか分からないぢやありませんか？

若僧　分からなきや、行つて呉れない？

尼女　それや行くけれど、ても何所だか言つて御覧なさいよ。遠いところ？

若僧　遠いところなの。

尼女　何時行くの？

若僧　いつだか知らないけれど……

尼女　なぜさ？行かなくちやならないの？

若僧　え丶、行かなくちやならないの。私、行きたかないんだけれど……

尼女　誰れが行けと言ふの？和尚さまが？

若僧　えゝ、和尙さんが。私、さう言ひ渡されちやつたの。

尼女　いつ歸つて來るの？

若僧　歸つちや來ないんです。丹波の國分寺といふお寺へ、修行に行くんですつて。

尼女　まあ、お修行に？

若僧　だから、もう此のお山には居なくなるんです。

尼女　（聲をうるませて）なぜ和尙さまはそんな事をなさるんでせうね？あなたをそんな遠い所へやるなんて、ひどいわ。

若僧　でも和尙さんは、それがお慈悲だと言つてるのです。

尼女　お修行が出來るから？

若僧　何だか知らないけれど……

尼女　いくらお修行だつて、そんな所へ行つちやつまらないわ。ね、和尙さまにさう言つておよしなさいよ。

若僧　よすたつて、和尙さんが聽いて下さらないんだもの。私ね、ゆふべは其の事を考へて一晩中眠らなかつたものだから、今朝になつて寢忘れちやつて、それから、あの、鐘を撞くことを後れちやつたの。あはてて驅けて行つたけれど、いつもより餘程後れましたよ。あなた、氣がついて？

尼女　えゝ。そのためだつたのね。私、いつもあの頃には、ちやんと目をさましてゐてよ。そしてあの鐘はあなたが撞くのだと思つて聞いてゐると、お堂の上であなたが法衣の袖をこんな風にまくつて撞いてる所が

目に見えて來るのよ。

若僧　あの鐘も、今夜が撞き納めなのかも知れない。

尼女　一たい、いつ行くといふの？

若僧　明日かも知れません。

尼女　まあ、そんなに急なの？

若僧　だからあなた、私と一緒に行つて吳れなくて？

尼女　行つてどうするの？

若僧　どうするつて、それは私もまだ考へつかないけれど、丹波のお寺へなんか行かなくてもいゝのです。

尼女　二人で何所かへ逃げて行くの。

逃げるんですつて？そんな事をしたら大變だわ。和尙さまに叱られますわ。

若僧　和尙さんは、どうせ私たちを善くは思つてゐないんです。私たちが斯んなに仲よくしてゐるのが惡いつて、それで私を他所へやることにしたのですもの。

尼女　ぢや、昨日和尙さまがあんなに恐い顏をなすつたのはほんとうに怒つてらつしやつたのか知ら？

若僧　さうさ。だから、あなたと私とを別々にしなくちや、爲にならないつて。

尼女　なぜでせうねえ？こんなに仲よくなつてるものを、別々にするなんて、和尙さまもひどいわ。私たち、そんな事をされる譯はなくてよ。

若僧　…………………

尼女　ねえ、そんな事をされる譯はないわね。

若僧　それは、二人がもしか思ひ合つてゐたら、惡いか知れないけれど……

尼女　思ひ合ふつて、どうするの？

若僧　…………………

尼女　あなたを好きだと思ふのが惡い？

若僧　惡かないけれど……和尚さんが惡いと言ふの。

尼女　だつて、ほんとうに好きだと思ふのなら、いいぢやないの？思つちやいけなくて？

若僧　いゝの、いゝの。さう思つてちやうだい、ほんとうにさう思つてちやうだい。よ、いゝてせう？

（手を取る程度の表情）

尼女　えゝ、好きだわ。

若僧　私も好きなの、私もあなたが好きなの。和尚さんが何を言つたつて構ふものか。私、ただ、あなたと斯うして思ひ合つてゐるの。

（抱く程度の表情）

尼女　ぢや、和尚さまにさう言つて、あなたを遠くへ行かせないやうにして貰ひませうよ。ね、さうしませうよ。

若僧　和尚さんは、もう、あゝ言ひ出したら聞かないんだから、だめ。

尼女　ぢや、どうすればいゝの？二人て逃げ出すの？

若僧　えゝ、逃げてちやうだい、何所か和尚さんの知らない所へ行つて、二人で一生仲よくしてゐましやうよ。ね、さうしてちやうだい。

尼女　だつて、逃げ出して行くところが無いぢやないの？

若僧　何所かへ行くの。私の家だつて、あなたの家だつてあるぢやないか？

尼女　家へ帰つたら、また和尚さまのやうに叱りやしないでせうか？

若僧　叱つたら、また何所かへ行けばいゝ。何所へでも、叱るものゝ居ない所へ行きませうよ。ね。だから私と一緒に行つてちやうだい。いゝでせう？

尼女　………………

若僧　いや？　いや？

尼女　………………

若僧　ぢや、いやなんだね？ 私と一緒に行くのはいやなんだね？ 私を好きだといふのは嘘ですね？ 嘘をついたのね？

尼女　嘘ぢやないのよ、嘘ぢやないのよ。
（すがる程度の表情）

若僧　ぢや、なぜ一緒に行つて呉れない？

尼女　行くのよ、行くのよ。私、どこへでも一緒に行きますわ。

若僧　行つて呉れて？ ほんとう？ ほんとう？

尼女　ほんとうに！

若僧　うれしい！

（抱き合ふ程度の表情）

老僧　（奥から聲ばかり聞こえて）淨圓！淨圓！

（二人驚いて飛びのく。老僧出て來る）

老僧　淨圓、もうそろ〳〵お山へ上つて行かないと、また晩の鐘に間に合はなくなるよ。早く行け、早く行け。

若僧　はい。

（尼女と顔を見合はせ、しほ〳〵と他方へ出て行く）

尼女　（老僧の傍へ寄り）和尚さま、どうぞ淨圓さんを叱らないで下さい。

老僧　（尼女の肩を撫で）あゝ、あゝ、叱りはしない。けれどもあれはな、修行のために丹波の方へ行くことになりました。それと言ふのも、みんな當人のためだから、思ひ違ひをしてはならん。悟道のためとあらば、どんな山奥邊鄙でも、喜んで行くのがまことの修行といふものだからな。

尼女　では和尚さま、私も一緒に行かして下さいませ。

老僧　一緒に？

尼女　はい。

老僧　そりやいかん。一緒に行かすくらゐなら、淨圓を丹波へは、やりはしない。

尼女

ても、私、浄圓さんがゐなくなると淋しいのですもの。

老僧 はゝ、それは、あんなに仲よくしてゐたのだから、今急に浄圓がゐなくなつたら淋しからうが、それも少しの間だ、辛抱しておいて。佛に仕へる身はな、其の仲よい友達にも別れて、淋しい所を辛抱するのが修行だ。其のうちには、自然と淋しくなくなります。佛をお友達にすれば、少しも淋しくなくなる。他の友達は、今よくても直に飽きる時が來る。たかだかつゞいても、五十年の生涯だ。御佛を友達にすれば、五十年はおろか、未來永刧捨てられるやうな事はない。分かつたかね。

尼女 さうでせうか？

老僧 あゝ、あゝ、さうとも。そこのところをよく得心して置かなくてはいけない。あなたがお腰元衆に連れられて、はじめて此のお山へ這入つて、柔かに延びた髮の毛を落としたのは、あれはちやうど三年前の十二の時だつたな。

尼女 えゝ、ですけど……

老僧 あの時私が言つて聞かせた言葉は、もう忘れたらうねえ？

尼女 なあに？

老僧 あなたが、淋しい〳〵と言つて泣いてゐるから、御堂の阿彌陀樣の前に連れて行つて、これがあなたの一生のお友達だと思つてお話をしかけて御覧と言つたらう？そしてあなたさへ眞心でお話をすれば、陀度如來樣があの慈悲深い眼元で笑つて、お話相手になつて下さると、さう言つて聞かせたぢやないか？覺えてゐるかい？

尼女　えゝ。ですから私、淋しくてしやうのない時は、いつでも獨りであのお像の前へ行つて、いろんな事をお話ししましたわ。でも、お像だから、口はきかないけれど、何度も〱さうしてる内に、しまひにはあの眼をあいて、口元で笑つて下さるやうにはなりましたの。

老僧　ふん〱。ね。それがあなたの信心の通じたといふものだ。

尼女　だけど一年二年たつ内には、やつぱりだめになりましたわ。私、たゞ笑つて下さるだけぢや物足りないの。もつと生き人のやうでなくちやお友達にしても張合がないの。やつぱり淋しいんですもの。

老僧　……………

尼女　ね、私、もうあのお像ぢやお友達にならなくなつたのですよ。

老僧　そこを辛抱して飛び越して行くと、また淋しくなくなる。まことの道といふものは、さういふ所をいくつも〱通り越さなくちやならない。

尼女　でも、あの淨圓さんがいらしてから、私、淋しくなくなりましたわ。あれがほんとうの、私のお友達だつたのですよ。

老僧　いや、それもやつぱり、一時の假りの友達だ。それに迷つてはなりません。

尼女　だけど、私、淨圓さんと別なお山にゐるのはいやですよ。若し淨圓さんが丹波へ行くなら、私も一緒に行かして下さい。ね、和尚さま、お願ひでございますわ。

老僧　それはならん。

尼女　なあぜ？

老僧　…………

尼女　ぢや、私たち二人(ふたり)て、どこか他(ほか)の所(ところ)へ行きたいわ。

老僧　何所(どこ)へ？

尼女　何所へても。

老僧　…………

（此の時鐘樓から晩鐘の音が響く）

尼女　あゝ、淨圓さん………

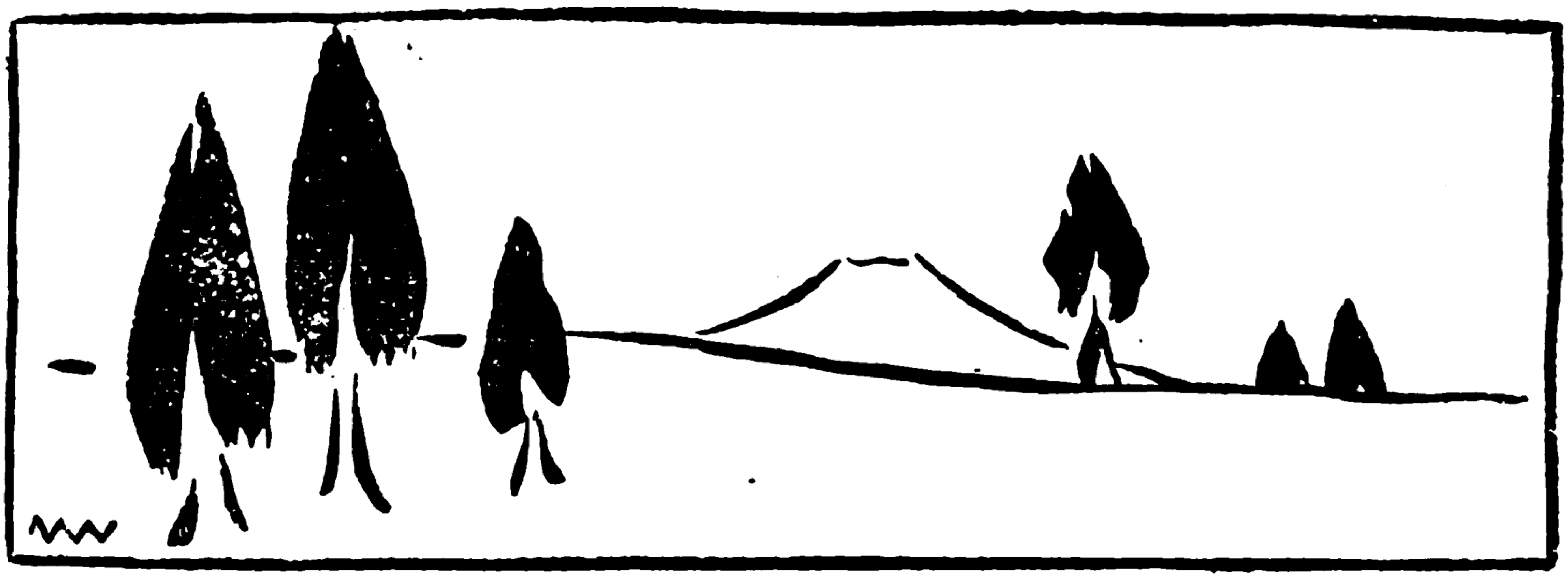
（二人は同に鐘樓の方を見上げて、じつと眺めてゐる。つゞいて一つ二つと鐘の音の傳はる中に日影が次第に黒んで來る）―幕―

△新脚本號に就て…………一記者

（一）本號に掲載せる脚本はすべて作者及び本社の許諾なくして興行することを禁ず。

（二）脚本をすべて二段組みとせるは體裁の美を損じたる點に於て、作者並びに讀者に謝せざるべからざるも、是れ比較的少き頁に、成るべく多くの内容を盛らんとの意に出てたるもの、庶幾くば其意のある所を諒として御寬恕あらんことを。

（三）我等の今回の企は、果して江湖の期待を滿足せしむる程の成績を擧げ得しか否か。こは大方の御批判を仰ぐの外なきも、少くも文壇及び劇壇に向て、一つの新らしき機運(ムーヴメント)を促すに足るべきは、我等の深く信じ、且つ大いに喜とする所なり。



立退き（一幕）

徳田秋聲

登場人物

老婆おみね（五十四五歳）
老爺（六十歳前後）
藝者小兼（二人の間の娘、二十二三歳）
木下お種（或男の情婦、廿六七歳）
天野某（地主、三十歳前後）
繁（小兼の子、五歳くらゐの男の兒）

場所　下谷の或裏町
時日　現代、六月の或日の午後

舞臺面

上手寄のところに階下は二タ室の軒の低い二階屋。奥行一間、間口一間半の店には駄菓子の箱や、線香花火、おはぢき、メンコなどの安玩具に、少許のたわし、卷紙、箒、洗濯シヤボンなどの品物がおいてあるが、半間だけの壁で仕切られた薄暗い奥の室には長火鉢などがおかれ、植木棚のある狹い庭や、低い黑板塀の上から見える餘所の藏や、緣の軒につるした古簾や葱などが明るく見透される。右手の店はづれは、水道のある路次口で、可也な大きさの銀杏の樹が、これも古い隣の羽目際に見えてゐる心持。左手には引續いて、四分板の板圍ひ、大工が其中に丁度木組をしておるとみえ、手斧などの音が聞えてゐる。その前のところに割きかけた木がつつかへてあり、割かれた材木も立かけられてある。店寄の方には、張物板が二三枚、片を張られて出てゐる。下は一面の鉋屑。

午後二時頃の暑い日が、今鋸屑の積つた道から、店頭、銀杏の幹、羽目、それから庭と土藏の白壁とに熾裂な光を投げてゐるが、銀杏の下蔭なので比較的涼風の動いてゐる心持。蝉があくと、どこからともなく暑くるしい子供の泣聲、それを叱る甲高な女の聲などが聞えてゐる。それが過むと、四下が急に閴寂して、店番をしながら、何かつゞくつてゐた婆さんが、眼鏡ごしに張物板の日脚に目をやる。そして何かぐつ〳〵獨語を言つてゐる。二階をかりてゐるお種が、いつのまにか、そこへ降りて來る。束髮のちよツとした顏立だが白粉の塗方や、着物の柄や着こなし方が田舍風で、だらしがないので、一層ヒステレー性に見える。

お種。(おみね婆さんの背後の方へきて、儚さうに柱にもたれかゝり)あゝ暑い〳〵、こゝの二階と來たらまるで蒸籠のなかで蒸されるやうだよ。それに少しとろりとしやうと思へば、あの喧ましい手斧や鑿の音が耳について些とも眠れやしないのだよ。

おみね。眞實ですね。お氣毒さまでございますよ。でも家の二階はよく風が通すつて、皆さんがさう仰つて下さいましたよ。

お種。何だか知らないが、私は昨夜も一晩まんぢりともしないんですよ。窓など閉めたんぢや晝間の餘熱で迚も眠られやしないから、徹宵開ッ放してです。それでうと〳〵したかと思ふと、變な夢なんか見てさ、魘されてすぐ目がさめるんだもの。いつかお醫者にみてもらつたら、酷いヒステレーだと言ふとだけれど、私の體はほんとにもう如何かなつてしまつたのかも知れない。(どこか東北訛のとれきらぬ言葉で、さう言ひ

ながら其處へ（亂次なく座り）あゝ厭だ〳〵、あの人は一體どうしたといふんだらうね。私をどうしやうと言ふんだらう。

おみね。それでももう、何とかいつてお寄越しになりさうなものですね。（婆さんは仕事の手を休めて向直り）何處もお金のことといふと、右から左へおいそれと言ふ譯にも行きませんからね。年取つた阿母さんや何かとお有ては尚更のこと、きつとお話が捗取らないのてございませうよ。

お種。（そこにあつた長煙管を取上げ）それにしたつて、歸つてからもう三月になるわ。四月の末には如何したつて出て來ると言つておきながら、もう後二十日でお盆が來るぢやないの。偶然としたら、私が厭になつて、體よくづらかつて了つたのかも知れないのよ。そしてもう東京へ來て、何處かにこつそり隱れてゐるかも知れないのだよ。私は如何もそんな氣がしてならないのさ。それて晩方なんか通りを歩いてゐても、些とだつて放心してゐやしませんのさ。似たやうな姿が見えると、私は急いで驅出して行つて見るんですの。世のなかには似た人も隨分あるものですわね。……愍してゐても、私はどこか其處いらにあの人がゐるやうな氣がしてならないの。……それも間違なく來ると云ふことが、確に判つてゐれば落着いてると云ふこともあるけれどもね。

おみね。（毎々のとてもう聞飽きたと云ふ風。）

お種。それに私が尋常の體ぢやないことも、丁と報せてやつて、あの人からも大變悅んだ手紙を二度もくれてるんですもの。それは親切な手紙なんですよ。入籍の手續もして、お金もどつさり持つて、來たら直ぐ世帶を持つ筈になつてゐるからなんて……それも今となつては、如何やら空頼みらしいのよ。お寺の坊さんの肝煎て、山が近々に賣れる筈だから、安心して待つてゐろ――手紙にはそんな事まで書いてあつたんだけれど、今迄延びるところを見れば、何か邪魔ても入れるものがあるに決つてゐますわ。部屋代だつて、二ヶ月分も滯らせて、私はお婆さんに

お氣毒てならないんですよ。

おみね。なあに貴女、どうせ纒めて頂きますからね。引越の間にさへ合へば、私の都合は却つて好いんてすよ。

お種。その時分迄に、どうかあの人が來てくれゝば好いてすがね。私は毎日あの手斧の音を聞されるので、氣が氣てないんですよ。

おみね。意地わるくまたお隣の普請がづん〳〵捗取るぢやありませんか。私はあゝやつて毎日〳〵木拵への出來るのを見ると、後から追駈けられるやうな心持てすよ。切めて悴が隊から歸るまてと思つてゐるんてすけれど、ね、其も如何やら間にあはないらしいんてすよ。二十年も住んてゐて、古くから顏の賣れた町内なればこそ、如何か恁か皆さんのお蔭で着たり食べたりして行かれるやうなもの、此處を立退いては、翌日から困るのは知れ切つてゐますよ。

お種。（婆さんの話は耳に入れず、自分のことばかり考へてゐる。）

おみね。こんな汚い家でもね、こゝで悴も育てれば娘も大きくなる。短いやうでも二十年の間には、色々の事がありましたよ。……私共のこゝへ逼塞したのは、亭主がまた四十二の時てしたつけが。その亭主も悴が十二の年に、旅へ出たきり行方が知れなくなつて、其後は女親の私の手一つて、二人の子供を育てゝ來ましたがね。それは〳〵私も苦勞をしましたよ。

お種。然てすつてね。

おみね。おかね（娘）が藝者に出たのは、あの子が十六の歳てしたつけ。あんな口無調法な沈んだ子てすから、初發は一向賣れませんてね、抱主も買被つたといつては愚痴たら〳〵てしたものさ。ても調法なものて二年もたつと、まあ如何やら恁やら一人前の藝者になりましてね、お蔭で悴を中學へも出しますし、まあ〳〵可かつた、此分なら私もいくらか樂ができると思つてゐると、丁度貴女と同じことてさ、お腹が大きくなつて、自家へ退いて産んだのが、あの繁てすのさ。それから人氣が落ちたものてすから、鞍

督なんかさしてみましたつけがね、矢張思はしいこともなくて、づる〳〵に足がぬけずにゐるやうなことてすがね。あの娘も、やれ兄の入營だ、やれ親の病氣だ、やれ立退きだ、何だかんだと言つちや、苦しいながら工面もしなけあならず、眞實に仕合のわるい子でございますよ。それから見れば貴女は堅氣てゐられるだけまだ〳〵幸てすよ。

お種。何が幸なもんてすか。（ヒステレックな笑方をして）私くらゐ亭主運のわるいものも、まあ多度はありますまいよ。一番目の亭主には死訣れるし、二度目の亭主は、意氣地がない癖に、おそろしい嫉妬家て厭て〳〵堪らなかつたから、到頭そこを逃出して東京へ來て、漸う運よくあの人と一緒になつたかと思へば、この始末てせう、私の體も先は如何なるか判りやしませんよ。考へると眞實に氣が鬱々してしまふ。寧そ段梯子からでも落こちて、怪我てお腹の子がおりてでもしまつたら、どんなに氣が樂だらうと、私はそんなことを考へたり何かしますね。

おみね。飛んでもない、貴女、そんな事をして、旦那がお歸りになつたら、申譯がないぢやございませんかね。

お種。どうせあの人は駄目てすよ。あの人の氣が變つたか、親類で故障を入れたか、孰にしても望はありやしませんよ。それに私は三つも年上だから、たとひ一緒になつても、長いうちには飽かれる時が來るに決つてゐますよ。

おみね。然ういつてゐた日にはね‥‥。

お種。でも然てすよ。加之あの人だつて、話程の財産家でもなささうてすからね。

おみね。でも貴女、おかねなんぞ何のくらゐ可美しがつてゐるか知れやしませんよ。

此時涼しい方に寢してあつた繁が目をさます。そして魘はれでもしたとみえて、しく〳〵厭な泣聲を立てる。

おみね。お〻目がさめたか。好い兒〳〵。

お種。（額をしかめて、じつと子供の方を見てゐる。胸を壓されるやうな心持。）

するうち紫は泣きながら側へ寄つて來る。尫弱さうな蒼白い顔で、目ばかりぎろ〳〵してゐる。手足も繊弱で、體が小さい。

おみね。さあ〳〵、婆ちやんが抱こしてやるから此處へおいで。何ぞまた可怕い夢でも見たのぢやないかえ。

子供はおみねの膝に抱かれて、まだしく〳〵泣いてゐる。手斧の音が、悲しげな懈い調子で傳つて來る。

おみね。（子供の頭を撫ぜながら）もう可い〳〵、婆ちやんが抱こしてゐるよ。どこにも可怕いものなんかゐやしないよ。お目醒にお菓子をやらうかね。厭だといふのかえ。お湯が呑みたいのかい。

紫。（頷く）

お種。よし〳〵おばちやんが汲んであげませうね。（お種湯を汲んでちよつと加減を見て差出す。紫は手斧の音に耳を澄ましながら、それを飲む。手斧の音が急になる。

おみね。坊やが體が弱いので、お婆さんも苦勞が絶えないよ。これて大きくなつたら、些とは丈夫になるか知ら。

お種。この子の御父さんは：（ふいと口を辷らして、急に氣附いて默込む。）

おみね婆さんも默つて、子供の顔を眺めてゐる。

駄菓子を買ひに來た子供。くんな。

おみね婆さん、紫を傍に坐らせて店へ出て來る。子供は店晒しの李を幾顆か受取つて、それを眺めながら、はた〳〵上手へ入る。野育ちの汚ならしい子供である。

おみね婆さんは、立つた序に、外に干してある張物板を少し位置を替へる。日がや丶移りかけて來た。

お種。あら厭だ〳〵、子供なんか産みたくないね。

お種さういつて獨語ちながら、くさ〳〵する面持で起上ると、壁の蔭になつてゐる段梯子をみし〳〵上つて行く氣勢。

大工が一人、外に立かけてある材木を取りに來る。そして店頭をちよつと見て、知らん顔をして入口から入つて行く。

おみね。（忌々しさうに、其方を眺めてゐが、）厭なこつた、こ丶を立退くなんて。それに此の古い銀杏の樹まで切つて了ふなんて、眞實に思斷りのい丶人達だ。先代の地主さんは、己の目の黑いうちは、根繼をするまでもお前の家は滅多に壞しやしないから、いつまでも居てくれと、始終然う言つて下すつたつけがね。

それがあの子息さんの代になるかならずに、もう此始末さ。己の地續には、吝つたれな十文菓子屋なんかは、店を出さないだの、今に埃々した此町を綺麗な立派な通りにしてみせるだの、人の氣も知らないて、若いものといふものは、眞實に物數好きなものだ。

そこへ地主で家主の天野菜、工事見廻りに來る。パナマの帽子を冠つて、口許の美事な學校出らしい青年紳士、質素な風だが金縁眼鏡をかけて紙捲を燻らしてゐる。

おみね。お暑うございます。

天野。暑いね。一體今年は例年よりか暑いやうぢやないか。

おみね。然よでございますね。(少し不機嫌の面持)

天野。如何だね、どこぞ適當な家が見つかつたかね。

おみね。それが貴方、なか／＼見つかりさうもございませんのでね。何しろ店が利いて、それでお家賃のお安いところと言ふのでございますからね。

天野。それも然うだ。しかし婆さんも、こんな處に住つてゐたんぢや、迚も好いことのある氣遣はありやしないよ。先づ第一に、この古い銀杏の樹の枝葉が、まるでこの家を閉塞げてゐる。そして路次はいつもじめ／＼してゐるばかりだ。町の空氣が、そのため豁如としない。己はこの陰氣くさい樹がいつからか氣になつてゐたんだ。婆さんにしたところで、二十年もこゝに粘着いてゐて、何が一つ幸になつたと云ふこともかなつたやうだからな。

おみね。其れどころか、不幸續きでございましたよ。ても矢張り住馴れた土地に離れて行くのは、餘り好い氣持のものぢやございませんからね。

天野。さうかも知れないな。でも偶には飽々することもあるだらう

おみね。それは私だつて、もつと綺麗な家に住んだらばと思ふことも、偶にはございますよ。それに貴方、ふいと家を出たきり、十年間と云ふもの、家を振顧いてもみないあの爺さんの思斷のいゝのにも呆れますが、私もあゝ云ふ氣持になつたら、どんなにさば

〳〵して好いだらうと思ふこともございますがね。

天野。さう〳〵、己にもあんな人間の氣持は迚も解りやしない。

おみね。然よさ。可恐しい道樂ものでしたからね。ても倅や娘のためには、居ない方が結句僥倖だつたかも知れませんのさ。

天野。ちつとも音信がないのかね。

おみね。あの當座、濱松邊の後家さんの宿屋へ帳附に住込んでゐるのを、確かに見たと云ふ人もございましたつけがね、持つて産れた病ですから、長續きのする氣遣はございませんよ。きつと方々流れあるいて揚句の果はどうせ碌な死樣もしますまいよ。私も時々夢には見ますがね、その時が此世の暇乞に來たんだらうと、さう思つちや諦めてをりますよ。

天野。（詰らなさうな顏をして）それは然うと、今話すやうな次第だから、此月の末には如何なことがあつても明けてもらいたいと思ふのだが、その心算にしちやあるんだらうね。

おみね。どうか然したいとは思ひますがね、何しろ貴方……

天野。まあ然しておかう。其時になつて、一日や二日は、また如何にでもなるからな。左に右早いほどがいゝ。己は親父の代から持つてしたこの邊の埃つぽい家を見るのが不愉快で堪らんのだからな。よくもまあ親父は、こんな襤褸糞長屋を、幾軒も〳〵保存してゐたものだと思ふよ。

天野はさう言ひながら、そこらを見廻して、普請場の方へ徐々入つて行く。

いつか二階から降りて來たお種が、店頭へ出て來る。

お種。へえ、またあの地主が催促に來たの。

おみね。催促と云ふ譯でもありませんがね、矢張來月から手を着けるんださうですよ。

お種。それぢや私だつて、恁しちやゐられないわ。——それも有るし、今度こそは必然返事をするやうに、私田舍へ手紙を書いたのよ。これで何とも言つてよこさなければ、もう望はないものと諦めるより外な

いんだわ。其時が來れば其時て、また如何にかなるだらう。（お種封筒の宛名を見ながら。下駄を突かけて外へ出る。）

お種。こんな巧い恰好をして、晝間表へ出られる風ぢやありやしない。（言ひながら退場）

板圍ひのなかでは、手斧の音などが、連りに聞える。

おみね。些とは風が出て來たやうだ。

おみねは獨語しながら、店へあがつて行く。そして子供の傍へ寄る。繁は漸と氣分が分明したらしく、婆さんの持たせた十文菓子を掌に掴んだまゝ、そこいらを歩出す。緣側の方へ出てみたり、婆さんの方へ駈寄つたりしてゐたが、おみねは時々子供に何か言ひながら、そこへ横になつて、何時の間にかうと／＼する。子供は淋しさうに其傍に足を投出して、何やらせがむらしかつたが、此も旋て横になつて了ふ。暫くすると天野が普請場から出て來て、無言のまゝ店前を通り、銀杏の幹を眺めながら、上手へ入つて行く。

日が段々とかげつて、そこらに蔭が出てくる。

そこへ一人の老人（家出した親爺）古いパナマの帽子を冠り、すぼめた蝙蝠傘と扇子とを持ち、四邊をうそ／＼見まはしながら出て來る。六十ばかりの爺さん。

老爺、家のなかを、おづ／＼覗込んでゐたが、何もかも昔のまゝだと云ふ心持で、店頭にある古い緣臺へ來て腰かける。そして帽子を取つて汗を拭いてゐる。

老爺。この町ては、あらかた人が變つたやうだが、角の八百屋、彼處の酒屋さんては、見覺えのある顏が見えたやうだ。家の婆さんもまだ死ずにゐた

繁が起上つて、店口へ出ると、碧ずんだ大きい目を睜つて、不思議さうに老爺の様を眺めた。

繁。お婆さん／＼、餘所のお爺ちやんが來たよ。

老爺。お前は家のものか。よし／＼起きん方がよい。寢しておけ／＼。（老爺はさう言ひながら子供の顏を眺めて、）して見ると、お前は己の孫だらう（目などは娘に酷肖だ。お前の阿母さんはゐるかえ。

繁。（怪訝な顏をして頷く）

老爺。どこに居るな。

繁。餘所にゐるよ。

老爺。さうか可し／＼。（四邊を見まはしながら、路次口の方へ行つて水道の水で口など嗽ぎながら、老銀杏を見あげてゐる。）

おみね。（目がさめかゝる）坊や誰か來てゐるかえ。

繁。餘所のお爺ちやんが來たよ。

おみね。何か言つてゐたやうだつたね。（四邊を見まはし）

些(ちつと)は風が出て來たやうだ。二階のおばさんは……。
またどこかで油(あぶら)を賣つてゐるのだらう。

繁。あすこにお爺さんがゐるよ。

おみね。(其方を見やりながら)誰だか知らないんだよ。
(段々目が分明して來る)何だか家(うち)のお爺(せい)さんのやうだよ。

老爺。(絞つた手拭で頭や手首を拭きながら)目がさめたのか。
己だよ。

おみね。(乗出し)妙なことがあるものだね。

老爺。己もさう思ふよ。

おみね。今うと〳〵してゐると、何だかよく似た聲がすると思つたよ。其ぢや矢張りお前さんだつたのかえ。

老爺。お婆さん、久(しばら)くぶりだな。

そこへお槙が歸つて來る。お爺さんはそれをお餘かと思つて見つめたが、さうでないことが解つたので、(まあ御免なさい)といつて上へあがる。

(幕)(降りると直ぐ開く)

一週間後の或晩方

下手の板圍のなかには、もう新しい棟が建つて上手の銀杏の樹が、太い根を少許殘して悉皆切取られてある。其木の枝などが板圍ひの前のところに幾束にも縛られ積んである。何となく慌忙(あわただ)しいやうな氣分。雨催ひの蒸暑い晩。

幕があくと。おみね婆さん、白地の單衣を肌ぬげになつて、袖なしの襦袢で水道のところで米をといでゐる。そこへ近所の内儀さんが水を汲みに出て、一つ二つ話を交へてゐる。

内儀。此分ぢやどうやらお潤(しめり)が來さうでございますね。

おみね。どうか一雨降(ひとあめふ)つてくれゝば可うございますがね。

内儀。何だか銀杏の木がなくなつたら、そこいらが急に豁如(からり)としすぎて、一層暑いやうぢやありませんか。木を切るのも好し惡しでございますね。

おみね。さうですよ。吹拂つたやうで、變(へん)なものですね。それに、たとひ木でもあのくらゐ古くなりますと、切卸されるのが何だか餘り好い氣持ちぢやありませんね。

この内儀さんと殆んど入違ひに、娘小兼がやつて來る。手にはパラソルと繁への土産の玩具の包みをさげてゐる。除りはきく/\しない女だが、調子がいくらか浮ついてゐる。店頭から上らうとしたが何だか様子が變つてゐるので、輕い驚きを抒つて四邊を見まはす。

小兼。何だか變だと思つたら、あの銀杏がなくなつて了つたんだわ。まだ立退きもしないうちから、木を切つてしまふなんて、随分ね。（獨語をしながら、母親を見つけて、そこへ寄つて行く）阿母さん私てすよ。

おみねちよいと。振顧いて、また水をきつてゐる。

おみね。お前かえ、大層おそがけだね。

小兼。今ちよつと……お父さんに逢つてきませうと思つて。お父さんは眞直に歸つて來たの。

おみね。あゝ、私ゃ全然夢のやうなんだよ。

小兼。でもまあ無事で逢へるなんて、有難いぢやないの。随分變つたらうね。

おみね。さうさね。思つたほど變つてゐないがね。

小兼。それて如何な様子なの。酷い風てもして來やしなかつたの。

おみね。何だか私にはお爺さんの様子は薩張解りやしないよ。でもまあ普通の身裝はして來たよ。私も何だか腹が立つから口も碌々利きはしないし、先方も東京にゐる氣はないらしいのだよ。

小兼。まあ今ても然なの。

おみね。お前にてゐ逢つたら、何か話が出るかも知れないけれど、來てから今日でもう五日にもなるのに、私には何の話もしやしないよ。

小兼。如何したと云ふんてせう。今居るの。

おみね。今お湯へ行つて、頭髪を刈つて來ると云つて出て行つたがね、何だか東京に用事もあるやうな様子てすよ。まあ上つて待つておいてな、今に歸るから。繁坊も今日はまた少し加減がわるくて寝てゐるし……。

小兼。また不可いの。あの子はどうして然う弱いてせう。育つか如何だか解りやしませんね。（不安さうに家の方を眺める）

あの聲を聞くと、おや、めそ/\泣いてゐるやうだわ。お座

敷へ出てゐる時だつて、ふつと繁坊のことを思出すと厭な氣がするんだよ。私はどうして此頃態だらう。繁坊を産まない前は、こんなでもなかつたのに、あの子が出來てからと云ふもの、氣の浮々するやうな日といつては、唯の一日だつてありやしない。あの時から私の心は悉皆曇つてしまつたんだわ。

おみね。それも誰の所爲でもない、お前が惡いのだよ。あの病身な體をあれだけにするのは、如何して〳〵生易しいことぢやありやしないよ。あの子が可愛い一心で、面倒が見れたやうなもの〻、考へてみれば私も隨分割の惡い方だよ。私は今もこゝでお米をとぎながら、そんな事を考へてゐたところだよ。寧そお爺さんのやうに、何も彼も棄てゝ、他人のなかへても出てゐたら、どんなに氣樂だらうと……。

(桶の鉢へ手をやすめてゐる)

小兼。それは阿母さんも、隨分つまらない身の上だわ。

おみね。この年になつて、居るところにもまごつかうとは、まさか思やしなかつたよ。何時になつたら私の體は樂になるんだか。

小兼。だつて今更そんな事を言つてみたつて爲方がないぢやないの。幸の惡いのは阿母さん一人ぢやないんですもの。私だつて、隨分人の知らない苦勞をしてゐるわ。それも充分藝でも仕込んでおいてくれたのなら、いくらか肩身も廣いでせうけれど、それがないんですからね。

おみね。藝事は、お前あ餘り好きな方ぢやなかつたからね。

小兼。その時分は、私だつて慾がなかつたんですもの爲方がないわ。

(そこらが段々暗くなつて來る。おみね婆さんが桶をさげて裏口の方から入る間に、小兼は店口から上る。)

小兼。(薄暗い蚊帳を覗いて)まあよく寢てゐること。

(小兼呟きながら、鬱陶しさうに團扇を取上げて、蚊を拂ひ〳〵膝を崩して座る。)

小兼。それは然うと、二階のお種さんは如何したの。田舍から音信があつて?

おみね。(臺所の方から聲が聞える)あの人も、案外暢氣な人だよ。男に好いやうにされたんだといつて、一日焦〳〵燥してゐるかと思ふと、少しお小遣でもあれば、それてまたけろりとして、近所を遊びまはつてゐられ

るといつた風なのさ。翌日のお米がなくても平氣なものさ。近所の評判だから、當にはならないけれど何ても此頃は旦那が出來たとか、どこかへ稼ぎに出るとか……まあ其樣こともあるまいけれど、此先の下宿の書生さんと、時々一緒に歩いてゐたと云ふこともちらと聞いたよ。

小兼。へえ、あの體て……

おみね。あの人だつて田舎には親も兄弟もあるのに、そんな事までしなくたつて。（手を拭き〳〵臺所から出て來る。そして長火鉢の前へ座つて、火を興しなどする。）今晩も、日の暮前にお湯へ行つて來て、こて〳〵お化粧をすると、ふらりと何處かへ出て行きましたよ。——如何するつもりだかね。

小兼。それて家は何時引越すの。

おみね。引越すにも引越さないにも、私はお前の懐ろあてなんだから、お前の都合のつき次第、家を捜さうと思つてゐるのてすよ。

小兼。（默つて煙管に莨をつめてゐる）

おみね。尤も阿爺さんも少しは持つてゐるやうだから、話をしたら助けてくれない事もあるまいかと思ふけれど……その位のことはしても可いのさ。長いあいだ私達を、散々な目に逢したのだ。

小兼。私も其心算はしてあるのよ。だけれど、つい此間も兄さんに少し纏まつたお金を送つたし此月は買物が多かつたものですからね。

おみね。私もこゝを動くのは眞實に厭なんだけれど、泣いても笑つても、月一杯には立退かなくちやならないことになつてゐるのだから、其つもりで、どうか外れないやうにしておくれ。私はお前ばかりが頼りなんだからね。

小兼。私もそれは知つてゐますよ。（間をおいて）神田の人が來てくれさへすれば、その位のことは如何にでもなるんだけれどもね、あの人もお店の首尾が惡くなつたとかいつて、近頃は些とも來てくれやしないし……私も何だか此頃は先のことが案じられて爲方がないのよ。自分て自分が可怖いやうな氣がする

のよ。お酒でも飲んで燥げるやうだと眞實に好いんだけれど……。

おみね。……

小兼。阿母さんも私のやうなものを、藝者にするなんて間違つてゐるのさ。

おみね。そんな事は、阿母さんにだつて解りやしませんよ。お前だつて、あの時分はその氣になつてゐてだつたもの。

小兼。あの時分の私に、そんな事が解るくらゐなら、親も何にもいりやしない。

おみね。そんなことはお前、御父さんにでも言ふがいいよ。何も彼も皆なあのお爺さんが惡いのだからね。

小兼。それにしても、御父さんと阿母さんとは、如何してそんな事になつたのさ。男ばかりが惡いと決つた譯のものでもないでせうに。

おみね。だつて女道樂は、あの人の持つて產れた病だもの。

小兼。でも子供の厄介にもならずに、あゝやつて遣つて行くだけ豪いわね。

繁が目をさます、おみね婆さんは起寄つて、抱出すやうにして側へつれて來る。小兼おもちやの紐を解いて、セルロイドの人形や達磨を幾箇も、そこへ駢べてみせる。繁は氣むづかしさうな顏をして、それを眺めたが、暫くすると淋しさうに笑顏を見せる。小兼と繁と人形を弄んでゐるあいだ、おみね婆さんは又臺所へ立つて行く。そして銚子を一本持つて來て、銅壺へ浸けたりする。

小兼。お爺さんは迷子にでもなりやしないの。隨分遲いこと。お酒は矢張飲むの。

おみね。やれば飲むし、やらなければ遣らないで、催促もしない。根が遠慮ぶかい方だからね。若い時分は酒を飲まないと、人と口が利けないてんだもの。

雨がぽつ／＼降つて來る。冷こい風が部屋にも流れて來る。

小兼。おや到頭降つて來たわ。今朝から頭腦が痛いと思つてゐたら。好い氣持。(と表の方を眺めてゐる。)

そこへ老爺が手拭と石鹼箱とをもつて歸つて來る、醉がてら／＼した顏へ出てゐる。

小兼。御父さんだわ。お歸んなさい。

老爺。おゝ兼か。

小兼。どうも暫く。私早く來やうと思つたんですけれどね。それでもお變りがなくて結構ですわ。

老爺。（俛き加減に、煙草入を腰からぬいて煙草を飲み）何に、來る氣もなかつたが、ふつと思ひついて‥‥（銅壺の銚子に目をつけ）お婆さん、酒なら己は今少しやつて來たよ。

おみね。（妙な人だといふ顔をして）さうですか。それぢやまあ‥‥（銚子をあげて臺所の方へ持つて行く）家でお酒を飲んでも、お美くないと見えますね。

老爺。（傍にあつた玩具を一つ摘んで、薄暗い電氣の灯で透して見てゐる）何に然云ふ譯でもないけれど‥‥‥。

三人とも暫らく無言。風鈴の音ばかりが頻りに聞える。

小兼。でも折角つけたんですから、飲んだらいゝてせう。阿母さんも阿母さんだわ。御父さんが、あゝ言つたからつて、ぷいと銚子を引揚げて行かなくたつて可いぢやないの。

おみね。さうかえ。それは惡かつた。

老爺。（じつと俛いてゐる）まあ可いや。己もさう長くはゐない。何でも、己が來てから、三日目にはもう箸の揚卸しにも拙いことだらけだ。己は矢張今までどほり旅にゐた方が氣樂でいゝ。

おみね。（矢張臺所の方から）十年も十五年も私達を放抛つておいて、一人で好きなことをして暮してゐたら氣樂だらう。

老爺。それに違ひない。己はこゝへ來たその時から、もう後悔してゐるのだ。十年たつても二十年たつても家の厭なことは、些とも變りはない。でも、旅へ出てゐてみれて長いあひだには然でもないこともあつた。己が惡かつたと、つく〴〵然思ふこともあつた。

おみね。（獨語のやうに）何だか知れたもんぢやありやしない。

老爺。己の心が、お前に解るか。

おみね。解らないともね。私には薩張り解りやしない。私ばかりぢやない、二人の子供だつて皆なさう言つてゐますわ。

老爺。まあ可いわ。己は翌朝は早々こゝを立つて行く人間だて。

小兼。(情なさうに)それぢや御父さんだつて、餘り情がなさ過ぎますわ。

老爺。己もさうは思ふがの、どうも家が窮窟て可けない。己は衆と一緒にゐることの出來ない性分だ。

おみね。好い年をして、能くもあんな事が言つてゐられたものだ。家を潰したことはみんな棚にあげておいて……

小兼。まあ阿母さんは默つておいてなさいよ。古いことを掘返すのは善くないことだわ。

老爺。眞實だ。己もさう思ふ。それて己のこゝへ來たのも、その古いことを掘返しに來たやうなものなのだ。長いあひだ己の心に段々に薄らぎかけてゐたとが、婆あと顔を合した其時から、埃箱の蓋をとつたやうに、執固く己の鼻について來たのだ。この位なら己は矢張り此家の閾を跨がない方がよかつたのだ。

おみね。跨がうたつて、跨げないやうに追着き成るからいゝ。

老爺。先づそんなもんだ。

小兼。それは御父さんが、家にゐられないと言ふのならどうも爲方がありませんわ。御父さんの好いやうになさる方がいゝんだわ。

おみね。あゝ然うだとも。私達だつて、今日まで恁やつて來たんだもの。それに兄さんだつて、隊を出て來れば、今度は通ひになるだらうし、私は些とも心細いことはありやしない。

小兼。それはさうと、兄さんは來ないこと。

老爺。兄が來ればまた紛紜が起るに決つてゐる。己はまあ逢はずに行かう。彼奴は己のことを親でもないやうに、惡く言つてるさうだから。

小兼。それは爾かも知れないけれど、兄さんだつて御父さんのことは思つてゐない譯ぢやありませんよ。

老爺。思つてもゐやうが、怨んでもゐる。己が一人て、彼奴の運の芽を枯してでもしまつたやうに思つてゐるんだ。爾てなければ、己の來たことを知してやつ

たらたとひ嫁がぬけられないまでも、手紙の一本ぐらゐは寄越しさうなものだ。

おみね。爾うてせうとも十年も二十年も、葉書一本よこさない親もあるから……。

老爺。さう言へば、まあそんなものだ。己が家を出たのは、彼奴が漸と八つか九つの時分だ。己が如何して家を出たか、何て彼奴が知るものか。

おみね。おや如何して出たといふんですね。

老爺。どうして出た。それは今己が出て行くと同じことだ。己のために此家の居心地がわるいことは、十年前も今も變りはありやしない。

おみね。誰の所爲でこゝがそんなに居心地が惡いと言ふのだらう。

老爺。誰の所爲だか解るものか。

吹降の音が益劇しくなる。おみねは遽かに氣がついたやうに、お種が開放して行つた二階の窓を閉めに上つて行く。

親子二人きりになると、二人とも淋しい互の心を探合ふあふやうな苦しい沈默が續く。

老爺。その子は蟲氣が強いやうだな。

小粂。(含羞んだやうな顏)何ですか、世話がやけて爲方がないんですよ。お婆さんのお蔭て、如何か恁うか是までは育つては來たんですけれどね。(間をおいで)それてお爺さんは、眞實に翌朝立つんですか。

老爺。其心算だ。己のことはまあ介意はずにおいてくれ。

小粂。でも此處も近々に引越すのですから、引越先へ落着いてからにしなすつたら如何でせう。

老爺。さうも思つたが、矢張り深入りしない方がいゝやうだ。己も婆さんや子供のためには、餘り好いことをしたとは思つてゐない。運わるく商業に失敗して、こゝへ逼塞してからは、何をしても碌なことはなかつた。また己が少し調子よく遣出さうとすると、婆さんが何時も己の出鼻を折つてしまふ。己も自分の仕事に飽きつぽいのか知らないが、婆さんにも厭な癖が澤山ある。それをまた素直に言つて聞かせたり、直してやつたりするほど、己は人の世話のやけ

るやうな人間ぢやない。そして一圖に、一緒にゐるのが厭になつて了ふ。それが己にも段々分明して來た。年を取れば取るほど、己は不思議と薄情な人間になつて了つた。婆さんは婆さんて、己を信じなくなつて了ふ。さうだ、丁度熟しきつて、敗りかけた果物が、木から落ちて潰れるやうに、己達の中には、お互に繋合ふ力と云ふものが全然亡くなつてしまつたのだ。思出しても厭な氣持だ。

小兼。お爺さんは、自分獨りて然う思つたんてせう。

老爺。さうだ、己も餘り物事を氣にかけないてゐられる方てもなかつた。それて己は或時、ふいと旅へ出た。言ふまでもなく、それは己の產故鄕へ金策に出かけたのだ。

小兼。阿母さんが善く其事を言つてゐますわ。酷工面をして旅費を拵へて、それきり御父さんは家へも寄りつかなかつたんですつて。

老爺。まあ然うだ。だが、それは其時の出來心ばかりぢやなかつたのだ。それまでに己は幾度そんな事を考もし、婆さんに言ひもしたか知れやしない。つまり其が婆さんのためにも好いと思つたからだ。それて婆さんが承知してくれさへしたら、己は二人の子供を引請ける心算だつた。

小兼。然すれば、私達は必然繼の阿母さんの手にかゝつたらうつて、阿母さんからそんな事も聞きましたわ。

老爺。己も確かに其の方が、優だと思つたこともあつた。

小兼。御父さんは其れほど阿母さんが厭だつたんてすか。

老爺。……。

小兼。そんな事は、私には迚も考へられませんわ。世間の夫婦は咸な爾てせうか。

老爺。己も世間のことは知らない。だが大なり小なり……。

みしり〳〵と、おみね婆さんが段階子を降りて來る跫音がする。二人は默つてしまふ。雨が少し小降りになる。

小兼。雨が霽つたやうですね。もう遲いてせう、私は歸りますわ。

おみね。何に、まだ九時になりやしない。今夜は泊つて行つても可いぢやないか。繁坊が加減がわるかつたと言つておけば……。

小兼。お爺さんが、どうしても翌朝立つと云ふのなら、私も然うしたいと思ひますけれど……。

老爺。己のことなら介意はずにおいてくれ。何時までゐたつて同じことだ。

小兼。それは爾てすけれど……でも人間はいつ死ぬか解りませんからね。

老爺。それも然うだ。己はこの家のためには、どうせ死んだも同然の人間だからな。

小兼。ても然うも行きませんわ。阿母さんだつて可哀さうよ、づいと獨て遣通して來たんてすからね。

老爺。已も少しは其氣が出るかと思つて、それを心當てにしないでもなかつた。來てみれば、來ない方が矢張り優だつたのだ。それが己に分明解つて來たの

小兼。それぢやお爺さんは、これ限りもう來ないとても言ふんてすか。

老爺。先のことは己にも解らない。だが己の死場所だけは拵へておく心算てゐる。(間をおいて)己はもう眠くなつて來たやうだ。今夜もあの女が歸らないやうなら、二階へ寢してもらふとしやう。(老爺は欠伸しながら厠へ立つて行く。雨が全く霽つて、星の見えだした空模樣を見て)滅切り涼しくなつて來た。此分ぢや今夜は心持よく寢られるだらう。

小兼膝に凭れかゝつてゐる繁の頭を撫でながら、ぼんやりしてゐる。

小兼。(母親と一緒に溜息をついて)何が何だか薩張解らなくなつて來た。事によつたら私旅へ出て、一ト稼ぎして來やうか知ら。さうしたら多少氣がかはるかも知れない。

おみね。それも可いだらう。來て私をおいてくが可いのさ。

おみね二階へ床を延べに立ちあがりかけて、遣瀨なげに袖を顏へあてゝ啜り泣く。(幕)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■近代評傳叢書■

第一篇

第二篇

ドス…イ

偉大なる…には特異なる…生涯を知らねば…。其に於いて…味ひを體得するために作家の生涯、作物、精神、人格等其の他諸種の方面より觀察評論して日本の…逐次刊行する）

加能作次郎氏執筆
〔長谷川潔氏装刻〕
携帯型瀟洒本
定價金五拾錢
〔郵税金六錢〕

瀬戸義直氏執筆
〔長谷川潔氏装刻〕
携帯型瀟洒本
定價金五十錢
〔郵税金六錢〕

吉江孤雁先生新著

霧の…

■清新

…して…るく…感じ何ともいへぬ…に深…力に於つて深刻さを増して居る本書は著者近來の一進境を示して居る。（批評）

…入…金九拾八錢

國民新聞評

自然の熱愛者なる著者の旅行記には他に見るべからざる生命の顫動がある、微妙であるけれども深く喰ひ入る力がある、最も新しい旅行記と言ふことが出來る旅行季に入り此の好著の出でたるを喜ぶ。

發行所 東京神田區錦町一丁目 振替東京一四二三番 中興館

信用なき店舗及び華麗なる賣品の廣告掲載は謝絶す

小山内薫譯

近代劇五曲

我が斯劇壇に貢献せられたること多大なる、自由劇場主事小山内學士は、世界の名著五曲を撰び、學士獨特の譯筆を以て大成せられたるは本書である。此五曲中多くは既に東都の各劇場に實演して大喝采を博せしものなるが、何れも本書を以て臺帳としたるものである、又譯述の適確なるは既に定評あるところで、優良なる劇本として日本唯一といふも過言ではあるまい。

第三版 菊判三百五十頁一冊 價金壹圓 郵稅八錢

荒木秀一著

近代劇物語

近代劇は近代人の血である、生命である、最新思想開拓の跡である、現代思潮の方向である。時代に先んぜんとする者は必ず近代劇を心得ねばならぬ。本書は近代の代表的傑作をよく讀みこなし、之を物語風に書き改めたもので、一讀すれば普通小説を讀むが如くに、すら〱と全篇の意義を味ふことが出來る、本書の特色これである。

第一巻 四六判 價六拾五錢 郵稅八錢
第二巻 七月下旬發刊

東京京橋區銀座壹丁目 **大日本圖書株式會社** 郵便振替口座東京二一九番

(中付の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 高山樗牛遺稿
姉崎嘲風 畔柳芥舟 笹川臨風 共編

增補縮刷 樗牛全集

第壹卷に於て江湖未見の材料實に約七割を增補して價値倍蓰

第壹卷 美學及美術史

近時文壇の寂寞を突破して一瀉千里第四版に進む

口繪 樗牛小照、樗牛筆蹟、龍華寺墓地本文寫眞版挿圖木版凸版等二十餘個

總紙數八百七十頁

天金 寸七分 横 寸 四六判 美装函入

全五册 壹圓卅錢 分送料十錢

〔第九册〕 文藝叢書

演劇脚本集

饗庭篁村校訂

菊判 クロース 天金美装 畫挿入 紙數七百二十餘頁

正價金壹圓 送料十錢

■內容■

△娘孝行 紀富永平兵衞 △御曹司初寅詣 △傾城壬生大念佛 △水木辰之助餞振舞 △けいせい三の車（以上）近松門左衞門 △傾城一張弓 津村治兵衞 △隅田川花御所染 △上染久松色讀販（以上 鶴屋南北 △富岡戀山開 並木五瓶 △傾城筑紫琴 奈河清助 △伊勢音頭戀寢刃 近松德三 △宿無團七時雨傘 並木正三 △京ひながた

（中付の三）

東京市本町 博文館 振替二四〇番

信用なき店舗及ひ卑猥なる賣品の廣告掲載は總て謝絶す

最新刊

第一高等學校教授 文學士 [illegible]

現[illegible]

菊版上製箱入
四百餘頁
定價金壹圓五拾錢
送料金十二錢

内容の如何に豐富にして有益な[illegible]に見よ
上編 心理學の過去及現在[illegible]研究の略史、第二章變態心理學、
第三章動物心理學、第[illegible]章兒[illegible]心理[illegible]社會的心理學及民族心理學。第七
章生理的心理學及實[illegible]的心理[illegible]八[illegible]
下編 精神機能の概說。第九[illegible]本能及智識。第十一章感情及情諸
第六章「社會心理及民族心[illegible]」の[illegible]社會心理學の假定―社會心理學の研究事
項―個人意識と社會意識との交[illegible]―社[illegible]的暗示―群衆の心理―暴徒の心理―
流行―群衆に於ける暗示の勢力の大なる[illegible]―群衆精神と社會精神との差異
―日本軍隊の優秀なる所以―[illegible]る[illegible]―[illegible]拾[illegible]項
第十章「習慣、本能及智識」の[illegible]效果―本能の意義―本能
的動作の特色―本能の起源―[illegible]と人間の[illegible]―本能に關する教育上の注
意―本能の形式を變化する[illegible]素―智[illegible]の[illegible]利と[illegible]の材料と形式―動作と智
識との關係―人類の智識的進步[illegible]

帝大教授文學博士
藤代禎輔
先生新著

[illegible]

高尚なる趣味を求むる[illegible]を有[illegible]もの、又は圓滿なる人格

四六版上製函入
紙數五百餘頁
定價金壹圓三十錢
送料金八錢

(中付の四)

發行所 東京府下大久保町西大久保二五八 **不老閣書房** 振替口座東京二七〇二壹

公論

國民生活の一様式としての演劇

楠山正雄

一

又しても私達の考の糸口が西洋人の議論から引出されなくつてはならないことを私はまづ悲しみたい。しかし今日は外國人の書いた演劇批評を飜譯して自分の國の芝居を批評してゐる時である。私がこの論文を書く動機が、或る獨逸人の議論、それもほんの一寸した思ひ付きを出たらめにしやべつたらしい議論から出た、としてもそんなに恥づかしいこととてもなささうである。

或る獨逸人といふのは、この春日本へ遊びに來た、ハムブルク市立劇場の文藝主任カルル、ハアゲマン氏のとてある。議論といふのは、氏がいろいろの會合や座談の席で發表した、『日本の古典劇——能と歌舞伎とには立派なStil（スチル）がある、日本で現今流行してゐる歐羅巴劇の模演には何のStil（スチル）もない。』といふ議論である。この外になほ、氏のいろいろ言つたことは、修辭の巧妙はあるが、內容はいつもの外國の觀光客の感想であつて、日本人の書いた小說を外國語に飜譯して讀み直したと同様な、一寸物珍らしい感じがするだけのものだつた。ただ氏が演說や談話に屢用ゐたStil（スチル）といふ言

葉——ハアゲマン氏ばかりてなく獨逸の劇評家の好んて使ふ珍らしくもない言葉は、大にだらしなくなりかけてゐる日本の劇場關係者、殊に「新らしい芝居」の運動をやつてゐると思つてゐる人達の耳に、やや鋭く響いたやうてあつた。

餘計なことのやうてあるが、六月の『早稻田文學』に載せた島村抱月先生の『演劇の型』といふ講演筆記を讀むと、先生はハアゲマン氏の言つたStil（スチル）といふ言葉を、能や歌舞伎で言ふ型の意味に解して、舞臺の所作の約束をいふもののやうに說いて居られるが、これは誤解、とはいへないまでも、少し狹い意味の解釋てはないかと思はれる。獨逸の劇評家が、たとへばハウプトマンは優しい濃やかな情緒を持つた詩人てはあるが、dramatische Stil（ドラマチッシェ スチル）に於いては、イプセンを眞似てそれから獨立した大きなStilを創り出さなかつた、とか、それよりも人間味に於いて一層狹くなつてはゐるが、戲曲製作のStilに新機軸を開いたのは、メエテルリンクてある、乃至、ホオフマンスタアルてある、エデキンドてあるといふ、この場合、Stil（スチル）の意味を、歌舞伎の通人が、『紙治』の出に、花道の七三て、草履を前に滑らすのが末廣屋の型て、うしろへ脫ぐのが雁次郞の型だなどといふ、それと同じやうに解するとはてきさうもない。即ちStil（スチル）は部分的な舞臺上の所作の約束、といふよりも、乃至その綜合とかその結晶體とかいふよりももつと意味の大きい、單に作風とか藝風とか言つたのても足りない、もつと個性的な、獨創的な、やはり建築史家のいふ樣式、といふ語に近いものてある。そして美術史上の樣式が、一人の異常に偉大な天才か、一個の異常な特色のある時代の創造てあるやうに、演劇の樣式も、天才の創造なしには、又は時代の生活の大きな背景なしには、そして相應に長い「時」の試錬なしには、生まれるものてはないのてある。今日の日本に現存する、舊い演劇の樣式は美しい殘骸てある、新らしい演劇樣式の試みは、將來にほんたうの完成した新らしい樣式を生む胚芽の一分子に成り得るか否かすらも疑はしい、醜い混沌てある。ハアゲマン

氏は、市村羽左衛門の「勸進帳」にはstyleがあるが、松井須磨子の「復活」には、style（スチル）がないと評したさうである。「勸進帳」はなるほど新らしい生命のない骨董品ではある。しかしともかくも四肢五體の滿足な、三百年の德川期文明の國民生活の樣式を代表した藝術である。今日に生命がないと言つても、これを演ずる俳優に或る程度の同感と、傳習的の技術とがあれば、相應に力強く、過去の幻影を復生させることもできるのである。しかし殘念ながら「復活」には、國民生活の背景がない。吾人の眼前に新らしい生々した幻影を復生せしむるだけの力強い、完成した樣式がない。私達はあの芝居から、トルストイの暗示しようとした新らしい世界を發見しないで、却つて私達の過去の暗い國民生活を思ひ出させるやうなセンチメンタリズムを探じ出して强ひて泣いた。私達の前には新らしい生活は展げられないで、却つて「カチユウシヤの唄」の哀しい日本メロディイが耳に殘つた。それだから「復活」の出來が惡いといふのではない、ただいつまでも何にも新らしいものの與へられないことをだれつたく感ずるのである。話の序だから「復活」を引き合ひに出したまでであるが、決して「復活」には限らない、最近四五年間、日本の劇界に起こつた新運動が、段々新らしく自由な方へは展びないで、舊い窮屈な方へと縮こまつて行く、いつまで經つても新らしい演劇の樣式は生まれないのをだれつたく感ずるのである。立派な藝術の樣式の生まれないのは、背後に立派な國民生活の樣式を持たないからである。嘗ては一切の過去の幻影を破壞するつもりで起こつた新劇運動が、日に日に却つて過去の幻影に吸ひ寄せられて、自分では新らしい樣式だと思ふものがその實忘れられてゐた過去の樣式の模倣を出てないやうな有樣になつて來てゐるのは、畢竟過去の藝術の樣式が遙かに創新で遙かに豐富だつたからである。その背後の國民生活が或る意味で遙かに偉大で、遙かに徹底的だつたからである。私は理論としては藝術の世界化を信ずる。偏狹な固定的な國民性の議論を以て藝術を律しようとする企の愚昧であるこ

とも知つてゐる。だから、國民性とは言はない、しかし大なり小なり背後にしつかりした國民生活の樣式なしには、立派な藝術の樣式は生まれない、これは何度でも繰り返して言ふのである。

二

今日まだ徳川期の文明が生んだ國民生活に對立すべき新らしい國民生活の樣式は出來上がらない、將來も少くとも私達の生きてゐるうちには或ひは出來ずにしまうかも知れない。そのくせ明治から大正へかけて新らしい國民生活の樣式を作り出さうとする努力は絶えず行はれて來たのである。純然たる東洋風の雰圍氣から離れて、歐羅巴人とともに歩まう、歐羅巴人のやうに生活しようといふ運動の三度まで起こつたのは正しくこの努力の現はれに外ならなかつた。この運動の第一に現はれたのは、明治初年、征韓論の前後を中心とする運動であつた。しかしこの時は國民生活の中へ外國の文明をうけ入れようとする要求がほんたうに内から動いてゐるのではなかつた。あくまでもヂレッタントの態度で、善惡無差別に新らしいめづらしいものを小供のやうに珍重した時代だつた。ピアノ一臺手に入れるために先祖傳來の家屋敷を賣ることを吝まなかつた時代だつた。それだけ舊い物に對する執着も思ひ切つて薄かつた。不忍池を埋めて水田にする計畫がまじめに考へられたのもこの時代だつた。第二の運動は、條約改正前後、例の鹿鳴館時代である。この時は國民生活の革新といふことがやや計算的に考へられた。男女の自由な交際が奬勵せられ、不器用な婦人の洋裝が流行の粹と考へられた。しかし内面的に歐羅巴人の生活と脈々相搏つところがない、ただ外形的な衣食住の改良を以て、歐化主義の新生活を打開し得べしと考へたのは、明治初年のヂレッタンチズムに幾歩をも進め得ない輕浮な考であつた。前には、封建思想の繼承者であつた征韓論者の一派、後にはその脈を引いた東洋主義の國粹保存論者の一派の反抗運動に遭つて一蹶、元の杢阿彌に歸つてしまつたのは畢竟根柢が弱かつたからである。かうして第三に起こつた運動は、日露戰

爭後、所謂思想界の自然主義運動を中心とする國民生活の革新運動であつた。日露戰爭は滿洲の平野に東西の國民の親しく相接觸する機會を與へ、破壞せられた東西文明の障壁を越えて、西歐の新風氣は自由に東洋の島國を見舞つた。歐羅巴人とともに歩む運動が、更に一歩を進めて歐羅巴人のやうに考へようとする時代になつた。新らしい國民生活の様式を內から徐ろに造り出さうとする時代になつた。明治の時代は、新らしい文明史の序論をも完成しない中に慌ただしく終つてしまつたが、ともかくもここまで來たのは手柄である。

かやうにして、明治から大正に亘る、新らしい國民生活の様式を創造しようといふ運動は三段の階級を經て、今日まだ目鼻が附かない有様であるが、これは一國文明の縮圖である首府の都會生活に觀ても看取し得る現象であるし、更に都會生活を一層小さな結晶形である劇場に於いて同様の事實を發見することができるのである。首府の生活に現はれた三段の變化を、よく人の使ふ三つの標語で言ひ現はせば、江戶、東京、及び新東京である。劇場に起つた三種の新運動を代表的に言へば、故團十郎を中心とする「活歷」劇のそれと、故川上音次郎を中心とする「新派」劇のそれと、今日の自由劇場文藝協會に始まつた歐羅巴劇のそれとである。私は明治から大正に亘る文明史の一側面として、國民生活の様式を創り出さうとする努力の一部として、劇場の新運動の經過を考へて見たいと思ふのである。

三

明治の初年から十五六年まで、首府の生活が、名は東京と改まつても實質的には舊江戶の生活の名殘をそのまゝに傳へてゐた時代には、劇場裡の風氣も太平だつた。十七八年以後、國民生活の改善が政府筋から提唱せられ奬勵せられるやうになり、歐羅巴の社會生活の形式が模倣せられるやうになつて、三座時代の暗いしめつぽい俳習的な空氣のなかに生活してゐた劇場裡にはじめて歐羅巴の空氣が入つて來た。劇場は町人の女小供の卑しい娛樂場でなくつて、社會生活の華たる

べき立派な藝術の殿堂であるといふことになつた。團十郎が由來の歌舞伎劇の上に「活歴」といふ新らしい舞臺上の樣式を試みたのは正しくこの氣運に煽られた結果であつて、「活歴」は一種淸新な寫實主義のやうにも思はれるが、その實は傳統的の藝術の趣味を解することの出來ない當時の貴紳のために、平俗な、そのくせ見た目にだけはひどく典雅らしい寫實史劇の一體を創めて、古典の知識ばかりあつて、藝術的の修養に乏しく趣味的の聯想の甚しく缺けた彼等の滿足を買はうしたのである。これは舊歌舞伎劇に對する一種の破壞運動であつて、後年の「新派」劇が同じく現代劇の上とに平俗な寫實主義を試みて、傳來の歌舞伎劇に反抗しようとしたのと、その形迹を同くしてゐる、どちらも内から動いた藝術上の革新運動でなくつて、外から新らしい時代の要求に動かされた改良沙汰にすぎなかつたから、自然藝術的に何の意味ある革新をも齎さず、團十郎の「活歴」は、一方社會に國粹保存運動の起る頃には、彼自身「活歴」に厭きて、正しい傳統的な藝風に歸つて晩年の光輝を全くした、そして「新派」劇の現狀は今日見るが如くである。實際團十郎の偉い所は一身に劇場の革新と保存の運動を兼ね行つたことであつて、「河原乞食」の境涯に沈淪してゐた歌舞伎劇を引上げて社會の上中流の鑑賞に適ふやうなものにしたのも彼なれば、一身の技藝上の聲譽を以て歌舞伎劇の運命を維持して來たのも彼であつた。それで團十郎が倒れると同時に、歌舞伎劇の危機が覿面に來た。世間には日露戰爭の騷ぎが始まつた。

日露戰爭の結果は、中間の障壁を徹して、東西文明の赤裸々の接觸となつた。日本の國が大變廣くなつたやうな氣がした。新事業が盛んに起こつた。都會へ上京する學生の數が凄まじいやうな勢で增加した。國民生活の樣式を革新しようといふ計畫がやや大規模に考へられて來た。世間は戰爭後、附景氣でも借金でも兎に角金融が豐かであつた。歐羅巴人のやうに生活しようといふ希望が具體的に實現せられた。濠を埋めたり石垣を崩したり江戸時代の遺蹟の破壞が大袈裟に行はれた、

外國の都市に模倣した新東京の、建設が始まつた。マンモン崇拜の時代になつた。これは實社會のことである。精神界には即ち所謂自然主義の運動である。これは實社會の歐羅巴人のやうに生活しようといふ外的な欲求と相對して、歐羅巴人のやうに考へようといふやや內的な欲求である。舊文明の破壞運動、そして新文明の甚だ危なつかしい建設運動の第一歩であつたことは共に同じである。私はここで自然主義の價値を論じようとは思はない。とにかく明治初年以來の國民の生活樣式革新の運動がここまで入つて來たことはたしかに大なる進歩である。

しかしさうは言ふものの自然主義の運動は、これが藝術上の事件とは思はれないほどに味も香もないものだつた。これは實社會が極端な物質萬能に傾いてゐた影響である。とにかく善惡無差別に舊い傳習的の文明の破壞が叫ばれた、若い國民、少くとも文藝をかぢる一部の若い國民の間には、傳統のある舊藝術の一切が何の生命も何の價値もないもののやうに思はれた。勿論演劇もその數に洩れない。歌舞伎劇の權威がこの時ほど侮蔑せられたことはなかつた。單に若い傳統の權威を卑しむ人達の間ばかりでなく、紳士と呼ばれる物質界の上中流を代表する階級の人々までが、金儲に忙しくつて小說を讀む暇がないやうに、藝者を連れて芝居へ遊びにくる暇もなかつたらしかつた。それで劇場は少數の好劇家と、多數田舍出の「書生さん」の占有になつた。勿論「書生さん」の趣味は、歌舞伎藝術の傳統的香味に醉ふほどに修錬されてゐなかつた。團菊左と一口に言はれた明治の歌舞伎劇の代表者は一時に世を去つた。代表的な大劇場たる歌舞伎座はホテルに轉業しようとした。歌舞伎役者は離散か廢業の外に道はなささうに見えた。このどたくさ紛れに「新派」の芝居といふものがむくむくと頭をもちやげた。「書生さん」の好劇家は實にこの「新派」のペトロンであつた「新派」の芝居といふものは、その生々しい訓練を經ない技藝が勿論ずつと低調ながら文壇の自然主義を劇場に代表してゐた。しかも形式に於いては共に、傳統

の文明乃至藝術の偶像破壞を標榜し乍ら、精神に於いてやはり傳來の國民的感情を脱しなかつた。文壇の自然主義者の破壞的な厭世的な人生論も、理論は西洋から借り乍ら、これを力說する時の情的氣分には何處か傳來の三味線情調を基調としてゐた。勿論「新派」の芝居といふものに至つては、その情的表現の形式を全然「舊派」と貶しめた歌舞伎劇から借りて、そのくせその美しい歷史的趣味的の聯想のある部分を除き去つた、甚だしく藝術味の乏しいものだつた。それでも當時の國民の生活樣式革新に對する焦燥が「新派」の演劇の上に或程度まで表白せられてゐたと思ふ。

文壇に自然主義の論爭が騷がしく、劇壇に「新派」の「不如歸」や「乳兄弟」が大入を占めてゐた頃だつた。私はいつも五月雨の晴間を待つてゐるやうな物はかない重苦しい心持ちて、人氣の少ない歌舞伎の小芝居や、歌舞伎役者の「新派」を眞似た「己が罪」や「魔風戀風」を見て廻つた。時に永代橋を渡つて薄暗い深川の小路に立つて、そこらの小家から洩れてくる三味線の音〆をかき消すやうにして、川面を響いてくる工場の汽笛の音を聞いたりした。よく人が殺風景な物質文明の怒號のやうにして呪ひたがる工場の汽笛が現代めかない周圍の空氣のために妙に情調化せられて私の耳には快く響いた。この新らしい事物としてそのまゝに受け入れようとしないて、何かしら傳來の情緒の陰影でぼかさうとする、情調化しようとする、これはあの時分からの私の癖て今日でもやはりその癖は殘つてゐる。惡い癖だと思ふがやはりやまない。ところが、その後いろいろの言說を讀んだり、自然主義以後に起こつたいろいろの傾向を通觀して見ると、大小の別はあつて、大抵の日本人にはこの惡い癖があるやうである。いかに頭では明快に歐羅巴人のやうに考へることはできても、これを表白する段になると、どうしても傳來の感情が濃い陰影をつけてしまふ。ほんたうに新しくなれない、まるつきり變つた國民生活の樣式をも創り出すことができない。到底妥協的である、折衷的である。現世安穩と言ひきつてしまうことができない、

直ぐ後世往生とつけ加へたくなる。日本人は到底南無阿彌陀佛の國民である、他力本願の國民である。それがどうかならないうちは國民生活の樣式は變らない、新らしい演劇の樣式も生まれない。こんなことが順序もなく思はれるのである。それで自然主義の運動はもはや東洋主義の思想家の反抗には遭はなかつたけれど、この傳來の情的氣分の復活のためにやんはりとその氣勢を殺がれてしまつたのである。

四

さてもう一度、最近の新劇運動の話に歸るのであるが、これは當然自然主義の運動と同時に起こるべきものであつたが、少し遲れて自然主義論の火の手の大分下火になつた時分に頭を擡げて來た。これはさうあるべき筈で、豈社會は金儲け仕事に忙しく、文藝界には野武士的の議論が盛行した時代には、芝居などの頭をもちあげる隙間がなかつた、それで「新派」といふ間の樸の鵺的な演劇が一時に流行したまでである。さて打ちこはし騷ぎが少し收まつて人心が沈靜して來れば、文壇の人達も毎日の日記がそのまゝ文學だ、技巧は藝術ではないなどといふ亂暴な議論もしなくなり、節だらけの手織木綿で滿足してゐたものが肌ざはりのやはらかな絹物を喜ぶやうになつた。自然主義以後のいろいろの傾向を、自然主義とは氷炭相容れない、まるで新らしい反動的傾向のやうにいふ人もあるが、今日までのところ、自然主義の系統から全く脫離した新らしい傾向が一つでもあれば賴もしいが、つまりは自然主義の主張が、やや磨きのかかつた、技巧の加はつた藝術上の主義乃至作物になつて現はれたといふにすぎない。同じ意味で自然主義以後に興つた新らしい演劇の運動も自然主義時代に、文章の技巧と同樣、無用な華奢、贅澤な裝飾品のやうに考へられてゐた演劇藝術が歐羅巴と共に生活し思考する新らしい國民生活の一樣式として必要なものとして寬容せられるやうになつただけの話である。即ち舊い國民生活の一樣式を代表した歌舞伎藝術に對して新らしい國民生活の一樣式たるべき運命を持つてゐるものはどうしても歌舞伎を燒直

した「新派」の芝居や、中途半端な新史劇などではない、純粋に西洋の劇術を基礎にした歐羅巴劇それから新らしく作らるべき新國民劇でなくてはならなかつたのである。これを外にして、私は歌舞伎藝術に對立すべきものとして中間の妥協藝術を認めたくないのである。それだけ現在の新劇運動が眞に徹底的て眞に新鋭潑溂の氣分を續けて行かない限り、その存立を無意味と信ずるものである。

五

結論に急がう。そこで今日在るやうな新劇團の藝術が、將來せめてハアゲマン氏を滿足させ得るだけのの三をも作り出し得るであらうか否かといふ問題であるが私一個として只今のところ、全然否と答へる外はないのである。その理由を簡單に開陳する。

その前になほ一言、多くの人々の口に上る二三の問題について考へて見よう。その一は所謂「新らしい芝居」の表看板にして來た歐羅巴劇の飜譯興行の價値に關する疑ひである。その二は苦勞人(くらうと)と素人(しろうと)の藝能(タレント)に關する優劣の爭ひである。その三は所謂「新らしい芝居」の興行法に對する疑ひである。

第一の問題であるが、私は日本人が歐羅巴の飜譯劇を演ずるその事自身には絶對的價値はないと考へてゐる一人である。日常の生活氣分のまるで違つた日本人が、歐羅巴人の生活を背景にした演劇をやつて十二分の効果を收めることの難いのは私も知つてゐる。ただ問題は現代の日本人のやうな獨創力の乏しい生活をしてゐるものが、單に「借り物」だからと言ふ理由で飜譯劇を排斥し得る勇氣があるかといふことである。「借り物」は飜譯劇ばかりでない、頭の天邊から足の爪先まで衣食住から言語動作まで、外國の借り物を除いたら私達は飯も食べられない口も利けないことになるのである。私達は飜譯劇の生硬を嫌つて、舊藝術の粹と讃美せられる歌舞伎座へ行く、そこには『勸進帳』の外に、『都一中』といふやうな、ハアゲマン氏の言を借りて言へば、日本の有名な劇場詩人が、「西洋のものを日本人に向くやうに按排した」劇の一を見なくてはな

らないのである。しかし私はこの「日本人に向くやうに按排した芝居」といふ奴を、ハアゲマン氏が考へるほどには好まないのである。いかに多數目あての芝居でも、さうさう博覽會の建物式の藝術ばかりでは心細い、永久的といはないまでもせめて半永久的の耐久力位は持つてゐて貰ひたいと思ふのである。生中の燒直しものより正直な飜譯劇の方が、同じ妥力折衷でも、まだしも新趣味を啓發する力があると信ずる、所謂日本人に向くやうに」といふには、日本人の舊い、捨てようとしてゐる趣味や感情に媚びることである。新らしい劇の運動が國民生活の新樣式を作り出す上に有意義な點は、國民の舊い封建時代の趣味感情を振ひ落す役目を勤める點にあるのではないか。日本人は西洋人の言つたことといふと一も二もなく隨喜する癖があるが、このハアゲマン氏の言つた「西洋のものを日本人に向くやうに按排する芝居」の要求などは餘計なおせつかいな愚論である。日本人が飜譯劇をやる目的は當分歐羅巴人のやうに手を振り足を動かすことに骨を折るよりも、まづ歐羅巴人のやうに考へることを學ぶためである。少くとも情調的に歐羅巴人の生活に浸つて舊日本人の三味線情調を忘れたいと思ふからである。西洋の芝居の中から日本人の舊い情調に共鳴する部分だけをとり出して來て、「日本人に向くやうに按排した」ところで、それが何の新らしい生活の樣式を作り出す足しにならう。即ち私は飜譯劇の藝術としての絕對價値は認めない。しかし今日在るやうな中間の妥協藝術を排斥する意味に於いて、舊藝術の粹たる歌舞伎の對稱として、深く魂に滲み通つた飜譯劇の解釋を立派に藝術として尊重する。勿論それは今日在るやうな空虛な急ごしらへの西洋人形の身振や、魂のない、不徹底な飜譯劇を眼中に措かない話である。

次に第二の問題であるが、これもハアゲマン氏の言を引くと、「素人には何等の藝能（タレント）もない、素人は直ぐ苦勞人の俳優の悪い性質を受け入れる、新らしい根柢を形造るべき演出法が素人から生れるといふことは全然謬見である」さうである。これは今日の新劇團に反感を

有する一部の人々を大に嬉しがらせる議論である。しかしこれも日本今日の劇壇の事情をよくも知らない一知半解の議論である。成程ヂレッタントと商賣人との間には理論としてはハアゲマン氏の言ふやうな關係はあり得るであらう。しかし日本今日の劇壇は一種異樣な過渡時代であつて、或意味では、苦勞人必らずしも苦勞人ならず、素人必らずしも素人ではないのである。いかにも傳來の歌舞伎劇には完成したStil(スチル)がある、德川文明三百年の國民生活が作り出した立派なStil(スチル)がある、しかしこれを演ずる苦勞人の俳優のうちで、このStil(スチル)に眞に同感と理解のある者が今は段々少くなつてゐるといふことをハアゲマン氏は知らないのである。氏の見た「復活」はなるほど歐羅巴劇としてのStil(スチル)を全然備へてゐない和臭紛々のものであつたけれども、氏の同じく見た「勸進帳」といへども、氏が「復活」に對して持つだけの鑑賞眼をこの芝居に對して持つてゐる日本人の或者から見れば、これもやはり全然Stil(スチル)がないと言はるべきものなのである。日本人の素人役者が危つかしい無恰好な腰付きで、歐羅巴劇の Love(ラブ) Scene(シイン) を演ずるのが滑稽なら、日本人の苦勞人役者が、散斬頭にチョン髷の假髮をのせて、お半長右衛門の濡れ場を演ずるのも可なりオオクワアドに思はれる時が實はもう來てゐるのである。今日の苦勞人役者に、「日本人であるから」といふハンヂキャップを付けて、さて苦勞人役者を傳來の歌舞伎劇の前に立たせ、素人役者を輸入の歐羅巴劇の前へ立たせたら、この障害物競爭の優勝者が何れであるか、或は見當がつきかねる位なものである、まして中間の商賣人のやうな素人役者素人役者のやうな商賣人である「新派」の役者に至つては、素質に於ひて多少の藝術的氣稟を持つた二三人を除いては、生中醜惡なマンネリズムの匂ひが浸み込んで今日は手も足もない形である。今の所まだ、これ等商賣人の俳優も、半商賣人の俳優も、十年二十年の年功と世間的の名聲とで藝術上の人氣をも繋いでゐるが、ほんたうに世間の藝術眼が落着いて來たら、所謂商賣人の「藝能(タレント)」の根柢が大に怪しくなつて來る時が

來るのである。今日のやうな、舊い藝術のstyleも崩れかかつてゐる、新らしい藝術のstyleはまるで出來てゐないといふやうな時代では、全然藝能のない素人から新らしい藝術は生まれないかもしれないが、不徹底な確實性のない藝能しか持たない商賣人から新らしい藝術のstyleを要求することも、その人が異常な獨創力のある天才でない限りまづまづ六づかしい注文だと思はねばならない。誰が新らしい劇術のstyleを創り出し得るか、これを知るものは神様ばかりである。（序乍ら惡まれ口のやうであるが、上司小劍氏が先頃何かの講話の序でに、藝術と因襲の關係を話されて、役者の名跡といふことが藝能の發達に大變効果を持つ、五代目菊五郎の子に六代目あり、羽左衞門は十五代目なるがゆゑにあの通りの名優であるといふやうなことを言はたけれど、ああいふことも、今日目前のだらしのない新劇團の素人役者の有樣に反感を持つた思ひつきの議論であつて、では中村吉右衞門は誰の名跡を襲いであれだけの役者になつたと反問したくなるのである。とにかくかういふ言説が勢力を持つと、新らしく出ようとする役者が妙に因循卑屈な者になつて困ると思ふ。）

さて最後に第三の、新劇團の事業は營業的なるべきか否かと言ふ問題であるが、勿論芝居の仕事といふものが、樂隱居が盆栽をいぢつたり箱庭をながめたりするやうなものでない以上、對公衆的なるべきは言ふまでもないことである。しかし今日在るやうな薄弱な新劇團の組織では公開的にも非公開的にも、藝術的にも營利的にも成功しさうもない。この問題は言へば言ふことはあるが、この論文の目的とはそう關係のないことだから止めて置く。

六

愈々これでおしまひである。所謂商賣人の歌舞伎劇、それから所謂素人の歐羅巴劇――これを今日の國民の劇的本能を代表する二つの大きな對稱とする。ところでこの二つが今日の國民生活に刺戟を持つてゐるのは專らその情的方面である。德川三百年の舊い文明を代表する歌舞伎劇それに傳來の情的氣分を求めるのはま

だよい、歐羅巴近代の文明を代表する歐羅巴劇、から私達はその背後の國民生活を求めないで却つて私達の傳來の感情生活に類似した情的氣分を求めるのである。この各からその背景たる國民生活を除き去つて、平凡單純な人情、人間味とまではいかない、極普通な情的氣分だけを抽き出して、その共通點に薄弱な興味をつないでゐるのである。そこには國民自身の新らしい生活は何の効ともなつて現はれてはゐない。ただ祖先から傳襲した感情生活が弱く動いてゐるだけである。歐羅巴劇の模演が一時のやうな好奇心の對象とならなかつたことは久しいものではあるが、偶「復活」のやうな劇に平俗な感情生活の表現を發見すると可なりに喝采を浴せるのである。昨今は反動的に歌舞伎劇がたゞ譯もなく喜ばれてゐるが、それすら江戸歌舞伎が浮世繪や蒟蒻本と同樣に持つてゐる爛熟期の文明の作り出した纖細な樣式には何の理解もない、ただその中から自らの胸に共鳴する情的氣分だけを探し出して感じてゐるだけである。しかし私はこの多少厭世的な消極的な小規模な情的氣分が、新らしい國民生活の樣式を立し、新らしい藝術の樣式を立する上に、甚だ邪魔な厄介ものであると思ふ。單純な情的氣分に生活するから、私はむしろ德川末期の平民の生活に歸りたい。德川末期の平民には憲法もない代り、兵役の義務も納稅の義務もなかつた。九尺二間の裏長屋に裸で寢そべつて團扇を使つて、豐潤な情緒と銳利な機智の裡に、小さい乍ら緊縮した生活を送つてゐた。今日はまがひものの洋館のバルコニイにセセッション式の椅子にもたれて、しかも疊の上に寢そべつた昔の情的氣分をそのまゝに續けてゐるのである。

正直に言へば、どんな綺麗な藝者をモデルに描いても山出しのお三どんのやうに見える油繪の美人よりも、病身らしい纖細な首筋の曲線に傳來の國民的感情の陰影をつゝんだ歌麿の美人繪に醇な藝術的情感を覺える。帝國ホテルの何とかアアベンドの大管絃樂よりも門附の破三味線の新内に銳い刺すやうな哀調を聞く。眞四角な四方壁の一方を切り開いてその中の人生をその

ぞかせるといつたやうなイプセン式の數理的な嚴格な樣式の芝居よりも、役者と見物と共同に步道として使用する花道といふものがあつて何處までが舞臺の夢の世界で、何處までが棧敷現實の世界であるか、分からないやうな、箱庭のおもちやのやうな世話木戸一つで外の世界と內の世界を距てるやうな手輕な氣樂な歌舞伎の芝居に却つて夢心地を誘はれる。それもこれもみんな事實である。しかしこんな感情生活の滿足は畢竟藥味か、しほからのやうなほんの舌の先の淡い情感の滿足であつて、私達の現在の生活がいかに不安定な不徹底なものであつても、不安定は不安定なりに不徹底は不徹底なりに、何か現在の生活の全部をそのまゝ投り出したやうな藝術を得たいといふ欲望は決してこれがために止むことはないのである。殊に繪畫や音樂や文學と違つて、演劇は最も瞬間的な動的な藝術であつて平靜な隱居じみた鑑賞的態度をいつまでも續けて行くことのできないものであるから、現在の生活と殆んど交涉のない演劇の樣式に長く同感を持ち得ないのはいふまでもないことである。今日は一時の反動で詮方なく不徹底な歌舞伎劇に僅かな感情生活の滿足を求めてゐるが、嘗て新らしい國民生活を唱道し、新らしい藝術樣式の樹立を絕叫した人達が、『復活』のカチユウシャに默阿彌情調を發見し、『俳人惟然坊』に隱遁的な俳味を感じて、傳習的感情の中に、安息な享樂を求めてゐるのはどうしたものであらう。昨今は速成の新劇興行濫行の跡を承けて、新劇團の人々も申合はせたやうに、もう何もする事がないといふやうな氣拔の體をしてゐるが、ほんたうの仕事はこれからなのではあるまいか、飜譯劇には反感を持たれて來る、新らしい史劇をやらせては歌舞伎役者の方がうまいし、日本の現代劇の女性なら「新派」の河合喜多村の方が本物の女優より上手にやるといふやうなことばかり考へてゐて何にならう。目前の小藝術小技巧の成功に目を奪はれて直ぐこの方に走るのは日本の藝術修業者の癖であるが、最近の新劇運動の根柢には技巧以上の一層深い要求のあることを思はねばならない。今は東儀鐵笛と中村歌六

とどつちがうまいとか、松井須磨子の技藝は河合武雄の模倣であるとかないとかいふやうなことを言つてゐる時ではない。何の新らしい生活内容を持たない、舊い封建時代の感情生活にのみ生きてゐる限り、誰が誰に優る劣るといふこともない、誰が誰の眞似をするとしないといふことはない、その藝術の様式は量に於いて大小の差こそあれ、質に於いて何の異つたこともないのである。今日の歌舞伎役者をしてこの行くべき道を行かしめよ。「新派」の役者をしてその行くべき道を行かしめよ。新劇團の役者をしてその行くべき道を行かしめよ。私達の要求する新らしい國民生活の一様式としての演劇は、將來この人達の中の誰かの手に創り出されるかもしれないが、或は全く違つた後に來る者を待たなければならないかも知れない。要するに一として定まつた藝術的様式を持たない劇界の今後には、黑白の區別なくしてたゞ新舊の區別があるだけである。眞に傳來の感情に累らはされず、全く新らしい生活内容を持つた役者が一人でも多く出れば出るほど、新らしい國民生活の一様式としての演劇の完成が早められるのである。（六、二七）

歌舞伎劇に對する私の態度

小宮豐隆

一

劇が人及び人生を描寫する藝術の一分野であると云ふと、從つて歌舞伎劇も亦夫自身に特有な表現の形式に依つて人及び人生を描寫する藝術であると云ふと、夫は今更云ふを須ゐないことであらう。縱令ひ『暫』に於て見出される様な色彩と器樂と肉聲と姿勢との調和と云ふことにのみ重きを置いて、人間の心の表現と云ふことに何等の興味をも持たない様な作品が、歌舞伎

劇に於ては往々見出されるとは云ひながら、他の殆んど凡てを貫ぬくものは依然として義理人情忠孝仁義と云ふ樣な「人」及び「人生」の一つの現はれてある。唯歌舞伎劇は此現はれを舞臺の上に表現するに際して夫自身特有な形式を持つてゐる。色彩と器樂と肉聲と姿勢とに於て獨特な表現の形式を持つてゐるのである。

歌舞伎劇が夫自身に特有な表現の形式を持つと云ふことは、與へられた心持を表現することの自由と表現せられた心持を受け入れることの自由とが或程度束縛されてゐると云ふことを意味する。歌舞伎劇の世界が現代の凡ての人に向かつて開かれた世界ではないと云ふことを意味する。歌舞伎劇を見むとするものは一度現代の實世界を離れて假象世界の記號に馴らされなければならないと云ふことを意味する。實際を細寫するものに非ずして象徵を簡敍するものであると云ふことを意味する。故に歌舞伎劇は作者と役者と見物との前に一つの約束を提出する。此約束を許し得ない人若しくは許すことを欲しない人にとつて、歌舞伎劇は突梯荒唐の醜藝術でなければならない。

歌舞伎劇の世界は時代と言葉とを過去に限られた世界である。過去に限られたと云ふことは一面歌舞伎劇を現代の散文から引き放して詩的な浪漫的な世界へ押し進める所以であるとは云へ、現代に生活する作者や役者や見物にとつて既に其詩的な浪漫的な世界へ這入つて行くこと夫自體が、自由に對する一面の束縛を形成くることは爭はれない。作者も役者も見物も（嚴密に云へば）純粹に過去の世界に沒頭することが出來ないのである、動ともすれば「現代」の醜い影に祟られ勝なのである。然かも歌舞伎劇は本來の根本條件として、是に加ふるに特有な「臺詞廻し」と特有の「型」と特有の伴奏樂を持つてゐるのである。此「臺詞廻し」と「型」と伴奏樂とは寫實主義の藝術に見出される樣な實世界を其儘に再現することを目的とするものでないが故に、恰も散文を高調することに依つて詩が生れる如く實世界から特に高調的な部分のみを抽象して夫に一層の高調と誇張とを施して成立つたものであるが故

に、夫等のもの丶裏に背景となつた現實を體得し得るものに非ざる限り、竟に純粹にかゝる表現の世界に沒入することは出來ないのである。沒入なくしては藝術は成立たない。然かも歌舞伎劇に純粹に沒入すると云ふことは一面大いなる犧牲を拂はなければならないと云ふことである、自由の大いなる束縛を甘受しなければならないと云ふことである。――過去に限られたと云ふことゝて（縱令ひ夫は極めて輕微なものではあつても）束縛を感ずる作者と役者と見物とは、更に（多く）過去に於いて成し遂げられた此特有な高調に依つて一層複雜な一層苛酷な束縛を受けなければならなかつた。

かくて歌舞伎劇は羈約藝術中の羈約藝術である。故に文明の潮流が此羈約に迎合しない限り作者も役者も見物も年を追ふて歌舞伎劇に逆行すべく運命づけられてゐるのは是非もない。嚴密に云へば現代の心は現代の表現樣式を借りなければ完全に自由に活々と寫し上げることの不可能なるは當然である。歌舞伎劇が夫自身に特有な表現の形式に依つて例へばイプセンやストリントベルクなどの世界を拒否するとの止むを得ざるに出でゝゐると、從つてイプセンやストリントベルクの樣な經驗を經驗する者にとつて其表現樣式は餘りに精細と複雜とを包容する力に乏しいものとせられること、かくて歌舞伎劇が此事實の必然な論理的歸結として漸次作者と役者と見物とを失ふと云ふことは寔に致方もないことである。――現代に於てより自由な表現樣式が與へられてゐるものを、何の必要あつてか過去から傳へられた不自由な表現樣式に赴く必要があらうぞ――玆處に歌舞伎劇の價値を見縊らむとする人々の有力な論據が横たはり、玆處に新たなる作者と新たなる役者との出現を妨遏する大きな理由がある。

然し表現の形式が不自由を極めてゐると云ふことは夫に依つて表現せられた内容が無價値であると云ふことを意味しない。窮屈なるが故に洋詩に價値はないとは云はれ得ない、不自由なるが故に漢詩に名作はないとは云はれ得ない。あらゆる羈約藝術に托して自家の

磊塊を灑ぐことを知る天才者は、一度び其羈約に沒入して然かも同時に是を破棄し、思ひの儘なる天地に自由の表現を試み得る者である。天才ある作者に依つて殘された數々の脚本と名人と唱はれた役者に依つて殘された數々の「型」とは、唯其儘にして多くの藝術的價値を今の世に迄要求してゐる點に照しても、かく不便な表現様式も幾多の天才者の出現によつて其多くの短を除き其多くの長を育て行くとき、永遠の生命に參して光輝を放つものたることを證明して餘りあるものである。故に、縦令ひ歌舞伎劇が文明に逆行する表現形式を持つてゐるにしても、歌舞伎劇の活殺權を掌握するものは寧ろ作者と役者との「人」である、表現様式其物の如きは全然是に與ることを得ないものである。表現様式が文明と逆行するがために或時期に於ては群衆の藝術とはなり得なくなるであらう、然かも群衆から離れたことが藝術的生命を失つたと云ふことにはならない。恰かも今の能樂が一二の名人の手に依つて藝術的光彩を少數の見物に向かつて浴びせかけてゐる様に、歌舞伎劇も何日かは一二の天才者の手によつて娯樂のための群集から離れて藝術のための少數者のみに生氣を吹き込む様にならないとも限られない。

二

歌舞伎劇は江戸時代に於て形式上殆んど完成の域に達した。今の歌舞伎劇の殆んど凡ては此江戸時代に完成せられた形式を其儘に踏襲したものである。――茲處までは誰しも異存のないことであらうと思ふ。然しながら此事實から出發して一つの特殊なる觀劇上の態度が生れるとき、私には多少の異存なきを得ない。特殊なる觀劇上の態度とは何ぞ。私は是を假りに歴史的享樂主義と名づける。

藝術に對する我等の態度を大別して享樂主義的の態度と象徴主義的の態度との二つのものに考へ得るとする。享樂主義的の態度とは外來の刺激を選擇する態度である、選擇したものを嚙み締め味ひ樂しむことと夫自身を目的とする態度である。象徴主義的の態度は選擇し選擇したものを嚙み締め味ひ樂しむことを妨げな

い、然し此態度は嚙み締め味ひ樂しむこと夫自身を目的とするに非ずして猶其上に特殊から普遍へ連なる「眞理」を摑まむとする態度である。前者は寧ろ表現其もの若しくは表現され方其ものに重きを置き、後者は寧ろ表現其ものに即して表現せられたものに重きを置く。適宜の誇張を施して云へば前者は形式主義的の態度であつて後者は內容主義的の態度である。——歴史的享樂主義者と云ふは選擇の對象が歴史的の背景を持つとき特に尊重愛撫の眼を其上に注がむとする人々を指すのである。

歴史的享樂主義者は云ふ。歌舞伎劇は江戸時代に完成せられた藝術である、平民の娛樂として生れた藝術である、三絃と鳴物と臺詞廻しと型と役者の美貌と衣裳の色彩と、夫等のものから一種の纏つた輕い陽氣な爽やかな快よい氣分さへ出て來れば外に歌舞伎劇に對して要求する處は何もない。故に今の歌舞伎劇は今の儘にて少しの改革をも許さない。歌舞伎劇の面白味は其內容に非ずして傳統ある表現様式である。故に歌舞伎劇に對して性格を求め心持を說き內容を云々することは寧ろ滑稽である。——

かゝる態度を把持して歌舞伎劇に臨むと云ふことを、許されたる一つの態度であるに相違ない。同時に其論據とする處の、歌舞伎劇は平民の娛樂に供した藝術であつて、當時は單に三絃と鳴物と臺詞廻しと型と役者の美貌と衣裳の色彩とから一種「歌舞伎氣分」とも云ふべき氣分を創設することに能事が了はつたものとせられたと云ふことは、事實其通りであつたに違ひない。然し夫がために歌舞伎劇には內容を求めずして傳統ある形式の完備のみを求めると云ふことは、發展の歴史を逆流せしめて藝術の域から益遠ざからしめやうとする謀に外ならない。同時に歌舞伎劇は單に歴史の名に於てのみ價値あるものであつて、劇としての獨立した價値を持つてゐないものだと斷言するものに外ならない。同時に歌舞伎劇に於て價値あるものを閑却して、故らに價値なきものに貶して仕舞はうとすることに外ならない。

浮世繪は民衆の娛樂を目的として生れたものである。俳句は民衆の娛樂を目的として生れたものであるさうして二つともに江戶時代に於て完成の域に達したものである。今若し歌舞伎劇を江戶時代に完成したものであるとの故を以つて、平民の娛樂に供したものだとの故を以つて、形式美から來る快感のみに凡ての價値を置かうとするならば、獨立した藝術的の價値を持つた歌麿や乃至は蕪村に對しては如何なる態度をとらむとはするぞ。

藏前の札差しに阿附して步行いたと傳へらるゝ幇間の句に、當時の札差しと夫に纏つはりついてゐる幇間の心持とを、如何にも躍如たらしめてゐるものがある歷史的享樂主義者が此句によつて自己の憧憬する時代への移情に恰好な緒口が與へられ其句の上に隨喜の淚を零すと云ふことは、刺激の內容を豐富にすると云ふ意味に於て、藝術翫賞上に許された一つの態度である然しながら其句あるが故に凡ての發句が此幇間式のものでなければならないと云ふこと、然かも一方に「時鳥平安城を筋違ひに」と云ふ樣な廣大な藝術鄉があることを見まいとすると云ふこと――かくの如きことが其態度の上に作用して藝術を規矩せむとするとき、歷史的享樂主義者の藝術觀は自己の狹隘なる天地に跼蹐せしめられて、究竟の價値を遺失する。かゝるとき此態度は自然を見ずして作爲を見、必然を見ずして偶然を見むとするからである。

歷史的享樂主義者は自己の小趣味に眩惑されて、あらゆる藝術の底を流るゝ命の泉に穿貫し得ないものである。殊に歌舞伎劇が形式のみに意味があつて、內容にとるに足るものがないと云ふが如き、從つて歌舞伎劇に性格と云ひ心持と云ひ內容と云ふものを考へるのは滑稽であると云ふが如きは、却つて其魯鈍を表白して自ら滑稽に墮ちるものである。「人」と云ひ「人生」と云ふが如き言葉を知らなかつた人にとつても意味の深い尊とい「人」と「人生」とはあつた。運慶は自ら永遠に活きる力の感じなどゝ云ふ言葉を知らなかつた。然し彼の心に潜んでゐた魂は彼を驅つて永遠に活きる力を

彫刻せしめた。性格と云ひ心持と云ひ內容と云ふが如き言葉は過去の歌舞伎劇に手づさわつた人にとつては風馬牛の言葉であつたに違ひない。同時に彼等は單に民衆に娛樂を提供する積りのみから歌舞伎劇に手携はつたものとも見られ得ないことはない。然しながら夫が爲めに彼等に內容を要求し彼等に娛樂以外の價値を要求することの戾理なるを說かむとする者は、意識と無意識と自覺と本然との差別を知らないものである。例へばかゝる歷史的享樂主義者から渴仰せられる團藏や源之助の如き名優は、自覺こそなけれ其本質に於ては「永遠に人間的なるもの」の一角を摑んでゐる役者である。彼等の芝居には彼等の人生的內容がある。單に臺詞廻しと型と衣裳と伴奏樂とに調和して、かの「歌舞伎氣分」の樣な娛樂的平民的の氣分のみを作るためには、彼等は餘りに尊いものを持つてゐる。

繰返して云ふ。歷史的享樂主義は受け入れられた內容を豐富にするためにのみ許される態度である。然しながら夫が逆轉して藝術に對する要求の態度となるときは、多くの場合停滯と腐敗と跳躍と顚倒とに墮せざるは稀である。歌舞伎劇形式論の如きは寧ろ歌舞伎劇を滅亡へ驅り立てるに等しい。

三

歌舞伎劇に對する第二の態度は歷史的と云ふ形容詞を除いた享樂主義の態度である。歌舞伎劇を愛好するは江戶時代に完成せられた藝術若しくは平民の娛樂に提供された藝術であるが故に非ずして、一箇の纏まつた氣分を持つた藝術であるが故にとする鑑賞の態度である。現代の散文に慊焉たる心を歌舞伎劇の持つてゐる敍情詩的の浪漫的の氣分に依つて充足させやうとする態度である。

彼等は云ふ。歌舞伎劇は三絃樂に基調を置いた藝術である、三絃樂に基調を置いて特有な節奏と特有な色彩と特有な姿と特有な聲調との交響樂(シンフォニー)を目的とする音樂的の藝術である。我等は夫に人情の表現を求める事件の發展を求める心持の變化を求める。然しながら求むる處の表現と發展と變化とは單に此交響樂(シンフォニー)をして動

的のものたらしめ複雜な刺激たらしめる方便である。故に此交響樂にして我等に單調と疲勞と倦怠とを感ぜしめないものならば如上の要求は何日撤回しても差支はない。三絃樂は夫自身に於て既に一箇の情調を持つてゐる。故に歌舞伎劇が藝術として成立つか成立たないかは他の諸種の要素が此情調に調和するか矛盾するかによつて定まる問題である。歌舞伎劇に人生的の内容を要求すると云ふことは、歌舞伎劇が藝術の分野に於て占める位置を知らざるに基くものでなければならない。――

是も亦一應の賛成は主張し得られる主張である。三絃樂が夫自身に一種の氣分を持つたものであること、其三絃樂の氣分が歌舞伎劇の基調をなしてゐること、此基調を中心として姿勢や聲調や其他種々の要素の交響樂（シンフォニー）を造ることを目的としたものが歌舞伎劇であること、最後に歌舞伎劇は全體として一種の音樂を形成くるものであること、――夫等は一々に首肯せられ得る歌舞伎劇の特質である。然し此諸特質あるが爲めに唯夫等が表現せられしもの丶みにて事足れりとするのは、歌舞伎劇の可能範圍を壓迫して其天地を狹ばめ、意義あらしめ得るものを無意義ならしめ、惹いては本領と末梢とを誤認せしめ技巧と精神とを顚倒せしむるに至ることを免かれない。

かの十八番物と稱せられるもの丶うち『暫』や『矢の根』の如きものは要するにか丶る享樂主義の態度のみに依つて充分なる價値を充分に翫賞し得られるものであらう。是等の脚本は「人」や「人生」やに就いて何物をか語る前に、音樂と色彩と姿勢との配合に腐心せられ事件が進行すると云ふことも畢竟は此音樂と色彩と姿勢との變化を目的としてのみ造り上げられたものだからである。然しながら歌舞伎劇は『暫』や『矢の根』を以つて貫ぬかれてゐるものではない。却つて『暫』や『矢の根』の樣なもの丶純粹な形は數に於て甚だ僅かであつて、餘の多くのものは悉く一つの性格と一つの性格との交渉から編み上げられる事件の發展を夫相應な程度に描いたもの丶許りである。嚴密に云へば其大部分の

性格は性格と名づけ得られないものであるかも知れない、又嚴密に云へば大部分の事件の發展は發展の名を値ひしないものであるかも知れない。然し『暫』や『矢の根』が「人」を描くことを目的としないに反して他の多くのものは「人」を描かうとしたものであると云ふことは確かてある。立役敵役二枚目三枚目などと云ふ「人」の型に對する區分に名づけた屬性名詞が既に古い昔から存在してゐるに照しても、歌舞伎劇が過去に於て意圖した處のものは明らかてある。

「人」を表現するに「臺詞廻し」と「型」とがあるとする。かゝる「臺詞廻し」と「型」とに要求せらるゝ處のものは、是等に依つて「人」の「眞實」に迫ると云ふことてある。調和と云ふことも此「眞實」を害なはない範圍に於てのみ尊重することを許される要求となる。表現する「人」がない脚本にあつては何うとも致し方はない。然し表現するに足る「人」がある脚本に對しても猶「人」を犧牲にして迄調和の美をのみ求めむとするは、一面速斷に基づく形式主義と、一面三絃樂を基調とした歌舞伎劇の節奏に關する曖昧な批評から出發した罪とを外にして別に解釋の施し樣もない。彼等は歌舞伎劇に特有の表現樣式が「人」を寫すこと不可能であると思惟するが故に、同時に此表現樣式は表現を目的とするものに非ずして夫自身現實を游離した藝術と思惟するが故に、彼等は此形式主義に墮ちて行く。彼等は又歌舞伎劇に內在する節奏を、現實の上に置かれた力點と見ず現實を單純化するための方便と見ずして、單に三絃樂其物から源を引いた節奏と見るが故に、凡てを三絃樂に歸納して、唯々其氣分に逆らはざらんことに神經質になつてゐるのである。

歌舞伎劇は正しく一箇の交響樂(シンフォニー)てある。然しながら此交響樂は三絃樂の情調のみによつて統率せられべきものではない。三絃樂の情調は節奏と節奏との距離を近くし姿勢と姿勢との連絡を滑(なめ)らかにし表現せられた感情情緒を第三者の胸に私(ひそ)やかに滲(にじ)み込ませ最後に實世界から假世界への沒入を容易にするために役立つものてある。故に表現せられる心持は夫が敍情詩的な含

蓄を持つてゐると云ふことのみに於て三絃樂に連なつてゐれば可い。三絃樂が自らに適合する性質以外他の凡ての性質を規定すると云ふことは、三絃樂の地位として、許され難き越權の沙汰である。

四

嘗て私は九段で櫻間左陣と櫻間金太郎との能を見たことがある。過去に完成せられた形式を傳承し然かも多くの約束を豫想する藝術として歌舞伎劇に通ふ處のある能に於て、私は左陣と金太郎とに著しい對照を發見した。

左陣の能は技巧其物の完成と云ふことを極端まで押詰めた能である。其處に完成其物の尊うとさが活かされてゐた。然し左陣は技巧に於て完成の極致を見せてゐただけに、丁度拭き込んだ紫檀細工の樣に、嚴肅て堅實て光澤があつて重味があつて且徹底的の氣分はあつたが、惜むらくは流動する大きな背景と醱酵する劇げしい力とを含蓄してゐなかつた。精巧と確實とを極めた手て描き出された驚くべき幾何模樣の觀があつた。是に反して金太郎の能は、技巧に於ては縱令紫檀細工てはあり得なかつたとは云へ、左陣にも萬三郎にも見出すことの出來ない大きな力が技巧の裏に溢れ渤湃として人の胸に漲ぎり寄せるものがあつた。左陣は何處までも技巧と云ふことを忘れさせない人である、左陣其人が活きた技巧の塊りてある。金太郎にあつては殆んど技巧を見てゐる暇を人に許さない、撲滔として舞台の上に渦卷くものは金太郎の「人」てある。技巧から人を誘つて人に技巧を忘れさせ、さうして役々を藉りて自家の「人」を見物の胸に薄らせる處に金太郎の生命がある。——

技巧の完成は尊いものである。然し技巧の完成其ものゝ尊さよりも、技巧を裏づけて廣大な世界を偲ばしめる人格の力は猶更に尊いものである。然かも左陣が能に於て示した完成の程度に於て、今の歌舞伎劇の何の作者が將た何の役者が、技巧の完成を示し得たとするぞ。私にとつては左陣の完成と言へども究竟の價値を置くことは出來ない、如何に云はんや今の歌舞伎劇

に見出さるゝ技巧のための技巧には殆んど何等の尊敬を拂ふことも出來ない。私が歌舞伎劇に對するとき、かの歴史的享樂主義者の態度と形式的享樂主義者の態度とが、私の心の上に作用することは否むことが出來ない。半日一夜の觀劇に際しては、如上二つの態度の孰れかを把持するに非ざれば、到底耐え忍ぶことが出來ない脚本と演技とに往々にして逢着するからである。同時に夫が强制される迄もなく任意に二つのうちの何れかゞ活らき出てゝ私の心の表面に蔓ることさへもないではない。然し私は歌舞伎劇に對する要求をかの歴史的享樂主義者や形式的享樂主義者の要求と同じくするものではない。寧ろ私は是等二つの態度が歌舞伎劇の「味ひ」の内容を濃厚にし擴張するに役立つ限りに於て、私の上に作用することを許してゐる。——私は態度に於て要求に於て（若し此名を僭することを許されるならば）象徴主義者である。歌舞伎劇が象徵主義の藝術に向ふとき、歌舞伎劇は初めて其完き價値に於て私の尊重の的となる。——

私は歌舞伎劇に『暫』や『矢の根』の樣な無意味（ノンセンス）を取扱つたものを、夫が外の諸要素から纏まつた氣分を作り上げる限り、歌舞伎劇發達の一階梯の見本として、同時に私の心の隅に潜んだ無意味（ノンセンス）に對する興味に快適なるものとして、其存在を許容する。然し『勸進帳』の樣なものに對しては、單に其歴史が『暫』に似た起源を證明すると云つて、唯無意味（ノンセンス）に對する興味にとつての刺激となし、唄や三絃樂や姿勢や色彩や聲調から作り上げられる「歌舞伎氣分」のみに滿足してゐることが出來ない。夫は唄其物に纏まつた事件の推移があり、其推移につれて性格の發展が見出され得るからである。同時に夫は唄の筋廻し緩急抑揚から人物の臺詞廻し型等に至るまで細心の注意を拂つて刻々に變化して行く氣分の表現と云ふことを目的としてゐるからである。夫は「人」を描かうとしてゐるからである。故に私は『勸進帳』に對しては「人」を求める、「人生」を求める人生を貫流する普遍の「眞實」に觸れることを求める。さうして價値的等級に於て『勸進帳』を「暫」の上に當

くこと勿論である。

私は臺詞廻しも型も伴奏樂も、根本に於ては一貫した詩の世界と節奏の世界とを持つと思つてゐる。是等の世界を無意味(ノンセンス)の境に放つたものが『暫』である。是等の世界を有意味の境に置いたものが『勸進帳』である。是等の世界を無意味の境に放つたとき、彼等は其儘の姿で纏まつた姿に調和してゐれば夫で可い。然し是等の世界が有意味の境に放たれたとき、彼等は其儘の姿であることを許されずして數多くの變曲(バリエーション)を形成らなければならない。變曲(バリエーション)は多くの相違を終結の上には示すとは云ひながら、一つの主題に還元することの出來る樂曲である。歌舞伎劇が「人」を描く藝術となるとき詩の世界と節奏の世界とは根本に横たはる主題となつて、臺詞廻しと型と伴奏樂との多様を統一するものてなければならない。

かゝる多様がかゝる統一に依つて複雜な交響樂を作り上げることは言ふを俟たない。「人」を描く歌舞伎劇が、無意味(ノンセンス)を取扱つた歌舞伎劇と根本に似て然かも內容に懸隔あるは此交響樂の相違である。――然かも此複雜なる交響樂が、凡ての音樂に要求される樣に、感じの淸新さと感じの深切さを要求されるのは當然のことである。故に臺詞廻しも型も凡て經驗された心持によつて裏づけられることを要求される。

私は臺詞廻しと型とを一種の記號と見る。記號にも夫自身に意味を持ち價値を持つた記號がある。然し記號が活きて働らくは記號が經驗された心持を背景に持つときである。象徵主義的に作用するときである。故に私は凡ての臺詞廻しと凡ての型とが――更に押し廣げて云へば凡ての歌舞伎劇の表現樣式が、眞實な自己內部の表現となるに非ざれば、多くの場合夫は支離滅裂な同時に作爲と誇張とに充ちた醜惡怪奇なものとなり勝ちであると思ふ。臺詞廻しと型とは歌舞伎劇の根本を流るゝ詩の世界と節奏の世界とから乖離して仕舞はない限り、同時に夫を自分のものとする目的を持つてゐる限り、一々に傳統に由る必要は毫末もない。全部を破壞し去つて新たなる創造を試みることさへも許

されてゐるのである。

私は歌舞伎劇が生きて活らくことを要求する。單に藝としての歌舞伎劇と單に形式としての歌舞伎劇とは私にとつて關心の問題ではなくなつた。技巧と人格とが終結する程に歌舞伎劇の世界に沒入し且夫を脫却し命の息を吹き入れた形式の奧には廣い高い深い大きな普遍の世界が磅礴してゐることを要求する。忠も不忠も孝も不孝も貞も不貞も誠も裏切りも戀も嫉妬も悉く殊相を離脫して「永遠に人間的なるもの」の姿となるべきことを要求する。此要求を充足するためには作者や役者は自ら「人」としての大きな經驗を持つてゐなければならぬ、同時に夫は歌舞伎劇の表現樣式を自分のものとしてゐるものでなければならぬ。――夫は恐らくあり得べからざることに屬するものでもあらう。然し少くとも歌舞伎劇が現代の劇壇に藝術としての存在を主張し得るは、極めて少數ながら其少數の役者に依つてかゝる傾向が漸次色めき立つて來たからのことである。故に此方向に歌舞伎劇を導くと云ふことは、歌舞伎劇の藝術として完全を破壞するものではない、却つて其長處を益伸びしむる所以である。

思ふに歌舞伎劇は單純化と力點化との點に於ては、現代の諸藝術に拮抗して優に卓越の位置を占め得るものである。恰かも希臘劇が人生の單純化と力點化とに於て成功した樣に、歌舞伎劇に現はされた「人」の感情情緒情調は多くの場合に於て單純な然しながら根抵を摑んだ同時に今の世に見出すことの出來ない程の深さと强さと劇しさとを持つた感情と情緒と情調とである。是を正確に高調して表現し得るものは、今の世にとつても是から先きの世にとつても、甚だ意義ある貢獻を人生の上に開拓して見せるものでなければならない。玆處に是から先き歌舞伎劇に手携はらうとするものにとつての大きな誘引があり、玆處に又多くの自由を犧牲に供して迄も猶歌舞伎劇と始終しやうとするものゝ立命地が存在する。

然しながら惜しむらくは在來の歌舞伎劇は縱令ひ多くの長處を持つてゐるとは云ひながら、許容すべから

ざる幾多の缺點をも持つてゐる。脚本としても要もなきに一編の氣分と逆行する場面を到る處に設け、演伎としては問題にもならぬ細部に頽廢の注意を注ぎ、然かも歴史的若しくは形式的享樂主義者の咏嘆の對象となつてゐる。よしや夫は享樂主義者の賞揚を贏ち得ても、畢竟ずるに全體を達觀して氣分の流れに神經質なるを得ざる愚昧の所産であるとは疑ひもない。私はかゝる箇所に遭遇する處に、かゝる脚本の改削とかゝる演技の破壞とを思ふを常とする。――今迄演劇改良と云ふことは幾度か行はれた。然しながら改良することを標榜した人の成果は多くは改良せられざる以前のものに比して寧ろ劣等なることを示した。かくてある者は歌舞伎劇竟に改革すべからずと唱へるに至つた。歌舞伎劇が改革すべからざるものではない、寧ろ改革を試みた人々が歌舞伎劇を貫流する詩の世界と節奏の世界を閑却してゐたが爲めに、若しくは夫等の世界に純粋に沒入することが出來なかつたが爲めに、偶彼等は不成功に終はつたものに外ならない。例へば型を創造すると――過去の型の誇張と不的確とを嫌つて端的な高調を與へむとするとも、演技に關した一種の改革である夫が過去から現在へ掛けて幾多の例證を見出し得るにも拘はらず、唯脚本の方面のみ其成績を擧げ得ないと云ふことは、一面此方面の改革者に才能がなかつたと云ふことゝ一面役者に於けるが如くに歌舞伎劇の世界の容易に誘ひ込まれ得なかつたことに職由する。――私は才能のある人で、然かも歌舞伎劇の世界と同じ呼吸と同じ脈搏とに自らの心を置き得る人にとつては、かゝる改革は易々たる事業であることを疑はない。

私は歌舞伎劇の一部の改革を主張するものである。此改革に依つて歌舞伎劇は益藝術的のものとなり、同時に「普遍へ向ふ努力」に由つてのみ初めて現在と將來とに活きうるものなることを信ずるものである。

新劇團合同論

中村吉藏

最近の新劇運動の勃興と共に、一時、幾多の新劇團が簇生して、それに伴うて幾多の新らしい俳優が産れて來た、乍併、自然淘汰の法則は倒すべきものを倒し、起すべきものを起して、今では四五の新劇團しか共存在を認められてゐない事になつた、而も多少社會公衆の信用を繋いでゐるものは、その中、二三に過ぎない所謂、審判の日は近づいたのである、此から暫時の間が眞の意味に於ける新劇團の試練時代で、又新らしい俳優の試練時代である。

果して然うだとすれば、我が國に於ける新劇運動の藝術的及社會的基礎の安否の定まる時期は已に眼前に迫つて來てゐるのである、否、寧ろ、自ら進んでそれを定むべき時機なのである、回避したり、逡巡したり一時的な姑息手段で、眼を蔽うて目的地を見まいとする者は自然淘汰の「暗礁」に打突かるか、飛んでもない處へ漂流し去るか、何れにしても「敵」の物笑ひになるの外はないのである。

自分が茲で、特に「敵」といふのは、新劇團の同じ仲間内の事を云ふのではない、否、今日の新劇團の弊はあまり仲間内で「敵」視してゐる處にある、無論、技藝上の競爭は自然の事である、團體の勢力擴張上の競爭も亦止むを得ない、乍併、それ以外に、彼等には「共通の敵（コンモン、エネミイ）」のある事を忘れてゐる、少くとも同じ仲間内の競爭――從つて相互の敵視に全體の注意力を奪はれて了つて、その傍に彼等の「共通の敵」が大きな顏をして、ハサばつて歩いてゐるのに氣が附かない、片隅の小ぜり合ひに熱中して、碁盤の大局が眼に入らない、所謂ザル碁中のザル碁を打つてゐるのが、今の

新劇團の競爭振りである。

「共通の敵」とは云ふまでもなく、在來の歌舞伎劇及び新派劇を一括した舊劇團である、素より彼等個々の俳優に對しては、何等の恩怨もないが、抑も新劇運動の起つた主旨、目的に遡り、又新らしい俳優の產れた自覺と動機との根元を堀つて見れば、其所には舊藝術に對する新藝術の宣戰の布告があり、必然の結果として劇壇の地圖變更といふ企圖があつたのである、成る程、地圖の上に全然、新らしい色彩が出てゐないとは云はぬ、乍併それは繪具が下手にこぼれた程度のものであつて、地圖の變更はまだ一向行はれてゐない、假令新派劇の衰微といふ傾向は確實であるにしても、それに取つて代つたのは新劇團で無くて、却つて歌舞伎劇である、而も新派劇よりも古い德川時代の產物たる歌舞伎劇である。

無論、味ふ觀客に幾多の階級があるから、味はるゝ藝術にも幾多の階級があるのは自然だ、文化の最も進んだ歐洲大陸の諸國ですら一方に高級な近代劇專門の劇場があるかと思ふと他方に低級なコミック、オペラ專門の劇場が繁昌を極めてゐるし、又同じ劇場にしても、新らしい物を出したり、古い物を出したり、通俗劇を懸けたりして、いろんな方面の客を吸集してゐる始末だから、今急に歌舞伎劇や新派劇を、我國の劇壇から驅逐し去れといふやうな無理な注文はしない、又しても、出來る譯のものではないが、唯、此等の舊劇の占めてゐる地盤が廣過ぎるのに比較して、新らしい劇には、まだ確乎たる足場が出來てゐない、宣戰の布告はしても、まだ敵地の一角をも確實に占領したといふ實蹟が上つてゐない。具體的に云へば、ハウプトマン、ズーダーマンの所謂、新らしい民衆劇は、まだ日本の社會の一隅にも打建てられてゐないのは、いかにも悶かしい、張合がない、併し玆に考ふべき問題が橫はつてゐるのである、玆から新劇團に共通した一大目的の自覺の必要が出て來るのである。

今更歌舞伎劇を評論する必要もないが、新時代の精神生活とは沒交涉な、封建時代の道德觀念を背景とし

て、その前に一種の擬古典的技巧主義を踏襲してゐる過去の幽靈が、今日も猶電燈の脚光の中に依然として活動をつゞけて、因襲を喜ぶ多數の觀客に喝采されてゐるのみならず、妥協を斥け、自覺に活くる新時代の人々にまで往々隨喜の涙を流させてゐるのは何ういふ理由に基くのであるか？　押詰めて見ると「過巧（エラボレート）な技巧の誘惑力」そのものである、而もそれが個々の俳優から發光せらるゝのみでない、歌舞伎劇の技巧の組織的本質の上から、又團體としての訓練の上から、渾一的な、所謂藝術的印象を與へるのである、一切の喝采も隨喜も、皆こゝから出て來てゐる、之に加ふるに時代は已に過去に屬してゐても、兎に角、飜譯劇とは違つてその中に親むべき國民生活があるのが、附加的な、若くは先行的な感興の條件となつてゐるのである、又新派劇が、今猶、其、餘喘を保つてゐるのは、第一に練磨の功を積んだ俳優の粒々揃へる事が出來るし（その爲めに、脚本を破壊する弊害も生ずるが）又第二には脚本の内容は別問題とするも、日本人の言語と、日本人の外面的生活の或者とを舞臺上に使用してゐるのに因るのである。

彼等の「共通の敵」たる歌舞伎劇及新派劇の此の長所と特色とは、實に新劇團の短所であり又、缺點である、在來の堅固な城壁に據れる敵は、此の恃むべき武器を持つてゐる、然るに、此を攻撃する者は、殆んど無手である、而も亦無人である、否その攻撃すべき「共通の敵」を忘却して、仲間同士で内訌をつゞけてゐる舊劇團の地盤の一角をも確實に占領し得ないのは毫も怪むに足らない。

勿論新劇團の新らしい俳優が、外國の近代劇の飜譯的演技から出發したといふのは、寧ろ至當の事でもあり、又その强味でもある、近代の精神文明の結晶された傑れた飜譯劇は、直に現代の日本人の新生活に啓示の光を與へ、又共鳴の響を發せしむる無上の力である、眞に新らしい意義の國民生活の劇は、斯くしてその生起を催進せられ、誘導せられるのである、此の理由からして、今後と雖も、傑れた飜譯劇は、新劇團に

依て不絶演出さるゝ必要がある、乍併、屢々繰返された新らしい劇團の分裂と共に、新らしい俳優の分裂は全體としての劇そのものゝ演出の上に、著しい龜裂を生ぜしめた、新劇團に依て上演せらるゝ劇の、最大の弱點は、俳優の粒の揃はないといふ事である、元來、訓練の日の猶淺く、舊劇團の俳優の閲し來つた苦心慘憺たる經驗の功はまだ積んだ事のない新劇團の俳優が、早くもその結束を解いて、各自その自己を立てんとするに急いだ爲めに、却つて自己を滅却するに了らんとする最も痛嘆すべき流弊を生じたのは、新劇團の爲めに、又新らしい劇の爲めに、最も傷ましい事實である。

乍併余は今更、劇團分裂の過去を咎めやうと思ふものではない、その中には水の流るゝやうに自然の事實もあらう、爆發すべきものゝ爆發したに過ぎないものもあらう、それと同時に、一旦分裂し盡したものから更に新らしい綜合が始まるのは自然の現象である新劇團は今、此の一事を痛切に自覺すべき時機に到達してゐる。

此際、新らしい俳優の、先づ反省する事を要するのは、彼等の抱いてゐる個人主義的自覺と、綜合藝術に對する態度とである、彼等は新教育を受けた新時代の人であるといふ點に於て、舊劇團の俳優に優つた第一の强味を持つてゐる、個人主義的自覺は彼等の誇りである、乍併、彼等が個性の獨立的表現の最大自由を有する抒情詩人や小說家や畫家や彫刻師を撰ばないで、個性と個性との綜合的調和の上に、最高最大の表現を求むる劇の藝術家として立つといふ決心をした以上は、彼等の個人主義的自覺の眼は、一層、深い、又一層廣い處に向つて醒めて來なければならない、即、彼の單獨の個性のみては創造の出來ない、彼の個性と他の個性との接觸するを俟つて始めて創造せらるゝ「劇の獨特の藝術境」の尊重すべき事を自覺する事である一の力と、一の力とが接觸して、新らしい三の力を生じて來る「劇の獨特の藝術境」を眞に理解し、意識する事である、即ち、この極致に達する爲めに、自然に

發生する義務と規律とに飽くまで忠實なる服從をせなければならぬ事を自覺する必要があるのである、若し此を否定する時には、彼等は無自覺的に俳優の職業を撰んだ者と云はなければならぬ、不徹底的な個人主義的自覺に停滯してゐる者であると云はなければならぬ、個人主義者イプセンは斯う云つてゐる「俳優は他の藝術家とは異つた地位に立つてゐる、彼は彼自身丈では完成したものではない、彼は一の複雜な器關に屬してゐる、その器關の作用の一部分として働くやうに規律で縛られてゐるのである、彼が若し、その地位を撰んだなら、その地位の當然の結果に堪へなければならない、此の理論は冷酷な心事から出たのではない、親しい經驗から來てゐる」と、舊劇團の俳優は、無自覺的にこの理論に服從してゐる、其處に彼等の弱い强さがある、新劇團の俳優は、まだこの理論を承認する程度に眞に自覺してゐない、茲に彼等の强い弱さがある、而して此の戰に於て、盲目的實行者が已に勝利を得てゐる、半信半疑の中途に迷うてゐる者は、混亂と紛糾と、さま〴〵の失敗の目を自ら招いてゐるのである。

新劇團の俳優の、この不徹底な個人主義的自覺は、一面に分裂から分裂へ導く禍因となつてゐる以上に、更にその綜合、統一を妨ぐる跌（つまづき）の石となつて横はつてゐる、これが新らしい劇に、眞に渾一的な、調和的な藝術上の完成を與ふる機會に遠ざからしめてゐると同時に、劇に伴ふ最も困難な經濟問題の壓迫に對抗する力を薄弱ならしめてゐる、舊劇團の俳優の有してゐる最も鋭敏な職業的自覺は、彼等の藝術乃至技巧を練磨する鞭韃であると同時に、その結束力と服從心とを養成せしめ、隨つて經濟的保證を確實ならしめる一の重大な活力であるが、新劇團の俳優には、往々徹底せざる藝術的良心があつて、徹底した職業的自覺が無い、その結果、經濟的基礎は確立しない、「食つて行けない」處に眞の藝術の成長する見込はない、否、其處ば人間の永久な住家ではない、斯くて新劇壇には素人（アマチユアー）の道樂は蔓延して來ても、新らしい俳優が自己を完成する

希望の綱は頼少なくなつて來るのである、此方面にも新劇團の無氣力な理由がある、武器と兵糧と、この兩方面で、今のまゝでは、新劇團は舊劇團の陣地の一角をも奪ふ見込は殆んど無いと云つても善い、少くとも現狀維持では、新劇運動の當初の覺悟や企圖は當分事實上に現れて來さうにも無いのである、新らしい民衆劇の基礎は作れさうにも無いのである。

今や新劇團は彼等の「共通の敵」を正面に見るべき時代である、而してその敵の長所と特色とを深く考へて見なければならぬ時機が來たのである、自己の短所と缺點とを痛切に反省して、新らしい出發を試みねばならぬ必要に迫られてゐるのである、即ち共に飛躍するか？　共に立往生をするか？　二者その何れかを撰ばなければならない、「共通の敵」に對する宣戰の布告を撤回するか？　若くは眞に自覺的な實戰を開始するか？　その進退を決しなければならぬのである。

この問題の積極的解決の爲めには、余は新劇團の合同を提唱するの他に、途は無いと思ふ、勿論、今日の狀態に分裂し來つた幾多の劇團を、無差別に補綴したり、苟合させたり。して第二の渾沌(ケオス)を作らうとするのは、愚なる反復である、無益の勞力である、そんな事は希望もしなければ、要求もしない、乍併、俳優として不徹底的な個人主義的自覺――その實は相互の無自覺的態度の上から、分れたり、離れたりした人々をして、此際、徹底的の自覺に醒めしめて新らなる有機的結合を企てしめるのは、藝術的完成と、經濟的保證とを新劇團の前途に期待すべき唯一の方法であり、又自然の趨勢であると信ずるものである、片隅の小ぜり合以上に全局面の死活問題の大切な事を、眞に自覺し得た人々が、この自覺の基礎の上に、一大合同を形作る事は、最も望ましい事でもあり、又、最も喫緊な當面の問題であると思ふのである。

若しかゝる合同問題が實行上に幾多の困難を生ずると云ふ懷疑論者があるなら、余は必ずしもかゝる合同を急いで、不自然を誘發する禍の胚子をその間に混入せしむるやうな不謹愼な冒險を敢行せりとは思はな

い、乍併唯此の一事丈は必ず實行の端緒が開かれなければならぬと確信する、即、それは新らしい劇團が雅量と恒懷とを以て互に其所屬の俳優を融通し合ふといふ事である、勿論それも單に興行政策の上から、かゝる融通の途を開くのは利益よりも却て弊害を伴ふ場合がある、故にこの方法も先づ藝術的條件を基礎として行はなければならない、一層具體的に云へば、撰ばれた一の脚本を中心とし所屬團體の差別を眼中に措かず、唯その作中の性格に最も適する俳優を一粒選にして臨時に一の新劇團を組織し、最も渾一的な、調和的な「技巧上の誘惑力」を發揮すると共に、脚本の精神的方面を表現する事を得る模範演劇を年に幾回か開催するのである、斯くすれば、全體としての藝術的方面に於ても、舊劇壇を壓倒し、若くは此と對抗するに足る實質的價値を示す機會が出來る、同時に五日や一週間の短期興行でなく、比較的長期興行をもつゞける事が出來て、隨つて經濟的の基礎も出來、俳優各自に職業的自覺と、藝術的良心と兩つながら鋭敏ならしむる動機を與ふる所以ともなるのである、實際問題としては臨時に監督者の必要も起つて來る、乍併、眞に大局に着眼することとの出來る人には斯の如きは小問題として、容易に解決し得る筈であると信ずる。

若し、此の意味の、新劇團の合同問題すら容易に實行されない程、小感情、小反目の制馭が出來ない諸團體、乃至諸俳優の集團から今の新らしい劇團が成立つてゐるのだとすれば、彼等の前途は絶望である、隨つて日本の新らしい劇――寧ろ新らしい民衆劇の前途にも光明はない、斯くて舊劇團少くとも歌舞伎劇は、依然として大正の新時代の國民生活の自由解放を束縛する舊い、而も堅い鐵鎖としてその幽靈的魔力を永へに喪失しないであろう、此の一見不可解なるパラドックスは、何處迄もパラドックスとして殘されて行くであらう。

元來、日本人の個人主義には輕浮な要求が先に立つて、常に重厚な自覺が缺けてゐる、近視的であつて、遠視的でない局部が見えて、全體が眼に入らない、新

文壇に流行する三號雜誌の簇生はやがて新劇壇に見る幾多の劇團の簇生と相呼應する新代の病である、獨逸の新劇運動の急先鋒となつた「自由劇場」の起つた時に、同時に伯林市にその模倣者、若くは競爭者は現はれなかつた、唯普通劇場が直にその門戸を開いた丈である、この運動に呼應したものは、他の聯邦の各都市にはあつたが、同時に、同一の場處に、かゝる素人的運動が簇出した例はない、佛蘭西の「自由劇場」も、その設立後、數年を經て始めて一の「美術劇場」を競爭者として立たしめたに過ぎない、日本の新劇運動に徒らに競爭者、若くは模倣者が多くて、その仲間同士の爭鬩や、反目やに日も惟足らず、共倒れとなるに了るか、若くは共に疲弊し、衰弱して、一向、實蹟が上らない、「共通の敵」は何處にあるやら、忘却し去り、若くは嘗て念頭にだも浮べない、目的なく、希望なき戰を、目的あり、希望ある如く戰つてゐるのは、一の迷路に入つたものと云はなければならない、個人としても團體としても、深く反省し、強く自覺する事を要するものである。

此の意味に於て「新劇團の合同」は一の夢想として斥け去るべき事ではない、その生存の意義の上から、又その大目的の自覺の上から、併せて我が國民生活の將來の支配の上から、已にその實行機に迫つて居るのである、薪木は積まれてゐる、唯、此に火を放つ手を要するのである、かくて彼等の「共通の敵」の所在が隈なく照らし出された、新劇團の行くべき途も始めて明らかになつて來るのである。

島村抱月氏に呈する書

相馬御風

一

島村先生

今回「中央公論」の増刊として「新脚本號」と云ふのが出るについて、劇壇に關する感想があつたら私にも何か述べろと云ふ事ですが、劇壇の事と云つても、今のところこれと云つて、云つて見たい事もありませんから、それよりも最近劇壇の最も大きな問題の人となつて居られる先生に對して、これを機會に少しばかり私の考を述べさせて貰つて、そのうちお隙の折にゆつくり高教を仰ぐ材料にしたいと思ひます。

先生私は最近出版された先生の評論集『懷疑と沈默の傍より』の序文に先生が『私も近來殆ど筆を執る暇の無いほどあわたゞしい生活を送つて居る。たゞ一筋の前途を見つめてあるいて居る。手もはたらかせ足もはたらかせる。自分では可なり活きた心持でやつて居る。その代り評論を書く氣が起らない。いくら逼迫した評論でも筆を執つて紙に向かふと、もうそこに斷隙が生じてたるんで來る。この頃はあまり何も書きたくない、言ひたくない、たゞ默つてはたらいてゐればいゝ。』と告白して居られるのに接して、生活そのものに對する先生の考が最近著しく積極的になつて來た事を、心から嬉しく思ひました。今更申すまでもない事ですが、昨年の後半期以後の先生の生活は、恐らく嘗て經驗なさらなかつた動亂を極めたものでした。內からの要求と云ふよりは、寧ろ外からの事情に餘儀なくされて、先生が選びとられた新方向は、昨年以來の先生の內心にはいかばかり烈しい動亂を生じさせたか解りません。これと云つて實生活との矛盾のない幸福な無垢な觀照生活の一路を永い間安全に辿つておいてになつた先生にとりて、昨年のあの變動はどれほど苦し

い打撃であつたか解りません。打ち明けて申しますと、昨年の後半期以後今年の始めに至る間の先生の苦悶の様子は、そばに見て居る私達の堪へ得ないほどのものでした。先生御自身の苦悶は無論でしたが、そばに居る私達もその爲めにどんなに苦んだかわかりません。そして先生御自身の新事業に對する態度が動搖する毎に、先生の新事業に對する私達の態度も動搖しました。しかも御互に皆眞劍であり眞面目であるだけに、さまざまの動搖はつぎつぎに行くところまで行かなくては止まない性質のものでした。つまりその爲めに幾人の人が眞面目に苦んだり、激したり、悲しんだり、失望したり、爭つたりしたか解りません。凡ては先生はじめ皆の人々が眞劍だつたからです。少しの餘裕も持つて居なかつたからです。

けれども、今から振り返つて見ると、あの頃に於ける先生はじめ皆の人達の眞劍な態度は、いかにも其の内容に於てみすぼらしいものであつた事が解ります。一時ではありますが坪内先生と妙な關係に立たされるべく餘儀なくされた先生の心持、松井須磨子氏に對する曖昧なそして遠慮勝ちな先生の態度、それから藝術座の經營上に於ける不安定な先生の態度——どの方面を見ても、當時の先生は不安動搖の人でした。先生は今日でこそ「たゞ一筋の前途を見つめてあるいて居る」と明言して居られるけれども、つひ四五ヶ月前まではその「たゞ一筋の前途」が、先生の眼には見えなかつたやうでした。就くに處なき不安と動搖とが絶え間なく先生の心を支配して居るやうでした。先生御自身が既にさうでしたから、先生と事業を共にして居た他の多數の人達のことは推して知るべしです。誰一人確信を以て事に當る者のない多くの人の集まつた中に立つて、その中心たるべき先生御自身があのやうな不安動搖の狀態に居られたのであるから、たまつたものではありません。無自覺な見ぐるしい紛亂が刻々に起伏して止まなかつたのも、無理のない事だつたと思ひます。

先生。もしあのまゝの狀態が今日までもずつと續いたとしたならば、先生の事業はどんな結果になつたで

せう。先生御自身の運命はどうなつたでせう。けれども人間はいつまでもそんな状態に堪へ得るものではありません。倒れるか、逃げるか、それでなければ何等か積極的な自覺的境地に進まなくてはならない筈です。私達はその三つの途のいづれを先生が取つて進まれるかについて、隨分永い間眼を見張つて來ました。そして今日になつて漸く私達の最も多く望んで居た光明の道へ先生が第一歩を踏み出されたのをたしかめ得たのです。それと同時に初めて私達は中心から先生をお助けする事の出來る方向を見出したのです。

先生。至極平凡陣腐な事ですが、本當に自分を助ける者は結極自分の外にありません。又本當に自分を批判する者も、自分の外にありません。昨年の後半期以後、先生が新たに劇壇の人としての事業を創められてからと云ふもの、先生と共に事をなし、或は先生をお助けして事をなさうとして、どれだけ多くの人が先生の周圍に集つたか知れません。けれどもそれらの多くの人達の力が、眞にどれだけ先生の事業を助ける事が出來たでせう。又どんな風に先生の事業をより好い方向へ向ける事が出來たでせう。主觀的には無論それらの人達も相當に先生を愛し、先生の事業を愛し、更に藝術そのものを愛して居たにちがひありません。併し主觀的に愛すると云ふことのみが、決してその愛する人又は物を好い方へ助けると云ふ事にはなりません。

眞に人を愛すると云ふ事は、彼をしてわが道を歩ましめる事でなくて、彼をして更に彼の道を歩ましめる事でなければならんと私は思ひます。隨て彼にして眞に自己の歩まうと欲する道を持たない以上、何人も眞に彼を助ける事は出來ないと思ひます。少なくとも自覺的生活を營むもの丶相互の愛は、さうあるべきではないでせうか。此の意味で私は昨年以來先生の新事業を助けやうとして集まつた多くの人達の愛は、つひに何ものをも先生の事業に附け加へる事が出來なかつたと思ふのです。併しそれは單に多くの人達に眞の愛がなかつたからではなくて、眞に他から愛せられ助けらるべき先生御自身の自我生活が纒つて居なかつたから

です。お助けしようにもお助けする方向が解らなかつたからです。即ち先生の新たに選ばれた事業に對する先生御自身の自覺が甚だしく薄弱な不安定な不分明なものだつたからです。

更に先生御自身のさま〳〵な私行上について、又演劇事業を營む人としての先生の適不適について、如何に多くの毀譽褒貶が廣い世間から先生の上に浴せられたか解りません。しかもそれら多くの毀譽褒貶の如何に根據の不分明な、理路の不確定なものであつたかは、誰よりも先生御自身が能く御存じの事でせう。けれどもさう云ふ捉へ所のない世間の毀譽褒貶の由來するところも、私などから見れば多く矢張御自身の自覺の薄弱から來たものと思ひます。先生御自身が御自分の生活に對して、充分明確な强固な自覺をまだ持つておいてにならなかつた。こゝが本當の俺の行くところだと云ふ風に、自分で自分を充分に是認なさるだけの方向を摑んでおいてにならなかつた。そしてともすれば回避的になられたり、絕望的になられたり、退嬰的になられたり、さては甚だしくセンチメンタルになられたりするやうな傾の多分にあつた事實は、今日の先生ならば自ら充分に御認めになる事でせう。先生。他人が自分を見る中心點は、結極自分みづから是認し肯定した自分の姿の外にはありません。自分に對する最後の批判者は、自分より外にあるべき筈がありません。つひ先頃までの世間の先生に對する曖昧な態度は、つまりは先生御自身が御自分に對して取つておいてになつた態度の反映ではなかつたでせうか。

島村先生。

私は以上のやうな事をさま〴〵と考へて見まして、更に最近に於ける先生の積極的な、努力的な、肯定的な生活に對しますと、何とも云ひ表はしやうのないやうな力强い感激を覺えます。單にそれは先生御自身の爲めを思つてばかりでなくて、それと同時に自分自身の爲めの力强い昂奮を、感じさせられるのです。「この頃はあまり何も書きたくない、言いたくない、たゞ默つてはたらいてゐればいゝ」——これだけの强い信念の

籠つた言葉を、先生は嘗て被仰つた事があるでせうか。「たゞ一筋の前途を見つめてあるいてゐる。自分では可なり活きた心持てやつてゐる」――これだけ力の充實した言葉を、先生は嘗て被仰つた事があるでせうか。

あの装飾の少ない、色彩のどちらかと云へば貧弱な書齋の中に閉ぢ籠つて何を考へるともなく茫然としておいてになる倦怠と疲勞と懷疑とに囚はれた先生の日常を、かなりに永い間見て來た私達にとりて、先生が最近に表白なさつた以上の短かい言葉が、どんなに力强い響を與へたでせう。どんなに活々した氣分をもたらしたでせう。今の日本の文壇の人の多くが夢想だもする事の出來ないやうな激しい實際問題の渦中に立ち、自分の生活の全體を投げ出して道德問題乃至藝術問題の論議の材料として、雜然たる毀譽褒貶の間に立つておいてになつた先生の最近一年間の生活は、それ以前の永い間に於てつひに見る事の出來なかつた先生を私達に見せてくれました。はじめは先生にとりては餘儀ない戰ひであつたかも知れませんが、今では先生は立派な人生の戰士となられました。過去に於て極力觀照の藝術を主張された先生は、今はどうしても爭鬪の藝術を說かなくてはならぬ先生となられました。つひ一年ほど前人生の哲學化を說き、人生の藝術化を說かれた先生は、今は御自身の實生活のうちにあらゆるものを味つて行かれる先生となられました。以前にはよく仕事の價値に上下をつけて、「さう云ふ事はどうも私には……」と云ふ風に、實行上の面倒臭い事はなるべく避けるやうに避けるやうにとなさり勝ちであつた先生が、此頃では必要な事はいかなる事にても充分の意味を認めて快く立ち働くやうになられたのを側から見て居て、私達はたまらない愉快を感じます。

先生は以前にはよく藝術と實行との區別を力說されました。近著『懷疑と沈默の傍より』の中にもそれがあります。

『例へば世局の艱難に現に面と向つた人が、一所懸命に其の艱難を切り拔けやうとストライヴしてゐる間

は第二義的實行の氣持てあるが、ストライヴし了へて、又はストライヴしあぐんで手を組み眼を閉ぢて今迄の經過を回顧し、人世は結局何うして斯うなのだらうとか、人世は成程あゝしてあつたのだなとか沈思する、此の回顧沈思の瞬間から意識に全く異なつた味が添はる。是れからが我々の見て以て藝術的經驗と呼ぶものである。」

から先生は云つて居られる。けれどもこれほどまでに劃然たる區別が實行と觀照との間に存するものであるとすれば、今日先生が明らかに告白して居られるやうな「たゞ默つて働いてゐたい」と云ふ要求が、どうして先生の要求の全部となる事が出來ませう。まして先生御自身が近頃は評論も書かない「いくら逼迫した評論でも筆を執つて紙に向かふと、もうそこに罅隙が生じてたるんで來る」と云つて居られるやうな事が、どうしてあり得ませう。何となれば以前のやうな特殊な觀照世界にのみ藝術を今日もなほ求めておいてなるものとすれば、當然先生にはある特殊の藝術的表現が要求されなければならないからです。然るに現在の先生は特にそれを要求しては居られない。寧ろ默つて働くことに全部の要求を向け、生の歡びを味つて居られる。けれどもそれは先生御自身に藝術的生活がなくなつて先生の所謂第二義的實行の人と先生がなられたからではありません。寧ろ先生の實行的要求と藝術的要求とが渾然たる一如となつて働き出したからでせう。ある特殊な心境、ある特殊な表現に拘束されないて、生活のあらゆる刹那を通して先生の藝術的要求が滿たされるやうになつたからでせう。即ち藝術も哲學も凡てが先生の生活に化せられたのでせう。外から生活を化するのでなくて、先生の生活のうちからあらゆるものが創造され、享樂されるやうになつたのでせう。つまり先生が最近に於て始めて本當の意味の自覺の人、自由の人となられたのでせう。

先生。私は最近に於て先生が斯くまでに積極的に、かくまでに充實した生活を營まれる人となられた事を、心から嬉しく思ふのです。そしてそのうちに私自

身今日まで考へ惱んで來た多くの道德問題、藝術問題、乃至もつと廣い人生問題の現實化を觀ることの出來るのを、更にうれしく思ふのです。けれども、先生、私はこれを以て先生が自我の完き發展をとげられたものとは思ひません。寧ろ先生がはじめて本當の自覺生活の出發點に立たれた事そのことを私は何よりも嬉しく思ふのです。以前よく先生が說かれたやうに人生最後の理想を求めると云ふやうな境地から先生が脫せられて、刹那々々の現實生活の味のうちに凡てを求めつゝ進まれるやうになられた、その先生の新らたな出發點を私は讃美したいのです。

凡てはこれからです。これからの先生の生活が本當に根本から先生の價値を定める生活ではないでせうか。今やその出發點に先生が立たれたのだと私は思ひます。

二

島村先生。

此の手紙は最初主として劇に關する私の感想の一端を先生に聞いていたゞくつもりで書き出したのですが、その方のことはまるで書かないで、飛んでもなく話が橫道へそれてしまひ、調子に乘つてさう無暗と云つてはならない事まで書いてしまひました。併しどうせいつか一度は腹藏なく云つて見たいと思つて居たことなのですから、骨ばかりで不滿ではありますが、兎にも角にも胸が幾分すつきりとしたやうな氣が致します。日頃からよく私を理解してゐてくださる先生のことですから、失禮の段は御寛容くださる事と思ひます。

先生。私は嘗て先生が「今迄の私の思想の經路を顧みると、段々藝術と實生活との界を狹めて來て居るのは事實であるから、今後或はこの藝術の特殊境を捨て得る時が來るかも知れない。又來ないかも知れない」(「懷疑と沈默の傍より」第一四四頁)と云はれた時に、私はひそかに「さう云ふ時が來るかも知れる知れないでなくて、當然來べきである」と思つて居ました。今その時が來たのです。思ふにこれからの生活に於て先生

は先生の凡ての生活が、先生御自身の充實した内生命の表現であり、同時に藝術であるべき事を、みづからお認めになる機會が甚だ多いことでせう。そしてそれと共にこれまでお持ちになつてゐらした先生の藝術觀が、全くこれまでとは變つた新らしい面目を現はして來るでせう。私は今先生に對してその事を切に期待致して居ります。

一體先生は以前から藝術論の上では、實行と觀照との間に劃然たる一線を引いておいでになりましたが、全體から見た先生の生活は、兎角それとは反對の方向へ行かう〱として居るやうに私などには見えて居ました。それは教育家としての先生の態度にも充分現れて居ましたし、又常に社會問題や道徳問題などに多くの興味を以て居られた先生の態度にも充分現れて居ました。更に藝術に對する先生の態度について見ましても、所謂趣味に對する執着性の少ない點で、先生は私達の誰よりも著しいやうに見うけて居ました。隨て私達は先生を以て趣味の人だとは思ふ事が出來ませんでした。官能や感情よりも理性や意志の方面に、他人に優れたところをより多く持つておいでになる先生には、所謂狹義の藝術活動よりも、廣い意味の精神活動の方が適して居るやうに、私達には常に思はれて居ました。そんな風でしたから私達にはかの藝術の特殊境を力を入れてお說きになる先生と、私達が日常面接して居た先生との間に、ある一つの矛盾があるやうにのみ思はれて居ました。先生御自身も多少その矛盾に氣付いて居られたらしく、事毎に實行と特殊藝術との區劃點を見出すことにのみ努力されました。先生が一方に於て社會に對し道徳に對して可成に大膽な卓拔な革新的意見を持つて居られながら、それが兎角實行的にならず主張的にならなかつたのは、要するに先生御自身の分裂した内生活を、强ひても實行と藝術との二元觀によつてそのまゝに破綻なからしめようとして來られたからではないでせうか。

けれどもさう云つた生活内の矛盾は、いつまでもそのまゝに塗抹されて居るものではなかつたのです。藝

術的心境に於てのみ圓滿な世界を形造つて居り得るものと思つておいてになつた先生の第一義的な人生觀や社會觀や道德觀は、ついに現實問題となつて、先生御自身のあらゆる生活を動亂させずには居ませんでした。そしてその表現は、決してもう單なる特殊藝術であるべく止まる事が出來ないで、先生御自身の全體生活そのものを通しての全的表現でなくてはならなかつたのです。昨年以來の先生の生活は、實に永い間內なる狹い特殊藝術の世界に塗抹されて居た先生の要求の全的表現ではなかつたでせうか。思想は單なる思想でなくて、一擧手一投足が同時に思想であり藝術でなければならなくなつたのは、昨年以來の先生の生活ではなかつたでせうか。私一個の考から申しますと、過去に於ける先生の觀照と實行とは先生のうちにたゞ存在して居たのであるが、それが最近に至つて兩々相渾融して眞の意味の生活となつて來たのです。そしてその生活は、同時に表現であり、藝術であるべくなつて來たのです。

先生。これが本當の意味の生活ではないでせうか。これが本當の意味の表現ではないでせうか。古來偉大だと云はれて來た人の生涯が、私達に優れた藝術品と同じ興味、同じ昂奮を與へるのは、その人達の生活そのものがその人の全的表現であつたからです。この全的表現が、眞に第一義の藝術であり、同時に本當の生活ではないでせうか。偉大であるなしは別として、先生は最近に於て積極的にさう云ふ生活の出發點に立ち至られたのではないでせうか。

先生は今は「何も書きたくはない、言ひたくはないたゞ默つてはたらいて居ればいゝ」と云つておいてになるけれども、それがつひには「書きたい、言いたい、そしてはたらきたい」と云ふ風な、あらゆる事を同じ充實した心持で要求されるやうになるでせう。書くことも、働くことも、行ふことも、言ふことも、凡てが同じ意味で先生には活きた氣持でされる時が、來るでせう。私は今その時の來るのを先生の爲めに切に希望して居るのです。

先生。繰り返して申しますが、先生は到底趣味の人てはありません。官能と感情とに偏執し得られる人てはありません。随て先生は普通に云ふ狭い意味の藝術家になれる方だとはどうしても私などには思へません。今ては御自分てもおわかりになつた事と思ひますが、先生は矢張廣い意味の文明批評家てす。廣い意味の革新的事業家てす。先生御自身はどう思つておいてになるか知れませんが、過去に於ける先生の功績も、現在乃至將來に於ける先生の事業も、係つて此の一點にありはしないてせうか。

先生は今や新劇壇の人として、花々しい活動を示しておいてになる。けれども若し將來に向つて先生が狭い意味ての新らしい、劇の開拓者や舞臺監督や作者を以て任じられたり、普通謂ふ意味ての劇團のディレクターやマネージャーを以て任じられたりしようとなさるならば、それは必ずや先生その人を誤つた道へ誘ひ落すてせう。先生は斷じてラインハルトやクレーグてはありません。その方面ては私達と雖決して先生を要求しては居ません。

先生。先生はどうしても矢張趣味の人てはありません。又狭い意味ての藝術家てはありません。先生は矢張廣い意味ての社會改良家てす。文明批評家てす。生活をスルーして藝術を創造して行く人てす。形ある物を造る人てはありません。生活を動かし進める人てす。而して此の意味ての先生の活動ならば、私はその演劇事業たると否とを問はず中心から歡迎するに躊躇しません。

最近に於て眞に新らしい光と力とを人格の上に現はしておいてになつた先生に對して、私は此際特に以上の數言を呈したいと思つて永々と此の手紙を書きました。失禮の言辭の多いのは、日頃の御厚情にあまへての無遠慮としてお見のがしを願ひます。(大正三年六月三十日)



新演劇に於ける

逍遙系と鷗外系

匿名氏

一

自由劇場が始めてイプセンのボークマンを演じ、文藝協會がノラなどを出して喝采を博したのはまだ三四年前の事である。其頃までは新演劇に對する要求はぽつ〳〵新聞や雑誌に見えたけれど、芝居と云へば歌舞伎劇か所謂新派に限られて、新時代の藝術として、教養ある社會の鑑賞に値するやうなものはなかつた。新しい芝居がなかつたばかりではない、新しい脚本を作る人すら殆んど居なかつた。雑誌なども脚本と云へば鼻摘みにして、名家の物さへ之が掲載を躊躇する有様であつた。之れが僅か二三年の間に、新劇團の數は十を以つて數へるやうになり、脚本の毎月雑誌に發表せられるものも數十に上ると云ふに至つては、實に驚くべき發達と云はねばならぬ。數年前までは演劇とは殆ど沒交渉の地位に立つてゐた學生が、新演劇に於いては隨一の渇仰者となり、曾ては演劇を輕侮して居た上中流の社會へ漸く其根據を置かうとしてゐるのは實に不思議な現象と云はねばならぬ。日本今日の劇壇は獨逸が數十年もかゝつて出來上つたものを僅かに數年の内に實現しようとしてゐるのである。實に盛な事ではある。

新演劇が此の如き急激な發達を遂げたのは日本の社會の一般の機運が之を助けたのにもよるが、又一面から見れば之を促した人があつたからでもある。それは文壇の二大長老たる逍遙鷗外の兩博士である。

逍遙鷗外と並稱せられてゐるのも久しいものである。沒理想論に於いて當時文壇の兩雄が覇を爭つてから既に二十年になる。一時小説が文壇の中心問題となつて、自然主義熱の盛であつた頃は、此二大明星は暫く其影を淡うして文界の小遊星たるに過ぎない觀があつたが、演劇殊に戯曲が文壇の中心問題とならうとするに際して、再び陸離たる光彩を放つて來たのは不思議な因縁と云はねばならぬ。

坪内博士が演劇の改良は三十年來の宿願であつた。「梨園の落葉」以來數冊の演劇に關する書籍は皆隨時隨處に發表せられた博士の演劇改良意見に外ならなかつた。其「新樂劇論」は日本固有の舞踊劇に關する刷新意見てある。「桐一葉」「牧の方」などは今日から見れば完備の作ではないが、之を歴史的に見れば日本に於ける意義ある最初の史劇である。講堂又は公開場に於けるシエークスピヤやイプセン、ショーなどの講義講演は多くの感化を與へて來た。飜譯としては沙翁物を始めショー傑作集がある。然し逍遙博士が最近に尤も心血を濺いだものは新俳優の養成であつた。文藝協會の會長として發表せられた宣言書を見たものは皆嚴肅な氣に打たれないものはなかつた。次で邸宅を買拂つて其資に當てられると云ふ事を聞いたものは其献身的な態度に驚嘆の聲を惜まなかつた。演劇の社會上の地位はこれによつてどれ位高められたか分らない。其結果は現在專門俳優の旁業としてやつてゐる二三の新劇團以外の新劇團は殆んど總て文藝協會の分派となつた。又多少成立の異なつたものも同協會で薫陶を受けた俳優の居ない劇團はないと云ふ有樣である。新劇團は凡て坪内博士の作つたものと云つて可い位である。

森博士が新劇團に寄與した處は、坪内博士の多方面なのに反し主として脚本に於いてゞある、明治四十年

前後から今日に至るまで、毎號歌舞伎に連載せられた泰西戯曲の飜譯は我脚本界に多大の刺戟を與へた。密かに新演劇に志を抱いた少數の人は次號を待兼ねて愛讀したものである。スバルの初期に於いて紀念とすべき「假面」等の數種の創作は新劇壇に公にせられた「靜」作品である。史劇の靜を現代語で書かれたのを見た時驚異の眼を瞠らない人は少なかつた。爾來脚本の創作には餘り筆を染められなかつたが、單行本として或は新聞雜誌に公にせられた飜譯は實に調べ切れない程夥しいものである。其「一幕物」の如きは若い戯曲家に取りては殆んど經典のやうに取扱はれて來たものである。斯様に飜譯の夥多なだけ、上場せられる脚本も多い。新劇團で演ずる飜譯物の大半は鷗外博士の手を經たものである。泰西の近代劇の移植者としての功蹟は殆んど鷗外の獨壇場で、何人の追從をも容さない感がある。從つて新劇壇に偉大なる感化を與へた事は當然の結果である。

三

逍遙系と鷗外系とを論ずるに當つて、其主體たる逍遙鷗外其物を尚一層闡明するため、此兩者を比較するのも强ち徒勞の事でもあるまい。

逍遙と鷗外とは其地位性格態度等非常な相違がある。一は文科の教授で文藝は其專門であるに反し、一は醫務局長で宮内省の御用係を兼ね、文藝は其旁業に過ぎない。而して其旁業に過ぎない人が、文壇罕に見る多作家で、文藝專門の人が近時は其何分の一にも足りない程の作品しか發表しないのは妙な對照である。然し坪内博士は文藝は其專業であるだけ方面は非常に廣い。演劇の評論家であると同時に飜譯家でもあり、創作家でもある。學校で演劇の講義をしてゐると同時に講演をもする。去年までは文藝協會長として多くの俳優を養成し、公演の場合には舞臺監督をもすれば、興行者でもあつた。之に反して鷗外博士は少數の創作がある以外には其事業は主として西洋劇の飜譯である。

兩者の性格の相違もそれ〴〵變つた結果を齎してゐる。坪内博士は東洋式に半ば洋式を加味したやうな人

て、森博士は殆ど純西洋式な人である。前者は以前敎育者であつただけ、一面敎育家道德家と云ふ面影があり、後者は官吏として其日常の生活は嚴格ではあるが、其精神に於いては近代人である。從つて凡ての態度が一は愼重であり、一は無造作である。作物を發表するに當つても一は久しく熟慮考究して苟くも筆を執らない、漸にして醱酵しきつた所を公にする。一は何によらず、片つぱしから手當り次第にやつつけると云ふ風がある。作物の多寡は一つは之れが原因してゐるのでもある。逍遙が鷗外のマクベスに序して、沙翁劇をこれほど無造作に容易く飜譯した例は未だ曾てない、と云つたのは色々の意味が含まれてゐるであらうが、兎に角事實である。飜譯の場合では逍遙も遲筆と云ふ程の事はなく寧ろ早い方であるが、イブセンの「幽靈」を二晝夜で譯すと云ふやうな事は到底逍遙には出來ない話である。脚本上場の場合にも逍遙はなか／＼許さない。たまに許可を得た場合には難かしい條件が就いてゐるか、或は、作者は知らない體としてゞある、之に反して鷗外は其上場を辭つたと云ふ話を未だ聞かない。如何なる人が如何に演じやうと關はない。これが一つは鷗外博士のものが屢上場せられる原因でもある。多くの新劇壇が唯體裁のため顧問を設ける場合にも坪內博士は大抵御免を蒙るが鷗外博士は何處へでも其名を借してゐる。まだ形をなさなかつた金扇社新古典劇場まで鷗外の名を並べてゐる。近代劇協會、自由劇場、狂言座、新劇社など凡ての顧問である。是等の顧問は唯名譽顧問たるに止り、多くの場合唯鷗外博士の脚本が供給せられると云ふのみで、舞臺監督は無論の事、舞臺稽古を見られる事さへ殆んどない。此點に於いては坪內博士は上山夫妻が元其生徒であつた關係から一時其名を近代劇顧問の內に列したに過ぎない。

坪內博士は一面敎師であるため、多くの子弟を敎育して來られた。從つて脚本の校閱を乞ひに來る人や演劇上の意見を聞きに來る人には皆丁寧に忠言を與へ或は意見を吐露する。從來公表せられた脚本の創作飜譯て逍遙博士の飄逸な朱書が入つたものがどれ位あるか

分らない。のみならず博士は社會的の事にも關係し生活上の援助をも惜まない人である。近代人なる鷗外博士はかゝる師弟の關係の如きものはなく、全く個人的である。從つて純粹のお弟子と認むべき者は居ない。坪内博士が多くは弟子にやらせる所を、多々益辨ずる鷗外博士は自分でやつてのける。こんな關係から坪内博士の方には逍遙系に屬するものゝ一部は師弟の關係であるが。鷗外系に屬するものは純粹の弟子と目すべきものはない。唯脈を引いてゐると云ふに過ぎない。自然逍遙系に比して小數たるを免れない。

然し今日の如く師弟の區別が殆んど滅却して、全く師匠の庇護感化の下に出來上つたものも、やがてそれ〴〵自我を主張する文藝界に於いては、逍遙系に屬すると云ふ内にも眞の意味の師弟の關係を保つてゐるものは極めて尠くなつてゐる。茲には唯系統として論ずるに過ぎない。親分子分と云ふ意味ではないのである。

四

坪内博士は其方面が廣いだけに其系統と目すべきものも從つて多い。たゞ早稻田系なるものが、坪内博士の久しい演劇熱に拘らず、一般に冷淡であつたゝめ、批評家も作家も其割合に多くない。早稻田系としては寧ろ他方面に重きを置いてゐた爲、演劇に對して興味と智識を有する人が比較的少なかつたのである。數年前演劇熱が勃興し、相馬御風氏や、本間久雄氏までが演劇評をするやうになつたのは近頃の話である。演劇の批評創作に從事する人はむしろ將來に於いて輩出するであらう。

文壇に於いて早稻田系が跳梁してゐる割合には、劇文學に於ける逍遙系は振はない。然し頭數から云へば現在に於いてかなり多くの人がゐる。現在表面に立つて活動してゐる人々には島村抱月、中村吉藏、楠山正雄、秋田雨雀、池田大伍、長谷川時雨、の諸氏が居りこれから大に活動しようとしてゐる人に島村民藏、仲木貞一、中谷德太郎、國枝史郎、吉村繁俊、坪内士行の諸氏がゐる。「白壁」の作者正宗白鳥「武器と人」の譯者市川又彥などの諸氏も居る。其他廣政法天、桝本清

或は河野桐谷、水谷竹紫、本間久雄と云ふやうな人々もゐる。

島村抱月氏は前期の早稲田文學以來坪内博士の後繼者たるの觀があつた。唯演劇に對する造詣が遙に博士に及ばないのと、教育者風の色彩が乏しかつたため、早稲田に於いて純文學の方面に於いて博士の衣鉢を傳へるものは抱月氏であらうと云はれてゐた。それが文藝協會以來急に演劇方面に活動するやうになり、終には文藝協會に對して藝術座の一團を組織する事になつた。坪内博士に仕込まれただけあつて頗る多方面で、評論紹介は其本領とする所であるが、近作としては「復讐」「清盛」等の脚本がある、創作家としての抱月氏は別に優れた點も認められない。飜譯としてはノラ、マグダなどがあり、近くは「復活」の飜案等があるが、これはなか〱器用に出來て居る。

中村吉藏氏は今ては藝術座に於ける抱月氏の片腕と目されてゐる。藝術座へ入るに就いてもわざ〱博士に謀つた位て博士と淺からざる縁故の人である。歐米に遊んて演劇に志し、歸朝早々發表した「牧師の家」がやゝ社會の期待に背いて以來、多くの脚本を發表してゐるが、特に注目に値する程の作物もなかつた。今度の「嘲笑」などは舞臺上の効果を狙つたものではあらうが、氏の作としては傑作であらう。それよりも氏の長所は演劇の批評紹介にある。今度公にする「イプセン評傳」などは尤も氏に適した事業であらうと思ふ。

楠山正雄氏は早稲田派に於ける小山内薫である。楠山と云へばシユニツラーを連想するが、それ程多くシユニツラーを譯した譯でもない。然し楠山氏のものは主として飜譯である。江戸つ兒の才人であるだけソツのない譯し振は巧妙なものである。唯最近の「ヴィアトリチエの面紗」は感服しなかつた。近松の改作などは楠山氏に最も適した仕事であらうと思ふが、「油地獄」には少なからず當てられた。劇評は何時もづるい行方てあるが巧みなもので、其智識と才機とを覗ふ事が出來る。春の狂言座や藝術座の批評などはよい見本てある。唯創作は今の處楠山氏には一種のエングマである。

去年の春早稻田文學社で昨年中の脚本の傑れたものを諸名家から聞いた事がある。其時最高點であつた雨雀氏は「埋れた春」の作者として名聲一時籍甚であつた。其後數種の一幕物を公にしたきりで、其作物はあまり見當らなくなつた。評判もあまり聞かなくなつた。之れは秋田氏が大部分の時間と努力とを藝術座や、美術劇場などの爲に割いた結果であらう。秋田氏の脚本にはナイーブな所があり、ペーソスが全體を流れてゐて一種の雨雀式特色を發揮してゐるものであるが、新作の傑れたものが出ないのは惜むべきだ。

近時尤も坪内博士に親炙してゐるのは池田大伍氏である。無名會の三月に出した「瀧口時頼」はかなり苦心の作であらう。貧弱な日本の戯曲界にはあの三幕物の史劇は注目すべき産物の一つであらう。ある一部には好評を博したやうであるが、自分はそれ程興味がなかつた。拵へ物のやうな氣がして有機的（オルガニック）に行つてゐないのと、作中のフイロソフイーを餘り持つて廻りすぎたので、感じが直截でないと云ふ憾があつた。之れは沙翁張の形式の内に新しい近代式の意味を含めやうとした結果であらう。

長谷川時雨女史を坪内系に入れた事については怪訝の感を懷く人があるかも知れない。然し系統から云へば無論逍遙系である。初期の作物は多く坪内博士が眼を通したものである。特に舞踊劇の主張と實演は、よし其内容に於いて相違する所があるにしても、實は坪内博士の新樂劇論を祖述しやうとするものである。其處女作「海潮音」は其當時にあつては一寸興味を引いた面白いものであつた。出世作の「海王丸」は下らないものである。舞踊劇の「空華」なども好い作品ではなかつた。然しこの方向が女史の取るべき尤もよい道であらう。

其他多士濟々ではあるが、多くは將來に於いて期待すべき人である。殊に士行氏などのやうに親しく西洋の舞臺を踏んで、實演上の豐かな經驗を積んで歸つたならば、飜譯劇の上場などには刮目して期待すべきものがあるであらう。

これだけの多士濟々でありながら、而して逍遙博士

に對して舊いとか非藝術的だとか云ひながら、現在、見渡した所、沙翁物は兎も角もとしてショーの「ウォーレン夫人の職業」だけの飜譯をなし得る人が一人もなささうなのは寔に腑甲斐ない次第である。

五

坪内博士の事業として今日尤も目につくのは新俳優の供給である。如何なる新劇團にも博士の指導を受けた俳優の居ない所はない。重なる新劇團は皆文藝協會の分派であり。後身である。曾ては新劇團の一角に藤澤の俳優養成所出身の者が居て、色々な形を取つて新劇團に現れて來たが、此春の吾聲會の瓦解後は其一角さへ崩壞してしまつた。現在の新劇團は從來の役者が道樂にやつてゐる自由劇場公衆劇團狂言座の三種以外は坪〻系と云つても可い位のものである。之等は凡て坪内博士の邸宅と其献身的の努力と豐富なる智識とを分與せられて、今日に至つたのである。

新劇壇に於ける坪内直系は演劇無名會である。文藝協會の兩大名題であつた東儀土肥兩氏を中心として、協會の奥役方面が參加したものである。東儀土肥は曾て博士、演藝方面の代表者であつたゞけ、劇道に志してから殆ど二十年になる。新劇壇にあつては流石に異彩を放つてゐるのは無理からぬ譯である。然し五月興用のヴィアトリチェの如きものはあの詩的な瞵灎な白は東儀土肥の感情と融和しなかつた。技藝が巧みになつて舞臺が樂になると眞率の意氣を失ひ、やゝマンネリズムに陷らんとする弊を生じて來るのは注意すべき事だと思ふ。都郷道子も努力の功が現れて藝は巧くなつた。秋元千代子も大分上達した。唯之れに一枚若い花形が欲しいと思ふ。

文藝協會の分派としては尤もよく問題を起す松井須磨子を座頭とした藝術座がある。須磨子の藝は藝術座になつてからよりも、文藝協會時代が優れてゐた。前時代の須磨子は何時も緊張した藝を見せてくれた。其所には須磨子の熱情の閃きがあつた。今日の須磨子は幾分舞臺度胸が出來、藝に餘裕が出來たゞけ、唯技巧て見せようとする。扮裝した人物と同化する事を忘れ

て、唯技巧て其手腕を見せようとする結果は何時も誇張した厭な所ばかりが眼につくやうになつた。これは須磨子の一考すべき點てあらうと思ふ。然し新劇團に於けるプリマドンナを爭ふやうな女優はまだ現れない。

舞臺劇協會は文藝協會第一期の精英をすぐつたもので、帝劇に於ける第一期の女優と同じやうな地位にゐるものてある。佐々木加藤森の如き皆得安からざる有望な青年てあるが、一度帝劇て公演したきり、其後杳として劇界を遠かつてゐるのはどうしたものてあるか。此劇團も矢張女優が見劣りがする。一二の相當な女優を加へる必要があらう。唯惜しむべきは文藝協會時代に其知友劇評家などが餘り持上げすぎた結果、餘りに自己を買被りすぎて居る事てある。よし劇界の雛鳳にしろ雛鳳て終つて了ふのは遺憾てはなからうか。

近代劇協會の上山夫妻も文藝協會出身てある。衣川孔雀を立女形として奮闘してゐる。最近の「ノラ」に於いては孔雀を須磨子以上に評價した人も大分あつたがそれ程のものてはなかつた。自分は寧ろ浦路のリンデン婦人をとつた。伊庭氏と一座の時は同氏が大に活躍したが、今ては男優に主人役に扮すべき者がないのは之の座の缺點てあらう。

美術劇場は藝術座の支流てあるが、其幹部が早稻田文士てあつて、俳優の主脳も倉橋澤田などの文藝協會の第三期連てあるから協會とも薄い緣てはない。まだ第一回公演をやつたばかりて、登場俳優の數は非常に多かつたけれど、ずばぬけた人も見當らなかつた。出し物が少數の同好者向てあつた割には新しい試みもあまり見られなかつた。

其他文藝協會に居た者て相當の手腕を持つて居ながら、一定の劇團に屬しないて種々の團體に出入してゐる者もある。林夫妻、武田正憲、小野益太郎諸氏がそれてある。

六

新俳優として新劇團の諸方面に分布してゐる逍遙系には又舞臺監督或は興行者として立つてゐるものも少

くない。これは新劇團に於いてはまだ分業の法が正確に行はれてゐないで、劇評家、戯曲家、或は俳優が同時にマネヂャーを兼るからである。

今日の新劇團はなか／＼苦しい立場に立つてゐる。表看板は藝術を標榜しながら、內實は興行本位にやつて行かないと成立しないのである。それも文藝協會のやうに相當の資金があつての事ではないから、興行方法などから云へば文藝協會時代よりは遙かに退歩してゐる。文藝協會時代には個人の連中の勸誘や切符の押賣りに見堺もなく歩いたものではなかつた。殊に役者自身が懇親でもない所へ切符を持つて廻るやうな醜體は演じなかつた。出し物の點でも文藝協會時代より藝術的のものを出してゐるか否かは疑問である。「復活」で藝術座が案外に當りを取つて物質上の成功を得たと云ふ事は藝術座の誇りとはならない事である。トルストイの匂が抜けて了ふまで飜案して、然もカチユシヤの歌を賣物とするに至つてはマネーヂャーとしては寧ろ冷汗背を濡すべきものだ。自分は藝術座の第一回興行を見た時さう思つた。鎌野のギドーを東儀に澤田のプリンチバルレを土肥に保氏官を加藤にやらせて、今少し道具や背景を立派にし舞臺監督を嚴密にやつたなら面白い芝居が見られる事だらうと。自分はかゝる點から些々たる下らぬ感情と僻見を擲つて新劇團の大合同を望むものである。學者俳優のマネヂャー諸君に之れを進言するのである。然し藝術座が度々の動搖を持こたえて漸く平坦の道へ出て來たのは先づ一息と云ふ所で慶すべき事ではある。これは島村抱月氏や中村春雨氏の努力に負ふ處が多いであらう。然し關西や信州くんだりまで巡業し廻つて、殆んど藝術と沒交渉な人ばかりに接して、其藝を荒まないやうにして貰ひ度いものである。

文壇以外の關屋氏が興行者となり、池田大伍氏が舞臺監督をしてゐる無名會は新劇團の中では一番確乎した團體である。俳優には毎月給金を支拂ひ、有樂座を自分の小屋として隔月に興行を續けてゐる。この劇團だけは觀客の種もよく、多くの紳士を見受けるやうで

あるが、年六回の興行となると、俳優も骨が折れゝば觀客も疲れるであらうから、出し物の選擇には特に注意を拂はねばなるまい。俳優も大に精勵せねばならぬ。

舞臺協會は吉田幸三郎氏がマネーヂャーである。此四五月頃に第二回の試演か公演をやる筈であつたが秋迄延びたやうである。這麼に愼重な態度を取りすぎるのも亦考へ物である。藝の修養と云ふものは際限のないものであるが、殊に今が一番大事な時である。俳優としては實演によつて其技藝を磨くのが尤も有効な方法である。皆んな今疾驅で競爭してゐる時であるのに、あんな風に引込んでゐるのは惜しいものである。此際舞臺協會は思ひ切つて無名會と合同するが尤も策の得たものではなからうか。此二派は同じ畑の物で二つに區分する程の必要はないものである。合同する事によつて觀客は面白い芝居の見られるのを喜ぶべく、二派に取つても亦何れも有利な事である。

近代劇協會の上山氏はファウストに於いて成功した爲め一擧にして名をなした。當時二世川音を以て目した人すらあつた。ファウストの餘り容易な成功は却つて上山氏に苦い經驗を嘗めさせたが、ノラの興行は從來の態度を一變して質實なやり方で、相當の客も呼んで居た。マネーヂャーとしては何處か旨い所がある。

美術劇場は第一回の公演に於いて大に失敗したが、別段不思議もない話して、他の新劇團も大抵同じやうな運命をたどつてゐるのである。秋田楠山河野諸氏がマネーヂャーであるが、第一回の公演では秋田氏が主として舞臺監督の地位に居た樣である。俳優に目ぼしいものもなく、演じ物もある一部の好奇心を呼ぶ位のものでは疲れてゐる觀客を呼集せる事は困難である。秋田氏が美術劇場の興行上の一責任者である事は寧ろ悲慘である。君は雜司ケ谷の欅の並木の下で清新な空氣を呼吸しながら靜かに藝術的の作品の筆を執るがよい。若し强てマネーヂャーとなり度いなら特志の藝術愛好家が出て小劇場を建てゝくれて君に委せてくれるまで待つてゐなければならぬ。

時雨女史の狂言座は第一回の公演に於いて二日の滿

員を取つたが藝としては散々な不評であつた。小宮氏などは存在の價値がないものとまで極言してゐるが、これは出し物よりは寧ろ舞臺監督として其人を得なかつた故であらうと思ふ。菊五郎一派をあんなに下らなく使ふのは全く勿體ない事である。狂言座を起した動機は知らないが自分は時雨女史に望む所は舞踊劇に一貫して貰ひ度い事である。それは我文藝界のためばかりでなく、時雨女史に取つても尤も適當な事業である。然し「浦島」などに手をつけるのなら、も少し愼重にやつて貰ひ度いと思ふ。

脚本作者が舞臺監督となるのも、ある特殊な智識を持つた人には出來得るかも知れないが、現在の作家に期待するのは大抵は難しい。況して興行者となる事は甚だ困難な事である。坪內博士の如く、あれだけの信用あり、あれだけの智識あり、數萬金を提供して、獻身的に努力して、然も結果は見られる通りである。此點については小坪內諸君は大に考へねばならぬ問題であらうと思ふ。

七

逍遙系の多趣多様であつたに反して鷗外系は實に單調である。鷗外博士の新劇團に於ける立場は何處迄も脚本提供者としてゞある。新劇壇に於いては脚本が尤も主要なる地位を占めるものであるだけ、鷗外博士の新劇團に於ける地位は重要なものである。近代劇の飜譯の大部分が殆んど博士一人の手によつて成つたとすれば、新演劇に携はる程の者は多少鷗外博士の感化影響を受けないものはないと云つても可からう。特に小壯の脚本作家に取つては深く其恩惠に浴したものが多いであらう。此點に於いては逍遙系に屬してゐるものも除外例にはなるまい。

此の如く其影響の點から云へば著大なるものであるが、其系統と見らるべきものは極めて少い。鷗外系の人を說くに當りては先づ小鷗外とさへ呼ばれてゐる木下杢太郎氏を擧げねばならぬ。杢太郎氏の作物には何れも强烈な作者の色調がある。ロマンチツクでエキゾチツクな點は凡ての作物を通じて現れる特色である。

近作の「柏屋傳右衞門」は其狙ひ所は面白く首肯せられるものであるが、今少し引締めて書かなかつたため効果を薄くした。本誌に發表せられる「天草四郎」は得意な題材であらう。同氏は或は地下一尺生の變名の下に時々むづかしい評論を公にする。之れも氏一流の特色ある觀察で藝術的の匂の豐かなものである。杢太郎氏は其作品の價値は別として其態度が如何にも眞摯な藝術家らしい點に於いて尊敬せられてゐる。

此同人の內で尤も多く作品を發表してゐるのは吉井勇氏である。今なか〳〵の流行兒である。然し其舊作「河內屋與兵衞」や「淺草觀音堂」などは唯單に詩的なものであつたけれど、舞臺技巧にも、所々に閃めいてゐる作者の感じにも淸新の氣に充ちてゐたが、やゝ爛熟した近頃の作には感服しないものが多い。去年左團次一派の爲に書いた二種の脚本燈籠守や解脫のやうなものは、役者と舞臺に拘束せられた處があるからとは云へ、あまりに草双紙式で鶴屋南北時代のものである。南北あたりには今少し巧みなものがある。それが特に新しがつて「世界中の女を呪ひ殺さん」などゝ云ふやうな子供だましの附燒刃は却つて馬鹿馬鹿しいものにしてゐる。(これを好い氣になつてやつてゐる役者も役者である。)「俳諧亭句樂の死」などは到底眞面目で舞臺にかけられるものではないが、單に讀物としても感心しない。白鳥氏が深く興味を持つて讀んだと云ふ意味は分らないが本間久雄氏が眞面目に近頃の傑作であると稱揚したのは甚だ脫線してゐる。思ふに本間氏などはあゝ云ふ趣味にあまり接觸してゐないため特に興味を感じたのであらうが、あれでは唯馬樂の洒落を聞いてゐるのと同じ事である。吉井氏にも慥に長所があるが現在に於いては藝術家と戲作者との仲間に戶迷ひしてゐる形である。前者の餘りに舞臺を狙ひ過ぎてゐるのは特に反省すべき點であらう。

一年かゝつて琴平丸を書いた長田秀雄氏は近頃屢其作品を公にするやうになつた。大分油が乗つて來たやうである。長田氏の作品は皆なか〳〵器用に出來てゐる。歡樂の鬼琴平丸などは上場した所を見ると、皆相

當の舞臺上の効果を收めてゐる。近頃太陽三田文學新小説の三誌へ分載した三幕物などはあまり批評に上らなかつたが、かなりよく出來てゐる、殊に誘惑家などはこれだけ引離した一幕物としても面白い出來てあつた。文章世界に出た「妊婦授産所」はファース式の下らぬものだが、喜劇作者として相當な手腕のある事を示してゐる。長田氏の作品を通讀して尤も眼につく事は對話の巧みな事と舞臺技巧の手に入つた點である。作者の缺點とすべきは作中のフィロソフィーが作者の思つてゐる程作中に現れてゐない事で、讀者は何時も何かありさうてゐながら捕捉する事が出來ない。之は餘りに作者の主觀的のものであるからであらう。

逍遙系の人は何時も人生の爲の藝術てあるのに、鷗外系の人は藝術の爲の藝術と云ふ感があるのは兩系の尤も著しい相違の點てあらう。目下の戯曲界ては小數の鷗外系が大に活動してゐるに反し多數の逍遙系が比較的振はないのはどう云ふものか。

今や脚本は小説を壓倒せんとする機運に向つてゐるのに、多くの新劇團は漸く衰滅に向はうとしてゐるのは注目すべき現象である。(完)

俳優待遇論

野間五造

現今の我邦に於て俳優と言ふ者はドレ位の程度に於て待遇したら善いかと言ふ事は、社會問題として頗る興味ある問題であるのみならず、風教の上から視ても決して忽諸に附す可らざる問題の一ッてあろふと想ふ。

元來人生の希望なる者は、現世は勿論のこと未來永劫に亘りて、社會上優越なる待遇を受け度いと謂ふのが一番の願てあるから、若し斯事業斯職業が社會から

特殊の寵遇を受け得られる者て有ると謂ふ事が極まれば、世人は必ず其事業其職業に向て走ると云ふ事は自然の道理てある。

聞く所に依れば、近頃男女學生間に於て俳優に成り度いと云ふ希望を抱く者が年々歳々非常に増加して來ると云ふ話てあるが、此顯象は經世家の大に注意すべき事柄て、又た更らに大に憂慮すべき風潮てある。

男女學生間に斯樣な志想が流行すると云ふのは、一ッは生活難から餘儀無くされるのも有ふし、又たは一時の虚榮心やら婬猥なる慾望を滿足せしめんとする考へからくるのも有ろふが、然し大體の風潮を創成せしめたる基因と謂ふ者は、畢竟俳優と云ふ職業が社會から優遇される職業なるのみならず、藝術家中の優等の地位を占む可き者て、世が段々進歩するに連れて其境遇も大に高められる者であると謂ふ誤解したる觀念から起つて來るのである。故に若し今の俳優が昔しの樣に磧乞食の取扱を受け穢多非人として蔑視せらる者とすれば、決して今の教育ある子弟が其仲間入りを希望する氣遣は無い。

如何に捌けた親達ても、マサカ自分の忰や娘を役者に仕樣と想ふて、學資を持たせて東京へ遊學させる者は、今分の所先づ無いと謂ふて良かろふ、畢竟今日の學生間に俳優熱の　居るのは、一方に於て學生自身が都門の風に吹かれ不健全なる四周の空氣に感染させられて濁肉主義にのみ馳せ樣とするから起るのと、他方ては、歐米先進國に於て俳優なる者を欵待し優遇すると云ふ事を、或は聽かされ或は敎へられるからてある。

學生計りては無い、現今の社會に於ても俳優と云ふ者を取扱ふ上に於て、歐米先進國の例に傚つて之れを欵待し是れを優遇しよふと想ふて居る傾きがある、現に數年前西園寺サンが身大宰相の印綬を帶びながら、市井の優倡や狂言作者を自邸に招致し、自分て酌迄して、チヤホヤ騷ぎ廻つた事も有つた樣な次第て、今日の社會に役者と云ふ者を餘程高く買ひかぶつて居る氣味がある樣に見へる。

世間が想ふ樣に、歐米各國で俳優なる者が左樣に優待されて居るで有ろふか、吾輩は全く反對の顯象を認めるのである。職業と謂ふ者に就て其高下を附けないのは彼地の習慣で、大工左官も總理大臣も同樣に心得て居る上から俳優も多少優遇されて居る樣にも見へるが、實際に於ては「アーチスト」たる大工左官が俳優や寄席藝人に比較して數等優遇されて居るのである、世人はたゞ俳優が人氣商賣であつて派出な生計を立てゝ居るのを見たり、或は公衆悶叢の裡や新聞紙上でチヤホヤ囃し立てられるのを見て以て、直に俳優なる者が歎待され優遇されると想ふのは大間違ひである。

成程歐羅巴では演劇三昧が日本よりも大袈裟であつて、且つ頗る整頓して居るので、到る所皇室所屬の劇場や、政府が經常費を支出して維持せる官衙的劇場もあつて、又た夫れに出勤する俳優の中には叙勳せらるゝ者も有れば叙爵せらるゝ者も有る樣な次第で、現に佛蘭西では「マダム、カロン」や、「ハルデー」夫人や、「サラ、ベルナール」孃などの連中え「レジヲン、ドノール」の勳章を授けた事が有つた。又獨逸の「ケルベル」や、英吉利の「アアピング」の如きには博士號も附與せられ大學教授として採用されて居る俳優も有る、又た彼の保守主義の英國でさへ「ベタートン」だとか、「ガーリック」などと云ふ有名の俳優には死んだ時に「ウエストミニストル」へ國葬を許した事も有つた樣な譯で、一方から視れば歐洲では俳優なる者が非常に優待されて居る樣に見へるが、然し夫れは善い側をのみ見たホンノ少數の場合の例證に過ぎずとして、他の多くの場合では、役者と謂ふ者は卑賤の職業であるとして士君子の伍するを耻づる樣に成つて居る次第である、吾輩は別段求めて惡口を言ふ積りでは無いが、實際歐米各國に於て俳優なる者は決して優遇されては居らぬ、多くの場合侮辱せられ、卑下せられ、迫害されて居るのである。

社會が進歩して藝術界が高上するに連れ、役者の境遇が非常に高まつて來る者と心得て居る人達ち、殊とに學生諸子に對して、吾輩は爰に西洋及東洋に於ける

俳優の待遇に就て實際上の例證を擧げ、決して諸子が期待するが如く優遇される者で無いと云ふ事を明らかにしようと想ふ。

羅馬時代から英吉利の「エリサベス」朝、佛蘭西の「ルイ」太陽王全盛期に亘つて、何れの朝廷でも式樂演劇は盛大な者であつたが、夫れを演ずる俳優なる者は殊の外卑下せられて居つたので侏儒や伶倡と共に貴族仲間の玩弄物として取扱はれて居ッたのである、中には囚人と共に猛獸の檻の内で抃舞させられた者もあつた位で、全く普通人以外の取扱を受けて居つたのが判かる、「シエクスピア」が倫敦に居つた千五百九十年頃には役者は士君子と伍する事の出來ない身分で、沙翁も自分の書き卸した金玉の文章を斯かる下賤の手に懸けるは嫌やだと云ふので、多くは節して面白く朗讀させた者である、恰も昔時我邦の禁裡で、寄人や法師などが竹取物語や平家物語を朗唱したと同樣な型で有る、其後彼れの親友「バーベージ」などが出て來てから僅かに其人等の手に依つて幾分の劇曲が上場された次第である、下て十七世紀の頃に當ては、例の「ピユリタン」主義（清敎徒）が熾盛に成つたお蔭で、演劇は邪道なり俳優は誨淫であると云ふ意味から、遂に歐洲全土に於て一時芝居を絶對に禁止した事すらあつた、恰度我邦の承應元年六月に於て三ヶ津は申迄でも無く五畿八道に於てお國歌舞伎一切の停止を嚴命したると同樣の意味で有る、今日に於ても獨逸や英吉利や亞米利加の「マサセット」洲では、壹部の大學生を除いて普通の學生には芝居見物を禁止して居る。「ヲクスホールド」に劇場の建設せられたはツイ近頃の事である、又た何れの宗派を論ぜず苟も宗敎家として立つて居る者は之等鄭聲に近く事を禁じられて居るは勿論の義である、次に言ふ可きは、歐米何れの邦でも公式の宴會に役者を賓客として招待する事は大の禁物である。夫れは相客に對して無禮であると云ふ意味からである。如何に平民主義の米國でも役者や寄席藝人を賓客として公式の宴席へ招待する事は無いが、稀れに例の「ミリヲニア」仲間が自家の豪奢を衒はんが爲めに是非役者を招き度い

と想ふ場合がある時は、豫め他の招待客に向て斷りをして置くのてある。大概普通の場合ては招待狀の末尾に左の如き斷り文句が挿んてある。

「追而明晩は「ヘンリー、ミラー」君及び先日來當地に來つて興行中の「アアビング」君をも差加へ招待致候間何卒其御含みにて令夫人同伴御賁臨被下度候云云」

と謂ふ樣な意味の附け加へがしてある、是れは畢竟役者をして同席せしむる失禮を豫め詫びて置く譯け合ひである、男役者てすら先づ其通りの取扱てあるが、女優と來ては一層慘目な者てある。少數の例外を除いて女優なる者は我邦の藝娼妓と一般に見做されて居るから、普通の家庭へ大手を振つて出入は出來ぬ掟てゝある、女優冷遇に就ては面白い話しが澤山有るが其中二ツ三ツを紹介して見よふなら、數年前彼の有名な文豪「ゴルキー」が米國を訪問すると云ふので、亞米利加の上下は非常な歡待をする積りて準備をして居つた、所がイヨ〳〵同人が着米して見ると「アンドレーエフ」と云ふ女優を女房然と携帶して居るので、米國貴婦人仲間が納らず、思ひ切つて苛じめてやれと言ふので到る所サン〳〵油を取つたので、流石の「ゴルキー」もホウ〳〵の首尾て米國から逃げ出した事があつた。

又た彼の世界第一等の女優と云ふ評判のある、「サラ、ベルナール」孃。嘗ては「ゴルチヤコップ」や「クリスピー」などゝ云ふ豪傑を掌上に弄び、秋波一瞥、歐洲の外交を自由に操縱したと云ふ、今樣な「クレヲパトラ」が倫敦を訪ふた時に、淑德神の如き「ビクトリア」女皇は斷然謁見を拒絕した事が有る、如何な「ベルナード」孃も此侮辱は怺えたと見え、女王御在世中は餘り倫敦へは行か無かつたソーで在る。次の話しは、露國第一流の女優にして伯爵の姫君てある、「コミザー、チフスキー」夫人の一條て在る、自國では女神の樣に囃し立てられて居る所から、餘程高慢チキな者へて以て、或歲伯林や「ウインナ」を訪ふた所、普魯西の皇室ても、墺太利の皇室ても、彼女を貴族としては取扱はず、普通の女優として冷遇をしたので、彼れは大

立腹ブリ〳〵して歸國したと言ふ話しも在る。

倚様に歐米ては女優を卑下して居るに係らず、昨秋吾輩が天長節の外相夜會に招かれて行て居たら、白衣洋裝の女優森某が繰り込んで來たので一方ならず駭かされた、イクラ外務省が捌けて居つても皇族御來臨の公式宴席へ「アクトレス」を招待するとはヒドイ話しだと想ふて居たら。案の諚、翌日から各新聞の攻擊が始まり、終に其招待券が間違ひて有つた事が判明して濟んだ事が有つた、斯る事は將來に於て大に愼むべき事と想ふので在る。

事の序てに支那に於ける俳優待遇の模様を鳥渡と話して見よふ、支那は言ふ迄ても無く古來から禮樂を尊ぶ國柄て、孔孟時代から禮樂射數などゝ言つて、禮樂を以て人格表顯の第一義に置き、人間六藝中最上の者として在つた位ゐて有るから、歷代の朝廷に於ても式樂と謂ふ事に非常に重きを措て有つた者て在る、中世に到りて其式樂中の一部に官戲なる者が出來て恰も我邦の田樂、猿樂、お能狂言と一般士太夫間に於て弄ばれた者て至極高尙の者て在つたが、其後ちに到つて其官戲中から又た把戲と云ふ者を編み出した、夫の把戲なる者が我がお國歌舞技と同様、梨園或は茶園と呼ばるゝ今の芝居道て在る、唐朝の盛時に當つては、敎坊二千梨園三百と註せられて、長安や洛陽邊には康衢戲や華園戲が盛んに開催されて居つたと見える。然し其把戲に出演する俳優先生なる者に到つては、甚だ薄待された者て例の一寸坊の侏儒、(宮廷ては身長參尺以下を用ひたと云ふ事てある)、輕業師の倡班、(是れも身體の片輪者を採用したのてある)、宮刑人の宦官、(例の睾丸を拔てある宮人)等と共に貴人の玩弄物に過ぎ無かつた次第てある。優人進めば賢者退くとか。士人は優倡と席を同ふせずとか云ふ言葉が今に殘つて居る通り俳優なる者は非常に卑賤視せられて居つたに間違ひ無ひ、又た此演戲から種々の弊害が醸生された者と見えて、屢々興行禁止を嚴命した事が歷史の上に誌るされてある、現に淸朝と成つて文運隆盛なりし、康熙乾隆の御宇に當つてさへ、演戲者誨盜誨淫之賤伎也と言

ふので、政府が役者や院本に對して非常の干係を成し遂には一時北京城及熱河の內外に於て淫猥なる把戯を禁止した例がある。淸末に及んでは紀綱大ひに弛み來りたるが爲めに、此演劇把戯なる者は頗る殷盛を致し、例の頤和園の囿苑中には廣大なる演舞場が建設せられ、西大后は每日午后に於て皇上や皇后や季蓮英などを召し具して觀覽された物だソーてある、吾輩も北淸事件の際に此演舞場を一見した事がある、上好む所ろ下是に傚ふ、て、各省の總督衙門とか地方富豪の屋敷內には必ず此演戯舞臺の設けがあつて、客さへあれば、開演する事に成つて居る、其藝題も高尙なる者は天水關とか漢宮秋とか云ふ樣な院本を用ひ、卑近な者ては大湖船とか小放牛とか云ふ世話物を演ずるので中々面白い者てあるが、さて其演戯者たる俳優先生はドー取扱つてあるかと謂ふに、其院本や筋書きの立派なのに正反對に、是れは亦たお話しに成らぬ下等の代物であるとして取扱はれて居る、其待遇も無理は無ひ、實際彼等の無教育なのは申迄ても無く中には人倫の如何なる者であるかをさへわきまへて居らぬ程の連中がある、名前は金蘭郎とか楊作子とか言ふて頗る立派に見えるが、其實際は穢多非人同樣の人格てある、中年以上の者は大概博賭が常職てあつて、壯年者少年者は相公(シャンコン)と呼ばはる、男色商買の者て、取りも直さず男性の娼妓てある、故に世に紳士とも言はるゝ者は決して市井の戯舘子(シイコンツァー)(芝居)や、雜耍兒舘子(ツァーシールカンツァー)(寄席)へ公然脚を納るゝ者ては無いとして居る、支那人ほど役者を賤む者は無い殆ど極端てある、支那て尤も卑賤な者を呼ぶ言葉に、戯子(シーツー)(役者)、屠子(ツウツー)(牛殺し)とを並稱して用ひて居る、又た、院子(インツー)(小屋者)と粗足手(ツチカーチャウ)或は花子(ホンツウ)(穢多)とを同意義に呼做して居るのもある、如何に俳優一輩が支那の社會に於て卑下せられて居るかは之を聞いたら判るてあらふ。

而り然して我邦はドーてあらふか、我邦もお多分に漏れず從來俳優の取り扱ひ振りは、歐羅巴の中世期、支那の現代と、同樣頗る卑下した者てあつたのてある、朝廷の式樂や貴人樂の能狂言を別として、所謂お

國歌舞伎の流れを酌む芝居道の方では、役者と云ひ作者と云ひ共に下品なる者として冷遇されて居つたのである、或る時は小屋者と云ひ或る時は磧乞食と呼んで、普通人民と區別して特種の取扱ひを仕て居つた譯合ひである、戰國時代は別として德川の治世中に於ても風教上の意味から芝居興行を絶對に禁止した事は二度や三度では無かつた、又た若衆歌舞伎の役者が支那の相公同様の醜業を營むと云ふの故を以て、役者なる者は一般世間江戸市中を往來する事を禁止せられた事があつた、又た或る時は普通良民と區別するが爲めに前額の頭髪を剃り落させた事もある、之れが即ち世に曰ふ野郎役者の野郎鬘と云ふのであつた、又た或時は住居地の區域を制限し全く移轉の自由を奪ふた事もあつた、又た或時は、結婚に制限を立て役者を聟養子にした者は舉家悉く非人籍に落すと嚴命した奉行もあつた位で、夫れは〳〵一方ならぬ迫害を加へた者である、就中例の江島局事件が發生したる以後は幕府の取締り一層峻嚴を極むる様に成つて、江戸町内では士分以上の者が芝居見物をする事相成らぬと差止められ、各藩では其城下内には演劇興行を許さぬと云ふ事に成つた。

維新の改革は萬事に平等の洗禮を與へた。演劇營業の自由、俳優身分無差別と云ふ様な布令が發せられて、今迄て多くの點に於て檢束を受けて居つた役者なる者も自由の天地に翔揚する事が出來る様に成つた、其後權十郎の毒殺事件や田之助上野坊事件などが起つて、一時は政府も再び役者なる者の身分に向て一種の干渉を試みようとした事も有つたが、幸ひにも守田勘彌と云ふ策士や、九代目團十郎と云ふ人格高い俳優などが出た爲め、種々の弊風を矯正し幾分の改良を加へて、遂に今日の隆盛を致す様に相成つた次第柄である。

忘れもせぬ、吾輩が日報社に居た當時福地先生（櫻痴居士）が左の如き話しをしたのを覺えて居る。

「何んと謂つても眼玉は（團十郎）えらい者だ、黒田サンや榎本サンの様な大臣連中でも先生〳〵と言ふて

居るし、松本サン(軍醫總監順)などは對ひ〳〵の交際をして居る…………云云。

昨日迄續乞食だとか小屋者だとか言つて卑下せられて居つた者が、一朝權大講義と云ふ敎職を帶び、大臣參議と馬車に相乘りして馳驅しようと謂ふのであるから、是れを眺めた東京市民の驚駭は一ト通りでは無かつた。然し團十郎と云ふ者の人格は普通の群を拔いて居つて、此人の識見、此人の所業には誰人も推服して役者扱ひとはせなかつたのである、恰も英國民が「アアビング」や「ショー」を眺めて敬歎して居るのと同樣の意味てあつたのてある。

團十郎が如何に社會から好遇せられたからとて、其他の有象無象迄が此權利に均霑しようと云ふのは蟲の善い噺してある、歐洲の人格やら學識やらを眞似得らるゝ者か今日の俳優中果して幾人あらうか、今日の俳優は其人格其敎育に於て御維新前の役者と何等擇ぶ所も無いのである、其擇ぶ所ろ無き人格と敎育を以て、境遇丈けを高めてくれと言ふのは少敷く無理な注文では無かろふか。

西園寺サンが自分の身柄をも顧慮せず、たゞ一時の出來心で自己の恬淡風流を衒らはんが爲めに、薰蕕を別たず善惡を問はず今の小屋者を堂上に招待したと言ふ事は、實に大なる失態で在るのみならず、一種の罪科であると謂つて宜しい、此出來事の結果は、一方に於て俳優共の增長慢を鼓吹して藝術の眞執を破壞し、他方ては人の兒を賊し、折角無瑕な靑年子弟を驅て之等魔道に誘導するの惡果を來さしむる恐れがあるのである。

吾輩は左項に於て、現在の俳優なる者を解剖して、其人格其智識が果して如何なる度合ひの者て有るかを指示し、其人格其智度に對し、我社會が如何程の程度に於て取扱ふ可き者て在るかを判斷して見よふ。

今の俳優團なる者は三種類の者から成り立つて居る、第一が舊俳優即ち歌舞伎役者の男女、第二が新派俳優即ち壯士役者の男女、第三は文藝協會、近代劇協會、家庭劇、文士劇、自由劇壇などの名稱に依つて顯れた

る學生俳優の男女、之等である。

吾輩が茲に俳優の待遇を論ずるが爲めに擧げつろふ役者の種類は右の內で第一類歌舞伎役者と第二類の壯士役者とである。第三類に屬する學生俳優なる者は未だ今日の場合役者として認める丈けの價値の無い者であるから省く、將來に於て或は其中から「コクラン」や「ウイセイ」や「エレンテリー」や「ナヂモブ」夫人や「カッシマン」嬢を出す事があるかも知れぬが、夫れは遠い遠い未來の事で今ではお氣毒ながら俳優と云ふ名は未だ附けられぬ。又た其劇團自身に於ても總てがまだ未成品であつて、ヤレ「イプセン」劇がどをだの、沙翁劇がどをだのと謂ふて騷いでは居るけれど、普通の大人が時と金を費やして見物する丈けの域には進んで居なひ必竟御茶番狂言に毛のはへた位ゐの者で在る、其の又た役者と成つて居る學生連中の內で若葉會の嚴阿彌、鬼太郎、狹衣、等を別として其他に於て芝居道の事が判つて居る人は一人も無い、芝居と云ふ者を棧敷で見た事の無い人達が大道具の後ろから舞臺を觀察すよふと謂ふのであるから頗る無理な注文である。此の若い役者連中の內で一人でも新十郎の宅を訪ふたり水木の內へ行つて歌舞伎の故實や型を硏究して居る者があるか、恐らく一人も無かろふ、參百年の經驗に依つて成立して居る我國民性の劇壇は一朝一夕の飜譯模倣でドーする事も出來る者では無い、「カテーシヤ」可愛や、可愛や〳〵といくら唄ふて見ても元來が基督敎的建國の人民で無い以上は到底「トルストイズム」を完全に悟了し得らるゝ者では無ひ。

第一類の歌舞伎俳優から其解剖に懸るとして、今現に見渡す所東京大阪で名題役者として人前に出される所謂藝術家なる者がザット先づ百人と算へて大差無からふ。其百人の中で、齋入、梅玉、仁左衞門、歌六、松助、段四郎、訥子、八百藏の樣な老人株を除いて、今日の花形役者として指す可き連中は東西合して約五六十人であらう、其五六十人なる者が我歌舞伎演劇界の主力であるので有る、又た其第二類の壯士役者の側では、先づ先生〳〵と言はれて立て行く一人前の連中

が東京大阪を通じて約五拾人であろふ、其内で福井茂兵衛、水野好美、青柳捨三郎、青木千八郎等の前世紀を除いて、實際に壯士芝居の舞臺を背負ふて立つて居る連中はザット參拾人位の者と見たら間違ひなかろふ。

此等俳優の主力社會に於て中等教育の素養ある者が果して幾人あろふか、中等教育と謂つた所でタイシタ者を指すのでは無ひ、巡査や看守の試驗程度の者或は其以下でよろしいが、此檢校に及第し得らるゝ者が幾人有らふ、露骨に我輩をして言はしむれば、數ある俳優の内に首尾良く合格し得る者は一人も無からうと想ふ、洋行歸の左團次、黑猫の記者としての菊五郎、文學の素養あると言ふ宗之助、横文字に馴染が在ると云ふ、猿之助、法律學校に居つたと云ふ中野信近、其他壯士役者の内での物識りと云ふ高田實、佐藤歳三の御連中を引ッぱつて來た所で、大概は都新聞を通じて社會を達觀して居ると謂ふ位ゐの程度で、每朝政治新聞の二面種に眼を曝して居る向きは皆無であらふ、其れ故彼等の「コンモンセンス」と云ふ者は、政事上の事項に於ては田舍の村長だも及ばず、經濟上の事柄では銀行の給仕よりも知るまい、試みに左の問題を突然彼等の前につき附けたら恐らく誰人も即答は出來まい。

一「ニウジーランド」と「フインランド」の位置及其の所屬

一輸入超過とは如何なる事なりや

一國性爺の脚本と正史の干係

東京俳優中で羽左衞門、壽美藏、吉右衞門、大阪俳優では、雁次郎、福助、多見藏等の連中で近頃彩管を弄する事が流行して、四君子や松竹梅を紙帛の上へ無暗に塗り附けて居る者があるソーだが、其は畢竟壯俳の喜多村綠郎の發句や某々の勘亭流の書道と同樣、たゞ一種の細伎たるに過ぎ無い譯である。

右に擧げたるが如き一部の者ゝ除いて、他の多くの俳優は、殆ど眼に一丁字無き無教育者の揃ひである、ルビ無くして新聞を讀み得る者や、普通の尺牘を認め

得る者は、彼等の仲間では學者である。實際俳優仲間の教育の度合は現今社會の水平に照して數段下つた者である、昔は大向ふと舞臺面の意氣が會ふのを譽れとじ且つ緊要な事としてあつたが、今では高土間、平場の客筋は勿論の事、大向ふの立見客でも其教育の度合は、舞臺の役者連中に對して數等上に居るのであるから、イクラ汗水垂らしても、俳優の意氣とお客の志想とが合致する筈は無い、お客は何日も馬鹿らしいと云ふ觀念を以て看て居るのである、團、菊、當時の客種と今日の客種と人種を異にして居る樣に思はれるのは其結果である。お客と俳優の干係計りでは無い、芝居小屋の裡で働いて居る俳優以外の勞働者は、總て俳優に比較して高等の教育を持つて居るのである、道具裏や奈落(緣の下)で追ひ使はれて居る小僧子でも完全に高等小學を卒業して居るのであるから、舞臺の上で錦の衣を纏ふて滿場の人氣を背負ふて立つてる、評判の善い小役、兒太郎、千代之助、高丸、由次郎。丑之助、一鶴、歌之助などに比して、遙かに高度な教育を受けて居る譯けである。

今の普通の役者の智度では、脚本の意義が完全に判つて居る者は少なかろふ、却て舊幕時代の役者の方が遙かに此智識に富んで居た樣に想はれる。吾輩が嘗て名題役者(名前は遠慮しよふ)に向て、藤原の鎌足の弟は水戸光國だと謂つたら左樣で御座りますかと答へて何等の疑ひだも挿まなかつた、恐らく菅原傳授の源藏と赤垣源藏とを同時代の者と想ふたり、阿古屋と高尾を共に吉原出身の名妓と心得て居る者も少なく無からふ、夫れ故三文作者が書き卸した下らない脚本を有難たがつて上場する樣な事に成るのである、伊井や高田が演ずる芝居に筋の通つた者を見た事が無い、人情の琴線に觸れて居らぬのみならず、常識にだも合致して居ない他愛も無い新作物を結構らしく眞面目に演じて居るのを視ると、彼等の智度が幾干下劣な者であるかと謂ふ事が判る。

次に彼等の精神界の模樣を探つて見ると、之れは又一層ひどいお話で有る。彼等も人で有るから宗教的

觀念は持つて居るラシイ、恰度阿弗利加土人と同じ樣に、然し自分の先輩中には教導職もあつて自分等の職務も場合に依つては勸善懲惡の所作をも演ずる身分てあると云ふ考へは毛頭持つて居らぬ樣て在る。彼等は東京ても大阪ても最下等級の人民に依つて尊拜せらるゝ、敬神的「アイヅル」に向て眞面目に祈願を込めて居る、東京て成田の不動、穴守の稻荷、大阪で伏見稻荷や、天理教の樣な者が皆々役者藝人などの信仰に依て維持せられて居るのを見れば思ひ央に過ぐるて在ろふ。

彼等の名譽に對する觀念も旁たて視たより非常に狹少な者てある、故人の名跡を繼いて好門閥を誇り度いと云ふ觀念は、彼等が有する名譽の全幅であるのてある。彼等の門閥を尊ぶ觀念は現在の貴族社會よりも甚しい者がある、何故に箇樣に門閥を尊ぶかと謂へばたゞ故人名優の名に依つて誇り度ひと言ふのと。他に好名跡を襲ふた者て無けねば院本中の好所役を演ずる事が出來ないと謂ふ下たらない習慣に制せられて居るからてある。版權法や出版法等に依る法律上の權利義務に據つて支配せらるゝならば致し方も無いが、判けも分らぬ舊慣の本に拘束せられて自己等の不自由を我慢して居ると云ふは善く良くの愚物では無いか、現に今の澤瀉屋(段四郎)や女優久米八などが市川家十八番の勸進帳や其他を無斷て演じたと云ふので暫時破門を喰つた事のあつたのも畢竟するに院本保護と云ふ意味よりも門閥擁護の趣旨から出た譯けてあつて頗る可笑な者てある、此門閥の名跡なる者を襲踏し樣と想ふが爲めには、政事家が議員を爭ふ樣に必死と成つて奔走するのである、現に歌舞伎座の委員長東京俳優の先達たる成駒屋(歌右衛門)と、大阪隨一の立役たる成駒屋(雁次郎)とが、歌右衛門と云ふ名跡を競爭して種々の滑稽やら醜聞やらを流した例がある、一流の俳優てすら箇樣な下らない事に浮身を窶すのてあるから、下廻りの役者などが故人の好名跡を襲踏するのに一生懸命に成るのも無理はない、然し考へて見ればこれ程馬鹿氣た事は無い、何にも別段故人名優の名を貰はねばなら

ぬ必要は無い筈で苟も自分でさへ藝術の上に於て卓越して居りさへすれば名前は太郎兵衛でも八兵衛でも何んでも善かりソウに想はれる次第であるのに、夫れ等空名を無暗に有難がるのは全く彼等社會の智度が低級である證據である。

彼等の智度が低級なので從て其識見と云ふ者が全く地を拂つて居る、其識見の無サ加減は車夫馬丁にも劣つて居る次第で、到底一匹の男子漢として耐へ難く、忍び得ざる程の事柄を彼等は平氣の平左でやつて居る、平常先生〳〵と立られ高慢チキな面をして居る壯士役者の連中でも、茶屋待合の女將や魚河岸の哥々連の前へ出た時は、平蜘蛛の樣に平身低頭して、媚を呈し意を迎ふるに孜々たる實に眼も當てられぬ圖である、況や一層無見識な歌舞伎俳優連に於てをやである。

教育や智力や識見などを別として、彼等の生命とする藝術はドーであるかと云ふに、今の役者は團、菊、左、などに比して其足元へも及ばぬのみならず、維新前の俳優にも恐らく及ばぬであろふと想像されるのである。吾輩は維新前後の事は知らないが、現に團、菊、左、などに比較した一例を擧げて見よふなら、先日來幸四郎と左團次が競爭した河內山の芝居で見ても判るが、吾輩が最初明治二十四五年頃に歌舞伎座で見た、九代目(團十郎)の河內山と、其後同所で見た左團次の河內山に比較して、今日の幸四郎や左團次の河內山は丸で問題に成つて居らぬ、同じ芝居で五代目音羽屋の直次郎を見た眼で、今の羽左衛門の直次郎を見ては非常に見劣りのする事は誰人にても氣が附くであろふと想はれる、たゞ近頃に到り稍や異色を放つて居る者は貞奴と云ふ女優丈けで在つて故川上と「マダム」貞奴が我藝風を歐米に紹介したる功は偉とするに足る、其他に於て、近時の藝界はたゞ〳〵荒び行く計りで有る。

右の如く藝術の上に於て先人に劣つて居る結果、今では無暗に見連と云ふ者を製造して、强請的に自分の芝居を看て貰ふ事を勉めて來る樣に成つて居る、全く

賴子講の入講を依頼する樣に知人緣家をたよりて入場券を賣り附けて廻るのである、警視廳でも屢々取締に注意する樣で有るけれども弊風は依然として改まらず益々隆盛に成つて來る樣な傾きが見える、今現に行はれて居る重なる、見連團の名を擧げて見れば、音羽會、胡蝶會、橘會、小三升連、乙女連、八方會、千代見會、等である、現今の芝居興行で毎日棧敷の客の過半數は大概此强要の結果餘儀無く出懸ける見物人で在つて、任意に入場する客種は誠に少くないと言つて宜しい、其證據には現今芝居のお客種は待合の女將や藝娼妓連中の見連團が七八分を占め貴婦人や紳士の見物は誠に少數であるのを見て判る、明治二十五六年頃の歌舞伎座や、新富座の前は馬車や車で往來が出來なかつた位の盛況を覺えて居るが、今の興行界で馬車や自働車の集るのは「アマジユエー」、「クラブ」や「バンドマン」の歌劇興業の場合に於ける帝劇や、名人會の時の有樂座位の者で、今日の新派舊派の芝居へは馬車や自働車のお客筋は曉天の星の樣な者で在る、是れを見ても我邦俳優の地位が段々下落して來て居る事が判るので在る。

最後の「メス」に懸く可き者は、現今俳優連の品行狀態で在る。聞く所に依れば昔の役者で賭博にふける者は大部屋連（下等役者）に限つた者で在つたソーだが、今日では一流株の名題連で賭博を本職と心得て居る者がある位で、上下をしなべて此職業が賑ふて居る樣子である、故に役者の自働車が停まつて居る待合の二階では、必ず哀彥道の賭場が開けて居ると想へば間違ひ無い位ゐである、彼等の教育、彼等の智度、彼等の識見から看て、此顯象に別段不思議は無い譯けではあるが、蓋し藝術家の頭腦としての彼等としては情け無い始末柄である。

最後の最後に言ふ可き事は、彼等の異性に對する品性が如何であるかと言ふ事である、此異性に對する品性さへ視れば、他の問題は縱令如何樣で有ろふとも、夫の事は別として、直に俳優待遇の程度に對して最終の斷案を下す事が出來るのだけれども、如何せん吾輩の今執つて居る筆が餘り汚れたる事項を記載するに

適して居らぬから、残念ながら爰には夫れを詳記する事を避けて、唯だ當時流行の「アリツ、バセフ」の「ザーニズム」の假色を借りて此稿の末尾を結ぼふと想ふ。「無瑕の處女を犯し、有夫の婦女を姦するが如き者は普通茶飯の事である、此「モスコー」には養母を孕ました者や、叔母と心中した者や、貰ひ娘と結婚した者や、姪と駈け落ちをした者は、決して少ない數ではない」（終）

余が女優觀

福澤桃介

など丶鹿爪らしく謂つたもの丶、元より纏つた意見でも理想でも何でもない、唯折にふれ、機に臨んで、吾が輩の腦裡に湧き來つた、零碎なる觀想に過ぎんので、此温氣に長談義はお互に迷惑である。

滔々たる女優風　抑々女優といふ一職業の現出してから、社會が之に對して一種の偏見（之は後に述べる）を有して居ると同時に、女優の方でも嫌に私は女優で御座いますと云つた風に、見せ付ける態度のある事は忌む可き現象だ。頭丈けでは、男か女か分らぬやうな髮の結い樣、眼を射る如き強き色彩の服裝、お白粉は既に六區を通り越して、鐵金コンクリート式の塗方、新ダイヤの指環、素人でなし、藝妓でなし、令嬢でなし、勾當でなし、將に是れ嫁期を失して氣の觸れた、色情狂宜しくの體である、電車に乘らうが、汽車に乘らうが、衆人稠座の裡にあらうが、ハヽア女優だなとは、誰しも一見して見分ける事が出來る。彼等は徒に嬌を

競ひ、艶を爭ひ、人目に媚びんとするのみを事として居る。奚ぞ知らん、衣裳の陳列なら、我が輩之を三越白木に求め、阿嬌の妖艶に醉はんとならば、之を新柳二橋に需める、何を苦んでか、斯る氣狂に求めんやである、實に彼等は其內容の貧弱を蔽はんが爲に、外見のこけおどしを以て、瞞着せんとして居る、這麼事で物が成功すれば、天下の事又與し易してある、上つ面や、見てくれで喝かすのはまだ〳〵初步の事で、斯る女優諸君に對しては、我が輩は謹んでアクトレズ（灰汁取れず）の尊稱を奉る。

女優の生れた理由　社會が女優を生ん、でかゝる職業の人に其一隅を與へた所以のものは、劇の女性は婦人に依て演ぜらる可きものであると云ふ至極簡單な理由からで、和洋現代悲、喜兩劇の女性、歌舞伎劇の娘形などは、正に彼等の領土として、大に開拓す可きものであるとは云ふものゝ、其處には又多少の例外が有つて、歌舞伎劇、院本劇の大抵の女性の如きは、劇の結構が、結構だけに、夫に出る女優は男優との釣合上、體格が大きくなければならぬ、一本調子の細い薄つぺらな臺辭廻しては可かぬ。仕草に於ても、女性の繊弱な處はあつても、かゝる劇の舞臺上に在つては、男性の大きな輪廓を要するので、女形のそれには到底匹敵す可きでない、それ之を思はず、わたし八重垣姫が演て見たいわ、操で唸らして見たいわ、お富で溜飲が下げたいわなどゝ、勝手な御託を並るに至つては、全く沙汰の限り、己を知らざるも亦甚しいもので、好きな道樂で演る芝居に、金を取られて耐るものか、我等の金は咸な額に汗して得たるもので、眞面目な藝術に、眞面目な努力の注がれた時にこそ、其幾分かを割愛す可きで、道樂藝の爲に費さる可き一文もないのである。

女優の命　朝に紅顏あつて、夕に白骨となるとは、人生の果敢なき有樣を示したものとはいふものゝ、又此語は女優の藝の命と云ふ事に、極めて適切に當嵌る、やれお綺麗の、やれお若いのと、お座なりのお世辭を、鬼の首でも取つたやうに嬉しがり、研究もしなければ、碌な藝をも覺えずに居る內、さつさと歲月が經つて了

ひ、白骨と迄で行かずとも、頰骨ばかり出つ張るやうになれば、もう其命は終つたもので、器量ばかりが命なら、先づ長くて十年である、又さうなれば始はどうやら使ふ道もあつたのであるが、婆形ばかりの顔揃ではどうにもかうにも納りの付かなくなるのは、分り切つた事て、其時に到つて、泣かうと、喚めかうと、已に既に手後れてある、我が邦女優の前途に思ひを寄せると、坐ろ此點に寒心せざるを得ないが、扨實際に此點に留意して居る者が、果して幾何あらうか、洵に心細い話てある。

　女優と品性　我が邦茲に大に道學者先生を氣取つて、聊か現代女優諸君の爲に苦言を呈する、柄にないと笑ふものも有るかも知れぬが、是丈けは掛値無し、眞面目な藝術擁護の立場からてある、實に役者の藝術は其性格の反映てある、團十郎の活歴に成功したのは、其性格の貴族的なりしが爲め、菊五郎の世話物に名を成したのは、其性格の町人風なるが爲てあつて、如何な俳優が、如何な役に扮しやうとも、其役の上に其俳優の性格の反映なきものは一人もあるまい、又斯く有つてこそ、他の俳優と截然と區別さる可き、個性を發揮し得るのである、斯る理由からして、若し現代の女優にして、外飾のみを事とし、最も重要なる品性の陶冶を怠らんか、彼等の創り出す藝術は、必ずや貧弱なるものとなり、其努力(もし有りとするも)が、畢竟は、何等の反響をも社會に與へぬ事になる、又彼等の或るものは、自ら身を卑うし、所謂「藝人」と云ふ下等なる根性に依て支配せられ、綺羅を飾り、宴席に侍して祝儀を貰ひ、其藝を以て世人の眷顧を得んとはせて、色や媚て人を釣らんとして居るに至つては、浅ましいと謂はうか、卑劣と云はうか、重ねて言ふ、女優諸君、連中幹事の御機嫌伺ひや、助平紳士の意嚮などは、どうでも宜い、只須らく品性の修養をなし、眞摯に、忠實に、君が藝術に活きよ、四方の同情は翕然として、御身が許に集り、其創り出したる藝術に依て、大名を天下に馳する、蓋し難き事てはあるまい。

　社會と女優　女優は愛すべし、擁護す可きものであ

る、之を泰西諸文明國に徵するに、演劇の盛なる、必ず女優の輩出して、劇壇は勿論社會の花として歡迎せられて居る、我が國の如きも、徒に當面の缺陷を滿す可き、自然の要求に依て、女優の生れたる以上は、飽迄彼等を引き立てゝやらねばならぬ、或る一部の人士の爲すやうに、女優を以て玩弄物となし、宴席に侍せしめ、强て其色を買はんとする如きは、實に社會のバチルスにして、決して默許す可からざる處、女優の性格の劣等なるものを除き、高潔、堅固なるものに對しては、之に貴婦人、淑女の待遇を與へ、弱き彼等の事業を扶翼せねばならぬものである。

　眞の女優　以上述べ來つたところを概括すれば、玆に我が輩の眞の女優に對する觀想が出て來る、眞の女優は見かけ倒しの女優ではない、鐵金コンクリート式でもない、新ダイヤがシムボライズする女優でもない、衒はず、澄まさず、氣取らず、軒昂らず、務めて外觀的裝飾を避け、飽迄志操堅實に、品性も高潔、一意專心、一身を藝術に捧ぐる者であつて、斯る女優の現はれてこそ、明治演劇史の女優に關する一頁は燦然として、永く後昆を照らすを得るのである。

女優の觀たる女形

新舊の女形に就て

林 千 歳

▽女形觀など〻申す嚴めしい表題(みだし)を掲げられると、私自身が女優であるといふ點から、何んだか厭に他所行(よそゆき)になつたやうな、何處となく窮屈な、自由でない氣がいたしますから、たゞ、貧しい研究の發表とでも思召して讀んで頂きたう存じます。

▽尤も、何處のお芝居へ參りましても、つひ研究的といふ態度——と申すと大さう大げさに聞えますが、私が芝居を拜見するのは、物に饑えてるものが滋養物を戴くつもりで卓に向ふのと同じことですから、たゞ、ボーッとして觀賞してゐるのでは、どうも滿足が出來ませぬ。一つ〱弱い齒力に嚙みしめて見て、たゞ一寸した時々の好(す)き嫌い以上に、何でも充分味到して見なければやまないといふやうな慾があるのでございます。

▽そこで自然の結果として批評的にもなりませうし、また或點は印象的にもなることがございませうし、生意氣に注文めいた事にまで及ばないとも豫期出來ませぬ。それは何卒私の今迄の舞臺などを別物にして見て戴きたいので御座います。ほんの御座(ざ)なりを申して置く位なら寧そ御免を蒙つてしまいます。それでこれ丈の前置をさせて戴いたのです。

▽芝居を見まして何が興味深いと申して、私は女形ほど興味を以て見るものはございません。それはその筈て、誰方(どなた)も御存じの通り日本の女形と申すものは、全

く此國特有のもので、立派な藝術化された既成品で、私共女優から見ますると、恰度一家の祖母さんや、母さま、姉さまに對するやうな感じがございます。勿論立派に思想感情を具備して、今迄の習慣風俗の舞臺に育て擧げられた、押しも押されもせぬ一人前の女性なのですものね。

▽私共が女優として立派に成熟する爲には、思想や感情の上で前に申し上げた母や姉と全然別の道から出發しても、其生活から流露した思想感情が、理解され、若しくは同感されてもよい筈だと思ひます。いゝえ、されなければならぬものだと存じます。それでないと、折角母樣や姉樣の踏んで來た道を無意味にして了ふ極めて皮相的な妹若くは娘になるのではないかと思はれます。換言すれば、其母や姉を理解すること、同感することの深い淺い、大きい小さいは、取りも直さず自分達妹とか娘とかいふものゝ立場を確乎と定めて、さてそれ以外に何物かを把握しやうといふ第一歩ではないかと存じられます。

▽これが私の女優としての女形觀の土臺となるべき根底なのでございます。たゞ新らしがりに過ぎないのでは詰らない——新しいといふ事に眞の新しい意義を見出すのには第一に舊いといふ事をよく知つてゐなければならないと思ふのです。そして天才なら無意識的に意識出來、自覺出來るのでせうが、新しいものゝ裏には必ず舊いものがあると同時に、やがて時代を超越した處から見たら、舊いのも新しいのも、たゞ一線に連續してゐるもので、決して一線を劃することの出來るものではないといふ點まで、深く味はつて見たいと思ふので——つまり慾が深いのでございませう。

▽これは私が、先きに味到といふ字を用ひたから申ますので、私は常々芝居は矢張り舊い新しいで見るものでなく、たゞ「味」一つで見るものだと深く信じてゐるからでございます。殊に女形の藝を見る毎に、總てが「味」といふ事一つで深くも淺くも、考へられるのだと存じます。ですから一寸小手先の利く器用な藝を有つて居ても、比較的私には其藝を感心させられる事

は少うございます。また現在は舞臺て所謂見物受がしなくても、表面的に華美てなくとも一寸した處て大層面白く拜見することが少くありませぬ。それはたゞ藝が味の豊富であるか貧弱であるかの一點が別れ目て、簡單なお話が紅葉さんの小說が非常に結構なものには相違ないのてせうが、私は何となく技巧味ばかりて自然味に乏しいやうな氣が致して非常に牽きつけられる力といふやうなものは覺えませぬ。

▽其點から私が先づ推したいのは中村歌右衛門さんてす。何と申しても現在の女形ては、歌舞伎座技藝員長といふ肩書なしに、氣品が高く藝にモチ味のある俳優だと存じます。得意に扮せられるものは、つまり武士道が生んだ貞女烈婦てせうが、仙臺萩の政岡とか內藏之介の女房お石とか、春日局とか細川の奧方とか數へ立たら大變てすけれど、あれ位立派な武士道の背景を背負つて立つて獨り擢んでゝ居る俳優は、現代には先づないと存じます。それは天禀の品位が助けるには違ひありませんが、私はその內部から流露する氣品——即ち藝が一種の高い味に達して居るのだと存じます。それが證據には、先づ舞臺に其美しい凛々しい姿を現はした時、一語を發せぬ前にこの優位、觀客をして先づ其扮する人物だと思はせてしまふ魅力を有つた俳優は少ないてせう。つまり其種の人物たる事に、異議を挾ませない點があるのてはないてせうか——早く申せば腹藝のある人、默つてゐる間に藝の出來る人味のある人だと存じます。

▽これを私は藝の光だと思ひます。——何故ならば羽左衛門さんや梅幸さんから歌右衛門さんほどに脚部の自由を奪つて了つたら或ひは廢業しなければ、ならないかと思はせられる事が度々あるからてす。て只に前に申した貞女烈婦型の女形ばかりてなく、假りに揚卷の面影を見ても、私達の思ひ添へる事も出來ない、廓の全盛とか華魁の黄金時代とか、成程あゝいふ女ならば、今の吉原ては夢想も出來ない花の街に女の誇を盡したてもあらうかと、朧ろげながら想像することの難くない點は、源之助さんや梅幸さんの華魁とは全然比

較することの出來ない、違つたい、點であらうと思はれます。

▽しかし、そこに一長一短のある譯で、二番目物などには全く失望することが御座います。舊く見たものでは藝者美代吉や、此の五月狂言の魚屋宗五郎の妹お蔦などを見ますと、如何見ても其日暮しの魚や風情からお妾に上つた女とは見えずに、立派な——しかも旗本には過ぎるほどの奥方になつてしまふといふ事です。これは妙な例ですが、女性の善惡美醜といふよりは、寧ろ上品下品といふ點から、如何に零落ても下女になれる柄となれぬ柄とがあるやうに思はれますが、これは一種の人々の天禀であらうと思はれます。

▽要するに歌右衛門さんの卑しいところを探してもないやうな藝風は、世話物には向かぬ所以で、藝も亦分別に過ぎ立派に過ぐる處から、輕快な味とか家常茶飯の味とかには乏しい譯であらうと思はれます。それから一層突進んで、今一つ申したいのは、その根本的な藝術觀の目標でございます。恰度故人の團十郎といふ方が、あれは二股武士だからと云つて齋藤實盛を嫌つたり、僅かに百兩許の金の事で一日中騒いで居るよりは、國家とか忠孝とかいふ事の爲に芝居をしたいと言はれて二番目狂言を嘲つたといふ事は、能く聞く話でございますが、私は歌右衛門さんにも然う云つた風に低級に固定した藝術觀のあるのを惜しいとも飽き足らないとも思つて居りました。その順序として、優の美點をあげなければなりません。

▽これは極く幕内から伺つた事ですが、此優丈は、いくら他から「これは可い役だ」などゝ、脚本を無耶味におさめやうとかゝつても、決して動かされて承知するやうな事のないといふ事です。それは他の優に比べると藝に於ても識見に於いても、確かに勝れた處のあるには相違ありませぬが、やがて、それが一種の型に落ちて、所謂、道德的、武士道的典型の女形でなければ、喜んで扮せぬといふ事です。殊に私は淀君などを見て然ういふ事を深く感せずには居られません。坪内先生の孤城落月の淀君を見ても、先づ此優が現代無比

の旋君役者てあらうと思はれます。あのやうな畠にあれ程の手腕を持ちながら、自己の要求としては却て其種の面白い性格の女主人公に扮するのを殊更嫌ふ事のあるといふのが寧ろ不思議な程に思はれます。しかし此の六月興行の歌舞伎の、一番目て「花勝見奥譚」ては、其點からも此優の好きさうな役てはないやうに聞きましたが、見ない事てすから、何とも云はれませぬ。たゞ私は、東京座籠城時代に、「不如歸」の浪さんや「颶風戀風」の初野(?)をまて演じたといふ、當時の新しかつた優かと思ふと、其勇氣に感心いたすのでございます。

▽それから此の歌右衛門さんとは、まるて其藝風を異にする點て、澤村源之助さんを私は可い女形だと思ひます。そして東京に生れた自分は、殊更感じたのかもしれませんが、此優の扮した藝者とか遊女とか毒婦とか、あゝ云つた風な、昔の儘の女形を見るやうな役者は、江戸時代の芝居と共に、何となく惜しい女形だと存じます。女團七など、辨慶縞の浴衣に引掛け帯をしめてみえを切るやうな芝居に適して居るといふ事丈て充分此の人の價値は認められると存じます。

▽鬼神のお松とか、妲妃のお百とか、乃至は高橋お傳とか、私の藝術慾から云つても、好奇心から見ても、もつと近代的な心理を思つたり、解釋を望んだりするときには、勿論お芝居を、たゞ見た眼本位に展開して行く、源之助さんの特長を無視することになるかも知れませんが、私は其處に太い線て引張られた妙味を思はずには居られませぬ。そして自分が空想に描く微細な心理狀態の顫動は、細いものが太くされたと同時に自分が太いものを細かく空想上に解剖したまてゝあつたといふ事を、極めて鮮かに思はせられる迄だといふ事に心附ます。私自身の頭腦に描く心理狀態の方が、確かに纖細て且つ生きてゐるなどゝ思ふ自信はありながら、其單純化されて舞臺て見る時に、何等の不滿足をも感ずる事はありませぬ。つまり其單純化されたところが、源之助さんの確乎と明瞭に把握してゐる女性てあると思はれます。

▽默阿彌翁の「鵜飼燎」て新常盤屋の藝者小松に扮して、彼の二幕目白島渡場身投の場て、いかにも、出語りの淸元連中に相應はしい粋な藝者て、一寸意地も張りもありさうな處現代ばなれのして居るのが殊に嬉しく、しかも男が自分より先に飛び込み、驚いて岸を立つ水鳥の羽音て男に死後れ、がらりと心機の一轉するあたり、どこまでも人間味があつて面白いと思ひました。それから旅へ落ちて娼妓お千代になつてから、また更に其種の女によく變つたのに驚きました。これを見ると歌右衛門さんが如何に名優ても、藝妓や娼妓の類の女に扮しては、まるて畠違ひのものを見るやうて双方共に如何とも申されません。それにしても此優の若い頃の艶のある仇つぽい藝を見ておき度かつたと思ふと殘念に存じられます。

▽斯う全然立場を異にした、女形を研究して來ますと其時代味と世話味の程よい帝劇の梅幸さんに移らねばならなくなります。私には此の優の特長は矢張り默阿彌などの世話物にあるかと思はれます。その點から先づ羽左衛門さんと一座して居たのが一番觀る者の方からは勿論、演る優に取つても面白かろうと存じます。「故人の秀調を張つて居るのだ。」とあの臺詞まわしを知る人の話された事がありますが、あの受け唇て舌たらずのやうな處のあるのが何となく仇つぽい感じを與へるのてはないてせうか。それに所作のある事に於ては女形て先づ此優てあらうと思ひます。近頃は頻りに仁木だの富樫だのといふ、女形以外のものに手を出すことが劇しくなつたやうてすが私は何となく惜しい事に存じます。いくら帝劇に女優方のある必要上からとは申せ、舊い方ては立女形として終始して貰ひたいやうに思はれます。しかし帝劇としては女優劇とつくからてもございませうが、私は既成の型物ては自ら違つた點に尊敬すべき長所があると存じます。

▽それから若手の方になりますと松蔦さんと芙雀さんが先づ一樣に注目されるのてせうが、私は女形専門てはなくても、宗之助さんを忘れてゐることは出來ないと存じます。松蔦さんは調子といひ、柄行といひ誠

に美しい舞臺とは存じますが、いかにしても藝は單調といふことが伴ふやうて、いつもあの優の舞臺を見る度に、私は相手になる左團次さんといふ人の舞臺監督としての氣持のよい事ばかりが後に殘るやうな氣持がいたします。實際松蔦さんが獨立した、自身の藝そのものよりは、相手をする座頭の對照とか、若しくは一座の呼吸が何となく他の舊派の連中とは違つてゐる傾向の見えるのが面白く、非常に幸福な優だと存じます。

▽しかし忌憚なく申して了へば、いつも見た眼以上に突込んで役の性根に徹底しやうといふ努力が薄いやうに思はれます。いゑ、それよりも、いつも自分の持合せて居る、只美しい可愛しいといふやうな處へ丈隱れて居るやうな氣がします。あの自由劇場の「奇蹟」で老役になつた時、ひどく嫌つたといふ事を聞きましたが柄に無い有るは役を受け取る前の話で、一旦受取つた上は飽まで其性格を演活かす爲に全力を擧げて貰ひたいと思ひます。然ういふ點に宗之助さんといふ優が、なか〳〵面白い舞臺だと存じます。矢張りこれも自由劇場の一回の時ですが、あの「ボルクマン」で老役の姉妹、グンヒルト（宗之助）エルフ（松蔦）に扮された時も、宗之助さんの思ひ切つた演出法には感心いたしました――しかし此優は老役が得意には違ひないのですが――。

▽それでも世評は松蔦さんが可なり佳かつたと存じますが、私に取つては左團次さんのボルクマンと宗之助さんのグンヒルトが此芝居での上出來であつたと存じました。私は丁度其時から此優の藝に興味を有ち出しました。そして「三七信孝」の靜緒を帝劇で見ました時、あんなまざ〳〵と捏ち上げられた所謂新しい女をよくもあれ程に解釋し、また神妙に深くも研究して、何等か核心へ向つて努力して居られた事に驚きましたしかも老役が得意だろうと云はせるあの調子と――柄も決して娘形らしくよい方とのみ申されますまい。しかし先づ舊派の女形では、心理描寫に目標をつけてゐる一人だといふ事が、此時判然と解りました。若し松

蔦さんなどが、あの美貌で突込んで情熱的なところ充力な點があつたら、さぞ將來立派な日本のジユリエツトでもお七でも出來る事と存じます。

▽しかし、松蔦さんが今日あるといふ事に想到しますと、左團次さんと共に私は何故か莚女さんといふ老優(?)を思ひ出さぬ譯には行きませぬ。此優の感化が非常に多いやうに、舞臺を見たところ既に然う思はれます。私はたゞ何となく斯ういふ優に親しみを持つて考へる事が出來ます。其藝風は先代の秀調といふ優と恰度同じ經路を研究されてゐるやうで、私は遂に逢はずにしまつた祖母のやうな氣がいたします。

▽門之助さんも亦舊派の堅實な女形として、私は尊敬を拂つて居ります。此の月の興行に、卒倒して舞臺を休んで居られると聞きましたが、未だ〳〵健在で舞臺生活をつゞけて頂かねば女形界の爲に惜しい事だと存じます。それから芙雀さんに立戻つて一言申たいと存じますが、世の中ではよく芙雀さんと松蔦さんとの比較評をされたやうですが、これは何處も若手といふ事に興味を牽くのでせうが、私は同じ娘形でも全然異つて居るやうに思はれます。芙雀さんは純歌舞伎劇の寧ろ世話がゝつた女形で、一方は如何しても新作の畠に育つた紅一點といふやうな感じが致します。芙雀さんは梅幸さんがお師匠様丈に矢張り加賀鳶の女房とか小糸とか――累なども非常に當つたさうですが――全體に新味と申さうよりは、舊い豐饒な味はひのある藝風て、難を申せば臺詞廻しのベタ〳〵ねばる事でありませう。その型を脱する事が既に、これからの新作物には餘程努力を要する點であらうと思ひます。何方から見ても松蔦さんよりは、一日早く嫁いて、青女房になる下町の姉妹のやうに思はれます。

▽まだ數へ擧れば秀調さんとか粂三郎さんとかまた關西の女形に就いて申し上げたい事は澤山に御座いますが、あまり長くなりますから、新派の何合さんと喜多村さんと一寸比べて、此稿を結ぶことにいたします。私は河合さんの華美な藝風が可成好ましかつた時代もありましたが、近頃は一體に――野暮になつたといふ

譯でもないでせうが、身體が肥つた故か――藝者などでも三四年前頃迄の方が、却てよかつたやうに思はれて來ました。つまり此優はあまり技巧にのみ囚はれ過ぎるのではないかと思はれます。それから昨年の「エレクトラ」は一體に男性の生地が表はれる事で不評のやうでしたが、世間では、ミスターローシーの形に就いてばかり評されたやうですけれど、私はあの臺詞廻しが、先づ失敗の原因ではあるまいかと感ぜられます。

▽それと反對に、今更喜多村さんの長所を認めた譯ではありませぬが、私は寧ろあの藝のジミな、何方かと申せば澁い方を觀つて見物受を、それ程大事件としては考へて居ないやうな藝術的大膽さと眞面目さとに充ちた舞臺が好きであつたのです。河合さんもあの色氣を充分に發揮して、日本のヘッダ畠へでも切り込むと面白くはないかと考へられます。喜多村さんの感心させられる點は、型を脱れて、人間其物を補へて來ようとする努力が何よりも先に立つやうに伺はれます。「大將の家」の不見轉藝者艶若などは思ひ切つた演出で佳いものゝ一つであつたと存じます。只調子のよくない事が缺點でもございませうか。現代劇は中でもリアリスチックなものだけに、女形によつて演出されます場合は、やゝともすると性の上に一層破綻を見せ容いものだと存じます。女形の特徴は、總じて實生活では女性に對照して生きて居る丈に、異性の解剖も表現も思ひ切つて冷靜に大膽に客觀出來るといふ事で、女優の立場からは、却て同臭の憾みある事や、內面より流露する女性其者の本音を飾氣なしに表白して行かない事や性の研究の行き屆かない事など、却て女形の方々の研究の結果を學ぶべき事が多いと存じます。

（六月十九日夜稿）

柔みのある男優

河村菊枝

女優としての私どもが、男優の方がなさる女形とい

ふものを觀てゐますと只もう感心して了ふより外は御座いません。いゝとかわるいとか、そんな事を彼れ此れ批評がましく申上げる事の出來ぬくらゐすつかり感心して了ひます。そこへゆくと私ども女優がいくら足掻いても到底も足許にも及ぶ事では御座いません。それといふも幾百年來舞臺の上で苦心され洗練された在來の型といふものを、幾年も幾年も研究なさつての上ですから、私ども素人あがりの女優が及びも付かぬのは當然で御座いますけれど、それと申すも平常からの心掛けが違ふせいかと思ひます。男の方が舞臺の上で女に觀せようとなさるには一通りの苦勞では御座いません。私ども女優は女だけに、これでも女らしい格好だけは備つてをりまして、默つて立つてゐても女にだけはなつてをります。ですから女にならうとか、女に見せやうといふ苦心は要りませんが、男の方になると全體を女にせうとする爲めどれほど細心の注意をなさいますか知れません。ですから却つて男の方の方に女らしい柔かみや優しさが出て、女のわれ／＼は較べ物にならないので御座います。舞臺を御覽になりましても判りますが、ちよつとした話が宗之助さんならば宗之助さんで、あの方が女になつて舞臺に立たれた處と私どもとでは、成程ちよいと見た眼には或はわれ／＼の方が女らしく見えるでも御座いませうが一朝動かれたら、もう到底も私どもの及ぶ處では御座いません。是れは私どもの藝がまだ未熟なからでは御座いませうが、袖を一つ動かすに致しましても、何の氣もなく無雜作に持つて來るのと、どんな些細な事にても女らしいといふ事を狙つて、苟も粗かにはしないとなさる御苦心の程とてはどうしても差別の出來るのは當り前で御座います。要するに私どもは女にならうとする苦心が足らない。つなぎ／＼に氣を留めてゐないといふのが大なる缺點であらうかと思つてをります。

臺詞にいたしましても、聲は或は女優の方が適當してゐるかも知れません。少くとも女ならば自然で御座ります。がそれでゐて白廻しの苦心が足らないばかりに色氣を持つて來ません。聲は不自然ですが、男の方

には白廻しが何となしに色つぽい。

斯んな風に數へてまゐりますと、女優といふものは總ての點に於いて男優の方に劣つてゐて、女優存在の必要が無いかのやうに聞えますが、全く今のところ慾にも自慢らしい事は申上げられません。是れと申すも一つには修業の年月が淺く、藝道に對する苦心が足らぬからであらうと思ひますから、今後は其缺點のある所を自覺して、專心に稽古を勵むより外はないと思ひます。

尤も今申上げたのは主に舊劇に就いてて御座いまして、新しい劇とは又別種の途があるやうて御座います。何方かといへば新劇の方が私ども女優には適してゐるやうて御座います。從つて女優の行くべき道は此方面てあり、女優存在の必要も意義もつまりはそこにあるのだなどと口幅つたい事を申上げるのては御座いませんが、同じやうに苦心をして、同じやうに成功するものならば、舊劇よりは新劇の方が年限に於て早からうかと存じます。松井須磨子さんがあのやうに御成功なさつたのも、素より坪內さんなり島村さんなり其他諸先生の御薫陶が宜しかつたからて、一つには須磨子さん御自身の御勉强が預つて力あるのは勿論て御座いますが、あの方達が開拓しておいてにならうとする道が、女優の手腕を發揮するに都合が良いといふ事も一つの原因てあらうと思ひます。てすから私は須磨子さんといふ方は幸福な方だと思つてをります。何と言つてもお上手てゐらつしやいます。が御芝居がお上手といふ事を必ずしも感心致すのては御座いません。それよりも役柄を能く飲込んでゐらつしやる事、自分の扮する人物の性格を理解してゐらつしやる事、從つてすべての動作はそれから流れて出るので御座いますから、そこが一番肝要な所てあるのてすが、此點にはほと〳〵感心して了ひます。彼の方てもオフイーリヤをなさつた時分にはさう大してお上手とも思ひませんてしたがマグダをなさつた時にすつかり私は感心させられて了ひました。殊にあの突き轉ばすやうな泣き笑ひには全く感心いたしました。幾年も幾年も舞臺を踏んで、白

由自在に泣いたり笑つたりなさる事、われ〳〵には到底もあの肚の底から出たやうな泣き笑ひの眞似は出來るものでは御座いません。

個人個人の女形に就いて批評がましい事を申上げるのだけは控えさせて頂きます。それは前に申上げたやうに殆ど批評する餘地がないので御座います。殊に帝劇の幹部の方になりましては一に其方の御陶薫を受けてゐるので御座いますから、それに自分が女優になりまして舞臺に立つやうになつてからは、唯もう自分の及ばないのを自覺する許りで、女優になる迄には芝居を見に行つても、あすこはあゝすればとか、斯うもしたらなどゝ生意氣な事を考へてみた事も御座いますけれど、舞臺に立つてからといふものは、自分が思ふやうにゆかないものですから、何れを見ても感心させられる許りて御座います。それに何の方にいたしましても多年腕に覺えのある方で御座いますから、或るところまでは何をお演りになりましても見られないといふやうな事は御座いません。唯そのうちにも柄に嵌つたのと嵌らないのとは、御座います。蓮葉なものになると九分にお演りになつても十二分に顯れますし、十二分にお演りになつても、品の良いものになると兎角九分にしかとられないといふ藝風の方も御座いますし、華かな役をなさつても、つひ陰氣になり勝ちて、思ひ思はれた仲ならば、お終ひには屹度心中でもしさうに思はれる藝風の方も御座いますし、蓮葉なものをしてゐらつしても淑かになる方もあれば、兎角武家上りのやうに見える方も御座いますし、お姫様になるよりも浮氣な色つぽい町ゝ娘といつた風のものが見物に受ける方も御座います。又何をなさつても不良くはないが、世話女房に越すものはないと思はれる方も御座います。それらは皆其方々の柄にあるのですが、舊劇ならば何をなさつてもわれ〳〵の手本として教へられる處が多いので御座います。

女らしい女形

松井すま子

おたづねてはございますが、私はあまり新派舊派を見ませんから女形と言ふものをはつきり評する事は出來ません、只譯もなくぼんやりと、一二度見たばかりて好きなのは、舊派ては芙雀さんてす、あの方の體つきから顔まて何んとなく人をひきつける強い力が有ると思ひます、實際の女でもあゝまて女らしい點の揃つた方は少ないと思ひます、夫からまた聲がいぢらしい響を持つた聲て、其代りリンとした處は有りませんけれど、夫を一音〳〵に力を入れてシッカリと言廻す處などは何んとも言へないいゝ感じてす、けれど此人の聲は唄ふ事のある役には適さないと思ひます、夫は、先頃、狂言座て夜討曾我の虎少將に扮された時、祐經の前て、片膝を立てゝ扇て輕く拍子を取りながら、何んとが言ふものを唄ひなすつた、其美しい姿のいまだに目に殘つて居るに拘らず、其聲のいかにもいぢらしかつたに拘わらず、ふし廻しに何だか物足りない處が有りました、夫は此人の舞臺聲は自聲をねじりつぶし〳〵した聲て、自聲と舞臺聲とてはあんまりかけはなれた聲なので、夫て充分思切つたふしまわしをなさらないのだらうと思ひました、夫からあの方の目と口元に非常な特色が有つて、夫がまた、他優には見られない愛嬌にも、つやにもなつて居ます、また其最大の長所て有るつやや、愛嬌が時としては邪魔をして、泣く時まて笑顔に見える恐れが有る樣てす、てもだん〳〵見て居るうちにはそんな事は苦にもならない樣てすけれど、てもこんな事は芙雀さんとしての缺點て、女形としての缺點てはないのてすから、

女形としての芙雀さんは女らしいと言ふ點ては誰よりも成功して居られる樣に思ひます、芙雀さんの外に藝から言へばずつと〳〵地位の高い方も有り、ずいぶん復雜な女主人公を立派に演じられる方も澤山に見える樣て、從つて隨分敬服しますけれど、夫は只々舞臺上の技藝に敬服させられるので、男らしいとか女らし

いとか、そんな事はまるで忘れて、敬服して居るのです。

味のない女優と色氣のある女形

村田嘉久子

われ〱女優の藝には味が御座いません。女だから出なくてはならない味がどういふものか出ないので御座います。藝が未熟なからでも御座いませう、又舞臺の功を經てゐないからでも御座いませう。色氣がないとか、パッ々々としてお轉婆だとかそれは〱能く言はれるので御座います。尤も色氣と言つても單にグニャ〱してる計りが色氣では御座いません。艶が出るか出ないかといふ事が問題で御座います。いやもう男の方のを拜見してゐますと、驚くの外は御座いません。全く自分達が厭やになつて了ひます。

　三崎座の芝居を御覧になつても判りますが、あれは女が男に扮するのですが、割合に上手な方も御座います。といふのが矢張り女て男に扮するのだからと言ふので平常の心掛けから違つてゐるからだと思ひます。私達女優は平常の通りにさへやればよいと被仰りますが、平常がボンヤリして注意してゐないのですから六ヶ敷う御座います、そこへゆくと男優の方は御研究が積んでおいでです。早い話が私達と話をしてゐても、「あの女はよくあんな事をする」とか「あゝいふ癖がある」とかいふやうな事を御覧になつておいでです。

　ですからこれで新劇になりますと、私達もヤット息がつけるので御座います。新劇の方ですと、老け役なら老け役に扮するに致しまして、自分の努力次第で相當にお婆さんの心持にもなれます。が歌舞伎の方になりますと、男の方のを觀てゐますと、私達でも氣持が宜しう御座いますし、自分達のは演つてゝも氣持が惡う御座いますから、觀客の方は嘸さうだらうと思つて無理のない事に存じてをります。

　化粧にいたしましても、男の方なら鬚を剃つたり、白粉を塗つたり、眉をひいたりなさるにも、どうしたら女らしく見えるかと、それ計りを苦心してゐらつしやるのですが、女はつひおろそかになつて白粉でも二度のところは一度になり勝ちで御座います。

　尤も一つには下役の者になりますと、お客様が「あ

んな鬘を着けてとか、あんな衣裳で」とか言つて能く御叱言を被仰いますが、それは無理もないので御座います。自分で工風をして、何うしやうとか斯うしやうとか思つたつて、決して其一分も出來るものでは御座いません。此れは斯ういふ役柄なのだから是非斯うしたいと思ひましても、みす／＼我慢をしなければならぬ場合が御座います。下役の者には幹部俳優の方のやうに我儘は通りませんから、上ッ面を御覧になつてる方には解りますまいが、これで一通りや二通りの苦勞では御座いません。私達は唯もう補導の方が敎へて下さる通りに間違はないやうやうにと努めてゐるので御座いまして、自分で工夫などするやうな餘地は御座いません。唯補導の方の敎へて下さるのがチャンと自分に篏つた時は此上御座いませんが、篏まらない時には少々困ります。ですけれども、私達はこれで充分に敎へて頂く事が出來るのですから、どれほどか仕合で御座います。そんな事を思ふと他の女優の方はどんなにかお困りな事だらうと思ひます。

　梅幸さんはどうしても世話物で御座いまして、世話物は私も好きで御座いますが、それは隨分な凝性でゐらつしやいます。あれだけのなりを盜んで艶を出さうとなさるには一通りや二通りの苦勞では御座いません。一所に舞臺に出てゐましても能く氣を附けて下さいます。餘りツケ／＼被仰る方では御座いませんが、此方からお尋ねさへすれば噛んで含めるやうに色々と敎へて下さいます。立つてお稽古をして頂くのも無論爲めになりますが、それより座つてゐながら色々とお話を伺ふ方が能く飲込める場合も御座います。

　宗之助さんも能く敎へて下さる方ですが、梅幸さんとは行き方が違ふやうで御座います。稍ぞんざいにパッ／＼と言つてお了ひになります。「あんな拙い事をして……」などとつけ／＼言はれる事も御座いますが、その代り氣が樂で御座いまして、いくらがみ／＼言はれましても別に可恐くは御座いません。それに反して巧いと言つて褒められたりすると無性に嬉しいもので御座いまして、萬事が淡白で御座います。何をおやりになつても宜しう御座いますが、矢張り時代物の娘が一番良いやうに存じます。ですけれどあの方は喜劇などに隨分眼を着けてゐらつして、何でも新しい芝居などを演つてみたいお考へらしう御座います。

　それと正反對に純昔風といつたやうなのは宗十郎さんで御座座います、宗之助さんでは色々と自分で工夫

をなさつて、それが爲めには非常に良くなる事もあれば又在來の型を滅茶々々にしてお了ひになる事も御座います。從つて私達にお教へ下さる場合でも巧く篏る事もあれば、時とすれば妙なものになつたりする事も無いでは御座いません。其の段になると宗十郎さんは昔からの型に就いて委しくお教へ下さつて、爲めに餘程參考になる場合が澤山御座います。

女優から見た女形

秋元千代子

女優が大分世間から認められるやうになりましたが、しかし其の爲め女形と云ふ者が不必要になつたとは思はれません、むしろ女優なんか駄目だ、矢張り女形に限るなんて申される人々もあります。

成ほど歌舞伎劇のやうな形とか型とかで行くものになつては、とても今かけ出しの女優の及ぶ事ではないと思ひます。ことに永年女形で見馴れては居まするし、丈の小さな女優が長い着物長い袖で、むく／＼した腰つきの形もわるいし、矢張り體にもゆとりがあり、顔も大きく、色々研究を積まれた舊い型に則つて、實の女も及ばぬほどいゝ容姿(かたち)に扮(な)られる女形は洵に歌舞伎劇に取つては必要だと思ひます。いゝえ必要段ではありません、男が女の形に扮する所に歌舞伎劇の趣もありますが、女が女の形を眞似る丈けでは價値の淺いことだと思はれます。

其と反對に新しい劇は決して女形では駄目だと思ひます。歌舞伎劇のやうに聲も體も作り物で行く事が出來ませんから、いくら上手に演(し)ても男は男ですもの、今の女形の中でも松蔦さんが殆ど女だと申してもよい位一番女に扮(な)り切れる優(ひと)ですけれど、昨年帝劇で『夜の宿』をなすつた時に見ましても、眞實の女優と並んで舞臺に立たれると、滑稽と迄は行かないけれど何んだか調子が違ひます。新派の河合さんや喜多村さんなどでも、まあよくあれ丈け女になれるとつく／＼感心して見物する事もありますが、しかしどうしても眞の女でない以上、いくら藝の力でも女になりきる事は出來ないと存じます。ことに西洋劇などのやうに性格や感情の發展を刹那々々の表情で見せる劇には、藝の巧拙は兎も角として、女優でなくてはならないと申上たく存じます。之と同じ根柢に立つ創作劇に於ても同樣だ

と思ひます。

要するに歌舞伎劇の如く型で行く芝居は女形の領分、創作ものや西洋劇の如く性格の演出に重きを置く劇は女優の領分、と恁う立場を別にして考へたいと存じます。

男優の女と女優の男

森律子

私ども女優の身として女形が何うの斯うのと批評がましい事を申上げられた義理ではありませんが、女形そのものに就いては是れまでにも色々の議論が彼方此方の新聞や雑誌で拝見致しましたやうに存じてをります。

要するに現在の演劇には、まだ〳〵男優の女形の方で無くてはならぬ處が澤山御座います。古典的と申しますか、謂はゞ一種の美術的な義太夫のチョボに合せて型を観せる芝居になりますと、男優の方で無くてはならぬ、それこそ今の女優では到底も出來ない藝が御座います。それと申すもまだ稽古の積まない素人あがりのほや〳〵だからでも御座いませうが、そればかりでなく、身體の小さい、不格好な女では、何年といふ事なしに昔の名優と言はれる方の藝を御覧になつた眼にはいかにも見劣りがされて歯痒くて觀てゐられない處が多いだらうと思ふので御座います。私どもに致しましても、教へられた型を、可成その通りにその通りにと一生懸命演るので御座いますけれど、どうも巧くまゐりません。それに義太夫物になりますと、あの地聲は元來が男の聲に適するやに出來てをりますので尚更此のキイ〳〵聲では他との調和を破るやうな事になるので御座います。その代り、書卸しとか、飜譯劇とか新派とかいふやうなものになりますと、少くとも自然なといふ點だけでも私ども女優の方が適してゐるかと思ひます。物を言つたり、科をしてゐる時はさうでもありませんが、默つて突立つてゐる時は一番生地の出たがります時で、そこへ行くと私どもは是れでも女なので御座いますから、己惚では御座いませんが、上手下手は別として、演り好い事は演り好う御座います。

私は今度の興行に、「瓜一つ」といふ喜劇の中で、男の役に扮する事になつてをります。此方の方は、女が男

に扮するといふと、すぐに三崎座を聯想なさいますが、西洋ではかうした輕い喜劇が時々演ぜられるので御座います。私の持論――と申しますのも大業ですが――常々私はかうした輕い滑稽がこれからの世の中には必要だと思つてるので御座います。世の中が開けて參りまして、時勢の進歩は我國をも世界的たらしめ、すべての事が氣忙しくせゝこましくなつてまゐります傍には、どうしてもこの輕い洒落といふやうな事がなくてはならぬものになつて參ります。私はこの「瓜一つ」では果してどんなものが出來上りますか、無論碌なものが出來上る筈も御座いませんが、このやうな試みもあつていゝものだろうと思ひます。尤も女が男に扮するといふことは不自然な事には相違御座いませんが、その不自然の内に輕い滑稽が、いくらかでも見出されましたらそれでよいので御座います。

つひ先達ても、西洋の雜誌を見て居りますと、マーガレット・アンデルといふアメリカの女優の男に扮した寫眞が載つて居りますのを見ましたが、その御上手なことにはつく／＼感心してしまいました。有名なサラ・ベルナールがハムレットに扮して大喝采を博したなどのことも御座いますから、必ずしも女が男に扮せられないといふ理由は無いやうで御座います。

すべて男が女になつたり、女が男になつたりするのは餘程苦心の要るもので御座いますが、それにつけても此方の女形の方の御上手なのには吾々女優のとても／＼脚下にも及ぶことでは御座いません。此間喜多村さんの「深山の美人」で長襦袢の着流しといふ場が御座いましたが、何枚も／＼も着飾つての上なら知らぬこと長襦袢一枚で、それが、チャンと艶かな女になりきつてゐるといふので御座いますから全く感心で御座います。喜多村さんに較べると、河合さんのはそれと行き方が違つて、萬事は派手で色氣が御座います。私自身もどちらかといへば浮はついた、とかく御轉婆な柄になりたがつて、舞臺を引き締めたり沈めたりする事が六ケしくて困ります。未だ／＼他人様の事々彼れ此れ批評する資格は御座いませんから、それは御免蒙つて自分の勉強にかゝる事に致し度う御座います。

本號特價金五拾錢　郵税金四錢

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十册（本年度十六册）分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度は金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度は金五圓六十錢）拂込まるべし

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　にて御送金の場合は**本郷西片町十番地中央公論社**と指定し拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり

一郵券代用　必ず**一割增**の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正三年七月十四日印刷納本
大正三年七月十五日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話回下谷九一九九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.